

# 小牧南遺跡(第2・3次)発掘調査報告 —四日市市小牧町—

本文編

2021 (令和3) 年3月

三重県埋蔵文化財センター









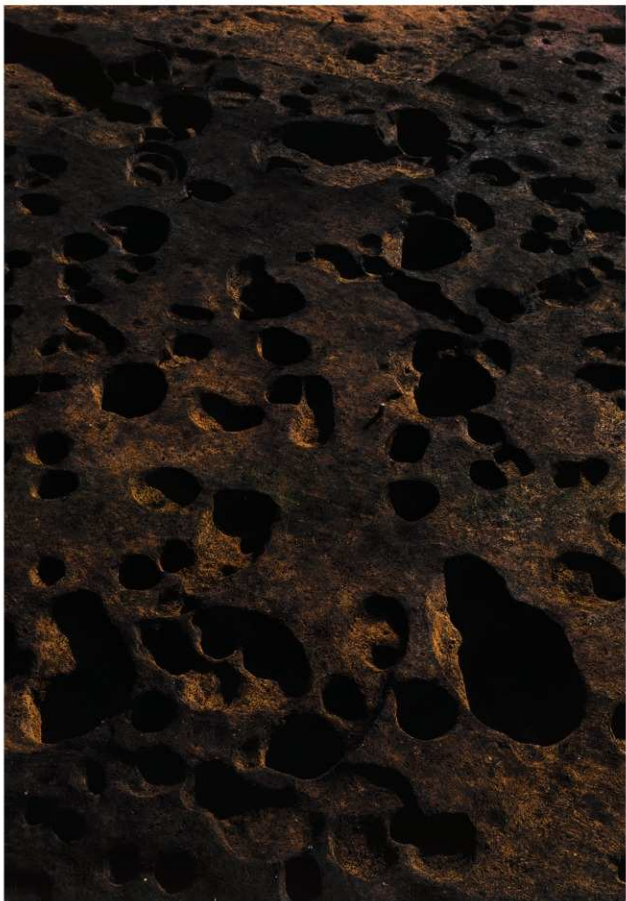


第2次調査区（南西上空から）



第3次調査区（北東上空から）





S B285 (北西から)





S H248 (西から)



S X250・251 (東から)







S X250出土垂飾



S H301土器埋設炉(S F310) 断ち割り状況 (南から)



S H355石囲炉 (西から)



S K334下層遺物出土状況 (南から)



S H338完掘状況及び掘削痕 (北から)





繩文土器



黑曜石製石器・微細剥片





チャート製石器・微細剥片



磨製石斧



土師器鉢 (1231) 内面水銀朱附着状況



S H204出土石製品



S K334出土土師器



## 序

三重県の北勢地域は、五街道の一つである東海道が通り、近世には桑名宿や四日市宿のように多くの旅館が並び立つ宿場町も形成されるなど、古くから交通の要衝として栄えてきました。

当地域の交通の要衝としての役割は、今も変わっていません。近年では、既存の高速道路の渋滞緩和を図るとともに、ネットワークを多重化させて高速道路の社会的機能を向上させるべく、四日市 JCT と亀山西 JCT の間を結ぶ新名神高速道路の建設が計画され、工事が進められてきました。平成 31 年 3 月には全線が開通し、これによって、北勢地域の交通の要衝としての重要性は、より一層高まるものと思われます。

こうした地理的・歴史的背景もあって、北勢地域にはまた、多くの埋蔵文化財包蔵地の存在が知られています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や先人の文化を、現代そして未来に伝える、大切な文化財です。新名神高速道路の建設にあたっては、計画地内に存在する埋蔵文化財の保護についても、大きな課題となりました。高速道路の早期開通と埋蔵文化財保護の両立を目指して協議を重ねた結果、いくつかの埋蔵文化財包蔵地においては、現状での保存が困難な部分について発掘調査を行い、記録として保存し後世に伝えることになりました。今回報告します小牧南遺跡も、そのうちの一つです。

小牧南遺跡では、発掘調査によって、三重県内でも希少な掘立柱建物を伴う縄文時代の集落が発見され、また、古墳時代が始まった頃の集落の様子も明らかになるなど、大きな成果をあげることができました。これらの成果は、考古学的にも注目されるものです。小牧南遺跡の大部分は道路建設により永久に姿を消しましたが、本書に記録された発掘調査の成果が、地域、そして日本の歴史を豊かなものとするための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたって、地元にお住まいの皆様をはじめ、中日本高速道路株式会社、四日市市教育委員会など関係諸機関からご理解とご協力を賜りましたことに、心よりお礼申し上げます。

令和 3 年 3 月

三重県埋蔵文化財センター

所 長 上 村 安 生





## 例 言

- 1 本書は、三重県四日市市小牧町に所在する小牧南遺跡（第2・3次）の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の発掘調査は、近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う緊急発掘調査である。調査にかかる費用は中日本高速道路株式会社が負担した。
- 3 現地における発掘調査の体制については、本書第1章第2節に記載している。
- 4 遺物図版のデジタルトレースについては、外部委託によって行った。業務受託者は以下の通りである。  
平成30年度：株式会社文化財サービス  
令和元年度：安西工業株式会社
- 5 本書の執筆は、第1章の第1節及び第2節第1・2項を服部芳人、第1章第2節第3項と第Ⅱ・Ⅶ章を村上央、第Ⅳ～Ⅵ章の第1節を勝山孝文・宮原佑治・石井智大、第Ⅷ章第3～10節を自然科学分析業務受託者、その他を石井が行っている。全体の編集は石井が行った。また、遺物の写真撮影は萩原義彦が中心となって行っている。
- 6 発掘調査及び本書の作成に際しては、地元の方々をはじめ、下記の方々や機関等にご指導やご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。石井寛、石田由紀子、泉拓良、伊藤正人、大下明、大野薫、長田友也、加納実、川添和暁、久保勝正、小泉翔太、高橋健太郎、津村善博、早野浩二、三重県総合博物館、四日市市教育委員会（敬称略）。
- 7 本報告に関わる発掘調査の記録類並びに出土遺物等は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。ご活用願いたい。

## 凡 例

- 1 本書では、国土地理院発行の1:25,000地形図「菰野」「桑名」、四日市市発行の1:2,500都市計画図、2011三重県共有デジタル地図（平成24年整理）などの地図類を用いている。なお、三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合管理者の承認を得て使用している（承認番号：令和2年4月1日付け三総合地第2号）。
- 2 本書で示す方位はすべて座標北で示している。
- 3 本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄（編）『新版 標準土色帖』（1967年初版）日本色研事業株式会社に拠る。
- 4 本書では、以下のように遺構の略記号を使用している。  
 SH：竪穴建物　SB：掘立柱建物　SA：柱列　SK：土坑　SD：溝　SE：井戸  
 SF：炉・焼土坑　SX：墓・埋設土器　Pit：ピット・柱穴
- 5 遺構図版中において一点鎖線やグレーなどで示したものは、以下の通りである。

遺構平面図				土層断面図	
被熱・焼土	柱版	貼床検出範囲	下層検出遺構	被熱・焼土	礎・遺物
					

- 6 個別遺構図版中の土層断面図において、土層番号を記していない土層は、基本的に別遺構など当該遺構と関係しないと考えられるものである。
- 7 遺物実測図の縮尺は、基本的に縄文土器は1/3、それ以外の土器は1/4としている。土製品・石製品・鉄製品などの小型遺物については1/2や2/3としたが、大型の石製品などは1/3や1/4としたものもある。それぞれの縮尺は図中のスケールにて明示している。
- 8 遺構一覧表や遺物一覧表、写真図版の凡例については、一覧表・写真図版編の冒頭に記載している。

# 目次

第Ⅰ章 前言 .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 調査の経過 .....	1
第3節 本報告における時期区分 .....	5
第Ⅱ章 位置と環境 .....	7
第1節 地理的環境 .....	7
第2節 歴史的環境 .....	8
第Ⅲ章 調査の方法と基本層序 .....	12
第1節 調査の方法 .....	12
第2節 本報告の方針 .....	17
第3節 基本層序と調査区の地形 .....	20
第Ⅳ章 縄文時代の遺構・遺物 .....	23
第1節 遺構 .....	23
第2節 遺物 .....	65
第Ⅴ章 古墳時代前期の遺構・遺物 .....	123
第1節 遺構 .....	123
第2節 遺物 .....	234
第Ⅵ章 古墳時代後期の遺構・遺物 .....	330
第1節 遺構 .....	330
第2節 遺物 .....	346
第Ⅶ章 鎌倉・室町時代の遺構・遺物 .....	357
第1節 遺構 .....	357
第2節 遺物 .....	357
第Ⅷ章 自然科学分析 .....	360
第1節 分析方法と目的及び試料 .....	360
第2節 放射性炭素年代測定 (S X279) .....	362
第3節 放射性炭素年代測定及び樹種・種実同定 (第2次調査) .....	363
第4節 放射性炭素年代測定 (第3次調査) .....	381
第5節 黒曜石産地同定分析 (第2次調査) .....	391
第6節 黒曜石産地同定分析 (第3次調査) .....	396
第7節 ガラス質安山岩産地同定分析 .....	400

第8節	垂飾石材分析	403
第9節	樹種同定(第3次調査)	404
第10節	骨同定	407
第11節	炭素・窒素安定同位体分析	408
第12節	蛍光X線分析	410
第IX章	調査のまとめと考察	415
第1節	縄文時代の集落について	415
第2節	縄文時代掘立柱建物の特徴と系譜	420
第3節	縄文土器の様相	424
第4節	古墳時代の集落の変遷と構造	428
第5節	古墳時代前期堅穴建物の構造の特徴	434
第6節	古墳時代前期初頭の土器の様相	438
第7節	結語	443

## 図版目次（本文編）

<b>第Ⅱ章 位置と環境</b>			
第1図 小牧南遺跡の位置	7	第37図	S B173/362
第2図 周辺遺跡位置図	9	第38図	S X149・250・251
<b>第Ⅲ章 調査の方法と基本層序</b>		第39図	S F259・278
第3図 グリッド割図	12	第40図	S K133・135・136・137・138・192・263
第4図 調査区位置図	13		..... 59
第5図 調査区全体図	14	第41図	S K241・264・267・271・284・308
第6図 遺構位置略図①	18		..... 61
第7図 遺構位置略図②	19	第42図	S K311・315・341・342・358
第8図 遺構位置略図作成範囲	20	第43図	S H143・147・184 出土遺物
第9図 基本層序及び地形断面図	21	第44図	S H191 出土遺物①
<b>第Ⅳ章 縄文時代の遺構・遺物</b>		第45図	S H191 出土遺物②
第10図 S H143	23	第46図	S H191 出土遺物③
第11図 S H147①	24	第47図	S H191 出土遺物④
第12図 S H147②	25	第48図	S H191 出土遺物⑤
第13図 S H184①	26	第49図	S H191 出土遺物⑥
第14図 S H184②	27	第50図	S H191 出土遺物⑦
第15図 S H191①	28	第51図	S H191 出土遺物⑧
第16図 S H191②	29	第52図	S H191 出土遺物⑨
第17図 S H191③	30	第53図	S H191 出土遺物⑩
第18図 S H191④	31	第54図	S H191 出土遺物⑪
第19図 S H191⑤	32	第55図	S H191 出土遺物⑫
第20図 S H193/303	34	第56図	S H191 出土遺物⑬
第21図 S H248	35	第57図	S H191 出土遺物⑭
第22図 S H301①	37	第58図	S H191 出土遺物⑮
第23図 S H301②	38	第59図	S H191 出土遺物⑯
第24図 S H335	39	第60図	S H191 出土遺物⑰
第25図 S H344	40	第61図	S H191 出土遺物⑱
第26図 S H355	41	第62図	S H191 出土遺物⑲
第27図 S H360	43	第63図	S H193/303 出土遺物
第28図 S B276①	44	第64図	S H248 出土遺物①
第29図 S B276②	45	第65図	S H248 出土遺物②
第30図 S B280	46	第66図	S H248 出土遺物③
第31図 S B285①	48	第67図	S H248 出土遺物④
第32図 S B285②	49	第68図	S H248 出土遺物⑤、S H301 出土遺物①
第33図 S B287	50		..... 94
第34図 S B292	51	第69図	S H301 出土遺物②
第35図 S B327	52	第70図	S H301 出土遺物③、S H335 出土遺物
第36図 S B361	53		..... 97
		第71図	S H344・355・360 出土遺物、S B276

	出土遺物①	100
第72図	S B 276 出土遺物②	101
第73図	S B 280・285 出土遺物	102
第74図	S B 287・292・327・173/362 出土遺物 .....	104
第75図	S X 149 出土遺物	106
第76図	S X 250・251・279 出土遺物	107
第77図	S K 133・138・181・192・241・242・ 263・264・267・271・284・308 出土遺物 .....	109
第78図	S K 311・315・341・342 出土遺物、 ビット出土遺物①	110
第79図	ビット出土遺物②	112
第80図	ビット出土遺物③	115
第81図	ビット出土遺物④	117
第82図	包含層出土遺物①	119
第83図	包含層出土遺物②、表土・攪乱等出土 遺物	120
<b>第V章 古墳時代前期の遺構・遺物</b>		
第84図	S H 142	124
第85図	S H 145、S H 166・205①	125
第86図	S H 166・205②	126
第87図	S H 169/324①	127
第88図	S H 169/324②	128
第89図	S H 175	129
第90図	S H 176	130
第91図	S H 177	131
第92図	S H 178①	132
第93図	S H 178②	133
第94図	S H 183①	134
第95図	S H 183②	135
第96図	S H 187	137
第97図	S H 188	138
第98図	S H 189①	139
第99図	S H 189②	140
第100図	S H 190	142
第101図	S H 198①	143
第102図	S H 198②	144
第103図	S H 199	145
第104図	S H 201	147
第105図	S H 202	148

第106図	S H 204	149
第107図	S H 206	151
第108図	S H 207①	152
第109図	S H 207②	153
第110図	S H 208	154
第111図	S H 209・238①	156
第112図	S H 209・238②	157
第113図	S H 210	158
第114図	S H 211①	159
第115図	S H 211②	160
第116図	S H 212・230・236①	161
第117図	S H 212・230・236②	162
第118図	S H 214①	163
第119図	S H 214②	164
第120図	S H 216	166
第121図	S H 218①	167
第122図	S H 218②	168
第123図	S H 219・221・233①	169
第124図	S H 219・221・233②	170
第125図	S H 222	172
第126図	S H 223・240	173
第127図	S H 243	176
第128図	S H 244	177
第129図	S H 245①	179
第130図	S H 245②	180
第131図	S H 246	181
第132図	S H 254①	183
第133図	S H 254②	184
第134図	S H 299	185
第135図	S H 305	186
第136図	S H 306	188
第137図	S H 307	189
第138図	S H 319	190
第139図	S H 321	191
第140図	S H 322	193
第141図	S H 323	194
第142図	S H 331	195
第143図	S H 332	196
第144図	S H 337	198
第145図	S H 338	199
第146図	S H 339	201

第147図	S H346	202	遺物①	255	
第148図	S H347・350	203	第182図	S H205 出土遺物②	257
第149図	S H349	205	第183図	S H206・207・208・209 出土遺物	259
第150図	S H353	206	第184図	S H209 (238)・210・211・212 (230)・214 出土遺物	262
第151図	S H354	207	第185図	S H216・218・219 出土遺物	264
第152図	S H356	209	第186図	S H221 出土遺物①	266
第153図	S H357	210	第187図	S H221 出土遺物②	268
第154図	S H359	211	第188図	S H222・223 出土遺物	270
第155図	S B141・152	213	第189図	S H230・233 出土遺物	273
第156図	S B155・157	214	第190図	S H236・238・243・244 出土遺物	276
第157図	S B156・158	215	第191図	S H245 出土遺物、S H246 出土遺物①	278
第158図	S B159・160	217	第192図	S H246 出土遺物②	280
第159図	S B161	218	第193図	S H254 出土遺物	281
第160図	S B162	219	第194図	S H299 出土遺物、S H305 出土遺物①	283
第161図	S B164	220	第195図	S H305 出土遺物②、S H306 出土遺物	285
第162図	S B260・283	222	第196図	S H307・319・321・322 出土遺物	288
第163図	S A134・150・154・237	223	第197図	S H323・331 出土遺物	291
第164図	S K144・146・151・163	225	第198図	S H332・337 出土遺物	293
第165図	S K165・167・168・170・171・180	226	第199図	S H338 出土遺物①	296
第166図	S K290	228	第200図	S H338 出土遺物②	297
第167図	S K294・304・312・318・326	229	第201図	S H339・346 出土遺物	299
第168図	S K328	231	第202図	S H347 出土遺物	301
第169図	S K320・334・352	232	第203図	S H349・350 出土遺物	303
第170図	S K348、S D329	233	第204図	S H353 出土遺物	305
第171図	S H142 出土遺物、S H169/324 出土遺物①	235	第205図	S H354・356・357・359 出土遺物	308
第172図	S H169/324 出土遺物②	237	第206図	S B141・157・158・162・164・283、S A134 出土遺物	310
第173図	S H169/324 出土遺物③	239	第207図	S K146・151・165・170・171・180・290 出土遺物	312
第174図	S H169/324 出土遺物④、S H175・176 出土遺物	240	第208図	S K294・309・312・320・326・328 出土遺物	314
第175図	S H177 出土遺物	242	第209図	S K334 出土遺物①	317
第176図	S H178・183・187 出土遺物、S H188 出土遺物①	244	第210図	S K334 出土遺物②、S K348・352、	
第177図	S H188 出土遺物②、S H189 出土遺物	245			
第178図	S H190 出土遺物	248			
第179図	S H198・199・201 出土遺物	251			
第180図	S H202 出土遺物、S H204 出土遺物①	253			
第181図	S H204 出土遺物②、S H205 出土				

	S D329 出土遺物	319	第241図	炭化材③	376
第211図	ビット出土遺物、包含層出土遺物①		第242図	炭化種実	379
		322	第243図	暦年較正結果①	385
第212図	包含層出土遺物②、表土・攪乱等出土遺物①	325	第244図	暦年較正結果②	386
第213図	表土・攪乱等出土遺物②	327	第245図	暦年較正結果③	387
<b>第VI章 古墳時代後期の遺構・遺物</b>			第246図	暦年較正結果④	388
第214図	S H148	331	第247図	縄文時代中期末遺構出土炭化材の暦年較正結果の比較	389
第215図	S H195・203①	332	第248図	古墳時代初頭 S H346 出土炭化材の暦年較正結果の比較	390
第216図	S H195・203②	333	第249図	鎌倉時代遺構出土炭化材の暦年較正結果の比較	390
第217図	S H213①	334	第250図	黒曜石産地分布図（東日本）	392
第218図	S H213②	335	第251図	黒曜石産地推定判別図①	394
第219図	S H215	336	第252図	黒曜石産地推定判別図②	394
第220図	S H217	338	第253図	分析対象試料	395
第221図	S H232①	339	第254図	黒曜石産地分布図	396
第222図	S H232②	340	第255図	黒曜石産地推定判別図①	398
第223図	S H253	341	第256図	黒曜石産地推定判別図②	398
第224図	S H256①	342	第257図	分析対象となる黒曜石製石器	399
第225図	S H256②	343	第258図	ガラス質安山岩産地推定判別図①	401
第226図	S B325	344			
第227図	S E140	345	第259図	ガラス質安山岩産地推定判別図②	401
第228図	S H148・195・203 出土遺物	347			
第229図	S H213 出土遺物①	349	第260図	分析対象試料	402
第230図	S H213 出土遺物②、S H215・217・232 出土遺物	350	第261図	勾玉の蛍光X線分析結果	403
第231図	S H253 出土遺物、S H256 出土遺物①	353	第262図	小牧南遺跡（第3次）出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真	406
第232図	S H256 出土遺物②、S B325、包含層、表土・攪乱等出土遺物	355	第263図	小牧南遺跡（第3次）の火葬墓 S K351 出土人骨	408
<b>第VII章 鎌倉・室町時代の遺構・遺物</b>			第264図	炭素・窒素安定同位体比	409
第233図	S X174・333・345・351、S K179	358	第265図	炭素安定同位体比と C/N 比の関係	409
第234図	S X333・351、S K179、包含層、攪乱等出土遺物	359	第266図	小牧南遺跡の試料	410
<b>第VIII章 自然科学分析</b>			第267図	蛍光X線分析結果①	412
第235図	暦年較正結果	363	第268図	蛍光X線分析結果②	413
第236図	暦年較正結果①	364	第269図	蛍光X線分析結果③	414
第237図	暦年較正結果②	365	<b>第IX章 調査のまとめと考察</b>		
第238図	暦年較正結果③	366	第270図	縄文時代遺構分布図	416
第239図	炭化材①	374	第271図	掘立柱建物の分類	420
第240図	炭化材②	375	第272図	鈴山遺跡掘立柱建物復元案	421



第273図	掘立柱建物の平面形比較	422
第274図	掘立柱建物の規模の比較	423
第275図	古墳時代遺構変遷図①	429
第276図	古墳時代遺構変遷図②	430

第277図	堅穴建物の規模	432
第278図	古墳時代前期初頭土器分類図	439
第279図	甕の口縁部形態の比率	442
付図	調査区全体図	

## 表目次 (本文編)

### 第1章 前言

第1表	本報告における時期区分	6
-----	-------------	---

### 第四章 自然科学分析

第2表	自然科学分析試料一覧	361
第3表	測定試料及び処理	363
第4表	放射性炭素年代測定および暦年校正の結果	363
第5表	年代測定試料一覧	367
第6表	放射性炭素年代測定結果	370
第7表	樹種同定結果	373
第8表	種実同定結果	378
第9表	測定試料および処理	382
第10表	放射性炭素年代測定および暦年校正の結果	384
第11表	分析対象	392
第12表	黒曜石産地（東日本）の判別群名称	393

第13表	測定値および産地推定結果	393
第14表	分析対象	396
第15表	黒曜石産地の判別群	397
第16表	測定値および産地推定結果	397
第17表	分析対象	400
第18表	原石採取地と判別群名称	400
第19表	分析値および産地推定結果	400
第20表	分析対象	404
第21表	比重測定結果	404
第22表	半定量分析結果	404
第23表	出土炭化材の樹種同定結果	405
第24表	小牧南遺跡（第3次）出土炭化材の樹種同定結果一覧	405
第25表	測定結果	408
第26表	測定条件	410
第27表	蛍光X線分析結果一覧	411
第28表	半定量分析結果	411

# 第I章 前言

## 第1節 調査に至る経緯

近畿自動車道名古屋神戸線（以下、新名神高速道路とする）は、名古屋市と神戸市を結ぶ、総延長約175kmの高規格幹線道路である。昭和40年に開通した名神高速道路は、自動車交通の増大により、慢性的な渋滞や混雑を生み、高速性・定時性が損なわれる状況が生じてきた。そこで、この課題の解消の対策として、代替路線の新名神高速道路の整備が進められることとなったのである。

三重県教育委員会と中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所は、平成21（2009）年2月24日付けで、事業地内に所在する埋蔵文化財の

取り扱い、及び発掘調査の方法についての協定書を取り交わし、四日市JCT～亀山西JCT間の発掘調査を実施してきた。

既に刊行している報告書<sup>1)</sup>には、新名神高速道路事業の概要、及び発掘調査に至る経緯、保護措置などの詳細について記載しているため、参照されたい。

### 註

- 1) 三重県埋蔵文化財センター 2011『伊坂窯跡・伊坂遺跡（第5次）発掘調査報告』

## 第2節 調査の経過

### （1）調査経過の概要

小牧南遺跡は、平成5年11月に実施した分布調査によって、発見された遺跡である。この調査は、第二名神自動車道（四日市北JCT～亀山西JCT）建設事業（当時）に伴う埋蔵文化財の詳細分布調査として行われたものである。遺物の散布については、土師器・山茶碗・陶器片など疎らであったが、周辺に周知の包蔵地（真造寺遺跡や中野平古遺跡など）があり、地形的に何らかの遺構が残存している可能性が高いと判断された。そのため、鎌倉時代の包蔵地として、四日市市の遺跡番号568に登録された。

当遺跡は、朝明川中下流域の南岸、標高約32～37mの台地縁辺に位置し、小牧町宇風呂屋に所在する。遺跡範囲は、東西210m、南北190mで、新名神高速道路は、当遺跡の概ね北半分を東西方向に横断する形で計画された。

用地買収や関係車両の進入路、各種の地元調整など発掘調査を行うための諸条件が整った平成23年度から、二次調査の必要の有無確認のための一次調査を実施してきた。以下に、平成27年度にかけて行われた発掘調査の概要を年度ごとに記述する。

#### 【平成23年度】

前年度末の平成23年2月に、ネクスコと協議が行われた。協議の内容は、平成23年度は遺跡範囲の東端で、3本の調査坑230㎡の一次調査を6月～7月頃に実施し、二次調査が必要となれば、秋頃に500㎡の本調査を行うという事であった。

年度が改まり、4月の協議で調査面積の変更はないが、一次調査は9月、二次調査は11月～12月と調査時期の変更を依頼された。その後、6月の協議では、一次調査は稲刈り後の10月に変更となった。しかし、遺跡内は橋脚の設置予定地で、建設工事の優先箇所であるため、今年度内に二次調査の実施を依頼された。

その後、何度も協議を重ねたが、ネクスコの工事計画とは裏腹に、用地買収が遅々として進まない状況で、その都度、発掘調査時期の変更を余儀なくされた。協議では、埋蔵文化財センター発注の委託調査の場合、ネクスコとの精算の期限などから、秋頃に確実な用地買収の完了部分があれば、発掘調査可能であるという事を提示していた。しかし、結果的には、年内でも用地買収などの地元調整が整わなかった。

年が明け、年度内に一次調査が実施できて、且つ二次調査が必要となれば、次年度の平成24年度に二

次調査2,500㎡（橋脚建設予定範囲）と、調査未実施範囲に一次調査の1,000㎡を行うという計画がなされた。

年度末の3月になり、ようやく用地買収の面積も増えたため、幅2mの調査坑を6本、合計460㎡の一次調査を、ネクソコの労務提供の形態で実施した。調査の結果、いずれの調査坑からも竪穴建物や溝、土坑と思われる遺構が確認され、縄文土器や土師器も多く出土した。

#### 【平成24年度】

昨年度の一次調査の結果と地形等から判断して、周知の遺跡東側を概ね南北方向に走る四日市市の市道小牧27号線よりも、さらに東側にかけて遺跡の広がりが見込まれた。そのため、6月に当該市である四日市市教育委員会とともに現地確認及び協議を行い、包蔵地範囲の拡大の事務手続きを行った。その結果、範囲は東西320m、南北190m、面積約60,000㎡となった。

5月と8月と協議を行い、二次調査2,500㎡、一次調査1,000㎡の発掘調査が何時から着手可能かどうかの確認を行った。しかし、二次調査対象範囲や一次調査未実施範囲内、市道の東側にも、まだ未買収地が存在し、また、二次調査区内には伐採を必要とする範囲があるなど、なかなか発掘調査実施の条件が整わない状況が続いた。

その後、10月になり、埋文センターとしても、少しでも発掘調査が実施できる条件が整った範囲内で調査を行う計画を行った。具体的には、二次調査（1,000㎡）及び一次調査（800㎡）の計画で、埋文センターによる発掘調査委託の発注を行った。しかし、調査面積が狭いこともあり、不落に終わり、そのため、二次調査については、平成25年度に繰り越すこととなった。

11月になり、市道の東側で、工事立会い調査を実施した。幅2m×16mの調査坑1本を設定した。調査面積は165㎡で、造成土を1.8m程度除去し、その直下で地山と思われる黄灰色粗粒砂（礫含む）を確認した。この地山は、北東方向に向かい緩やかに傾斜しており、出土遺物はなかった。周辺住民の聞き取り調査で、この周辺には幅2m以上で、北方向に大きく開口する谷状の地形が、以前には見られたと

いう事である。

12月になり、一次調査の800㎡と、他の遺跡の一次調査を合わせた、埋文センター発注の発掘調査を開始した。幅2mの調査坑を13本設定して調査を行った。調査範囲の西側の一部で遺構、遺物が確認出来なかったが、約14,500㎡と広大な面積の全面にわたり、縄文時代と古墳時代の遺構、遺物が確認され、二次調査が必要と判断された。

また、年度末の協議では、当遺跡周辺から、橋脚による道路建設計画であるため、橋脚間の工事方法の確認（盛土や掘削の有無）や工事手順等についての確認も行った。

工事計画では、調査範囲の東側と西側に橋脚設置箇所がある。また、西側の橋脚工事に際しては、計画路線内の南側に工事用道路が必要となるため、特に2つの橋脚と、その工事用道路計画箇所を優先的に発掘調査を依頼された。その結果、平成25年度に市道西側で8,000㎡の二次調査と、市道小牧27号線の東側に100㎡の一次調査、また、平成25年度調査範囲のほぼ中央部分は、翌年度以降に発掘調査を行う計画がなされた。

#### 【平成25年度】

年度が改まり、当初の計画通りに2つの橋脚間と工事用道路予定範囲に、計画面積8,000㎡の二次調査（第2次）を実施した。5月から開始し、翌年2月まで行われ、最終的には7,371㎡の面積の調査を行った。その結果、縄文時代中期の竪穴建物、掘立柱建物、埋設土器、集石遺構をはじめ、古墳時代前期から後期にかけての竪穴建物や掘立柱建物などが多数確認されることとなった。特に、縄文時代中期の掘立柱建物は県内では最古級のものであり、また、石製垂飾が埋設土器から見つかるなど、貴重な成果を上げることが出来た。

なお、普及啓発活動の一環として、現地説明会を10月27日（日）に行い、335名の参加があった。

また、11月には市道の東側で、計画路線内の南側に幅2mの調査坑を3本設定し、計72㎡の一次調査を実施した。場所は、平成24年度実施した立会い調査箇所さらに東側に当たる。谷状の地形の東側で、安定した面は確認できたが、特筆すべき遺構、遺物が確認されず、二次調査の対象とはならなかった。

#### 【平成26年度】

四日市JCTから四日市北JCT（当時）の供用開始予定の時期が迫り、協議では、伊坂城跡などの四日市工事区管内の発掘調査を中心に調整、検討されることとなった。そのため、小牧南遺跡をはじめとする菟野四日市工事区から鈴鹿亀山工事区管内の発掘調査は、優先順位からは若干落ちることとなった。

当該年度の発掘調査として計画されている箇所は、市道の東側部分で、宅地として利用している箇所である。そのため、ネクスコも用地買収を慎重に進めながら、工事計画と発掘調査の調整や検討を行った。

年度の中盤の協議では、市道東側に一次調査を実施し、仮に全面二次調査になった場合は、平成27年度に市道東側、平成28年度に市道西側の調査という分割の対応も検討された。

年末になり、ようやく市道東側で懸案であった、宅地部分の用地買収など発掘調査の条件が整った。そこで、ネクスコの労務提供の形態で、建物基礎の撤去に伴って、一次調査を実施した。幅2mの調査坑を3本設定、面積165㎡の調査を行った結果、市道から東へ離れる部分では、地山以下の30～60cmで安定した検出面が確認されたが、遺構、遺物は確認されなかった。

また、市道に近接した東側では、平成24年度に立会い調査を実施した際に確認した、北側へ大きく開く谷地形の続きが見つかった。この調査の結果、市道の東側については、二次調査の対象から外されることとなった。

年度末に協議を行い、次年度は、二次調査を5月から開始して、12月終了予定で依頼された。

#### 【平成27年度】

年度が改まり、当初の計画通り、平成25年度調査の第2次調査区のほぼ中央部分とその北東側に、計画面積5,900㎡の二次調査（第3次）を実施した。第2次調査区の終了範囲では、橋脚建設の工事が実施されており、調査区の両側で工事用車両の往来もある中での発掘調査であった。

6月から開始し、翌年1月まで行われ、最終的には5,935㎡の面積の調査を行った。

その結果、縄文時代中期の堅穴建物、掘立柱建物

や古墳時代前期から後期にかけての堅穴建物などの遺構がさらに確認され、当時の遺物も多く出土することとなった。

なお、普及啓発活動の一環として、現地説明会を11月28日（土）に行い、175名の参加があった。

今回の発掘調査を持って、新名神高速道路の建設に伴う発掘調査は全て終了したことになる。

## （2）調査の体制

各年度の担当・体制などは、次のとおりである。

#### 【平成23年度】

##### ・一次調査

担当：穂積裕昌・中村法道（調査研究Ⅱ課）

業者：ネクスコ中日本株式会社（労務提供）

期間：平成24年3月1日～平成24年3月4日

面積：460㎡

#### 【平成24年度】

##### ・立会調査

担当：服部芳人（調査研究Ⅲ課）

業者：ネクスコ中日本株式会社（労務提供）

期間：平成24年11月19日

面積：165㎡

##### ・一次調査

担当：松永公喜・宮原佑治（調査研究Ⅲ課）

業者：橋本技術株式会社（土工委託）

期間：平成24年12月20日～平成25年3月22日

面積：800㎡

#### 【平成25年度】

##### ・一次調査

担当：矢田陽（調査研究3課）

業者：ネクスコ中日本株式会社（労務提供）

期間：平成25年11月5日～平成25年11月6日

面積：72㎡

##### ・第2次調査

担当：宮原佑治・矢田陽・服部芳人（調査研究3課）

業者：株式会社島田組（調査補助委託）

期間：平成25年5月28日～平成26年2月6日

面積：7,371㎡

#### 【平成26年度】

##### ・一次調査

担当：矢田陽・水橋公恵（調査研究3課）

業者：ネクスコ中日本株式会社（労務提供）

期間：平成26年12月8日

面積：165㎡

#### 【平成27年度】

##### ・第3次調査

担当：宮崎久美・勝山孝文・村上央（調査研究3課）

業者：株式会社島田組（調査補助委託）

期間：平成27年6月5日～平成28年1月18日

面積：5,935㎡

### （3）調査日誌（抄）

#### ①第2次調査

6月14日 表土掘削開始、竪穴建物1棟を検出

6月17日 東区東側にて竪穴建物2棟を検出、東区中央部にて縄文土器が出土

6月18日 竪穴建物6棟を検出

6月24日 竪穴建物4棟を検出、うち1棟から須恵器甕が出土

6月25日 竪穴建物複数棟を検出

6月27日 竪穴建物6棟を検出、うち1棟でカマドらしき焼土を検出

6月28日 竪穴建物1棟を検出

7月1日 竪穴建物4棟を検出

7月2日 中区の表土掘削を開始

7月4日 竪穴建物2棟を検出、うち1棟から縄文土器が出土

7月5日 竪穴建物3棟を検出

7月9日 竪穴建物数棟を検出

7月10日 竪穴建物1棟を検出

7月11日 西区の表土掘削開始、SH242・246周辺の遺構検出作業

7月12日 SH244掘削、貼床を検出

7月16日 SH246掘削、貼床を検出

7月17日 SH245掘削、土師器鉢やS字状口縁甕が出土

7月19日 SH244柱穴掘削、SH245アゼ土層分層、SH246柱穴掘削、遺物出土状況撮影

7月31日 SH245遺物出土状況写真撮影

8月7日 SH201掘削

8月12日 SH201土層写真撮影

8月19日 SH201遺物出土状況・完掘状況の写真撮影

8月23日 SH276付近の柱穴と思われるピットより打製石斧が出土

8月27日 SH248掘削開始し縄文土器多数が出土、SB282を検出

8月30日 SH248遺物出土状況撮影

9月6日 SH253掘削開始

9月10日 SX250より垂飾出土

9月11日 SH202・205掘削開始

9月13日 SH248遺物出土状況図作成

9月18日 SH204掘削開始

9月24日 SH222掘削開始

9月27日 SH223掘削開始

10月1日 SH222遺物出土状況撮影

10月2日 SH218検出、SH215掘削開始

10月7日 SH203掘削

10月15日 台風のため作業中止

10月17日 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター石井寛氏による発掘調査指導

10月21日 SH190・191掘削

10月27日 現地説明会開催（参加者数353人）

10月30日 SH177・176・178掘削

11月28日・29日 空中写真撮影

12月9日 石井寛氏による発掘調査指導

12月17日 SH176・177完掘状況撮影

12月25日～27日 東区全景写真撮影

1月6日 SX149掘削、埋設土器と判明

1月15日・16日 東区拡張

1月17日 東区拡張部の掘削開始、竪穴建物5棟を検出、うちSH147から土器埋設炉を検出

1月23日 東区拡張部の全景写真撮影、SH142・143及びSB141遺構写真撮影

1月28日 調査区平面図作成完了

1月29日 調査区埋戻し開始

2月6日 調査終了、機材撤収

#### ②第3次調査

6月23日 表土掘削開始

6月29日 竪穴建物2棟を検出、第2次調査の続きの掘立柱建物の柱穴2基を検出

6月30日 S H182・188・190の続きを検出、堅穴建物数棟を検出

7月2日 S H337・338・339付近からほぼ完形の土師器台付甕が出土

7月3日 堅穴建物4棟を検出

7月6日 堅穴建物1棟および第2次調査の続きの堅穴建物1棟を検出

7月7日 堅穴建物2棟を検出

7月8日 堅穴建物3棟を検出

7月10日 作業員による人力での包含層掘削開始

7月13日 堅穴建物1棟を検出、縄文土器が出土

7月14日 S H301検出

7月21日 堅穴建物3棟を検出

7月22日 堅穴建物1棟を検出

7月24日 S H303完掘

7月30日 重機による表土掘削終了、S H301から土器埋設炉を検出

7月31日 S B276柱穴の炭化物を採取

8月3日 S B276完掘写真撮影

8月5日 S H307完掘、S B325検出

8月7日 S K313・314・315完掘写真撮影、S H321完掘、S H190から打製石斧が出土

8月18日 S B325完掘

8月24日 S H319完掘、S K334から土師器片が多量に出土

9月2日 S H245掘削完了

9月7日 S H337・338・339掘削

9月11日 S X351から木炭・骨が出土

9月15日 S H183・188・190・198・323・324完掘写真撮影

9月30日 石井寛氏による発掘調査指導

10月5日 S H355より埋設土器を検出、床面から

黒曜石が出土、石囲炉を検出

10月19日 すべての掘削完了

11月6日 空中写真撮影

11月28日 現地説明会開催（参加者数175人）

12月25日 現地での記録作業等終了

#### (4) 文化財保護法等にかかる諸通知

- ①文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項（周知の埋蔵文化財における土木工事等の発掘に関する通知）
- ・平成23年8月9日付け、中高名支四工第798号  
（中日本高速道路株式会社名古屋支社四日市工事事務所長から三重県教育委員会教育長あて）
- ②文化財保護法第99条第1項（発掘調査の着手報告）
- ・平成25年6月4日付け、教埋第109号  
（三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて）【平成25年度・第2次】
  - ・平成27年6月19日付け、教埋第101号  
（三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて）【平成27年度・第3次】
- ③文化財保護法第100条第2項（文化財の発見・認定通知）
- ・平成26年3月7日付け、教委第12-4424号  
（三重県教育委員会教育長から四日市西警察署長あて）【平成25年度・第2次】
  - ・平成28年2月12日付け、教委第12-4422号  
（三重県教育委員会教育長から四日市西警察署長あて）【平成27年度・第3次】
- ④周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲変更
- ・平成24年6月13日付け、教埋第96号  
（三重県埋蔵文化財センター所長から三重県教育委員会教育長あて）

### 第3節 本報告における時期区分

本報告においては、小牧南遺跡における主要な集落形成時期である縄文時代中期と古墳時代について、第1表のように時期を区分している。本文及び表における遺構や遺物などの時期に関する記述は、この時期区分に基づいて行っている。

各時期区分に対応する土器型式・様式については、伊勢地域以外でも広く適用されている代表的なもの

を示した。参考にした編年等は、註に掲げた通りである<sup>1)</sup>。

縄文時代中期の土器型式に関しては、小牧南遺跡の縄文土器の様相に基づき、東海地方西部のものを示した。表には示していないが、本報告における縄文時代中期末葉は、近畿地方の土器型式では北白川C式にほぼ併行するものと思われる。

第1表 本報告における時期区分

時期区分		土器型式・様式	
縄文時代	中期	前～中葉	北裏C・山田平・北屋敷Ⅱ式
		後葉	中富・神明式
		末葉	取組・島崎Ⅲ・山の神式
弥生時代	終末期		廻間Ⅰ式
古墳時代	前期	初頭	廻間Ⅱ式
		前葉	廻間Ⅲ・Ⅰ・Ⅱ式
		中葉	廻間Ⅲ・Ⅲ・Ⅳ式
		後葉	松河戸Ⅰ式
	中期	前葉	松河戸Ⅱ式
		中葉	宇田Ⅰ式
		後葉	宇田Ⅱ式
	後期	前葉	MT15型式
		中葉	T K10型式
		後葉	T K43～209型式

また、古墳時代については、中期までは東海地方西部における土器編年に拠っているのに対して、後期は須恵器の陶器編年を用いているなどの理由により、厳密には併行関係等にずれもある<sup>2)</sup>。しかしながら、本報告において用いた各時期区分の、大枠

での時間的位置づけを提示することを優先し、あえて単純化して提示した。

註

1) 参考にした編年は、以下の通りである。

赤塚次郎1990「廻間式土器」『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター、赤塚次郎1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター、赤塚次郎1997「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』

（財）愛知県埋蔵文化財センター、赤塚次郎・早野浩二2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第2号（財）愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター、田辺昭三1981『須恵器大成』 角川書店、増子康真1969「木曾川下流域の縄文中期後半土器について」『古代学研究』第54号 古代学研究会、増子康真1998「東海地方西部地域の縄文中期後半土器編年再考」『古代人』第59号 名古屋考古学会

2) 例えば、宇田Ⅱ式とMT15型式の併行関係など。

## 第Ⅱ章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

**位置・地形** 小牧南遺跡は三重県の北部、四日市市小牧町字風呂屋に所在する<sup>1)</sup>。三重県北部は、古くから北勢地方や北勢地域と呼ばれている。この地域の西縁には鈴鹿山脈が南北に連なり、滋賀県との境になっている。また、北縁は養老山地・木曾三川によって岐阜県・愛知県と画されている。さらに東側には伊勢湾が広がっており、鈴鹿山脈から伊勢湾に向かって員弁川・朝明川・海蔵川・三滝川・内部川などの河川が東流している。

小牧町付近では、北西から南東へ向かって流れる朝明川沿いに幅1km前後の谷底平野が形成されており、当遺跡はその谷底平野の南側に広がる標高30～50mほどの高位段丘の縁辺部に立地している。ここから北の方角にはなだらかな養老山地、西の方角には険しい鈴鹿山脈の稜線が見渡せる。天気の良い日には、鈴鹿山脈の北端と養老山地の西端との間に、伊吹山を望むことができる。

小牧南遺跡が立地する高位段丘沿いには、朝明川の小規模な支流である名前川が流れており、小牧南遺跡はこの名前川による開析谷に面している。名前川は小牧南遺跡のすぐ北側を流れているため、遺跡の北側には段丘崖が形成されている。名前川は、小牧南遺跡より少し東側で北から流れてくる古城川と合流し、朝明川へと流れ込んでいく。

なお、正式な行政区分ではないが、当遺跡を含む地域は古くから保々と呼ばれている。近隣には三岐鉄道保々駅をはじめ、保々保育園、保々幼稚園、保々小学校、保々中学校、保々地区市民センターなどがあり、「保々」という地名は地域住民には慣れ親しんだ呼称であるといえる。

**地質** 当遺跡周辺の朝明川南岸の高位段丘では、地表面に厚さ0.5～1mほどの古赤色土と呼ばれる赤褐色の土壌の堆積がみられる。その下位には厚さ数mに及ぶ砂礫層が堆積しており、露頭などで確認できる。

砂礫層中に含まれる礫は、泥岩、チャート、砂岩、

頁岩、ホルンフェルス、花崗岩、熔結凝灰岩などである。礫の大きさは長径5～10cm程度のもものが中心で、やや大きな長径20cm程度のものも多い。円～亜円礫が多いが、チャート以外の礫はかなり風化が進んでおり、特に花崗岩には指先で容易に砕くことができるほど軟化しているものもある。こうした風化した花崗岩を起源とする砂が、礫間を充填している。

なお、朝明川より北側を流れる員弁川では、いわゆる湖東流紋岩類に属する流紋岩の存在が確認されており<sup>2)</sup>、小牧南遺跡付近でも段丘礫等や河床礫として存在している。

#### 註

- 1) 本節は、全体的に下記の文献を参照して記述している。  
地質調査所1991『桑名地域の地質』、四日市市1991『四日市市史』第1巻史料編自然、四日市市土地分類調査会1992『四日市市の土地分類』
- 2) 津村善博2015「三重県内7河川の河床礫の礫種組成」『三重県総合博物館研究紀要』第1号 三重県総合博物館



第1図 小牧南遺跡の位置



## 第2節 歴史的環境

今回、発掘調査した小牧南遺跡（A）は、主に縄文中期後葉～末葉、古墳時代の前期初頭の遺跡であるが、北勢地域、とりわけ朝明川周辺地域を中心として、原始から中世に至る各時代を概観する。

**旧石器時代** 小牧南遺跡周辺では旧石器時代の遺跡自体がほとんど確認されておらず、発掘調査によって遺物が出土した例はほとんどない。しかし、遺物と思われるものが、わずかではあるが出土している。朝明川流域、垂坂丘陵北東端にある久留倍遺跡（1）では、サヌカイト製のナイフ形石器が出土しているほか、この時代のものと思われるチャート製の剥片が出土している<sup>11</sup>。また、小牧南遺跡から朝明川を挟んだ野呂田遺跡（2）では、旧石器時代の可能性のある搔器・剥片が採集されている<sup>12</sup>。

員弁川流域では、川向遺跡で、ナイフ形石器の可能性のある剥片石器が出土している<sup>13</sup>。

**縄文時代** 北勢地域では早期と中期後葉～末葉の遺跡が目立つ。朝明川北岸にある中野山遺跡（3）では、縄文時代早期の堅穴建物1棟、集石が11基、煙道付炉穴100基以上が確認されている<sup>14</sup>。

竹谷川上流南岸にある鈴山遺跡（4）では、縄文時代早期の煙道付炉穴と集石が、縄文時代中期後葉～末葉の堅穴建物8棟、掘立柱建物6棟が確認され、中富・神明式や北白川C式などに併行する遺物が出土している<sup>15</sup>。員弁川中流域北岸にある村前遺跡（5）では、縄文時代中期後葉～末葉の堅穴建物2棟、土坑1基、屋外炉跡1基が確認されている<sup>16</sup>。

**弥生時代** 中期では、朝明川流域で菟上遺跡（6）、菟上遺跡の集落の墓域である可能性が指摘されている山村遺跡（7）、また、扁平鈕式銅鐻の出土地であると伝えられている伊坂遺跡（8）などがある。

朝日丘陵の南縁丘陵上にある山村遺跡では、中期中葉～後葉にかけての方形周溝墓19基や、環濠などが確認されている<sup>17</sup>。また、山村遺跡に隣接する菟上遺跡では、中期後葉の大規模な集落が形成されており、堅穴建物127棟をはじめ、棟持柱を持つ掘立柱建物、多数の土器、石器、木製品が確認されている<sup>18</sup>。

後期前葉のものとしては、小牧南遺跡の周辺では、

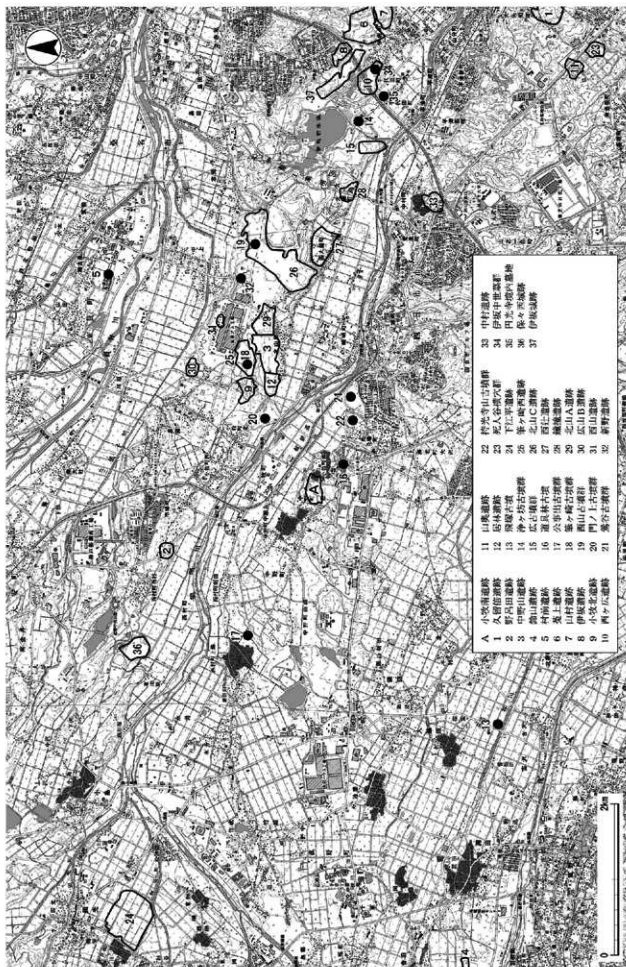
小牧北遺跡（9）で方形周溝墓<sup>19</sup>、中野山遺跡で堅穴建物が確認されている。

後期後葉～終末期にかけて、朝明川流域では比較的大きな集落が増えてくる。朝明川中流域北岸、朝日丘陵上にある西ヶ広遺跡（10）では、後期の堅穴建物17棟が確認されている<sup>20</sup>。

当該期の朝明川流域では、金塚遺跡、山奥遺跡（11）、居林遺跡（12）など、かなりの急斜面に住居域を設ける集落が目立つ。金塚遺跡では、銅鐻の破片と、銅鏃が出土している<sup>21</sup>。垂坂丘陵の南東斜面部にある山奥遺跡では、鉄鏃や鉄斧、ヤリガンナなど、多数の鉄製品が出土しており、北勢地域でも弥生時代後期以降に鉄製品が普及したものと思われる。また、後期の堅穴建物が100棟以上確認されており、その中には、多角形住居のような特徴的な遺構も確認されている。ここでは丘陵全体に集落が営まれ、丘陵の尾根部のみならず、北側の斜面にも堅穴建物が造られている<sup>22</sup>。久留倍遺跡では、中期の堅穴建物27棟、方形周溝墓1基のほか、後期～古墳時代初頭の堅穴建物19棟、井戸、方形周溝墓などが確認されており、ここでも緩やかな斜面上に集落が形成されている。

**古墳時代** 集落については、前期では、朝明川中流域の伊坂遺跡で堅穴建物や掘立柱建物、土坑が確認されている<sup>23</sup>。中期では、小牧南遺跡付近では集落は希薄であるが、後期になると、先述した山奥遺跡で集落が確認されている。30棟以上の堅穴建物や掘立柱建物9棟が確認されている。また土器焼成坑7基が確認されており、この時代における土師器の生産が判明している。

古墳については、前期では、海蔵川と米洗川に挟まれた丘陵上に、四日市市唯一の前方後円墳である志氏神社古墳がある。古墳の規模は後円部径30m、高さ5.3mで、船載鏡と思われる内行花文鏡の破片や、車輪石、勾玉、管玉、小玉が出土している<sup>24</sup>。また、前期末では、海蔵川の支流である竹谷川の北岸に、飛塚古墳（13）がある。古墳の規模は墳丘径35m、高さ2.9mの円墳で、周溝からは壺形埴輪や円筒埴輪、家形埴輪片が出土している<sup>25</sup>。



第2図 周辺通路位置図 (1/50,000)

中期では、朝明川中流域北岸の台地上に浄ヶ坊古墳群(14)がある。古墳の規模は、1号墳は径36m、高さ4.5mで、2号墳は推定径12m、高さ1.5mである。1号墳、2号墳ともに円墳である<sup>19)</sup>。また同じ台地上の南端には広古墳群(15)がある。方墳4基、円墳3基からなる古墳群で、最大規模の広B1号墳は一辺31m、高さ3.4mの方墳であり、埴輪の出土が伝えられている<sup>20)</sup>。

後期前半では、朝明川中流域南岸の台地上に道具林古墳(16)がある。主体部は木棺直葬で、円墳である。須恵器や鉄製品が出土している<sup>21)</sup>。

後期後半では、朝明川中流域南岸に公事出古墳群(17)がある。円墳2基と方墳4基からなる古墳群で、規模は径5~10mに収まり、それぞれ横穴式石室を設けている。隣接している公事出遺跡とは時期的に重複しており、公事出遺跡の集落の墓域との見方がある<sup>22)</sup>。また、公事出古墳群の横穴式石室は、玄室が胴張り形を呈しているが、北勢地域の横穴式石室には同様の形態の石室が多くみられ、この地域の特色の一つと考えられている<sup>23)</sup>。

また、北勢地域の古墳には、単独の円墳または10基未満の円墳で構成される古墳群が多いが、10基以上で構成される古墳群もあり、筆ヶ崎古墳群(18)、西山古墳群(19)、門ノ上古墳群(20)、鶯谷古墳群(21)、江平古墳群、野々田古墳群、宇賀新田古墳群、大辻古墳群、上小原古墳群、下小原古墳群がある<sup>24)</sup>。持光寺山古墳群(22)、鶯谷古墳群などは、段丘上に展開している。

終末期では、横穴墓も造営されており、広永横穴墓群・金塚横穴墓群・死人谷横穴群(23)など、複数確認されている<sup>25)</sup>。

**古代** 律令期には、朝明川流域は朝明郡に属していた。久留倍遺跡では政庁・正倉院等の施設が見つかり、朝明郡衙に比定されている<sup>26)</sup>。『日本書紀』には「朝明郡遠太川で、天武天皇が天照大神を遷した」とあり、当地は天武天皇が壬申の乱の際に訪れた場所として認識されている<sup>27)</sup>。また『続日本書紀』には、「天平12(740)年の藤原広嗣の乱の際に、聖武天皇の東国巡幸が行われ、朝明郡に立ち寄った」とある<sup>28)</sup>。さらに『万葉集』には、この東国巡幸の際に、大伴家持らが朝明の行宮で詠んだとされる歌

が記載されている<sup>29)</sup>。

『延喜式』によると、朝明郡には「朝明駅」が設置され、「駅馬十疋、伝馬五疋」が常設されていたとされる。これは東海道の駅家があったことを示すと考えられ、先述した久留倍遺跡との関係が指摘されている<sup>30)</sup>。

平安時代に編纂された『和名類聚抄』によると、朝明川流域には田光(多比加)・杖部(鉢世都加倍)・額田(沼加多)・大金(於保加禰)・豊田(止奥多)・訓朝(久留倍)の6郷があったとされる<sup>31)</sup>。現代の地名でいえば、田光は朝明川上流域の菺野町田光、大金は朝明川中流域北岸の四日市市大鐘町、訓朝は久留倍遺跡のある四日市市大矢知町、豊田は川越町豊田と比定できる。

田光については、朝明川上流に位置する下江平遺跡(24)で、「五十戸口」「倭家」「財・交」などの墨書土器8点が出土しており、遺跡の時期は概ね8世紀が中心である<sup>32)</sup>。

大金という地名は、金属器の生産に由来すると考えられ、筆ヶ崎西遺跡(25)では、鍛冶炉が確認されているほか、多数の鉄滓が出土している<sup>33)</sup>。また、北山C遺跡(26)では鉄滓、中野山遺跡では鉄滓や輪の一部が出土している<sup>34)</sup>。過去に出土した遺物から、西辻遺跡(27)や鐘撞遺跡(28)周辺も、大金郷を構成する集落であったとする見方もある<sup>35)</sup>。近隣の丘陵上には、北山A遺跡(29)や広山B遺跡(30)、西山遺跡(31)、新野遺跡(32)、北山C遺跡など、飛鳥・奈良時代の集落が多数確認されている<sup>36)</sup>。

朝明川流域全体でみると、上流の六谷遺跡、中・下流域の菺上遺跡、西ヶ広遺跡、中村遺跡(33)などが、古代の遺跡として確認されている。

**中世** 朝明川の支流、杉谷川の上流にある杉谷中世墓では、約200基の五輪塔と10基ほどの方形の火葬穴が確認されているほか、蔵骨器として用いられた常滑産陶器の甕・壺、古瀬戸の三耳壺・四耳壺などが出土している<sup>37)</sup>。

員弁川の支流、源太川の上流にある経塚中世墓では、30基以上の配石の下に土壇もしくは蔵骨器を有する墓が造られており、火葬を行ったと思われる土坑も確認されている<sup>38)</sup>。

菟上遺跡では129基の火葬墓が確認されているほか、土師器皿や銭貨などが出土しており、時期的には15世紀後半～16世紀代のものと推測される。石塔を伴わない、火葬に特化した中世墓群と考えられている。このほか、小牧南遺跡の近隣では、伊坂中世墓群(34)や円光寺境内墓地(35)などの中世墓群が確認されている<sup>36)</sup>。

朝明川流域の中世城館としては、保々西城跡(36)や伊坂城跡(37)などがある。

## 註

- 1) 四日市市教育委員会2013『久留信遺跡 5』
- 2) 四日市市1988『四日市市史』第2巻史料編考古I
- 3) 北勢町教育委員会1993『川向遺跡発掘調査報告』
- 4) 三重県埋蔵文化財センター2014『埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』、三重県埋蔵文化財センター2016『中野山遺跡(第2・3・6・7次)発掘調査報告』
- 5) 三重県埋蔵文化財センター2018『鈴山遺跡(第2・3次)発掘調査報告』
- 6) 東員町教育委員会1993『村前遺跡発掘調査報告』
- 7) 三重県埋蔵文化財センター2004『山村遺跡発掘調査報告』
- 8) 三重県埋蔵文化財センター2005『菟上遺跡発掘調査報告』
- 9) 三重県埋蔵文化財センター2007『小牧北遺跡発掘調査報告』
- 10) 三重県埋蔵文化財センター2006『西ヶ広遺跡(第3・4次)発掘調査報告』
- 11) 三重県埋蔵文化財センター2002『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』
- 12) 四日市市教育委員会2003『山奥遺跡Ⅰ』、四日市市教育委員会2004『山奥遺跡Ⅱ』
- 13) 三重県埋蔵文化財センター2004『伊坂遺跡発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター2011『伊坂塚跡・伊坂遺跡(第5次)発掘調査報告』
- 14) 四日市市1988
- 15) 三重県埋蔵文化財センター2015『飛塚古墳発掘調査報告』
- 16) 四日市市1988
- 17) 四日市市1988
- 18) 四日市市遺跡調査会2002『真造寺遺跡・道具林古墳』
- 19) 四日市市教育委員会1998『公事出古墳群・公事出遺跡』
- 20) 竹内英昭1995『三重県の横穴式石室研究』『研究紀要』第4号 三重県埋蔵文化財センター、三重県埋蔵文化財センター2015『公事出遺跡(第3次)発掘調査報告』
- 21) 三重県埋蔵文化財センター2016
- 22) 三重県埋蔵文化財センター2006『広永横穴墓群・広永1号墳・広永城跡・広永遺跡発掘調査報告』
- 23) 四日市市教育委員会2007『久留信遺跡2』
- 24) 四日市市1995『四日市市史』第16巻通史編古代・中世
- 25) 四日市市1995
- 26) 四日市市1991『四日市市史』第7巻史料編古代・中世
- 27) 四日市市教育委員会2013
- 28) 四日市市1993『四日市市史』第3巻史料編考古Ⅱ
- 29) 菟野町教育委員会1988『下江平遺跡発掘調査報告Ⅱ』
- 30) 三重県埋蔵文化財センター2012『埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』
- 31) 三重県埋蔵文化財センター2016
- 32) 四日市市1993
- 33) 東員町教育委員会1976『西山遺跡・新野遺跡』、三重県教育委員会1972『新野遺跡発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター2016、三重県埋蔵文化財センター2017『北山A遺跡(第2・3・5・6次)発掘調査報告』、三重県埋蔵文化財センター2020『北山C遺跡(第2～7次)・西山古墳群発掘調査報告』
- 34) 菟野町教育委員会2017『杉谷遺跡一出土物に関する調査報告書一』
- 35) 三重県2008『三重県史』資料編考古2
- 36) 三重県埋蔵文化財センター2005

## 第三章 調査の方法と基本層序

### 第1節 調査の方法

#### (1) 調査区およびグリッドの設定

**グリッドの設定** 小牧南遺跡の調査に際しては、複数年度にわたる調査が予想されたため、調査を行う範囲全体を対象として、あらかじめグリッドの設定を行った。

グリッドは4×4mの正方形とし、主軸方位は国土座標の南北軸と一致させている。このグリッドを調査対象地内における遺構の位置関係や遺物出土位置の把握のための基礎単位としたが、調査対象となった範囲が広く、設定されたグリッドが非常に多数となるため、さらに一辺100mの単位で大地区を設定した(第3図)。

各大地区にはAから順にアルファベットの大字で名称を付与した。北側には西から順にA～D、南側には西から順にE～H、そのさらに南側の大地区

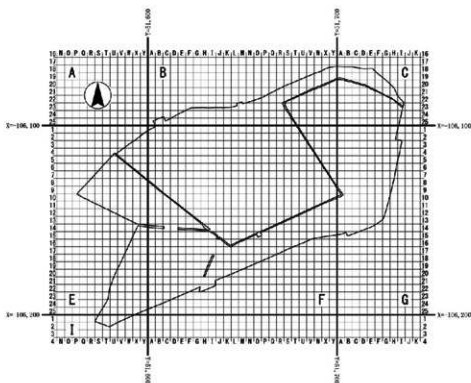
Hまでに収まらなかった部分にIの名称の大地区を設定している<sup>1)</sup>。

大地区の内部には、南北に25、東西に25、計625のグリッドが配されている。各グリッドには西から東へ向かってAから順にアルファベット大文字を、北から南へ向かって1から順に数字を与え、このアルファベットと数字の組み合わせによって各グリッド名を表した(例:A1)。本報告で特定のグリッドを示す場合は、そのグリッドが存在する大地区名のアルファベットを頭に付している(例:A-A1)。

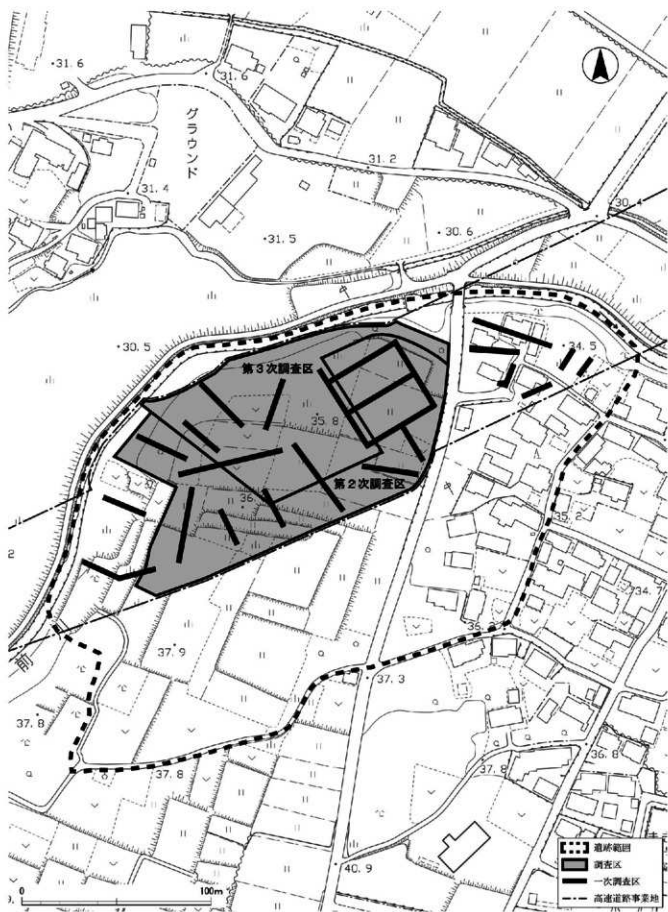
**調査区の設定** 調査区は、工事によって影響を受ける範囲の中でも、遺構が密に存在すると推定される箇所を中心に設定した。

第2次調査区は、調査対象範囲のうち、主に南側を占める。

第3次調査区は、調査対象範囲のうち、主に北側



第3図 グリッド分割図 (1/2,000)



第4図 調査区位置図 (1/2,000)



第5図 調査区全体図 (1/600)

を占める。調査区の北側は川へ向かって下る急傾斜地となるため、調査区の範囲は急傾斜となる角度変化点付近までとした。

なお、第2・3次調査区とも、一部で竪穴建物などが調査対象外とした範囲へ延びていることが確認されたため、その部分を中心に調査区を拡張した箇所がある。

## (2) 掘削等

**掘削** 第2・3次調査とも、現地調査開始後に、まず耕作土等の表土を重機で除去し、遺構面まで掘り下げた。

その後、順次人力で遺構の検出作業を行った。遺構検出後、それぞれの遺構を人力で掘削した。

なお、一部では周囲の水田等に農業用水を供給するための水路・水管等を調査時に撤去することができなかつたため、撤去できなくなった段階で別途掘削・調査を行った箇所もある。

竪穴建物については、土層観察・記録用のアゼを設け、そのアゼによって分割された区画ごとに掘削を進めた。

掘立柱建物は、基本的に検出面から一段掘り下げて柱痕の有無を確認して記録を作成後、柱穴を半截して土層断面を記録し、完掘している。柱痕が認められた場合、可能な限り遺物は柱痕と柱穴埋土に分けて取り上げた。

**遺構番号の付与** 第2次調査では、ピットを除くすべての種類の遺構に、通し番号で200から順に遺構番号を付与した。200番台の番号を用いたのは、第2次調査において検出された遺構であることを分かりやすくし、次年度に予定された第3次調査で検出された遺構との判別を容易にするためである。

同様に、第3次調査でも300番台の番号を遺構番号として用い、第3次調査で検出された遺構であることを示すようにした。

ただし、第2次調査においては調査前に予測したよりも多くの遺構が検出され、300番以降の番号を付与する必要が生じた。300番以降の番号を使用すると第3次調査との混乱が生じるため、第2次調査では、299番以降の遺構番号は199から1へ向かって遡る形で100番台の番号を付与していった。結果と

して、第2次調査では133～299を遺構番号として使用している。

各遺構を表記する時には、遺構番号の前に、凡例で示したようにSK、SDなど遺構の種類ごとの略称を付けている。また、ピットについてはグリッドごとに1から順に番号を付与し、その番号の前にグリッド名とピットを表す略称を付けて表記している(例:A-AIPit1)。

竪穴建物の支柱穴や貯蔵穴、掘立柱建物を構成する柱穴については、グリッドとは別に遺構ごとに個別の番号を振り、番号の前にピットを表す略称Pを付けて表記している。ただし、すべての支柱穴・貯蔵穴等にこうした個別番号が付与されているわけではない。また、掘立柱建物の柱穴など、調査時には土坑として認識されSKなどの略称を与えられたものもある。

## (3) 遺構の図化

**遺構平面図** 調査区の面積が広いため、遺構平面図の作成は第2・3次調査ともラジコンヘリコプターを使用した空中測量によって行った。

空中測量による図化は遺構完掘後に行っているが、出土遺物が良好な状態で出土した土坑や埋設土器、縄文時代の掘立柱建物の柱穴等については、より縮尺の大きな図面を個別に作成した。なお、第2次調査では、貼床が明瞭に遺存している竪穴建物については床面上の機能面での図化を別途行い、貼床の範囲や遺物の出土状況等を図示している。

**土層断面図** 遺構の土層断面図については、個別に土層観察用のアゼを残して分層を行い、図化した。竪穴建物では基本的に直交する2方向の土層断面図を作成し、場合によっては柱穴や炉穴、貯蔵穴等の土層断面図を個別に作成した。

掘立柱建物は、できる限り建物主軸に沿った方向で柱穴の土層断面図を作成するよう努めたが、縄文時代の掘立柱建物の柱穴については、当初は土坑として認識していたものも多いため、必ずしも建物主軸に沿った方向で土層断面図を作成することができていない。

**出土状況図** 遺構内等から遺物や炭化材などが良好な状態で出土した場合は、出土状況図を1/10などの



大縮尺で作成し、遺物に付した取り上げ番号を図面に記録した。

ただし、大量に遺物が出土した場合などは現地での図面作成が困難であったため、デジタルカメラで撮影した写真と現地における実測を併用して図化を行ったものもある<sup>2)</sup>。

#### (4) 写真撮影

調査区全体の写真撮影は、第2・3次調査ともラジコンヘリコプターを使用した空中撮影によって行った。使用したカメラは、第2次調査では中判の銀塩カメラ(ZENSA BRONICA SQ-Ai)とデジタルカメラ(Canon EOS 5D Mark II)で、第3次調査ではデジタルカメラ(Canon EOS 5D Mark II)のみである。

個別遺構や土層断面、遺物出土状況等の写真については、第2次調査では銀塩カメラとデジタルカメラ(Nicon D3300)を併用して撮影した。調査区の

部分写真や、良好に検出された堅穴建物・埋設土器等の遺構については、4×5インチの大判カメラを用いて撮影した。銀塩カメラでの撮影は、カラーリバーサルとモノクロの両方のフィルムを使用している。

第3次調査では、すべての写真をデジタルカメラ(Nicon D3300)で撮影している。調査区的全景や、良好に検出された堅穴建物・埋設土器等の遺構については、中判相当のデジタルカメラ(Nicon D800)でも撮影を行った。

#### 註

- 1) ただし、大地区D・Hについては結果的に第2・3次調査区の外となっている。
- 2) SH190・191・248などの遺物出土状況図や、SF259の遺構平面図などは、この方法によって図化した。

## 第2節 本報告の方針

本報告では第2次・第3次調査の成果を併せて報告するが、前節で述べたような調査の方法も踏まえて、いくつか報告時に整理を行い、統一などを図った点もある。また、便宜的に整理を行った部分もある。そうした点について示しておく。

**遺構・遺物の報告単位** 検出された遺構・遺物については、縄文時代、古墳時代前期、古墳時代後期、鎌倉・室町時代に分け、それぞれ別の章で報告を行う。ただし、それぞれの時代の遺構から混入などによって出土した別の時代の遺物は、その遺構が帰属する時期の章の中で、その他の遺物とともに掲載している。

**遺構の整理** 第2次調査区と第3次調査区の両方にまたがって検出された遺構の中で、各調査において異なった番号が付与されてしまったものがあるが、それについては報告時に統一を図らず、遺構番号を併記する方式を採用した(例:SH169/324)。

いくつかの遺構については、その性格を鑑みて、報告段階で遺構種類の略号を変更したものがある。変更については、遺構一覧表(一覧表・写真図版編第1～7表)の備考欄に記載している。

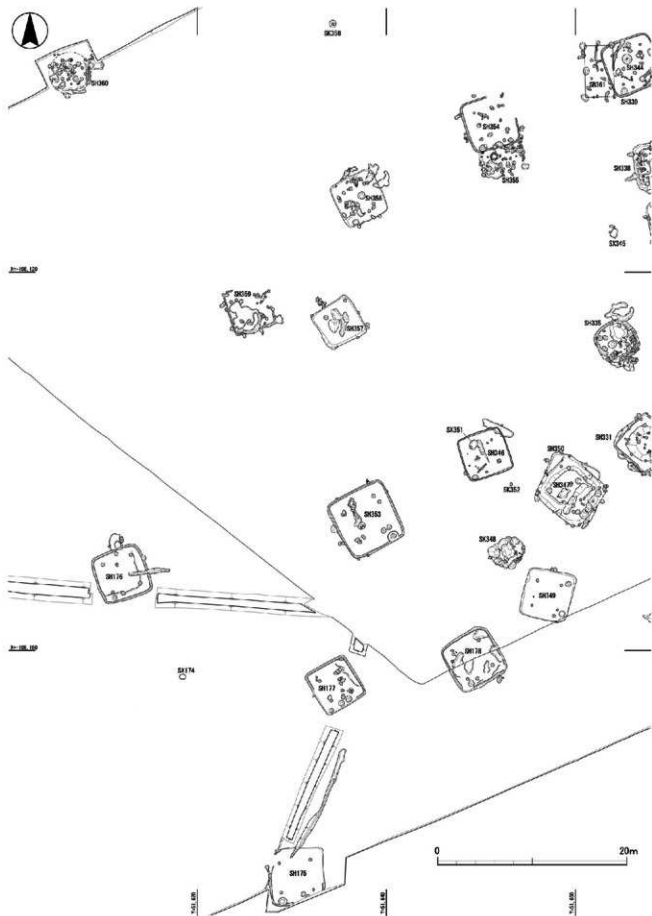
また、報告に際して堅穴建物の主柱穴や掘立柱建

物の柱穴についても再検討を行った。それにより、調査時に主柱穴等と認識していたものとは異なるビットを採用したものもある。遺物についても、再整理の結果に即して報告を行っている<sup>1)</sup>。

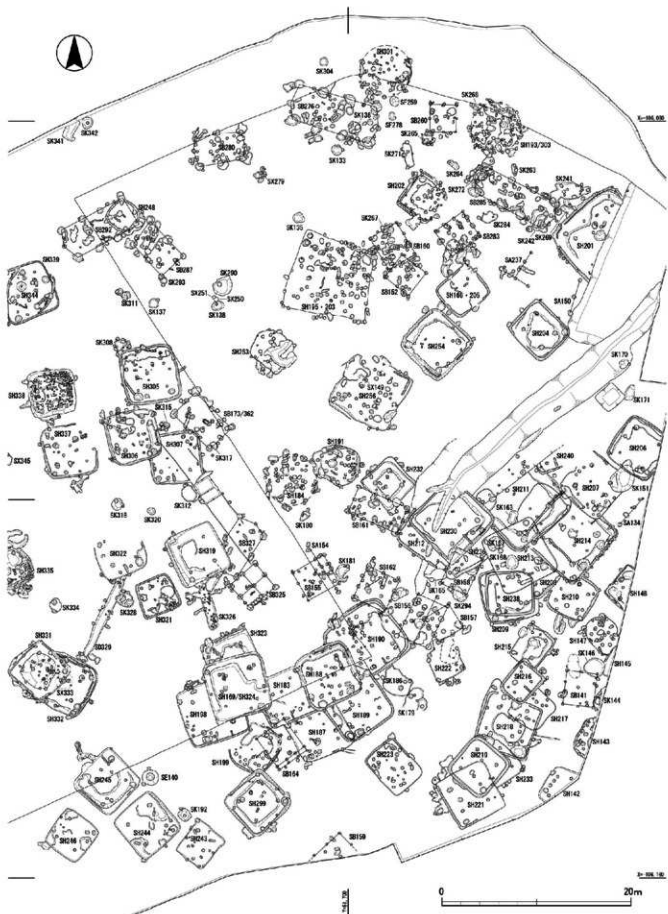
**掲載遺構** 検出された遺構のほぼすべてについて、個別図及び文章による報告を掲載している。ただし、土坑については数が多いため、実測可能な遺物が出土しているなど主要なものを選択して報告した。遺構一覧表(一覧表・写真図版編第6表)にはすべての遺構を掲載しており、個別に図を掲載していない土坑については、その旨を遺構一覧表の備考欄に記載している。

調査区の全体図(第5図・付図)には、個別図を掲載していない土坑の図も示しており、また、遺構の位置は略図によって示している(第6・7図)。

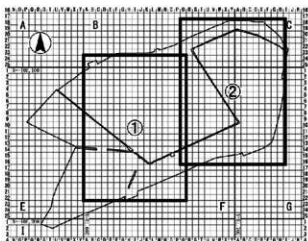
**遺構図版** 遺構図版の縮尺については、遺構の種類ごとになるべく統一を図ったが、堅穴建物については規模の差がかなりあったため、1/40を基本としながらも、いくつかの建物については1/50や1/60としている。土層断面図の縮尺も平面図と合わせているが、個別に作成された貯蔵穴や柱穴、炉など細部の土層断面図については、平面図の縮尺に関わらず



第6圖 遺構位置略図① (1/400)



第7圖 遺構位置略圖② (1/400)



第8図 遺構位置略図作成範囲 (1/2, 500)

1/40とした。また、遺物の詳細な出土状況図については、遺構の種類に関わらず1/20を基本としている。

各遺構の図面には、空中測量によるものと、個別に実測して作成されたものの両者が存在する場合があるが、原則として個別に作成された図面を採用した<sup>2)</sup>。

なお、竪穴建物の図化方針に第2次調査と第3次調査の間で差異があったため、両調査区にまたがって検出された竪穴建物の場合、第2次調査において個別に作成された床面上の機能面で図化した図面と、第3次調査において空中測量によって図化された完掘状態での図面を合成したものもある。

竪穴建物や掘立柱建物内の柱穴には、調査時に個別にP1、P2などの番号が付与されていた。ただし、各遺構と関係がないと判断されたものや、貯蔵穴などにも付与されていたため、報告段階では本報告中で個別に触れるものや出土遺物の図を掲載したもののみ、調査時の柱番号を図版中に図示した。  
**掲載遺物** 多量に出土した遺物のうち、本報告に掲載する遺物の抽出にあたっては、口縁部や底部・脚部を中心に、径が復元できる程度の遺存率があるものや、文様があるものを基本的に抽出した<sup>3)</sup>。

### 第3節 基本層序と調査区の地形

#### (1) 基本層序

小牧南遺跡は段丘上に立地するため、遺構の形成後に堆積した土砂の量は少ない。現地表面から地山

さらに、各遺構ごとに、遺構の時期を示すような遺物を最低1点は抽出するよう心がけた。したがって、遺物図面が全く掲載されていない遺構は、図化可能な遺物や時期を示すような遺物が抽出できなかったものである。

多数の遺物が出土している遺構については、基本的な抽出に加えて、構成する器種あるいは文様のバリエーションが網羅できるよう、僅少な器種や、希な文様を施しているものについては、小片や体部片であっても抽出し、図化して掲載している。また、同じ器種が多数存在する場合、口縁部や底部片であってもごく小片の場合は抽出しなかった個体もあるが、器種間の数量比や、同じ器種の中における形態や調整等のバリエーションが反映されるように配慮している。

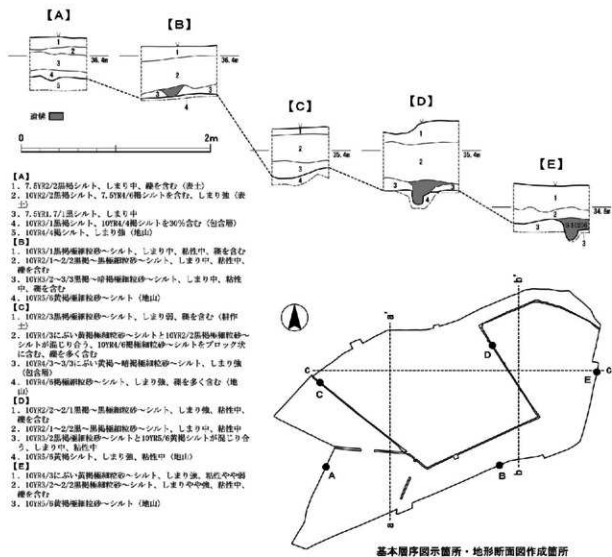
包含層中など、遺構に伴わない遺物については、遺存率が高くない個体が、遺構出土物にはあまりみられない器形や文様を有するものを中心に抽出している。

石器・石製品については、確実に製品と判断できるものは、破片も含めてほぼすべて図化している。石器製作に関わる剥片や石核などについては、微細なものを除き、可能な限り図化した<sup>4)</sup>。

#### 註

- 1) 報告書に掲載しなかった遺物については再整理結果を反映できていないが、調査時の記録等に基づいて再整理結果と照合することは可能である。
- 2) 個別に実測した図面の場合は、周囲の遺構等は遺構図版中に示されていない。
- 3) 赤彩や文様があるものの、小片のため図化が困難な土師器片などは、参考資料として報告書掲載遺物とともに保管している。
- 4) 竪穴建物埋土の篩がけで検出された微細な剥片については、参考資料として報告書掲載遺物とともに保管している。

となる段丘堆積物の土層までは、浅いところで0.1m、深いところで0.5mほどである。また、調査を行った範囲はほぼ全域が調査前まで水田等の耕作地として利用されていた。そのため、耕作等による掘



第9図 基本層序及び地形断面図（基本層序1/40、地形断面図は横1/500・縦1/100）

乱は広い範囲で地山上面まで及んでおり、遺構はかなり削平を被っている状況である。

遺構上面を被覆する土層は基本的に黒色や黒褐色の土壌で、いわゆる黒ボクに由来するものである(第9図)。遺構埋土も同様である。黒ボクの生成時期は縄文時代と推定され、本来は黒ボク層の上面から遺構が掘り込まれていたと考えられる。それが後世の耕作等により攪乱され、遺構検出面上に二次的に堆積したものと考えられる。調査時に包含層と判断された土層も、黒褐色土に褐色土が混じるなど、耕作による攪乱を被っている可能性が高い(第9図A第4層、C第3層)。

ただし、いくつかの地点においては、遺構が地山上面に堆積した別の土層の上方から掘り込まれている状況が確認できた(第9図B第3層、D第3層)。こうした土層は遺構形成以前に地山上面に堆積した土層である可能性が考えられるが、厚さ0.1m以下しか遺存しておらず、遺構検出はほぼ地山直上で行わざるを得なかった。

主な遺構検出面となった地山は、基本的に褐色ないし黄褐色の極細粒砂〜シルトを主体とする土層である。段丘堆積物で形成されることもあり、場所によって質の差異が顕著であった。特に、段丘礫の含有については差があり、段丘縁部に近いほど礫が多く含まれていた。これは、地山の堆積層の上位にはあまり礫が含まれていないが、0.4~0.5mほど下では多量に礫を含む土層となっているため<sup>1)</sup>、縁辺部の斜面地では上位の堆積層が流出し、下位に堆積した礫を多く含む土層が露出した結果とみられる。

なお、礫を多量に含む土層より下層では、砂礫層やシルト層など段丘堆積特有の堆積土層が確認されている<sup>2)</sup>。

## (2) 調査区の地形

調査区は段丘縁辺部に位置しており、東側には沖積平野が広がっている。調査区が位置する段丘沿いを流れる名前川は、調査区の北側に段丘へと入り込む小規模な開析谷を形成しており、調査区付近は、東側の沖積平野及び、北側の谷に向かって傾斜している(第9図)。

調査区内の地形を詳細に見ていくと、第2次調査区の南西部が最も地形的に高くなっている。この地形的な高まりは調査前から認識できるほど明瞭なもので、緩やかに高くなっていくというよりは、やや段状に高くなり、壇のような様相を呈している。これが元からの地形なのか、人為的に形成されたものかは不明であるが、この付近では遺構がほとんど検出されていない点は注意される。

遺構が密に分布するのは、第2次調査区の東半と第3次調査区の中央付近である。この範囲の南部では地形的に平坦な部分が存在するが、北部は北側の川に向かって緩やかに下る北向き緩斜面となっている。斜度は2~4°ほどである。

そして、第3次調査区の北辺では、川に向かって急激に傾斜する斜面となる。この部分では遺構はほとんど確認できない。第2次調査区の東辺でも東側の川に向かって地形の傾斜が若干強まるが、北側ほどではない。調査区の東側は段丘を下る道路によって削平を被っているが、一次調査の結果から第2次調査区東側は谷地形となっていたことが判明しており、遺跡はあまり東側へは広がらないとみられる。

## 註

- 1) S E 140の調査に伴う断ち割りにおける所見による。
- 2) 註1に同じ。

## 第IV章 縄文時代の遺構・遺物

### 第1節 遺構

#### (1) 竪穴建物・平地式建物

**SH143 (第10図)** 第2次調査区の南東端で検出した建物で、調査区内で全体の半分程度が検出された。東側は調査区外の道路下へと続くが、道路建設時に削平を被っている可能性が高い。平面形は長軸4.1m以上の隅丸方形ないしは円形を呈すると考えられる。

主柱穴と思われるピットは2基検出されたが、調査区外へと続くため、総数は不明である。調査区東壁沿いの床面から検出された浅い土坑の底面では、焼土が認められた。炉の痕跡の可能性もある。壁際溝は浅く不明瞭であるが、断続的に確認できた。貼

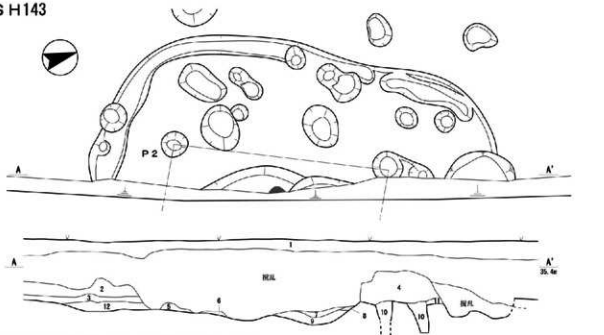
床は確認できなかった。

遺物は、埋土中から縄文土器や土師器が出土している。また、主柱穴とみられるP2からは縄文土器の深鉢の破片が出土した。

土師器が出土していることから古墳時代前期まで下る遺構の可能性もあるが、P2から出土した遺物を積極的に評価し、縄文時代中期末葉の遺構と考えておきたい。

**SH147 (第11・12図)** 第2次調査区の東端で検出した建物である。遺存状況が悪く深さが数cm程度しかなかったため、建物の規模には不確定な部分があるが、北側と南側でわずかに残存した壁際溝からみて、平面形は長軸3.8m以上、短軸3.3mほどの円

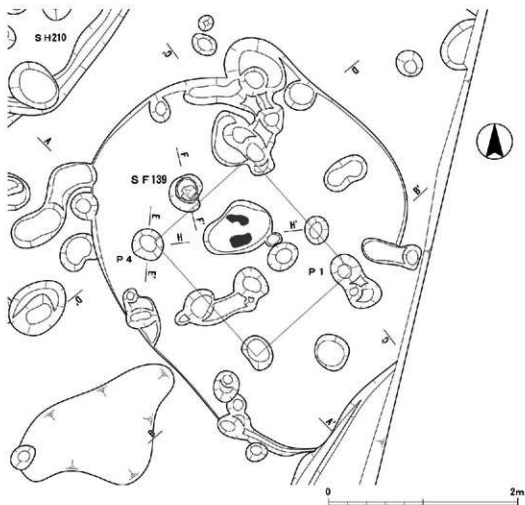
SH143



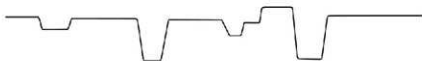
- 10182/2-3/2黒褐色細砂礫シルト、しまりやや強、粘性中、礫を含む
- 10182/2黒褐色細砂礫シルト、しまりやや強、粘性中、礫を含む
- 10182/2黒褐色細砂礫シルトと10184/6黒褐色細砂礫シルトが混じり合う、しまり中、粘性中、礫を含む
- 10182/2黒褐色細砂礫シルト、しまり中、粘性中、礫を多く含む
- 10183/2-3/3黒褐色均質細砂礫シルト、しまり強、粘性中
- 10182/2黒褐色細砂礫シルト、しまりやや強、粘性中、礫を含む
- 10182/2-2/1黒褐色均質細砂礫シルト、しまり中、粘性やや強
- 10182/2黒褐色細砂礫シルト、しまり強、粘性中、礫を含む
- 10182/1-2/2黒褐色均質細砂礫シルト、しまりやや強、粘性やや強
- 10183/2黒褐色細砂礫シルトと10185/6黒褐色細砂礫シルトが混じり合う、しまり中、粘性中
- 10183/5黒褐色細砂礫シルト、10182/2黒褐色細砂礫シルトを20%程度含む、しまり中、粘性中
- 10182/2-3/2黒褐色細砂礫シルト、しまりやや強、粘性中

第10図 SH143 (1/40)

SH147



A A'  
 $\frac{1}{250}$



B B' E E'  
 $\frac{1}{250}$   $\frac{1}{250}$



C C'  
 $\frac{1}{250}$



D D'  
 $\frac{1}{250}$



1. 10YR2/2 黒褐色砂ヘシルト、  
 しまりややぬ、粘性中
2. 10YR2/2 黒褐色砂ヘシルト、  
 10YR5/6 黄褐色シルト20%含む、  
 しまりややぬ、粘性中

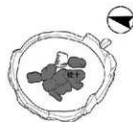
第11圖 SH147① (1/40)



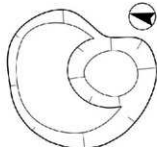
## SH147



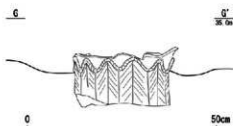
土器埋設炉SF139 上面



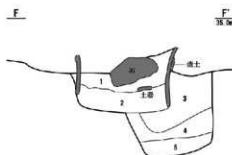
SF139 焼土検出状況



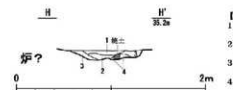
SF139 完備状況



0 50cm



F' 15cm



0 2m

## 【H-H' 断面】

1. 10YR2/3～2/3黒褐～暗褐細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中、焼土粒を含む
2. 10YR3/3～2/4暗褐細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中、焼土粒を含む
3. 10YR4/3～1/4に濃い黄褐～暗褐細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
4. 10YR4/4褐中粒砂～シルト、しまり強、粘性中、焼土ブロックを含む

## 【F-F' 断面】

1. 10YR2/3～2/3黒褐～暗褐細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、焼土・炭化物をわずかに含む
2. 7.5YR4/6暗褐細粒砂～シルト、しまり強、粘性中やや強、焼土・炭化物を多く含む
3. 10YR2/3黒褐細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中、焼土ブロックをわずかに含む
4. 10YR4/6～5/6暗～暗褐細粒砂～シルト、10YR3/3暗褐細粒砂～シルトを20%含む、しまり強、粘性中
5. 10YR2/3～2/4黒褐～暗褐細粒砂～シルト、10YR5/6黄褐細粒砂～シルトを30%含む、しまり強、粘性中

## 第12図 SH147② (1/40、1/10)

形に近い隅丸方形を呈すると考えられる。

主柱穴と思われるピットは4基検出した。東側の柱間にもう1基ピットがみられるが、浅いため柱穴とは考えがたい。

炉としては、建物内北西部で土器埋設炉SF139が検出された。径0.3mほどの土坑内に体部下半を除去して筒状にした縄文土器深鉢を据えている。土坑の掘形自体は据えられた土器の大きさと同様であるが、この土坑を重複して、先行するやや深い土坑が検出されており（第12図3～5層）、炉の造り替えが行われたものと推測される。埋設された土器内の上層からは、大型の被熱した礫が検出された。炉床と思われる焼土層はその下から検出されているため、この礫は炉の廃絶にあたって行われた儀礼的な行為に伴って入れられた可能性が考えられる。この他、建物内中央部付近で浅い皿状の土坑が検出され、その埋土中からも焼土塊が検出された。この土坑も炉であったとみられ、SH147には炉が2基設けられていた可能性が高い。

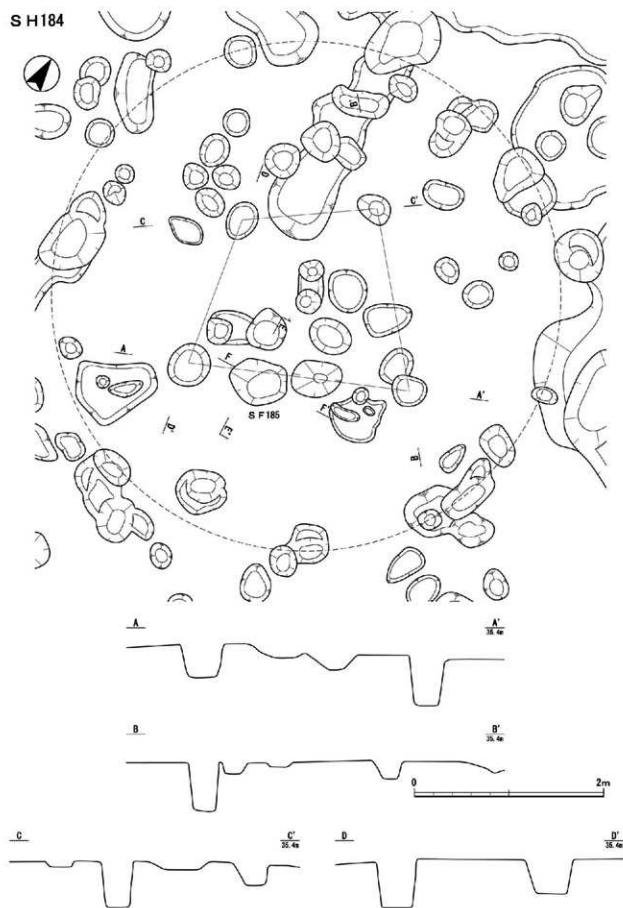
壁際溝は、北側と南側でわずかに存在が確認できた。全周せず、部分的なものであったと考えられる。また、建物の縁に沿って、小型のピットが複数検出されている。垂木穴など、建物に関わるピットの可能性がある。貼床は確認できなかった。

遺物は、土器埋設炉SF139から炉体とされていた縄文土器深鉢（4）が出土した。また、P1・4など複数の主柱穴からも縄文土器が出土している。

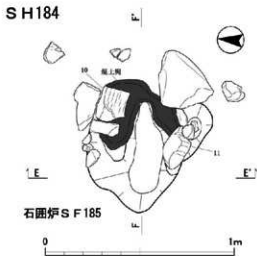
SF139出土遺物などからみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

SH184（第13・14図）第2次調査区の東部で検出した。竪穴建物の存在を示すような掘り込みは検出されなかったが、石囲炉SF185が検出され、その周囲に主柱穴と考えられるピットなどの存在も確認できたため、建物として把握した。平地式建物の可能性も考えられる。建物の範囲は不明確であるが、径5.4mほどの円形にほぼ等間隔に小型のピットが並ぶ様子が認められるため、これが建物の範囲を示している可能性が高い<sup>1)</sup>。

SH184



第13圖 SH184① (1/40)



第14図 SH184② (1/20)

主柱穴と思われるピットは4基検出した。そのうち3基は0.4~0.5cmほどの深さのしっかりした柱穴であるが、北東隅の1基のみはやや浅く、4基の柱穴の配置も台形を呈するため、本来は別のピットが主柱穴であった可能性も否定できない。

炉は、石圍炉と考えられるSF185が1基検出された。遺存状況が悪く、焼土塊が伴う浅い土坑の周囲に礫が散在する状況であった。礫はほぼ原位置を留めておらず、土坑についても木の根などで大きく攪乱を受けている可能性が高い。炉を構成していたと思われる礫には、砂岩などがみられた。

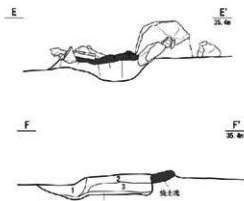
この他、壁際溝や貼床など建物に伴う遺構は確認できなかった。

遺物は、SF185の埋土中や肩部から縄文土器の小片や石皿(台石)<sup>2)</sup>が出土している。また、建物内の古墳時代のピット(F-X6pit2)からも縄文土器が出土している。

SF185出土遺物などからみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

SH191(第15~19図) 第2次調査区の東部で検出した建物である。浅い皿状の落ち込みに近く、壁面が明瞭に確認できなかったため、建物の形態や規模には不確定な部分があるが、平面形は長軸5.0m、短軸4.2mほどの隅丸方形ないし楕円形を呈すると考えられる。深さは0.2mほど遺存していた。

主柱穴は4基検出された。やや長方形に整然と配置されている。いずれも0.4mほどの深さがあり、



1. 10Y23/2部地層砂礫シルト、しまりやや強、粘性中(石材抜き取り層?)
2. 10Y22/2-23部地層砂礫シルト、しまり中、粘性中(埋土)
3. 2.3部地層砂礫シルト、しまりやや強、粘性や中強、焼土含む(埋土)
4. 10Y24/6部シルト、しまりやや強、粘性強

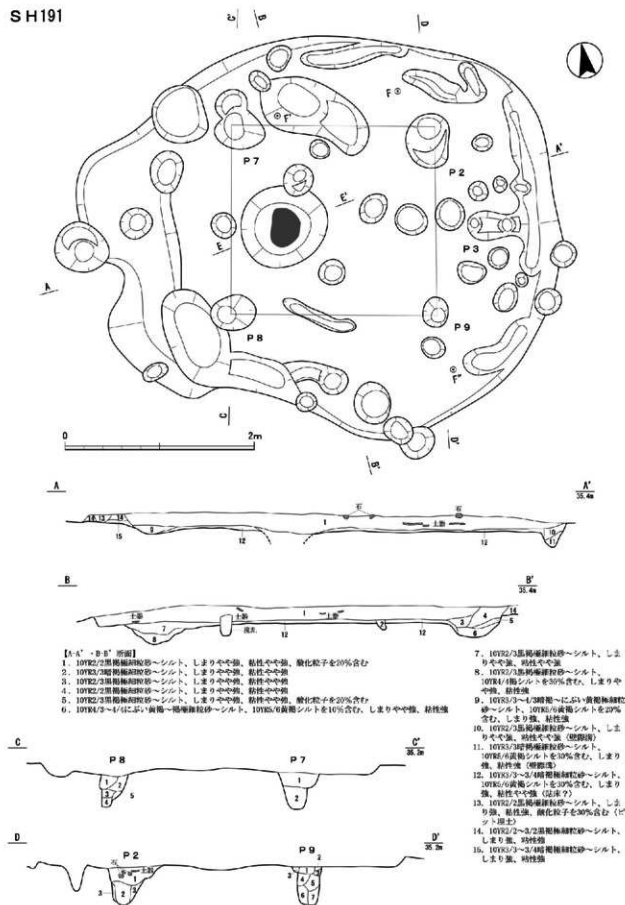
底面の標高は34.50~34.56mと近似する。P2・8では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できるが、P2ではその上層から縄文土器深鉢の破片がまとまって出土しており、柱は建物廃絶時に抜き取られたか、根元で切断された可能性が高い。また、西側の柱間にはもう1基ピットがみられるが、浅いため柱穴とは考えがたい。

炉は、建物中央よりやや西側で検出された。平面形が円形の、深さ0.15mほどの浅い土坑である。底面には被熱が認められ、埋土中にも焼土塊が含まれていた。土坑の周囲から礫は検出されず、抜き取り痕も認められなかったため、地床炉であったと考えられる。炉内からは土器片が多数出土したが、特に最下層付近ではほぼ1個体分の深鉢の破片が面的に広がって検出された。検出された土器に明確な二次被熱は認められ、破片を全面に敷き詰めたと考えにくい。炉の廃絶に伴って入れられたものと推測される。

壁際溝は、部分的に確認できた。東側では特に明瞭に検出された。全周せず、断続的なものであったと考えられる。

貼床は、建物全体に施されているものと思われる(A-A'・B-B'断面第12層)。炉は、貼床と思われる土層の上から掘り込まれている。

この建物からは、縄文土器が大量に出土している。平面検出段階から多数の土器片の広がりが確認でき、埋土には床面直上に至るまで土器片が非常に密に含



第15図 SH191① (1/40)

# SH191

## 【c-c'・D-D' 断面】

### P2

1. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、土層片を含む
2. 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性やや強
3. 10YR5/6黄褐色シルト、10YR2/3黒褐色細粒砂～シルトを30%含む、しまり強、粘性強

### P7

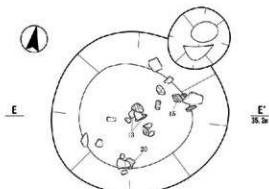
1. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
2. 10YR2/3～3/3黒褐色～暗褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強

### P8

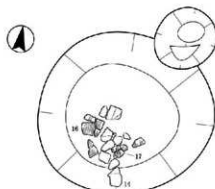
1. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
2. 10YR2/2～2/3黒褐色～暗褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性強、酸化粒子を20%含む
3. 10YR3/2暗褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強、酸化粒子を30%含む
4. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、10YR5/6黄褐色シルトを20%含む、しまり強、粘性やや強
5. 10YR5/6黄褐色細粒砂～シルト、10YR2/3黒褐色細粒砂～シルトを10%含む、しまり強、粘性中

### P9

1. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
2. 10YR3/3～3/4暗褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
3. 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルト、10YR5/6黄褐色シルトを10%含む、しまり中やや強、粘性やや強
4. 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルト、10YR5/6黄褐色シルトを30%含む、しまり中やや強、粘性やや強
5. 10YR2/2～2/3黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中、酸化粒子を20%含む
6. 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性やや強
7. 10YR5/6黄褐色シルト、10YR2/3黒褐色細粒砂～シルトを30%含む、しまり強、粘性強



炉内遺物出土状況 (最上層)

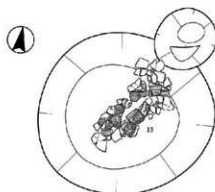


炉内遺物出土状況 (上層)

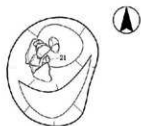


## 【E-E' 断面】

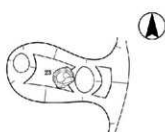
1. 7.5YR2/3暗褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強、酸化粒子を20%含む
2. 7.5YR2/3暗褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
3. 7.5YR2/3暗褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強、粘土層を多く含む



炉内遺物出土状況 (下層)

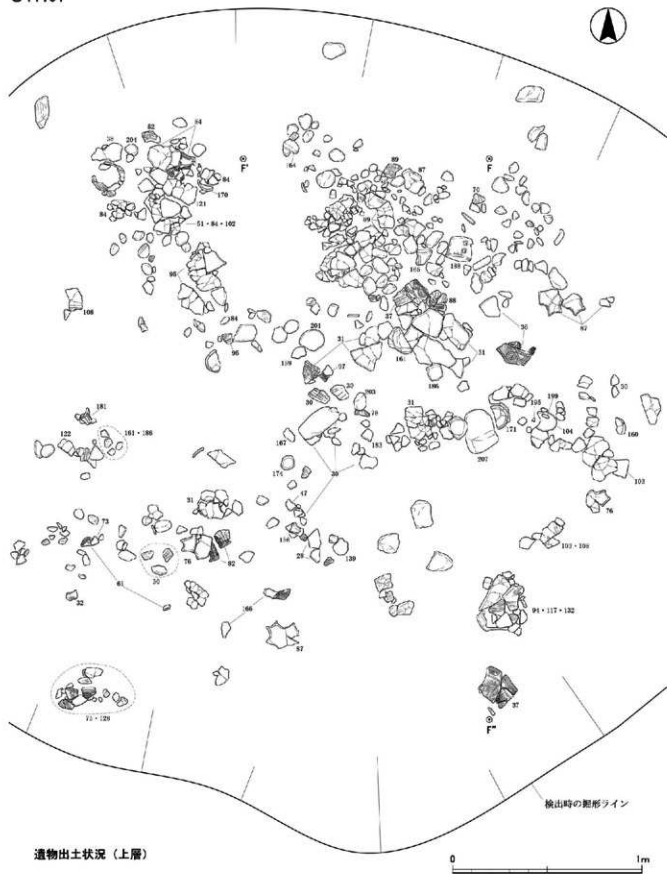


P2 遺物出土状況



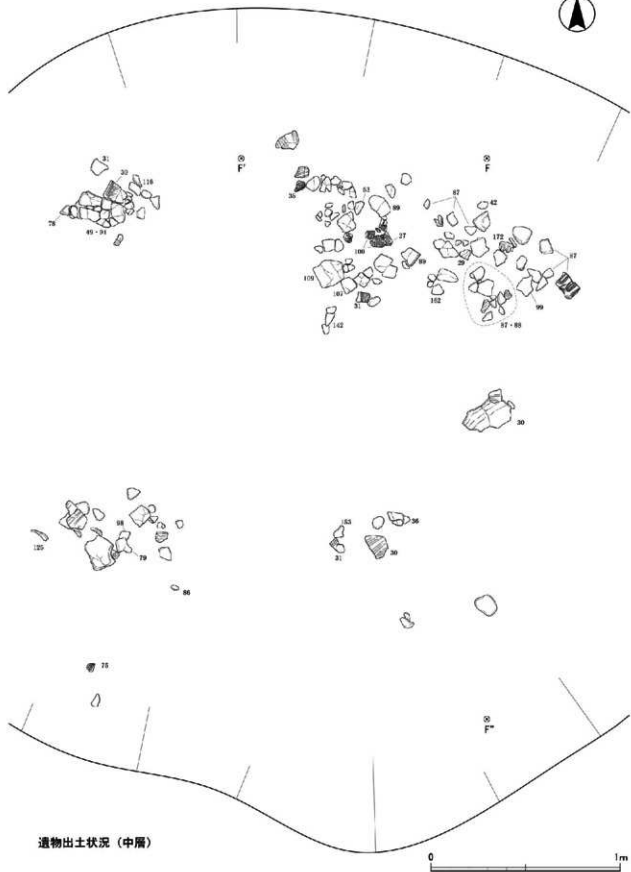
P3 遺物出土状況

SH191



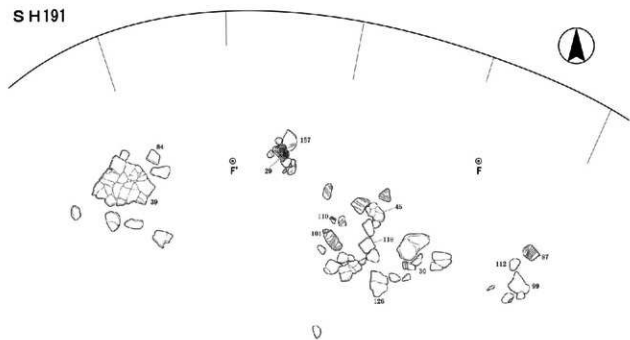
第17図 SH191③ (1/20)

SH191

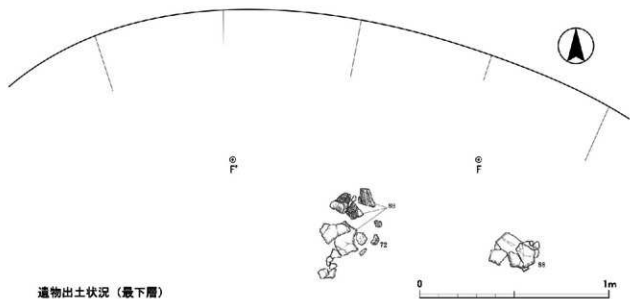


第18圖 SH191④ (1/20)

SH191



遺物出土状況 (下層)



遺物出土状況 (最下層)



第19圖 SH191⑤ (1/20)



まれていた。こうした遺物出土状況に加えて、0.2 mという遺構の浅さもあって、遺構埋土の分層を十分に行うことができなかった。そのため、これらの遺物については層位別の取り上げを断念し、大きく上層と中層の二段階に分けて記録と取り上げを行った(第17・18図)。そして、中層の遺物の直下で検出された比較的大きな土器の破片は、下層・最下層出土遺物として、別途記録と取り上げを行った(第19図)<sup>31-4)</sup>。なお、図化した遺物については出土したレベルをすべて記録している。出土した縄文土器は整理段階でかなり接合し、複数の深鉢や浅鉢、台付深鉢、台形土器が含まれていることが判明している。

これらの縄文土器のうち、多数の破片が出土した個体についてみると、建物内に破片が広く散在する状況のものが多い(30・31・37・76・87など)。破片がややまとまった範囲から出土した個体もあるが(75・84・89など)、形は保っておらず、破片化した状態で埋没したことが窺われる。また、層位化にみると、上層と中層の両方から破片が出土しているものが多く、上層から下層にかけて破片が出土したものもある(29・30・87など)。さらには、上層から最下層にかけて破片が出土している個体も認められる(88)。また、多数の破片が出土した個体に限ると、中層以下のみから出土したものは、確実には確認できない。こうしたことからみると、上層から最下層にかけての土器群に、堆積における大きな時間差は考えがたい。

縄文土器以外にも、石鏃や石錐、磨製石斧、切目石錘、磨石、敲石、石皿(台石)といった石器類が複数出土した。主に上層から、縄文土器に混じって散在的に出土している。

床面付近の埋土については土壌を水洗し篩がけして、微細な遺物の回収に努めた。それによって、黒曜石やサヌカイト、下呂石の剥片が多数検出された。これらの剥片は長さ数mm程度の微細なものが多いが、中には長さ1~2cm程度のものも含まれていた。また、この篩がけによってナイフ形石器と思われる石器も検出されている。

この他、炉や建物内のピットから縄文土器が出土しており、主柱穴P2からは縄文土器の他に切目石

錘も出土している。

埋土中や炉、主柱穴から出土した遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

**SH193/303(第20図)** 第2次調査区の北東端で検出した建物で、北端の一部は第3次調査で検出されている。明確な竪穴建物状の掘り込みは検出されなかったが、炉の痕跡と考えられるSF266が検出され、またその周囲が広く浅い落ち込み状に窪んでいる様子が確認された。そのため、さらに周囲を精査した結果、主柱穴と考えられるピットを検出したことから、建物として把握した。平地式建物の可能性も考えられる。建物の範囲は不明確であるが、径5.3mほどの円形にほぼ等間隔に小型のピットが並ぶ様子が認められるため、これが建物の範囲を示している可能性が高い。

主柱穴と思われるピットは3基検出され、また土坑SK270とした遺構も主柱穴の可能性がある。これら4基の主柱穴は、南北の柱間がやや長い長方形に並ぶ。

炉は、先述したSF266がその痕跡と思われる。西側の主柱穴間において検出された。浅い土坑で、底面が被熱しており、埋土中に焼土塊を含む。

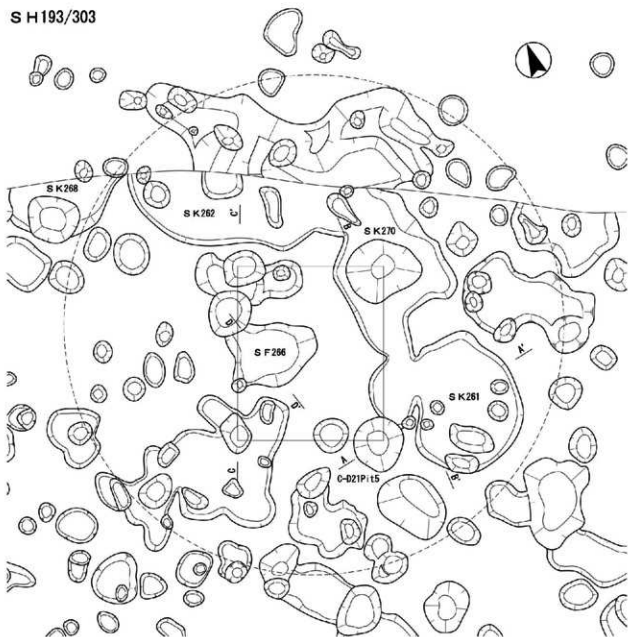
この他、壁際溝や貼床など建物に伴う遺構は確認できなかった。

遺物は、SF266や建物内の落ち込みと考えられるSK261、主柱穴の可能性のあるSK270などから縄文土器が出土している。その他にも、建物内と思われる範囲で縄文土器や礫器と思われる石器が出土した。

出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

**SH248(第21図)** 第2次調査区の北東部で検出した建物で、遺存状況は良好である。SB292と重複しており、壁面の一部が後出するSB292の柱穴によって壊されている。平面形は長軸3.5m、短軸3.4mの円形に近い隅丸方形を呈し、深さも0.35mほど遺存する。

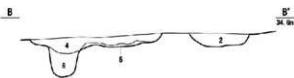
主柱穴は4基検出した。床面には他に目立ったピットはなく、柱痕と考えられる痕跡も確認されており、確実に主柱穴と判断できるものである。いずれも壁際に位置しており、北側の柱間がやや狭いため、柱



A' 34 cm

## 【A-A' 断面】

1. 10YR2/1黒シルト、しまり中、粘生中
2. 10YR2/2暗黒腐植砂〜シルト、しまり強、粘性やや弱 (S K261堆土)
3. 10YR4/2赤〜黄褐色〜黒腐植砂、しまり強、粘性強 (S K261堆土)
4. 10YR2/1黒腐植砂〜シルト、しまり強、粘性中、腐植土層腐植片を多く含む (S K270堆土)
5. 10YR4/4黒腐〜黒腐植砂、しまり強、粘性強 (S K270堆土)
6. 10YR2/2黒腐植砂〜シルト、10YR4/4黄中〜黒腐砂を10%含む、しまりやや強、粘性やや弱 (柱穴堆土)
7. 10YR2/2黒腐植砂〜シルト、10YR4/4黄中〜黒腐砂を60%含む、しまり中、粘性やや弱 (柱穴堆土)



B' 34 cm



C' 34 cm



D' 34 cm

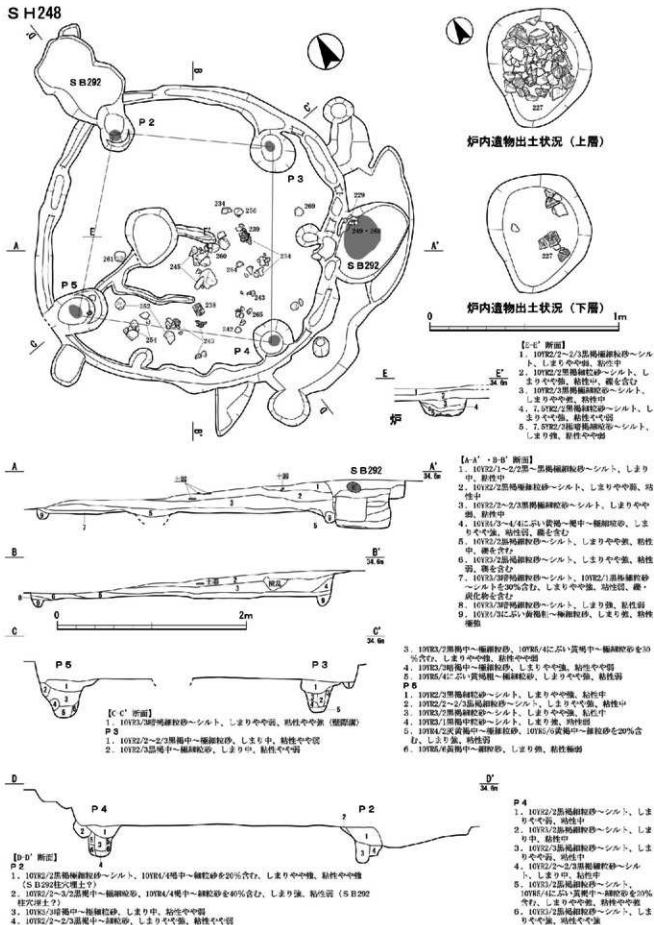
## 【D-D' 断面】

1. 10YR2/3暗黒腐植砂〜シルト、しまり強、粘性やや弱
2. 10YR2/3暗黒腐植砂〜シルト、10YR4/6暗黒腐植砂〜シルトを30%含む、しまりやや強、粘性中 (供土ブロック)
3. 10YR4/4暗黒腐植砂〜シルト、しまり強、粘性強

0 2m

第20図 SH193/303 (1/40)

S H248



第21図 SH248 (1/40、1/20)

の並びは台形を呈する。東側の壁付近には浅いピットが1基存在し、入り口に伴う施設の可能性も考えられる。

炉は建物中央よりやや西側で検出された。深さ0.2mほどの土坑で、埋土中にはあまり焼土塊は含まれていない。土坑の周囲から礫は検出されず、抜き取り痕も認められなかったため、地床炉であったと考えられる。ただし、土坑の壁面や床面には被熱した様子は確認できなかった。また、最下層付近から敷き詰められたような状態で縄文土器片が検出された。土器数炉とも考えられるが、検出された土器に明確な二次被熱は認められ、炉の廃絶に伴って入れられた可能性も考えられる。

遺物は、埋土中から縄文土器が多数出土した。複数個体の深鉢の他、浅鉢や台付深鉢が出土している。縄文土器以外にも、石織や打製石斧などの石器が出土した。

床面付近の埋土については土壌を水洗し篩がけして、微細な遺物の回収に努めた<sup>2)</sup>。それによって検出された遺物には、黒曜石の剥片や水晶片がある。黒曜石の剥片には長さ数mm程度の微細なものが多いが、中には長さ1～2cm程度のものも含まれていた。

また、炉からは先述のように破片が敷かれたような状態で縄文土器が出土した。

床面付近や炉から出土した遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

**S H301 (第22・23図)** 第3次調査区の東部の、第2次調査区との境界付近で検出した建物である。第2次調査では竪穴建物らしい痕跡を確認できておらず、第3次調査で壁際溝と思われる遺構や土器埋設炉S F310が検出されたことにより、建物の存在が認識された。平地式建物の可能性も考えられる。建物の範囲は不明確であるが、径5.4mほどの円形にほぼ等間隔に小型のピットが並ぶ様子が認められ、それに沿って壁際溝と思われるものも一部検出されたため、これが建物の範囲を示している可能性が高い。

主柱穴と思われるピットはいくつか検出されたが、いずれも浅く、主柱穴とは確定できない。

炉としては、建物中央より西側で土器埋設炉S F310が検出された。径0.45mほどの土坑内に体部下

半を除去して筒状にした縄文土器深鉢を倒立させて据えている。内部の最下層からは敷き詰められたような形で縄文土器片が多数検出された。炉体とされていた土器の破片だけでなく、別個体と思われる土器片も含まれる。いずれも明確な二次被熱が認められたいため、S H248の炉の事例と同じく炉の廃絶に伴って入れられたものとも考えられるが、土器片より上層の埋土中に焼土塊が顕著に含まれており(巻頭図版4)、土器片を敷き詰めた後にも炉として使用されていた可能性が高い。

壁際溝と思われるものは、東側と西側の一部で検出されている。推定される建物範囲と一致する箇所で見出されたため壁際溝の可能性を考えたが、不整形で確実とはいえないものである。西側のものはやや幅広であるが、東側のものは細く浅い。

遺物は、埋土中から縄文土器や磨製石斧などの石器が出土している。特に、S F310の北東側の床面付近では多数の縄文土器の破片が面的に検出されており、深鉢や台付深鉢がみられる。

また、炉であるS F310からは炉体とされていた縄文土器深鉢の他、内部に敷き詰められた状態で複数個体の縄文土器の破片が出土している。

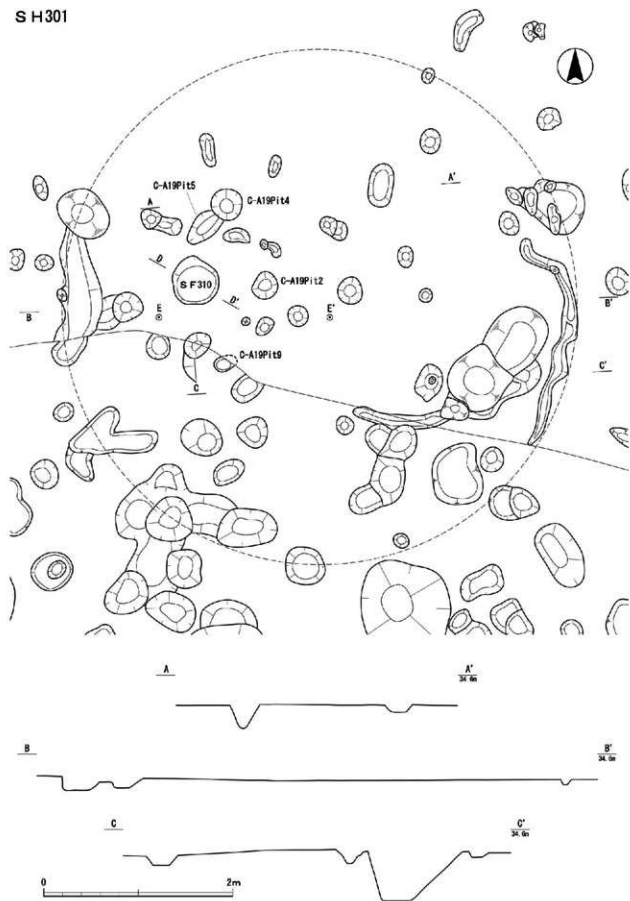
出土した遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

**S H335 (第24図)** 第3次調査区の中央部付近で検出した建物である。ほぼ全体が遺存しており、平面形は長軸4.4m、短軸4.2mほどの円形に近い隅丸方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。いずれも壁際に位置しており、南側の柱間がやや狭いため、柱の並びは台形を呈する。西側の主柱穴間にはピットがもう1基存在するが、建物と関係するものか不明である。また、攪乱により遺存状況が悪い北東の柱穴を除いて、各主柱穴は2基のピットが連結するような状況を示す。このことから、建物の建て替えが行われたものと考えられる。

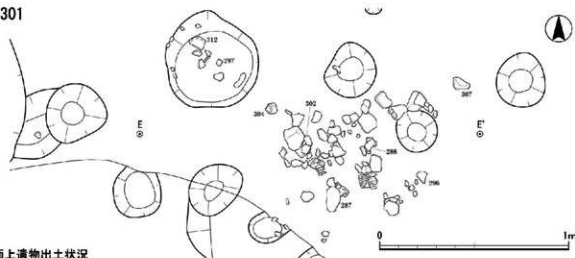
炉は建物中央よりやや西側で検出された。深さ0.4～0.5mほどの平面形が円形の土坑である。土坑の周囲から礫は検出されていない。壁面の中位が被熱しており、地床炉であったと考えられる。土層断面からみると、一度掘り直されている可能性がある

S H301

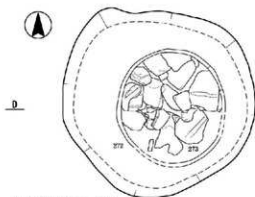


第22圖 S H301① (1/40)

S H301

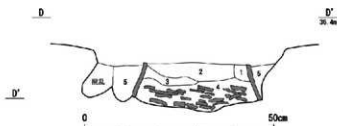


床面上遺物出土状況



土器埋設炉 S F310

第23図 S H301② (1/20、1/10)



1. 10122/3 黒色シルト～細粒砂、炭化物を多く含む
2. 7.5185/8 明色シルト～中粒砂、固く焼きしまる(粘土)
3. 7.5182/3 暗褐色シルト～細粒砂、粘土を含む
4. 10123/4 暗色シルト～中粒砂、1cmの礫を少量含む
5. 10123/5 暗色シルト～細粒砂

(第4層)。

壁際溝は、建物のほぼ全周にわたって検出された。深さ20cm程度のしっかりした溝である。部分的に2条程度が重複するような様子が認められ、1条にみえる部分についても、土層断面の観察からは掘り直しがあった可能性が窺われる(第7層)。こうした点は、主柱穴と同様に建物の建て替えがあったことを示すと思われる。

貼床は明確ではないが、地山直上に堆積した第5層は、建て替え前の建物に伴う壁際溝や炉の埋土(第6・8層)の上に堆積する一方で、炉の掘り直しに伴って掘り込まれているように見受けられるため、建て替えに伴って施された貼床とも考えられよう。

遺物は、炉から縄文土器の鉢が出土している。また、埋土中からは縄文土器の深鉢や浅鉢、敲石などの石器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末

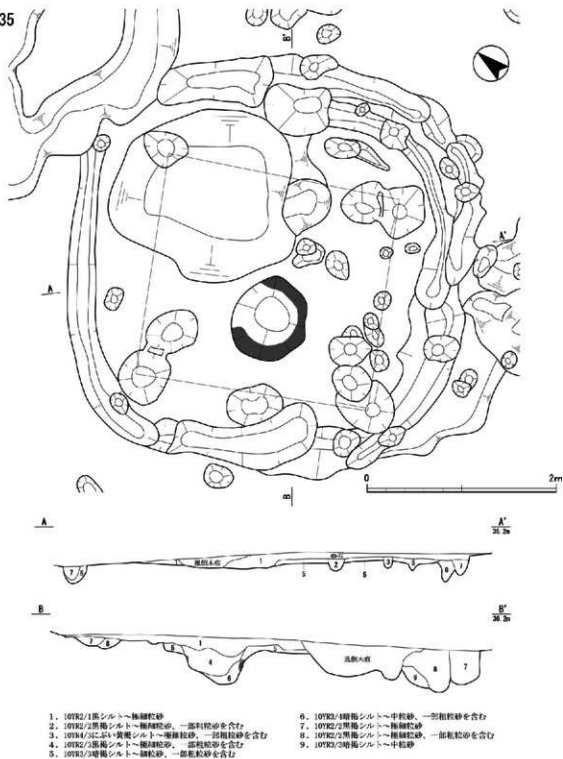
葉と考えられる。

**S H344 (第25図)** 第3次調査区の北部で検出された建物である。古墳時代前期の堅穴建物 S H339 とほぼ全体が重複しており、遺存状況はあまり良好ではない。ただし、建物の東西で壁際溝が明瞭に検出されており、平面形は径4.9mほどの円形ないし隅丸方形を呈すると考えられる。

主柱穴は4基検出された。いずれも大型のしっかりしたピットで、南北の柱間がやや長い長方形に並ぶ。南西隅の柱穴では柱痕ないし柱の抜き取り痕と考えられる土層も確認された。

炉としては、建物中央やや西側で、浅い土坑状の S F343 が検出された。径1mほどの大型の土坑であるが、深さは0.1～0.2mほどで、底面が被熱している。地床炉と考えられるが、側面には被熱が認められず、また炉内から被熱した礫が数点検出されたことなどから、石囲炉の石が抜き取られたもの

SH335



第24図 SH335 (1/40)

の可能性もある。

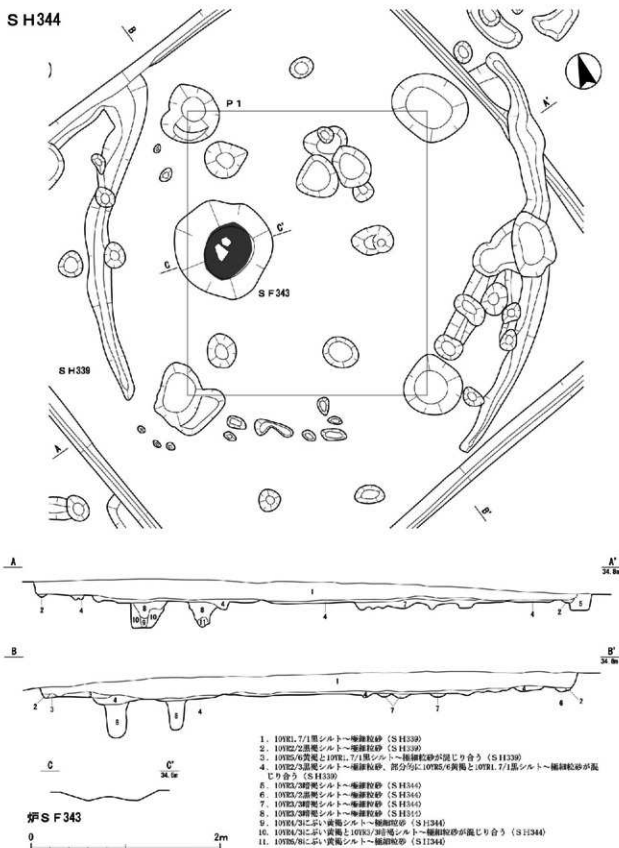
壁際溝は建物の東西で検出された。緩い弧状にめぐり、比較的しっかりした溝である。建物の南北では検出されなかったが、元から掘られていなかったのか、SH339による削平で失われたのかは明らか

ではない。

貼床は明瞭には確認できなかったが、地山直上に凹凸を埋めるように堆積した第7層などはこの建物に伴う貼床の可能性があるだろう。

遺物は、炉SF343から縄文土器の破片が出土し

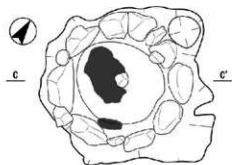
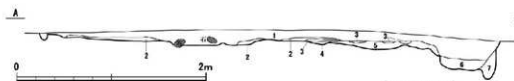
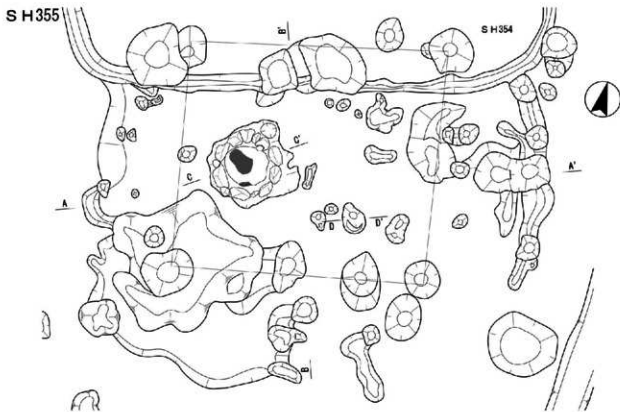
S H344



第25図 SH344 (1/40)



SH355



石圍炉



石材種別



【C-C' 断面】

- 7.5122/1黒燐細粒砂〜シルト、しまり強、粘性やや弱
- 7.5123/1黒燐細粒砂〜シルト、しまりやや強、粘性やや弱、～5mmの礫(加熱?)を少量含む
- 7.5123/4砂燐細粒砂〜シルト、しまりやや強、粘性やや弱、～3mmの礫を少量含む

【A-A'・B-B' 断面】

- 10YR2/1黒燐細粒砂〜シルト、しまり強、粘性やや弱、～3mmの礫を少量含む
- 10YR4/4黒燐細粒砂〜シルト、10YR2/2黒燐細粒砂〜シルトを30%含む、しまり強、粘性やや弱(弱粘土)
- 10YR4/4黒燐細粒砂〜シルト、しまり中、粘性弱、～3mmの礫を少量含む
- 10YR4/4黒燐細粒砂〜シルト、10YR2/2黒燐細粒砂〜シルトを30%含む、しまり強、粘性やや弱
- 10YR2/2黒燐細粒砂〜シルト、しまりやや強、粘性やや弱
- 10YR2/2黒燐細粒砂〜シルト、しまりやや強、粘性中
- 10YR2/1黒燐細粒砂〜シルト、しまりやや強、粘性中



埋設土器

- 【D-D' 断面】
- 10YR2/1黒シルト〜細燐細砂



第26図 SH355 (1/40、1/20、1/10)

ている。埋土中からも縄文土器の比較的大きな破片が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

**S H355 (第26図)** 第3次調査区の北部で検出された建物で、S H344の少し西側に位置する。北側の一部は古墳時代前期の竪穴建物S H354によって削平を受けており、全体の形状はやや不明確であるが、平面形は長軸4.8mほどの隅丸方形を呈すると考えられる。

主柱穴は4基検出された。うち2基はS H354内部で検出されている。4基のピットは東西の柱間がやや長い長方形に並ぶ。

炉としては、建物中央よりやや西側で石囲炉が1基検出された。径0.9mほどのすり鉢状に掘り込んだ土坑の壁に沿って長径20cmほどの礫を並べている。礫を据え付ける際には、土坑の壁を若干掘削し、また裏込め土を入れるなどして安定を図っているようである。使用されている礫は亜角礫で、主に溶結凝灰岩などの湖東流紋岩類、ホルンフェルス、花崗岩が使用されている。その隙間を埋めるように、小型のチャートの円礫などが配置されている。いずれの石材も付近で採取できるもので、調査区内の地山にも段丘礫として含まれているものである。炉の床面中央は明瞭に被熱している。また、炉の埋土上面から華大の灰白色チャートの円礫が1点検出された。ほぼ炉の中央に位置しており、意図的に置かれた可能性が高い。炉内の埋土に人為的に埋め戻された痕跡を明瞭に看取することはできない点が問題ではあるが、炉の廃絶に伴って置かれたものと考えておきたい<sup>4)</sup>。

また、建物中央部からは埋設土器が1基検出された。縄文土器深鉢(339)を土坑内に正位に据えている。土坑の大きさはほぼ深鉢と同規模である。深鉢の上半部は欠損しているが、意図的に除去したものは不明である。

壁際溝は建物東側で検出された。建物西側にもごくわずかに壁際溝の可能性のある遺構が検出されているが、東側のものに比べてかなり浅く、違和感がある。建物西半部では全体的に浅い落ち込みが検出されており、建物に伴う掘り込みとみられるが、こ

の部分では壁際溝が検出されていないことから、壁際溝は元から一部に掘られていた可能性が高い。

地山直上では、貼床と考えられるものが認められた(A-A'・B-B'断面第2層)。建物内のかなり広い範囲に施されている。

遺物は、埋土中から縄文土器や石器が出土している他、埋設土器として縄文土器深鉢が出土している。炉からも縄文土器片が出土している。

また、炉の埋土については土壌を水洗し篩がけして、微細な遺物の回収に努めた。篩がけによって検出された遺物には黒曜石やササカイト、チャートの剥片がある(巻頭図版5・6)。剥片は微細なものが多いが、ササカイトやチャートに比べて黒曜石がかなり多く出土している。

埋設土器や出土した遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

**S H360 (第27図)** 第3次調査区の北西部で検出した建物である。調査区の壁際で検出され、半分以上が調査区外に出ている状況であったが、調査区外の部分も工事によって影響を被るため<sup>1)</sup>、調査区を部分的に拡張して全体を調査した。遺存状況が悪く、全体の形状は不明瞭であるが、壁際溝の可能性のある遺構や浅い落ち込み、壁際に並ぶと思われる小型のピットの存在などからみて、径4.4mほどの円形に近い平面形を呈するものと考えられる。

主柱穴と思われるピットはいくつか検出されたが、きれいに並ぶ様子が認めがたく、いずれも明確に主柱穴と判断する根拠に乏しい。

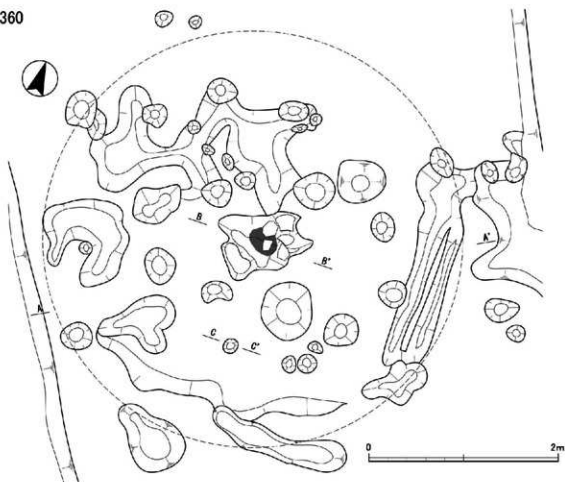
炉としては、建物ほぼ中央で石囲炉と思われるものを検出した。遺存状況が悪く、不整形な土坑の内部に長径10~20cm程度の礫が散在する状況であり、石囲炉ではなく地床炉の可能性もある。土坑の中央部床面は被熱している。

壁際溝は、建物東側で確認された。2条に並んでいるようにも見受けられるが、土層の堆積状況からみて外側の溝は上部からの掘り込みである可能性もある。建物内部には他にも浅い掘り込みがみられたが、壁際溝はごく一部でしか確認されなかった。

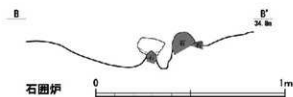
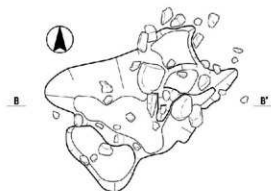
貼床は明確には確認できなかった。

また、建物の中央よりやや南側で、縄文土器深鉢

SH360



1. 10182/1 厚層編砂礫砂へシルト、しまり中、粘性やや弱（表上）
2. 10182/2 厚層編砂礫砂へシルト、しまり強、粘性中
3. 10183/2 厚層編砂礫砂へシルト、10184/4 長中粒砂へ編砂礫砂を定状に30%含む、しまりやや強、粘性やや弱
4. 10183/1 厚層編砂礫砂へシルト、10184/4 長中粒砂へ編砂礫砂をブロック状に5%含む、しまりやや強、粘性中（埋跡層）



石囲炉

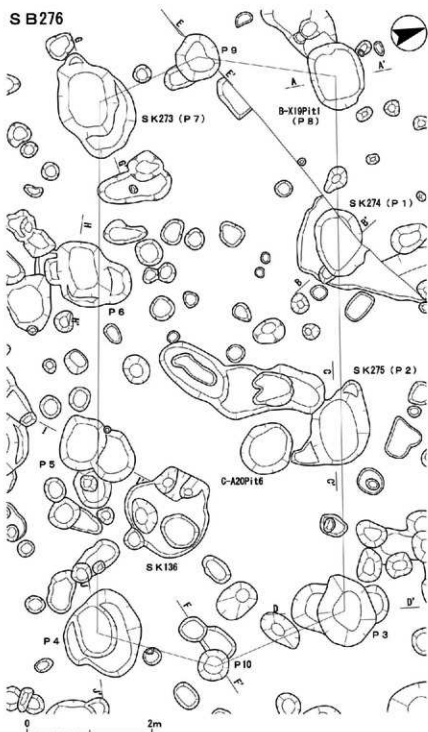


0 50cm

遺物出土状況

第27図 SH360 (1/40、1/20、1/10)

SB276



A A' 34.8m

- 【A-A' 断面】
1. 10782/2黒褐色細粒砂～シルト、しまりや中強、粘性中(柱状)
  2. 10782/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性強
  3. 10783/2黒褐色細粒砂～シルト、10784/6褐色細粒砂～シルトを少量含む、しまりや中強、粘性中(断面埋土)
  4. 10782/2黒褐色細粒砂～シルト、10783/2灰褐色細粒砂～シルトを少量含む、しまり弱、粘性中
  5. 土層位記認なし

B B' 34.8m

- 【B-B' 断面】
1. 10783/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中(断面埋土)
  2. 10782/3-2/3黒褐色～暗褐色細粒砂～シルト、しまりや中強、粘性中、炭化塊をわずかに含む(柱状)
  3. 10784/3にふい貴泥層～細粒砂、しまりや中強、粘性弱(断面埋土)
  4. 10784/4腐層～細粒砂、しまり弱、粘性弱(断面埋土)
  5. 10782/3-4/3暗褐色～灰貴泥層～暗褐色細粒砂、しまり強、粘性弱(断面埋土)
  6. 10782/3-3/3黒褐色～暗褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性や中強(断面埋土)
  7. 10782/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性や中強(断面埋土)
  8. 2.810/4Cにふい暗シルト、10782/2黒褐色シルトを下部に含む、しまり強、粘性強

C C' 34.8m

- 【C-C' 断面】
1. 10782/2黒褐色細粒砂～シルト、粗～中粒砂を含む、しまりや中強、粘性中、燧文土跡片・炭化物を含む(柱状)
  2. 10784/3にふい貴泥層～細粒砂、10785/6黄褐色シルトを多く含む、しまり強、粘性や中強(ブロック状)
  3. 10783/2暗褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性や中強(断面埋土)
  4. 10782/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中(断面埋土)
  5. 10782/2-2/3黒褐色細粒砂～シルト、10785/6黄褐色細粒砂～シルトを35%含む、しまり中、粘性中(断面埋土)
  6. 10782/2-2/3黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中(断面埋土)
  7. 10785/6黄褐色にふい貴泥層～貴泥層～細粒砂、しまり強、粘性弱(断面埋土)
  8. 10782/2-2/3黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中(断面埋土)
  9. 10782/2暗褐色細粒砂～シルト、10785/6黄褐色細粒砂～シルトを10%含む、しまり中、粘性中(断面埋土)
  10. 10783/2暗褐色細粒砂～シルト、10785/6黄褐色細粒砂～シルトを20%含む、しまり中、粘性中(断面埋土)
  11. 10785/4にふい貴泥層～暗褐色細粒砂、10782/2黒褐色細粒砂～シルトを35%含む、しまりや中強、粘性弱(断面埋土)
  12. 10782/2-2/3黒褐色細粒砂～シルト、10785/6黄褐色細粒砂～シルトを25%含む、しまり中、粘性や中強(断面埋土)
  13. 10783/2暗褐色細粒砂、しまり強、粘性強
  14. 10784/4腐層～細粒砂、しまり弱、粘性弱、粘性強
  15. 10782/1-2/2黒褐色～黒細シルト、しまりや中強、粘性強

D D' 34.8m

- 【D-D' 断面】
1. 10785/6にふい貴泥層中～細粒砂、2.817/2黄褐色土と10788/4Cにふい貴泥層細砂を含む、しまり強、粘性弱
  2. 10782/2-2/3黒褐色細粒砂～シルト、粗～中粒砂を少量含む、しまりや中強、粘性中
  3. 10784/3にふい貴泥層～暗褐色細粒砂、しまりや中強、粘性弱
  4. 10783/2暗褐色～暗褐色細粒砂、しまり強、粘性弱
  5. 10784/4腐層～暗褐色細粒砂、しまり強、粘性弱
  6. 10786/4Cにふい貴泥層～細粒砂、しまり強、粘性弱
  7. 10781/7土シルト、10784/4暗シルトをブロック状に含む、しまり強、粘性強

第28図 SB276① (1/60、1/50)

# SB276



第29図 SB276② (1/50)

の底部 (348) がピット内に伏せて入れられた状態で出土した。出土した深鉢は底部がほぼ完存しているが、体部や口縁部の破片はピット内から出土しなかった。

遺物は、炉から縄文土器や石皿 (白石) が出土している。埋土中からも葎石などの石器が出土した。また、先述のようにピット内から縄文土器深鉢の底部が出土している。

炉から出土した遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

## (2) 掘立柱建物

SB276 (第28・29図) 第2次調査区の北東部で

検出した大型の掘立柱建物で、小牧南遺跡で検出されたものの中では最大級である。北西隅の柱穴及びその東側の柱穴の一部が第2次調査区の外に出ており、第3次調査において確認された。

建物主軸線上の両側に棟柱状の柱が存在し、平面形は細長い六角形を呈する<sup>\*)</sup>。棟柱柱による張り出しは両辺とも同程度であるが、棟柱柱はいずれも建物の主軸線からは若干南に寄った位置にある。桁行8.4m<sup>\*)10)</sup>、梁行3.9m、棟柱柱の張り出しを含む長さ9.7mの建物である。

桁行は4基の柱穴からなる。柱間は2.7～3.0m前後である。柱穴はかなり大きく、長径1mを超える土坑状を呈する。そのため、当初は土坑として認識

し、個別に遺構番号を付与していた。SK274 (P1)・275 (P2) など多くの柱穴で柱痕なし柱の抜き取り痕と考えられる土層が確認されている。SK275 (P2) の土層断面をみると、柱穴を柱の太さよりかなり大きく掘り、底面に整地土を施した上に柱を据え、丁寧に裏込めを施して柱を固定していることが窺える。柱穴がやや不整形なSK273 (P7) などでは柱痕と思われる土層は確認できず、

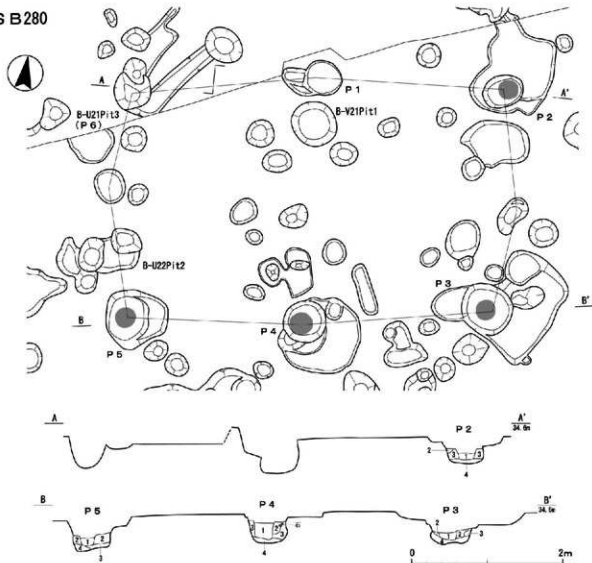
柱が抜き取られた可能性も考えられる。

一方、棟持柱の柱穴は他の柱穴に比べて小型で浅く、構造上の機能が他の柱とは異なっていたものと推定できる。

建物内部には縄文時代の遺構と考えられるSK136が存在するが、時間的な前後関係は不明であり、当該建物に伴う遺構か判然としない。

遺物は、SK275 (P2) やP3など複数の柱穴

### SB280



#### P2

1. 10YR2/2黒褐色～黒褐色砂、しまりやや泥、粘性やや弱
2. 10YR2/3黒褐色～黒褐色砂、しまりやや泥、粘性中
3. 10YR2/3～3/3黒褐色～暗褐色～黒褐色砂、10YR4/4褐色～黒褐色砂を30%含む、しまり強、粘性弱
4. 10YR2/1～2/2黒～黒褐色～黒褐色砂、しまりやや強、粘性中
5. 10YR5/6～6/6黄褐色～中砂、しまりやや強、粘性弱

#### P3

1. 10YR2/2黒褐色～黒褐色砂、しまりやや弱、粘性やや弱
2. 10YR2/3～3/3黒褐色～暗褐色～黒褐色砂、10YR4/4褐色～中砂を10%含む、しまり強、粘性弱
3. 10YR4/4褐色～黒褐色砂、しまり強、粘性弱
4. 10YR2/1～2/2黒～黒褐色～黒褐色砂、しまりやや強、粘性やや弱

#### P4

1. 10YR2/3黒褐色～黒褐色砂、10YR4/4褐色砂を10%含む、しまり強、粘性弱
2. 10YR2/3～3/3黒褐色～暗褐色～黒褐色砂、しまり強、粘性弱
3. 10YR2/2黒褐色～黒褐色砂、10YR4/4褐色砂を30%含む、しまり強、粘性弱
4. 10YR2/1～2/2黒～黒褐色～黒褐色砂、しまりやや強、粘性やや弱

#### P5

1. 10YR2/2黒褐色～黒褐色砂、しまりやや弱、粘性弱
2. 10YR2/3黒褐色～黒褐色砂、10YR4/4褐色～黒褐色砂をブロック状に含む、しまり強、粘性弱
3. 10YR2/3～3/3黒褐色～暗褐色～黒褐色砂、10YR4/4褐色～黒褐色砂をブロック状に含む、しまり強、粘性弱
4. 10YR2/1～2/2黒～黒褐色～黒褐色砂、しまりやや強、粘性やや弱

第30図 SB280 (1/50)

から縄文土器が出土している。SK273(P7)からは尖頭器とも考えられる石器が出土した。

柱穴の出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

**SB280(第30図)** 第2次調査区の北東部で検出した掘立柱建物である。北西側の柱穴のみは第2次調査区の外に出ており、第3次調査において確認された。

建物主軸線上の両側には棟持柱の柱が存在し、両側へと張り出している。また、柱穴の並びや柱痕の検出位置からみると、桁行の中央の柱が南北ともに若干外側に張り出していると思われる。こうした張り出しのため、平面形は細長い八角形状を呈する。棟持柱による張り出しは両辺とも同程度である。桁行4.9m、梁行3.0m、棟持柱の張り出しを含む長さ5.4mの建物である。

桁行は3基の柱穴からなる。柱間は2.5m前後である。柱穴は比較的しっかりしており、径0.5~0.6mほどある。中央の外側へ張り出している柱穴も同様であり、他の柱穴と規模や深さに差はない。P2~5ではいずれも柱痕ないし柱の抜き取り痕と考えられる土層が確認できた。柱穴の土層断面からみると、柱を据える前に整地土が施されているものと考えられる(P2第4層、P4第4層など)。

一方、棟持柱の柱穴は他の柱穴に比べて小型で浅く、構造上の機能が他の柱とは異なっていたものと推定できる。

なお、P2~4では柱穴の周囲に浅い落ち込みが認められた。他の掘立柱建物でも同様の事例が確認でき、建物と関係するものと考えられるが、性格は不明である。

遺物は、P4・6から縄文土器深鉢が出土している。また、建物範囲内に位置するピットからも縄文土器や石器が出土した。

柱穴の出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

**SB285(第31・32図)** 第2次調査区の北東端で検出した、大型の掘立柱建物である。SB276と並んで小牧南遺跡で検出されたものの中では最大級である。

建物主軸線上の両側に棟持柱状の柱が存在し、平

面形は細長い六角形を呈する。棟持柱による張り出しは両辺とも同程度である。桁行8.3m、梁行3.1m、棟持柱の張り出しを含む長さ9.5mの建物である。

桁行は4基の柱穴からなる。柱間は3.0m前後であるが、中央の柱間のみはやや狭く、2.2~2.5m前後である。柱穴はかなり大きく、桁行のものは長径0.5~1m程度の土坑状を呈する。北面と南面でやや柱穴の大きさが異なっており、北面では長径0.5~0.7mほどであるが、南面では長径1mを超えるような大きさのものが多く、P5では柱穴内から大きな礫が検出されているが、検出された層位などからみて、根石ではなく柱を抜き取った後に入れられたものと考えられる。P8も土層の堆積状況などから柱が抜き取られた可能性が高く、北面と南面の柱穴の大きさの差は、柱の抜き取りによって生じた可能性が高い。また、P2・4・5などの土層断面をみると、底面に整地土を施した上に柱を据えたと考えられる。

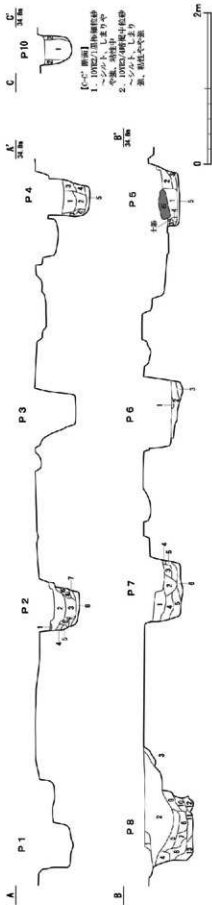
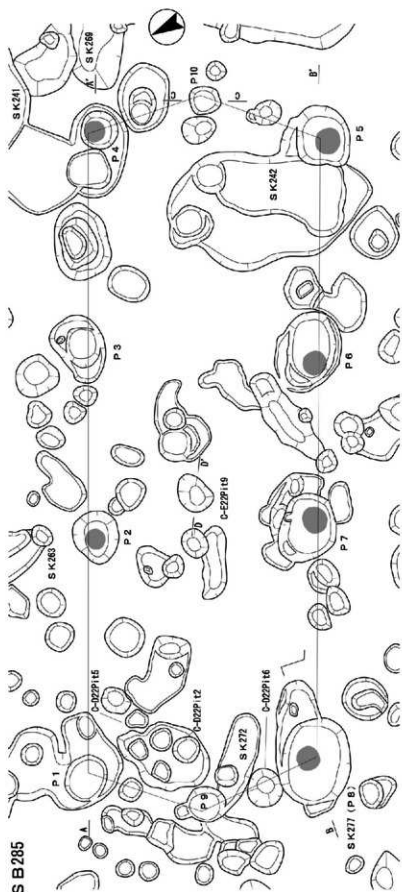
一方、棟持柱の柱穴は他の柱穴に比べて小型で浅い。P10では柱痕ないし柱の抜き取り痕と考えられる土層が確認でき(P10第1層)、実際に柱が立てられていたことが窺える。ただし、柱を据える前の整地土は確認できず、柱の据え方も桁行の柱穴と異なる。構造上の機能が他の柱とは異なっていたものと推定できる。

建物内部からは、縄文時代の遺構と考えられるSK242が検出されているが、位置やP5との重複関係から、柱の抜き取りに関係するものである可能性が考えられる。また、同じく建物内部の両方の棟持柱を結ぶライン上で、縄文時代のピットと考えられるC-E22Pit9が検出されているが、建物の柱穴よりも浅く、桁行の位置ともずれているため、当該建物に伴う遺構か判然としない。

この他にも、周辺にはSK241・263・269・272などいくつかの縄文時代の土坑が検出されている。いずれも不整形な浅い落ち込み状のもので、当該建物との関係は不明であるが、縄文時代の遺構がかなり密集する状況であり、建物周辺での活動に伴う遺構である可能性も考えられよう。

遺物は、P1・2・4など多くの柱穴から縄文土器や石器が出土している。

S B 285



【C-C' 断面】  
 1. 土質の異なる層の境界線  
 2. 土質の異なる層の境界線  
 3. 土質の異なる層の境界線  
 4. 土質の異なる層の境界線  
 5. 土質の異なる層の境界線  
 6. 土質の異なる層の境界線  
 7. 土質の異なる層の境界線  
 8. 土質の異なる層の境界線  
 9. 土質の異なる層の境界線  
 10. 土質の異なる層の境界線  
 11. 土質の異なる層の境界線

第31図 S B 285① (1/50)



## S B285

【a' 断面】

P2

1. 10YR4/4褐色細砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
2. 10YR2/2黒褐色細砂～シルト、堆山を粒状に10%含む、しまり中、粘性中
3. 10YR2/2～3/2黒褐色細砂～シルト、しまり中、粘性やや強（凝結土）
4. 10YR2/2黒褐色細砂～シルト、堆山をブロック状に30%含む、しまりやや強、粘性中（凝結土）
5. 10YR2/1～2/2黒～黒褐色細砂～シルト、しまりやや強、粘性強（凝結土）
6. 10YR2/3～5/3黄褐色細砂～シルト、しまり中、粘性やや強（凝結土）
7. 強、粘性強（凝結土）
8. 10YR2/4～6/4暗褐色～黒褐色細砂～シルト、堆山を粒状に20%含む、しまりやや強、粘性強（凝結土）
9. 10YR2/1～3/1黒～黒褐色細砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強

P4

1. 10YR2/2黒褐色細砂～シルト、しまり中、粘性中、炭化物を含む（粒状）
2. 10YR2/2～3/2黒褐色細砂～シルト、しまり中、粘性中（粒状）
3. 10YR2/2～3/2黒褐色細砂～シルト、堆山を粒状に30%含む、しまりやや強、粘性中（凝結土）
4. 10YR2/2細砂～シルト、しまりやや強、粘性中（凝結土）
5. 10YR2/1黒褐色細砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強



【D-D' 断面】

1. 10YR2/1～2/2黒～黒褐色細砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
2. 10YR2/2黒褐色細砂～シルト、しまりやや強、粘性中
3. 10YR3/2暗褐色細砂～シルト、堆山を10%含む、しまりやや強、粘性強
4. 10YR3/2黒褐色細砂～シルト、堆山を30%含む、しまり強、粘性強



第32図 S B285② (1/50)

柱穴の出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

**S B287 (第33図)** 第2次調査区の北東部で検出した掘立柱建物である。SH248・SB292のすぐ南側に隣接する。

棟持柱状の柱は検出されなかったが、北隅の柱穴(P1)がやや北西側にずれているため両側の桁行の長さに差が生じており、平面形は直角台形を呈する。長い方の桁行5.2m、短い方の桁行4.6m、梁行3.1mの建物である。

桁行は3基の柱穴からなる。柱間は2.3m前後であるが、長い方の桁行の西側の柱間のみ2.9m前後である。柱穴はSB276に比べるとやや小型であるが、直径0.5～0.7mほどのしっかりしたものである。P3～5では、柱痕ないし柱の抜き取り痕と考えられる土層が確認されている。P4などの土層断面をみると、底面に整地土を施した上に柱を据えたと考えられる。P1やP2では柱穴の上面に浅い掘り込みが認められた。P2では柱穴からこの浅い掘り込みにかけて縄文土器片が複数出土しており、おそらく柱の抜き取りに関わるものと考えられる。また、

【B' 断面】

P5

1. 10YR2/2～3/2黒褐色細砂～シルト、しまり中、粘性中（粒状）
2. 10YR2/2黒褐色細砂～シルト、しまりやや強、粘性中（凝結土）
3. 10YR2/4～6/4暗褐色～黒褐色細砂、堆山を粒状に30%含む、しまり強、粘性中（凝結土）
4. 10YR2/6暗褐色細砂～シルト、堆山を粒状に10%含む、しまりやや強、粘性中（凝結土）

P6

1. 10YR2/2～3/2黒褐色～黒褐色細砂～シルト、堆山をブロック状に30%含む、しまり強、粘性強
2. 10YR2/1黒シルト、しまり強、粘性強
3. 10YR2/3～4/2暗褐色～黒褐色細砂、しまりやや強、粘性弱

P7

1. 10YR2/2黒褐色細砂～シルト、堆山を粒状に3%含む、しまり中、粘性中
2. 10YR2/2黒褐色細砂～シルト、しまりやや強、粘性中
3. 10YR2/2黒褐色細砂～シルト、しまり中、粘性中（凝結土）
4. 10YR2/2～3/2黒褐色細砂～シルト、堆山をブロック状に10%含む、しまりやや強、粘性中（凝結土）
5. 10YR2/1～2/2黒～黒褐色細砂～シルト、堆山を粒状に20%含む、しまり強、粘性やや強（凝結土）
6. 10YR2/1黒シルト、しまり強、粘性強

P8

1. 10YR2/3～5/3黄褐色～暗褐色細砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
2. 10YR2/2黒褐色細砂～シルト、しまり中、粘性中、炭化物・縄文土器片を含む
3. 10YR4/3～5/3黄褐色～暗褐色細砂～シルト、しまりやや強、粘性中
4. 10YR5/黄褐色～暗褐色細砂、しまりやや強、粘性中
5. 10YR2/3～5/3黄褐色～暗褐色細砂～シルト、10YR4/4弱中～細砂を含む、しまり中、粘性やや強
6. 10YR2/2～2/2黒褐色細砂～シルト、しまり中、粘性中
7. 10YR2/2黒褐色細砂～シルト、しまり中、粘性中、褐色粒子を含む
8. 10YR2/2～3/2黒褐色細砂～シルト、しまり中、粘性中、褐色粒子を含む
9. 10YR2/3～4/2暗褐色～黄褐色～暗褐色、しまりやや強、粘性弱
10. 10YR4/3～4/3黄褐色～暗褐色細砂、しまり強、粘性弱
11. 10YR3/3弱中～暗褐色細砂、10YR5/6弱黄褐色細砂を含む、しまりやや強、粘性やや強
12. 10YR3/3弱中～暗褐色細砂、10YR5/6弱黄褐色シルトを含む、しまりやや強、粘性やや強
13. 10YR2/3～2/2黒褐色～黒褐色シルト、しまりやや強、粘性強、褐色粒子を含む

P4ではやはり柱の抜き取りに関係すると思われる土坑状のもの（SK293）が隣接して掘り込まれているが、その上層からは複数の礫がまとまって出土しており、意図的に入れられたものと推定される。

遺物は、SK286（P2）やP4・6から縄文土器が多数出土している。

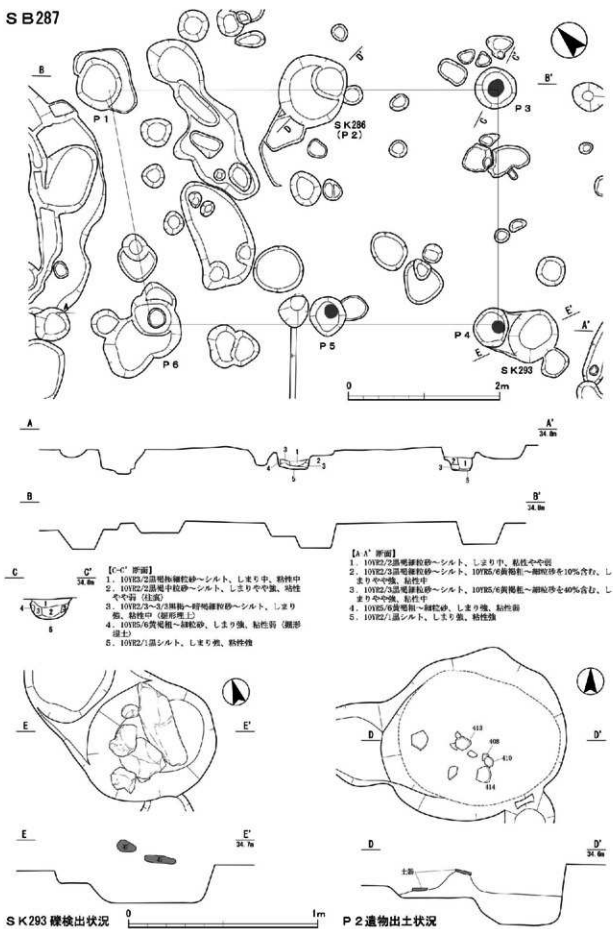
柱穴の出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。ただし、SH248・SB292とは非常に近接するため、これらの建物との同時並存は考えにくく、若干時期が異なる可能性が高い。

**SB292 (第34図)** 第2次調査区の北東部及び、第3次調査区の東側で検出した掘立柱建物である。

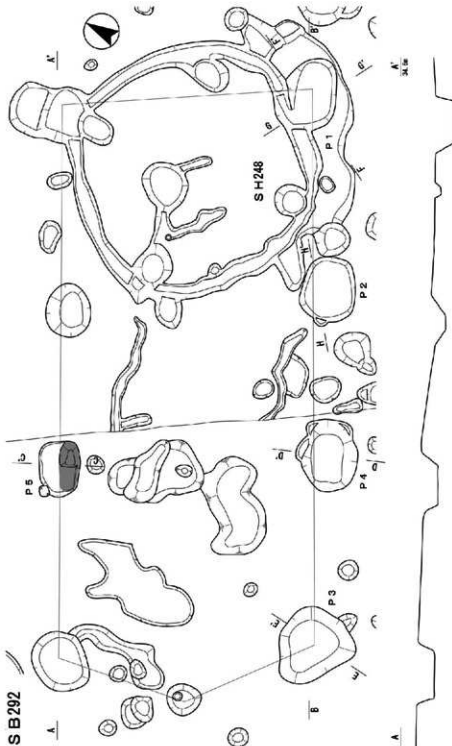
S B276・285に次いで大型である。SH248と重複しており、SH248の廃絶後、その一部を壊して柱穴が掘り込まれている。ただし、柱穴の大部分はSH248の壁面より外側に掘り込まれており、意図的にSH248内部への柱の設置を避けた可能性が高いと思われる<sup>10)</sup>。

建物主軸線上の片側に棟持柱状の柱が存在し、平面形は細長い五角形を呈する。桁行7.4m、梁行3.4m、棟持柱の張り出しを含む長さ5.0mの建物であ

SB287



第33図 SB287 (1/50、1/20)

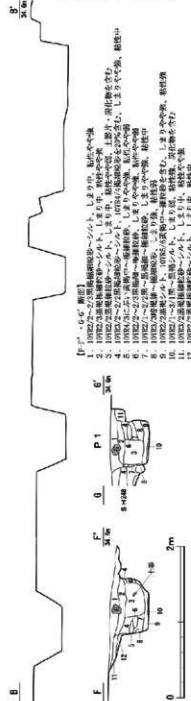


【C-C' 断面】  
 1. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 2. 10183/2にたい、東端中層段石造シルト、しまり中、粘性土  
 3. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 4. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土

【D-D' 断面】  
 1. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 2. 10182/2主室周縁部段石造シルト、10183/2中層段石造シルトをとりかき含む、しまり中、粘性土  
 3. 10182/2にたい、東端中層段石造シルト、粘性土  
 4. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土

【E-E' 断面】  
 1. 10182/2主室周縁部段石造シルト  
 2. 10182/2主室周縁部段石造シルトと10183/2中層段石造シルトをとりかき含む  
 3. 10182/2主室周縁部段石造シルト  
 4. 10183/2主室周縁部段石造シルト  
 5. 10184/2にたい、東端中層段石造シルト  
 6. 10184/2にたい、東端中層段石造シルト  
 7. 10185/2主室周縁部段石造シルトと10186/2主室周縁部段石造シルトが混じり合う

【F-F' 断面】  
 1. 10182/2主室周縁部段石造シルト、粘性土  
 2. 10182/2主室周縁部段石造シルト、粘性土  
 3. 10182/2主室周縁部段石造シルト、粘性土  
 4. 10182/2主室周縁部段石造シルト、粘性土  
 5. 10182/2主室周縁部段石造シルト、粘性土  
 6. 10182/2主室周縁部段石造シルト、粘性土  
 7. 10182/2主室周縁部段石造シルト、粘性土  
 8. 10182/2主室周縁部段石造シルト、粘性土  
 9. 10182/2主室周縁部段石造シルト、粘性土  
 10. 10182/2主室周縁部段石造シルト、粘性土  
 11. 10182/2主室周縁部段石造シルト、粘性土  
 12. 10182/2主室周縁部段石造シルト、粘性土



【A-A' 断面】  
 1. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 2. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 3. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 4. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 5. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 6. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 7. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 8. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 9. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 10. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 11. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 12. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土

【B-B' 断面】  
 1. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 2. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 3. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 4. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 5. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 6. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 7. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 8. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 9. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 10. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 11. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土  
 12. 10182/2主室周縁部段石造シルト、しまり中、粘性土

第34図 S B 292 (1/50)

る。

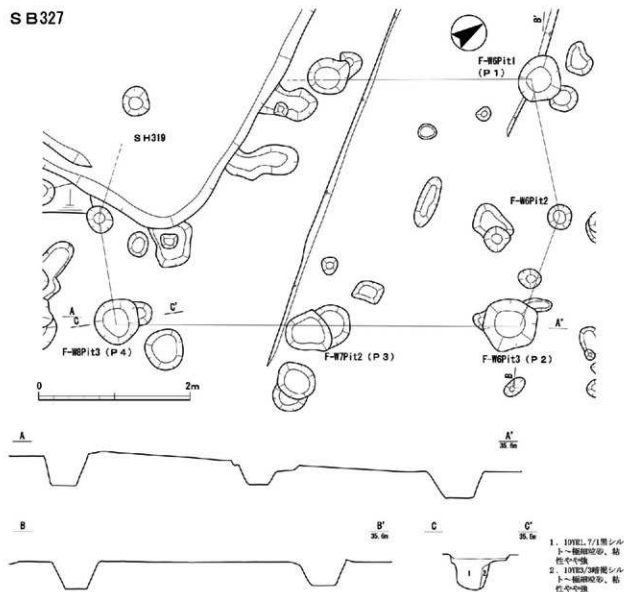
桁行は4基の柱穴からなる。柱間は2.6m前後であるが、中央の柱間のみはやや狭く、2.2m前後である。柱穴はかなり大きく、長径0.8～1m程度の土坑状を呈する。柱痕と思われる土層が認められるP1・2の土層断面をみると、柱穴を柱の太さよりかなり大きく掘り、底面に整地土を施した上に柱を据え、丁寧に裏込めを施して柱を固定していることが窺える。P3・4などでは柱痕と思われる土層は確認できず、柱は抜き取られたものとみられる。P1でも、上位に堆積した土層（P1第1・2層）や、柱の上に当たる位置から礫が検出されていることから、やはり柱は抜き取られている可能性が高い。

一方、棟持柱の柱穴は他の柱穴に比べて小型で浅く、構造上の機能が他の柱とは異なっていたものと推定できる。

遺物は、P1・2・3から縄文土器が出土しているが、規模の割に出土遺物は僅少である。

柱穴の出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。ただし、重複関係からみてSH248よりは時期が下る。SH248内部への柱穴の掘り込みを意図的に避けているのであれば、地表面においてSH248の痕跡が明瞭に認識できていたものと思われ、大きな時期差はないと推定される。また、SB292とも非常に近接するため同時並存は考えにくく、若干時期が異なる可能性が高い。

### SB327



第35図 SB327 (1/50)

**S B327 (第35図)** 第3次調査区の東部で検出した掘立柱建物である。南西隅部分が古墳時代前期の竪穴建物S H319と重複しており、南西隅の柱穴は検出されなかった。柱穴の存在が予想される箇所にS H319の主柱穴が位置しており、この柱穴とほぼ重複している可能性も考えられる。

建物主軸線上の両側に棟持柱状の柱が存在し、平面形は細長い六角形を呈する。棟持柱による張り出しは両辺とも同程度であるが、棟持柱はいずれも建物の主軸線からは若干東に寄った位置にある<sup>10)</sup>。桁行5.4m、梁行3.3m、棟持柱の張り出しを含む長さ6.2mの建物である。

桁行は3基の柱穴からなる。柱間は2.7m前後である。柱穴は古墳時代前期の掘立柱建物に比べると大きくいずれも長径0.5~0.7m程度であるが、S B276・285などの大型建物よりは一回り小型である。各柱

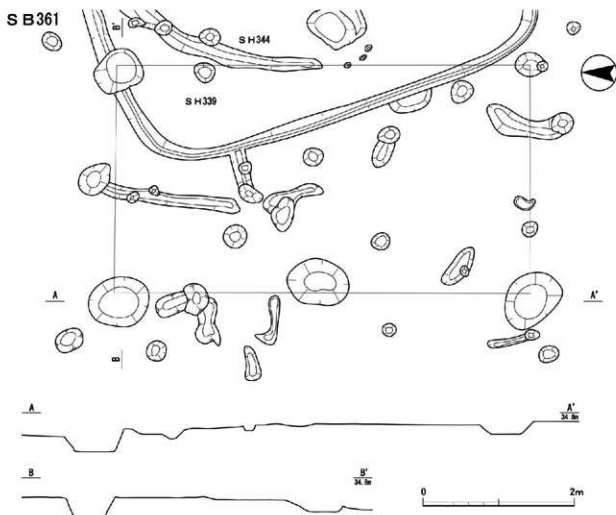
穴には浅いピット状の落ち込みが重複している。南隅の柱穴の土層断面から見ると柱は抜き取られた可能性が高く、重複する浅い落ち込みも柱の抜き取りに関連するものであるものと考えられる。

一方、棟持柱の柱穴は他の柱穴に比べて小型で浅く、構造上の機能が他の柱とは異なっていたものと推定できる。

遺物は、P 1・2などから縄文土器が出土している。棟持柱の柱穴と考えられるF-W6Pit2からも縄文土器が出土した。

柱穴の出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

**S B361 (第36図)** 第3次調査区の北東部で検出した掘立柱建物である。S B327と近い規模の建物である。東側は古墳時代の竪穴建物S H339と重複している。また、縄文時代の竪穴建物S H344と接



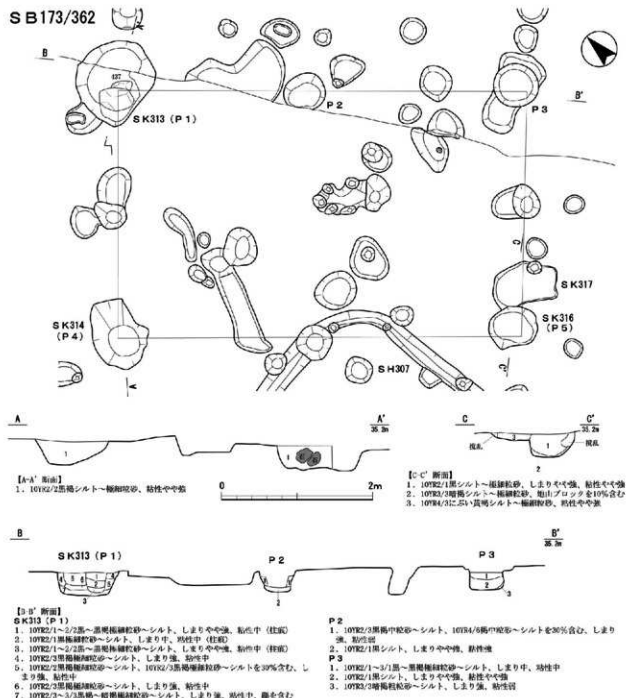
第36図 S B361 (1/50)

している。

4基の柱穴によって構成される平面形が長方形を呈する建物と考えて調査及び記録を行ったが、南東隅の柱穴は小型で非常に浅く、他の縄文時代の掘立柱建物の柱穴に比べて違和感がある。また、東側の桁行が2基の柱穴のみであるとなれば、柱間が非常に幅広である。西側の桁行ライン上には中ほどに柱

穴とも考えられるピットが1基存在するものの、やや内側に入っており柱の並びが直線的にならず、これに対応する東面の柱穴も検出されない。こうした点からみると、縄文時代の掘立柱建物と断定するには若干問題があると思われる<sup>19)</sup>。掘立柱建物とすれば、桁行5.5m、梁行3.0mの建物となる。

桁行は2ないし3基の柱穴からなる。3基とすれ



第37図 SB173/362 (1/50)

ば柱間は2.7m前後である。柱穴は南東隅のものを除き、古墳時代前期の掘立柱建物に比べると大きく長径0.6～0.8m程度あるが、いずれも深さは5～20cmほどと浅い。北西隅の柱穴のみ他の柱穴より20cmほど深く、しっかりした柱穴である。

遺物は僅少で、縄文土器と思われるものが出土しているが、細片で図化できるものはなかった。

縄文時代の掘立柱建物とすれば、遺構の時期は他の掘立柱建物と同じく縄文時代中期末葉と考えられる。ただし、位置関係からみるとSH344との同時並存は考えにくく、若干時期が異なる可能性が高い。**SB173/362(第37図)** 第2次調査区の北東部及び、第3次調査区の東部で検出した掘立柱建物である。第2次調査区では東側の桁行のみが検出され、その時点で縄文時代の掘立柱建物と認識された。第3次調査では残りの柱穴が確認され、規模や形態が判明した。西側の一部は古墳時代前期の堅穴建物SH307と重複している。

平面形は長方形を呈する。両側の梁行の中央で柱穴が検出されているが、外方へ張り出さず、梁行のライン上に位置する。ただし、後述のように棟持柱にあたる機能をもつと考えられることや、SK316などで実際に柱を立てた位置によっては南側の梁行中央の柱は梁行より若干外方へ張り出すことになる可能性もあることなどから、平面形は細長い五角形ないし六角形になる可能性もある。桁行5.4m、梁行3.3mの建物である。

桁行は3基の柱穴からなる。柱間は2.6～2.8m前後である。柱穴は古墳時代前期の掘立柱建物に比べると大きく、いずれも長径0.5～1m程度ある。そのため、第3次調査では当初土坑の可能性も考慮して個別に遺構番号を付与していた。SK313(P1)では柱穴内から大きな礫や石皿(台石)が検出されているが、検出された層位などからみて、根石ではなく柱を抜き取った後に入れられたものと考えられる。SK316(P5)も土層の堆積状況などから柱が抜き取られた可能性が高く、重複するSK317は柱の抜き取りに関係する落ち込みと考えられる。他の複数の柱穴も平面形が不整形であったり、浅い落ち込み状のピットが重複しているため、多くの柱穴において柱の抜き取りが行われたものと推測され

る。

一方、梁行は3基の柱穴からなる。中央の柱穴は南北両面とも他の柱穴より小型で若干浅く、構造上の機能が他の柱穴とは異なっていた可能性が高い。したがって、梁行上に位置するが、他の掘立建物の棟持柱と同様の柱であったと推測される。

遺物は、SK313(P1)やP3から縄文土器や石皿(台石)が出土している。

柱穴の出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

### (3) 埋設土器

**SX149(第38図)** 第2次調査区の東部で検出した埋設土器である。古墳時代後期の建物SH256の内部から検出された。一部が古墳時代以降のピットによって壊されている。

SH256によって上部を大きく削平されているが、径1mほどの円形の土坑の内部から縄文土器有文深鉢が横位で検出された。埋設された土器よりもかなり土坑が大きく、埋設土器ではなく別の性格の遺構の可能性もある。

遺物は、埋設されていた縄文土器深鉢以外には検出されなかった。埋土中にはクリやクヌギ節、タケ亜科に由来する炭化物が含まれていたが、放射性炭素年代測定の結果からみると、遺構形成以前のもので混入している可能性が高い(第Ⅳ章第3節)。

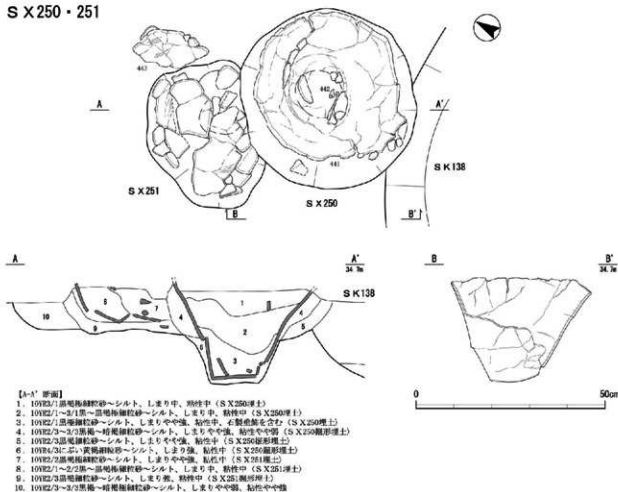
出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

**SX250(第38図)** 第2次調査区の北東部で検出した埋設土器である。埋設土器SX251及び土坑SK138と重複しており、土層断面からみると、SX251とSK138より後に掘り込まれている。

縄文土器の無文深鉢を、平面形が円形の土坑に正位に埋設している。土器の口縁部は削平などにより失われているが、破片の一部が土器内から出土しており、元は完形の土器であったものと考えられる。

遺物は、埋設されていた縄文土器深鉢の他に、土器の内部の底面付近から蛇紋岩製の垂飾(442)が1点出土した。埋設土器内からこうした遺物が出土することはほとんどなく、希な事例である。この他、埋土にはクリやクヌギ節、エノキ属の材に由来する

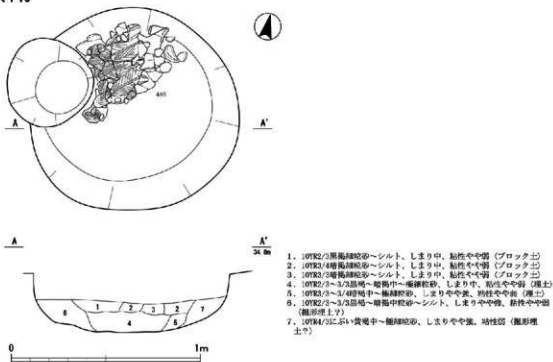
S X 250・251



【A-A' 断面】

1. 10YR2/1黒地帯細粒砂へシルト、しまり中、粘性中 (S X 250埋土)
2. 10YR2/1〜2/1黒〜黒地帯細粒砂へシルト、しまり中、粘性中 (S X 250埋土)
3. 10YR2/1黒地帯細粒砂へシルト、しまりや中強、粘性中、石製土器を含む (S X 250埋土)
4. 10YR2/3〜2/3黒帯〜暗褐色細粒砂へシルト、しまりや中強、粘性やや中弱 (S X 250埋土)
5. 10YR2/3黒地帯細粒砂へシルト、しまりや中強、粘性中 (S X 250埋土)
6. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂へシルト、しまり強、粘性中 (S X 250埋土)
7. 10YR2/3黒地帯細粒砂へシルト、しまりや中強、粘土中 (S X 251埋土)
8. 10YR2/1〜2/2黒〜黒地帯細粒砂へシルト、しまり中、粘性中 (S X 251埋土)
9. 10YR2/3黒地帯細粒砂へシルト、しまり強、粘性中 (S X 251埋土)
10. 10YR2/3〜2/3黒帯〜暗褐色細粒砂へシルト、しまりや中強、粘性やや中弱

S X 149



1. 10YR2/3黒地帯細粒砂へシルト、しまり中、粘性やや弱 (ブロック土)
2. 10YR2/4暗褐色細粒砂へシルト、しまり中、粘性やや弱 (ブロック土)
3. 10YR2/3暗褐色細粒砂へシルト、しまり中、粘性やや弱 (ブロック土)
4. 10YR2/3〜2/3黒帯〜暗褐色中〜細粒砂、しまり中、粘性やや弱 (埋土)
5. 10YR2/3〜2/4暗帯中〜細粒砂、しまりや中強、粘性やや弱 (埋土)
6. 10YR2/2〜2/3黒帯〜暗褐色中粒砂へシルト、しまりや中強、粘性やや中弱 (埋土)
7. 10YR4/3にぶい黄褐色中〜細粒砂、しまりや中強、粘性弱 (埋土)

第38図 S X 149・250・251 (S X 149は1/20、S X 250・251は1/10)



炭化物や、オニグルミと考えられる種実片が少量含まれていた（第Ⅷ章第3節）。

埋設されていた土器は無文の粗製深鉢であるため時期の比定が困難であるが、器形からみて縄文時代中期末葉のものである可能性が高く、また、埋土中から検出された炭化物の放射性炭素年代測定の結果からみても（第Ⅷ章第3節）、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

**S X 251（第38図）** 第2次調査区の北東部で検出した埋設土器である。埋設土器 S X 250 と重複しており、S X 250 の掘形によって南東部をかなり壊されている。

縄文土器の無文深鉢を平面形がやや不整な円形の土坑に正位に埋設している。断ち割りによる土層観察において、北側で別の掘り込みと思われるものが確認されたが（A-A'断面第10層）、平面では明瞭に確認されておらず、S X 251 との関係は不明である。埋設された土器は、S X 250 掘削時の影響などによってかなり破損しており、上半部はほぼ失われているが、口縁部の一部が土器内から出土しており、元は完形の土器であったものと考えられる。

遺物は、埋設されていた縄文土器深鉢以外には検出されなかった。ただ、埋土にはクリやコナラ属の材に由来する炭化物が少量含まれていた（第Ⅷ章第3節）。

埋設されていた土器は無文の粗製深鉢であるため時期の比定が困難であるが、器形からみて縄文時代中期末葉のものである可能性が高く、また、埋土中から検出された炭化物の放射性炭素年代測定の結果からみても（第Ⅷ章第3節）、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

**S X 279** 第2次調査区北東部において検出した埋設土器である。ただし、すでに一次調査において検出されており、その際には十分な調査が行えず、また土器も取り上げざるを得なかったため、第2次調査時には掘形の基底部とわずかな破片のみが残存する状態で、土器の埋設状況などについては明確にすることができなかった。

しかしながら、検出時の状況などからみて、縄文土器の無文深鉢を小型の土坑内に正位に埋設していたものと考えられる。

遺物は、埋設されていた縄文土器深鉢以外には検出されなかった。

埋設されていた土器からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

#### （4）集石遺構・屋外炉

**S F 259（第39図）** 第2次調査区の北東部で検出した集石遺構である。径1mほどの皿状に掘り込まれた土坑内に多量の礫が入れられていた。

礫は土坑の中央付近に集中する。上層では長径10cm以下の小型の礫が多く認められた。ただし、礫のみで構成されるのではなく、礫と土壌が混在する状況である。また、礫群の周囲から焼土や炭化物の広がりが見出されている。

一方、下層では小型の礫は少なく、長径15cm程度のやや大きな礫が少数固まって検出されている。これらの下層の集石の周囲からも顕著な炭化物の広がりが見出された。下層から検出された炭化物は、主にクリやコナラ属の木材に由来するものであった（第Ⅷ章第3節）。

土層断面から見ると、上層の集石と下層の集石の間には、若干の間層が存在する可能性がある（第39図第3・4層）。また、下層の集石も土坑底面に密着して置かれていない。

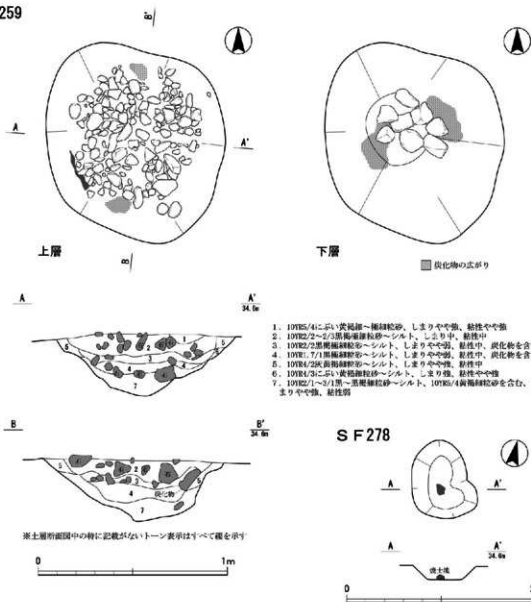
こうした構造や規模などからみて、S F 259はいわゆる集石炉として使用されていたものと推定される。そして、上層と下層の集石は一体的な構造物を構成しているのではないと思われる。下層の大型の礫を用いた集石によっても何らかの加熱行為が行われており、上層の集石と下層の集石とで用途や使用段階が異なっていた可能性が考えられる<sup>10</sup>。

礫と炭化物以外に出土遺物はなかったが、下層から検出された炭化物の放射性炭素年代測定の結果を踏まえると（第Ⅷ章第3節）、遺構の時期は縄文時代早期である可能性が高い<sup>10</sup>。

**S F 278（第39図）** 第2次調査区の北東部で検出した焼土坑である。S F 259のすぐ南側に位置する。

長径0.8m、短径0.7m、深さ0.15mほどの不整形な浅い土坑で、壁面は一部被熱する。また、底面では焼土塊も検出された。付近に建物の痕跡は認められなかったため、屋外炉の可能性が考えられる。

S F 259



第39図 S F 259・278 (1/20、1/40)

遺物は、埋土中から縄文土器の破片が出土しているが、細片のみで図化できるものはなかった。

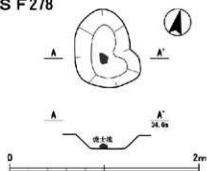
出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

### (5) 土坑

**S K 133 (第40図)** 第2次調査区の北東部で検出した土坑である。平面形は長径1.2m、短径1mの円形を呈し、深さは0.5mほどである。

S B 276のすぐ南側に位置しており、掘立柱建物の柱穴と同様の規模・形態であるため、調査時には別の掘立柱建物が存在し、この土坑もその柱穴とな

S F 278



る可能性が考えられていた。ただし、最終的には明確に掘立柱建物となるような土坑の並びは確認できず、単独の土坑とした。位置からみると、S B 276に関係する遺構の可能性もある。

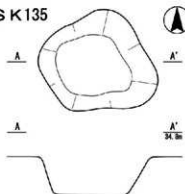
遺物は、埋土中から縄文土器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

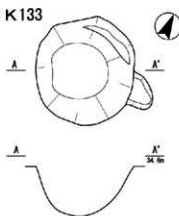
**S K 135 (第40図)** 第2次調査区の北東部で検出した土坑である。平面形は長径1.3mの不整形な円形を呈し、深さは0.4mほどである。

規模や、縄文時代の竪穴建物や掘立柱建물에 囲まれた空閑地に位置することなどからは、土墳墓もし

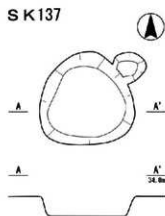
SK 135



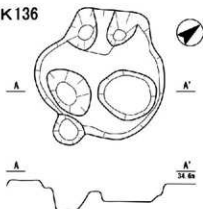
SK 133



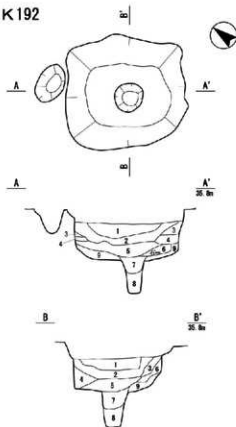
SK 137



SK 136



SK 192

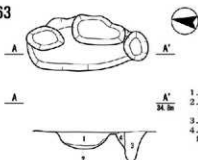


SK 138



1. 10YR2/1黒層粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
2. 10YR2/1黒中～細粒砂、10YR4/4中～細粒砂を30%含む、しまり強、粘性弱
3. 10YR4/4中～細粒砂、しまり強、粘性弱
4. 10YR3/2黒中～細粒砂、しまり強、粘性やや弱

SK 263



1. 10YR1.7/1黒シルト、しまり中、粘性中、土層片を含む
2. 10YR3/2黒層粒砂～シルト、10YR4/4中シルトを20%含む、しまり中、粘性やや強
3. 10YR4/2灰黄層シルト、しまりやや強、粘性中（ピット埋土）
4. 10YR2/3黒層細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中（ピット埋土）

1. 10YR2/1黒シルト、しまり中、粘性やや強
2. 10YR2/2黒層シルト、しまり中、粘性やや強
3. 10YR2/3黒層シルト、しまりやや強、粘性中
4. 10YR3/3黄層細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
5. 10YR3/3黄層細粒砂～シルト、10YR5/6黄層粒砂～シルトをブロック状に10%含む、しまりやや強、粘性中
6. 10YR2/3黒層細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
7. 10YR3/2黒層細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性強
8. 10YR3/3黄層細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性強
9. 10YR2/2黒層細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強

0 2m

第40図 SK 133・135・136・137・138・192・263 (1/40)

くは貯蔵穴の可能性も考えられるが、性格を明らかにする手がかりは得られなかった。

遺物は、埋土中から縄文土器が出土しているが、細片で図化できるものはなかった。

出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉である可能性が高い。

**SK136 (第40図)** 第2次調査区の北東部で検出した土坑である。SB276の内部に位置している。平面形は径1.4mほどの不整形な円形を呈し、深さは0.2mほどである。底面にはピット状の凹凸が認められる。

規模からは土壇墓もしくは貯蔵穴とも考えられるが、全体的にかなり不整形であることから、可能性は低いと思われる。位置からみると、SK133などとともにSB276に關係する遺構の可能性もある。

遺物は、埋土中から縄文土器が出土しているが、細片で図化できるものはなかった。

出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉である可能性が高い。

**SK137 (第40図)** 第2次調査区の北東部で検出した土坑である。SB292・287のすぐ南側に位置する。平面形は径1mのほぼ円形を呈し、深さは0.2mほどである。

規模や、縄文時代の竪穴建物や掘立柱建物の近くに位置することなどからは、土壇墓もしくは貯蔵穴の可能性も考えられるが、性格を明らかにする手がかりは得られなかった。

遺物は、埋土中から縄文土器が出土しているが、細片で図化できるものはなかった。

出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉である可能性が高い。

**SK138 (第40図)** 第2次調査区の北東部で検出した土坑である。埋設土器であるSX250・251と接しており、北端部をSX250によって壊されている。平面形は長径1.3m、短径1mの楕円形を呈し、深さは0.3mほどである。

2基の埋設土器と並ぶように位置していることから、土壇墓などの可能性も考えられるが、土層断面からは人為的に埋め戻されたような状況は明確には看取できなかった。

遺物は、埋土中から縄文土器が出土している。

SX250との重複関係や出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

**SK192 (第40図)** 第2次調査区の中央部で検出した土坑である。縄文時代の遺構が多い区域からやや南に離れた場所に位置する。平面形は一辺1.2mほどの方形を呈し、深さは0.5mほどである。底面では中央部から径0.3m、深さ0.4mほどのピットが1基検出された。ピットの土層断面では杭などの痕跡は確認できなかった。

規模や底面にピットを有する特徴などからみて、陥穴の可能性が高い。

遺物は、埋土中から縄文土器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

**SK241 (第41図)** 第2次調査区の北東端で検出した土坑である。SB285の北東隅柱穴付近から北東へ向かって延びる大型の土坑である。長さ4.3m、幅1.7mほどの不整形な土坑で、北側よりも南側がやや深くなっている。

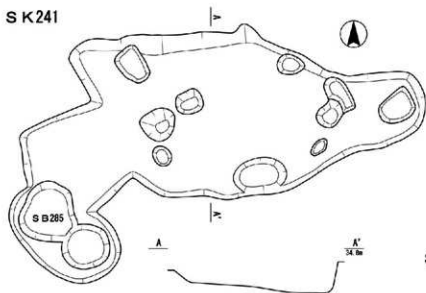
南西隅にSB285の北東隅柱穴が位置しており、西側の一部はこの柱穴の掘り込みないし柱の抜き取りに関わるものとも考えられる。ただし、規模の大きさからみると大部分は別の遺構と考えられる。つまり、本来のSK241とSB285に関わる痕跡とが一体化して、現況の不整形な土坑状を呈しているものと考えられる。ただし、本来のSK241の範囲や形状は、調査時に判断できなかった。したがって、SB285との前後関係も不明である。SB285付近には他にもSK263・284など縄文時代の不整形な土坑がいくつか存在しており、SK241もこれらの土坑とともにSB285での活動に伴う遺構である可能性も考えられよう。

遺物は、埋土中から剥片が出土しているのみで、土器片は出土しなかった。

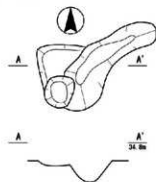
出土遺物や、古墳時代の遺物が出土しなかった点などからみて、遺構の時期は縄文時代である可能性が高い。

**SK263 (第40図)** 第2次調査区の北東部で検出した土坑である。SB285のすぐ北側に位置する。平面形は長径1m、短径0.5mほどの楕円形を呈する。数基のピットが重複している。

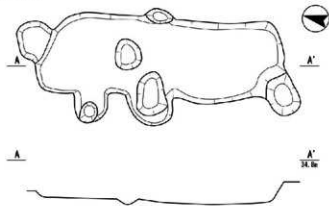
S K241



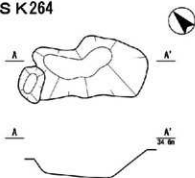
S K267



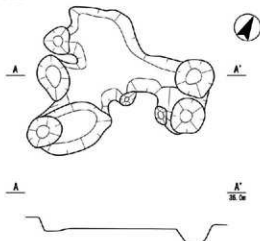
S K271



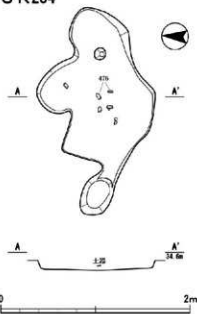
S K264



S K308



S K284



第41圖 S K241・264・267・271・284・308 (1/40)

規模や、縄文時代の掘立柱建物の近くに位置することなどからは、土壌墓もしくは貯蔵穴の可能性も考えられるが、性格を明らかにする手がかりは得られなかった。また、S B 285付近には他にも縄文時代の不整形な土坑がいくつか存在していることから、これらの土坑とともにS B 285での活動に伴う遺構である可能性も考えられよう。

遺物は、埋土中から縄文土器と剥片が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

**S K 264 (第41図)** 第2次調査区の北東部で検出した土坑である。S B 285の西側に位置する。平面形は長径1.2m、短径0.5mほどの不整形な楕円形を呈する。

規模や、縄文時代の掘立柱建物の近くに位置することなどからは、土壌墓もしくは貯蔵穴の可能性も考えられるが、性格を明らかにする手がかりは得られなかった。また、S B 285付近には他にも縄文時代の不整形な土坑がいくつか存在していることから、これらの土坑とともにS B 285での活動に伴う遺構である可能性も考えられよう。

遺物は、埋土中から縄文土器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

**S K 267 (第41図)** 第2次調査区の北東部で検出した土坑である。南西肩部には、古墳時代の掘立柱建物S B 160の柱穴が掘り込まれている。平面形は長径1.3m、短径0.4mほどの不整形な細長い楕円形を呈する。

規模や、縄文時代の竪穴建物や掘立柱建物に囲まれた空間地に位置することなどからは、土壌墓もしくは貯蔵穴の可能性も考えられるが、性格を明らかにする手がかりは得られなかった。

遺物は、埋土中から縄文土器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

**S K 271 (第41図)** 第2次調査区の北東部で検出した土坑である。付近にはS H 193/303、S B 276・285など縄文時代中期の遺構が集中している。複数のピットが重複するため不整形となるが、平面形は

長さ2.6m、幅0.8mほどの隅丸長方形を呈し、深さは0.1～0.2mほどと浅い。

遺物は、埋土中から縄文土器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

**S K 284 (第41図)** 第2次調査区の北東部で検出した土坑である。S B 285のすぐ南側に位置する。平面形は不整形で、長さ2m、幅1～1.2mほどである。深さは0.1mほどと浅く、土坑というよりは落ち込みに近い。西端部には時期が下るピットが重複している。

内部からは、複数の縄文土器の破片が散在する状況で検出された。底面からはやや高い位置で検出されている。S B 285付近には他にも縄文時代の不整形な土坑がいくつか存在していることから、これらの土坑とともにS B 285での活動に伴う遺構である可能性も考えられよう。

遺物は、埋土中から縄文土器と剥片が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

**S K 308 (第41図)** 第3次調査区の東部で検出した土坑である。多数のピットが重複しており、平面形は不整形で、長さ1.6m、幅1mほどである。深さは0.15mほどと浅く、土坑というよりは落ち込みに近い。

かなり不整形で浅いことから、風倒木の痕跡の可能性も考えられるが、調査の際には断定できず、人為的な土坑とした。

遺物は、埋土中から縄文土器と石器が出土している。

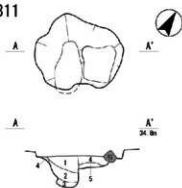
人為的な土坑であるとするれば、出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

**S K 311 (第42図)** 第3次調査区の東部で検出した土坑である。S B 287・292の南側に位置する。平面形は径0.9mほどの不整形な円形を呈する。

西側が一段深くなっており、深くなっている部分の南側壁面はややオーバーストリングしている。また、一段浅くなっている部分の壁際から拳大の礫が検出されている。

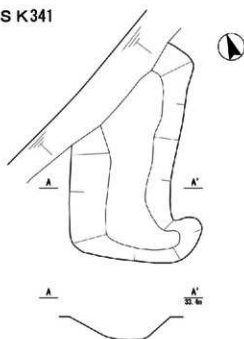
土層断面からみると、深くなっている部分が後か

S K311

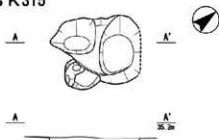


1. 10YR2/2黒帯細粒砂～シルト、しまり前、粘性中
2. 10YR3/1黒帯細粒砂～シルト、10YR4/6靑半粒砂～シルトを少量含む、しまりや中強、粘性やや強
3. 10YR3/2黒帯細粒砂～シルト、10YR4/6靑半粒砂～シルトを少量含む、しまり中、粘性中
4. 10YR2/2黒帯細粒砂～シルト、7.5YR2/2黒帯粗粒砂～シルトをブロック状に多量に含む、しまり中や中強、粘性やや中強
5. 10YR3/2黒帯細粒砂～シルト、10YR4/6靑半粒砂～シルトを少量含む、しまり中、粘性やや強

S K341

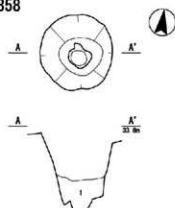


S K315



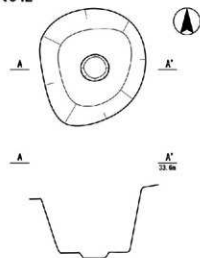
1. 10YR2/2黒帯シルト～細粒砂、粘性中

S K358



1. 10YR4.2/1黒シルト～細粒砂、炭化物を含む

S K342



ら掘り込まれたことがわかる。ピット状の遺構が2基重複したものが、柱が抜き取られた柱穴と考えられよう。柱穴であるとするれば、付近に縄文時代の竪穴建物や掘立柱建物が存在していることから、認識できていない別の建物ないし柱列が存在する可能性も考えられる<sup>19)</sup>。

遺物は、埋土中から石皿（台石）と思われる石器が出土している。土器片は出土しなかった。

出土遺物や、古墳時代の遺物が出土しなかった点などからみて、遺構の時期は縄文時代である可能性が高い。

**SK315（第42図）** 第3次調査区の東部で検出した土坑である。SB173/362のすぐ西側に位置する。平面形は不整形で、長さ1.0m、幅0.7mほどである。

かなり不整形で底面の凹凸も著しいことから、風倒木の痕跡の可能性も考えられるが、調査の際には断定できず、人為的な土坑とした。

遺物は、埋土中から縄文土器が出土している。人為的な土坑であるとするれば、出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

**SK341（第42図）** 第3次調査区の北端で検出した土坑である。調査区の壁際で検出され、北端の一部は調査区外に出ている。また、地形的にかなり傾斜した場所に位置する。平面形は長さ2.3m以上、幅1.1mほどの長方形を呈する。

掘形はやや不明瞭で、断面形は浅い皿状を呈しており、人為的な掘り込みではなく落ち込み状のものである可能性も考えられる。ただし、遺物の出土量は比較的多い。

遺物は、埋土中から縄文土器が出土しており、口縁部や底部の比較的大きな破片も複数あるが、文様は簡素なものも多く、ある程度の時期的なまとまりがあるものと推測される。

出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

**SK342（第42図）** 第3次調査区の北端で検出した土坑である。SK341の東側に隣接し、地形的にかなり傾斜した場所に位置する。平面形は径1.2mほどの円形を呈し、深さは0.7mとかなり深い。底面では中央部から径0.3m、深さ0.1mほどのピットが1基検出された。

規模や底面にピットを有する特徴などからみて陥穴の可能性が高いが、底面のピットがかなり浅い点については疑問が残る。

遺物は、埋土中から縄文土器が出土している。出土遺物からみて、遺構の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

**SK358（第42図）** 第2次調査区の北端で検出した土坑である。地形的にかなり傾斜した場所に位置する。平面形は径0.8mほどの円形を呈し、深さは0.8mとかなり深い。底面では中央部から径0.25m、深さ0.1mほどのピットが1基検出された。

深さや底面にピットを有する特徴などからみて陥穴の可能性が高いが、規模は陥穴と推定されるSK192・342よりも小さく、また、底面のピットがかなり浅い点については疑問が残る。

遺物は全く出土しなかったが、埋土中から炭化物が少量検出された。この炭化物の放射性炭素年代測定の結果を参考とするれば（第Ⅷ章第4節）、遺構の時期は縄文時代後期前葉まで下る可能性がある。

## 注

- 1) 後述するSH193/303やSH301と規模やピットの配置などが共通する。こうした点からみて、これらは建物の痕跡である蓋然性が高い。
- 2) 縄文時代のいわゆる石皿のうち、明瞭な縁を作り出さないものについては台石とされることもあり、分類や名称は一定していない。小牧南遺跡出土のものは破片が多く、形状や使用痕も多様であり、台石と呼ぶべきものもあろうが、有縁石皿と無縁石皿や台石を包括的に検討する方向性があることを鑑みて、本報告では縄文時代のものに限って一括して石皿（台石）とする。横田文雄1998『無縁石皿考』『列島の考古学』渡辺誠先生追憶記念論集刊行会、上條信彦2007『縄文時代石皿・台石の研究—形態的分布を中心に—』『古文化談叢』第56集 九州古文化研究会
- 3) 上層・中層という呼称は報告書作成段階で付与したもので、調査時の図面作成に際しては1面目・2面目という名称を便宜的に用いていた。同様に、第10図の下層は3面目、最下層は4・5面目として図面を作成している。
- 4) 上層～最下層の区別は段階的な遺物の取り上げに応じたもので、この間に明瞭な層などの存在は確認されていない。
- 5) 水洗・篩がけを行った土壌の量は土壌袋約40袋である。



- 6) このチャート円盤は取り上げて水洗したが、使用痕などは認められなかったため、報告書には図を掲載しなかった。ただし、参考遺物として報告書に掲載した遺物とともに保管している。
- 7) 当該箇所は高速道路建設予定地内であったが、川へ向かって下る急な斜面となるため、調査区を設定する段階では調査の対象外としていた。
- 8) 梁行ラインの外側に位置する柱穴を棟持柱とした場合、平面形としては側柱を結ぶ四角形と、両側の棟持柱を繋ぐ直線として提示する方が妥当かもしれない。ただ、縄文時代の独立柱建物については、上部構造が必ずしも明らかでない、棟持柱が片側しかないものがある、等の理由から、棟持柱を含むすべての柱を結ぶ線によって、多角形の平面形として提示する場合が多い。本報告でもそれに倣い、縄文時代の独立柱建物については多角形の平面形として提示しておく。
- 9) 縄文時代の独立柱建物については、本来は梁行や桁行という用語を避けるべきかもしれないが、本報告では便宜上、棟持柱による張り出し部を除く平面形が方形となる部分を基準とし、短辺を梁行、長辺を桁行と呼称する。棟持柱をもたない建物についても同様とする。
- 10) 独立柱建物の規模については、柱穴内の柱があったと推測

される位置付近で計測した。

- 11) 柱穴の強度を保つため、軟弱なSH248の埋土への柱穴の掘り込みを避けた可能性も考えられる。
- 12) 位置などから調査時にはSB327に伴う棟持柱とは考えていなかったが、F-W6P112が出土遺物から縄文時代の遺構と考えられることや、SB276でも棟持柱の位置が片寄ることから、本報告では当該建物に伴う棟持柱の柱穴とした。
- 13) 規模や柱間寸法は他の独立柱建物と比べて違和感がないため、独立柱建物として報告を行った。
- 14) 土坑内に礫を敷き、さらにその上に礫を入れる形態の集石遺構は縄文時代早期から存在するようである。また、上層の礫は被覆に用いられ、使用後に取り除かれて最終的に土坑内に廃棄された可能性が指摘されている。青嶋邦夫2004「縄文時代の集石遺構の形態について」『(財)静岡県縄文文化財調査研究所設立20周年記念論文集』(財)静岡県縄文文化財調査研究所
- 15) 今回の調査では、SB276出土の353など、早期に位置づけられる土器片も、ごく少量ながら出土している。
- 16) そうした視点からは、SK311の東側に位置するSK137なども柱穴の可能性が考えられるかもしれない。

## 第2節 遺物

### (1) 竪穴建物・平地式建物出土遺物

**SH143 (第43図1~3)** 1は主柱穴P2から出土した。縄文土器深鉢の体部片で、縦位の隆帯を貼り付ける。また、条線が施されている。

2・3は埋土中などから出土した。いずれも土師器である。2は高坏の脚部で3方向に透孔を開ける。3は小型器台の受部である。口縁部外面には強いヨコナデが施され、面をなす。内外面ともヨコミガキで調整され、赤彩が認められる。これらは古墳時代前期のもので、混入したと考えられる。

**SH147 (第43図4~7)** 4は炉SF139から出土した。縄文土器深鉢で、頸部に横位の波状に蛇行する隆帯を貼り付け、隆帯より下位には細い沈線による矢羽根状文を施す。外面にはススが附着している。

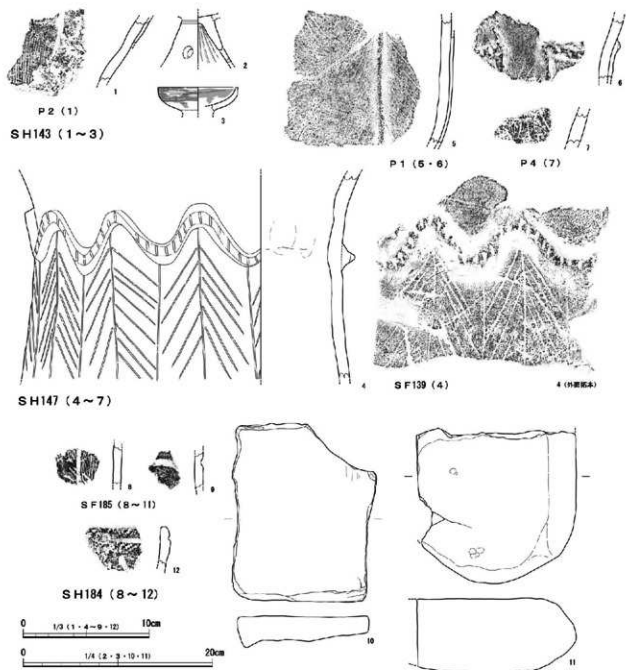
5・6は主柱穴P1から出土した。いずれも縄文土器深鉢である。5は縦位に隆帯を貼り付け、隆帯間には細い沈線による矢羽根状文で充填する。6は横

位と縦位に隆帯を貼り付けるが、横位の隆帯には刻目が施される。

7は主柱穴P4から出土した。縄文土器深鉢で、細い沈線で矢羽根状文を描く。

**SH184 (第43図8~12)** 8~11は石罫SF185から出土した。8・9は縄文土器深鉢と思われる小片である。8はやや太い沈線による区画の中に条線が施されている。10・11は石皿(台石)である。10は片麻岩製で、方形を呈し薄い。上面は使用により摩滅するが、石材の目が粗いこともあり、擦痕はほとんど観察できない。11は溶結凝灰岩製で、半分以上を欠損している。使用等による摩滅は顕著ではないが、上面はやや平滑で、わずかに敲打痕と思われるものが認められる。

12は建物内のピットから出土した。縄文土器深鉢と思われる。縄文を地文とし、沈線で文様が描かれる。おそらく、口縁部直下に沈線による区画文を配すると思われる。



第43図 SH143・147・184出土遺物 (1/4、1/3)

SH191 (第44～62図13～210) 13～20は伊から出土した。いずれも縄文土器である。

13～17は有文深鉢である。13はかなりの破片が遺存する。口縁部直下には渦巻文と楕円形の区画文が配されるが、両者は一体化している。区画文内にあたる部分は条線で充填される。区画文の下には頸部を画するように連弧文が配される。体部は2条の沈線で縦方向に区画され、条線で充填される。14・15は頸部に横位に隆帯を貼り付ける。14は頸部の隆帯

より上位には縦位の幅広の多条並行沈線が施されているが、口縁端部は遺存状況が悪く破断面である可能性もあり、並行沈線が施されている部分が体部とも考えられる。ただし、頸部の隆帯より下位にわずかに縦位の隆帯と思われる痕跡が認められたため、並行沈線がある部分を口縁として図化した。15は隆帯より上位は無文で、隆帯上に刻目も施されていない。隆帯より下位には2条の縦位の沈線と矢羽根状文ないし斜行沈線が施されている。16は深鉢の体部

で、頭部は明瞭に括れる。体部には幅広の多条並行沈線が施されている。18・19は把手の破片である。深鉢などに付属するものと思われる。18の外面上には沈線で縞手状文が描かれている。19の外面上にも沈線による文様が認められる。20は深鉢の底部と思われる。底部外面には広葉樹の葉と思われる敷物痕が認められる。

21・22は主柱穴P2から出土した。21は切目石鐘で、ホルンフェルス製と思われる。扁平な円礫の両端に研磨によって施溝しているが、施溝前に若干打撃を加えて凹ませているようである。また、一方の端部には溝が複数施されており、溝の付け直しを行っていると考えられる。22は土師器のS字状口縁甕<sup>1)</sup>である。古墳時代のもので、何らかの要因で混入したと思われる。

23はP3から出土した。縄文土器深鉢の底部である。

24～210は埋土中などから出土した。

24～189は縄文土器で、有文深鉢や無文深鉢、浅鉢、台付深鉢、台形土器などがある。

24～96は有文深鉢の口縁部や口縁部付近の破片である。

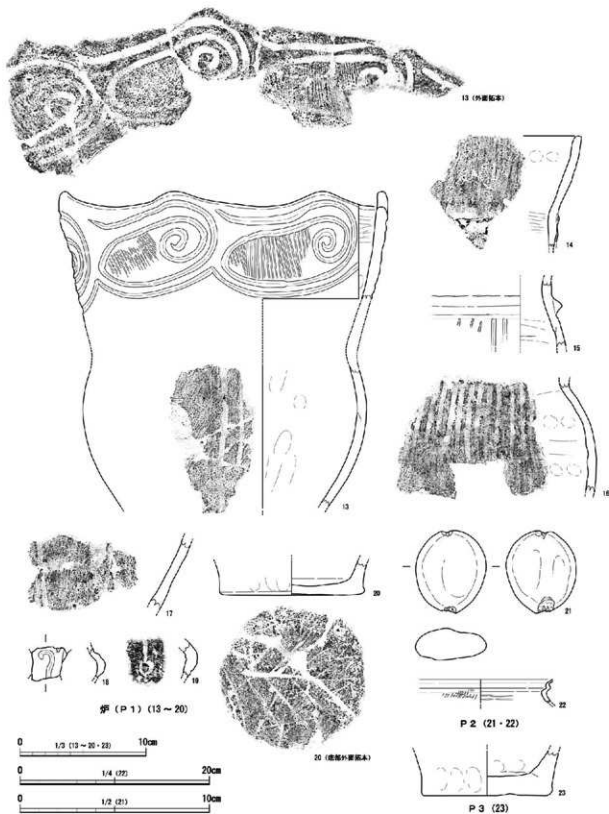
24～27は刺突文が施されるもので、おそらく口縁部直下に沈線による区画文を配すると思われる。24・27は区画文内に刺突文を充填している。24は竹管状の工具による刺突である。25は波状口縁で、口縁端部に刺突による列点文が施される。

28～48は口縁部直下に沈線による区画文を配するもの、もしくは区画文を意識した文様を描き、その内部を斜行沈線や条線によって充填するものである。30は主文となる渦巻文と区画文とが独立的に描かれたものである。頭部も連弧文によって画される。口縁部は波状口縁で、波頂部分に円形の押圧が施されている。体部には縦位の多条並行沈線が施されている。29・31・35・36・39は渦巻文と区画文が一体的に描かれる。31では区画文が比較的独立しているが、頭部を画する連弧文等の文様はなく、区画文の直下から縦位の隆帯を貼り付け、隆帯間を矢羽根状文で充填している。35や36では渦巻文と区画文がかなり一体化している。36は大きな渦巻文とそこから延びる沈線によって区画文状の文様を作り出している。

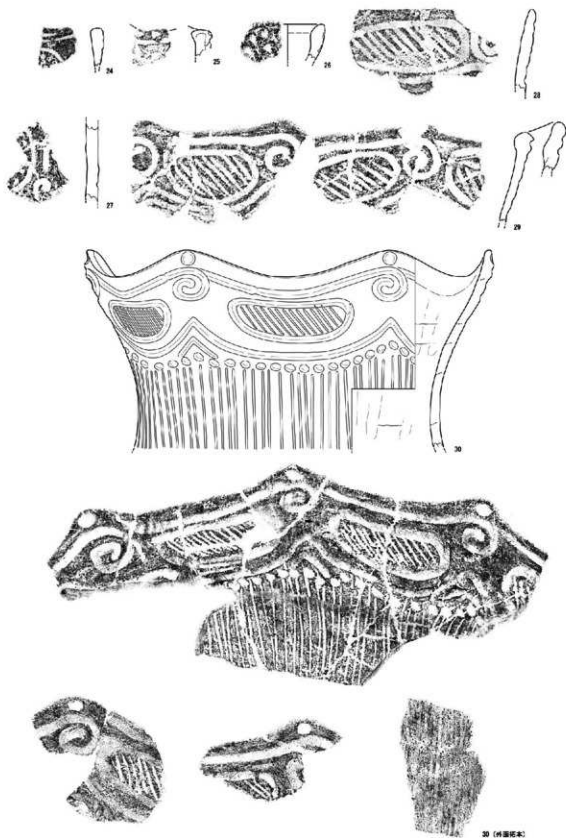
頭部は横位の隆帯によって明瞭に画される。体部にも縦位の沈線間に区画文内と同様の斜行沈線が施される。37は主文が渦巻文ではなく円形の区画文を斜行沈線で充填したものとなっている。頭部は沈線と列点文で画され、体部は縦位の太い条線のみとなる。39については渦巻文と区画文が完全に一体化し、さらに渦巻文・区画文ともに擬似的なものになっている。渦巻文直上にある波状口縁の波頂部の隆帯もかなり小さい。頭部を画する文様はなく、体部は区画文内の斜行沈線と同様の太い縦位の多条並行沈線のみを施す。40～48は小片で文様の全体像が不明であるが、45は平口縁で、口縁部を幅広に肥厚させ、斜め方向の条線を施している。その肥厚部より下位に、沈線による区画文が描かれる。他にはあまりみられない特徴をもつ個体である。47は口縁部直下に多条の連弧文、そしてその下位に斜行沈線で充填した区画文が配されているものと思われるが、斜行沈線が2条しか確認できず、区画文ではない可能性もある。

49～51は口縁部直下に区画文を意識した文様を配し、縦位の条線や並行沈線、矢羽根状文などを施すものである。49は主文となる渦巻文も小さな渦巻文とそれを取り巻くC字状の文様に分離し、その渦巻文の間を弧文で繋ぐ。頭部は多条の連弧文で画され、体部には縦位の蛇行沈線が施されている。50は口縁部直下に主文を配さず、多条の連弧文のみを施す。体部も縦位の並行沈線のみとなる。51は平口縁で、口縁部直下の横位の沈線と、頭部の連弧文によって区画文状の文様としているものと思われる。横位の沈線と連弧文とが接して明確な区画文となる可能性もあるが、主文となる渦巻文は連弧文と一体化し扇状文に近いことから、渦巻文と区画文という組み合わせはかなり崩れていると考えられ、39や49に近い発想の文様と推測される。

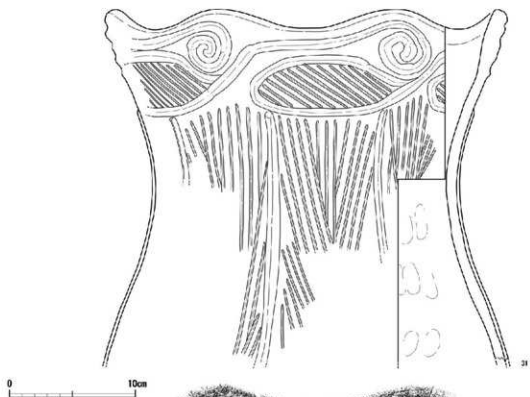
52～71も、小片であり文様の詳細は不明であるものの、口縁部直下に区画文を配するか、区画文を意識した文様を描いていると思われるものである<sup>2)</sup>。52はやや立体的な装飾をもつ口縁部片である。粘土帯の貼り付けによって口縁部を肥厚させるとともに口縁端部に孔を作り出し、外面にも深い円形刺突を施している。孔の周辺にはやや細い沈線で円弧を描



第44图 SH191出土遺物① (1/4、1/3、1/2)

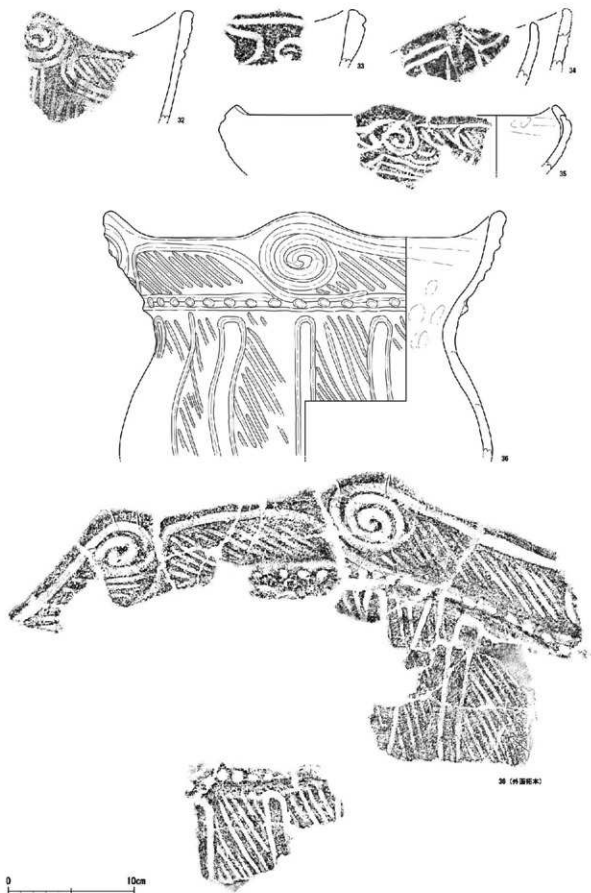


第45圖 SH191出土遺物② (1/3)

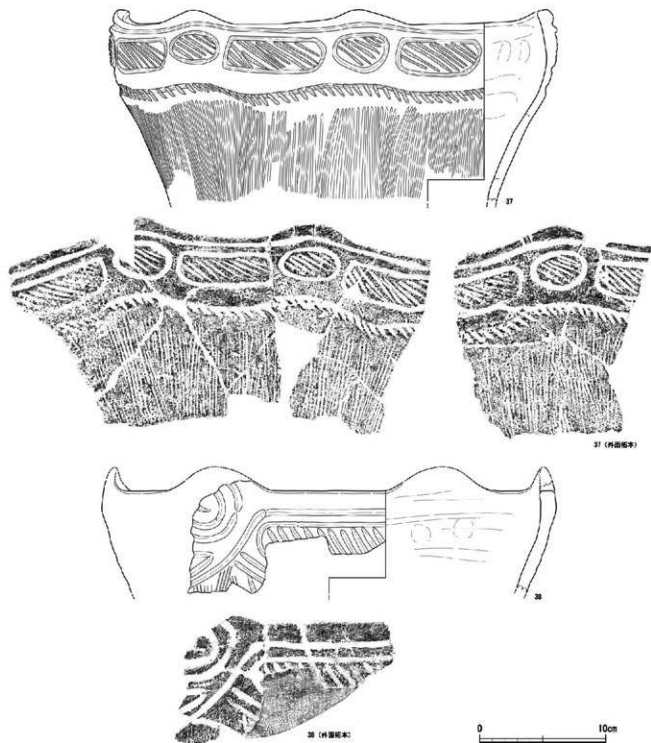


31 (外蓋部\*)

第46圖 SH191出土遺物③ (1/3)



第47圖 SH191出土遺物④ (1/3)



第48図 SH191出土遺物⑤ (1/3)

き、口縁部直下には連弧文と思われるものが認められる。53・54は同一個体と考えられる波状口縁の頂部やその付近の破片で、渦巻文と思われる文様の一部が遺存する。62は地文として縄文を施している。63はかなり幅広い沈線で文様を施しており、主文の

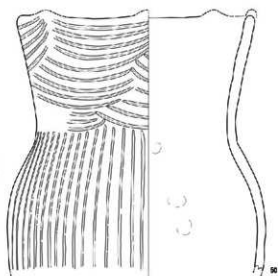
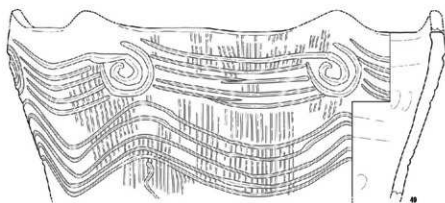
渦巻文と区画文が一体的に描かれている可能性が高い。68は口縁部直下から頸部にかけての破片で、隆帯と沈線による区画文をもつと思われる。隆帯上には刻目が施されている。

72～88は大波状口縁をもつものである。72は口縁

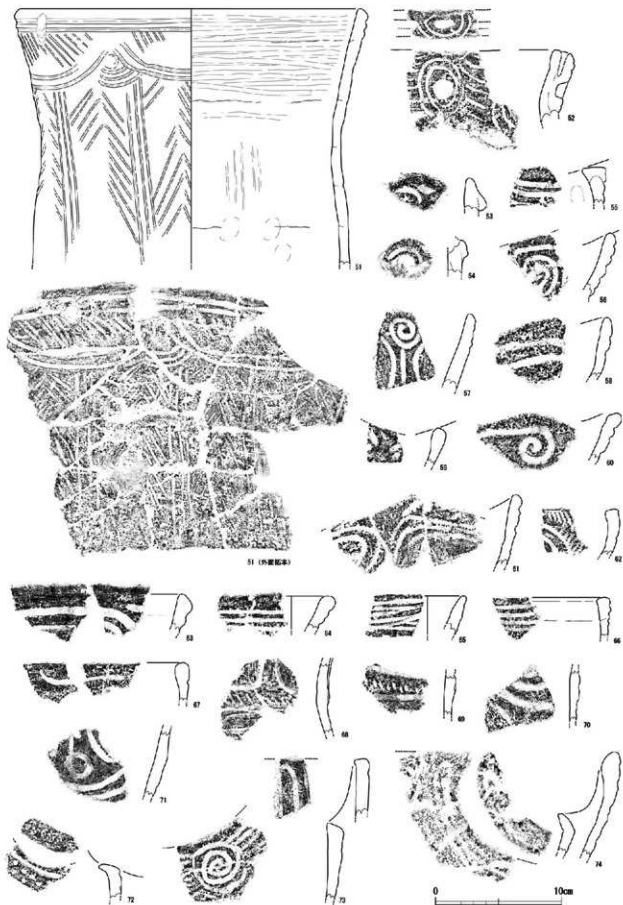




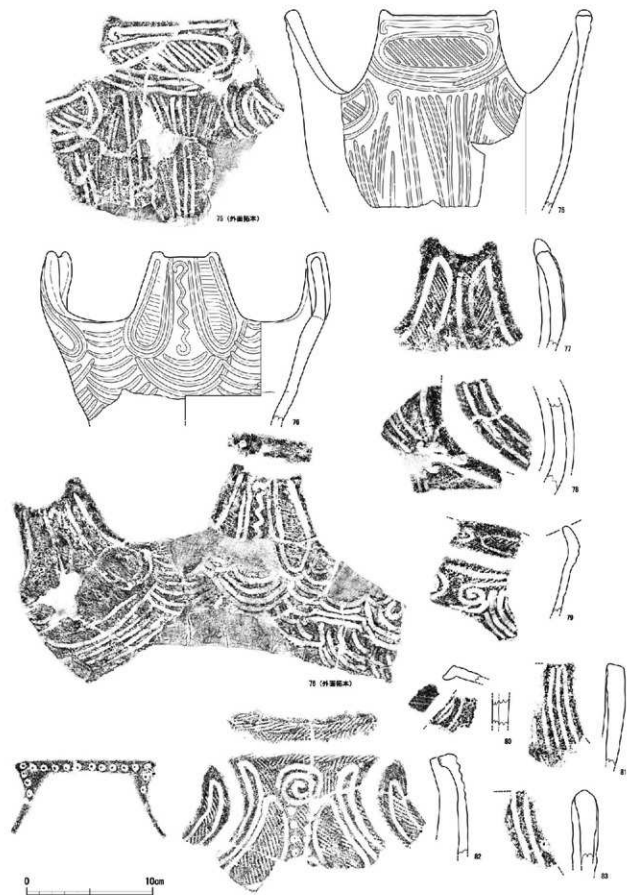
第49圖 SH191出土遺物⑥ (1/3)



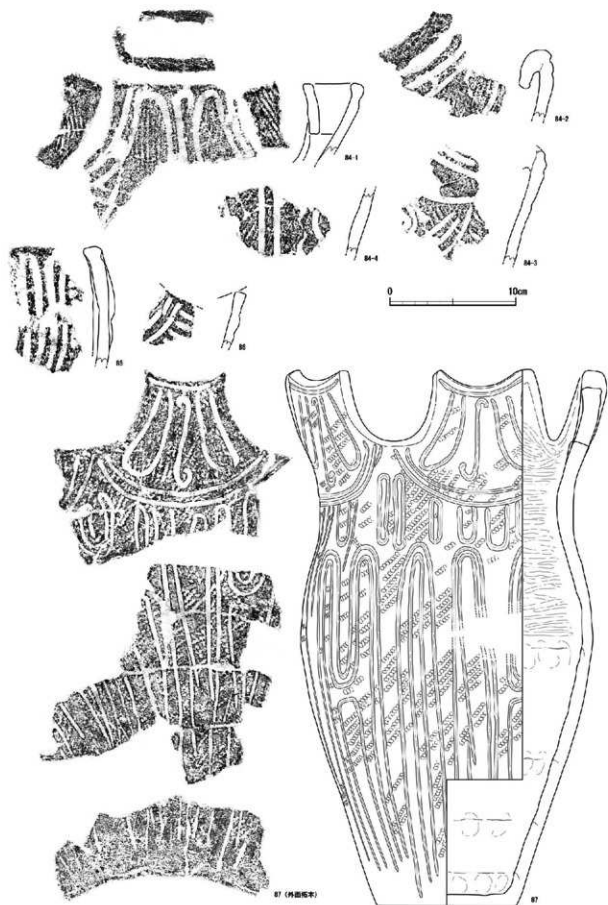
第50回 SH191出土遺物⑦ (1/3)



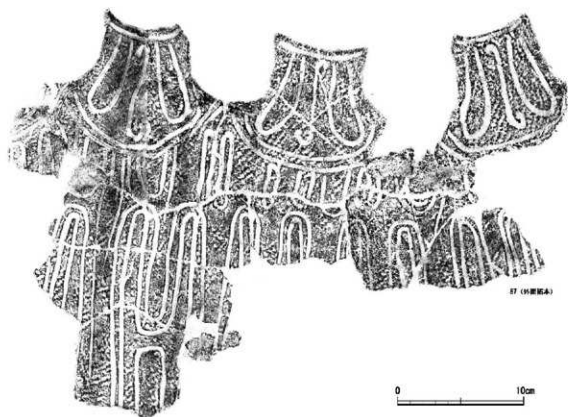
第51圖 SH191出土遺物⑧ (1/3)



第52圖 SH191出土遺物⑨ (1/3)



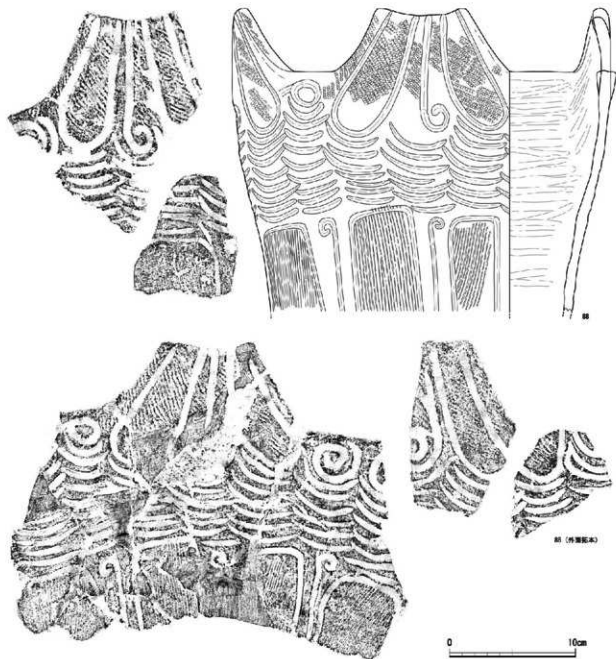
第53圖 SH191出土遺物① (1/3)



第54図 SH191出土遺物① (1/3)

部直下に刺突文を施す。口縁端部は拡張して面を作り、縄文を施している。74も口縁端部を拡張して面を作り、沈線によって文様を施す。75は他の個体と比べてやや特異な文様構成である。波頂部の上端に横位の端部が蕨手状になる直線を描き、その下に楕円形の区画文を配する。区画文内は斜行沈線で充填し、区画文より下には多条の弧文を配する。波頂部間の口縁部直下には区画文を配し、体部には沈線による矢羽根状文を施す。波頂部はおそらく4単位で、波頂部の幅が広いのも特徴的である。76は波頂部の中央に縦位の蛇行沈線を描き、その両側に沈線によるU字状の区画文を配する。区画文内は細い条線で充填する。こうした中央部文様と両側の区画文がSH191出土の大波状口縁深鉢の典型的な文様構成となっている。ただし、SH191出土の大波状口縁深鉢は縄文施文の傾向が強い中、この個体は沈線と条線主体で施文している。波頂部はおそらく4単位で、2単位が遺存しているが、片方の波頂部の上面には、片側のみに小孔が穿たれている。波頂部間の口縁部直下には多条の連弧文を配している。なお、この個

体の破片の一部は炉の内部から出土している。77は波頂部の両側の区画文が三日月形を呈すると思われる。区画文内は縄文で充填される。78～80は口縁端部を拡張し、沈線や縄文による文様を施している。82も口縁端部を内側に拡張して面を作り、沈線や縄文による文様を施すが、さらに口縁端部内面にも面を作り、竹管状工具による刺突文を施している。84は波頂部が筒状をなすもので、今回の調査では唯一の出土例である。波頂部の他に、同一個体と考えられる口縁部付近の破片が複数出土した。縄文を地文とし、波頂部の中央に蕨手状文、その両側に区画文を配する。中央の蕨手状文は下端が渦巻文となる可能性もある。波頂部の側面にも縄文が施されている。87はほぼ全体を復元できるものである。口縁部から体部に至るまで縄文を地文とし、太い沈線でS字状の蕨手状文や区画文、弧文等を描く。波頂部は4単位が遺存しており、本来は5単位と思われる。内面上半はミガキによって丁寧に調整されている。88も口縁部付近は縄文を地文とするが、体部は沈線による方形の区画を配し、内部を細い条線で充填する。波頂



第55図 SH191出土遺物⑩ (1/3)

部間の口縁部直下にはやや雑な渦巻文を配する。頸部には多条の連弧文を配している。波頂部は3単位が遺存し、本来は4単位と思われる。

89～92は頸部付近で明瞭に括れるもので、頸部を横位の隆帯などで明瞭に画し、頸部より上位が基本的に無文になると思われるものである。89は典型的な個体で、平口縁で口縁部はやや直線的に外方へ開く。口縁端部には刻目が施される。頸部には縦方向の橋状把手が貼り付けられており、S字状の双頭渦

文が描かれている。体部は条線を地文とし、沈線による縦方向の区画文状の文様を配する。また、縦方向の隆帯も貼り付けられている。90・91は89のような器形の深鉢の頸部片と考えられる。91の体部は条線を地文としている。92も、89のような個体の把手と考えられる。

93～95は縄文や多条並行沈線、条線のみで施文されたものである。93は口縁部の小片で、他の文様が施されている可能性もあるが、遺存範囲には縄文の

みが施されている。94は口縁部直下から体部にかけて縦位の多条並行沈線が施されている。95は全体のかんりの部分が遺存する。体部中位から口縁部を中心に縄文が施され、底部付近はほぼ無文となっている。口縁端部には竹管状の工具による列点文が2列施されている。底部付近の外側はやや赤化しており、被熱と思われる。なお、この個体の破片の一部は埴の内部から出土している。

96は以上のいずれともやや異なる特徴をもつ口縁部片である。口縁部は内側に屈曲しており、口縁部外面には2条の沈線が認められる。

97～130は有文深鉢等の体部片と思われるものである。

97～102は縦方向の沈線で体部を画し、その間に斜行沈線や矢羽根状文を施すものである。99はやや太い沈線による斜行沈線を施す。100・101は太い沈線で矢羽根状文を施す。文様や胎土等からみると、172のような台付深鉢の体部の可能性もある。102は細い沈線ないし条線を矢羽根状に施す。

103～105は縄文を地文とし、縦位の沈線等で体部を画するものである。103は沈線とともに縦位の隆帯を貼り付ける。104は縦位の沈線を3本組ないし2本組で施しており、頭部には橋状把手を貼り付ける。把手付近にも縄文が施される。小型のもので、体部下半の形状なども鑑みると、台付深鉢の可能性もある。105は頭部付近の破片で、あまり湾曲しない多条の連弧文が認められる。

106～117は条線を地文とし、縦位の沈線等で体部を画するものである。106は縦位の蛇行沈線が施されている。107・109・112・113は縦位の隆帯が貼り付けられている。115・116は頭部付近の破片で、連弧文が施されている。117は底部から頭部にかけてかなり復元できたもので、体部には細かい条線と縦位の沈線のみが施されている。

118～122は無文の地に縦位の沈線や隆帯のみが施されているものである。119・120は蛇行沈線が施されている。122は縦位の隆帯を貼り付ける。

123～126は縦位の条線や多条並行沈線のみを施しているか、それに類するものである。125は幅広くごく浅い多条並行沈線を施す。126は細かい条線のみが施されている。

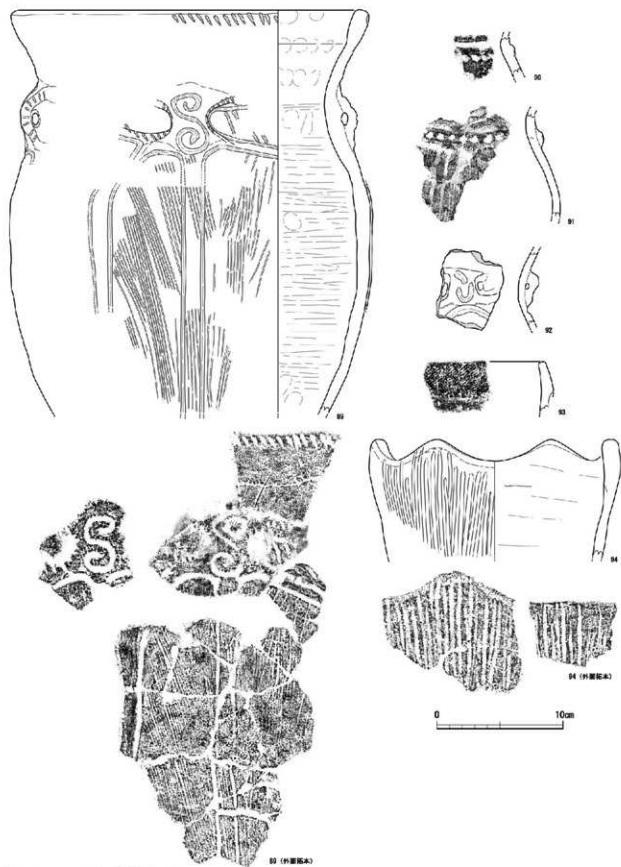
127～130はその他の深鉢の一部と思われる破片である。127には隆帯と思われるものが遺存しており、頭部付近の破片と思われる。128は細片で器形がほとんど復元できないが、かなり湾曲する破片で、細い横位の隆帯を貼り付け、隆帯上には刻目を施す。129は橋状把手で、89のような器形の深鉢に付属する可能性もあるが、やや頭部の屈曲が緩く、異なる器形のものとも考えられる。把手上にはごく浅い沈線で蛇行する文様が描かれており、他にも沈線による文様が把手周辺に施されている。130は板状の土製品の破片である。明瞭な刺刺面は確認できないが、深鉢の口縁部の肥厚部が剝離したものの可能性が考えられる。

131～140は無文深鉢と思われるものである。131～137は口縁部の小片で、口縁部の立ち上がりの角度などから深鉢としたが、浅鉢の可能性もある。133には沈線状のものがみられるが、工具等のアタリの可能性が高い。134はやや口縁部を肥厚させる。135は口縁端部が内傾する面をなす。口縁部も全体的に内湾する。138は直線的に外方へ開く口縁部である。140は接合しないが同一個体と考えられる底部と体部片である。体部内面には一部ケズリが施されている。底部外面には敷物痕が明瞭に認められる。

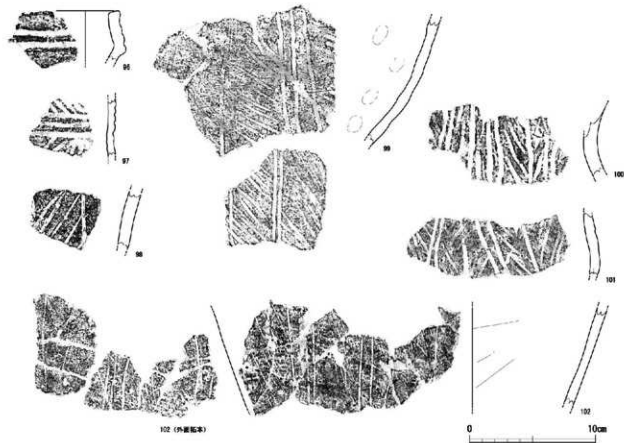
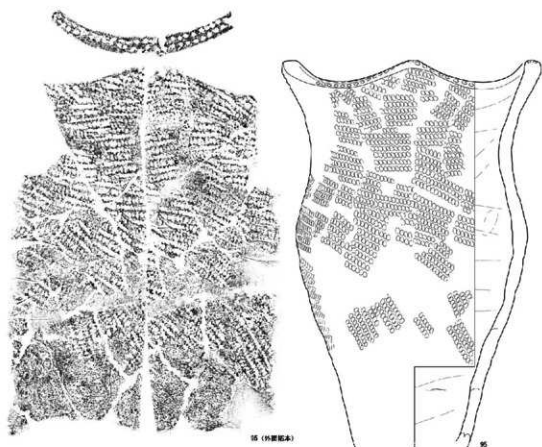
141・142は有文浅鉢と思われるものである。141は薄手の口縁部片で、内湾する。口縁部外面には刺突による列点文が施される。142は斜め方向に隆帯を貼り付けている。隆帯による区画文の可能性もあるが、他にも蕨手状文や同心円状の文様などが施され、やや複雑な文様構成である。

143～153は無文浅鉢と思われるものである。143は小型の鉢状の器形を呈する。口縁端部は内傾する面をなし、外面はナデによって調整される。145はやや大型のものである。口縁部の小片のため、深鉢の可能性もある。146は口縁部を内側に折り返すか、口縁部内面に粘土帯を貼り付けることによって肥厚させている。147は口縁部を外面に折り返して肥厚させていると思われる。148～153は波状口縁のものである。148は焼成前に穿孔されている。149は比較的精良な作りで、小さくつまみ出すような波状口縁である。150・151・153は類似した器形のものであるが、150のみ内外面をミガキで丁寧に調整してい

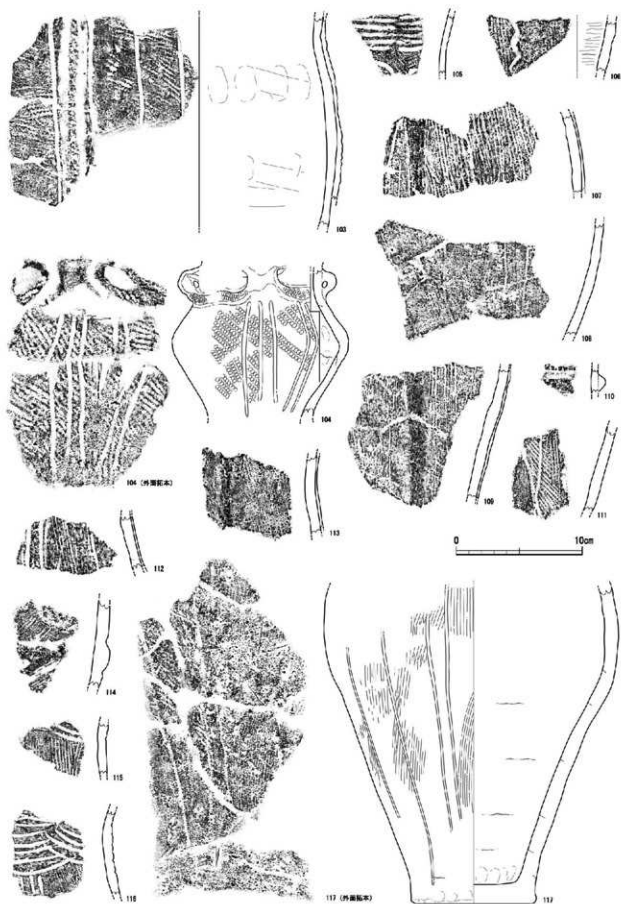




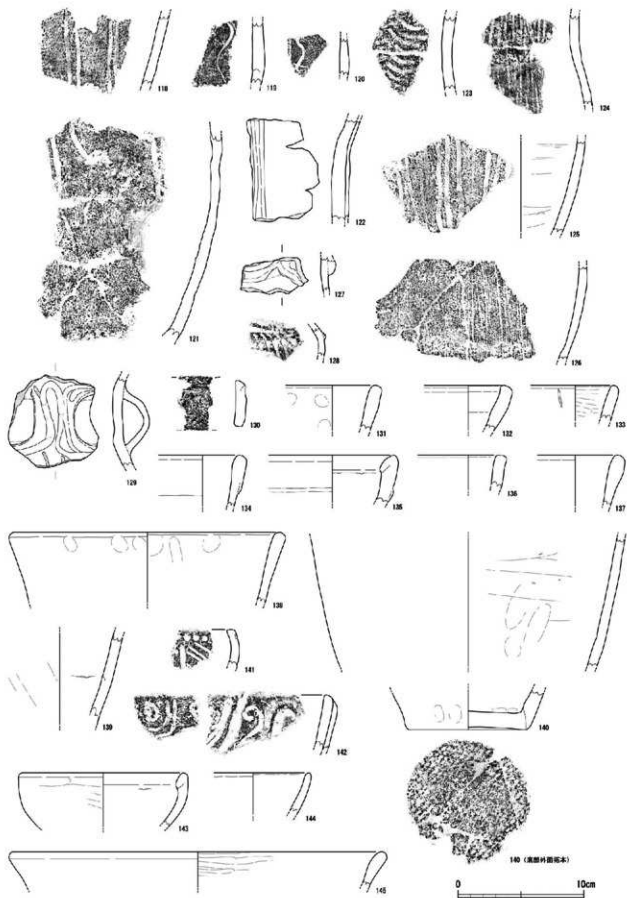
第56圖 SH191出土遺物① (1/3)



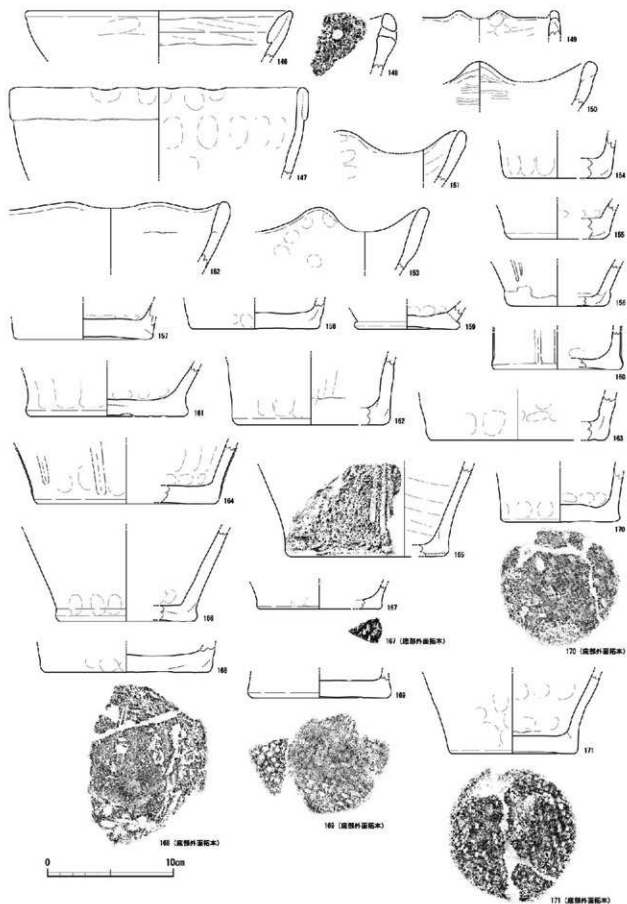
第57圖 SH191出土遺物⑩ (1/3)



第58圖 SH191出土遺物⑤ (1/3)



第59圖 SH191出土遺物⑩ (1/3)



第60圖 SH191出土遺物① (1/3)

る。

154～171は深鉢ないし浅鉢の底部である。159は円盤状の底部から体部を積み上げていった可能性が高い。160・164には縦位の隆帯がわずかに遺存している。165には縦位の沈線と条線が施されており、156にも縦位の沈線が遺存する。167～171は底部外面に敷物痕が認められる。169・171は編物の痕跡と思われる。168・170などは不鮮明であるが、168は編物や植物の葉ではないものと思われる。

172～187は台付深鉢ないし台形土器である。172は最も遺存状態のよいものである。体部には太い沈線による矢羽根状文が施されている。脚台部には隆帯が貼り付けられ、縦長の楕円形の透孔が開けられている。173は台付深鉢の底部付近の破片で、条線による矢羽根状文と思われるものが認められる。174～187は脚台部の破片で、台付深鉢か台形土器か判別が困難である。ただし、172の器形を参考にすれば、185～187を除いてほぼ台付深鉢と考えられよう。多くの個体が縦位の隆帯を貼り付け、隆帯間に透孔を開ける。181・183などは縦長の楕円形の透孔と思われ、172とも共通するが、184は円形の透孔を縦に2孔開けている。185は外面には縦位の隆帯が貼り付けられ、その横に沈線による区画文が配される。区画文の内部は条線によって充填される。他の個体より大型ではあるが、こうした施文は深鉢とも共通しており、台形土器よりも台付深鉢と考えた方がよいように思われる。186・187も大型のもので、187はおそらく円形の透孔を縦に2孔開けるものである。186については器形からみて台形土器の可能性があらう。

188は台形土器である。ほぼ全形が判明する資料である。透孔以外に文様はない。内外面ともナデやオサエによって調整される。透孔は円形の2段で、6方向に開けられている。被熱や擦痕など、使用痕と思われるものは認められない。

189は器種が不明なものである。小片であるが、形状や調整から何らかの脚部として図化した。脚端部の接地面は幅広の平滑面となっている。文様や透孔の痕跡は認められない。

190～210は石器や剥片などである。

190はナイフ形石器の可能性のあるものである。

チャート製で、縦長剥片の側縁に刃潰し状の剥離が施されている。

191は尖頭器と思われるものである。チャート製で、基部のみが遺存する。厚みがあり、両面にやや大きな単位の剥離調整が認められる。ただし、側縁の一部に原石面とみられる面が残っており、尖頭器としては違和感がある。石匙などの破片である可能性も考えられる。

192～196は石鏃である。いずれも凹基無茎である。192・195・196はサヌカイト製で、195は主刺離面を大きく残し、側縁に細かな調整剥離を加えて整形している。196には原石面と思われる風化面が認められる。193はチャート製、194は黒曜石製である。

197は石鏃と考えられる。サヌカイト製で、やや不整形でC字形に近い形状を呈する。

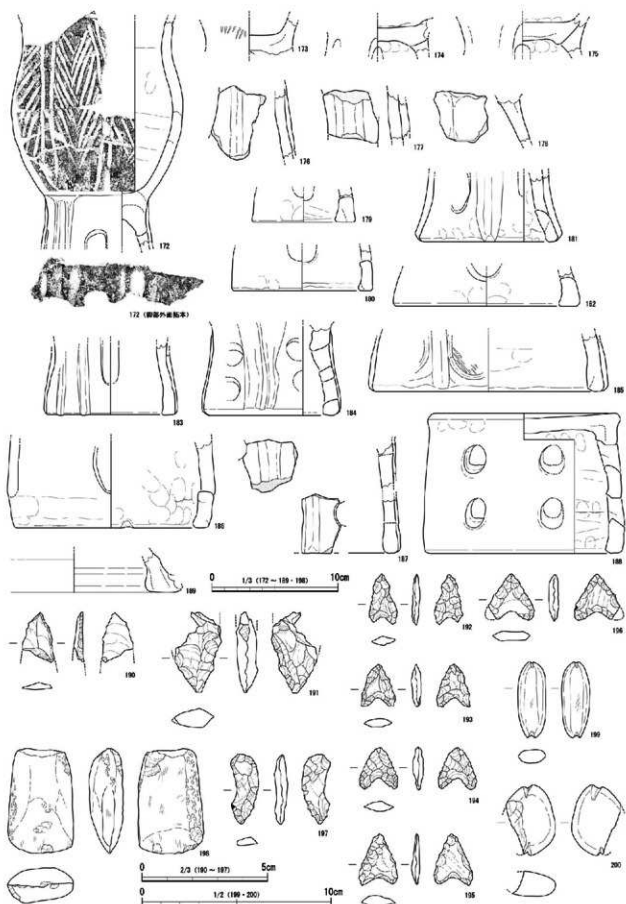
198は磨製石斧である。ハイアロクラスタイト製と思われる。側面に不明瞭ながら面が認められる。小型で、側面付近を中心に整形時の敲打痕が残る。

199・200は切目石鏃である。199は肌理の細かい泥岩製で、やや扁平な長楕円形の鏃の両端を研磨によって施溝している。表面の一部に研磨痕と思われる擦痕が認められる。200はやや軟質のホルンフェルス製と思われ、一部を欠損する。

201～204は磨石・敲石である。201・202は扁平な円礫で、201は片面が使用によって顕著に摩滅し、摩滅していない方の面の中央と、側縁の一端にはわずかに敲打痕が認められる。202は両面が使用によって摩滅しており、やはり側縁の一端にわずかに敲打痕が認められる。203・204はチャートの円礫を利用した敲石で、両端を中心に敲打痕が顕著に認められる。

205～207は石皿（台石）である。205は小片であるが、火砕岩製<sup>2)</sup>で片面に使用による摩滅が明瞭に認められる。206は明確な使用痕が確認できないが、上面のやや凹んだ部分が若干摩滅しているものと思われ、石皿（台石）として利用されていた可能性がある。また、一部被熱している。207は不整形な砂岩の礫を利用したもので、上面には平滑な部分が認められる。

208～210は剥片である。208はサヌカイトで、原石面が残る。209・210はチャートである。



第61圖 SH191出土遺物① (1/3、1/2、2/3)



第62図 SH191出土遺物④ (1/4、1/3、2/3)

SH193/303 (第63図211~226) 211~214は建物内の落ち込み状の土坑SK261から出土した。いずれも縄文土器である。

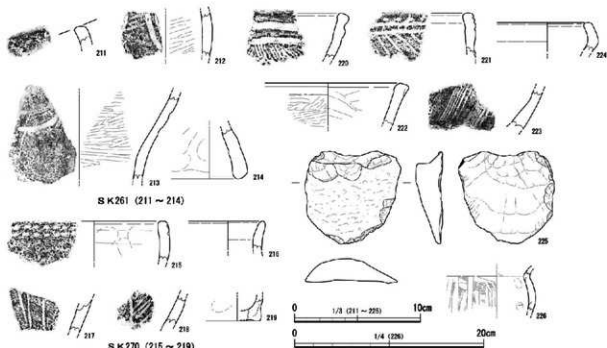
211は深鉢ないし浅鉢の口縁部の小片で、波状口縁である。212・213は深鉢の体部片で、太い沈線による文様が施されている。212の沈線は区画文とも思われ、縄文も施されている。214は台付深鉢の脚台部片と思われる。

215~219は支柱穴の可能性もある建物内の土坑SK270から出土した。いずれも縄文土器である。

215は有文深鉢の口縁部片と思われる。刺突による列点文が2列施される。216は口縁部の小片である。217・218は深鉢の体部片で、並行沈線や斜行沈線による文様が描かれている。219は底部の小片である。

220~226は建物内のビットなどから出土した。





第63図 SH193/303出土遺物 (1/4、1/3)

220～224は縄文土器である。220・221は有文深鉢の口縁部片で、いずれも平口縁と思われる。口縁部直下に沈線による区画文を配し、その内部を条線や斜行沈線で充填している。221は口縁端部付近に列点文も施されている。222は無文深鉢の口縁部片と思われる。外面はミガキで丁寧に調整されている。223は深鉢の体部片で、条線が認められる。224は内側に強く屈曲する無文の口縁部片で、浅鉢の可能性がある。

225は石器で、礫器の可能性のあるものである。ホルンフェルスの円礫から剥離した大型の剥片で、片面には原石面が残る。側縁には、若干の調整跡のない使用痕と思われる小剥離が認められる。楔等として使用されたものかもしれない。

226は土師器で、甕の頸部付近の破片である。古墳時代前期のもので、混入と考えられる。

**SH248 (第64～68図227～270)** 227は埴(P1)から出土した。埴体として使用されていた縄文土器の有文深鉢で、埴として使用するにあたって除去された底部以外は、かなりの部分が遺存している。平口縁で、器形はキャリパー形を呈する。口縁部直下には、隆帯と沈線によって渦巻文とそれと一体化した方形の区画文が配されている。区画文内及び渦巻

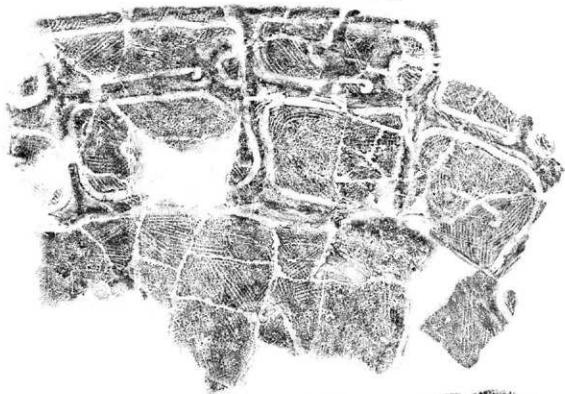
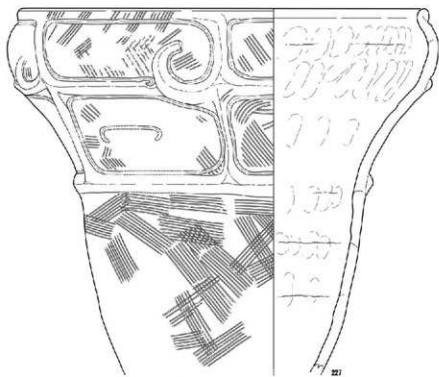
文内は条線で充填されており、区画文内は一部矢羽根状に条線が施されている。また、この区画文直下にも隆帯と沈線による大きな方形の区画文が配されている。この区画文内もやはり条線によって充填されており、また中央には双頭渦巻文の文様が描かれている。これらの文様の施文順序について文様同士の重複関係等からみると、隆帯によって渦巻文と区画文を描いた後に条線を施し、その後に隆帯に沿って沈線を施しているものと考えられる。頸部は幅広の隆帯を横位に貼り付けて画し、体部には条線のみが不定方向に施されている。

228～270は埋土中などから出土した。

228～265は縄文土器である。

228～245は有文深鉢の口縁部ないし口縁部付近の破片である。228は渦巻文を隆帯を貼り付けて描いている。渦巻文の横には大きな刺突による文様が施されている。229は縦位に隆帯を貼り付けた口縁部片である。口縁部直下に隆帯による区画文を配し、列点文状の刺突により区画文内を充填しているものと思われる。

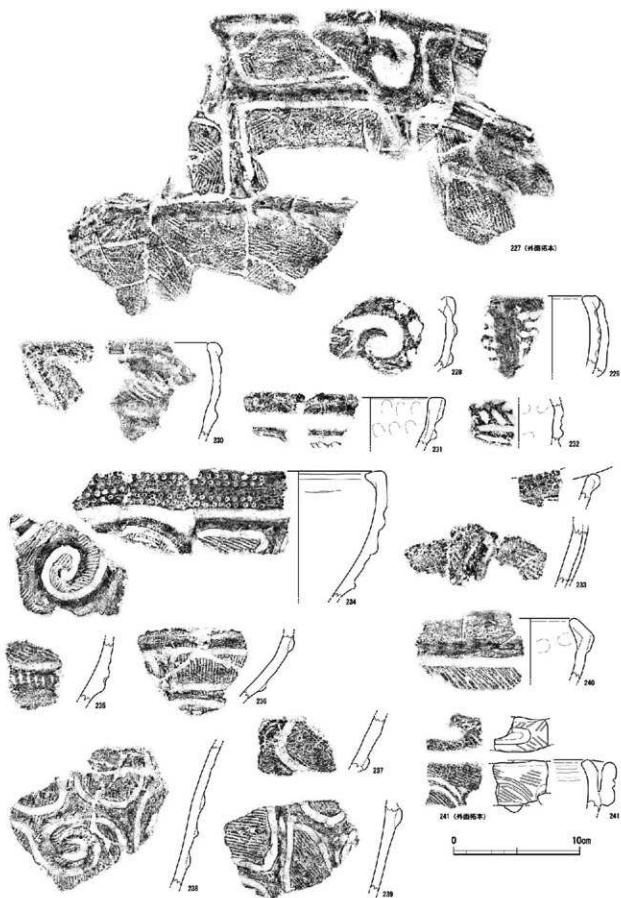
230～240は口縁部直下に区画文を配し、区画文内を条線や斜行沈線で充填したと思われるものや、それに類するものである。230・231のように沈線だけ



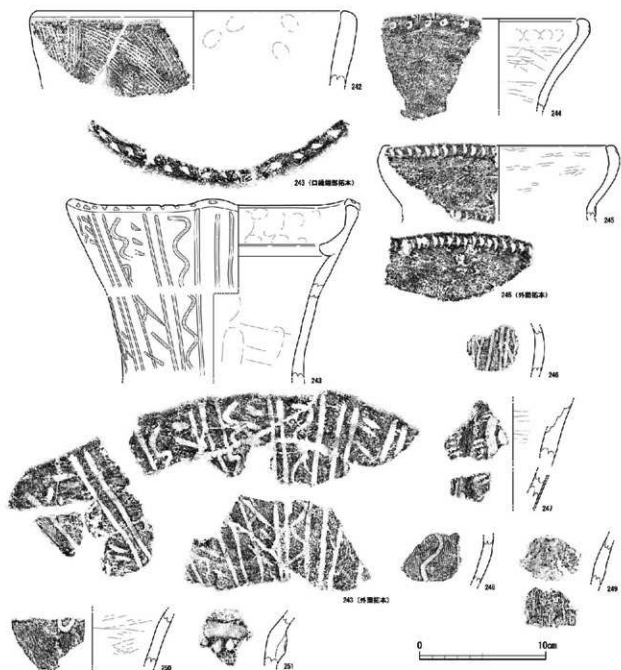
炉 (P 1) (227)

0 10cm

第64図 SH248出土遺物① (1/3)



第65圖 SH248出土遺物② (1/3)

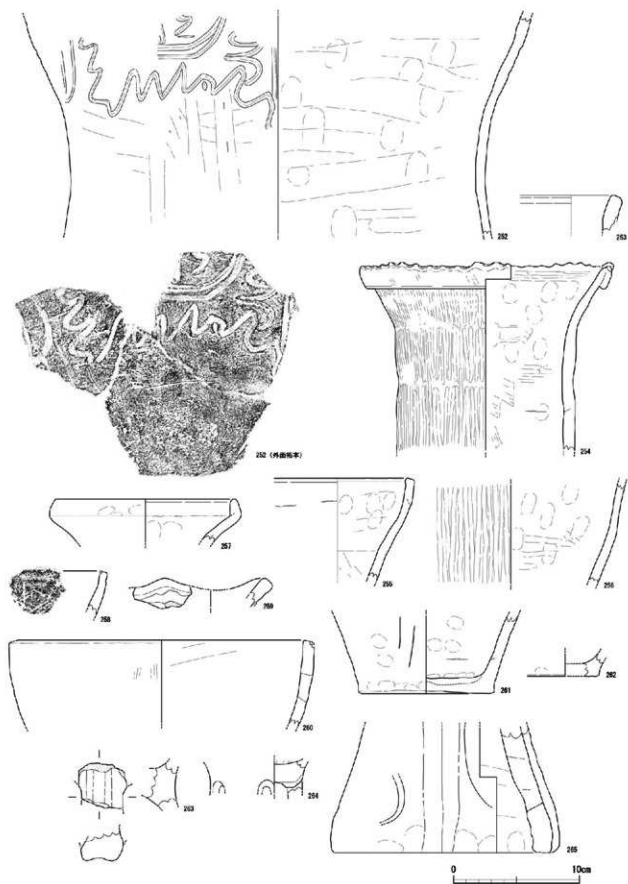


第66図 SH248出土遺物③ (1/3)

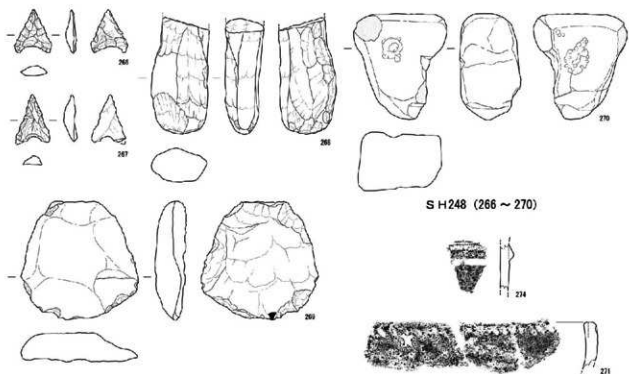
でなく隆帯を貼り付けて区画文を描くものが主体を占める。233は波状口縁で縄文を施す。234は平口縁で、太い沈線や隆帯で渦巻文や区画文状の文様を描く。渦巻文や区画文内は条線によって充填される。また、口縁部付近には竹管状の工具による列点文が4列施されている。隆帯や条線の用い方など文様の雰囲気には227と類似する部分が認められるが、小牧南遺跡で出土した縄文土器の中では特異なもので、他地域との関係が考えられる。235~239も似た特徴

を有しており、234~239のうちいくつかは同一個体の破片と考えられる<sup>1)</sup>。240は肥厚する平口縁の口縁部で、内側へ緩く屈曲している。口縁部直下の区画文と思われる文様の内部には深く鋭い条線が施されている。また、外面にはススが附着している。

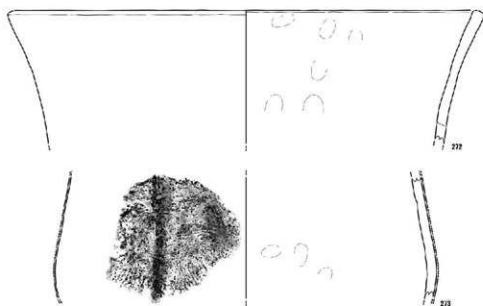
241は立体的な装飾をもつ深鉢の口縁部片である。口縁部外面に粘土帯を貼り付け、立体的な透孔状の装飾を作り出している。口縁部外面や口縁端部には沈線や条線による文様が施されている。



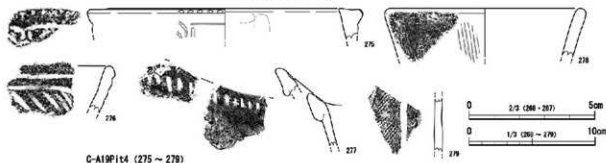
第67圖 SH248出土遺物④ (1/3)



S H248 (266 ~ 270)



S F310 (271 ~ 274)



C-A19P1t4 (275 ~ 279)

S H301 (271 ~ 279)

第68圖 S H248出土遺物⑤、S H301出土遺物① (1/3、2/3)

242は条線のみが施されたものである。平口縁で、深く鋭い条線が不定方向に施されている。

243は沈線のみで施されたものである。小さな波状口縁で、内面の口縁部直下には蓋受け状の突帯がめぐらされている。口縁端部には刺突による列点文が施され、外面には太い沈線で文様が描かれる。口縁部と頸部、体部の区別は明確ではなく、口縁部から縦位の並行沈線や蛇行沈線を描き、部分的に列点文や斜行沈線状の短い沈線を配している。

244・245は口縁部直下が無文のものである。244は口縁部が短く内湾し、口縁部外面に竹管状の工具で刺突が施されている。245は緩やかに内湾する口縁部片で、頸部は比較的強く屈曲するものと思われる。口縁部と頸部に列点文が施されており、頸部には突帯が貼り付けられている可能性もある。

246～252は有文深鉢の体部片である。246は沈線による文様が描かれている。247は縄文を地文とし、隆帯や沈線が認められる。248・249は条線を地文としている。251は頸部の破片で、比較的明瞭に屈曲し、外面には横位の隆帯が貼り付けられている。252は体部の大きな破片である。頸部付近の破片で、頸部より上には太い沈線による文様が描かれるが、体部は無文でケズリによる調整が認められる。文様は縦位や横位の蛇行沈線を主体とするが、粗雑な印象を受ける。破片の上部には弧状の沈線も描かれており、口縁部直下に区画文状の文様を配していた可能性もある。

253～256は無文深鉢である。254は無文ではあるが、口縁部を肥厚させ、口縁端部を押圧することによって細かい単位の波状口縁としている。外面は全体的に縦方向のミガキで丁寧に調整されており、内面にも部分的にミガキが施されている。256も外面をミガキによって丁寧に調整している。

257～260は浅鉢と思われるものである。257は口縁部が強く屈曲する。無文の可能性が高い。258は沈線による文様が施されている可能性があるが、小片で不明瞭である。259は波状口縁で、口縁部直下に横位の隆帯が剥離したような痕跡が認められる。260は緩やかに内湾する口縁部片で、無文である。

261・262は深鉢ないし浅鉢の底部である。261は縦位の沈線と思われるものが一部遺存しており、器

形等からみても深鉢の可能性が高い。

263～265は台付深鉢の脚部片である。263は縦位の隆帯が2条認められ、両側には透孔の痕跡が残る。264は底部付近の破片で、楕円形の透孔が一部遺存している。265には幅広の縦位の隆帯が貼り付けられており、楕円形の大きな透孔が開けられている。ただし、2箇所残る透孔の形状はやや異なっており、部位によって円形の透孔も開けられていた可能性がある。

266～270は石器である。

266・267は石鏃である。266は下呂石製、267はサヌカイト製である。267は片面に主剥離面を大きく残す。

268は打製石斧かその未製品と考えられるものである。ハイアロクラスタイト製であることから、磨製石斧の未製品の可能性も考えられる。大きな剥離によって全体の形状を整えているが、明瞭な刃部は作り出されていない。基部は欠損している。

269は磯器の可能性もあるものである。ホルンフェルスの円礫から剥離した大型の剥片で、片面には原石面が残る。側縁には、不明瞭ながら若干の調整剥離ないし使用痕と思われる小剥離が認められる。楔等として使用されたものかもしれない。

270は凹石ないし蔽石である。全体に風化が著しいが、T字形の不整形な礫の両面に、蔽打による浅い凹みが認められる。

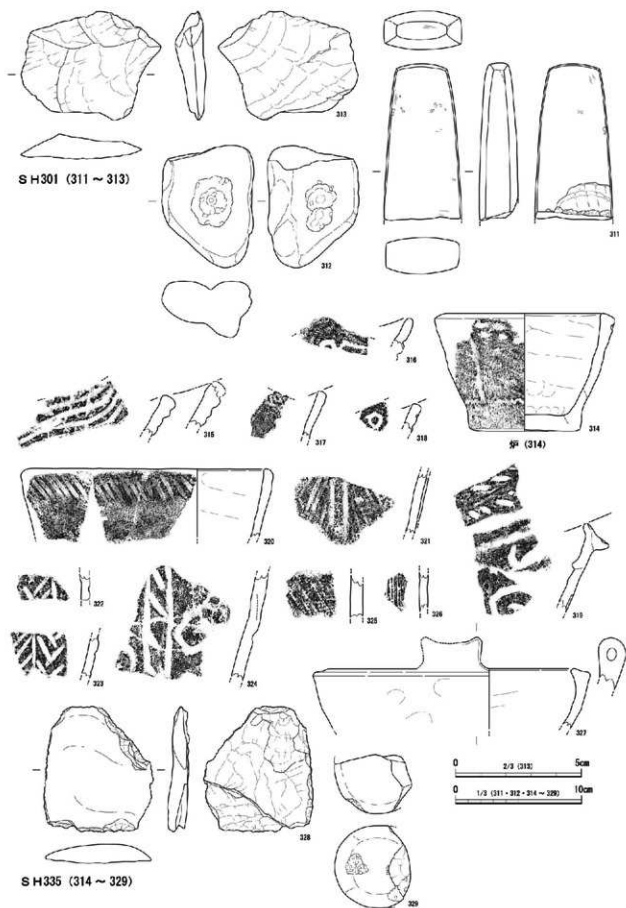
**SH301 (第68～70図271～313)** 271～274は炉SF310から出土した。いずれも縄文土器である。271は浅鉢の可能性のある口縁部片で、口縁部外面に刺突による列点文が施されている。272は無文の口縁部片で、平口縁である。273は体部片で、縦位の隆帯が貼り付けられている他に文様は認められない。274は有文深鉢の体部片で、横位の隆帯と沈線による文様が施されている。

275～279は建物内のピットC-A19P14から出土した。いずれも縄文土器の有文深鉢と思われる。275は断面がし字形を呈する口縁部片で、口縁端部に刻目を施す。口縁部直下にも沈線で区画文状の文様を描く。276も口縁部直下に沈線による区画文を配し、区画文内を斜行沈線で充填する。277は波状口縁で、口縁部内面を肥厚させている。おそらく内傾すると



第69圖 SH301出土遺物② (1/3)





第70圖 SH301出土遺物③、SH335出土遺物 (1/3、2/3)

思われるが、小片のため不確実である。口縁端部には列点文が施されている。278は条線のみで施文されていると思われる。279は縄文と沈線による文様が施されている。

280は建物内のビットC-A19Pit2から出土した。縄文土器の有文深鉢の口縁部片である。波状口縁で、沈線による文様が施されている。

281は建物内のビットC-A19Pit5から出土した。縄文土器深鉢の口縁部の小片と思われ、沈線による文様がわずかに遺存している。

282は建物内のビットC-A19Pit9から出土した。縄文土器の有文深鉢である。平口縁で、頸部は括れる。口縁部直下には沈線による楕円形の区画文を配し、区画文内は条線で充填する。主文となる渦巻文等の文様が描かれていたかは不明である。区画文より下位には縦位の条線のみが施されており、全体的に装飾性は乏しい。

283～313は埋土中などから出土した。

283～309は縄文土器で、有文深鉢や台付深鉢などがある。

283～295は有文深鉢の口縁部や口縁部付近の破片である。

283～293は口縁部直下に沈線による区画文を配するものである。283は口縁部に刺突による列点文が施される。284～287は同一個体の可能性が高いものである。波状口縁で、縄文を地文とし、波頂部に主文となる渦巻文の代わりに円形の区画文、波頂部間には楕円形の区画文を配している。290には渦巻文の一部と思われる文様が認められる。292は区画文内を斜行沈線で充填しているものと思われる。

294・295は大波状口縁を有するものである。294は沈線で文様を描き、口縁端部は肥厚させて面を作る。295も沈線で文様を描く。

296・297は深鉢ないし浅鉢と思われるものである。296は列点文を施す。297は小片のため器形や文様などは不明だが、口縁部は短く外方に屈曲する。

298～303は有文深鉢の体部片である。298は沈線による矢羽根状文を施している。299は縄文を地文とし、沈線で文様を描く。300も縄文を施しており、沈線による文様の一部が遺存する。302は縄文のみ、303は条線のみが認められる。303の条線は矢羽根状

に施されているようにも見受けられる。

304は橋状把手で、深鉢の体部に貼り付けられたものと思われる。文様は認められない。

305～308は台付深鉢の底部である。307には条線が施されている。

309は台付深鉢の脚台部である。小片で、陸帯や透孔は遺存していない。

310は緩やかに湾曲する帯状の土製品である。小片で、剝離面が明瞭に確認できないため輪状のものとして図化した。縄文土器の装飾の一部が剝離したものである可能性も考えられる。

311～313は石器や剥片である。

311は磨製石斧である。両側に明瞭な面を作り出している定角式の磨製石斧で、砂岩製である。非常に丁寧に研磨されており、整形時の敲打痕はほとんど残されていない。刃部は欠損しているが、敲石として再利用した痕跡は認められない。312は凹石である。不整形な縦の両面に、敲打による凹みが認められる。313は剥片である。流紋岩で、石鏝や削器等の刃物の素材とは考えにくい。人為的に剝離されたものと思われる。打製石斧の製作に伴う剥片などの可能性があろう。

**S H335 (第70図314～329)** 314は炉から出土した。縄文土器の鉢ないし浅鉢である。口径12.4cmと小型のもので、口縁部直下に竹管状あるいは棒状の工具の押し引きによる列点文が2列施されている以外には、文様は認められない。

315～329は埋土中などから出土した。

315～327は縄文土器である。有文深鉢や無文浅鉢がある。

315～320は有文深鉢の口縁部の破片である。315は波状口縁で、数条の沈線が施されている。316・317には縄文が施されている。318は竹管状の工具による刺突が施されている。319は波状口縁で、口縁端部を断面T字形に拡張する。拡張面には列点文を施す。口縁部直下には渦巻文と思われる文様が配されている。320は直線的にのびる口縁部で、斜行沈線が列点文状に施されている。それ以外に文様は認められない。

321～326は有文深鉢の体部片である。321～323は陸帯や沈線による矢羽根状文が描かれている。324

は縦位の沈線や列点文状の斜行沈線等が描かれている。沈線は太い。SH248出土の243に似た文様構成の可能性がある。325は縄文、326は条線が施されている。

327は無文浅鉢である。無文であるが、口縁部には突起状の把手が付けられている。把手は横方向に孔が貫通している。内外面はオサエや工具ナデ等によって調整されている。

328・329は石器である。

328は礮器の可能性があるものである。ホルンフェルスの円礮から剥離した大型の剥片で、片面には原石面が残る。両端及び側縁には、不明瞭ながら若干の調整剥離ないし使用痕と思われる小剥離が認められる。やや不整形で、人工的なものではない可能性もある。329は礮石である。大部分を欠損するが、小型の砂岩の円礮を利用したものと思われ、一部に明瞭な敲打痕が残る。

**SH344 (第71図330~337)** 330~332は炉SHF343から出土した。いずれも縄文土器である。

330は深鉢の口縁部片と思われる。無文で、内湾する。331・332は有文深鉢の体部片と思われる。331・332いずれにも沈線による区画文と思われる文様が認められる。区画文内には斜行沈線が充填される。331には渦巻文と思われる文様の一部も認められる。331・332は文様が類似しており、同一個体の可能性もある。

333~337は埋土中などから出土した。いずれも縄文土器である。333は波状口縁で、口縁部内面が肥厚する。波頂部の口縁部直下には沈線による渦巻文状の文様が配されている。335・336は沈線による区画文内に斜行沈線を充填しているものと思われる。335は沈線が斜行せず横位となっているが、小片のため破片を図化した方向が正確ではない可能性もある。337は浅鉢の口縁部片と思われる。口縁端部は面をなす。

**SH355 (第71図338~344)** 338は石厨がから出土した。縄文土器の有文深鉢の口縁部片と思われる。平口縁で、口縁部には刺突が施されている。

339は建物内に埋設されていた。縄文土器深鉢で、底部から体部下半にかけてが遺存している。体部に文様は認められないが、外面はミガキによって丁寧

に調整されている。底部内面は風化による器壁の剥離が著しい。

340~344は埋土中などから出土した。

340・341は縄文土器である。340は有文深鉢の口縁部の破片で、平口縁と思われる。沈線による区画文内を縄文で充填している。

342は小型の土製品である。断面形は三角形に近い。沈線による文様が施されている。剥離した面が明確には確認できないため土製品としたが、縄文土器の立体的な装飾の一部が剥離したものの可能性も考えられる。

343・344は石器や剥片である。343は石皿(台石)と思われる。花崗岩の礮を利用したもので、平坦な面をもつ。摩擦などの使用痕は明瞭ではない。344は黒曜石の石核ないし剥片である。

**SH360 (第71図345~350)** 345・346は炉から出土した。345は縄文土器の橋状把手である。おそらく深鉢の体部に横位に貼り付けられたもので、把手の両側には沈線による矢羽根状文が施されている。また、把手から下方に垂下する沈線も認められる。346は石皿(台石)である。砂岩の大型で扁平な礮を利用したもので、明瞭な加工は認められないが、上面は使用によって顕著に摩耗し、平滑である。使用面にはわずかに敲打痕も認められる。また、全体に著しく被熱している。かなり細かく割れて複数の破片となっているが、被熱によって割れたものと推定される。

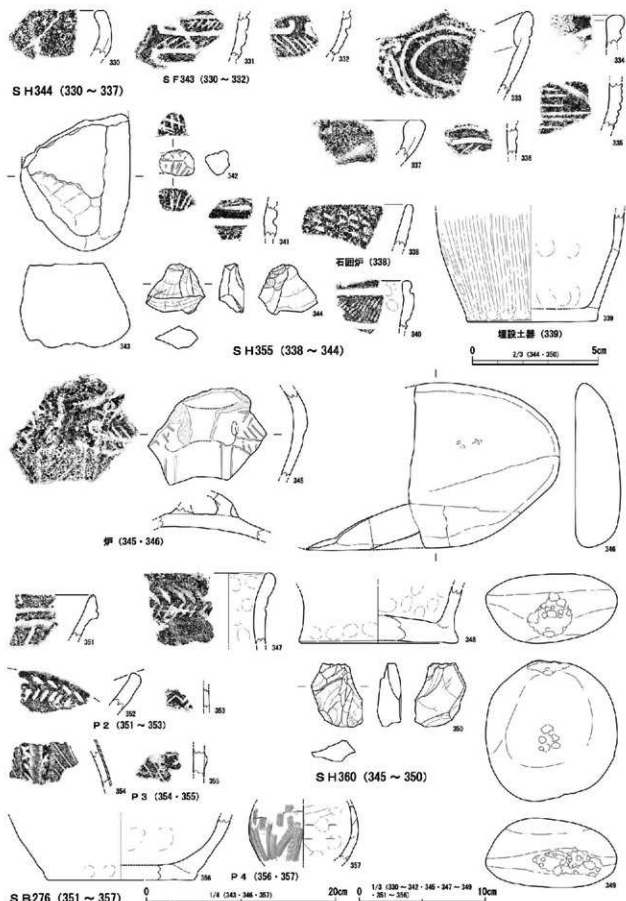
347~350は埋土中や建物内のビットなどから出土した。

347は縄文土器の有文深鉢である。やや外反しながら立ち上がる口縁部の破片で、平口縁と思われる。口縁部には沈線による矢羽根状文が施される。348は縄文土器深鉢の底部である。底はかなり厚い。

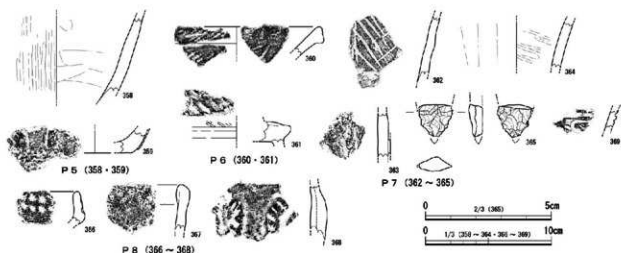
349・350は石器や剥片である。349は礮石で、石英斑岩の円礮を利用したものである。両端に顕著に敲打痕が残る。350はチャートの剥片である。

## (2) 掘立柱建物出土遺物

**SB276 (第71・72図351~369)** 351~353はP2から出土した。いずれも縄文土器である。351は有文深鉢の口縁部である。口縁端部は肥厚し、断面形



第71圖 SH344・355・360出土遺物、SB276出土遺物① (1/4、1/3、2/3)



第72図 SB276出土遺物② (1/3, 2/3)

は三角形となる。口縁部直下には沈線による区画文が配されていると思われ、区画文内は斜行沈線で充填される。352は口縁部外面に矢羽根状文が施されている。353は縄文時代早期の押型文土器と思われ、小片である。山形押型文が認められる。

354・355はP 3から出土した。いずれも縄文土器である。354は縦位の陸帯の両側に刻目を施し、陸帯間には細い沈線で矢羽根状文ないし斜行沈線を施す。355は細片で破片の向きが不確実であるが、陸帯や細い沈線による文様が認められる。

356・357はP 4から出土した。356は縄文土器の深鉢ないし浅鉢の底部である。体部はやや内湾しながら立ち上がる。357は土師器の壺の体部である。外面にはハケが施されている。古墳時代前期のもので、何らかの要因で混入したと考えられる。

358・359はP 5から出土した。いずれも縄文土器である。358は無文の体部片で、外面はマガキによって丁寧に調整されている。359は底部付近の破片で、幅広の縦位の陸帯と沈線が認められる。

360・361はP 6から出土した。いずれも縄文土器である。360は深鉢の口縁部の破片と思われる。口縁部は肥厚し、断面形が三角形になる。内外面に縄文が施されている。口縁部内面に縄文が施されるものは、今回の調査では僅少である。361は台付深鉢の底部付近の破片と思われる。列点文が施されている。

362～365はP 7から出土した。362～364は縄文土器である。362は有文深鉢の体部片で、沈線による

矢羽根状文が施されている。364は無文の体部片である。365は石器で尖頭器の可能性のあるものである。黒曜石製で、大部分を欠損する。

366～368はP 8から出土した。いずれも縄文土器である。366は有文深鉢の口縁部の破片と考えられる。口縁部は強く屈曲し、上方に立ち上がる。口縁部外面には列点文が施されている。367は無文の口縁部片で、口縁部内面がわずかに肥厚する。368は有文深鉢の口縁部付近の破片と思われる。陸帯と刺突による列点文が認められる。

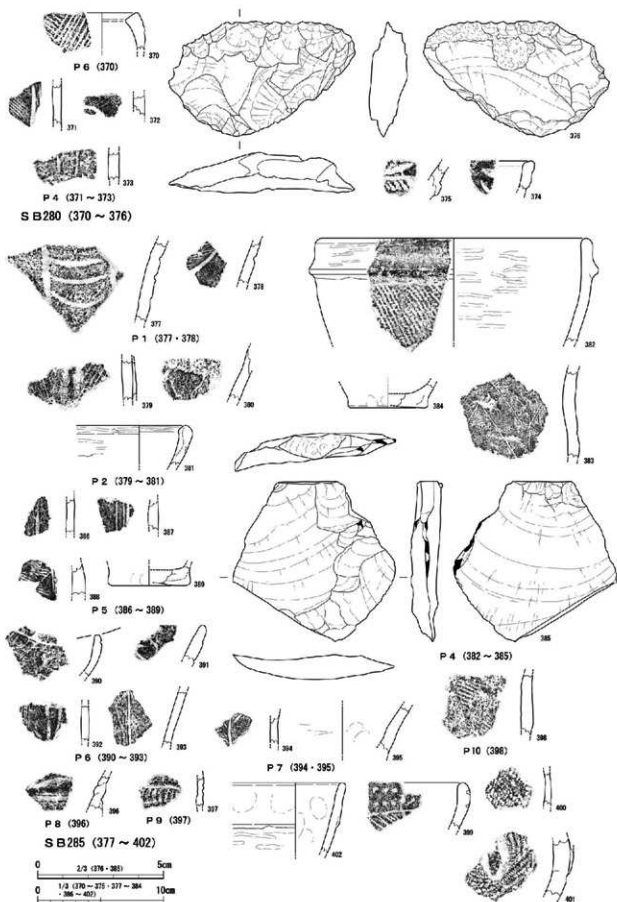
369は建物内のピットから出土した。縄文土器の有文深鉢の細片で、沈線による文様がわずかに遺存している。

**SB280 (第73図370～376)** 370はP 6から出土した。縄文土器浅鉢の口縁部と思われる。口縁部は内湾し、口縁端部は面をなす。口縁部外面には条線が矢羽根状に施されている。

371～373はP 4から出土した。いずれも縄文土器で、深鉢の体部片と思われる。371・372には曲線の沈線と縄文が認められる。371は区画文の可能性が。373にも縄文と沈線が施されている。

374～376は建物内のピットから出土した。374・375は縄文土器である。374は平口縁で、沈線による文様が一部遺存する。375は横位の陸帯が貼り付けられ、列点文や沈線も認められる。376は石器で、削器と思われる。サヌカイト製で、一部に原石面が遺存する。

**SB285 (第73図377～402)** 377・378はP 1から



第73圖 SB280・285出土遺物 (1/3、2/3)

出土した。いずれも縄文土器深鉢の体部片と思われる。377は縦位の沈線の間に、連続する弧状沈線を施している。一部の破片はP4から出土した。378は曲線的な沈線で区画文状の文様が描かれており、内部を条線で充填している。

379～381はP2から出土した。いずれも縄文土器である。379・380は有文深鉢の体部片と思われ、379は縦位の隆帯と条線による矢羽根状文が認められる。381は無文浅鉢の口縁部片と思われる。内外面ともミガキにより丁寧に調整している。

382～385はP4から出土した。382は浅鉢ないし鉢である。口縁部のやや下に横位の隆帯を貼り付け、隆帯より下位には縄文を施す。口縁部付近の外側と内面はミガキにより丁寧に調整している。383は有文深鉢の体部の破片で、細い沈線で矢羽根状文が描かれている。384は深鉢ないし浅鉢の底部である。385は剥片である。下呂石で、長さ6.4cmとかなり大型である。一部に原石面が残っており、原石面の風化状況からみると、原石は大型の転石であったと推定される。原石が採取できる木曾川流域から離れた小牧南遺跡でこれほどの大きさの剥片が出土したことや、剥片の剥離技術を窺い知ることができる点において、貴重な資料と思われる。

386～389はP5から出土した。いずれも縄文土器である。386・387は有文深鉢の体部片と思われ、沈線が認められる。388は縄文と沈線が施されている。389は深鉢ないし浅鉢の底部片である。

390～393はP6から出土した。いずれも縄文土器である。390は浅鉢の口縁部片と思われる。沈線が施されている他に、外面にごくわずかに赤彩と思われる痕跡が認められる。この赤彩は、水銀朱の可能性がある(第Ⅷ章第12節)。391は深鉢の口縁部片と思われ。392・393は有文深鉢の体部片と思われ、沈線や条線が施されている。

394・395はP7から出土した。いずれも縄文土器深鉢と思われる。394は沈線により矢羽根状文が描かれている。395は無文である。

396はP8から出土した。縄文土器で、深鉢の破片と考えられるが、細片のため不確実である。沈線が認められる。

397はP9から出土した。縄文土器で、深鉢の破

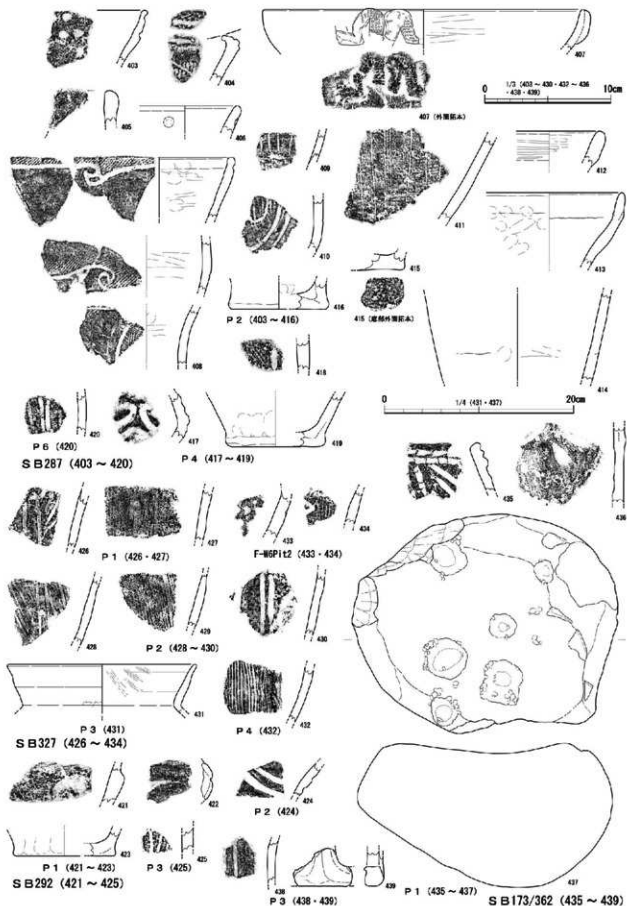
片と思われる。連続刺突による沈線と、縄文が施されている。

398はP10から出土した。縄文土器で、縄文のみが認められる。

399～402は建物内のピットなどから出土した。いずれも縄文土器である。399～401は有文深鉢の破片と思われる。399は口縁部に2列の列点文を施し、その下に沈線による区画文を配している。区画文内は斜行沈線で充填している。401は貝殻を原体とすると思われる擬縄文を地文とし、わずかに隆起する文様の周囲に沈線を施している。こうした擬縄文を施したものは小牧南遺跡において特異な存在で、他地域からの搬入品の可能性が高い。402は無文深鉢である。平口縁で、口縁部はやや帯状に肥厚させている。

**S B 287 (第74図403～420)** 403～416はP2から出土した。いずれも縄文土器である。

403～408は有文深鉢の口縁部や口縁部付近の破片である。403は外面に刺突が施されていた。404は口縁端部を拡張し、拡張面に沈線と縄文を施している。口縁部外面にも沈線と縄文による文様が認められる。縄文はやや不鮮明であるが、縄以外の施文具を用いた擬縄文の可能性もある。405は大波状口縁の小片である。406は小片で、1箇所には刺突と思われる痕跡が認められる。407は平口縁で、粘土紐を蛇行する隆帯状に貼り付け、その上に縄文を施して立体的な装飾としている。他には見られない特徴的な個体で、他地域からの搬入品の可能性も考えられる。408も特徴的な個体で、同一個体と思われる破片が多数出土している。全体的に器壁が薄く、胎土は精良で、堅緻に焼成されている。口縁部や体部にやや細い沈線で主に横方向に流れる文様帯を描き、沈線内は縄文で充填する。文様の重複関係から、縄文は沈線より後に施文されていると推定される。沈線の一部は渦巻文状に入り組む。無文となっている部分にはミガキが施されている可能性が高い。また、外面には広い範囲にかなり厚くススが付着している。ススの放射性炭素年代測定では、他の柱穴から検出された炭化材よりも若干新しい測定年代が出されており(第Ⅷ章第3節)、文様や上層から出土していることを踏まえれば、他の縄文土器と比べて新しい



第74圖 SB287・292・327・173/362出土遺物 (1/4, 1/3)



様相をもつものとも考えられる。

409～411は有文深鉢の体部片である。410は沈線で区画文状の文様を描き、内部を縄文で充填している。411は細い縦位の多条並行沈線が施されている。

412～413は無文深鉢と思われる。412には沈線状の痕跡がわずかに残り、有文深鉢の可能性もある。413は口縁部がやや屈曲して立ち上がる。

415・416は深鉢ないし浅鉢の底部片である。415の底部外面には刺突状の痕跡が残る。

417～419はP4から出土した。いずれも縄文土器である。417は有文深鉢の口縁部付近の破片で、沈線により区画文と思われる文様を描く。418は沈線と細い条線が施されている。419は深鉢ないし浅鉢の底部である。

420はP6から出土した。縄文土器の有文深鉢の体部片で、縦位の多条並行沈線が施されている。

**S B292 (第74図421～425)** 421～423はP1から出土した。いずれも縄文土器である。421・422は有文深鉢と思われ、隆帯を貼り付けている。423は深鉢ないし浅鉢の底部片である。

424はP2から出土した。有文深鉢の頸部付近の破片と思われる。沈線で弧状の文様を描いている。

425はP3から出土した。深鉢の体部片と思われるが、小片のため不明である。沈線による文様が認められる。

**S B327 (第74図426～434)** 426・427はP1から出土した。いずれも縄文土器深鉢の体部片である。426は沈線による矢羽根状文が施されている。427は沈線と条線が施されている。

428～430はP2から出土した。いずれも縄文土器である。428は縦位の沈線と幅広い条線ないし斜行沈線が施されている。429は沈線と条線、430は沈線のみが認められる。

431はP3から出土した。土師器のく字状口縁部の口縁部片で、古墳時代前期のものである。混入したと考えられる。

432はP4から出土した。縄文土器の深鉢の体部片で、深く鋭い条線が施されている。

433・434はF-W6Pit2から出土した。いずれも縄文土器で、細片である。433は刺突、434は沈線と条線が施されている。

**S B173/362 (第74図435～439)** 435～437はP1から出土した。435・436は縄文土器で、435は有文深鉢の口縁部である。口縁部は内傾し、口縁端部はやや面をなす。口縁部直下には連続刺突による沈線が施されており、おそらく区画文を配しているものと思われる。区画文内と思われる箇所には斜行沈線が施されている。436は有文深鉢の体部片で、沈線による渦巻文の一部と思われる文様がわずかに遺存する。また、不明瞭ながら低い隆帯が貼り付けられている可能性もある。437は大型の石皿(台石)である。火砕岩で、上面が緩やかに凹み、使用によって摩滅している。また、敲打による凹みも認められ、複数の用途に用いられていたものと思われる。

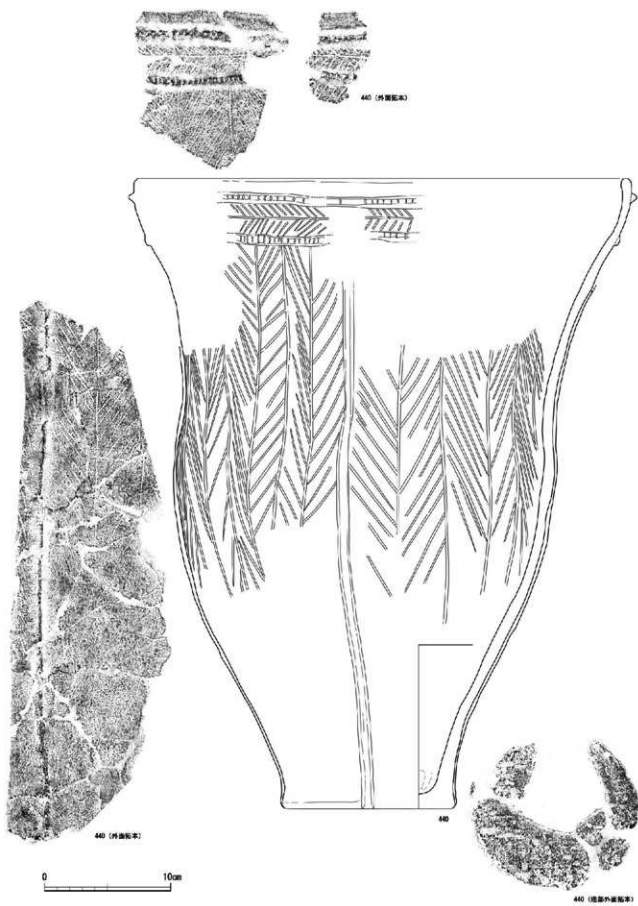
438・439はP3から出土した。いずれも縄文土器である。438は深鉢の体部片で、縦位の沈線が施されている。439は台付深鉢の脚台部である。楕円形を呈すると思われる透孔が一部遺存している。

### (3) 埋設土器出土遺物

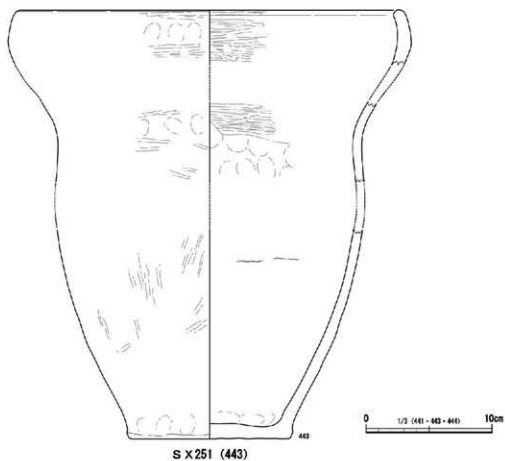
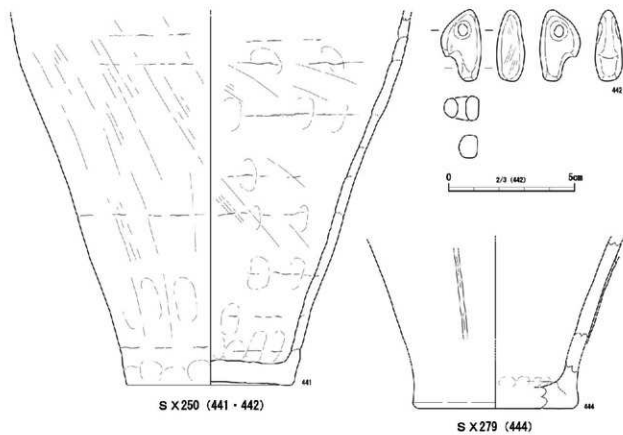
**S X149 (第75図440)** 440は縄文土器の有文深鉢である。ほぼ全形が復元できた。頸部は緩やかに括れ、口縁部はやや内湾し、キャリパー形に近い器形を呈する。口縁部直下には横位の隆帯を2条貼り付け、隆帯間は沈線による矢羽根状文で充填する。口縁部付近は遺存している破片が少ないため、2条の隆帯としたが、下位の隆帯はやや湾曲するようにも見受けられるため、把手もしくは突起で区切られる区画文となる可能性もある<sup>9)</sup>。横位の隆帯より下位には縦位の隆帯が貼り付けられ、隆帯間には細い沈線による矢羽根状文が施されているが、体部下半はほぼ無文となる。底部外面には糶物状の敷物痕が認められる。

**S X250 (第76図441・442)** 441は縄文土器深鉢である。頸部から底部にかけて遺存しているが、無文である。内外面ともナデや工具ナデによって調整されており、内面には粘土接合痕が顕著に残る。

442は埋設土器内から出土した。長さ2.8cmの小型の石製垂飾で、側縁に挟り状の凹みを作り出しており、勾玉に近い形状を呈する。色調は黄褐色に近く、丁寧に研磨され表面は光沢をもつ。穿孔は両面から行われている。おそらく蛇紋岩製と思われる(第Ⅶ



第75圖 S X 149出土遺物 (1/3)



第76圖 S X 250 · 251 · 279出土遺物 (1/3, 2/3)

章第8節)。

**S X251 (第76図443)** 443は縄文土器の無文深鉢である。完全な形には復元できなかつたが、キャリパー形を呈するものと思われる。外面及び内面上半はミガキによって丁寧に調整されている。

**S X279 (第76図444)** 444は縄文土器深鉢である。縦位の隆帯が貼り付けられている他は、無文である。内面にはコゲが付着しており、煮沸に使用された可能性がある。

#### (4) 土坑出土遺物

**S K133 (第77図445~448)** 445~448は縄文土器である。445は口縁部片で、やや肥厚しており、断面形は三角形を呈する。446は口縁部の小片で、器壁は薄い。条線が認められる。447は沈線による区画文と斜行沈線と思われる文様が一部遺存している。区画文より下には縄文が施されている。448には隆帯状の盛り上がりと列点文が認められる。

**S K138 (第77図449)** 449は縄文土器である。口縁部片で、やや内湾し口縁部外面は面をなす。遺存している範囲に文様は認められない。

**S K181 (第77図450~453)** 450~453は縄文土器である。450は有文土器深鉢で、波状口縁である。体部から口縁部にかけて直線的に外方へ開くものと思われる。口縁端部は面をなす。沈線による渦巻文と縄文が認められる。451は口縁部の小片で、沈線と縄文が認められる。452は連続する刺突による沈線で文様を描く。453は深鉢の体部片と思われ、細い沈線で矢羽根状文ないし斜行沈線を施している。

**S K192 (第77図454~459)** 454~459は縄文土器である。454は太い沈線で文様が描かれている。口縁端部は面をなす。大波状口縁になる可能性も考えられる。455は沈線と縄文が施されている。やはり大波状口縁の可能性がある。456は横位の隆帯を貼り付ける。458・459は深鉢の体部片と思われ、沈線によって文様が施されている。

**S K241 (第77図460)** 460は剥片である。チャートで、上下2方向からの剝離が認められ、両極剥片とも考えられる。

**S K242 (第77図461~469)** 461~469は縄文土器である。462は口縁部直下の破片と思われ、区画文

の一部と思われる沈線と条線が認められる。463も横位の隆帯と区画文の一部と考えられる沈線が認められる。464は体部片で、内傾するものと思われるが、小片のため傾きは不確実である。比較的細い沈線によって、逆U字形の沈線と、それを軸とした矢羽根状文が描かれている。465・466も細い沈線によって文様が施されている。467は沈線と縄文、468は縄文のみが施されている。469は深鉢の底部で、底部外面に敷物痕が残る。

**S K263 (第77図470・471)** 470は縄文土器で、有文深鉢の頸部付近の破片と思われる。太い沈線による区画文と思われる文様が一部遺存し、区画文内は縄文で充填される。

471は剥片である。チャートの横長の剥片で、一部に原石面が残る。

**S K264 (第77図472・473)** 472・473は縄文土器である。472には細い沈線で矢羽根状文が描かれている。473は風化により文様が不鮮明であるが、縄文が施されているものと思われる。

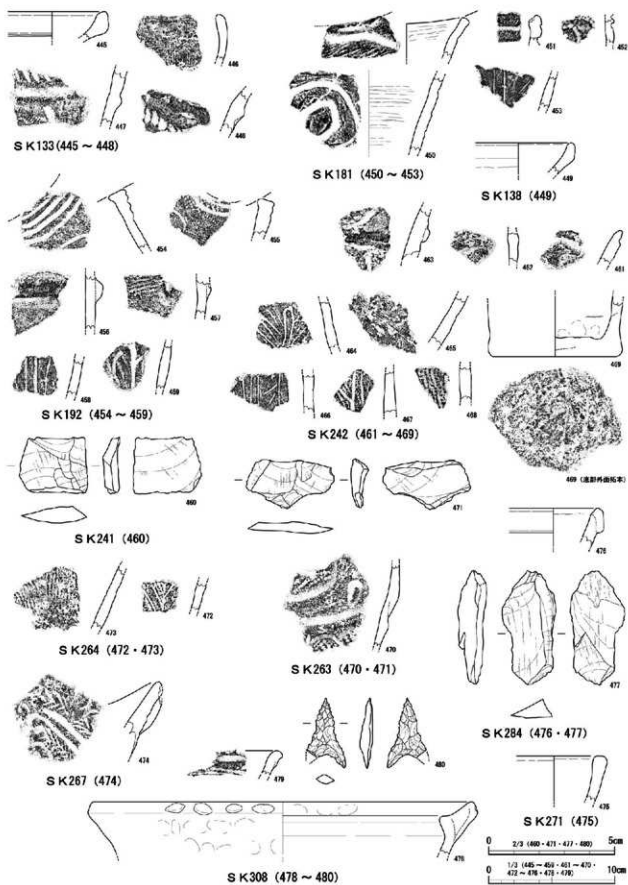
**S K267 (第77図474)** 474は縄文土器の有文深鉢の口縁部片である。波状口縁の波頂部付近の破片で、口縁部には矢羽根状文が施されている。また、波頂部間の口縁部を一部肥厚させて口縁端部に斜めの広い面を作り、そこにも矢羽根状文を施す。波頂部間の口縁部直下にも沈線と矢羽根状文が認められる。

**S K271 (第77図475)** 475は縄文土器で無文の深鉢ないし浅鉢の口縁部片である。口縁端部はやや面をなす。

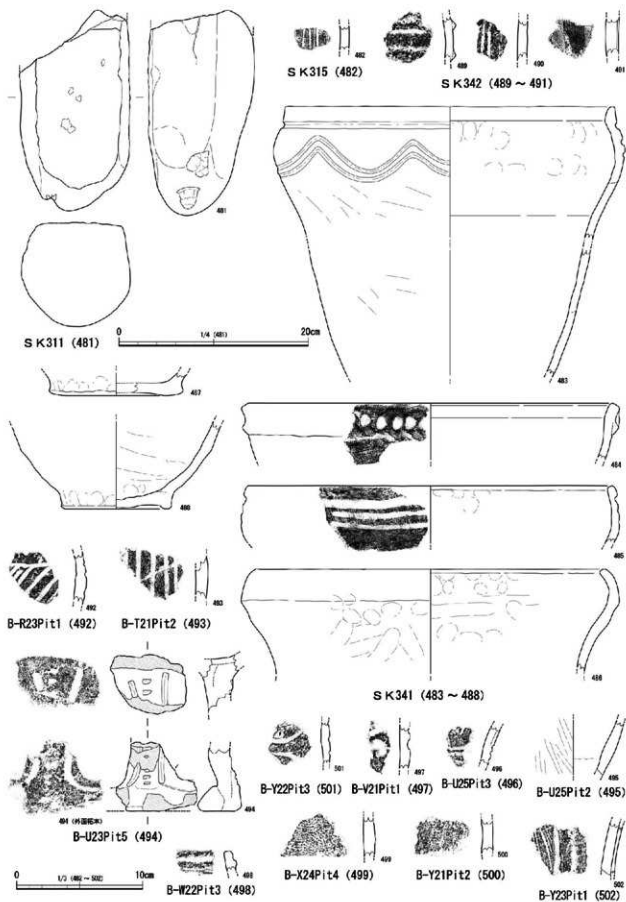
**S K284 (第77図476・477)** 476は縄文土器深鉢の口縁部片である。口縁端部に粘土を貼り付けて肥厚させ、口縁部外面に面を作る。遺存している範囲に文様は認められない。

477は剥片である。サヌカイトで、やや質が良くないものと思われる。一部に原石面が残る。

**S K308 (第77図478~480)** 478・479は縄文土器である。478は深鉢の口縁部片で、口縁部内面が肥厚し、蓋受け状になる。断面からみると、内側へ屈曲する口縁部の外面に粘土を付け足して新たに口縁部を作り出していると思われる。口縁端部には大きな押圧が連続して施されている。その他に文様は認められない。479は口縁部の小片で、やや口縁部外



第77図 S K 133・138・181・192・241・242・263・264・267・271・284・308出土遺物 (1/3、2/3)



第78図 S K 311・315・341・342出土遺物、ピット出土遺物① (1/4、1/3)

面が肥厚する。沈線による文様が一部遺存している可能性もある。

480は石器で、打製石鏃である。サヌカイト製の凹基無茎のもので、片方の脚を欠損する。剥片の主剥離面をほとんど残していない。

**S K311 (第78図481)** 481は石器で、石皿(台石)である。砂岩製で、半分程度を欠損する。肌理が粗い石材で風化も進んでいるため摩滅などの使用痕は不明瞭であるが、上面はかなり平坦で、側面との間は明瞭な稜をなす部分もあり、使用や整形によって平坦面が形成された可能性が高い。不明瞭ながら敲打痕と思われるものも認められる。片方の側面もやや面をなしており、使用面とされていた可能性も考えられる。

**S K315 (第78図482)** 482は縄文土器深鉢の体部片と思われる。小片で、縦位の条線がわずかに遺存している。

**S K341 (第78図483~488)** 483~488は縄文土器である。

483~485は有文深鉢である。483は全体のかかなりの部分が復元できたもので、口縁部は内湾し、ややキャリパー形を呈するが、頸部の括れは弱い。口縁端部は内傾する面をなす。口縁部直下には太い沈線で横位の直線と2条の連弧文が施されているが、それ以外に文様は認められない。体部外面は工具ナデ等で調整されている。484は口縁部外面に陸帯状に粘土を貼り付け、押圧による列点文を施す。それ以外に文様は認められない。485は483に類似する器形と思われ、やはり口縁部直下に太い沈線による文様を配するが、簡略な文様構成であった可能性が高い。

486は無文深鉢である。口縁部はやや強く内側に屈曲する。内外面ともナデやオサエによって調整されており、全体的に粗雑である。

487・488は深鉢ないし浅鉢の底部である。488は底部の周囲が高台状に突出する。体部は内湾しながら立ち上がる。外面はナデやオサエによって調整され、やや粗雑である。484~486のいずれかの底部と思われる。

**S K342 (第78図489~491)** 489~491は縄文土器である。いずれも深鉢の体部片と思われる。489は細い陸帯を貼り付けている。491は縦位の陸帯を貼

り付けている。

#### (5) ビット出土遺物<sup>4)</sup>

**B-R23Pit1 (第78図492)** 492は縄文土器深鉢の口縁部付近の破片である。太い沈線による区画文と思われる文様と、斜行沈線が認められる。

**B-T21Pit2 (第78図493)** 493は縄文土器深鉢の体部片と思われる。縦位の多条並行沈線が施されている。

**B-U23Pit5 (第78図494)** 494は縄文土器の台付深鉢の脚台部片である。縦位の沈線を2条施し、その間に列点文を縦位に施している。透孔は一部しか遺存していないが、大きな楕円形のもの、やや小型の円形に近いものがあると思われる。脚端部の内側には粘土が貼り付けられ肥厚している。

**B-U25Pit2 (第78図495)** 495は縄文土器の深鉢の体部片である。文様は認められず、外面はミガキで調整されている。

**B-U25Pit3 (第78図496)** 496は縄文土器深鉢の体部片と思われる。沈線による文様が一部遺存している。

**B-V21Pit1 (第78図497)** 497は縄文土器である。沈線による渦巻文が一部遺存している。

**B-W22Pit3 (第78図498)** 498は縄文土器の口縁部の小片である。沈線が施されている。

**B-X24Pit4 (第78図499)** 499は縄文土器の体部片である。縄文が施されている。

**B-Y21Pit2 (第78図500)** 500は縄文土器の体部片である。縄文が施されている。

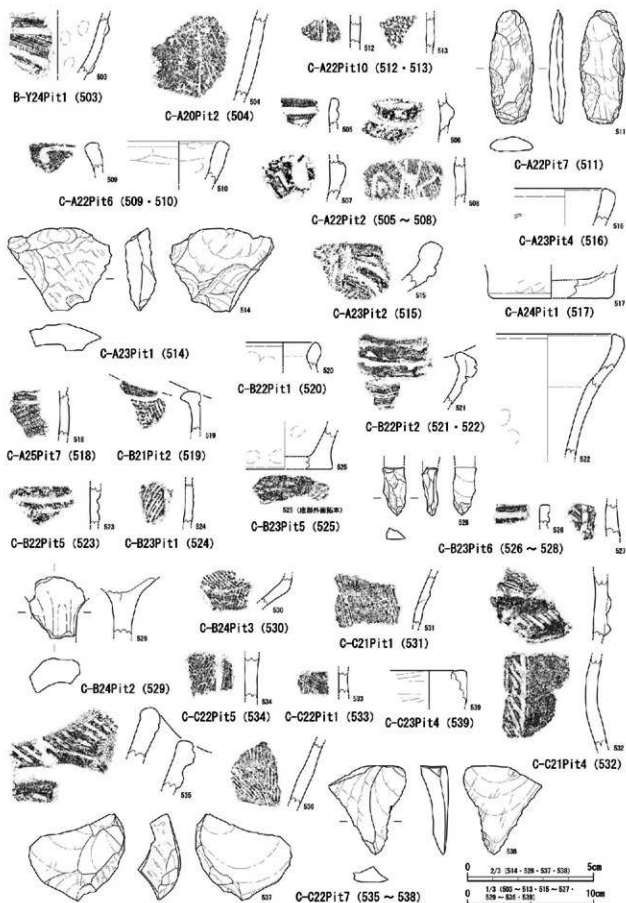
**B-Y22Pit3 (第78図501)** 501は縄文土器である。太い沈線により曲線的な文様が描かれている。

**B-Y23Pit1 (第78図502)** 502は縄文土器深鉢の体部片である。縦位の陸帯を貼り付け、その横に条線を施している。

**B-Y24Pit1 (第78図503)** 503は縄文土器深鉢の破片である。口縁部付近の破片の可能性が高いと思われる。条線を地文とし、陸帯と沈線で文様を描いている。

**C-A20Pit2 (第79図504)** 504は縄文土器深鉢の体部片である。細い沈線による文様が認められる。

**C-A22Pit2 (第79図505~508)** 505~508は縄文土



第79図 ピット出土遺物② (1/3、2/3)



器である。いずれも深鉢の可能性が考えられる。505は口縁部の小片で、太い沈線が残る。506は隆帯による区画文と思われる文様の一部が認められる。507は渦巻文と隆帯による区画文と思われるものの一部が遺存しており、区画文内には竹管状の工具による刺突が施されている。508は体部片と思われ、沈線と条線が認められる。

C-A22Pit6 (第79図509・510) 509・510は縄文土器である。いずれも口縁部の小片である。509には沈線による文様が一部遺存し、縄文が施されている。510は無文である。

C-A22Pit7 (第79図511) 511は石器で、打製石斧である。完形で、長さ9cmの小型品である。緑色片岩製で、片面に主剥離面を大きく残す。もう片方の面には原石面とも思われるものが残り、円錐状の原石を打割して製作したと推測される。また、原石面と思われる箇所には不明瞭ながら長軸と並行する方向に擦痕が残されており、使用痕等の可能性が考えられる。

C-A22Pit10 (第79図512・513) 512・513は縄文土器である。いずれも細片である。512には沈線、513は縄文が認められる。

C-A23Pit1 (第79図514) 514は小型の石核ないし剥片である。赤色のチャートで、片面に原石面を大きく残す。

C-A23Pit2 (第79図515) 515は縄文土器深鉢の口縁部片である。口縁端部は肥厚し、丸く収められている。沈線と条線による文様が認められる。

C-A23Pit4 (第79図516) 516は縄文土器である。口縁部の小片で、沈線による文様がごくわずかに遺存している。

C-A24Pit1 (第79図517) 517は縄文土器である。深鉢ないし浅鉢の底部片である。

C-A25Pit7 (第79図518) 518は縄文土器である。沈線と縄文が施されているが、縄文は貝殻等による擬縄文の可能性が高い。

C-B21Pit2 (第79図519) 519は縄文土器深鉢の口縁部片である。口縁部は内側にやや拡張されている。口縁部直下には沈線と縄文による区画文と思われる文様が認められる。

C-B22Pit1 (第79図520) 520は縄文土器である。

口縁部の小片で、器形や文様などは不明であるが、口縁部付近で若干外方へ屈曲し、口縁端部が肥厚するようである。

C-B22Pit2 (第79図521・522) 521・522は縄文土器である。521は有文深鉢の口縁部片である。口縁部は内湾し、口縁端部は外傾する面をなす。口縁部直下には沈線と条線による文様が施されている。522は無文深鉢である。体部から頭部にかけての破片が遺存する。口縁端部はやや面をなす。

C-B22Pit5 (第79図523) 523は縄文土器である。沈線による文様が認められる。

C-B23Pit1 (第79図524) 524は縄文土器である。小片で、沈線と縄文による文様がわずかに遺存している。

C-B23Pit5 (第79図525) 525は縄文土器で、深鉢ないし浅鉢の底部片である。底部外面には敷物痕が残る。

C-B23Pit6 (第79図526~528) 526・527は縄文土器である。526は口縁部の小片で、沈線による文様がわずかに遺存している。口縁端部は面をなす。527は深鉢の体部片と思われ、太い沈線による文様が認められる。

528は石器である。サマカイト製で、一端が尖っており石錐と思われるが、調整剥整が丁寧に行われておらず、主剥離面を大きく残しているため、剥片の可能性もある。

C-B24Pit2 (第79図529) 529は縄文土器である。台付深鉢の脚台部片と思われる。両側に透孔がわずかに遺存しおり、片方は縦長の楕円形の透孔と思われるが、もう片方は遺存する部位が少なく形状は不明で、円形になる可能性もある。

C-B24Pit3 (第79図530) 530は縄文土器である。小片であるが口縁端部を欠損した口縁部片と思われる。わずかに屈曲して面を作り、縄文を施す。

C-G21Pit1 (第79図531) 531は縄文土器深鉢の体部片である。条線が施されている。

C-G21Pit4 (第79図532) 532は縄文土器深鉢の頭部から体部にかけての破片である。頭部は横位の隆帯を貼り付けて画し、隆帯に沿って刺突による列点文が施される。体部には縦位の太い沈線と斜行沈線が施されている。

C-G22Pit1 (第79図533) 533は縄文土器である。小片で、条線が施されている。

C-G22Pit5 (第79図534) 534は縄文土器深鉢の体部片と思われ、縦位の太い沈線と矢羽根状の条線が施されている。

C-G22Pit7 (第79図535～538) 535・536は縄文土器である。535は有文深鉢の口縁部片である。波状口縁で、口縁部には斜行沈線が列点文状に施されている。また、口縁部直下にはかなり太い沈線による区画文と思われる文様が配されている。区画文内には条線と思われる文様がわずかに遺存する。

537・538は剥片である。537は風化が著しいが、サヌカイトの可能性が高い。側面に原石面が残る。538もサヌカイトである。

C-G23Pit4 (第79図539) 539は縄文土器である。口縁部の小片で、口縁端部は面をなす。外面にはミガキが施されているものと思われる。

C-G23Pit5 (第80図540・541) 540・541は縄文土器である。540は深鉢の体部片で、縦位の沈線によって区画し、区画内に縄文を充填する。また、蛇行沈線も施されている。

C-G25Pit4 (第80図542) 542は縄文土器深鉢の頸部付近の破片と思われ、沈線による文様が認められる。区画文の可能性もある。

C-D19Pit1 (第80図543) 543は縄文土器である。口縁部の破片で、器壁はやや薄い。短い沈線による矢羽根状文が施されている。

C-D20Pit1 (第80図544) 544は縄文土器である。小片で、沈線による文様が一部遺存している。

C-D20Pit2 (第80図545) 545は縄文土器の把手と思われる。かなり小型のもので、文様も認められない。

C-D24Pit5 (第80図546) 546は小型の石核である。褐色で光沢がある石英質の石材で、メノウの可能性がある。こうした石材で製作された石器は、今回の調査では他に出土していない。

C-E22Pit1 (第80図547・548) 547・548は縄文土器である。いずれも小片で、深鉢の体部片の可能性がある。547は細い沈線で文様が描かれている。

C-E22Pit4 (第80図549) 549は縄文土器である。深鉢の体部片と思われ、縦位の並行沈線の他、斜行

沈線ないし矢羽根状文と思われる文様がわずかに遺存している。

C-F21Pit1 (第80図550・551) 550・551は縄文土器である。550は口縁部の小片で、沈線による区画文と思われ、文様が認められ、区画文内は縄文で充填されている。551は条線が施されている。

C-F21Pit2 (第80図552) 552は石器で、巖石である。やや扁平な砂岩の円礫の一端に敲打痕が残る。また、一部被熱している。

F-01Pit3 (第80図553) 553は縄文土器である。やや細い沈線による文様が一部遺存している。

F-08Pit1 (第80図554) 554は縄文土器深鉢の体部片と思われ、沈線と条線が施されている。

F-R7Pit1 (第80図555) 555は縄文土器である。小片で、条線が認められる。

F-S1Pit3 (第80図556) 556は縄文土器の深鉢ないし浅鉢の底部である。

F-S2Pit1 (第80図557) 557は石器で、凹石である。花崗岩の円礫を利用しており、半分以上を欠損する。遺存する面には敲打による凹みが明瞭に残る。

F-V1Pit1 (第80図558) 558は縄文土器深鉢の口縁部片と思われる。おそらく平口縁で、口縁端部外面は肥厚する。沈線による文様が認められる。

F-V2Pit2 (第80図559) 559は縄文土器である。かなり内傾するものと思われ、浅鉢の口縁部付近の破片である可能性が考えられる。細い沈線による文様の間に、縄文が施されている。

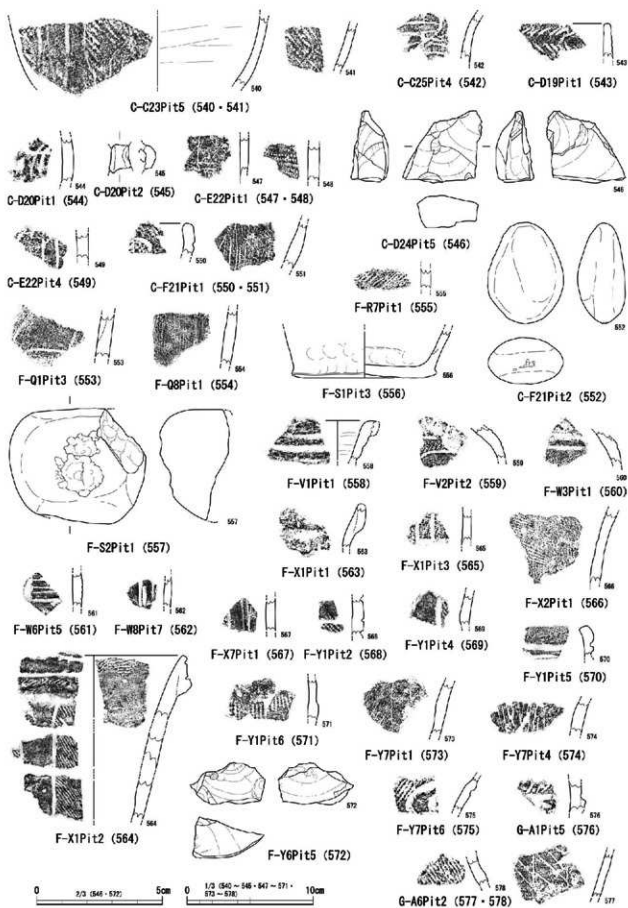
F-W3Pit1 (第80図560) 560は縄文土器である。内傾する破片で、浅鉢の口縁部付近の破片である可能性が考えられる。沈線と縄文による文様が認められ、全体的に559と似る。

F-W6Pit5 (第80図561) 561は縄文土器である。沈線による文様が認められる。

F-W8Pit7 (第80図562) 562は縄文土器である。やや薄手の小片で、沈線による文様が認められる。

F-X1Pit1 (第80図563) 563は縄文土器深鉢の口縁部片と思われる。口縁部外面は肥厚させ、面を作っている。

F-X1Pit2 (第80図564) 564は縄文土器の有文深鉢である。体部から口縁部にかけてわずかに外反しながら直線的に外方へ開く器形を呈する。口縁部外面



第80図 ピット出土遺物③ (1/3、2/3)

は肥厚させて面を作っており、口縁部の断面形は三角形を呈する。口縁部の面には沈線を施し、その下に縄文を施す。口縁部直下から体部にかけては縦位の沈線で画し、沈線間を縄文で充填する。また、口縁部内面にも縄文を施している。

F-X1Pit3 (第80図565) 565は縄文土器である。小片で、沈線による文様が認められる。

F-X2Pit1 (第80図566) 566は縄文土器深鉢の体部片である。縄文のみが施されている。

F-X7Pit1 (第80図567) 567は縄文土器深鉢の体部片と思われる。小片で、沈線と条線が施されている。

F-Y1Pit2 (第80図568) 568は縄文土器である。口縁部付近の小片と思われ、沈線と縄文がわずかに遺存している。

F-Y1Pit4 (第80図569) 569は縄文土器である。小片で、沈線による文様と縄文がわずかに遺存する。

F-Y1Pit5 (第80図570) 570は縄文土器である。口縁部の小片で、やや内湾する。口縁端部は面をなす。沈線による文様が認められる。

F-Y1Pit6 (第80図571) 571は縄文土器である。深鉢の体部片と思われ、縄文が施されている。

F-Y6Pit5 (第80図572) 572は小型の石核である。青色のチャートである。

F-Y7Pit1 (第80図573) 573は縄文土器深鉢の体部片と思われる。細い沈線で矢羽根状文ないし斜行沈線が施されている。

F-Y7Pit4 (第80図574) 574は縄文土器深鉢の体部片と思われる。条線が施されている。

F-Y7Pit6 (第80図575) 575は縄文土器である。深鉢の口縁部から頭部にかけての破片である可能性が考えられる。太い沈線による曲線的な文様と、縄文が認められる。

G-A1Pit5 (第80図576) 576は縄文土器深鉢の体部片と思われる。横位の隆帯と斜行沈線と思われる文様が認められるが、小片のため、破片の向きは不確実である。

G-A6Pit2 (第80図577・578) 577・578は縄文土器である。577は縦位の沈線と斜行沈線が施されている。578は内傾する可能性が高い。縄文を施す。

G-A6Pit3 (第81図579～582) 579～582は縄文土器である。579は有文深鉢の大波状口縁の小片である。

口縁端部は面をなし、沈線と縄文が施されている。580・581は深鉢の体部片と思われる。582は壺形の土器である。一部の破片はG-A7Pit5から出土している。頸部はかなり縮まり、口縁部は頸部から短く外反する。肩部には把手を貼り付ける。遺存する破片が少ないため、把手の数は不明であるが、おそらく2箇所程度と思われる。口縁部から頸部にかけては無文であるが、頸部直下には横位の隆帯状の盛り上がりりと列点文がめぐらされている。体部には沈線によって文様を描き、その内部に縄文を充填している。また、把手の裾には竹管状の工具による刺突が施されている。

G-A6Pit4 (第81図583・584) 583・584は縄文土器である。583は口縁部の小片で、薄手である。浅鉢の口縁部の可能性が考えられる。やや間隔が広く雑な列点文が施されている。

G-A6Pit7 (第81図585～587) 585～587は縄文土器である。いずれも深鉢の体部の可能性がある。585には縦位の隆帯の痕跡と思われるものが認められる。586・587は沈線による文様が一部遺存している。

G-A7Pit3 (第81図588～590) 588～590は縄文土器深鉢の体部片である。588はやや太い沈線により矢羽根状文が描かれている。589は縦位の隆帯と細い沈線による矢羽根状文が認められる。590は縄文を地文とし、縦位の沈線と蛇行沈線が描かれている。

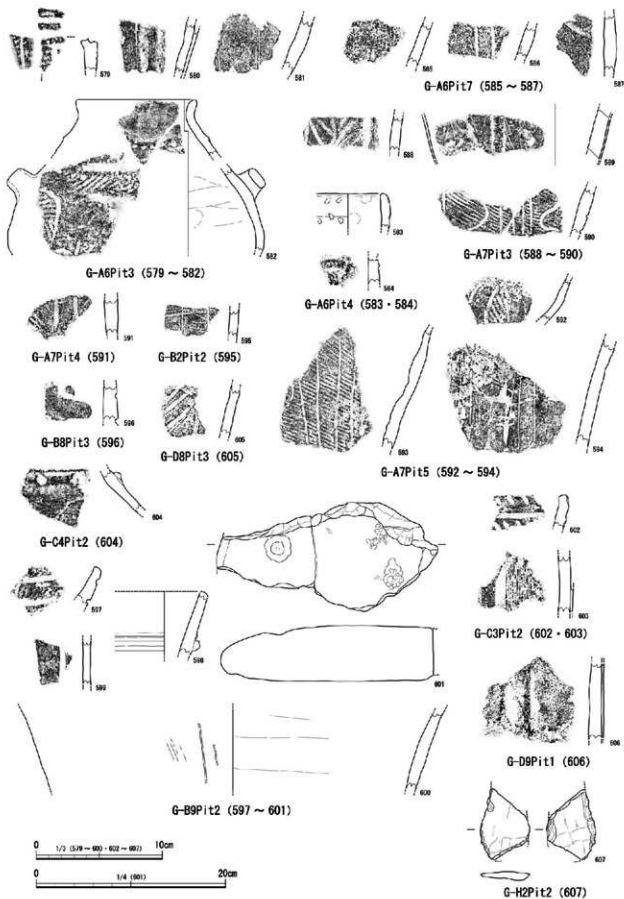
G-A7Pit4 (第81図591) 591は縄文土器深鉢の体部片である。縦位の沈線とそれを軸とした矢羽根状文が描かれている。

G-A7Pit5 (第81図592～594) 592～594は縄文土器である。592は内湾する体部片で、沈線で曲線的な文様を描き、その内部を縄文で充填している。文様の特徴や器形などからみて、582の壺形の土器と同一個体の可能性が高い<sup>1)</sup>。593・594は深鉢の体部片で、593は縄文を地文とし、縦位の沈線と蛇行沈線が描かれている。590と似る。594は細い沈線で文様が施されている。

G-B2Pit2 (第81図595) 595は縄文土器である。小片で、細い沈線による文様がわずかに遺存する。

G-B8Pit3 (第81図596) 596は縄文土器である。小片で、太い沈線による文様がわずかに遺存する。

G-B9Pit2 (第81図597～601) 597～600は縄文土器



第81図 ピット出土遺物④ (1/4、1/3)

深鉢である。597は口縁部片で、沈線が2条施され、その間に縄文と思われるものがわずかに認められる。598は直線的に外方に開く口縁部で、横位の陸帯が貼り付けられるが、それ以外に文様は認められない。600は縦位の沈線と、条線と思われるものがわずかに遺存する。

601は石器で、石皿(台石)である。溶結凝灰岩もしくは火砕岩の扁平な円盤を利用したものであるが、大部分を欠損しており、遺存する部分も2片に割れている。上面はやや平滑で、わずかに擦痕と思われるものも認められる。敲打による顕著な凹みが1箇所あり、他にも2箇所程度の敲打の集中部が認められる。

G-C3Pit2 (第81図602・603) 602・603は縄文土器深鉢である。602は口縁部の小片で、口縁部に列点文が施される。口縁部直下には沈線と斜行沈線あるいは矢羽根状文と思われる文様が一部遺存しており、区画文の可能性もある。603は縦位の陸帯と条線が施されている。

G-C4Pit2 (第81図604) 604は縄文土器である。深鉢ないし浅鉢の頸部付近の破片と思われる。横位の陸帯が貼り付けられ、陸帯上には押圧が施されている。

G-D8Pit3 (第81図605) 605は縄文土器深鉢の体部片と思われる。太い沈線による文様が施されており、区画文の一部と考えられる。

G-D9Pit1 (第81図606) 606は縄文土器深鉢の体部片である。縦位の陸帯が貼り付けられている。

G-H2Pit2 (第81図607) 607は石器で、小型の打製石斧である。片岩製で、大部分を欠損する。

## (6) 包含層出土遺物

包含層(第82・83図608~655) 608~650は縄文土器である。

608は押型文土器の口縁部片と思われる。器壁は薄く、外面に楕円形の押型文とみられる文様がわずかに遺存する。

609~622は有文深鉢の口縁部ないし口縁部付近の破片である。

609~614は口縁部直下に沈線による区画文を配するものである。609・610などは区画文内を斜行沈線

で充填する。610は口縁端部をやや肥厚させ、刻目を施している。612・613は口縁部がやや内湾し、口縁部を肥厚させ、口縁部外面に面を作る。口縁部外面には区画文とともに縄文が施されている。615~619も口縁部直下に区画文を配している可能性がある。617は波状口縁である。619は連続刺突による沈線で文様を描く。

620・621は立体的な装飾をもつものである。620は口縁部外面に縦位に粘土を貼り付けて、短い沈線で文様を施している。区画文の間を区切るつまみ状把手と思われる。621は口縁端部に陸帯状の装飾を付け、矢羽根状文や列点文を施している。

622は大波状口縁の破片である。沈線による文様が一部遺存している。

623~630は有文深鉢の体部片と思われるものである。

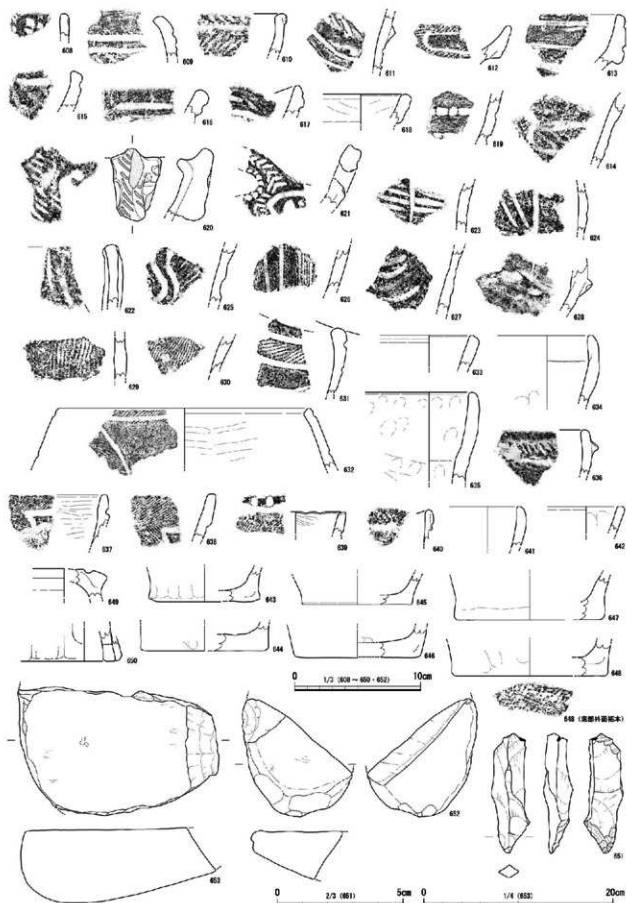
623・624には太い沈線で文様が描かれる。625は並行する2条の蛇行沈線と条線が施されている。627には多条の弧状の沈線が認められる。628は頸部付近の破片と思われる。陸帯が貼り付けられ、陸帯上に押圧状の刻目が施されている。629・630には縄文が施されている。

631・632は有文深鉢の口縁部片であるが、他とやや異なる特徴をもつものである。631は波状口縁で、2条の太い沈線の間に縄文を充填する。口縁端部は丸く収められる。632も沈線で区画した内部に縄文が充填されている。口縁部については、口縁部直下の沈線と口縁端部の間に縄文を施す。この破片を見る限り口縁部が内傾するように見受けられるが、小片のため器形の復元は確実ではない。そのため、文様やススの付着状況などの特徴が類似するS B 287出土の408と同一個体である可能性も高い。

633~635は無文深鉢である。634・635は口縁部がわずかに内湾する。

636~640は有文浅鉢と思われるものである。

636は口縁部直下に陸帯を貼り付け、刻目を施している。器壁はやや薄い。637~639は口縁部の小片で、いずれも縄文を地文とし、太い沈線による区画文と思われる文様を描く。639のみ口縁端部に押圧を施しているが、文様や胎土などからみて、同一個体の可能性が高い。640は縄文が施されており、波



第82圖 包含層出土遺物① (1/4、1/3、2/3)



第83図 包含層出土遺物②、表土・攪乱等出土遺物 (1/3、2/3)



状口縁の可能性が高い。

641・642は無文浅鉢と思われる。いずれも口縁部片で、641は口縁端部を丸く収める。

643～648は深鉢ないし浅鉢の底部である。648は底部外面に敷物痕と思われるものが認められるが、不明瞭である。

649・650は台付深鉢ないし台形土器と思われる。649は深鉢等の底部片とも思われるが、底部外面にあたる部分に沈線が施されており、おそらくこの面が上面になると考えられる。小片のため、透孔の有無などは不明であるが、台付深鉢か台形土器の破片の可能性が高い。650は台付深鉢の脚部片である。縦位の隆帯と、透孔の一部が遺存している。透孔はおそらく縦長の楕円形になると思われる。

651～655は石器や剥片である。

651は石錐である。やや不整形なサヌカイトの剥片を素材とし、一端の側縁に細かな調整彫痕を加えて尖らせている。

652・653は石皿（台石）である。単独で包含層内から出土しているため、古墳時代前期の台石の可能性もある。652は砂岩製で、半分以上を欠損するが、明瞭な平坦面をもち、縁がわずかに盛り上がる。平坦面は使用により摩滅している。653は溶結凝灰岩または火砕岩製である。大部分を欠損しているが、元はかなり大型品であったものと思われる。上面は明瞭な平坦面となっており、使用等による摩滅が顕著に認められる。ごくわずかに敲打痕や擦痕も残る。

654・655は剥片である。654は黒曜石で、両側から挟り状の剥離が施されているようにも見受けられるため、小型の石匙の可能性もある。ただし、刃部となるのは片側の側縁のみである点や、原石面の可能性もある風化面を広く残すなど、意図的に製作された石器とみるには問題もあるため、剥片とした。RFないしUFとも思われる。655は下呂石で、側面に原石面が残る。

### (7) 表土・攪乱等出土遺物

**表土（第83図656～658）** 656・657は縄文土器である。656は有文深鉢の口縁部から頸部にかけての破片と思われる。横位に隆帯が貼り付けられ、沈線による文様が認められる。657は台付深鉢の脚部上

半の破片である。脚部の上端は粘土を貼り付けて幅広の隆帯状とし、端面に刺突による列点文を施す。脚部にはおそらく縦長の楕円形と考えられる透孔が一部遺存している。脚部の上には、体部が剥離したような痕跡が認められる。

658は石器で、ナイフ形石器と思われるものである。赤色のチャートの縦長剥片を素材とし、片側の側縁に刃潰し状の剥離を施している。

**出土位置不明（第83図659）** 659は石器で、磨製石斧である。遺構内から出土したものの、その後の取り扱いの中で出土遺構が不明となった。安山岩製である。小型の定角式の磨製石斧で、全体的に丁寧な研磨によって整形されており、両側には明瞭な面を作り出している。基部と刃部は欠損しており、欠損後に蔽石として再利用されている。刃部の欠損面には明瞭な敲打痕が認められる。

**攪乱等（第83図660～683）** 660～683は、風倒木痕等から出土した遺物である。

660～680は縄文土器である。

660～666は有文深鉢の口縁部片である。660は波状口縁で、口縁部内面は肥厚する。刺突による列点文が施されている。662は波状口縁で、沈線による文様が一部遺存している。663は口縁部の一部に粘土を貼り付け、その上に竹管状の工具で刺突を施している。また、粘土が貼り付けられていない部分には太い沈線が認められる。664・665は口縁端部を欠損するが、口縁部の断面形が三角形を呈し、沈線による文様が認められる。666は口縁部直下に横位の隆帯を貼り付ける。その他に文様は認められず、無文深鉢の可能性もある。

667～672は有文深鉢の体部片と思われるものである。667は太い沈線による渦巻文が描かれている。669は横位の隆帯を貼り付け、隆帯上に刺突による列点文を施す。隆帯の下位には斜行沈線あるいは矢羽根状文が一部遺存する。670は縄文を地文とし、縦位の沈線と蛇行沈線が施される。G-7A7P1t3出土の590や、G-7A7P1t5出土の593と同一個体の可能性もある。671・672は縄文のみが認められる。

673・674は浅鉢と思われるものである。673は口縁部の小片で、器壁は薄い。沈線の間に縄文が充填されている。口縁端部には押圧が認められる。674

は波状口縁で、文様と思われるものがわずかに遺存する。

675・676は深鉢ないし浅鉢の底部片である。675の底部外面には押圧状の凹みが2箇所認められる。676の底部外面には編物状の敷物痕が残る。

677・678は把手である。678は深鉢に付属するものと思われるが、明瞭な文様は認められない。

679・680は台付深鉢と思われる。679は脚台部の破片で、縦位の隆帯が貼り付けられ、横長の楕円形の透孔が2段に開けられている。680は外面に縄文が施されている。透孔が一部遺存している。

681～683は石器や剥片である。681はサヌカイトの石鐮の破片と思われる。682・683はチャートの剥片で、いずれも原石が残る。

## 註

- 1) 正式には「S字状口縁台付甕」と呼称すべきであるが、ほぼすべての個体に脚台が付くことや、脚台の有無が不明な他の形態の甕との呼称の統一などから、本報告では「台付」を省き「S字状口縁甕」と略称する。
- 2) 小片のため、他の個体と同一個体の可能性もあるが、

形状や文様、胎土等の特徴からは、確実に他の個体と同一とは判断できなかった。なお、同一個体の可能性があるものについては、一覧表・写真図版編第8表の備考欄に示している。

- 3) 石器石材の中で、溶結凝灰岩や火砕岩、石英斑岩、流紋岩としたものの多くは、いわゆる湖東流紋岩類に含まれるものと思われる。なお、石器石材については三重県総合博物館の津村善博氏にご教示頂いた。
- 4) 形状や文様、胎土等の特徴からは確実に他の個体と同一と判断できなかったため、個別に掲載した。
- 5) 津市大石遺跡SH48などに類例がある。三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター1992『平成3年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊
- 6) ここで報告する遺物を出土したピットについては、本報告内では特に位置を示していない。詳細なピットの位置については、調査時に作成した遺構カードに記載されている。第V章についても同様である。
- 7) 確実に同一個体とは判断できなかったため、別個体として図化した。

## 第V章 古墳時代前期の遺構・遺物

### 第1節 遺構

#### (1) 竪穴建物

**SH142 (第84図)** 第2次調査区の南東端で検出した建物で、南側は調査区外へと続く。平面形は長軸4.2m以上の方形を呈すると考えられるが、やや不整形である。

主柱穴は2基検出されたが、調査区外へと続くため、総数は不明である。今回調査を行った範囲では、貯蔵穴や壁際溝、焼土、貼床は確認できなかった。

遺物は、埋土中から縄文土器や土師器が出土しているが、出土量は少ない。また、床面で検出されたピット(G-F13Pit1)<sup>1)</sup>から縄文土器深鉢の破片がまとまって出土している。

ピットの出土遺物から縄文時代の遺構とも思われるが、平面形や出土遺物からは、遺構の時期は古墳時代前期初頭～前葉の可能性が高いと考えられる。

**SH145 (第85図)** 第2次調査区の東端で検出した建物で、大部分が調査区外となっている。平面形は長軸3.4m以上の方形を呈すると考えられる。

調査を行った範囲では炉や貯蔵穴、壁際溝、貼床などの建物に伴う構造物は確認できず、竪穴建物でなく土坑の可能性もある。

遺物は、埋土中から土師器が出土しているが、いずれも細片で図化できるものはなかった。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭～前葉と考えられる。

**SH166・205 (第85・86図)** 第2次調査区の北東部で検出した建物である。SH205は平面形が長軸4.7m、短軸4.2mの隅丸方形を呈する。

主柱穴は検出できなかった。建物中央よりやや西側の床面から焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。貯蔵穴とみられる土坑は、南隅から検出された。壁際溝はほぼ全周するが、東側の中央部のみ途切れる。

また、床面からは建物の構築材と考えられる多数の炭化材が検出されたほか、東部では屋根材等とし

て用いられた可能性がある焼土塊も検出されていることから、焼失建物と考えられる。

SH205を完掘後、その下層の地山上面で一回り小さい方形の落ち込みが検出された。竪穴建物の痕跡である可能性が考えられたため、これをSH166とした。主柱穴の可能性のあるピットが4基検出されている。また、南側や東側では、壁際溝の一部と考えられる細い溝が検出されている。SH205と主軸方向などが揃っていることを鑑みれば、SH166を拡張する形でSH205が造られた可能性もある。

遺物は、SH205の埋土中から土師器、石杵、砥石、台石が出土した他、大きな粘土塊が出土している。粘土塊は、土器の製作に用いるためのものであった可能性がある。また、縄文時代の切目石鐘も出土した。

出土遺物からみて、SH205の時期は古墳時代前期後葉と考えられる。SH166の時期は出土遺物がないため判然としないが、SH205との重複状況などから、両者には大きな時期差はないと推測される。

**SH169/324 (第87・88図)** 第2次調査区と第3次調査区との境で検出した建物である。大部分は第3次調査において検出された。SH198・183・323など、多数の竪穴建物が重複する中に位置する。平面形は長軸6.5m、短軸6.4mのほぼ正方形を呈する。

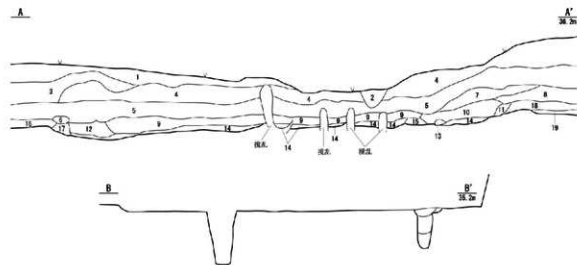
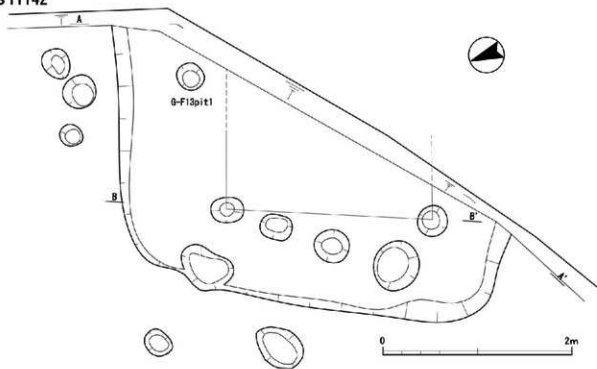
主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿って正方形に配置されている。

焼土は検出されず、炉の位置は不明であるが、北西と南西の主柱穴を結ぶラインよりやや東側で土坑が検出されており、炉であった可能性もある。

貯蔵穴とみられる土坑は、南東隅から検出された。第2次調査区と第3次調査区にまたがって検出されたため、正確な形状は復元できなかったが、平面形は円形を呈すると思われる。深さは0.3mほどある。

壁際溝は、ほぼ全周するとみられる。貼床は明確には確認できなかった。周溝状掘形<sup>2)</sup>も認められないが、逆に北半部の壁に沿って床面がわずかに高く

SH142



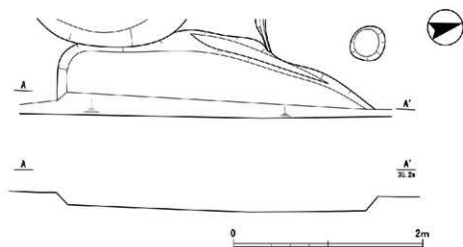
【A-A' 断面】

1. 10YR4/3に灰~黄褐色粒砂~シルト、しまり面、粘性中
2. 10YR3/2黒褐色細粒砂~シルトと10YR5/6黄褐色細粒砂~シルトが混じり合う、しまり中、粘性中
3. 10YR3/3~4/暗褐色~暗褐色のめと10YR5/6黄褐色細粒砂~シルトが混じり合う、5YR/2灰オリーブと2YR/9黄褐色が混じり合う粘質土をブロック状に含む、しまり面、粘性弱、礫を含む
4. 10YR2/2~2/3黒褐色細粒砂~シルト、しまり中、粘性中、礫を含む
5. 10YR2/2~3/2黒褐色細粒砂~シルト、しまりやや強、粘性中、礫、土層片を含む
6. 10YR2/2黒褐色細粒砂~シルトと10YR3/2黒褐色シルトが混じり合う、しまりやや強、粘性やや強、礫を含む
7. 10YR2/2~2/1黒褐色~黒シルト、しまり中、粘性やや強、土層片を含む
8. 10YR2/1~10YR2/2黒~黒褐色細粒砂~シルト、しまり中、粘性中、土層片を含む
9. 10YR2/2~2/1黒褐色~黒褐色細粒砂~シルト、7.5YR/4暗シルトをブロック状に含む、しまり中、粘性中
10. 10YR2/1黒シルト、しまり中、粘性中、土層片を含む
11. 10YR2/1~2/2黒~黒褐色細粒砂~シルトと10Y5/6黄褐色細粒砂~シルトが混じり合う、しまり中、粘性中
12. 10YR2/2黒砂シルト、しまり中、粘性やや強、土層片を含む
13. 10YR5/6黄褐色細粒砂~シルト、10YR2/2黒褐色細粒砂~シルトをブロック状に含む、しまりやや強、粘性やや強
14. 10YR2/2黒褐色細粒砂~シルトと10YR5/6黄褐色細粒砂~シルトが混じり合う、しまりやや強、粘性やや強 (5YR/2)
15. 10YR2/2~2/1黒褐色~黒褐色細粒砂~シルト、10YR5/6黄褐色細粒砂~シルトをブロック状に含む、しまり中、粘性中、礫を含む
16. 10YR2/2黒褐色細粒砂~シルトと10YR4/6黄褐色細粒砂~シルトが混じり合う、しまりやや強、粘性やや強、礫を含む
17. 10YR4/6黄褐色細粒砂~シルトと10YR2/3黒褐色細粒砂~シルトが混じり合う
18. 10YR2/3~3/3黒褐色~暗褐色細粒砂~シルトと10YR5/6黄褐色細粒砂~シルトが混じり合う、10YR2/1黒褐色細粒砂~シルトをブロック状に含む
19. 10YR2/3~3/3黒褐色細粒砂~シルト、しまりやや強、粘性やや強

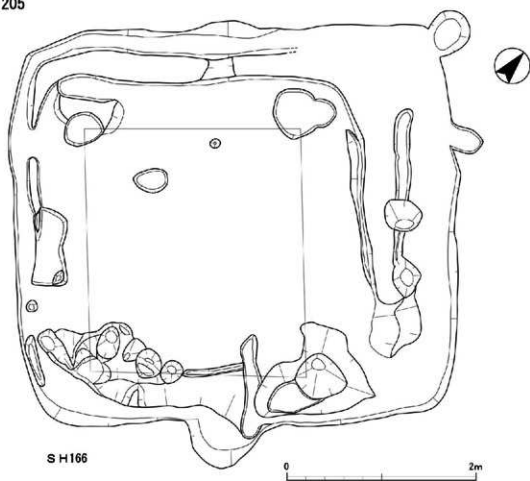
【B-B' 断面】

土層片記録なし

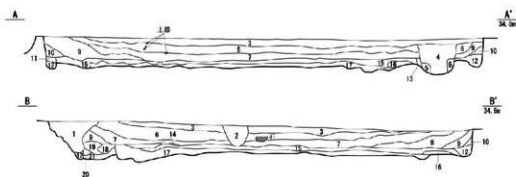
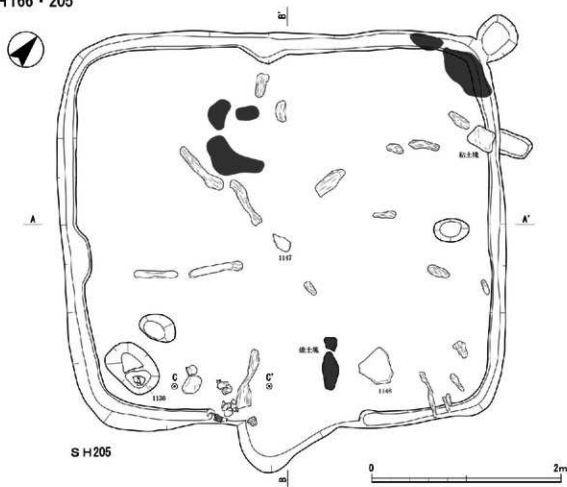
SH145



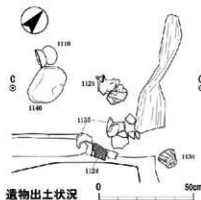
SH166・205

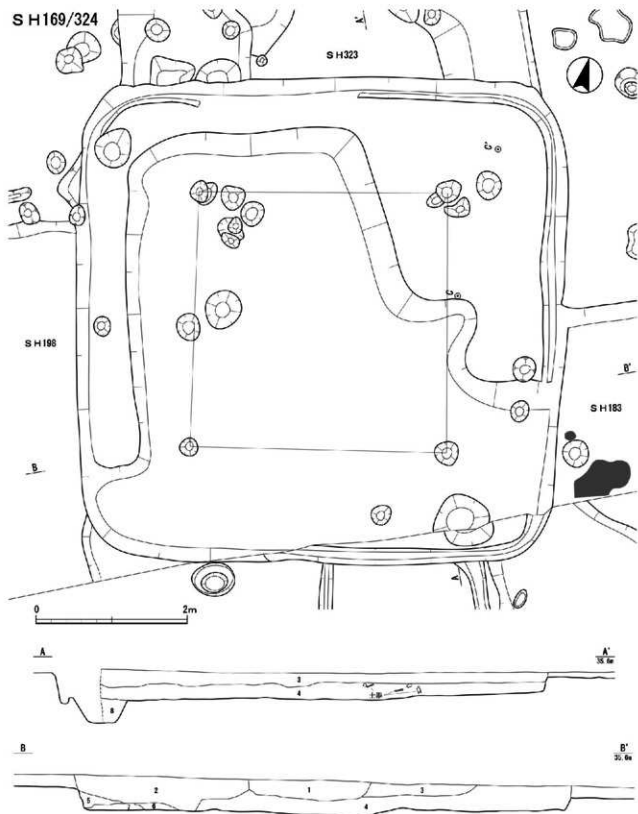


第85圖 SH145、SH166・205① (1/40)



1. 10YR2/1黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
2. 10YR3/1黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
3. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
4. 10YR1/1～3/2黒褐色細粒砂、しまりやや強、粘性やや弱
5. 10YR1/1黒褐色細粒砂～シルト、10YR4/6細シルトを40%含む、しまりやや強、粘性やや強
6. 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
7. 10YR3/2～3/3黒褐色～暗褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
8. 10YR2/2～2/3黒褐色細粒砂～シルト、10YR1/4～4/6細シルトを10%含む、しまりやや強、粘性中
9. 10YR2/2～2/3黒褐色細粒砂～シルト、10YR1/4～4/6細シルトを20%含む、しまりやや強、粘性中
10. 10YR2/1黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや弱
11. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
12. 10YR3/2黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性やや弱
13. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中（微塵混り）
14. 10YR3/1黒シルト、しまり強、粘性強
15. 10YR5/6黄褐色シルトと10YR2/1黒シルトが混じり合う、しまり強、粘性強
16. 10YR5/6黄褐色細粒砂～シルト、しまり極強、粘性強
17. 10YR2/1黒シルト、10YR5/6黄褐色シルトをブロック状に含む、しまり強、粘性強
18. 10YR2/1黒シルト、しまり強、粘性強
19. 10YR3/2～2/3黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
20. 10YR2/1～2/2黒～黒褐色シルト、しまり強、粘性中
21. 10YR3/3～3/4暗褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中

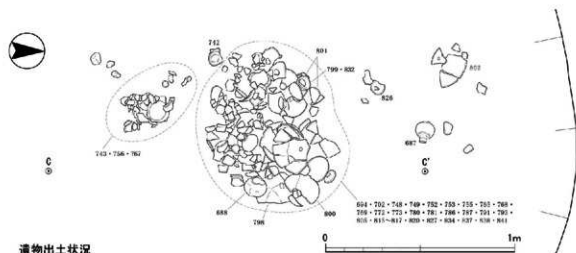




1. 10YR2/1黒粘砂〜シルト、粘性強
2. 5YR2/1黒粘砂〜シルト、粘性強、腐葉を含む
3. 7.5YR1/1黒粘砂〜シルト、しまりや中強、粘性強
4. 7.5YR2/1黒粘砂〜シルト、しまりや中強、粘性強、分色粒を少量含む
5. 7.5YR1/7/黒粘砂〜シルト、粘性強

6. 5YR2/2黒粘砂〜シルト、粘性強
7. 7.5YR5/4にぶい粘黄砂〜シルト、粘性強
8. 7.5YR2/1黒粘砂〜シルト、10YR4/4粘黄砂〜シルトを復状に3%含む、しまり中、粘性強

第87図 SH169/324① (1/50)



遺物出土状況

第88図 SH169/324② (1/20)

なっている。ベッド状遺構ほど明瞭な高まりではなく、建物に伴う何らかの施設とは考えにくい。

建物内北東隅部では、床面が若干高くなっている部分で多量の土師器が固まって出土した。床面からは若干浮いた位置で検出されている (A-A' 断面)。壺や甕、高坏など複数の器種を含む数十個体以上の土師器が存在したと思われるが、破片は混在しており、整然と並べられている様子は認めがたい。壺や甕、高坏にはほぼ完形に復元できた個体もある (687・694・768・769・802など)。

遺物は、埋土中から土師器や土製品、磁石が出土している。土師器の出土量は非常に多く、壺、甕、高坏、器台、鉢など多様な器種が含まれている。また、縄文土器や磨製石斧も出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH175 (第89図)** 第2次調査区の南端で検出した建物である。南側の一部は調査区外へと続く。また、北西隅は農業用水管理設時の掘削によって削平を被っている。平面形は長軸6.1m、短軸5.9mの正方形に近い方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。

焼土は検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴とみられる土坑は南西隅付近から検出された。平面形が円形の土坑で、一部は壁際溝にかかっている。

壁際溝は、南半部のみで確認できた。北半部では

平面的に検出できなかったが、土層断面では壁際溝と思われる土層が確認できる (A-A'・B-B' 断面第7層)。当該建物が位置する場所は地山中に礫を多く含んでいるため、その影響で認識できなかった可能性がある。建物床面付近では貼床と考えられる土層が確認できる (A-A'・B-B' 断面第6・8層)。

遺物は、埋土中から土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH176 (第90図)** 第2次調査区の西部で検出した建物である。平面形は長軸5.7m、短軸5.5mの正方形に近い方形を呈する。

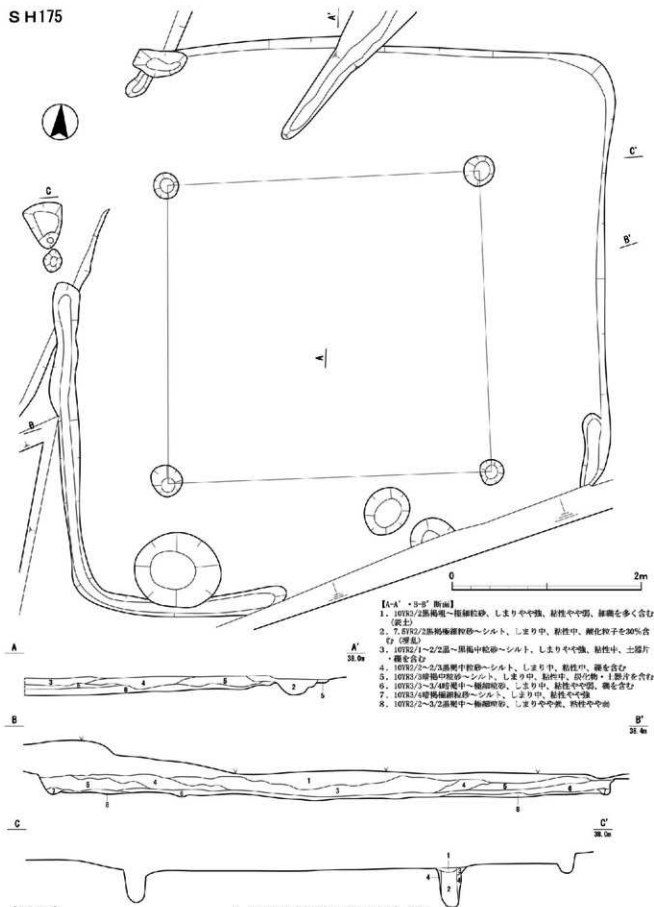
主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。うち3基では、土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕と考えられる痕跡が確認できた。

炉は建物中央より西に寄った位置で検出された。浅い土坑で、底面は被熱する。炉の周囲には花崗岩や砂岩などの礫の礫が配置されており、添石炉<sup>2)</sup>と考えられる。

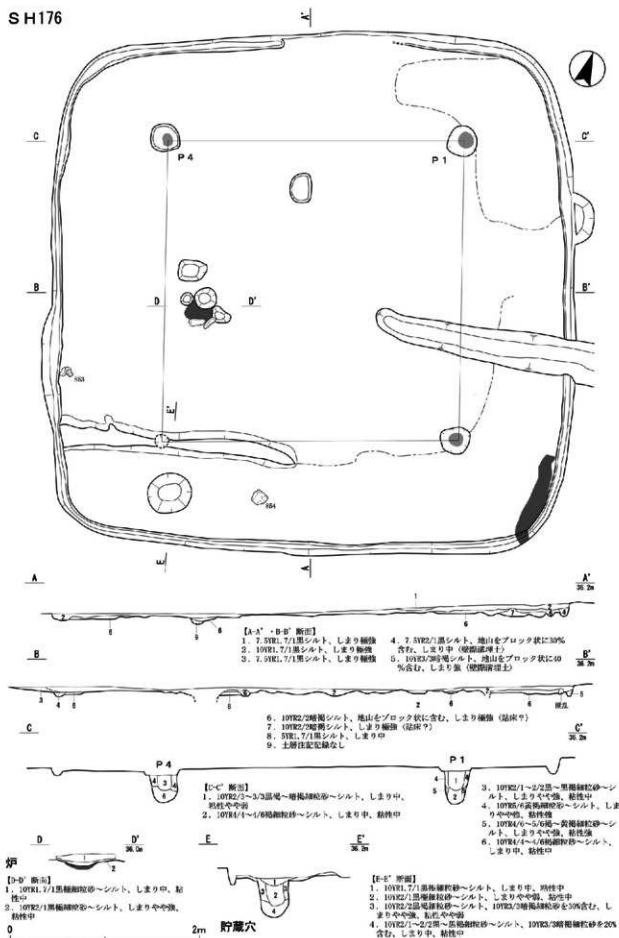
貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅付近で検出された。平面形が円形の小型の土坑で、深さは0.4mほどと深い。貯蔵穴付近には白っぽい砂質土からなる貼床が施されており、貯蔵穴はその上から掘り込まれている。また、貯蔵穴の北側には、低く土手状に0.1mほど盛り上がる部分が認められ、西壁から東に2.5mほど延びている。壁際溝はほぼ全周する。



SH175

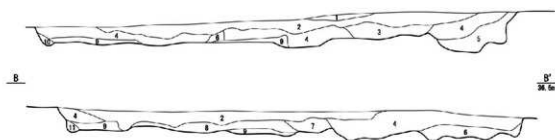
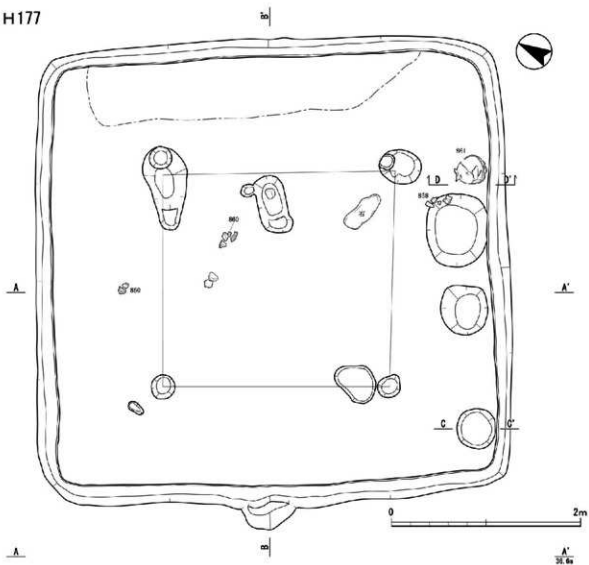


第89図 SH175 (1/40)



第90図 SH176 (1/40)

SH177



【4-4'・B-B'断面】

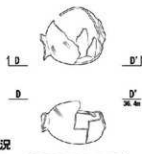
1. 10YR2/2黒褐色シルト、しまり強（表土？）
2. 10YR1.7/1黒シルト、しまりやや強
3. 7.5YR1.7/1黒シルト、しまり弱
4. 10YR2/1黒シルト、しまり中
5. 7.5YR1.7/1黒シルト、しまり中
6. 10YR2/1黒シルト、しまり中
7. 7.5YR2/1黒シルト、しまり中
8. 10YR2/1黒シルト、しまり中
9. 10YR2/1黒シルト、地山をブロック状に含む、しまりやや強
10. 10YR2/3暗褐色シルト、地山をブロック状に30%含む、しまり中（埋蔵層遺土）
11. 10YR2/1黒シルト、しまり中

貯蔵穴



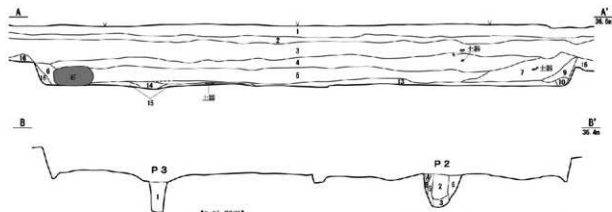
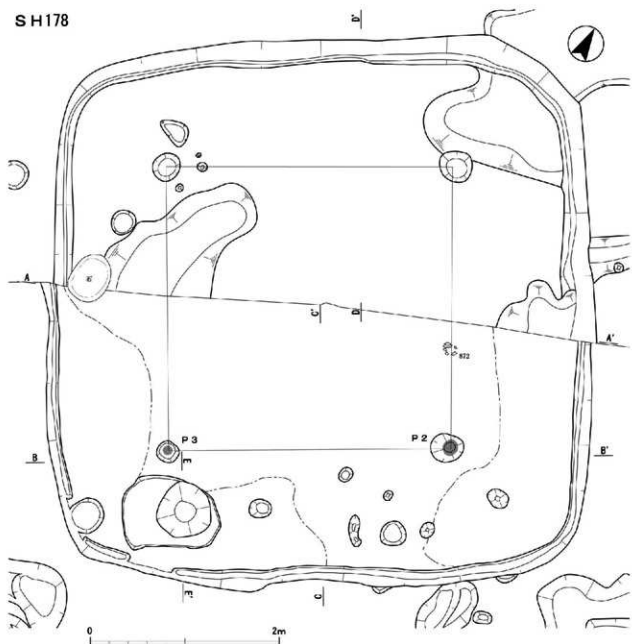
【C-C'断面】

1. 10YR2/2黒褐色シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/3～2/3暗褐色～暗褐色シルト、10YR5/6黄褐色シルトブロックを含む、しまりやや強、粘性やや強



遺物出土状況

SH178



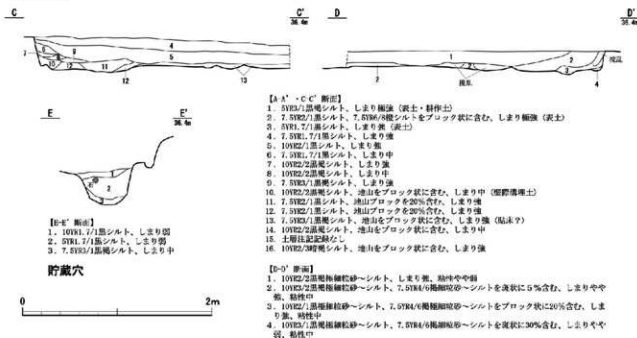
【B-B' 断面】

1. 10°R3/2階層シルト、しまり目、漆を含む
2. 10°R2/1階層シルト、しまり目や付
3. 10°R2/2階層シルト、しまり目

4. 10°R3/2階層～10°R4/4階層シルト、漆を含む
5. 10°R3/2階層シルト、地山ブロックを極少量含む
6. 10°R3/3階層シルト、しまり目

第92図 SH178① (1/40)

## SH178



第93図 SH178② (1/40)

北側で一部途切れるが、擾乱等の影響で確認できなかった可能性がある。貼床は東側から南側にかけて顕著に見られた。周溝状掘形を埋める形で貼床が施されている。

建物内部の南東隅部では、炭化物が混じる焼土が検出された。ただし、建物全体が火災にあった痕跡は認めがたく、焼土の生成要因は不明である。

遺物は、埋土中から土師器と砥石が出土している。遺物の出土量は少ない。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH177 (第91図)** 第2次調査区の西部で検出した建物である。平面形は長軸5.0m、短軸4.9mのほぼ正方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿って正方形に配置されている。

焼土は検出されず、炉の位置は不明である。ただし、建物中央からやや北東に寄った位置に浅い土坑状の遺構がみられ、内部から拳大の礫が検出されており、これが炉にあたる可能性が考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は南隅付近から検出された。平面形が円形の小型の土坑である。

壁際溝は全周する。貼床は東側に顕著に見られた。東側を中心に周溝状掘形が存在し、これを埋める形で貼床が施されている。

この他に、南東部の壁際で土坑状の落ち込みが2基検出されている。埋土の堆積状況からこの建物に伴うものと考えられるが、機能などは不明である。出入りに関わる遺構の可能性もある。

建物内東部では、床面に近い位置で完形に近い土師器広口壺が検出された。また、中央部からやや東に寄った位置で、大型の礫が検出されている。

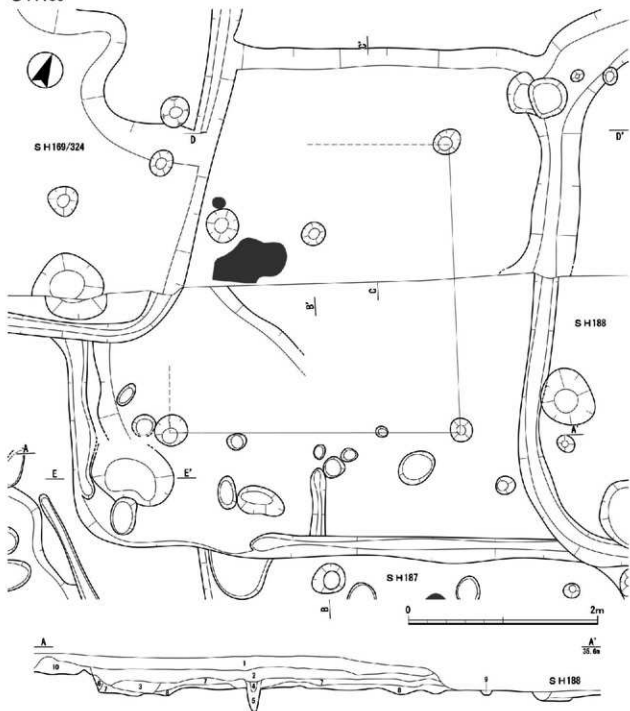
遺物は、埋土中から土師器が出土している。壺が多く、特に大型の広口壺が複数個体存在する点が特徴的である。甕などの器種は少ない。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH178 (第92・93図)** 第2次調査区及び第3次調査区の中央部で検出した建物である。第2次調査で南半部が調査され、第3次調査で北半部が調査された。平面形は長軸5.8m、短軸5.7mのほぼ正方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿って正方形に配置されている。うち2基では、柱痕ない

SH183



## 【A-A' 断面】

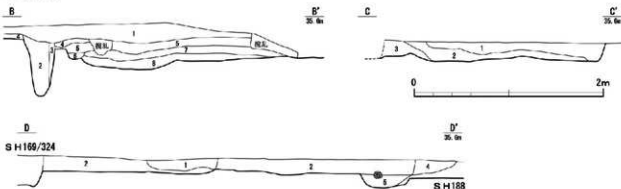
1. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中、酸化褐色硝子を10%含む
2. 10YR2/2～2/3黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
3. 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性中
4. 10YR2/2～2/3黒褐色～暗褐色細粒砂～シルト、しまり中～強、粘性中（柱穴埋土）
5. 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルトと10YR2/2黒褐色細粒砂～シルトが混じり合う、しまり強、粘性やや強（柱穴埋土）
6. 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中（壁跡埋土）
7. 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルト、10YR2/2黒褐色細粒砂～シルトを40%含む、しまり強、粘性やや強（乱石）
8. 10YR2/3黒褐色シルトと10YR3/3暗褐色シルトと10YR2/2～2/3黒褐色細粒砂～シルトが混じり合う、しまり強、粘性強（乱石）
9. 10YR2/3黒褐色砂～シルト、10YR2/2～2/3黒褐色細粒砂～シルトを50%含む、しまりやや強、粘性やや強
10. 10YR2/3～2/3黒褐色～暗褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中

## 貯蔵穴

## 【E-E' 断面】

1. 10YR3/3暗褐色細粒砂～シルト、10YR2/3黒褐色シルトを20%含む、しまりやや弱、粘性中
2. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
3. 10YR2/2～2/3黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性やや弱
4. 10YR2/3黒褐色中粒砂～シルト、しまり強、粘性弱
5. 10YR2/2～2/3黒褐色～暗褐色細粒砂～シルト、10YR3/3暗褐色細粒砂～シルトを30%含む、しまり強、粘性やや強

## SH183



### 【B-B' 断面】

1. 10YR2/2黒褐色細砂質シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/1-2基へ黒褐色細砂質シルト、しまり中、粘性中 (SH187柱穴相土)
3. 10YR2/2黒褐色細砂質シルトと10YR5/6黄褐色細砂質シルトが混じり合う、しまり強、粘性中 (SH187柱穴土)
4. 10YR2/3黒褐色細砂質シルトと10Y2/2黒褐色細砂質シルトが混じり合う、しまりやや強、粘性やや強 (SH187柱穴)
5. 10YR2/2黒褐色細砂質シルト、しまり中、粘性中
6. 10YR2/3黒褐色細砂質シルト、10YR5/6黄褐色シルトを30%含む、しまり中、粘性中
7. 10YR2/3-1/3基へ黒褐色細砂質シルトと10YR5/6黄褐色シルトが混じり合う、しまり強、粘性やや強
8. 10YR5/6黄褐色シルト、10YR2/3暗褐色シルトを30%含む、しまり強、粘性中

### 【C-C'・D-D' 断面】

1. 10YR2/1黒褐色細砂質シルト、10YR4/6褐色細砂質シルトをブロック状に10%含む、しまり強、粘性中
2. 10YR2/1黒褐色細砂質シルト、10YR4/6褐色細砂質シルトをブロック状に30%含む、しまり中や強、粘性中
3. 10YR2/1黒褐色細砂質シルト、しまり強、粘性中
4. 7. 5YR2/1黒褐色細砂質シルト、粘性中
5. 10YR2/2黒褐色細砂質シルト、粘性中

## 第95図 SH183② (1/40)

し柱の抜き取り痕と考えられる痕跡が確認できた。特に、P2では土層断面でも明瞭に確認できる。

焼土は検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅付近から検出された。平面形が円形の小型の土坑で、深さは0.4mほどと深い。また、周囲の床面が浅く落ち込んでいる。

壁際溝は、ほぼ全周する。ただし、南西隅の貯蔵穴付近では若干断続的になっている。

南半部では床面に貼床が施されている (A-A'・C-C' 断面第11~13・15層)。貼床除去後に、ごく浅い周溝状掘形が部分的に検出されている。北半部では貼床の有無は不明確であるが、掘乱とされる浅い落ち込みが壁際で検出されており、南半部の周溝状掘形と連続する。したがって、これが周溝状掘形であったと考えられ、北半部でもこうした部分を中心に貼床が施されていたと考えられる。また、周溝状掘形の底面には不整形な窪みが複数確認された (写真図版32)。後述のSH338ほど明瞭ではないが、堅穴掘削時の土木具による掘削痕の可能性が高い。

建物内西部の壁際からは、大型の扁平な礫が検出された。床面直上から検出されており、土層断面からみると貼床にも食い込んでいる。壁際溝にも一部かかっているようである。建物構築時に据えられた

可能性も考えられるが、用途は不明である<sup>4)</sup>。

遺物は、埋土中や床面上から土師器が出土している。小片ながら手焙形土器も出土した。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH183 (第94・95図)** 第2次調査区と第3次調査区との境で検出した建物である。SH198・187・323など、多数の堅穴建物が重複する中に位置する。SH188より後出する可能性が高い。東側は建物の範囲が判然としないが、平面形は長軸5.6m、短軸5.4mほどの正方形に近い方形を呈するものと思われる。

主柱穴は3基検出された。SH169/324の床面から検出された小型のピットがもう1基の主柱穴である可能性があり、元は4基の主柱穴が建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されていたものと考えられる。建物中央よりやや西側の床面から焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅付近から検出された。平面形がやや不整形な楕円形の土坑で、壁面は一部オーバークラック気味となる。

壁際溝は、第2次調査で調査された南半部でのみ確認されている。ただし、北半部においても、土層

断面をみると壁際溝が存在していた可能性も考えられる（C-C'断面第1層、D-D'断面第5層）。

貼床は、建物全体に施されていた可能性が高い（A-A'断面第7・8層）。また、南半部西側では周溝状掘形形の落ち込みが検出されており、こうした周溝状掘形を埋める形で厚く貼床が施されていたものと考えられる。

この他に、南側の壁面の中央付近から細い溝が建物中央に向かって延びる。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

遺物は、貯蔵穴から土師器高杯の脚部片が出土した。埋土中からも土師器が出土しているが、小片が多い。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH187（第96図）** 第2次調査区と第3次調査区との境で検出した建物である。SH198・183・323など、多数の堅穴建物が重複する中に位置する。SH188に先行し、この建物によって北東隅の一部が削平を被っている。SH183・189よりは後出する。東側は建物の範囲が判然としなが、平面形は長軸5.8m、短軸5.0m以上の正方形に近い方形を呈するものと思われる。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。建物中央よりやや北西側の床面から焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。建物中央よりやや西側でも焼土がわずかに検出されているが、性格は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅付近で検出された。2基の土坑が東西に並んで検出されたが、西側の平面形が楕円形の小型の土坑は建物の壁に一部かかっており、深さも0.1mほどと浅い。また東側の平面形が方形の土坑も深さが数cmしかなく、中央のみ深くなっているもの径0.3mとビット程度の規模である。したがって、どちらも貯蔵穴とするには疑問が残るが、深さや位置からみれば東側の土坑が貯蔵穴である可能性の方が高いだろう。

壁際溝は平面ではほとんど検出できず、南側でごくわずかに検出されたのみである。ただし、土層断面からは南側だけでなく西側にも壁際溝が存在したことが窺われる（第2層）。

貼床は床面全体に施されている。周溝状掘形の存在は明瞭ではないが、北西部で若干の落ち込みが検出されていることや、土層断面からみると南側の壁沿いに若干凹みが存在していることから、不明瞭ながら周溝状掘形を有する建物であると考えられる。

遺物は、埋土中や床面上から土師器が出土している。ほぼ全形が復元できた字状口縁台甕もある。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH188（第97図）** 第2次調査区と第3次調査区との境で検出した建物である。SH198・183・187・323など、多数の堅穴建物が重複する中に位置する。SH183に先行し、SH187・189にも先行する可能性が高い。SH190より後出する。平面形は長軸6.1m、短軸6.0mのほぼ正方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿って正方形に配置されている。

炉は、建物中央より西に寄った位置で検出された。焼土の広がりが見られ、その横に長径20cmほどの礫が配置されており、添石炉と考えられる。建物中央よりやや東側でも焼土が数箇所から検出されているが、性格は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南東隅付近で検出された。平面形が円形の小型の土坑で、深さ0.3mほどの浅い碗形に掘り込まれている。南西隅付近でも貯蔵穴とも考えられる土坑が検出されているが、深さ0.2mほどとやや浅い。

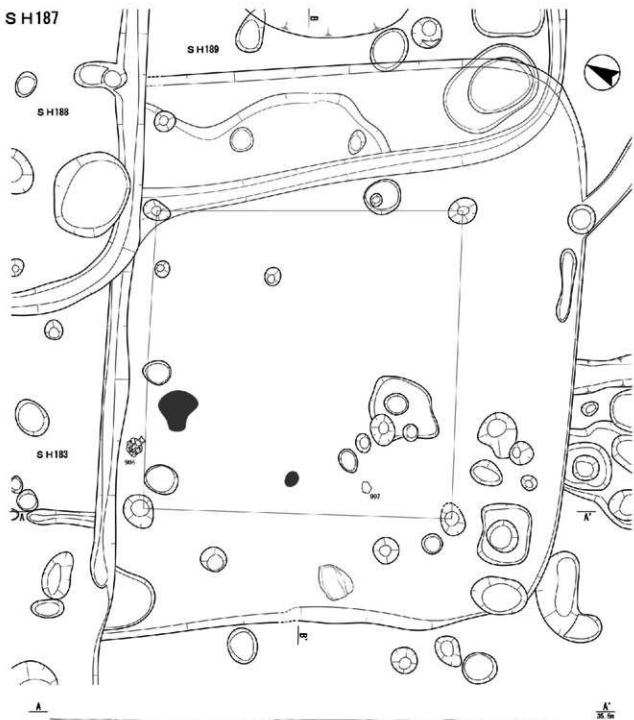
壁際溝は全周する。北東部では壁際溝が二重になっているようにもみえる。後述するように建物の建て替えによるものとも考えられるが、土層断面からみると内側の溝状のものは幅が狭い周溝状掘形である可能性が高い。

床面には貼床が施されている（A-A'・C-C'断面第11層）。土層断面からは、壁面に沿って幅の狭い周溝状掘形が存在し、そこにも貼床が施されており、その上から壁際溝が掘り込まれている状況が確認できる。

なお、主柱穴については、南側の2基は平面形が不整形で、北側の2基はそのすぐ横に別のビットが存在している。焼土が炉以外にも検出されていることや、貯蔵穴とみられる土坑が2基存在することな



SH187



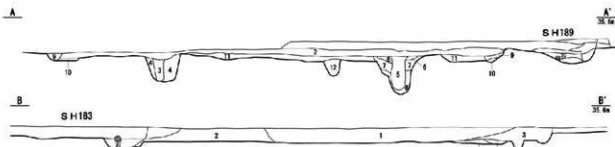
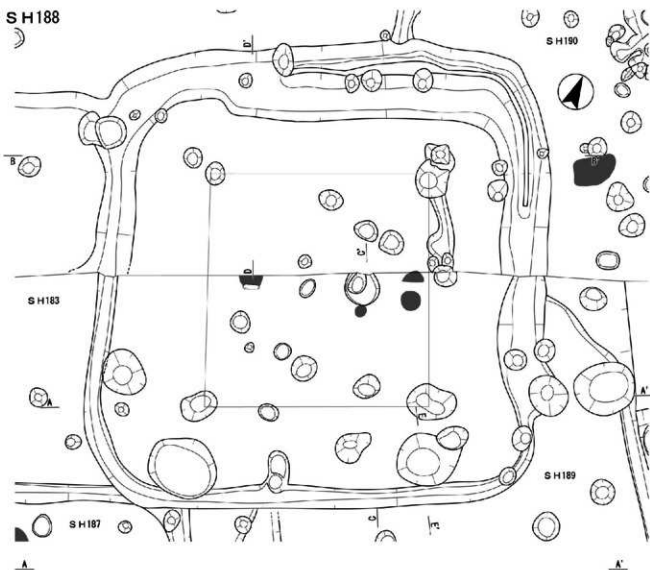
1. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強（埋戻し土）
3. 10YR2/2～3黒褐色細粒砂～シルト、10YR5/6黄褐色シルトを10%含む、しまり中、粘性中
4. 10YR2/1～2黒～黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中（穴埋し）
5. 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルトと10YR5/6黄褐色細粒砂～シルトが混じり合う、しまり強、粘性中
6. 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルトと10YR5/6黄褐色シルトが混じり合う、しまりやや強、粘性やや強（埋戻し）



7. 10YR3/3～3/4暗褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中、礫を含む
8. 10YR3/1黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中

第96図 SH187 (1/40)

SH188



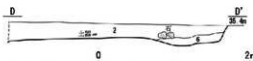
【B-B'・D-D' 断面】

1. 7.5YR3.7/1黒砂粘砂～シルト、粘性中
2. 5YR2/1黒粘砂粘砂～シルト、しまりやや強、粘性強
3. 7.5YR2/1黒粘砂～シルト、粘性中

4. 10YR3/1黒粘粘砂～シルト、粘性中

5. 10YR5/6黄粘粘砂～シルト、粘性中

6. 5YR2/1黒粘粘砂～シルト、5YR2/4暗赤粘粘砂～シルトを擬状に10%含む、しまりやや強、粘性強



【A-A'・C-C' 断面】

1. 10YR2/2黒粘粘砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/3黒粘粘砂～シルト、しまり中、粘性中
3. 10YR2/3黒粘粘砂～シルト、しまり中、粘性中
4. 10YR3/3に5YR黄粘粘砂～シルト、10YR2/3黒粘シルトを20%含む、しまり強、粘性やや弱（柱穴埋土）
5. 10YR2/3～3/3黒粘～暗粘粘砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強（柱穴埋土）
6. 10YR2/3黒粘粘砂～シルト、10YR5/6黄粘中粘砂～シルトを10%含む、しまり強、粘性中（柱穴埋土）
7. 10YR2/3黒粘粘砂～シルト、10YR5/6黄粘中粘砂～シルトを20%含む、しまり強、粘性中（柱穴埋土）
8. 10YR3/3暗粘中粘砂～シルト、しまり強、粘性中やや弱（柱穴埋土）
9. 10YR2/2黒粘粘砂～シルト、しまり中、粘性中（壁跡埋土）
10. 10YR2/2黒粘粘砂～シルト、10YR5/6黄粘シルトを30%含む、しまりやや強、粘性中（壁跡埋土）
11. 10YR2/2黒粘粘砂～シルト、10YR5/6黄粘シルトを40%含む、しまり強、粘性強
12. 10YR2/2黒粘シルト、10YR5/6黄粘シルトを20%含む、しまり強、粘性強
13. 10YR3/1黒粘粘砂～シルト、しまり中、粘性中

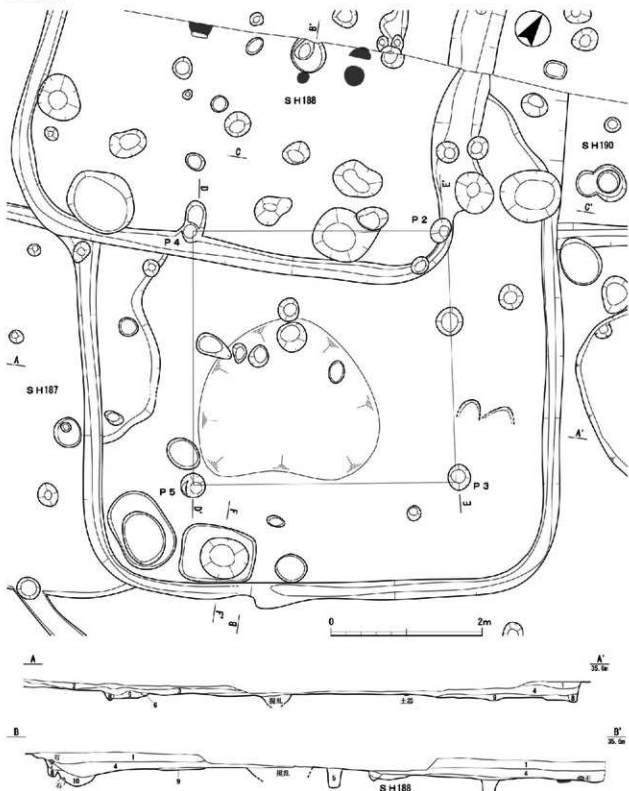
## 貯蔵穴

1. 10YR2/2黒粘粘砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/3黒粘粘砂～シルト、しまり強、粘性やや弱

0 2m

第97図 SH188 (1/50, 1/40)

SH189

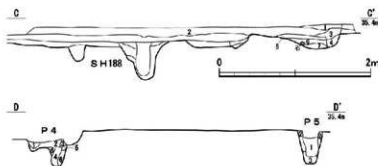


【A-A'・B-B'断面】

1. 10YK2/2黒炭燻染織紋砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YK2/2～2/3黒炭燻染織紋砂～シルト、10YK5/6黄褐色シルトを10%含む、しまり中、粘性中
3. 10YK2/2黒炭燻染織紋砂～シルトと10YK5/6黄褐色シルトが混じり合う、しまりやや中、粘性やや強（SH188参照）
4. 10YK2/2黒炭燻染織紋砂～シルト、しまり中、粘性中
5. 10YK2/2～2/3黒炭燻染織紋砂～シルト、しまり中、粘性中
6. 10YK2/2黒炭燻染織紋砂、しまり強、粘性弱
7. 10YK2/2～2/3黒炭燻染織紋砂～シルト、しまり中、粘性中
8. 10YK2/2黒炭シルト、しまりやや中弱、粘性やや強（堅固な土）
9. 10YK2/2黒炭燻染織紋砂～シルトと10YK5/6黄褐色燻染織紋砂～シルトが混じり合う、しまり強、粘性強（硬質）
10. 10YK2/1黒炭燻染織紋砂～シルト、しまり中、粘性中

第98図 SH189① (1/50)

## SH189



### 【D-D' 断面】

#### P4

1. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
2. 10YR3/2～3/4暗褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
3. 10YR3/2～3/4暗褐色細粒砂～シルト、10YR5/6黄褐色シルトを30%含む、しまりやや強、粘性中
4. 10YR3/2暗褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
5. 10YR5/6黄褐色シルト、しまり強、粘性強
6. 10YR3/4～4/6暗褐色細粒砂～シルト、10YR5/6黄褐色シルトを20%含む、しまり強、粘性やや強

#### P5

1. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR4/6～5/6暗褐色細粒砂～シルト、しまり弱、粘性中
3. 10YR3/2暗褐色細粒砂～シルト、10YR5/6黄褐色中粒砂～シルトを20%含む、しまりやや強、粘性中

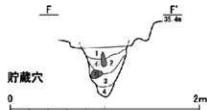


### 【E-E' 断面】

1. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
3. 10YR4/6～5/6暗褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強
4. 10YR3/2暗褐色細粒砂～シルト、10YR5/6黄褐色中粒砂～シルトを30%含む、しまり強、粘性やや強

### 【C-C' 断面】

1. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中、酸化層の厚さを10%含む
2. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
3. 10YR2/2～2/3暗褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
4. 10YR2/2暗褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強（壁際床土）
5. 10YR3/2暗褐色細粒砂～シルトと10YR5/6黄褐色細粒砂～シルトが混じり合う、しまり強、粘性強
6. 10YR2/2暗褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性強
7. 10YR3/2暗褐色細粒砂～シルトと10YR5/6黄褐色細粒砂～シルトが混じり合う、しまり強、粘性やや強



### 【F-F' 断面】

1. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
2. 10YR2/2暗褐色細粒砂～シルト、10YR5/6黄褐色シルトを5%含む、しまりやや強、粘性中
3. 10YR2/2暗褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
4. 10YR3/2暗褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強

## 第99図 SH189② (1/50、1/40)

どを鑑みれば、建物の建て替えが行われた可能性も考えられる。

遺物は、貯蔵穴から土師器が出土している。壺や甕があるが、いずれも小片である。埋土中や床面のビットからも土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH189 (第98・99図)** 第2次調査区中央部で検出された建物である。SH198・183・187・323など、多数の竪穴建物が重複する中に位置する。SH187に先行する可能性が高く、SH188・190より後出する。SH188と重複する部分が十分に検出できなかったために建物の北側の範囲が不明で、若干残る北東隅部分も攪乱の影響を受けて形状が乱れている。そのため、平面形については不明な部分もあるが、おそらく長軸6.8mほど、短軸6.4mの正方形に近い方を呈するものと思われる。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿って

ほぼ正方形に配置されている。P3・5では土層断面で柱痕なしの柱の抜き取り痕が確認できる。

北東隅付近で焼土や炭化物が少量検出されたが、攪乱の影響もあり、この建物に伴うものとは判断しがたい。この他に焼土の広がりも検出されず、炉の位置は不明である。建物中央部の床面に攪乱とされる土層の乱れがあるため、これによって炉の痕跡が確認できなかったとも考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅付近から検出された。平面形が円形の小型の土坑で、深さは0.6mほどとなり深い。埋土中には礫が数点含まれていた。なお、周囲の床面が浅く落ち込んでいるが、これは調査時に周囲の貼床を掘削したために生じた可能性もある。また、その西側にも平面形が楕円形の土坑状のものが検出されているが、深さが0.1mほどと浅く、貯蔵穴とは考えにくい。

壁際溝は全周すると思われるが、北側については不明である。貼床は部分的に確認された (A-A'・B-

B'断面第9層)。西側の壁沿いには浅い落ち込みがあり、周溝状掘形と思われる。土層断面からは南側や東側の壁沿いにも周溝状掘形が存在することが窺われ、貼床は、周溝状掘形内を中心に施されている。

遺物は、埋土中や床面上から土師器が出土している。装飾性の高い広口壺、いわゆるバレススタイル壺などが認められる。また、鎌倉時代になる山茶碗の小片もわずかに出土した。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH190 (第100図)** 第2次調査区と第3次調査区との境で検出した建物である。SH198・183・323など、多数の堅穴建物が重複する箇所でも最も東側に位置する。SH188・189に先行し、それらの建物によって西側の一部が削平を被っている。SH183・189よりは後出する。西側は建物の範囲が判然としないが、平面形は長軸7.6mほど、短軸7.3mの正方形に近い方形を呈するものと思われる。ただし、北側と西側の壁面は直線的ではなく、やや外方へ膨らんでいる。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。P2～4では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。

建物中央及び中央よりやや西側の床面から焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。南西隅付近のSH189床面で検出された土坑が、この建物に伴う貯蔵穴であると考えられる。平面形が円形の小型の土坑で、深さは0.3mほどある。

壁際溝は全周する可能性が高い。北東隅と南東隅ではやや壁よりも内側に掘り込まれている。

建物床面には周溝状掘形が認められ、貼床はその部分を中心に施されている。周溝状掘形は平面的には北側と東側で検出されているが、土層断面からみると南側の壁沿いにも認められる。また、P4付近の浅い落ち込みも建物西側の周溝状掘形である可能性が考えられ、壁沿いを全周していたものと推定される。

この他に、南側の壁面の中央付近から細い溝が建物中央に向かって延びる。長さ0.8mほどと短いが、間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

遺物は、主柱穴P3から土師器壺が出土している。埋土中からも土師器が出土している。この他、縄文時代の打製石斧や弥生時代中期の弥生土器壺の小片、古墳時代後期の須恵器が出土している。特に須恵器は複数出土しており、付近に古墳時代後期の遺構が存在したものと考えられる。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH195 (第215・216図)** 第2次調査区の北東部で検出した建物である。古墳時代後期の堅穴建物SH203と完全に重複している。土器の出土状況や貼床とみられる土層(A-A'・B-B'断面第6層)の存在などから建物と考えたが、ごく浅い落ち込みしか検出できず、全体の形状は不明確である。堅穴建物とすれば、平面形が長軸8.3m、短軸7.9mほどの方形を呈するかなり大型の建物と推定される。

ピットを多数検出したものの、主柱穴は明確ではなく、炉と思われる痕跡や貯蔵穴、壁際溝も確認できなかった。こうした点からみて、堅穴建物とするには疑問が残る。

明確にこの建物に伴う遺物は確認できなかったが、SH203の埋土中から古墳時代前期の土師器が出土している。いずれも小片である。

SH203の埋土中から出土した遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭～前葉の可能性が考えられる。

**SH198 (第101・102図)** 第2次調査区と第3次調査区との境で検出した建物である。SH198・183・187・323など、多数の堅穴建物が重複する中に位置する。SH169/324に先行し、それによって東側の一部が削平を被っている。SH199とも重複し、おそらく後出すると思われるが、明確ではない。平面形は長軸6.6m、短軸6.5mのほぼ正方形を呈する。

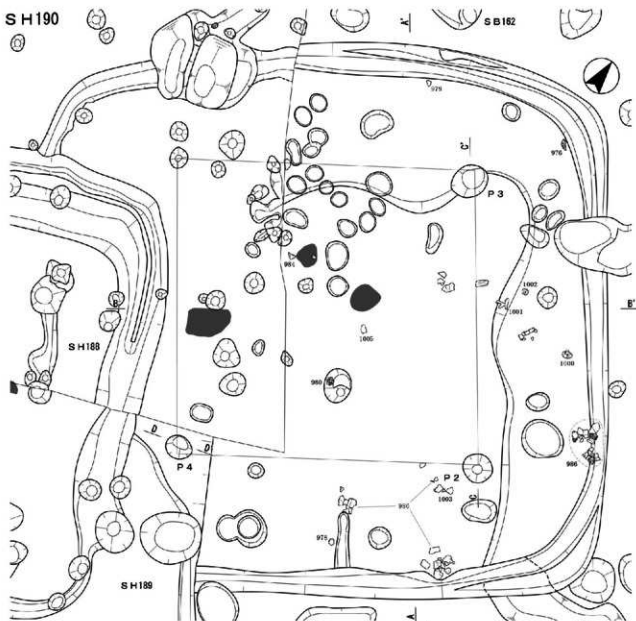
主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿って正方形に配置されている。

焼土は検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅付近から検出された。平面形が円形の小型の土坑で、深さは0.4mほどと深い。また、周囲の床面が浅く落ち込んでいる。土層断面からみると、一度埋没した後に上部が再掘削された可能性がある(D-D'断面第1～3層)。

SH190

SB182



【A-A'・B-B' 断面】

1. 101K2/2層黒鉛細粒砂～シント、しまり中、粘性中
2. 101K2/3層シントと101K5/6黄褐色シントが混じり合う、しまり強、粘性強

A

A'



3. 101K2/2層黒鉛細粒砂～シント、しまり中、粘性中
4. 101K2/3層黒鉛細粒砂～シント、101K5/6黄褐色シントを10%含む、しまりやや弱、粘性やや弱

5. 101K2/2～2/3層黒鉛細粒砂～シント、しまりやや強、粘性中
6. 101K2/1～2/2層～黒鉛細粒砂～シント、しまりやや強、粘性中

SH188



7. 101K2/3層黒鉛細粒砂～シント、しまりやや強、粘性中
8. 101K2/1層シント、しまりやや強、粘性やや強

9. 101K2/2層黒鉛細粒砂～シント、しまりやや強、粘性やや強
10. 101K2/3層砂中～黒粒砂と101K5/6黄褐色中～黒粒砂が混じり合う、しまり強、粘性弱

C



- 【C-C' 断面】
1. 101K2/3層黒鉛細粒砂～シント、101K5/6黄褐色シントを20%含む、しまり中、粘性中
  2. 101K2/3層黒鉛細粒砂～シント、しまり中、粘性中
  3. 101K2/3層黒鉛細粒砂～シント、101K5/6黄褐色中粒砂～シントを30%含む、しまりやや強、粘性中
  4. 101K2/4～4/4層黒～黒粒砂～シント、しまり強、粘性やや強

11. 101K2/2層黒鉛細粒砂～シント、101K5/6黄褐色中粒砂～シントを30%含む、しまり強、粘性中
12. 101K2/2層黒鉛細粒砂～シント、101K5/6黄褐色中粒砂～シントを50%含む、しまり強、粘性中
13. 101K2/6黄褐色細粒砂～シント、しまり強、粘性やや弱
14. 101K5/6黄褐色粗～細粒砂、しまり極強、粘性弱、締を多く含む

【D-D' 断面】

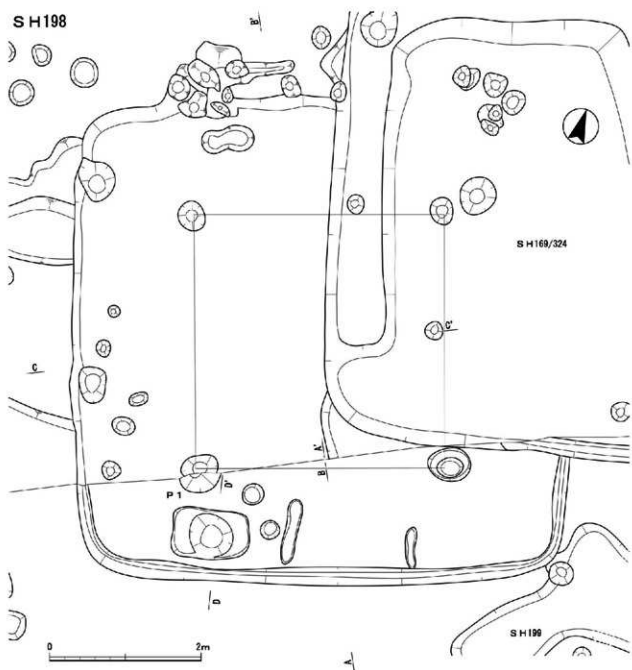
1. 101K2/3層黒鉛細粒砂～シント、しまり中、粘性中
2. 101K2/2～2/3層黒鉛細粒砂～シント、しまりやや強、粘性中
3. 101K2/3層黒粒中粒砂～シント、101K5/6黄褐色中粒砂～シントを30%含む、しまり強、粘性やや強

【D-D' 断面】

1. 101K2/3層黒鉛細粒砂～シント、しまり中、粘性中
2. 101K2/3層黒鉛細粒砂～シント、しまり中、粘性中
3. 101K2/2層黒鉛細粒砂～シント、101K5/6黄褐色中粒砂～シントを30%含む、しまり中、粘性中
4. 101K2/3層黒鉛細粒砂～シント、しまりやや強、粘性中
5. 101K2/4層黒鉛細粒砂～シント、101K5/6中粒砂～シントを30%含む、しまり強、粘性やや強

第100図 SH190 (1/50)

SH198



A



【A-A' 断面】

1. 19Y22/2~2/3黒粘層状砂〜シルト、しまり中、粘性中
2. 19Y22/1~2/2黒〜黒褐色細粒砂〜シルト、しまり中、粘性中
3. 19Y22/2~2/2黒粘層状砂〜シルト、しまり中や中、粘性中
4. 19Y22/2~2/2黒粘層状砂〜シルト、19Y25の黄褐色シルトを20%含む、しまり中や中、粘性中
5. 19Y23/3粘層シルトと19Y25/6黄褐色シルトが混じり合う、しまり中、粘性中
6. 19Y22/2黒粘層状砂〜シルト、しまり中、粘性中
7. 19Y22/3~2/3黒粘〜粘層状砂〜シルト、しまり中、粘性中

B



B'

C



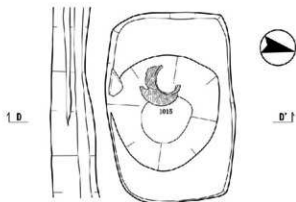
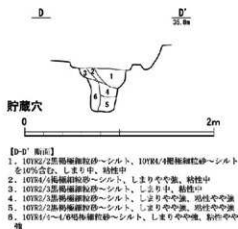
C'

SH169/324

【B-B'・C-C' 断面】

1. 19Y21/7/1黒粘層状砂〜シルト、しまり中、粘性中や中
2. 19Y22/1黒粘層状砂〜シルト、19Y24/6粘中粒砂〜シルトをブロック状に30%含む、しまり中や中、粘性中
3. 19Y23/2黒粘層状砂〜シルト、粘性中

第101図 SH198① (1/50)



第102図 SH198② (1/40, 1/20)

この再掘削とみられる部分の最下層にあたる位置で、土師器S字状口縁甕の上半部が口縁部を上にして出土した。肩部では単大の礫が検出されている。

壁際溝は、第2次調査で調査された範囲では壁面に沿って途切れることなく検出されたが、第3次調査で調査された範囲では平面的には検出されなかった。土層断面からも存在が確認できない。

貼床も、第2次調査で調査された範囲のみで確認された(A-A'断面第5層)。周溝状掘形は明確には検出されなかったが、第3次調査では建物中央よりやや南東側で浅い落ち込みが検出されており、部分的に周溝状掘形が存在していた可能性がある。

遺物は、主柱穴P1から土師器台付甕が出土している。また、貯蔵穴からも土師器が出土しており、S字状口縁甕の大きな破片が認められる。埋土中からも土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

SH199 (第103図) 第2次調査区の中央部の第3次調査区との境付近で検出した建物である。SH198・

183・187・323など、多数の堅穴建物が重複する中に位置する。SH299に先行し、それによって南隅の一部が削平を被っている。SH198にも先行するものと考えられるが、明確ではない。北隅付近が削平を被っており形状が不明確であるが、東隅の角は丸みを帯びており、平面形は長軸5.2m、短軸5.0mほどの隅丸方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。柱穴はかなり深く、P1・2は深さ0.6mほどあり、土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が明瞭に確認できる。

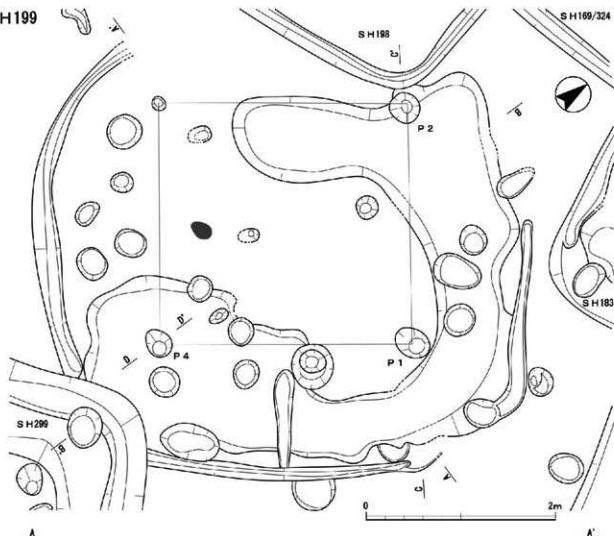
建物中央よりやや南西側の床面から焼土が検出されており、灰の痕跡と考えられる。貯蔵穴とみられる土坑は、南隅付近から検出された。平面形が楕円形の小型の土坑で、深さは0.3mほどある。

壁際溝はほぼ全周する。東隅や北隅付近では途切れるが、削平や攪乱などによるものと思われる。

貼床は、建物全体に施されている(A-A'・B-B'断面第8層)。また、周溝状掘形が建物の壁に沿って検出されており、この周溝状掘形を埋める形で貼床



SH199



【A'-B'断面】

1. 10YR2/2黒褐色細粒砂へシルト、しまり中、粘性中（包含層）
2. 10YR2/1黒褐色細粒砂へシルト、10YR2/3暗褐色シルトを20%含む、しまりやや強、粘性中
3. 10YR2/1〜2/1黒〜黒褐色細粒砂へシルト、10YR3/6黄褐色シルトを10%含む、しまりやや強、粘性中



4. 10YR3/1〜2/2黒褐色細粒砂へシルト、10YR5/6黄褐色細粒砂を20%含む、しまり中、粘性中
5. 10YR2/1黒褐色細粒砂へシルト、10YR5/6黄褐色シルトを10%含む、しまり中、粘性中
6. 10YR2/2黒褐色細粒砂へシルト、しまり中、粘性やや強（物影濃度上）
7. 10YR2/2黒褐色細粒砂へシルト、しまり中、粘性中
8. 10YR2/2黒褐色シルトと10YR3/3暗褐色シルトが混じり合う、しまり強、粘性やや強（灰灰）
9. 10YR2/2黒褐色細粒砂へシルト、しまりやや強、粘性やや強（灰灰）
10. 10YR2/1〜2/1黒〜黒褐色シルト、しまりやや強、粘性やや強（灰灰）
11. 10YR2/3暗褐色細粒砂へシルト、しまり中、粘性中
12. 10YR3/1〜2/2黒褐色細粒砂へシルト、しまり中、粘性中
13. 10YR2/1黒褐色細粒砂へシルト、10YR3/2黒褐色シルトを20%含む、しまり中、粘性中

14. 10YR2/2黒褐色細粒砂へシルト、10YR3/2黒褐色シルトを20%含む、しまり中、粘性中
15. 10YR3/2黒褐色細粒砂へシルト、10YR5/6黄褐色シルトを20%含む、しまりやや強、粘性やや強
16. 10YR3/2〜3/3黒〜暗褐色細粒砂へシルト、しまり中、粘性中（包含層）



【C'-C'断面】

1. 10YR2/3黒褐色シルトと10YR3/3暗褐色シルトが混じり合う、しまり強、粘性やや強（灰灰）

P1

1. 10YR2/3黒褐色細粒砂へシルト、10YR5/6黄褐色シルトを10%含む、しまり中、粘性やや強
2. 10YR3/3暗褐色シルト、しまり強、粘性やや強
3. 10YR5/6黄褐色シルト、10YR2/3暗褐色細粒砂へシルトを20%含む、しまり強、粘性やや強

4. 10YR2/2黒褐色シルト、10YR5/6黄褐色シルトを20%含む、しまりやや強、粘性中

P2

1. 10YR2/2黒褐色細粒砂へシルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/2黒褐色細粒砂へシルト、しまり中、粘性やや強
3. 10YR3/3暗褐色シルト、10YR2/2黒褐色細粒砂へシルトを30%含む、しまりやや強、粘性やや強
4. 10YR3/3〜4/4暗褐色シルト、しまり強、粘性強

【D'-D'断面】

1. 10YR2/1黒褐色細粒砂へシルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/1〜2/2黒〜黒褐色細粒砂へシルト、しまり中、粘性中
3. 10YR2/2黒褐色細粒砂へシルト、10YR5/6黄褐色シルトを10%含む、しまりやや強、粘性中
4. 10YR2/3黒褐色シルトと10YR5/6黄褐色シルトが混じり合う、しまりやや強、粘性やや強
5. 10YR2/3黒褐色細粒砂へシルト、しまり中、粘性中
6. 1層だけ空層なし（灰灰）

第103図 SH199 (1/40)

が厚く施されている。

この他に、南東側の壁面の中央付近から細い溝が建物中央に向かって延びる。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

遺物は、埋土中から土師器が出土している。広口壺の大きな破片や、手焙形土器の小片などがみられる。また、縄文土器の小片も出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH201 (第104図)** 第2次調査区の北東端で検出した建物である。東半分が攪乱によって削平を被っているため、全体の規模や形状は不明であるが、平面形は長軸8.8m、短軸7.0m以上の方形を呈するとされる。かなり大型の建物である。

主柱穴は残存している部分で2基検出された。建物の壁と平行するように配置されており、本来は4基の主柱穴が方形に配置されていたものと考えられる。柱穴はかなり深く、P1・2は深さ0.6mほどある。土層断面では柱痕と思われる土層も確認された(A-A'・B-B'断面第10層)。P2からはクリの炭化材が検出されており(第VIII章第3節)、クリが柱材に用いられていた可能性もある。

炉は建物中央で検出された。不整形な浅い土坑が検出され、焼土の広がり認められた。土層断面からみると、2基の土坑が重複しているものとみられ、炉の造り替えが行われた可能性もある。建物中央から南西側にかけても焼土が数箇所から検出されているが、性格は不明である。

貯蔵穴は、残存する部分では検出されなかった。壁際溝は、残存する部分では全周している。

貼床は、建物全体に施されている。また、周溝状掘形が建物の壁に沿って検出されており、この周溝状掘形を埋める形で貼床が厚く施されている。

また、壁面に壁際溝と重複する形で小型のピットが複数検出された。土層断面から、壁際溝より前に掘り込まれたものと考えられる。西壁では2.4m間隔、南壁では3.0m間隔で確認されており、北壁でも1箇所認められる。建物の壁の構造と関係する壁柱穴と考えられる。土層断面で柱痕とみられる土層が確認できることから(D-D'・E-E'断面第3層)、細い柱または杭状のものが立てられていた可能性が

ある。

遺物は、主柱穴P1から土師器高坏の脚部片が出土している。埋土中からも土師器や台石が出土した。また、貼床中からは縄文土器深鉢が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭～前葉と考えられる。

**SH202 (第105図)** 第2次調査区の北東部で検出した建物である。東隅が削平により不明瞭であるが、平面形は長軸4.6m、短軸3.9mの長方形を呈する。やや小型の建物である。

明確な主柱穴は検出できなかった。建物中央よりやや東側の、浅い土坑状の遺構の付近で焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴は検出されていない。壁際溝は削平を受けている東隅付近では確認できなかったが、断続的に全周していたものと思われる。建物の西側では壁際溝の外側に沿って浅い落ち込みが検出されているが、建物構造との関係は不明である。

貼床は、建物全体に施されている。また、周溝状掘形が建物の壁に沿って検出されており、この周溝状掘形を埋める形で貼床が厚く施されている。

遺物は、埋土中や床面のピットから土師器が出土しているが、いずれも小片である。また、主に貼床中から縄文土器の破片が多数が出土している。先行して縄文時代の遺構が存在していた可能性が高い。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

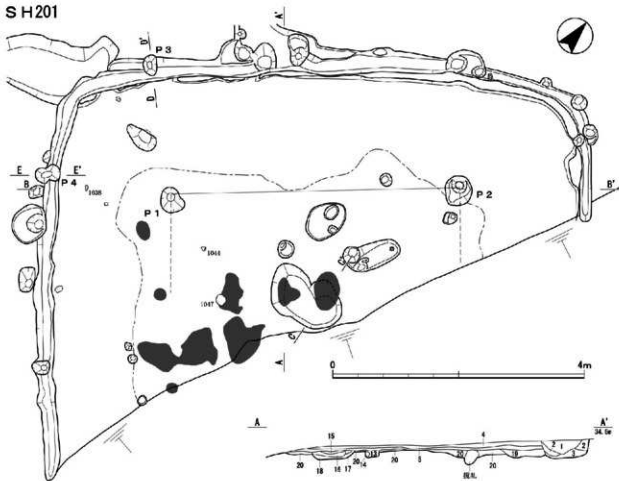
**SH204 (第106図)** 第2次調査区の北東部で検出した建物である。平面形は長軸4.6m、短軸3.9mの長方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿って長方形に配置されている。P3では平面で柱痕状の痕跡を確認したが、その上面から完形に近い土師器小型丸底壺が出土しているため、柱は抜き取られたか切断されたものと考えられる。

建物中央付近の床面の複数箇所から焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。貯蔵穴とみられる土坑は、東隅から検出された。平面形が円形の小型の土坑で、東側が一段深く掘り込まれている。

壁際溝は全周する。建物床面には周溝状掘形が認められ、貼床はその部分を中心に施されている。周

S H201



【C-C' 断面】

1. 7.5YR4/6-7/9層～炭層層砂～シルト、しまり強、粘性弱
2. 7.5YR4/6-6/4層～粉砂層砂～シルト、しまり強、粘性弱
3. 10YR2/3-3/3黒層～砂粒、しまりやや強、粘性中



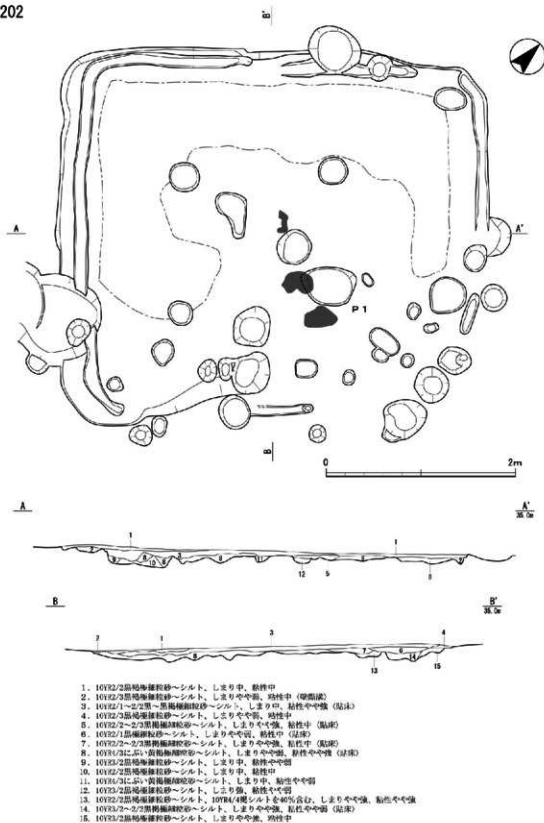
【D-D'・E-E' 断面】

1. 10YR2/3黒層層砂～シルト、しまり中、粘性中（埋蔵遺物土）
2. 10YR2/2-2/3黒層層砂～シルト、しまり中、粘性やや強（埋蔵遺物土）
3. 10YR2/2-2/3黒層層砂～シルト、しまり中、粘性中（柱穴埋蔵遺物土）
4. 10YR4/4黒層層砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強（柱穴埋蔵遺物土）
5. 10YR2/3-3/3黒層～層砂粒～シルト、しまり中、粘性中（柱穴埋蔵遺物土）

【A-A'・B-B' 断面】

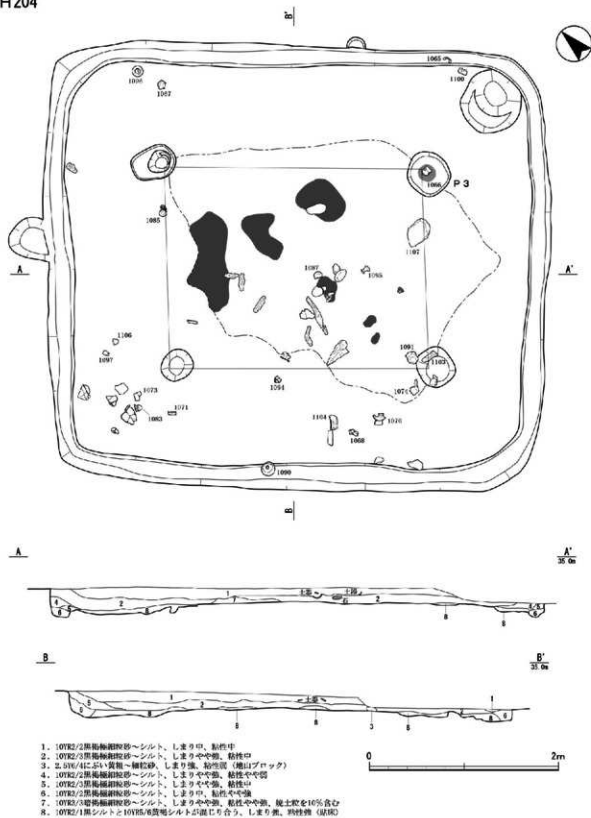
1. 10YR2/1-2/2黒～黒層層砂～シルト、しまり中、粘性中（ビッド層土）
2. 10YR2/2-2/3黒層層砂～シルト、10YR4/4黒層層砂を10%含む、しまりやや強、粘性やや強（ビッド層土）
3. 10YR2/3砂層層砂～シルト、10YR4/4黒層層砂を30%含む、しまりやや強、粘性やや弱（ビッド層土）
4. 10YR2/1-2/2黒～黒層層砂～シルト、しまりやや強、粘性中
5. 10YR2/2-2/3黒層層砂～シルト、しまり中、粘性中
6. 10YR2/3黒層層砂～シルト、しまり中、粘性やや強、酸化褐色粒子を30%含む（有機質の堆積物）
7. 10YR2/2黒層層砂～シルト、しまり中、粘性中（埋蔵遺物土）
8. 10YR2/2-2/3黒層層砂～シルト、しまり中、粘性やや強（埋蔵遺物土）
9. 10YR2/2黒層層砂～シルト、10YR4/4黒層層砂を30%含む、しまり弱、粘性中、炭化物を含む（柱抜き取り土）
10. 10YR3/3砂層層砂～シルト、10YR4/3赤～黄層層砂～シルトを50%含む、しまり弱、粘性やや強、炭化物を含む（柱抜き土）
11. 10YR4/2灰黄層中粒砂～シルト、しまり弱、粘性やや強（柱穴埋蔵遺物土）
12. 10YR3/3砂層中粒砂～シルト、しまり強、粘性中（柱穴埋蔵遺物土）
13. 10YR2/2黒層層砂～シルト、しまり強、粘性中（ビッド層土）
14. 2.5Y/3黄層層～層砂粒、しまり強、粘性強弱（埋蔵遺物土）
15. 7.5YR5/6明色シルト、しまり強、粘性弱（埋蔵遺物土）
16. 10YR2/3砂層層砂～シルト、しまり中、粘性中 焼土を粒状に10%含む（伊集土）
17. 10YR3/4砂層層砂～シルト、しまり強、粘性やや強（ブロック土）
18. 10YR2/2黒層層砂～シルト、しまりやや強、粘性中（伊集土）
19. 10YR2/2黒層層砂～シルト、10YR4/4黒層層砂～シルトをブロック状に30%含む、しまりやや強、粘性やや強（埋蔵遺物土）
20. 10YR2/3砂層層砂～シルトと10YR2/2黒層層砂～シルトと10YR4/4黒層層砂～シルトをブロック状に含む、しまり強、粘性やや強（埋蔵遺物土）
21. 10YR2/2-2/3黒層層～層砂粒、しまり中、粘性中、焼土と小片を含む（埋蔵遺物土）
22. 10YR4/2灰黄層層～層砂粒、しまりやや強、粘性弱（埋蔵遺物土）

第104圖 SH201 (1/60)



第105図 SH202 (1/40)

S H204



第106図 SH204 (1/40)

溝状掘形は壁に沿ってロ字形に全周する。

建物内からは、多数の土師器や台石、砥石などが検出されている。建物内全体から散在的に出土したが、特に西隅付近で多数の遺物が集中して出土した。また、建物中央付近では多数の炭化材が検出された。クリやコナラ節の材が中心で（第Ⅷ章第3節）、建物の構築材として用いられていたものと思われ、焼失建物である可能性が高い。

遺物は、埋土中から土師器や砥石、台石が出土している。土師器には小型丸底壺や精製の広口壺が目立つ。砥石が複数出土している点も特徴的である。また、剣形石製品と思われるものが1点出土した。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期後葉と考えられる。

**SH206 (第107図)** 第2次調査区の東端で検出した建物である。東側の一部は調査区外の道路下へと続くが、道路建設時に削平を受けている可能性が高い。SK151の北側を一部壊して構築されている。平面形は長軸5.7m、短軸5.6mの正方形に近い方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。柱穴はかなり深く、P3・4は深さ0.5mほどあり、土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が明瞭に確認できる。

建物中央よりやや南西側の床面から焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南隅付近から検出された。平面形がやや不整形な円形の小型の土坑で、深さは0.4mほどある。まっすぐに掘り込まれ、壁面はほぼ垂直となる。また、土層断面では周囲が浅く落ち込む様子が確認できる。

壁際溝はほぼ全周するが、西隅付近で若干途切れる。壁に沿ってやや幅が狭い周溝状掘形が検出されており、この周溝状掘形を埋める形で貼床が施されていた。ただし、周溝状掘形は西隅付近では検出されなかった。

遺物は、主柱穴P5から土師器壺の口縁部片が出土している。埋土中からも土師器が出土しているが、出土量は少ない。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭～前葉の可能性が高い。

**SH207 (第108・109図)** 第2次調査区の東端で検出した建物である。東隅の一部をSK151によって削平されている。SH214より後出する。遺存状況が悪いが、平面形は長軸5.7m、短軸5.6mの正方形に近い方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。柱穴はP5・7は深さ0.5mほどと深いが、P8は0.4mほどで若干浅い。いずれの柱穴においても土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が明瞭に確認できる。また、P8の周囲には柱穴に伴う貼床と考えられる土層が認められる(D-D'断面P8第6層)。

焼土は検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴とみられる土坑は、南隅付近から3基検出された。いずれも平面形が円形ないし不整形な円形の小型の土坑である。最も東側の土坑は深さが0.6mとかなり深いのが、残りの2基は深さ0.3mほどとやや浅い。貯蔵穴の造り替えが行われた可能性もあるが、この3基には重複関係がないため、新旧があるのか不明である。

壁際溝は北隅付近でわずかに検出されたのみである。貼床は調査時には確認されていないが、土層断面からみると壁に沿って浅い周溝状掘形が存在し、その部分を中心に貼床が施されているものと考えられる(A-A'・B-B'断面第7・8層)。

建物西隅では、土師器壺(1155)が1個体出土している。

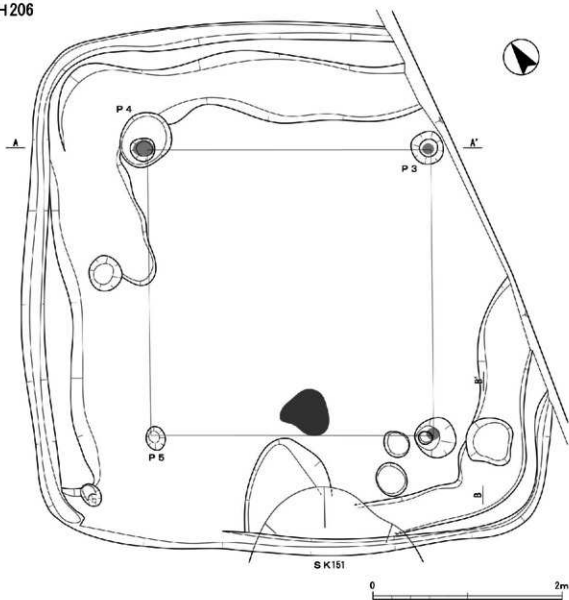
遺物は、中央の貯蔵穴から縄文土器深鉢の小片が出土している。埋土中からも土師器が出土している。遺物の出土量は少ないものの、柳ヶ坪型壺の口縁部や、壺の体部の大きな破片がみられる。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期前葉～中葉と考えられる。

**SH208 (第110図)** 第2次調査区の東部で検出した建物である。SH209・211・213・214など、多数の竪穴建物が重複する中に位置する。SH209・238・213・214に先行し、それらの建物によって大部分が削平を被っている。そのため全体の形状が不明確であるが、平面形は長軸5.7mほどの方形を呈するものと思われる。

明確な主柱穴は検出できなかった。建物東隅付近

S H206



【A-A' 断面】

P3

1. 10YR2/2黒褐色細砂礫シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR6/4黄褐色シルト、しまり強、粘性強
3. 10YR4/4黄シルト、しまり強、粘性強

P4

1. 10YR2/2黒褐色細砂礫シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/3〜3/3黒褐色〜暗褐色細砂、しまり弱、粘性中
3. 10YR6/4黄褐色シルト、しまり強、粘性強
4. 10YR4/3に赤い黄褐色細砂〜シルト、しまり強、粘性強

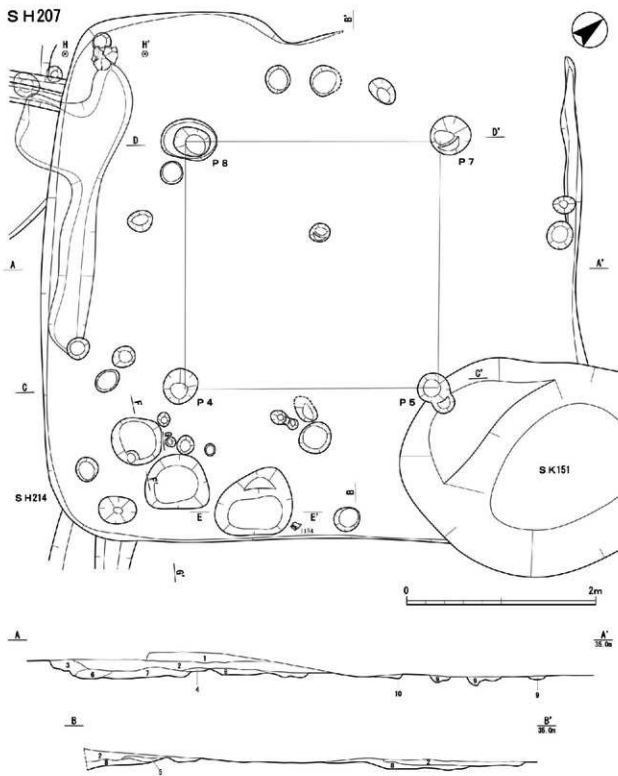
【B-B' 断面】

1. 10YR2/2黒褐色細砂礫シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/3黒褐色細砂礫シルト、10YR4/4黄シルトブロックを含む、しまり中、粘性中
3. 10YR2/3〜3/2黒褐色〜暗褐色細砂礫シルト、しまりやや強、粘性やや強
4. 10YR2/3暗褐色細砂礫シルト、しまりやや強、粘性やや強



貯蔵穴

第107図 SH206 (1/40)



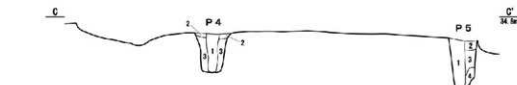
【A-A' B-B' 断面】

1. 10YR2/2～2/3黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/2～2/3黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
3. 10YR2/3黄褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
4. 10YR1/5赤褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性強（最上）
5. 10YR2/3～2/5黄褐色～紅褐色細粒砂～シルトと10YR5/6黄褐色シルトが混じり合う、しまり強、粘性強
6. 10YR2/2黄褐色シルト、10YR5/6黄褐色シルトを10%含む、しまりやや強、粘性強
7. 10YR3/2暗褐色シルト、10YR5/6黄褐色シルトを20%含む、しまり強、粘性強
8. 10YR5/6黄褐色シルト、10YR2/3暗褐色細粒砂～シルトを20%含む、しまり強、粘性やや強
9. 10YR2/1～2/3黄～黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
10. 土層状況不明なし。

第108図 SH207① (1/40)



S H 207



【C-C' 断面】

P 4

1. 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
2. 10YR3/3暗褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性弱
3. 10YR3/3暗褐色細粒砂～シルト、10YR5/6黄褐色シルトを30%含む、しまり強、粘性強

P 5

1. 10YR2/3～3/3黒褐色～暗褐色細粒砂～シルト、10YR5/6黄褐色シルトを30%含む、しまりやや弱、粘性やや強
2. 10YR3/3暗褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強
3. 10YR5/6黄褐色シルト、しまり強、粘性やや強
4. 10YR3/3暗褐色細粒砂～シルトと10YR5/6黄褐色シルトが混じり合う、しまり強、粘性やや強



【D-D' 断面】

P 7

1. 10YR2/2～2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
2. 10YR4/2に多い黄褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性強
3. 10YR3/3暗褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや弱
4. 10YR3/4暗褐色～細粒砂～シルト、しまり強、粘性やや弱
5. 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルト、10YR5/6黄褐色中粒砂～シルトを30%含む、しまり強、粘性やや強

P 8

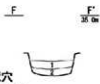
1. 10YR2/2～2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
2. 10YR2/3黒褐色シルト、10YR5/6黄褐色シルトを10%含む、しまりやや強、粘性強
3. 10YR3/3～3/4暗褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
4. 10YR5/6黄褐色シルト、10YR2/2黒褐色シルトを20%含む、しまり強、粘性強
5. 10YR5/6黄褐色シルト、10YR2/2黒褐色シルトを30%含む、しまり強、粘性強
6. (見取)



貯蔵穴

【E-E' 断面】

1. 10YR2/1黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
3. 10YR5/6黄褐色シルト、10YR2/2黒褐色細粒砂～シルトを30%含む、しまりやや強、粘性やや強
4. 10YR5/6黄褐色シルト、10YR2/2黒褐色細粒砂～シルトを40%含む、しまりやや強、粘性やや強



貯蔵穴

【F-F' 断面】

1. 10YR2/1～2/2黒～黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/1～2/2黒～黒褐色細粒砂～シルト、10YR5/6黄褐色シルトを30%含む、しまり中、粘性中



貯蔵穴

【G-G' 断面】

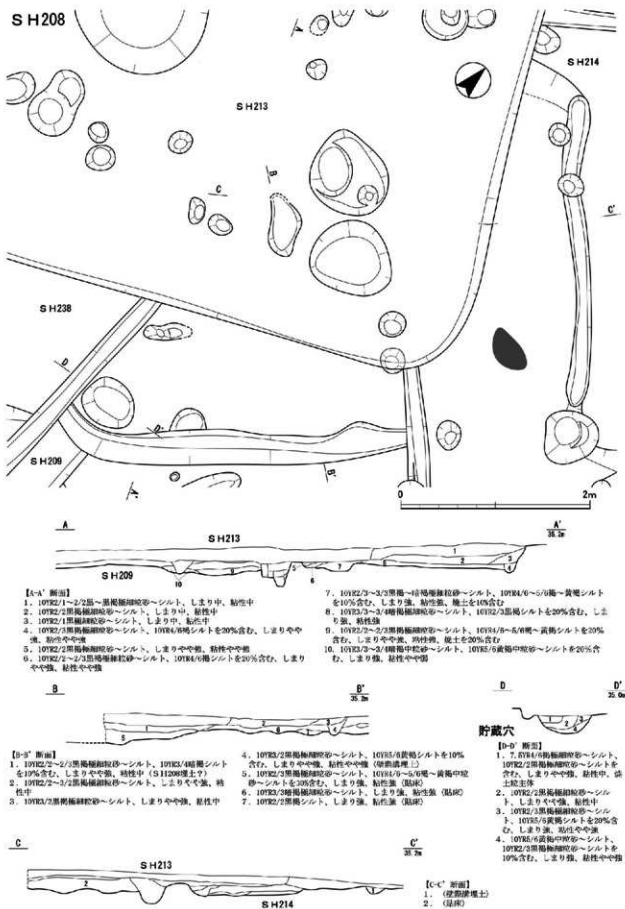
1. 10YR2/1～2/2黒～黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
3. 10YR2/3暗褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強



遺物出土状況



第109図 S H 207② (1/40、1/20)



第110図 SH208 (1/40)

で焼土が検出されているが、SH214に伴うものである可能性が高い。他には焼土は検出されておらず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は南隅から検出された。平面形が楕円形の小型の土坑で、浅い楕形に掘り込まれている。

壁際溝は、東隅付近で途切れている。また、北隅付近についても途切れている可能性がある。

貼床は、建物全体に施されているようである。土層断面からみると、建物中央付近がやや深く掘り込まれており、それを埋める形で貼床が厚く施されている。

遺物は、埋土中や床面上から土師器や台石が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH209 (第111・112図)** 第2次調査区の東部で検出した建物である。SH208・211・213・214など、多数の竪穴建物が重複する中に位置する。古墳時代後期の建物SH213によって北東部が削平を被っている。SH208・238より後出する。SH238とは全体が重複しているが、SH209の方が一回り規模が大きく、入れ子状になっている。北東隅付近が削平を被っており形状が不明確であるが、平面形は長軸5.9m、短軸5.8mの正方形に近い方形を呈する。ただし、東側と南側の壁面は直線的ではなく、やや外方へ膨らむ。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。南西隅の主柱穴はSH238の貯蔵穴と重複する。柱穴の土層断面では、柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。

SH209の床面からは焼土は検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅から検出された。平面形が円形の小型の土坑で、周囲から土師器・高坏・器台の破片や砥石と思われる石製品が集中的に検出された。

壁際溝は南東隅付近で途切れ、東側では検出できなかった。貼床は、建物全体に施されている。先行するSH238の窪みを埋めるように厚く土が入れられており(A-A'断面第6層、B-B'・C-C'断面第8・

9層)、それが貼床としても機能している。SH238との間には、床面に高低差があり主軸方向も揃わないなど拡張や建て替えとは考えにくい点もあるが、SH238が床面直上からほぼSH209の貼床を兼ねた埋土で埋積されていることを鑑みれば、両者に大きな時期差を想定することは難しい。

遺物は、主柱穴P2から土師器が出土している。貯蔵穴からは、遺存状況が良好な土師器の小型高坏が出土した。埋土中からも土師器や砥石と思われるものが出土している。貯蔵穴付近からまとまって出土したものの他、全形が復元できる高坏形装飾器台などが認められる。また、須恵器坏身も出土しているが、SH213からの混入と思われる。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH210 (第113図)** 第2次調査区の東部で検出した建物である。SH209・211・213・214など、多数の竪穴建物が重複する箇所で最も南側に位置する。SH208・214に先行し、それらの建物によって北隅付近が削平を被っている。平面形は長軸4.8m、短軸4.7mの正方形に近い方形を呈する。ただし、南西側の壁面は直線的ではなく、やや外方へ膨らむ。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。柱穴はかなり深く、P1・3は深さ0.6mほどあり、土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が明瞭に確認できる。

焼土は検出されず、炉の位置は不明である。ただ、建物中央より南西側で浅い小型の土坑が検出されており、これが炉の可能性もある。

貯蔵穴とみられる土坑は南隅から検出された。平面形が楕円形の小型の土坑で、壁際溝と重複して掘り込まれている。

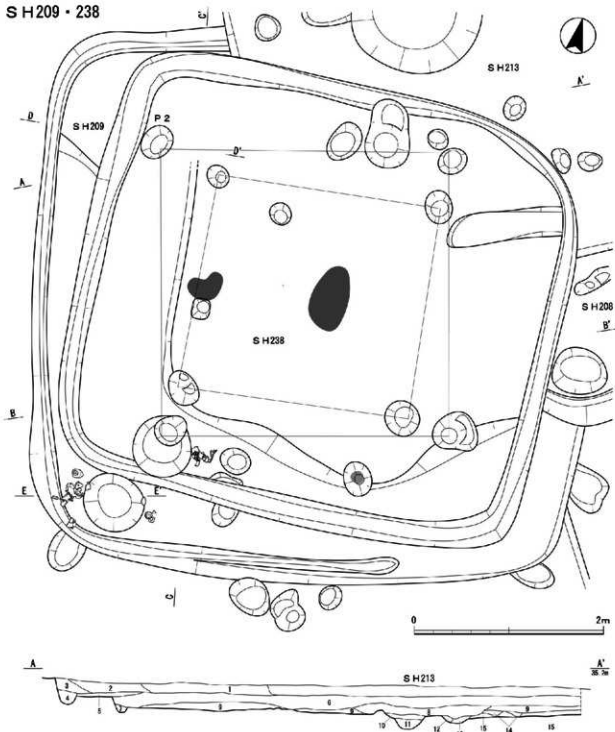
壁周溝は全周すると思われるが、SH208と重複する付近では途切れている可能性もある。

貼床は明瞭には検出できなかったが、部分的に施されている可能性がある。

遺物は、主柱穴P5から土師器高坏の脚部片が出土している。埋土中からも土師器が出土しているが、古墳時代後期の土師器が少量混じる。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

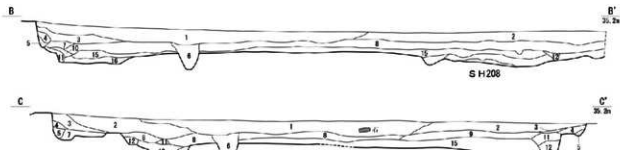
S H 209・238



【A-A' 断面】

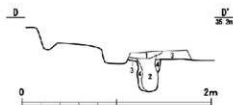
1. 10YR2/3～3/3赤黒～暗褐細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや弱、酸化褐色、粘土を20%含む
2. 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
3. 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
4. 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルト、10YR2/3暗褐シルトを20%含む、しまり中、粘性中
5. 10YR2/3～4/4暗褐シルト、10YR5/6黄褐シルトを20%含む、しまり強、粘性強（S H 209埋戻）
6. 10YR2/1黒シルトと10YR5/6黄褐シルトが混じり合う、しまり強、粘性強、酸化褐色粘土を20%含む（S H 209埋戻）
7. 土層序定跡なし
8. 10YR2/3～3/3黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
9. 10YR4/4褐シルト、10YR2/2黒褐シルトを20%含む、しまり強、粘性強、酸化褐色粘土を20%含む（S H 238埋戻）
10. 10YR2/3～3/3黒褐色～暗褐シルト、しまり強、粘性強
11. 10YR2/2暗褐シルト、しまりやや強、粘性やや強
12. 10YR1/6～5/6暗～黄褐シルト、しまり強、粘性強
13. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、10YR2/3暗褐シルトを10%含む、しまりやや強、粘性やや強（S H 238埋戻層下）
14. 10YR2/3暗褐シルト、10YR5/6黄褐シルトを30%含む、しまり強、粘性強
15. 10YR5/6黄褐シルト、10YR2/2黒褐シルトを10%含む、しまり強、粘性強（S H 238埋戻）

第111図 S H 209・238① (1/40)



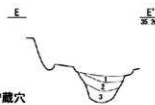
## 【B-B'・C-C' 断面】

1. 10YR2/3～2/3黒褐～暗褐腐砕砂～シルト、しまり中、粘性やや弱、酸化褐色粘土を20%含む
2. 10YR2/3黒褐腐砕砂～シルト、しまりやや強、粘性中
3. 10YR2/2黒褐腐砕砂～シルト、しまり中、粘性中
4. 10YR2/3黒褐腐砕砂～シルト、10YR3/2暗褐シルトを20%含む、しまり中、粘性中
5. 10YR3/2暗褐腐砕砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強 (SH209層厚不明)
6. 10YR2/3黒褐腐砕砂～シルト、10YR5/6黄褐シルトを10%含む、しまり強、粘性強、酸化褐色粘土を20%含む (SH209層厚不明)
7. 10YR2/3～2/4暗褐シルト、10YR5/6黄褐シルトを20%含む、しまり強、粘性強 (SH209層厚不明)
8. 10YR2/1黒シルトと10YR5/6黄褐シルトが混じり合う、しまり極強、粘性極強、酸化褐色粘土を20%含む (SH209層厚不明)
9. 10YR3/2～2/3暗褐腐砕砂～シルト、10YR5/6黄褐シルトを20%含む、しまり強、粘性強 (SH209層厚不明)
10. 10YR5/6黄褐シルト、しまり強、粘性やや強 (SH209層厚不明)
11. 10YR2/2～2/3黒褐腐砕砂～シルト、しまり中、粘性中
12. 10YR2/3黒褐腐砕砂～シルト、10YR3/2暗褐シルトを10%含む、しまりやや強、粘性やや強 (SH209層厚不明)
13. 10YR2/2～2/3黒褐腐砕砂～シルト、10YR4/6褐シルトを20%含む、しまりやや強、粘性やや強
14. 10YR4/6褐シルト、しまり強、粘性強
15. 10YR4/6褐シルト、10YR2/2黒褐シルトを20%含む、しまり極強、粘性極強、酸化褐色粘土を20%含む (SH209層厚不明)
16. 10YR3/4～2/3暗褐腐砕砂～シルト、10YR2/2黒褐シルトを20%含む、しまり強、粘性強 (SH209層厚不明)



## 【D-D' 断面】

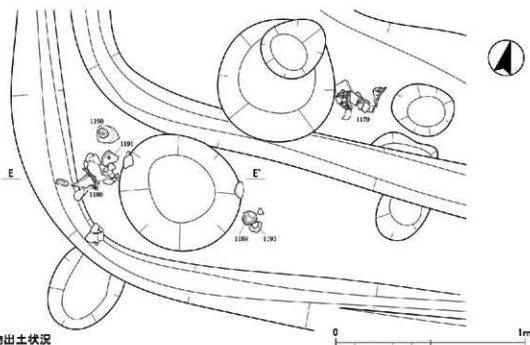
1. 10YR2/2～2/3黒褐腐砕砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/3黒褐腐砕砂～シルト、しまり中、粘性中
3. 10YR2/3黒褐腐砕砂～シルト、10YR4/6褐シルトを40%含む、しまり強、粘性強
4. 10YR2/2黒褐腐砕砂～シルト、10YR5/6黄褐シルトを20%含む、しまり強、粘性強



## 貯蔵穴

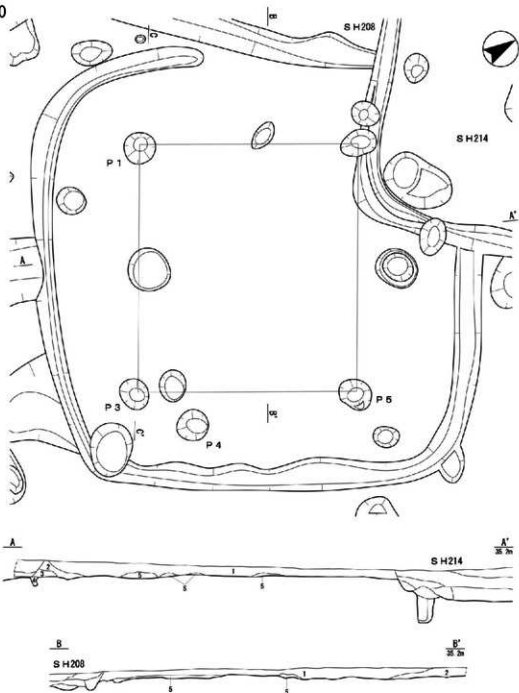
## 【E-E' 断面】

1. 10YR2/2黒褐腐砕砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/3黒褐腐砕砂～シルト、しまりやや強、粘性やや弱
3. 10YR2/3～2/3黒褐～暗褐腐砕砂～シルト、しまりやや強、粘性やや弱



## 遺物出土状況

SH210



【A'-A'断面】

1. 10YR2/1-2/2土～黒褐色細砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/3黒褐色細砂～シルト、しまり中、粘性中
3. 10YR2/2-2/3黒褐色細砂～シルト、しまりやや強、粘性中
4. 10YR2/3-3/3黒褐色細砂～シルト、しまりやや弱、粘性やや強（砂質粘土土）
5. 10YR3/4-4/4白～黒褐色細砂～シルト、しまりやや強、粘性強（粘土土）

【C'-C'断面】

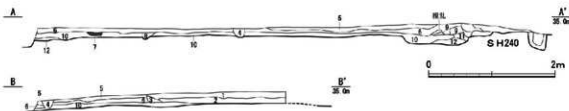
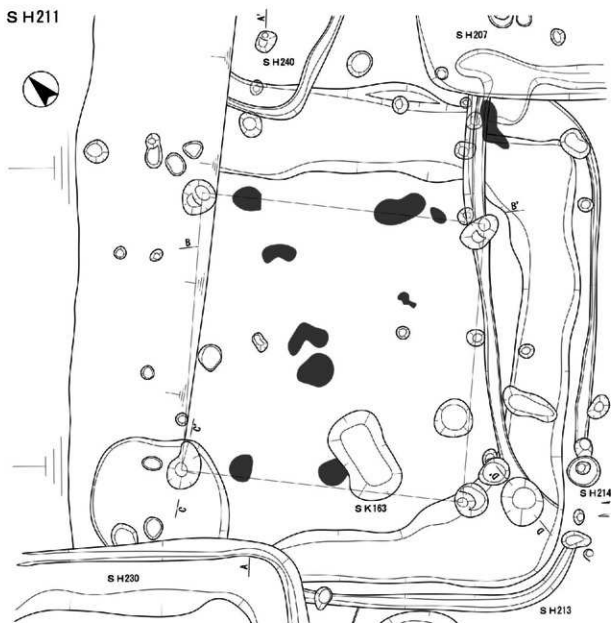
- P1
1. 10YR2/3黒褐色細砂～シルト、しまり中、粘性中
  2. 10YR2/3黒褐色細砂～シルト、10YR5/6黄褐色シルトを20%含む、しまり中、粘性中
  3. 10YR5/6黄褐色中粒砂～シルト、10YR2/3黒褐色細砂～シルトを30%含む、しまり強、粘性やや強
  4. 10YR5/6黄褐色中粒砂～シルト、10YR2/3黒褐色細砂～シルトを20%含む、しまり強、粘性やや強

P3

1. 10YR2/3黒褐色細砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
2. 10YR5/6黄褐色中粒砂～シルト、10YR2/3黒褐色細砂～シルトを20%含む、しまり強、粘性やや強
3. 10YR5/6黄褐色中粒砂～シルト、10YR2/3黒褐色細砂～シルトを10%含む、しまり強、粘性弱

第113図 SH210 (1/40)

SH211



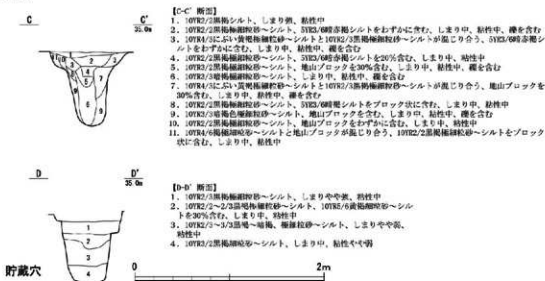
【A-A'・B-B'断面】

1. 101R2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまりや中、粘性や中強
2. 101R2/1～2/2層～黒褐色細粒砂～シルト、101R5/6黄褐色シルトを10%含む、しまりや中強、粘性や中強
3. 101R2/2～2/2層黒褐色細粒砂～シルト、101R5/6黄褐色シルトを30%含む、しまりや中強、粘性や中強
4. 101R2/1～3/1層～黒褐色細粒砂～シルト、101R5/6黄褐色シルトを20%含む、しまり中、粘付中、酸化褐色粒子を20%含む
5. 101R2/1～4/4層～黒褐色細粒砂～シルト、101R5/6黄褐色シルトを30%含む、しまり強、粘性強
6. 101R2/3～3/3層～暗褐色細粒砂～シルト、しまりや中強、粘性や中強

7. 51R4/6層シルト、しまり極性、粘性極強（粘上）
8. 101R2/3～3/3層～暗褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中、酸化褐色粒子を20%含む
9. 101R2/2黒褐色細粒砂～シルト、101R5/6黄褐色シルトを20%含む、しまりや中強、粘性や中強
10. 101R4/4～5/5層～黄褐色シルト、101R2/2黒褐色シルトを10%含む、しまり極強、粘付極強（粘上）
11. 101R2/1～2/2層～黒褐色シルト、101R5/6黄褐色シルトを10%含む、しまり強、粘性強
12. 101R5/6黄褐色シルト、101R2/2黒褐色シルトを20%含む、しまり極強、粘性極強

第114図 SH211① (1/60)

## S H211



第115図 S H211② (1/40)

S H211 (第114・115図) 第2次調査区の東部で検出した建物である。S H209・210・213・214・230など、多数の竪穴建物が重複する中に位置する。北西部の壁面付近が近世以降の大溝状の擾乱によって失われているほか、古墳時代後期の建物S H213によって南隅付近が削平を被っている。また、S H207・214・230・240に先行し、それらの建物によって一部削平を被っている。そのため全体の形状が不明確であるが、平面形は長軸8.3mほどの正方形に近い方形を呈するものと思われる。かなり大型の建物で、重複するS H214と同程度の規模である。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。柱穴はかなり深く、西隅の柱穴は深さ0.8mほどあり、土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。

建物中央付近では、焼土が複数箇所で見出された。炉の存在を示すと考えられるが、比較的に広い範囲にわたっており、いずれが炉の痕跡かは判別できない。

貯蔵穴とみられる土坑は、南隅付近から検出された。平面形が円形の小型の土坑で、まっすぐに掘り込まれ、壁面はほぼ垂直となる。また、上層部では壁面の一部に段が付けられている。

壁際溝は南半部では検出されたが、擾乱によって削平を被るなどした北半部では検出されなかった。

貼床は、建物全体に施されている。また、周溝状

掘形が建物の壁に沿って検出されており、この周溝状掘形を埋める形で貼床が厚く施されている。

遺物は、埋土中から土師器が出土しているが、出土量は少なく、いずれも小片である。また、縄文土器も少量出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭の可能性がある。

S H212 (第116・117図) 第2次調査区の東部で検出した建物である。S H209・211・213・230など、多数の竪穴建物が重複する箇所で最も西側に位置する。S H230に先行し、それによって大部分が削平を被っている。S H236よりは後出するとみられるものの、新旧関係は確実に判断できなかった。全体の形状は不明確であるが、平面形は一辺6.6mほどの方形を呈するものと思われる。

主柱穴は遺存している南半部で2基検出された。元は4基の主柱穴が建物の平面形に沿って方形に配置されていたものと考えられる。

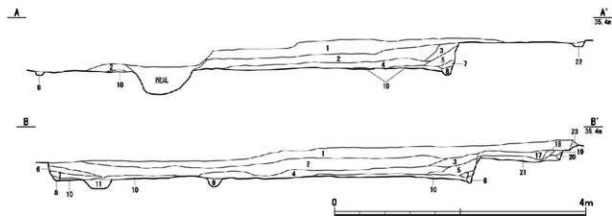
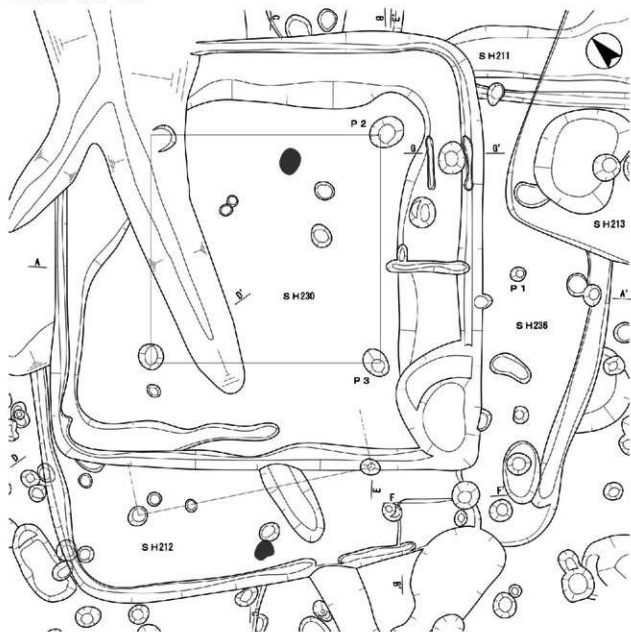
南壁沿いで焼土が検出されており、付近に炉が存在した可能性がある。貯蔵穴は検出されなかった。壁際溝は遺存している範囲ではほぼ全周する。

貼床は建物が遺存している範囲では全面にわたって施されていたが、周溝状掘形は認められなかった。

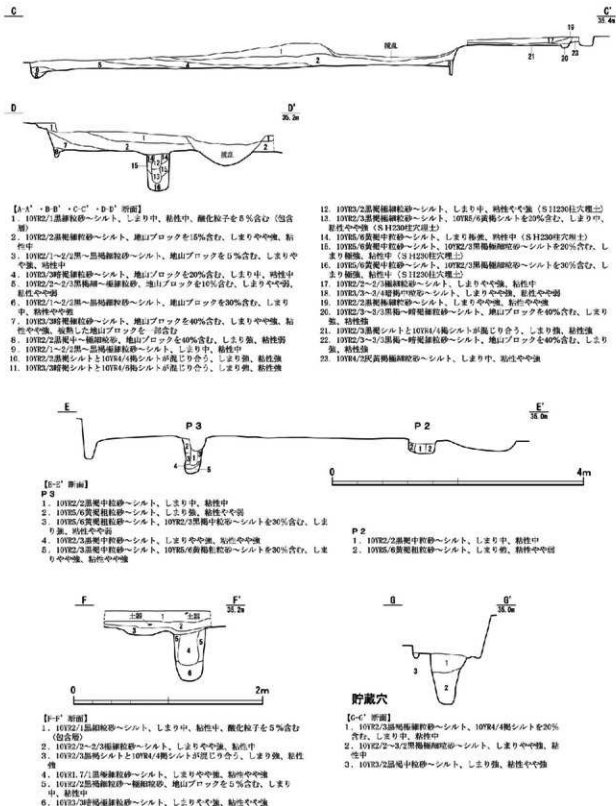
遺物は、埋土中から土師器が出土しているが、出土量は少ない。小片であるが、手焙形土器も出土し



S H 212 · 230 · 236

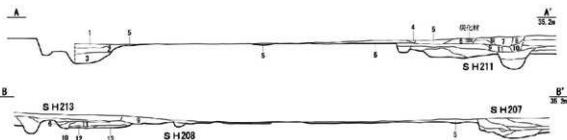
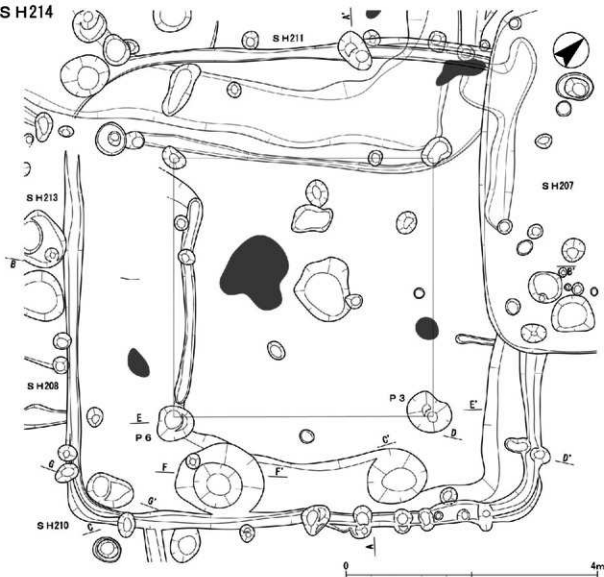


第116圖 S H 212 · 230 · 236① (1/60)



第117図 S H212・230・236② (1/60, 1/40)

SH214

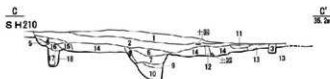


【A-A'・B-B'断面】

1. 10Y2/2黒色粘板砂〜シルト、10Y4/4層シルトを10%含む、しまりやや強、粘性中
2. 10Y4/4粘シルト、10Y2/2黒粘板砂シルトを20%含む、しまり強、粘性強
3. 10Y4/4粘シルト、しまりやや弱、粘性やや弱
4. 10Y8/6黄褐色粘砂〜シルト、しまり弱、粘性強（泥止ブロック）
5. 10Y2/2〜2/2黒粘板砂〜時粘板砂シルト、しまり中、粘性中
6. 上部粘土層
7. 2.5Y4/0粘粘板砂〜シルト、しまり弱、粘性強（粘土層）
8. 10Y3/3〜3/4粘粘板砂〜シルト、しまりやや強、粘性やや強、脆土を20%含む
9. 10Y2/2〜2/2粘粘板砂〜シルト、しまりやや強、粘性やや強
10. 10Y2/2〜2/2黒粘板砂〜シルト、しまりやや強、粘性やや強
11. 10Y2/2〜2/2粘シルト、10Y8/6黄褐色シルトを20%含む、しまり極強、粘性極強（泥止）
12. 10Y2/2黒粘板砂〜シルト、10Y8/6粘シルトを30%含む、しまり強、粘性強
13. 10Y2/2〜2/2粘粘板砂〜シルト、10Y2/2黒粘板砂シルトを10%含む、しまり弱、粘性強

第118図 SH214① (1/60)

## S H214



### 【C-C' 断面】

1. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや弱
2. 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
3. 10YR2/2～3黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
4. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
5. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強（硬質塊あり）
6. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
7. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、10YR5/6黄褐色中粒砂～シルトを20%含む、しまり中、粘性中
8. 10YR2/3暗褐色細粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性中
9. 10YR5/6黄褐色中粒砂～シルト、しまり強、粘性弱
10. 10YR2/3黒褐色中粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
11. 10YR4/6黄シルト、10YR2/1黒シルトを20%含む、しまり強、粘性弱
12. 10YR5/6黄褐色中粒砂～シルト、しまり強、粘性中
13. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、10YR4/6黄シルトを30%含む、しまり強、粘性強
14. 10YR2/1～2黒褐色シルト、10YR4/6黄シルトを30%含む、しまり強、粘性強
15. 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性強
16. 10YR5/6黄褐色中粒砂～シルト、しまり強、粘性中
17. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや弱
18. 10YR4/3に多い黄褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強



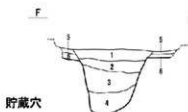
### 【D-D' 断面】

1. 10YR2/2黒褐色シルト、10YR6/7黄褐色細粒砂～シルトをブロック状に含む、しまり中、粘性やや強、礫を含む
2. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、10YR5/6黄褐色細粒砂～シルトをブロック状に含む、しまり中、粘性中
3. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、10YR6/6黄褐色細粒砂～シルトと10YR5/6黄褐色細粒砂～シルトをブロック状に含む
4. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルトと10YR5/6黄褐色細粒砂～シルトが混じり合う、10YR5/6黄褐色細粒砂～シルトをブロック状に含む、しまり中、粘性中、礫を含む
5. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、10YR4/6褐色細粒砂～シルトをブロック状に含む
6. 10YR5/6黄褐色細粒砂～シルト、10YR2/2黒褐色細粒砂～シルトをブロック状に含む、しまり中、粘性中
7. 10YR2/1黒褐色シルト、10YR6/6黄褐色細粒砂～シルトをブロック状に含む、しまり中、粘性やや強
8. 10YR5/6黄褐色細粒砂～シルト、10YR4/6褐色細粒砂～シルトをわずかに含む、しまり中、粘性中
9. 10YR2/1～2黒褐色細粒砂～シルトと10YR5/6黄褐色細粒砂～シルトが混じり合う、しまり中、粘性中、礫を含む



### 【E-E' 断面】

1. 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/2黒褐色中粒砂～シルト、10YR5/6黄褐色シルトを20%含む、しまり強、粘性やや強
3. 10YR2/2黒褐色中粒砂～シルト、10YR5/6黄褐色シルトを30%含む、しまり強、粘性やや強
4. 10YR3/3～4暗褐色シルト、しまり強、粘性強



### 貯蔵穴

### 【F-F' 断面】

1. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、10YR5/6黄褐色中粒砂～シルトを20%含む、しまり中、粘性中
3. 10YR2/3暗褐色細粒砂～シルト、10YR5/6黄褐色中粒砂～シルトを30%含む、しまり中、粘性やや強
4. 10YR2/3黒褐色中粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
5. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性強
6. 10YR2/1～2黒褐色細粒砂～シルト、10YR4/6黄シルトを30%含む、しまり強、粘性強



### 【G-G' 断面】

1. 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルト、10YR5/6黄褐色シルトを10%含む、しまり中、粘性中
2. 10YR5/6黄褐色シルト、10YR2/3黒褐色シルトを20%含む、しまり強、粘性強
3. 10YR2/3暗褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
4. 10YR2/2黒褐色シルトと10YR5/6黄褐色シルトが混じり合う、しまり強、粘性強

## 第119図 S H214② (1/60, 1/40)

ている。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭～前葉と考えられる。

S H214 (第118・119図) 第2次調査区の東部で検出した建物である。S H209・210・213・230・236など、多数の堅穴建物が重複する中に位置する。古墳時代後期の建物S H213によって西隣付近が削平を被っている。また、S H207より先行し、それに

よって北東部が削平を被っている。S H210・211より後出する。平面形は長軸・短軸ともに7.7mのほぼ正方形を呈する。かなり大型の建物である。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。柱穴はかなり深く、P 6では深さ0.7m近くある。P 3では、土層断面で柱痕ない柱の抜き取り痕が確認できる。

建物の床面では複数箇所から煖土が検出されてい

るが、中でも建物中央よりやや東側ではかなりの焼土の分布が見られ、炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、3基検出された。1基は南隅から検出された、平面形が不整形な楕円形の小型の土坑である。土層断面からは、一度埋没した後に再掘削されたような状況も認められる。残りの2基は南東壁沿いで検出された。いずれも平面形が円形の土坑で、南側のものは深さ0.8mほどとかなり深い。

壁際溝は全周する。南隅と東隅では、壁よりやや内側に掘り込まれている。

貼床は、建物全体に施されていたようである。また、周溝状掘形が建物の壁に沿って検出されており、この周溝状掘形を埋める形で貼床が厚く施されている。

壁面からは、壁際溝と重複する形で小型のピットが複数検出された。北西壁では1.0～2.0m間隔で4箇所、北東壁では2.5m間隔で3箇所、南東壁では2.0m間隔で4箇所、南西壁では1.5～2.0m間隔で3箇所確認されている。いずれも建物外へやや張り出すように設けられており、中には完全に壁の外に設けられているものもある。建物の壁の構造と関係する壁柱穴の可能性が考えられる。土層断面では柱痕とみられる土層が確認されており(D・D'断面第1・2層)、細い柱ないし杭状のものが立てられていた可能性がある。

この他、北東部では壁面方向から建物中央に向かって延びる細い溝が検出されている。西側と南側の主柱穴の間にも細い溝が検出されており、これらは間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

なお、西側では粘質土の焼土塊とともに、炭化物が出土しており、焼土建物の可能性もある。

遺物は、南東壁沿い南側の貯蔵穴と南隅貯蔵穴から土師器が出土している。南東壁沿い南側貯蔵穴から出土した遺物には、ほぼ全形が復元できる高坏などがある。南隅貯蔵穴からは内面に水銀朱が付着した鉢が出土した。埋土中からも土師器が出土している。その中には、東海地方東部の影響を受けたと考えられる壺なども認められる。この他、縄文土器や剥片も出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH216 (第120図)** 第2次調査区の南東部で検出した建物である。古墳時代後期の建物SH215・217によって一部削平を被っているが、深く掘り込まれているために全体がよく遺存している。SH218より後出する。平面形は長軸4.3m、短軸3.4mの長方形を呈する。比較的小型の建物である。

明確な主柱穴は検出できなかった。

焼土は平面では明瞭な広がり東隅でしか確認できなかったが、土層断面では建物中央よりやや北西側で床面直上において焼土層が確認されており、この付近に炉が存在したものと考えられる。建物中央より西側で浅い小型の土坑が検出されており、これが炉の可能性もある。

貯蔵穴とみられる土坑は、南隅から検出された。平面形が楕円形の小型の土坑で、壁際溝とほぼ接して掘り込まれている。土層断面からは、一度埋没した後に再掘削されたような状況も認められる。

壁周溝は全周する。平面では明瞭に検出できなかったが、土層断面では周溝状掘形の存在が確認でき、貼床はその部分を中心に施されている。周溝状掘形は、壁沿いを全周していたものと推定される。

また、南東側の壁面の中央付近から細い溝が建物中央に向かって延びる。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

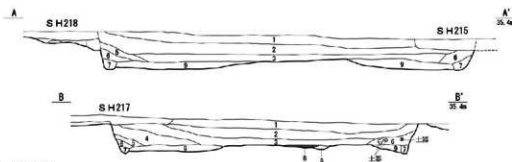
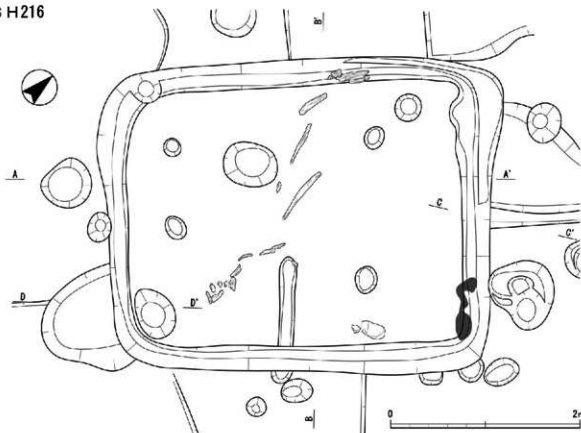
床面からは、多数の炭化材が検出されている。一部は壁際溝の上面からも検出された。ほとんどがクヌギ節の材であるが、アカガシ亜属の丸木材やツバキ属の材も検出されている(第VIII章第3節)。これらは建物の構架材として用いられていたものと思われ、焼土建物である可能性が高い。

遺物は、埋土中から土師器や軽石が出土している。土師器には赤彩された壺などが認められる。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期中葉～中葉と考えられる。

**SH218 (第121・122図)** 第2次調査区の南東部で検出した建物である。古墳時代後期の建物SH217によって一部削平を被っている。また、SH216・219・233より先行し、それらの建物によって北壁の一部や南西隅付近が削平を被っている。平面形は長

SH216



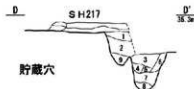
【A-A'・B-B' 断面】

1. 10YR2/1~2/2黒~黒褐色細粒砂ヘシルト、しまり中、粘性やや強
2. 10YR2/2~2/3黒褐色細粒砂ヘシルト、しまりやや強、粘性中
3. 10YR2/2黒褐色細粒砂ヘシルト、10YR4/4褐シルトを10%含む、しまりやや強、粘性やや強、粘性やや弱
4. 10YR2/1~2/2黒~黒褐色細粒砂ヘシルト、しまりやや強、粘性やや強
5. 10YR2/3黒褐色細粒砂ヘシルト、しまりやや強、粘性中、灰土を粒子状に10%含む
6. 10YR2/2黒褐色細粒砂ヘシルト、しまり中、粘性やや弱
7. 10YR2/3黒褐色細粒砂ヘシルト、10YR5/6黄褐色シルトを30%含む、しまり強、粘性やや強（壁面深埋土）
8. 7.5YR4/6黄中粒砂ヘシルト、しまり強、粘性弱（壁土）
9. 10YR4/6~5/5黄~黄褐色細粒砂ヘシルト、しまり強、粘性強（壁土）



【C-C' 断面】

1. 10YR2/3黒褐色細粒砂ヘシルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/3~3/3黒褐色~暗褐色細粒砂ヘシルト、しまり中、粘性中
3. 10YR3/3暗褐色細粒砂ヘシルト、10YR5/6黄褐色シルトを10%含む、しまりやや強、粘性やや強（壁面深埋土）

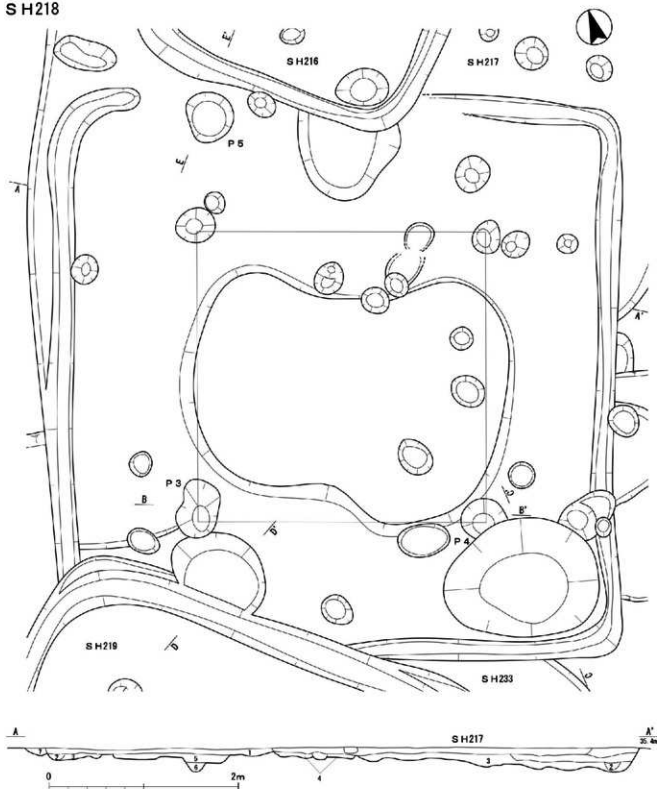


貯蔵穴

【D-D' 断面】

1. 10YR2/2黒褐色細粒砂ヘシルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/1~2/2黒~黒褐色細粒砂ヘシルト、しまり中、粘性中
3. 10YR2/3黒褐色細粒砂ヘシルト、しまり中、粘性中
4. 10YR5/6黄褐色中粒砂ヘシルト、10YR2/2黒褐色細粒砂ヘシルトを20%含む、しまりやや強、粘性やや弱
5. 10YR3/4暗褐色細粒砂ヘシルト、しまり中、粘性中
6. 10YR5/6黄褐色中粒砂ヘシルト、10YR2/2黒褐色細粒砂ヘシルトを30%含む、しまりやや強、粘性やや弱
7. 10YR5/6黄褐色細粒砂ヘシルト、しまり強、粘性弱
8. 10YR2/2黒褐色細粒砂ヘシルト、しまりやや強、粘性やや弱
9. 10YR2/3暗褐色中粒砂ヘシルト、しまりやや強、粘性やや弱（壁面深埋土）

SH218



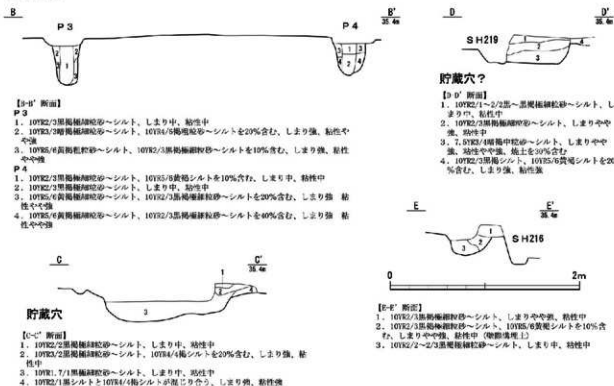
【A-A' 断面】

1. 10YR2/2黒乾態細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/3黒乾態細粒砂～シルト、10YR5/6黄褐シルトを20%含む、しまりやや強、粘性やや強（関東ローム層上）
3. 10YR2/2黒乾シルトと10YR3/3砂質シルトと10YR5/6黄褐シルトが混じり合う、しまり強、粘性強（関東層）

4. 10YR2/3～3/3黒褐色～黒褐色細砂～シルト、10YR5/6黄褐シルトを10%含む、しまり強、粘性強（関東層？）
5. 10YR2/3～3/3黒褐色～黒褐色細砂～シルト、しまり強、粘性強
6. 10YR2/2黒乾態細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
7. 10YR2/2～2/3黒乾態細粒砂～シルト、しまり中、粘性中

第121図 SH218① (1/40)

## SH218



第122図 SH218② (1/40)

軸6.3m、短軸6.0mの正方形に近い方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。P3・4では土層断面で柱痕なし柱の抜き取り痕が確認できる。

焼土は検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴とみられる土坑は、南壁付近から2基検出された。南東隅のものは平面形が楕円形の大型の土坑で、主柱穴P4と一部重複している。南西隅付近のものは平面形が楕円形のやや小型の土坑で、SH219によって一部削平を被っている。埋土中から古墳時代後期のもと思われる土師器碗が出土しているため、上部から掘り込まれた新しい土坑の可能性もあるが、SH219との重複関係から当該建物に伴うものと判断した。

壁際溝は、SH216と重複する付近でやや途切れるものの、ほぼ全周する。

貼床は、建物全体に施されている。また、かなり幅が広い周溝状掘形が建物の壁に沿って検出されており、この周溝状掘形を埋める形で貼床が厚く施されている。

遺物は、西側貯蔵穴から土師器碗が出土している。古墳時代後期のものの可能性が高く、SH217からの混入と考えられる。埋土中や床面のピットからも土師器や須恵器が出土している。須恵器は古墳時代後期のもので、土師器にも長胴の土師器甕が認められるが、やはりSH217からの混入の可能性が高い。

出土遺物やSH219・233との重複関係からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

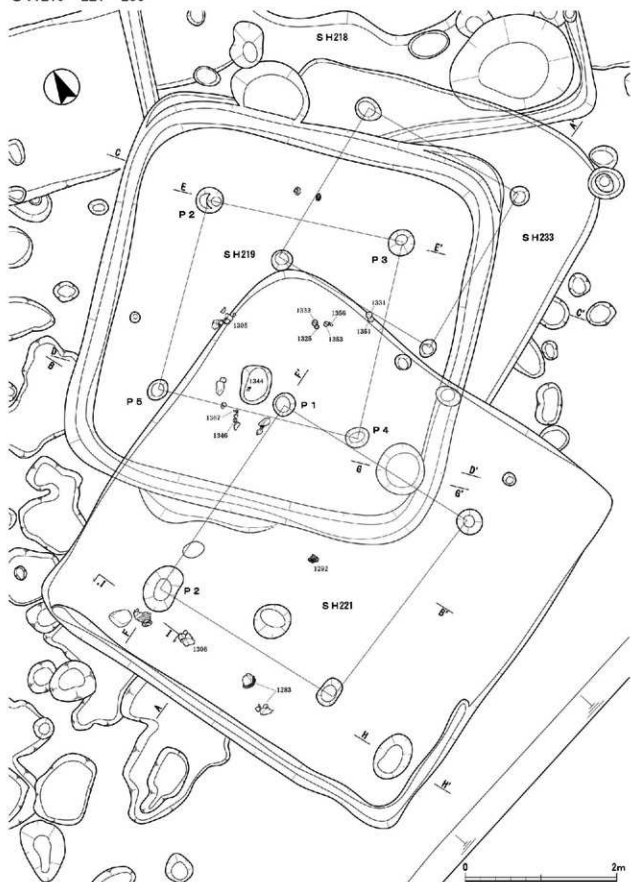
**SH219 (第123・124図)** 第2次調査区の南東部で検出した建物である。SH221に先行し、この建物と大きく重複するためかなり削平を被っているが、一段深く掘り込まれているために、床面付近はほぼ全体が遺存している。SH218・233より後出する。平面形は長軸5.4m、短軸5.1mの正方形に近い方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。

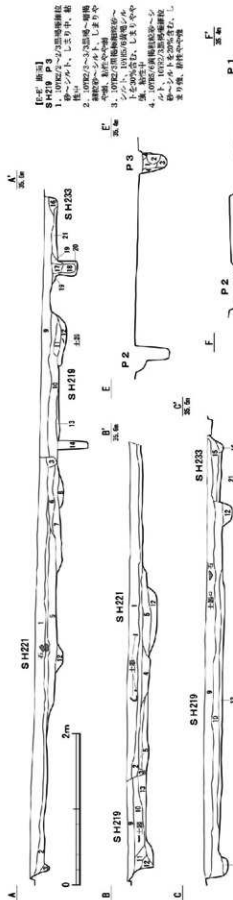
焼土は検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴とみられる土坑は、南隅付近から検出された。平面形が円形の小型の土坑である。



SH219・221・233



第123圖 SH219・221・233① (1/50)



- [A・B・C 断面]  
 1. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H221))  
 2. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H219))  
 3. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H233))  
 4. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H221))  
 5. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H219))  
 6. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H233))  
 7. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H221))  
 8. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H219))  
 9. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H233))  
 10. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H221))  
 11. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H219))  
 12. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H233))  
 13. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H221))  
 14. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H219))  
 15. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H233))  
 16. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H221))  
 17. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H219))  
 18. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H233))  
 19. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H221))  
 20. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H219))  
 21. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H233))



- [D・E 断面]  
 1. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H219))  
 2. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H219))  
 3. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H219))  
 4. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H219))  
 5. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H219))



- [F・G 断面]  
 1. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H221))  
 2. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H221))  
 3. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H221))  
 4. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H221))  
 5. 10752/2の遺構断面図(砂→シルト、土まじり中層、粘状中層 (S H221))

新124図 S H219・221・233② (1/50, 1/20)

壁際溝は全周する。北隅と東隅では壁面よりやや内側に掘り込まれている。

貼床は明瞭には確認できず、周溝状掘形も認められないが、土層断面では一部に貼床と思われる土層も確認できる（A-A'・B-B'・C-C'断面第13層）。

遺物は、埋土中から土師器や須恵器が出土している。小片が多いが、赤彩された壺の体部片や、ほぼ全形が復元できた鉢などが認められる。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**S H221（第123・124図）** 第2次調査区の南東部で検出した建物である。S H219・233より後出する。平面形は長軸・短軸5.7mの正方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿って正方形に近い形に配置されているが、南側の柱穴の位置がずれており、やや歪な配置となっている。P2では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。

焼土は検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴とみられる土坑は、南隅付近から検出された。平面形が楕円形の小型の土坑である。

壁際溝は、南西壁沿いと南東壁沿いの一部で検出されたが、それ以外では遺構の重複や地山に礫が多く含まれていたことなどによって明瞭に検出できなかった。ただし、土層断面からみると北西壁沿いや北東壁沿いにも壁際溝が存在したと思われる。

貼床は調査時には検出できず、周溝状掘形も検出されなかったが、土層断面では貼床と思われる土層が確認できる（A-A'・B-B'・C-C'断面第5・6層）。

床面では、主柱穴P2の東側で人頭大の礫と完形に近い土師器広口壺（1288）が出土した。また、北側や南西側でも土師器や礫が散在する状況が認められた。

遺物は、埋土中から土師器が出土している。遺物の出土量はかなり多く、壺や甕、高坏、器台、鉢など複数の器種が含まれている。中でも壺・甕・高坏は個体数が多い。壺には広口壺の他、瓢形壺や短頸壺など、多様な器形のものが認められる。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**S H222（第125図）** 第2次調査区の南東部で検出

した建物である。北東部が風倒木痕と思われるもので攪乱を被っている。そのため、平面形については不明な部分もあるが、現状では長軸・短軸3.4mほどの正方形を呈している。

これを小型の竪穴建物とみた場合、主柱穴にあたるような柱穴は認めがたいが、四隅にあたる部分からはピットが検出されている。これを主柱穴と考えれば、当該建物は本来もう少し規模が大きいもので、削平により建物中央部分の掘形のみが遺存した可能性が高い。北壁付近が一部突出して不整形になる点も、これが建物掘形と考えれば整合的であろう。

焼土は検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴とみられる土坑や壁際溝は、建物と認識していた方形の掘り込み内からも、その周囲からも検出されなかった。

土層断面では、方形の掘り込み内に貼床と思われる土層が確認できる。建物掘形とすれば、これを埋める形で貼床が施されていたものと考えられる。

遺物は、主柱穴P3から土師器のS字状口縁巻の破片がほぼ1個体出土している。埋土中からも土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**S H223（第126図）** 第2次調査区の南東部で検出した建物である。平面形は長軸5.1m、短軸4.0mの長方形を呈する。

明確な主柱穴は検出できなかった。

焼土は検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴とみられる土坑も検出されなかった。

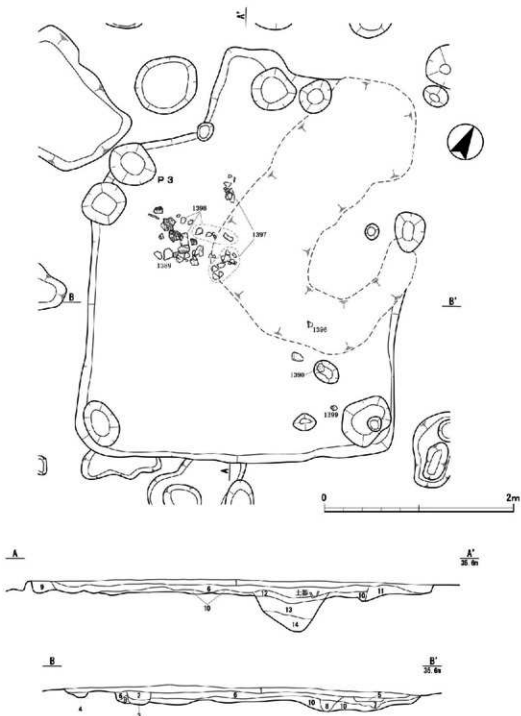
壁際溝は南隅付近では不明瞭であったが、ほぼ全周している。

貼床は、建物全体に施されている。建物の中央部がやや深く掘り込まれており、それを埋めるように貼床が厚く施されている（第5・6層）。建物中央部のみ別の質の貼床が上面に施されているようで（第2層）、その貼床の変化が床面で確認できた。

東隅付近では、床面付近で土師器がまとまって出土している。

遺物は、埋土中から土師器が出土している。遺物の出土量は比較的多い。小片が多いが、遺存状況が良好な小型丸底壺や赤彩された広口壺の口縁部など

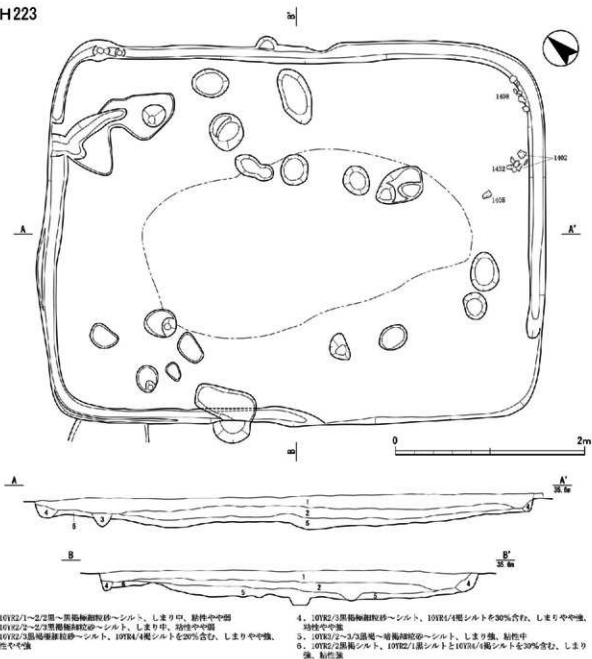
S H222



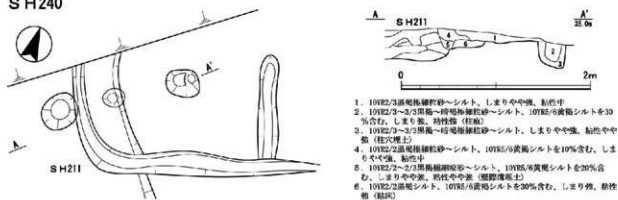
1. 10YR2/1層細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR1/7(1～2)層細砂～シルト、しまり中、粘性やや強
3. 10YR2/2中粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
4. 10YR2/3基層細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
5. 10YR2/1～2/3基～基層細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
6. 10YR2/2基層細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
7. 10YR2/3～3/3基層～基層細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
8. 10YR2/3～3/3基層～基層細粒砂～シルト、10YR2/6基層シルトを30%含む、しまりやや強、粘性やや強
9. 10YR2/3基層細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや弱
10. 10YR2/3～3/4層中粒砂～シルト、10YR2/6シルトを60%含む、しまり強、粘性中
11. 10YR2/3層細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
12. 10YR2/1層細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
13. 10YR2/2基層細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
14. 10YR2/3基層細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強

第125図 SH222 (1/40)

S H223



S H240



第126図 S H223・240 (1/40)

が認められる。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期後葉と考えられる。

**S H230 (第116・117図)** 第2次調査区の東部で検出した建物である。S H209・211・213・236など、多数の竪穴建物が重複する中に位置する。北隅が近世以降の大溝状の攪乱によって削平を被っている。S H211・212・236より後出し、多数の建物が重複する中で、最も新しい時期に構築されたものの一つである。また、重複している3棟の建物よりもかなり深く掘り込まれている。平面形は長軸7.0m、短軸6.8mの正方形に近い方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。柱穴はP3など深いもので深さ0.6mほどあるが、P2はやや浅い。いずれの柱穴でも土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。

建物中央よりやや北東側の床面から焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南隅から検出された。平面形が不整形な楕円形の大型の土坑で、長径1.7mほどある。北東側は段状に浅くなる。ほぼ壁に接するように掘り込まれている。また、東隅よりやや南側の壁沿いでも貯蔵穴の可能性のある土坑が検出された。平面形が円形の小型の土坑で、深さは0.5mほどある。両側からは、浅い溝状の遺構が検出された。貯蔵穴ではなく、他の施設とも考えられる。

壁際溝は、貯蔵穴と重複する箇所以外は全周すると思われる。

床面ではごく浅い周溝状掘形が建物の壁に沿って検出されており、貼床はこの部分を中心に施されている。

また、南東側の壁面の中央付近から細い溝が建物中央に向かって延びる。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

遺物は、埋土中から土師器や鉄製品が出土している。土師器は小片が多いが、高坏形装飾器台などが認められる。鉄製品は棒状の鉄製品が1点出土した。その他、縄文土器も少量出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**S H233 (第123・124図)** 第2次調査区の南東部で検出した建物である。S H219・221に先行し、これらの建物と大きく重複するためかなり削平を被っており、北東側の一部が遺存しているのみである。S H218より後出する。全体の形状は不明確であるが、平面形は一辺4.4m以上の正方形に近い方形を呈するものと思われる。

削平を被っていたものの、主柱穴はS H219の床面でも確認でき、4基検出することができた。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。柱穴の土層断面では、柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。

遺存状態が悪いため、炉やそれに伴う焼土、貯蔵穴は確認できなかった。壁際溝も遺存している部分では検出できなかったが、土層断面からみると、壁際溝が存在していた可能性が高い(A-A'・B-B'・C-C'断面第16層)。

貼床は、建物が遺存している範囲ではほぼ全体に施されているが、周溝状掘形は認められない。

遺物は、埋土中から土師器や台石が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**S H236 (第116・117図)** 第2次調査区の東部で検出した建物である。S H211・212・213・230など、多数の竪穴建物が重複する中に位置する。S H230に先行し、それによって大部分が削平を被っている。また、S H212よりも先行するとみられるものの、新旧関係は確実には判断できなかった。全体の形状は不明確であるが、平面形は一辺4.9m以上の方形を呈するものと思われる。

他の建物による削平が大きく、貯蔵穴や貼床は確認できなかった。主柱穴も確実なものとは確認できなかったが、主柱穴の可能性のあるピットはいくつか検出されている。焼土も検出されなかったため、炉の位置は不明である。

壁際溝は、建物が遺存する部分では確認できたが、南隅付近では途切れる可能性がある。

遺物は、主柱穴の可能性もあるピット(P1)から鉄鏝が1点出土している。埋土中からも土師器が出土しているが、小片が少量出土したのみである。赤彩された壺の体部片などが認められる。

出土遺物やSH230との重複関係からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH238 (第111・112図)** 第2次調査区の東部で検出した建物である。SH208・211・213・214など、多数の竪穴建物が重複する中に位置する。SH209に先行し全体が重複しているが、SH209の方が一回り規模が大きく、入れ子状になっている。SH209よりも一段深く掘り込まれているため、床面はほぼ全体が遺存している。SH208より後出する。平面形は長軸5.2m、短軸4.6mの方形を呈する。ただし、北東隅の角はやや丸みを帯びる。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿って方形に配置されている。

建物中央や、中央よりやや西側の床面から焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅付近から検出された。平面形が円形の小型の土坑で、SH209の柱穴と重複している。

壁際溝は全周する。貼床は、建物全体に施されている。南側では周溝状掘形が建物の壁に沿って検出されており、この周溝状掘形を埋める形で貼床が厚く施された後に、床面全体に及ぶ貼床が施されているようである(B-B'・C-C'断面第15層)。

遺物は、埋土中から土師器が出土している。出土量は少量で、小片のみである。

出土遺物とSH209との重複関係からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH240 (第126図)** 第2次調査区の東部で検出した建物である。SH209・211・213・230など、多数の竪穴建物が重複する箇所で最も北側に位置する。SH211より後出する。大規模な掘溝溝によって北側が大きく削平を被っており、南東隅が一部遺存しているのみである。そのため全体の形状は不明であるが、平面形は方形を呈する可能性が高い。

主柱穴は1基検出され、土層断面で柱痕とみられるものが確認されている。削平により総数は不明であるが、主柱穴が遺存する位置からみて、4本の主柱穴が方形に配されていた可能性が高い。

遺存している範囲では、炉やそれに伴う焼土などは確認できなかった。貯蔵穴も検出されていない。

壁際溝は、遺存している範囲では途切れずめぐら

されている。

貼床は、部分的に確認された。西壁沿いに幅が狭い周溝状掘形が検出されており、その部分を中心に貼床が施されている。

また、南側の壁面から細い溝が建物中央に向かって延びる。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

ごく一部しか遺存していないこともあり、遺物は出土しなかった。

SH211との重複関係や、間仕切り溝らしい構造物が存在することなどからみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭～前葉の可能性が高いと考えられる。

**SH243 (第127図)** 第2次調査区の中央部で検出した建物である。平面形は長軸4.1m、短軸3.4mの長方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿って方形に配置されている。

焼土は検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴とみられる土坑としては、北隅で平面形が円形の小型の土坑が検出されたものの、後出する遺構の可能性が考えられる。この他には貯蔵穴に該当する遺構は確認されていない。

壁際溝は、南東壁沿いで断続的に検出されたのみである。

貼床は、建物全体に施されている。周溝状掘形は明確には検出されていないが、土層断面では南東壁付近に不整形な落ち込みが確認でき、部分的に周溝状掘形のような掘り込みが施されていた可能性がある。

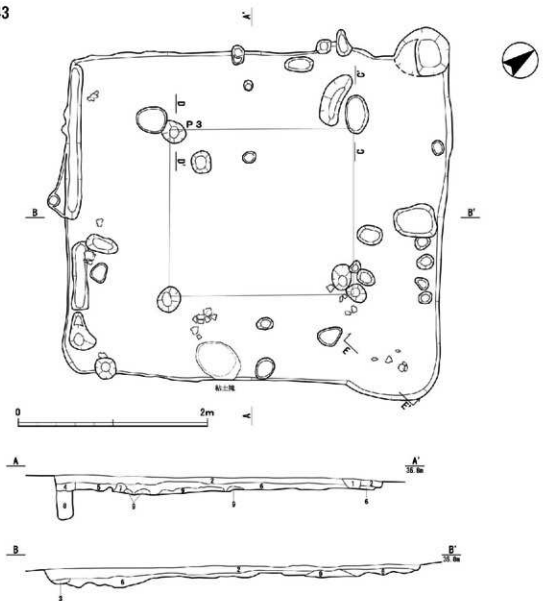
建物内からは、土師器片が散在的に出土している。東隅付近では完形に近い土師器小型壺(1521)がほぼ床面直上で検出された。また、南東壁沿いで径50～60cmほどの粘土塊が出土した。

遺物は、埋土中や床面上から土師器や鉄罐が出土している。土師器には先述の小型壺の他、甕や高坏の大きな破片が認められる。鉄罐は1点出土した。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH244 (第128図)** 第2次調査区の中央部で検出した建物である。平面形は長軸5.5m、短軸5.5mの正方形を呈する。

SH243



【A-A'・B-B' 断面】

1. 10YR1/7黒褐色粘砂ヘシルト、しまりやや弱、粘性やや強（ピット埋土）
2. 10YR2/1～2/黒～黒褐色粘砂ヘシルト、しまり中、粘性中
3. 10YR2/2黒褐色粘砂ヘシルト、10YR5/4にぶい黄褐色粘砂ヘシルトを20%含む、しまりやや弱、粘性強（埋土層土？）
4. 10YR2/2黒褐色粘砂ヘシルト、10YR5/4にぶい黄褐色粘砂ヘシルトを20%含む、しまり中、粘性中（埋土層埋土？）
5. 10YR2/1黒粘砂ヘシルト、10YR5/4にぶい黄褐色粘砂ヘシルトを10%含む、しまりやや強、粘性中
6. 10YR2/2黒褐色粘砂ヘシルト、10YR5/4にぶい黄褐色粘砂ヘシルトを40%含む、しまり強、粘性中（埋土）
7. 10YR3/1暗褐色粘砂ヘシルト、しまりやや弱、粘性やや強（ブロック土）
8. 10YR2/2黒褐色粘砂、10YR5/6黄褐色粘砂ヘシルトを30%含む、しまり弱、粘性弱（ピット埋土）
9. 10YR5/4～4/4にぶい黄褐色粘砂ヘシルト、しまり強、粘性やや強（埋土2号埋土？）



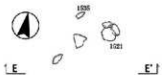
【C-C' 断面】

1. 10YR2/1黒褐色粘砂ヘシルト、しまり中、粘性中
2. 10YR1/3にぶい黄褐色粘砂ヘシルト、しまりやや弱、粘性やや強



【D-D' 断面】

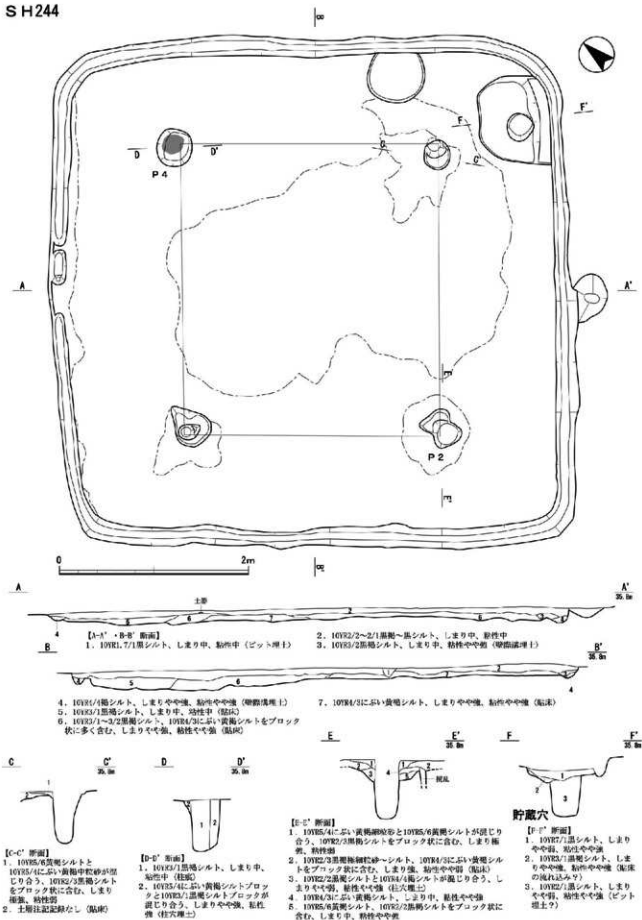
1. 10YR2/1黒褐色粘砂ヘシルト、10YR4/3にぶい黄褐色粘砂ヘシルトをブロック状に含む、しまり中、粘性中
2. 10YR1/3にぶい黄褐色粘砂ヘシルト、しまりやや弱、粘性やや強



遺物出土状況

第127図 SH243 (1/40, 1/20)





第128図 SH244 (1/40)

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。P4では、土層断面で柱痕とみられるものが確認できる。

焼土は検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、北東隅付近から検出された。平面形が円形のピット状の小型のもので、深さは0.5mほどある。また、周囲は方形に浅く掘り下げられており、有機質の蓋などが存在した可能性も考えられる。

壁際溝はほぼ全周するが、北西壁沿いでは一部が途切れている。

貼床は、建物全体に施されている。また、周溝状掘形が建物の壁に沿って検出されており、この周溝状掘形を埋める形で貼床が厚く施されている。なお、いくつかの主柱穴の周囲では、平面で貼床の様相がやや異なる状況が確認できた。土層断面からみると、柱穴の周囲に質の異なる貼床状の粘質土が施されていることが分かる（C-C'断面第1層）。さらに、P2では柱穴付近が血状に浅く掘り窪められ、建物全体に貼床を施す前にその窪みを埋める形で粘質土が施され（E-E'断面第3・5層）、貼床を施した上に、また別途粘質土を施している（E-E'断面第1層）。これらは、建物の柱を強固に据えるために行われたものと考えられる。

遺物は、貯蔵穴から縄文土器深鉢の口縁部片が出土している。混入したものと考えられる。埋土中からも土器器が出土している。遺構の遺存状況は比較的良好であるにも関わらず、遺物の出土量は少なく小片が多い。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭～前葉と考えられる。

**S H245 (第129・130図)** 第2次調査区と第3次調査区との境で検出した建物である。平面形は長軸5.5m、短軸5.2mの正方形に近い方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。

焼土は検出されず、炉の位置は不明であるが、南西側の主柱穴間で大型の竈が検出されており、これが炉と関係するものであれば、添石炉であった可能性も考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、東隅付近から検出され

た。平面形が円形の小型の土坑で、周囲が段状に掘り込まれている。貯蔵穴内からは土器片が複数出土しているが、埋没過程で落ち込んだものと考えられる。また、北東壁沿いでも楕円形の土坑が検出された。ただし、かなり浅いもので、貯蔵穴とは考えにくい。床面の一部がピット状に窪んでおり、その箇所から方形に近い土器器高坪（1565）が出土した。

壁際溝は、第2次調査区内ではほぼ全周する。南東壁中央付近では途切れているようにみえるが、土層断面からはこの箇所にも壁際溝が存在した可能性が窺われる（C-C'断面第4層）。第3次調査区内では壁際溝の存在は確認されていないが、本来は壁際溝が存在していた可能性が高い。

貼床は、建物全体に厚く施されている。また、建物南半部では周溝状掘形が検出されており、特に南東壁沿いではかなり深く掘り込まれていることが確認できる。

また、北隅の主柱穴から北東壁と北西壁に向かって細い溝が延びている。他の建物で検出されているものとは位置が異なるが、やはり間仕切りなどの建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

建物内からは、多数の土器器が出土している。特に、南隅付近では方形に近いものも認められた。また、南隅の主柱穴の横からは長径50cmを超えるような大型の粘土塊が検出された。良質な粘土で、土器製作のために保管されていた可能性なども考えよう。

遺物は、貯蔵穴から土器器の高坪や有孔鉢の破片が出土している。埋土中からも土器器や鉄製品、粘土塊が出土している。土器器には方形に近い壺や高坪の他、遺存状況が良好な鉢が複数個体認められる。鉄製品は、棒状鉄製品の小片が1点出土した。

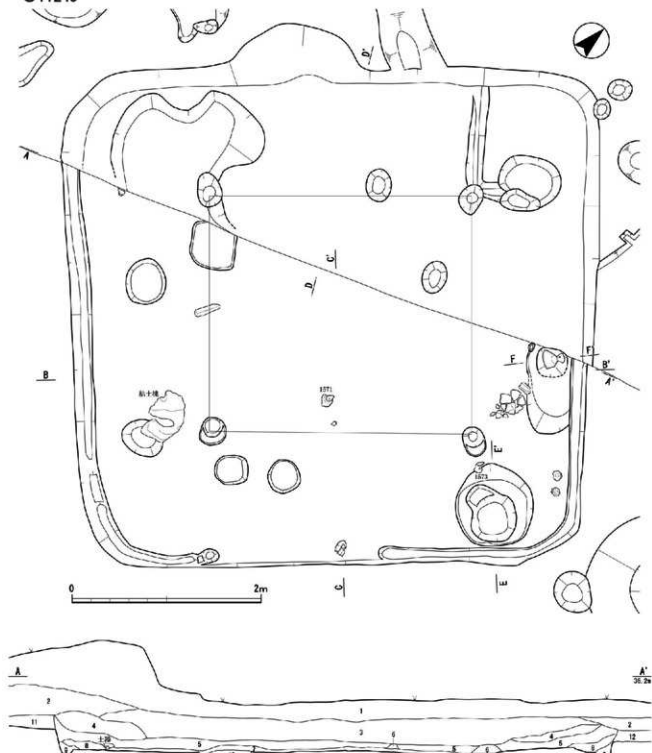
出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**S H246 (第131図)** 第2次調査区の中央部で検出した建物である。平面形は長軸4.5m、短軸4.4mのほぼ正方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿って正方形に配置されている。P2では、土層断面で柱痕とみられるものが確認できる。

焼土は検出されず、炉の位置は不明である。ただ

SH245



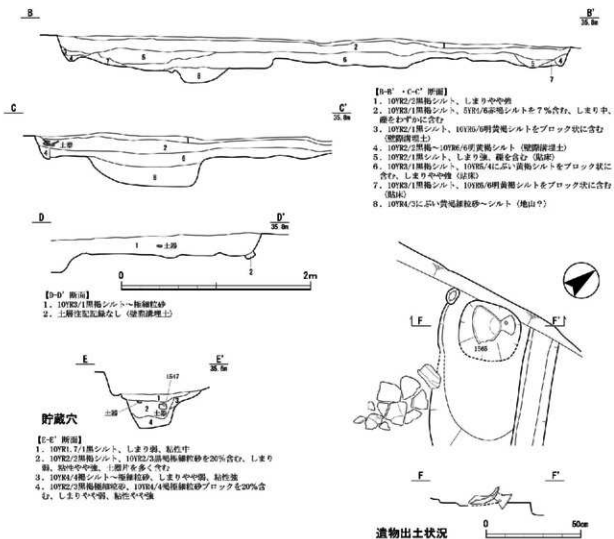
【A-A' 断面】

1. 10YR3/2黒褐色細砂礫シルトと10YR3/3暗褐色細砂礫シルトが混じり合う、しまり中（表土）
2. 10YR2/1〜2/1弱〜黒褐色細砂礫シルト、7.5YR4/6粉シルトをわずかに含む、しまり中（表土・耕作土）
3. 10YR2/2黒褐色細砂礫シルト、5YR4/6赤褐色細砂礫シルトをわずかに含む、しまり中、礫を含む
4. 10YR2/1黒褐色細砂礫シルト、しまり中、礫をわずかに含む
5. 10YR3/1黒褐色細砂礫シルト、東側は5YR4/6赤褐色細砂礫シルトをわずかに含む
6. 10YR3/1黒褐色細砂礫シルト、10YR5/6黄粉シルトをブロック状に含む（掘削土）

7. 10YR3/1黒褐色細砂礫シルト、10YR5/4にぶい・黄褐色細砂礫シルトをブロック状に含む、しまり強（掘削土）
8. 10YR2/1黒褐色細砂礫シルトと10YR6/6弱黄褐色細砂礫シルトが混じり合う（掘削土）
9. 10YR2/2黒褐色細砂礫シルトと10YR5/6弱黄褐色細砂礫シルトが混じり合う、しまり中（掘削土）
10. 10YR6/6弱黄褐色細砂礫シルト、しまり中（掘削土）
11. 10YR3/4暗褐色細砂礫シルト、しまり中
12. 10YR2/2黒褐色細砂礫シルト、しまり中

第129図 SH245① (1/40)

# SH245



第130図 SH245② (1/40、1/20)

し、建物中央付近で細長い大型の礫が検出されており、添石炉であった可能性も考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、東隅から検出された。平面形が円形のビット状の小型のもので、深さは0.4mほどある。壁面の一部はオーバーハンクしている。

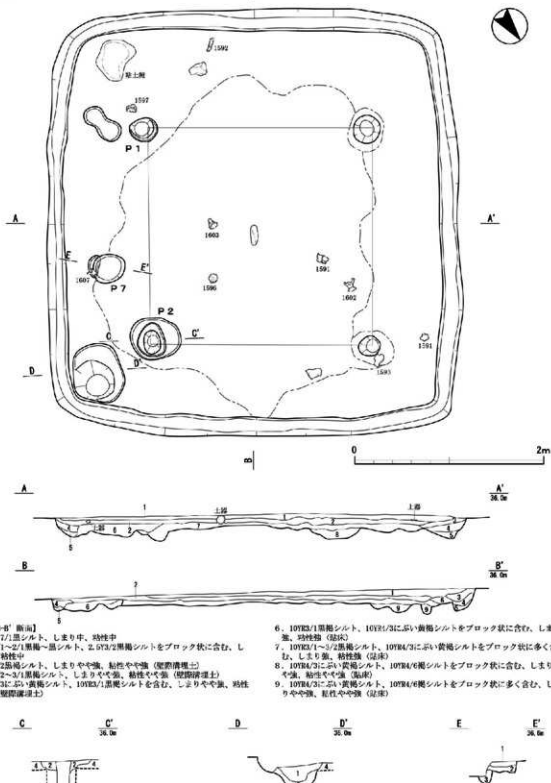
壁際溝は途切れず全周する。

貼床は、建物全体に施されている。また、周溝状掘形が建物の壁に沿って検出されており、この周溝状掘形を埋める形で貼床が厚く施されている。なお、いくつかの主柱穴の周囲では、平面でやや貼床の様相が異なる状況が確認できた。土層断面からみると、柱穴の周囲に質の異なる貼床状の粘質土が施されていることが分かる。P2では床面に貼床を施した後

に、柱周辺を掘り窪めてシルト質土を充填し（C-C'断面第2層）、根固め状にしている。これらは、建物の柱を強固に据えるために行われたものと考えられる。

建物内からは、多数の土師器が出土している。ただし、一定の箇所集中する様子は認めがたく、散在的である。また、南隅付近の床面からは長径50cmほどの大型の粘土塊が検出された。良質な粘土で、土器製作のために保管されていた可能性も考えられよう。

遺物は、主柱穴P1から土師器台付甕の脚台部片が数点出土している。埋土中や床面から検出されたビットなどからも土師器や粘土塊が出土している。



## 【A-A'・B-B' 断面】

1. 10YR3/7/黒シト、しまり中、粘性中
2. 10YR3/1~2/1黒粘~黒シト、2.5Y3/2黒粘シトをブロック状に含む、しまり中、粘性中
3. 10YR3/2黒粘シト、しまりやや強、粘性やや強（肥後赤粘土）
4. 10YR3/2~3/1黒粘シト、しまりやや強、粘性やや強（肥後赤粘土）
5. 10YR4/3に多い黄粘シト、10YR3/1黒粘シトを含む、しまりやや強、粘性やや強（肥後赤粘土）

6. 10YR3/1黒粘シト、10YR3/3に多い黄粘シトをブロック状に含む、しまり強、粘性強（肥赤）
7. 10YR3/1~3/2黒粘シト、10YR4/3に多い黄粘シトをブロック状に多く含む、しまり強、粘性強（肥赤）
8. 10YR4/3に多い黄粘シト、10YR4/6黒シトをブロック状に含む、しまりやや強、粘性やや強（肥赤）
9. 10YR4/3に多い黄粘シト、10YR4/6黒シトをブロック状に多く含む、しまりやや強、粘性やや強（肥赤）

## 【C-C' 断面】

1. 10YR1/7/1黒シト、10YR1/6褐粘砂を含む、しまりやや強、粘性中（佳赤）
2. 10YR4/3に多い黄粘シト、しまり強、粘性弱
3. 10YR4/6黒シト、しまりやや強、粘性強（注穴粘土）
4. 黄粘

## 貯蔵穴

## 【D-D' 断面】

1. 10YR1/7/1黒シト、しまりやや強、粘性やや強
2. 2.5Y3/1黒粘シト、10YR4/6黒シトをブロック状に含む、しまりやや強、粘性強
3. 10YR3/6黄粘シト、10YR2/1黒シトを含む、しまり中、粘性やや強
4. 黄粘

## 【E-E' 断面】

1. 10YR3/1黒粘シト、しまり中、粘性中
2. 10YR3/2黒粘シト、しまり中、粘性中
3. 10YR1/7/1黒シト、しまりやや強、粘性やや強

第131図 SH246 (1/40)

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

**S H254 (第132・133図)** 第2次調査区の北東部で検出した建物である。平面形は長軸・短軸ともに6.0mの正方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。いずれの主柱穴においても検出時に柱痕とみられる痕跡が認められ、土層断面でも明確に確認できる。

建物中央よりやや北西側の床面から、広い範囲で焼土が検出されているようで、その付近に炉が存在したと考えられる。焼土に伴って大型の礫も検出されており(写真図版49)、添石炉であった可能性も考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、西隅及び南隅から検出された。西隅のものは、平面形が楕円形のやや大型の土坑である。土層断面からは、埋没後に再掘削された可能性も窺われる。南隅のものは、平面形が円形のビット状の小型のものである。

壁際溝は全周する。南東壁沿いでは一部が壁面よりもやや内側に掘り込まれている。

床面からは壁に沿ってやや幅が狭い周溝状掘形が検出されており、この周溝状掘形を埋める形で貼床が施されていた。ただし、周溝状掘形より内側については明確な貼床は検出されていない。周溝状掘形は北東壁沿いでは検出されなかったが、土層断面からは北東部にも存在した可能性が高く、基本的に建物を全周するように掘り込まれていたものと考えられる。

南東壁沿いでは、S字状口縁甕(1631)の大型の破片が検出されている。ただし、出土位置は壁際溝上で、床面からも若干浮いている。また、南西部では壺(1610)の上半部が口縁部を下にした状態で検出されている(写真図版49)。

遺物は、西隅貯蔵穴から土師器高坏、東側貯蔵穴から須恵器坏蓋の破片が出土している。埋土中からも土師器が出土している。遺物の出土量は比較的多く、完形に近い小型高坏なども認められる。また、縄文土器や剥片なども出土した。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期前葉と考えられる。

**S H299 (第134図)** 第2次調査区の中央部で検出した建物である。平面形は長軸5.6m、短軸5.5mのほぼ正方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿って正方形に配置されている。北隅の主柱穴では、土層断面で柱痕とみられるものが確認できる。

焼土は検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、東隅から検出された。平面形が円形の小型の土坑で、深さは0.4mほどある。また、周囲は浅く掘り込まれている。

壁際溝はほぼ全周するが、西隅付近のみ途切れている。土層断面では、貼床を施した上から掘り込まれている状況が明瞭に看取される。

貼床は、建物全体に施されている。また、周溝状掘形が建物の壁に沿って検出されており、この周溝状掘形を埋める形で貼床が厚く施されている。ただし、周溝状掘形内を埋める貼床と、建物中央部付近に施された貼床には明瞭な土色や土質の差は認められなかった。

遺物は、貯蔵穴から土師器高坏の脚部片が出土している。埋土中からも土師器が出土している。小片が多いが、壺の体部の大きな破片なども認められる。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

**S H305 (第135図)** 第3次調査区の東部の第2次調査区との境付近で検出した建物である。平面形は長軸・短軸ともに6.1mの正方形を呈する。

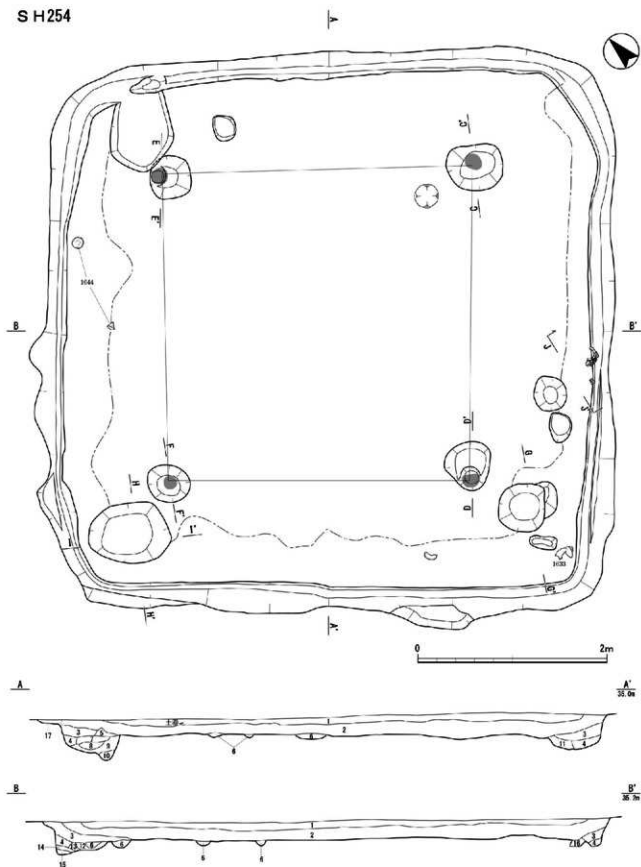
主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。

建物中央よりやや西側の床面から、焼土及び浅いビット状の遺構が検出されており、炉の痕跡と考えられる。ビット状の遺構は、円形のものと同楕円形ものが隣接しており、添石炉の礫が抜き取られた痕跡である可能性も考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅付近と南東隅付近から検出された。南西隅付近のものは平面形が不整形な隅丸方形のやや大型の土坑で、深さも0.5mほどと深い。南東隅付近のものは、平面形が不整形な円形の小型の土坑である。埋土上層からは土師器片が複数出土している。

壁際溝は途切れず全周する。

S H254

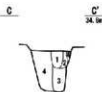


第132圖 S H254① (1/40)

# S H254

## [A-A' - B-B' 断面]

1. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中、酸化粒子を20%含む
3. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中、酸化粒子を40%含む
4. 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
5. 10YR2/3黒褐色細粒砂～シルト、地山ブロックを30%含む、しまり強、粘性やや強
6. 10YR2/1～2/2黒～黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強、酸化粒子を40%含む
7. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、地山ブロックを40%含む、しまり強、粘性強
8. 10YR5/6黄褐色シルト、しまり極強、粘性極強
9. 10YR3/3暗褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
10. 10YR4/4暗褐色細粒砂～シルト、地山ブロックを30%含む、しまり極強、粘性強
11. 10YR2/2～2/2黒～黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中、酸化粒子を10%含む
12. 10YR2/3暗褐色細粒砂～シルト、地山ブロックを30%含む、しまり強、粘性やや強、酸化粒子を30%含む
13. 10YR5/4(土)黄褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強、酸化粒子を30%含む
14. 10YR5/6黄褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性やや強、酸化粒子を20%含む
15. 10YR5/7黄褐色細粒砂～シルト、地山ブロックを20%含む、しまり中、粘性やや強、酸化粒子を20%含む
16. 10YR2/2暗褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中、酸化粒子を10%含む
17. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中



## [C-C' 断面]

1. 10YR2/1～2/2黒～黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
2. 10YR2/3暗褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
3. 10YR2/1黒シルト、しまりやや強、粘性中
4. 10YR5/6黄褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性中



## [D-D' 断面]

1. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性中
2. 10YR5/6黄褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性中
3. 10YR5/6黄褐色細粒砂～シルトと10YR2/2暗褐色シルトが混じり合う、しまり中、粘性やや強



## [E-E' 断面]

1. 10YR2/1～2/2黒～黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
2. 10YR5/6黄褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性中



## [F-F' 断面]

1. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性中
2. 10YR5/6黄褐色細粒砂～シルト、しまり強、粘性中



## [G-G' 断面]

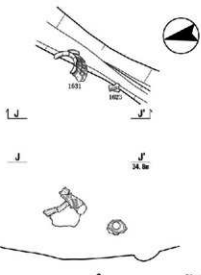
1. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、10YR4/4暗褐色シルトを5%含む、しまり中、粘性中
2. 10YR2/1～2/2黒～黒褐色細粒砂～シルト、10YR5/4(土)黄褐色細粒砂をブロック状に含む、しまりやや強、粘性やや強
3. 10YR2/2～3/2暗褐色～黒褐色細粒砂、しまり強、粘性弱



## 貯蔵穴

### [H-H' - I-I' 断面]

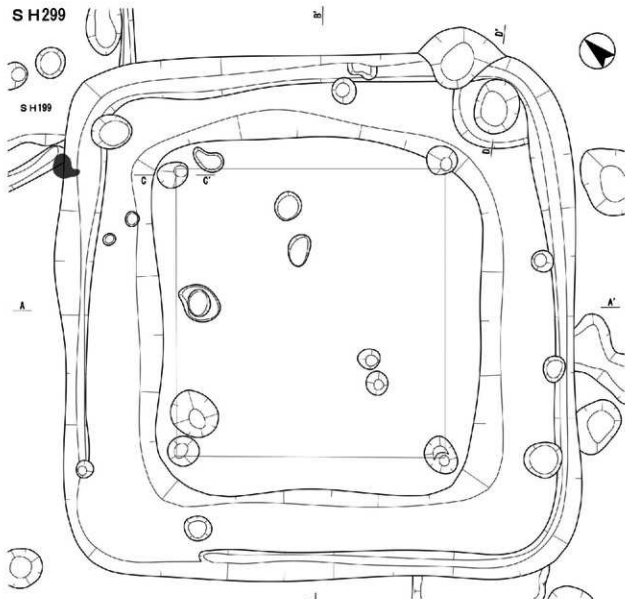
1. 10YR2/3暗褐色～黒褐色細粒砂、しまり中、粘性やや強
2. 10YR2/3暗褐色～黒褐色細粒砂、10YR4/4暗褐色～黒褐色細粒砂を40%含む、しまりやや強、粘性やや強
3. 10YR2/3暗褐色～黒褐色細粒砂、10YR5/6黄褐色細粒砂を20%含む、しまりやや強
4. 7.5YR2/3暗褐色～黒褐色細粒砂、しまり中、粘性中
5. 10YR2/3暗褐色～黒褐色細粒砂、10YR5/4(土)黄褐色細粒砂を10%含む、しまりやや強、粘性中
6. 10YR2/2暗褐色～黒褐色細粒砂、10YR5/6黄褐色細粒砂を30%含む、しまりやや強、粘性やや強



## 遺物出土状況



SH299

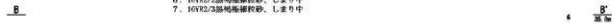


【A-A'・B-B' 断面】

1. 10YR2/1黒褐色細粒砂、しまり中
2. 10YR4/6黄シルト、しまり中
3. 10YR2/3黒地帯細粒砂、礫を含む



4. 10YR2/2黒地帯シルト、10YR5/6黄褐色シルトを30%含む（硬質粘壤土）
5. 10YR2/2黒地帯シルトと10YR5/6黄褐色シルトが混じり合う、礫をわずかに含む
6. 10YR2/2黒褐色細粒砂、しまり中
7. 10YR2/3黒地帯細粒砂、しまり中



【C-C' 断面】

1. 10YR2/2黒褐色細粒砂シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/2黒褐色細粒砂シルト、10YR3/4黒褐色細粒砂シルトを30%含む、しまり中、粘性中
3. 10YR3/4〜6/6暗褐色〜黒シルト、しまり強、粘性強
4. 10YR3/4〜6/6暗褐色〜黒シルト、10YR5/6黄褐色中粒砂シルトを20%含む、しまり強、粘性強



【D-D' 断面】

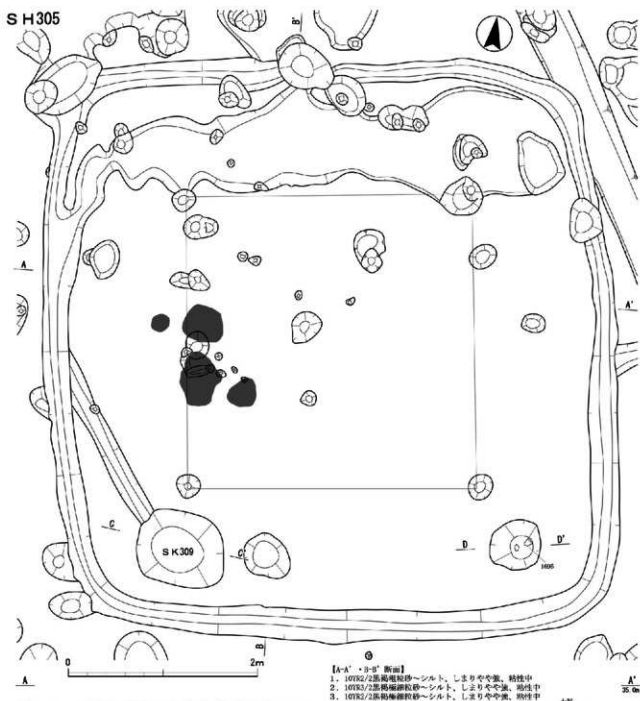
1. 10YR2/1黒褐色細粒砂シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/2黒褐色細粒砂シルト、しまりやや弱、粘性中
3. 10YR3/2暗褐色細粒砂シルト、しまりやや弱、粘性中
4. 10YR2/2〜2/3黒褐色細粒砂シルト、しまり中強、粘性やや強



貯蔵穴

第134図 SH299 (1/40)

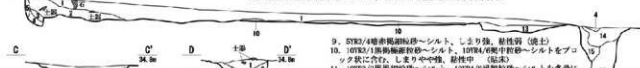
S H 305



【A-A'・B-B'断面】  
 1. 101K2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまりや中強、粘性中  
 2. 101K3/2黒褐色細粒砂～シルト、しまりや中強、粘性中  
 3. 101K2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまりや中強、粘性中



4. 101K3/2黒褐色細粒砂～シルト、101R4/6暗赤細粒砂～シルトを少量含む、しまりや中強、粘性中  
 5. 2. 101K2/2黒褐色細粒砂～シルト、101R4/6暗赤細粒砂～シルトを多量に含む、しまりや中強、粘性中  
 6. 101K3/1黒褐色細粒砂～シルト、101R4/6暗褐色細粒砂～シルトを少量含む、しまり中、粘性弱  
 7. 101K2/2黒褐色細粒砂～シルト、101R4/6暗褐色細粒砂～シルトを少量含む、しまり中、粘性弱  
 8. 101K3/1黒褐色細粒砂～シルト、しまりや中強、粘性中、灰を含む



9. 51K2/4暗赤粗粒砂～シルト、しまり強、粘性弱（流石）  
 10. 101K3/1黒褐色細粒砂～シルト、101R4/6暗赤細粒砂～シルトをブロック状に含む、しまりや中強、粘性中（流石）  
 11. 101K3/2黒褐色細粒砂～シルト、101R4/6暗褐色細粒砂～シルトを多量に含む、しまり中、粘性弱  
 12. 101K2/3黒褐色細粒砂～シルト、101R4/6暗褐色細粒砂～シルトを少量含む、しまりや中強、粘性中  
 13. 101K2/2黒褐色細粒砂～シルト、101R4/6暗褐色細粒砂～シルトを多量に含む、しまり中、粘性中  
 14. 101K3/2黒褐色細粒砂～シルト、しまりや中強、粘性中、炭化物を少量含む（ビット痕）  
 15. 101K3/2黒褐色細粒砂～シルト、101R4/6暗赤細粒砂～シルトを多量に含む、しまり中、粘性弱、炭化物を少量含む（ビット痕）  
 16. 101K3/1黒褐色細粒砂～シルト、しまりや中強、粘性中、炭化物を少量含む（ビット痕）

貯蔵穴  
 【D-D'断面】

1. 101K2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中  
 2. 101K5/6黄褐色細粒砂～シルト、粗粒砂を含む、しまり中、粘性中  
 3. 101K2/1黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中  
 4. 101K2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中

貯蔵穴

【C-C'断面】  
 1. 101K2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまりや中強、粘性中

第135図 S H 305 (1/40)

貼床は、ほぼ建物全体に施されている。北壁付近では浅い周溝状掘形が検出されており、不明瞭ながら東壁や西壁沿いにも存在していた可能性がある。

遺物は、貯蔵穴から土師器壺や高坏の破片が出土している<sup>9)</sup>。埋土中や床面上からも土師器が出土した。大型の壺が目立つ他、ほぼ全形が復元できた高坏や鉢などがみられる。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH306 (第136図)** 第3次調査区の東部で検出した建物である。SH307より後出する。平面形は長軸・短軸ともに5.5mの正方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。

焼土は検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南東隅付近から検出された。平面形が不整形な楕円形を呈する小型の土坑である。

壁際溝はほぼ全周するが、北東部や北西部では一部途切れている可能性がある。

貼床は、建物全体に施されている。また、周溝状掘形が建物の壁に沿って断続的に検出されており、この周溝状掘形を埋める形で貼床が厚く施されている。

遺物は、埋土中から土師器が出土している。体部外面が赤彩された大型の壺や、手焙形土器などがみられる。また、縄文土器の小片も出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH307 (第137図)** 第3次調査区の東部で検出した建物である。SH306に先行し、それによって北西隅が一部削平を被っている。また、一次調査の調査坑の痕跡が建物中央付近に残る。平面形は長軸・短軸ともに5.5mの正方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿って方形に配置されているが、やや歪みがあり、また全体的に建物の西側に寄っている。北西隅の主柱穴はSH306の床面で確認されているが、その東側に重複するピットが本来の主柱穴である可能性も考えられる。

建物中央よりやや西側の床面から焼土が検出され

ており、炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅から検出された。平面形が不整形な円形の小型の土坑で、深さは0.4mほどある。

壁際溝は、SH306や一次調査の調査坑と重複する部分では確認できていないが、おそらく全周するものと思われる。

貼床は、建物全体に施されている可能性が高い。平面では検出されていないが、土層断面からみると、南壁沿いや東壁沿いには幅の狭い周溝状掘形が存在した可能性がある。

また、南側の壁面から細い溝が建物中央に向かって延びる。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

遺物は、埋土中や床面上から土師器が出土している。遺物の出土量は少ない。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH319 (第138図)** 第3次調査区の東部で検出した建物である。平面形は長軸・短軸ともに5.6mの正方形を呈する。深さが0.3mほどある部分もあり、全体的に遺存状態が良好であった。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。

焼土は検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南隅付近から検出された。平面形が円形の小型の土坑である。

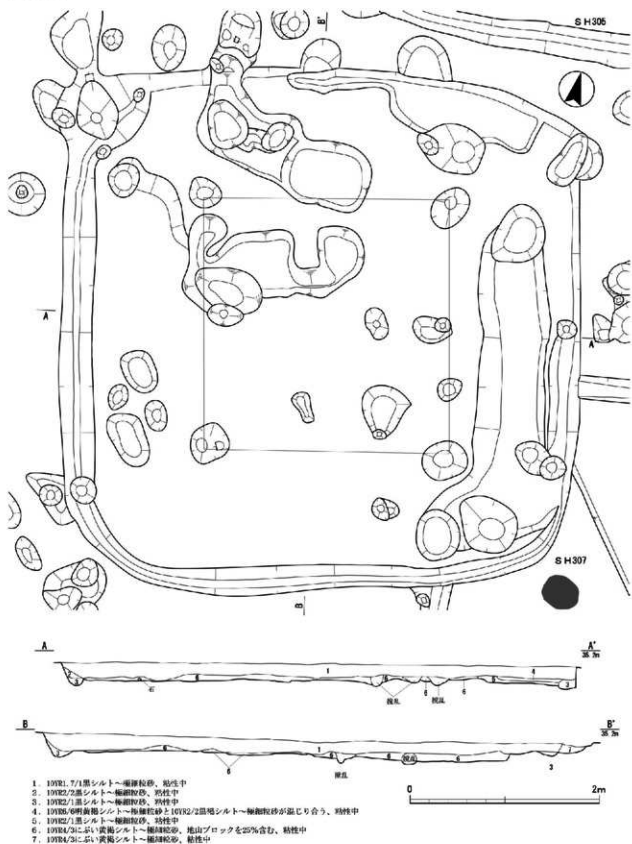
壁際溝は、調査時には平面的に検出することができなかったが、土層断面からみると、建物内の南側には幅の狭い壁際溝が掘り込まれていたものと考えられる。ただし、北側では土層断面でも確認できず、壁際溝は存在しなかった可能性が高い。

貼床は、建物全体に施されている。また、周溝状掘形が建物の壁に沿って検出されており、この周溝状掘形を埋める形で貼床が厚く施されている。貼床と考えられる土層中にはかなり大きな礫が少量含まれている(第4層)。

遺物は、埋土中や床面上から土師器が出土している。遺存状態が良好な器台や鉢が認められる。

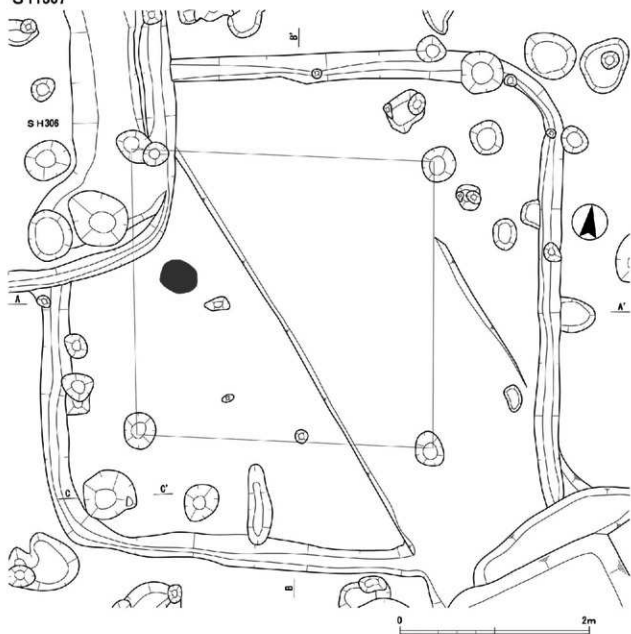
出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

S H306



第136図 S H306 (1/40)

S H307



貯蔵穴

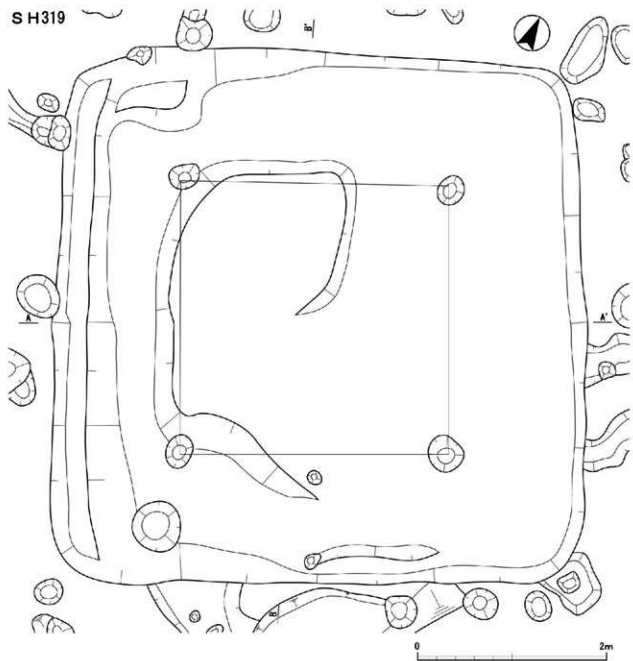
【C-C' 断面】  
1. 10YR2/2黒粘砂礫砂～シルト、しまりや中硬、粘液中

【A-A'・B-B' 断面】

1. 10YR3/2黒粘シルト～粘厚砂砂、粘性中
2. 10YR2/2黒粘シルト～粘厚砂砂、粘性中
3. 10YR3/2粘粘シルト～粘厚砂砂、10YR4/6硬シルト～黒粘粒砂ブロックを50%含む
4. (ピット掘出)

第137図 SH307 (1/40)

SH319



A A'



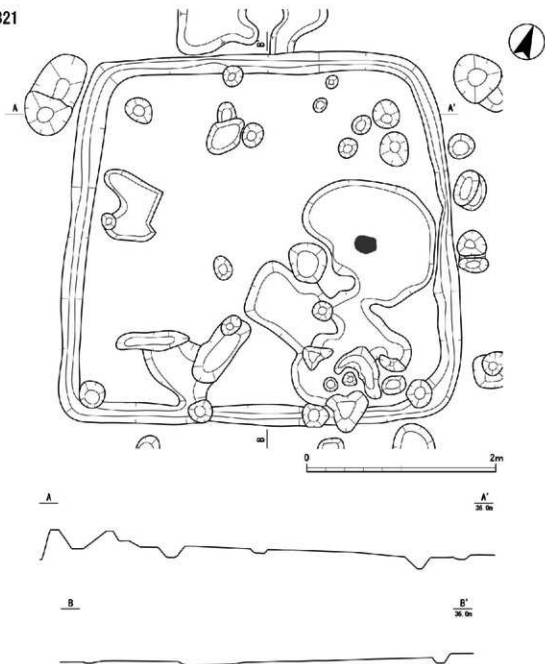
B B'



1. 10YR2/1 黒黄緑粘砂～シルト、しまり黄、粘性弱、～5mmの礫を少量含む
2. 10YR2/2 黒黄緑粘砂～シルト、しまりや中黄、粘性弱（微粉状土）
3. 10YR2/2 黒黄緑粘砂～シルト、10YR4/6 黄の砂をブロック状に30%含む、しまりや中黄、粘性弱
4. 10YR2/1 黒黄緑粘砂～シルト、10YR4/6 粘砂～黒粘砂をブロック状に30%含む、しまりや中黄、粘性弱
5. 10YR2/1 黒黄緑粘砂～シルト、10YR2/2 黒黄緑粘砂～シルトをブロック状に20%含む、しまり黄、粘性や中黄

第138図 SH319 (1/40)

S H321



第139図 S H321 (1/40)

S H321 (第139図) 第3次調査区の東側で検出された建物である。平面形は長軸4.1m、短軸3.9mの方形を呈するが、北西辺が3.3m、南東辺が4.2mと全体的に台形になっている。比較的小型の建物である。遺存状況は悪く、浅い落ち込みと壁隙溝を検出したのみで、建物内の埋土や貼床はほとんど遺存していなかった。

明確な支柱穴は検出できなかった。ただし、建物の四隅に近い位置にピットが存在しており、これが

建物の柱穴である可能性も考えられる。

建物中央よりやや東側の浅い落ち込み内から焼土が検出されているが、炉の痕跡が不明である。

貯蔵穴は検出されていない。貼床は削平などのために確認できず、周溝状掘形も明確ではない。壁隙溝は、途切れず全周する。

遺物は、埋土中や床面上から土師器が出土している。遺構の遺存状況が悪いこともあり、遺物の出土量はごく少量である。

遺物が少ないため時期の比定は困難であるが、床面上から出土した土師器壺（1783）を考慮すれば、遺構の時期は古墳時代前期初頭の可能性が高い。

**SH322（第140図）** 第3次調査区の東部で検出した建物である。S D329より後出する。北壁付近はかなり削平を被っており、遺存状態が悪い。そのため全体の形状は不明確であるが、長軸5.2m、短軸2.0m以上の正方形に近い方形を呈するものと思われる。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。

建物中央よりやや西側及びやや東側の床面から焼土が検出されており、いずれかが炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南東隅から検出された。平面形が隅丸方形に近い小型の土坑である。

壁際溝は検出されなかった。貼床は、建物内の北側及び東側で部分的に確認できた。東壁沿いでは浅い落ち込みが検出されており、その内部にも貼床と思われる土層が認められ（第5・6層）、周溝状掘形の一部と思われる。ただし、建物内の西側や南側では周溝状掘形は検出されず、一部のみに掘り込まれていた可能性が高い。

また、南側の壁面から細い溝が建物中央に向かって延びる。間仕切りなど、建物に伴う構造物の可能性が考えられる。

遺物は、貯蔵穴から土師器の高坏や器台の破片が出土している。埋土中からも土師器が出土した。遺物の出土量は少ないが、甕形壺の体部などがみられる。なお、土層の記録用に残したアゼを除去する際に釘状の鉄製品が1点出土しているが、形態から近世以降のものが混入した可能性が高い<sup>6)</sup>。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH323（第141図）** 第3次調査区の南東部で検出した建物である。SH169/324に先行し、それによって南半分が削平を被っている。そのため、全体の形状は不明確であるが、長軸5.4m、短軸2.6m以上の方形を呈するものと思われる。

主柱穴は残存している部分で2基検出された。建物の壁と平行するように配置されており、本来は4

基の主柱穴が方形に配置されていたものと考えられる。

遺存している部分では焼土は検出されず、炉の位置は不明である。貯蔵穴も検出されなかった。

壁際溝は北壁沿いで検出されているが、東・西壁沿いでは確認できなかった。

貼床は、建物が遺存している範囲全体で確認できた。周溝状掘形が建物の壁に沿って検出されており、この周溝状掘形を埋める形で貼床が厚く施されている。周溝状掘形内を埋めるように施された貼床と、それ以外の部分に施された貼床には、明瞭な土色や土質の差は認められなかった。

遺物は、埋土中から土師器が出土している。小片が多いが、かなりの部分が遺存する甕が認められる。また、縄文土器も少量出土した。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH331（第142図）** 第3次調査区の南部で検出した建物である。SH332より後出する。平面形は長軸5.4m、短軸5.2mの正方形に近い方形を呈する。深さが0.4mほどある部分もあり、全体的に遺存状態が良好であった。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。

焼土は検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、東隅から検出された。平面形が隅丸方形の小型の土坑である。底面は、中央部が若干深く掘り込まれている。埋土には、焼土粒のような赤褐色土が少量含まれていた。

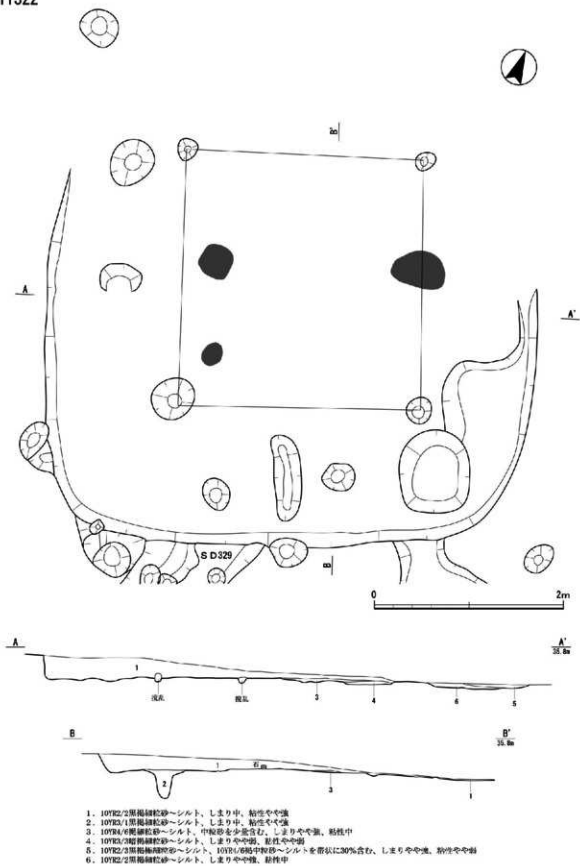
壁際溝は、四周の壁沿いから断続的に検出されている。ただし、南東壁沿いではごく一部でしか検出されていない。北東壁沿いでは、壁際溝の上面に一部かかる形で大型の台石が検出されている。

周溝状掘形は認められないが、建物中央付近がやや深く掘り込まれており、それを埋める形で貼床が施されている。

また、北西・南西・南東の各壁面では壁面と重複する形で小型のピットが複数検出されている。建物との新旧関係は不明であり、また、北東壁では検出されていない点や、各壁面で検出されたピットの数や位置にばらつきがある点などから当該建物との関

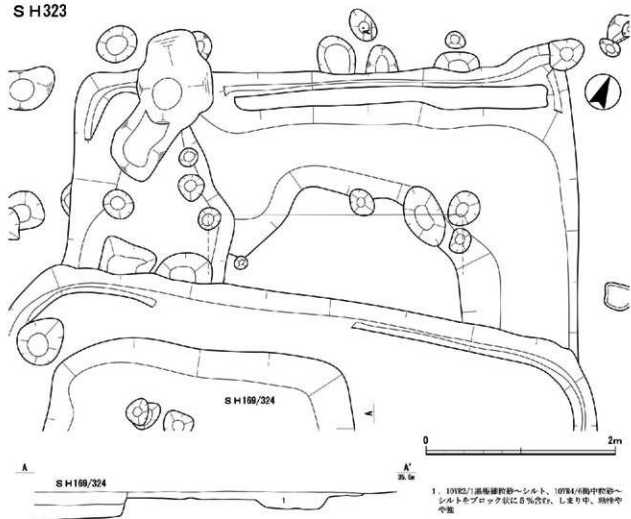


SH322



第140図 SH322 (1/40)

SH323



1. 10192/10194層相違検砂シルト、10194/4層中砂砂シルトをブロック状に5%含む、しまり中、特殊やや壁

第141図 SH323 (1/40)

係は不確実であるが、SH201の事例などを鑑みれば、建物の壁の構造と関係する壁柱穴の可能性も考えられよう。

遺物は、貯蔵穴から土師器高坏の坏片が出土している。埋土中や床面上からも土師器や台石が出土した。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH332 (第143図)** 第3次調査区の南部で検出した建物である。SH331に先行し、それによって西壁付近が大きく削平を被っている。また、SH331との重複箇所付近では、上面から中世の火葬土坑SX333も掘り込まれている。そのため、全体の形状は不明確であるが、長軸5.8m、短軸5.6m程度の正方形に近い方形を呈するものと思われる。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。

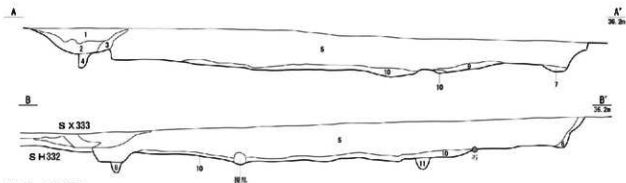
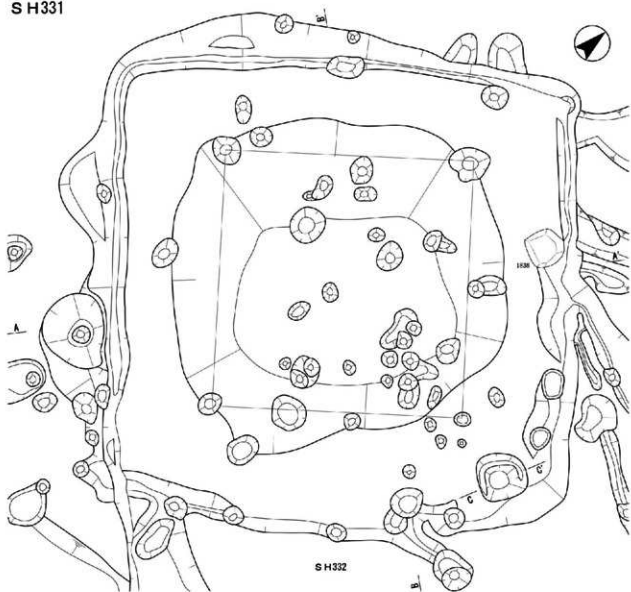
遺存している部分では焼土は検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南東隅付近と北東隅から検出された。南東隅付近のものは、平面形が不整形な楕円形の小型の土坑で、周囲は段状に浅く掘り込まれている。北東隅のものは、平面形が円形の小型の土坑である。底面付近から粘土塊が検出されている。

壁際溝は、東壁沿いと北壁沿いで検出された。南壁沿いでは検出されていない。東壁・北壁のいずれにおいても壁際溝は壁際だけでなく、やや内側からも検出されており、二重になっている。

貼床は、ほぼ建物内全体に施されている。南壁沿

S H331

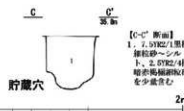


【A-A'・B-B' 断面】

1. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト, 10YR4/6褐中粒砂～シルトをブロック状に20%含む, しまり強, 粘性やや強
2. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト, 10YR4/6褐中粒砂～シルトをブロック状に5%含む, しまりやや強, 粘性やや強
3. 10YR3/3暗褐中粒砂～シルト, しまり中, 粘性中
4. 10YR3/1黒褐色細粒砂～シルト, 10YR4/6褐中粒砂～シルトをブロック状に20%含む, しまり中, 粘性やや強
5. 7.5YR1.7/1黒褐色細粒砂～シルト, 7.5YR3/3暗褐色細粒砂～シルトを塊状に20%含む, しまりやや強, 粘性やや強
6. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト, しまりやや強, 粘性中
7. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト, 10YR4/6褐中粒砂～シルトをブロック状に20%含む, しまり中, 粘性強
8. 10YR2/1黒褐色細粒砂～シルト, しまり中, 粘性やや強
9. 10YR3/1黒褐色細粒砂～シルト, 10YR4/2ないまぬ中粒砂～シルトを塊状に20%含む, しまり中, 粘性強
10. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト, しまりやや強, 粘性強
11. 10YR4/2灰黄褐色～細粒砂, しまり弱, 粘性弱

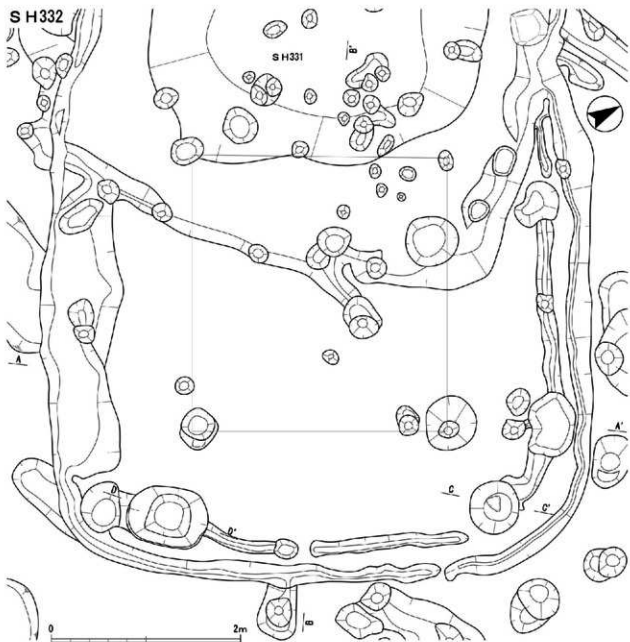
【C-C' 断面】

1. 7.5YR2/1黒褐色細粒砂～シルト, 2. 5YR2/2暗褐色細粒砂～シルトを少量含む



第142図 S H331 (1/40)

S H 332



A [A'-A'・B-B' 断面]  
 1. 10YR2/2黒炭燻染砂～シルト、しまりやや強、粘性中  
 2. 10YR2/1黒炭燻染砂～シルト、10YR4/6弱中粒砂～シルトをブロック状に20%含む、しまり中、粘性やや強

B  
 3. 10YR2/2黒炭燻染砂～シルト、10YR4/6弱中粒砂～シルトを塊状に10%含む、しまりやや強、粘性中  
 4. 10YR2/2黒炭燻染砂～シルト、10YR4/6弱中粒砂～シルトを塊状に30%含む、しまり中、粘性やや強  
 5. 10YR1/7/1黒炭燻染砂～シルト、しまりやや強、粘性中

S X 333  
 S H 331



貯蔵穴  
 [C-C' 断面]  
 1. 10YR2/2黒炭燻染砂～シルト、10YR4/6弱中粒砂～シルトを塊状に含む、しまり中、粘性やや強  
 2. 10YR1/7/1黒炭燻染砂～シルト、粘性中



貯蔵穴  
 [D-D' 断面]  
 1. 10YR1/7/1黒シルト～燻染砂  
 2. 10YR2/2黒炭燻染砂～シルトと10YR3/4弱中粒砂～シルトが混じり合う

6. 10YR1/7/1黒炭燻染砂～シルト、しまり中、粘性中  
 7. 10YR2/1黒炭燻染砂～シルト、10YR4/6弱中粒砂～シルトをブロック状に30%含む、しまりやや強、粘性中  
 8. 10YR2/2黒炭燻染砂～シルト、10YR4/6弱中粒砂～シルトをブロック状に20%含む、しまり中、粘性やや強  
 9. 10YR3/1黒炭燻染砂～シルト、10YR4/6弱中粒砂～シルトを30%含む、しまり中、粘性やや強

第143図 SH332 (1/40)

いでは周溝状掘形が検出されており、土層断面からみると北壁や東壁沿いにも周溝状掘形が存在することが窺われ、貼床はこの周溝状掘形を埋める形で厚く施されている。

なお、壁際溝は二重になっているが、土層断面からみると内側の壁際溝は周溝状掘形によって一部削平を被っているようである（A-A'・B-B'断面第7・9層）。主柱穴についても、南東隅のものは2基のピットが重複したような形態を示しており、北東隅のものもかなり掘形が大きい。さらに、貯蔵穴とみられる土坑が2基存在することも鑑みれば、建物の建て替えが行われ、その際に規模が若干拡張された可能性が高い。

遺物は、南東隅貯蔵穴から土師器と磨石が出土している。また、北東隅貯蔵穴からは粘土塊が出土した。埋土中からも土師器が出土しているが、小片が多い。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**S H337 (第144図)** 第3次調査区の東部で検出した建物である。遺存状況が悪く、北東隅付近は削平を被っている。平面形は長軸5.6m、短軸5.5mのほぼ正方形を呈するが、北壁と南壁が平行せず、やや不整形な方形となっている。

主柱穴は4基検出された。建物の北壁と西壁に沿ってほぼ正方形に配置されている。

焼土は検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅と、そのやや東側から検出された。南西隅のものは、平面形が円形の小型の土坑で、深さは0.3mほどある。その東側で検出されたものは、平面形が不整形な円形のピット状の小型のもので、深さも0.2mとかなり浅く、貯蔵穴ではない可能性もある。

壁際溝はほぼ全周するが、北西隅付近と削平を被っている北東隅付近では検出されなかった。

貼床は、床面の大部分に施されていた可能性が高い。土層断面からみると、南壁付近では落ち込み状のものが確認できるため（A-A'・B-B'断面第2層）、部分的に周溝状掘形が存在し、その部分を中心に貼床が施されていたものと思われる。この貼床内からは、南壁沿いの壁際溝との境付近で大型の礫が検出

されている。

なお、南西隅の貯蔵穴の調査時に、貯蔵穴埋土上面を被覆するように堆積した土層が貼床と推測された。これが貼床であれば、建て替えないし改修が行われていた可能性もある。

遺物は、埋土中から土師器が出土している。遺構の遺存状況が悪いこともあって、遺物の出土量は比較的少ないものの、完形に近い壺や甕が数個体出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

**S H338 (第145図)** 第3次調査区の東部で検出した建物である。平面形は長軸5.0m、短軸4.8mの正方形に近い方形を呈する。深さが0.4mほどある部分もあり、全体的に遺存状況が良好であった。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。

建物中央よりやや西側で、掘形底面の地山が広い範囲にわたって被熱している状況が認められ、この付近に炉が存在したと考えられる。

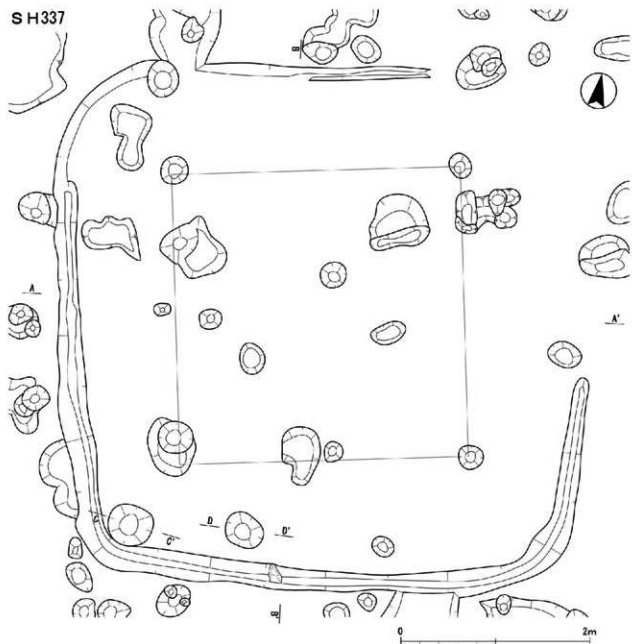
貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅付近から検出された。平面形が円形の小型の土坑である。

壁際溝は、掘削時の記録によればほぼ全周するものと思われる。土層断面からみて、その可能性が高い。

床面では不整形な周溝状掘形が建物の壁に沿って検出されており、貼床はこの部分を中心に施されている。この周溝状掘形の底面からは、幅15cm前後の楕円形ないし隅丸方形を呈するような浅い窪みが多数検出されている。窪み内はブロック土を顕著に含む貼床と思われる土で充填されていた。また、こうした窪みが比較的整然と並ぶような箇所も認められる。この建物は地山が堅く締まった箇所位置しており、窪みは堅穴掘削時の土木具による掘削痕と推定される。特に建物内東側で多く検出されているが、明瞭に輪部を検出することが困難であったものの西側でも多数確認されている。本来は周溝状掘形の底面は全体にわたって掘削時の凹凸が激しく、それを埋めるように貼床を施すことによって建物の床面が整えられたと考えられる。

床面からは、西壁中央付近で壁に接するように大

SH337



貯蔵穴

【C-C' 断面】

1. 10YR1.7/1黒シルト～粘層状砂 (底層)
2. 10YR2.1黒シルト～粘層状砂



貯蔵穴

【D-D' 断面】

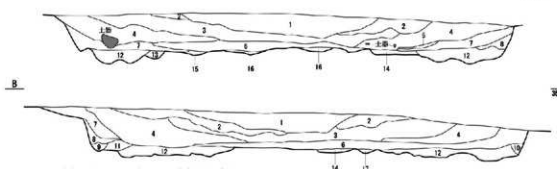
1. 10YR1.7/1黒シルト～粘層状砂
2. 10YR5.2黄緑シルト～粘層状砂, 10YR3/3 暗黒シルト～粘層状砂を一混合層

【A-A'・B-B' 断面】

1. 10YR2.1黒シルト～粘層状砂
2. 10YR2.3黒褐シルト～粘層状砂
3. 10YR4.0褐シルト～粘層状砂
4. 10YR1.7/1黒シルト～粘層状砂
5. 10YR2.2黒褐シルト～粘層状砂と10YR5.6黄褐色シルト～粘層状砂が混じり合う
6. 10YR2.2黒褐シルト～粘層状砂
7. 10YR4.2/2.5黄褐シルト～粘層状砂
8. 10YR1.7/1黒シルト～粘層状砂
9. 10YR2.2黒褐シルト～粘層状砂

第144図 SH337 (1/40)

S H338



1. 10YR1.7/1基シルト～細粒砂、10YR2/3黒層シルト～粗粒砂が多く混じる
2. 10YR2/2黒層シルト～粗粒砂
3. 10YR2/3黒層シルト～粗粒砂
4. 10YR2/2黒層シルト～粗粒砂と10YR5.0黄層シルト～粗粒砂が混じり合う
5. 10YR3/3黒層シルト～粗粒砂等、粘土が多く混じる
6. 10YR2/2黒層シルト～粗粒砂と10YR3/4暗層シルト～粗粒砂が混じり合う
7. 10YR1.7/1基シルト～粗粒砂
8. 10YR2/2黒層シルト～粗粒砂と10YR3/4暗層シルト～粗粒砂が混じり合う
9. 10YR5.0黄層シルト～粗粒砂
10. 10YR2/3黒層シルト～粗粒砂と10YR2/2黒層シルト～粗粒砂が混じり合う
11. 10YR2/2黒層シルト～粗粒砂と10YR5.0黄層シルト～粗粒砂が混じり合う
12. 10YR5.0黄層シルト～粗粒砂と10YR2/2黒層シルト～粗粒砂が混じり合う (局部)
13. 10YR5.0/4に、5Y黄層シルト～粗粒砂と10YR2/3黒層シルト～粗粒砂が混じり合う
14. 10YR1.7/1基シルト～粗粒砂と10YR4/4黒層シルト～粗粒砂と10YR5.0黄層シルト～粗粒砂が混じり合う
15. 10YR2/1黒層シルト～粗粒砂
16. 10YR2/2黒層シルト～粗粒砂と10YR5.0黄層シルト～粗粒砂が混じり合う
17. 10YR2/2黒層シルト～粗粒砂

第145図 S H338 (1/40)

型の台石が検出された。また、南東隅付近でも、南壁に近い箇所から大型の礎が検出されている。

遺物は、埋土中や床面上から土師器や台石が出土している。土師器は多量に出土しており、赤彩されたいわゆるパレススタイル壺をはじめとする加飾された大型壺が数個体認められる他、甕や高坏にも遺存状況が良好なものがみられる。また、縄文時代のものと考えられる打製石斧も出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH339 (第146図)** 第3次調査区の北部で検出された建物である。縄文時代の竪穴建物SH344とほぼ全体が重複している。平面形は長軸5.7m、短軸5.6mの方形に近い方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。

焼土は検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅付近から検出された。平面形が不整形な楕円形の小型の土坑である。埋土下層からは土器片が複数出土した。

壁際溝は全周する。貼床は、ほぼ建物全体に施されており、SH344の埋土上面にも貼床が施されている。周溝状掘形は検出されなかった。

遺物は、貯蔵穴から土師器がまとめて出土している。ほぼ完形の高坏が2個体存在する他、台付甕の脚台部片などが複数認められる。埋土中や床面上からも土師器が出土した。甕の破片が目立つ。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH346 (第147図)** 第3次調査区の南西部で検出した建物である。平面形は長軸5.1m、短軸4.9mの正方形に近い方形を呈する。西半部は一次調査T10で検出されており、一部にその痕跡が残る。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。北西隅の柱穴は鎌倉時代の火葬土坑SX351内で検出された。

建物中央よりやや西側の床面から焼土が検出されており、また、この焼土の南側に隣接して小規模な土手状の土の盛り上がりが見出されている。おそらく、炉の痕跡と考えられる。なお、さらに西側の壁付近からも焼土及びピットが検出されたが、ピット

はかなり小さなもので、炉の痕跡の可能性は低いと思われる。

貯蔵穴とみられる土坑は南西隅から検出された。平面形が不整形な楕円形の小型の土坑で、深さは0.4mほどある。

壁際溝は全周する。貼床は確認できず、周溝状掘形も検出されなかった。

遺物は、埋土中から土師器が出土している。出土量はごく少量である。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH347 (第148図)** 第3次調査区の南西部で検出した建物である。SH350より後出する。平面形は長軸6.2m、短軸5.7mの方形を呈する

主柱穴は4基検出された。建物の北壁と西壁に沿ってほぼ正方形に配置されている。西隅の主柱穴のみ大きい。SH350の主柱穴と重複しているためとみられる。

建物中央よりやや南側と北東側の2箇所の床面から焼土が検出されているが、北東側のものは浅い掘り込みを伴っており、これが炉と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、東隅付近から検出された。平面形が不整形な円形の小型の土坑で、深さは0.4mほどある。これとは別に、南東壁沿いに2基の不整形な土坑が接続したようなものが検出されているが、深さは0.2mほどと浅いため貯蔵穴とは考えにくく、周溝状掘形の一部である可能性が高い。

壁際溝は、調査時には平面的に検出することができなかったが、土層断面からみるといずれの壁沿いにも壁際溝が掘り込まれていたと考えられる。

床面からは壁に沿って幅広の周溝状掘形が検出されており、この周溝状掘形を埋める形で貼床が厚く施されていた。ただし、周溝状掘形より内側についてはごく一部の窪みを埋めるように施されているのみである。

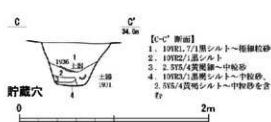
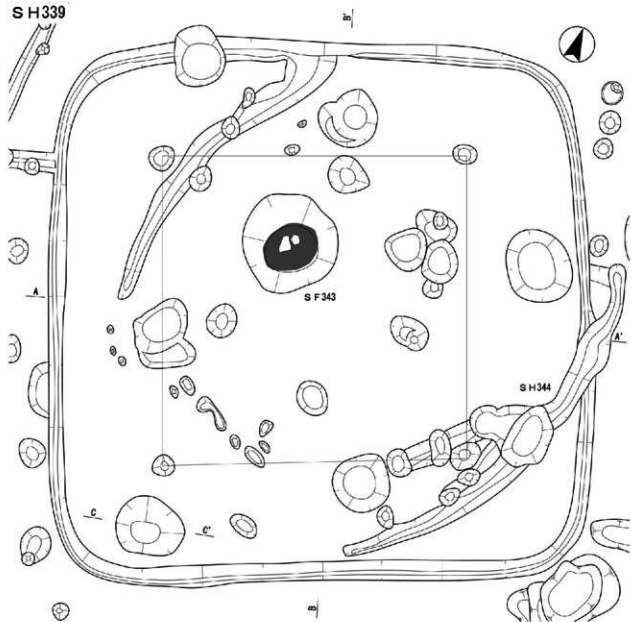
北東壁沿いでは、床面直上で大型の礎が検出されている。

遺物は、主柱穴P1から遺存状況が良好な土師器器台が1点出土している。埋土中や床面から検出されたピットからも土師器や台石が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初



S H 339



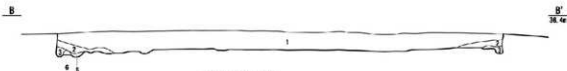
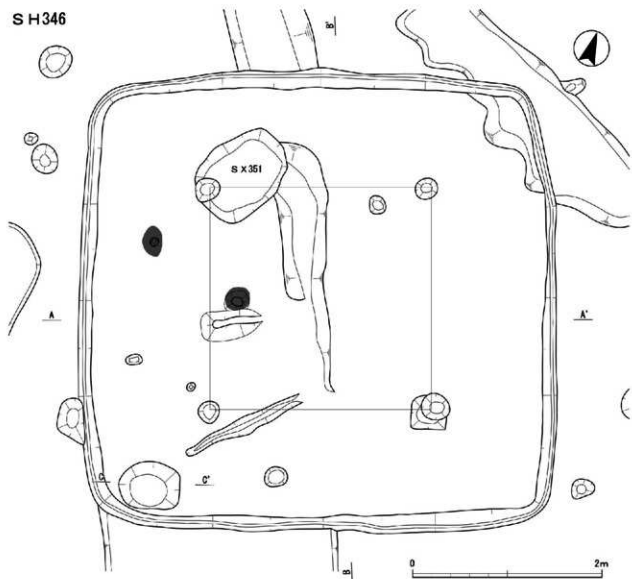
- 【C-C' 断面】
1. 10YR1.7/1黒シルト～極細粒砂
  2. 10YR2/1黒シルト
  3. 2.5Y5.4黄褐色～中粒砂
  4. 10YR3/1黄褐色シルト～中粒砂
  5. 5Y5.4黄褐色シルト～中粒砂を含む

【A-A'・B-B' 断面】

1. 10YR1.7/1黒シルト～極細粒砂 (S H339)
2. 10YR2/1黒シルト～極細粒砂 (S H339)
3. 10YR5/4黄褐色と10YR1.7/1黒シルト～極細粒砂が混じり合う (S H339)
4. 10YR2/1黒シルト～極細粒砂、部分的に10YR5/4黄褐色と10YR1.7/1黒シルト～極細粒砂が混じり合う (S H339)
5. 10YR3/1黄褐色シルト～極細粒砂 (S H340)
6. 10YR3/1黄褐色シルト～極細粒砂 (S H344)
7. 10YR3/1黄褐色シルト～極細粒砂 (S H344)
8. 10YR3/1黄褐色シルト～極細粒砂 (S H344)
9. 10YR4/2に2.5Y5.4黄褐色シルト～中粒砂 (S H344)
10. 10YR4/2に2.5Y5.4黄褐色と10YR3/1黄褐色シルト～極細粒砂が混じり合う (S H344)
11. 10YR6/8に2.5Y5.4黄褐色シルト～中粒砂 (S H344)

第146図 S H 339 (1/40)

SH346



貯蔵穴

【C-C' 断面】

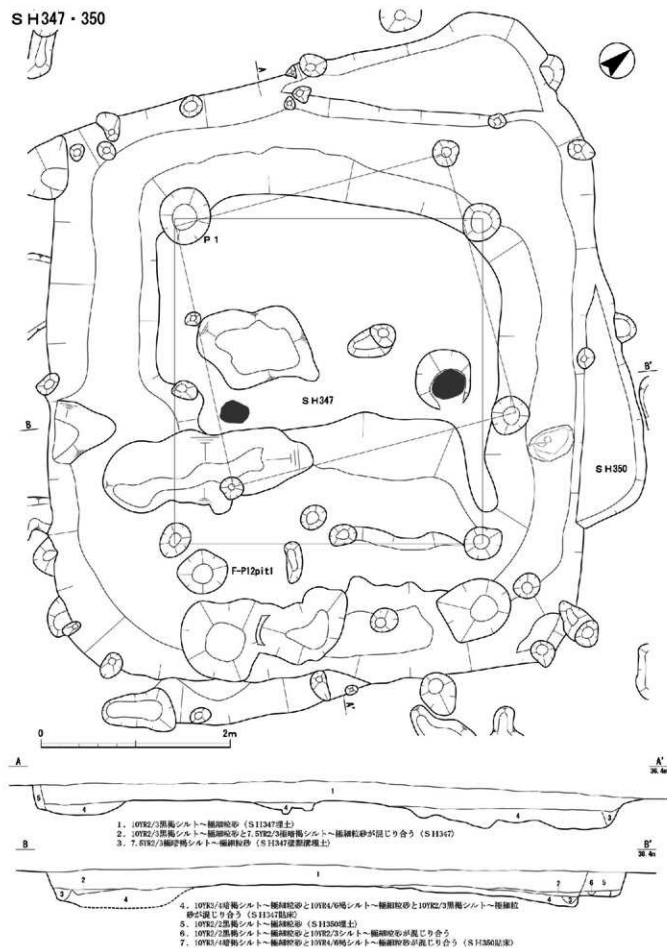
1. 10YR2/2黒褐シルト～黒細砂

【A-A'・B-B' 断面】

1. 10YR5/2黒地帯赤細砂～シルト、10YR4/4黒細砂～シルトを底状に5%含む、しまり強、粘性やや強、～8mmの礫を少量含む
2. 10YR2/2黒地帯赤細砂～シルト、しまり強、粘性中、～5mmの礫を少量含む
3. 10YR3/1黒地帯赤細砂～シルト、10YR4/4黒細砂～シルトを底状に20%含む、しまりやや強、粘性やや強、～5mmの礫を少量含む（底層部ほど）
4. 7.5YR4/3鈍赤～黒細砂、しまり強、粘性やや強、～3mmの礫を少量含む
5. 10YR2/2黒地帯赤細砂～シルト、10YR4/4黒細砂～シルトを底状に30%含む、しまりやや強、粘性やや強
6. 10YR3/1黒地帯赤細砂～シルト、10YR4/4黒細砂～シルトを底状に20%含む、しまりやや強、粘性やや強、～3mmの礫を少量含む

第147図 SH346 (1/40)

S H347・350



第148図 SH347・350 (1/40)

頭と考えられる。

**SH349 (第149図)** 第3次調査区の南西部の第2次調査区との境で検出した建物である。南東隅のごく一部のみが第2次調査区内で検出されたが、第3次調査ではこの部分の調査区を若干拡張し、改めて精査している。平面形は長軸5.3m、短軸5.2mの正方形に近い方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。

建物中央や、中央よりやや南側の床面から焼土が検出されており、炉の痕跡と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南東隅付近から検出された。平面形が不整形な円形の小型の土坑である。

壁際溝は検出されず、土層断面でも確認できない。貼床は、調査時には確認されておらず、周溝状掘形も検出されなかったが、土層断面からみると壁に沿って浅い周溝状掘形が存在し、その部分を中心に貼床が施されているものと考えられる (A-A'・B-B' 断面第2層)。建物中央付近には貼床は施されていない。

西壁付近の床面からは、多数の炭化材が検出されている。スダジイ及びツブラジイ材で、建物の構築材として用いられていたものと思われる、また、炭化材と共にイネ科植物や広葉樹樹皮の炭化物が検出されており、屋根材として使用されていたものと考えられる (第Ⅷ章第9節)。こうした点から、当該建物は焼失建物である可能性が高い。

遺物は、貯蔵穴から土師器壺と高坏の破片が出土している。埋土中からも土師器が出土した。小片が多いが、壺の大きな破片などもみられる。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH350 (第148図)** 第3次調査区の南西部で検出した建物である。SH347に先行し、それによって大きく削平を被っており、北西隅付近と北東隅付近が遺存するのみである。そのため全体の形状が不明確であるが、平面形は長軸5.5mほどの方形を呈するものと思われる。

主柱穴は3基検出された。南西隅の主柱穴はSH347の主柱穴と重複しているとみられ、本来は4基の主柱穴が建物の西壁と北壁に沿ってほぼ正方形に

配置されていたと考えられる。

床面がほとんど遺存していないため、炉の痕跡は確認できなかった。

貯蔵穴も明確には確認できなかったが、SH347の南隅主柱穴のすぐ東側で深さ0.3mほどのピット (F-P12Pi1) が検出されており、SH350の南東隅付近にあたるかと推測されることから、これが当該建物の貯蔵穴である可能性が高い。

壁際溝は遺存している範囲では検出されなかった。貼床は、土層断面で存在が確認できる (第7層)。

遺物は、埋土中から土師器が出土している。遺構の遺存状況が悪いこともあり、遺物の出土量はごく少量である。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH353 (第150図)** 第3次調査区の南西部で検出した建物である。平面形は長軸6.8m、短軸6.6mの正方形に近い方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。西隅及び南隅の主柱穴は2基の柱穴が重複しているようで、建物の建て替えなし、柱の抜き取りがあった可能性を示している。ただし、この2基の主柱穴以外に建て替えを示すような痕跡は確認できない。

焼土は検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、東隅付近から検出された。平面形が不整形な楕円形の小型の土坑である。周囲は浅く一段掘り窪められており、有機質の蓋などが存在した可能性も考えられる。

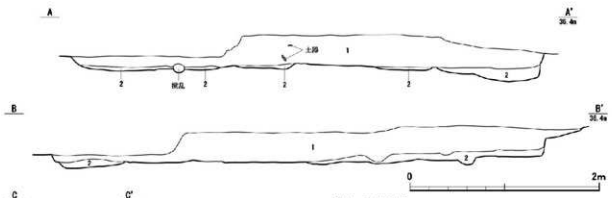
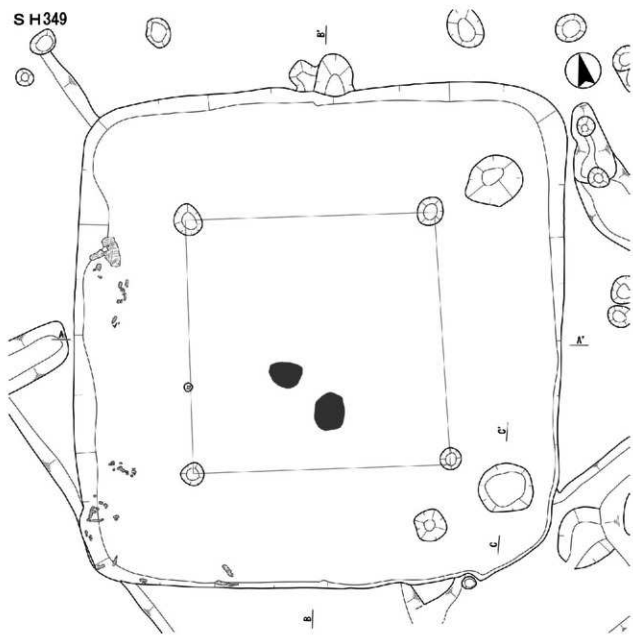
壁際溝は全周する。貼床は部分的に施されていると考えられる (A-A'・B-B' 断面第7層)<sup>7)</sup>。周溝状掘形は検出されなかった。

遺物は、主柱穴P1から土師器が出土している。埋土中からも土師器や磁石が出土した。遺物は比較的多量に出土しているが、小片が多い。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH354 (第151図)** 第3次調査区の北部で検出した建物である。縄文時代の竪穴建物SH355と一部重複している。北東隅付近が削平を被っているものの、ほぼ全体が遺存しており、平面形は長軸・短軸

SH349

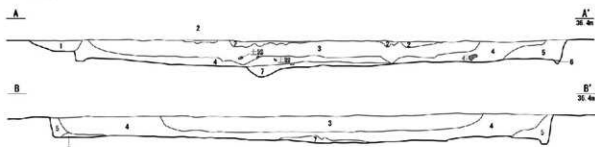
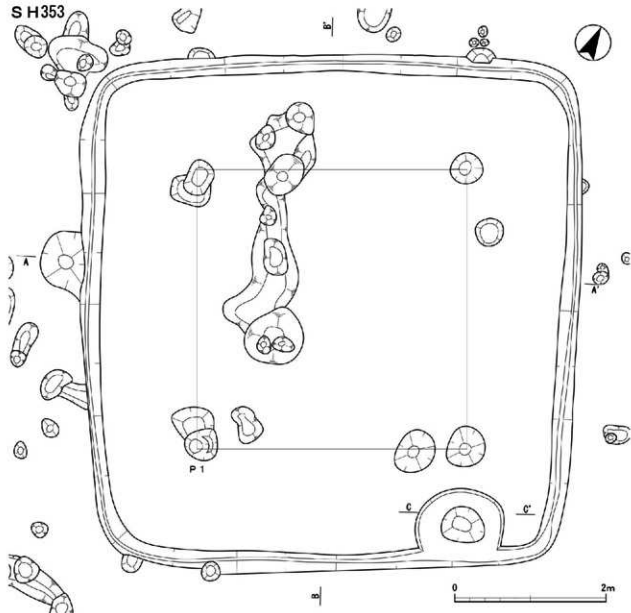


【C-C' 断面】  
 1. 10YR2/3弱粘シルト～細粒砂，しまり強，粘性强  
 2. 10YR1/5粘シルト～細粒砂，しまり強，粘性强

【A-A'・B-B' 断面】  
 1. 10YR2/3弱粘シルト～細粒砂，5YR3/4中細粒砂を一帯層状に少量含む（鉄分沈着マ），しまり強，粘性强  
 2. 10YR1/5粘シルト～細粒砂，増山ブロックを25%含む，しまり強，粘性强

第149図 SH349 (1/40)

SH353



【C-C' 断面】

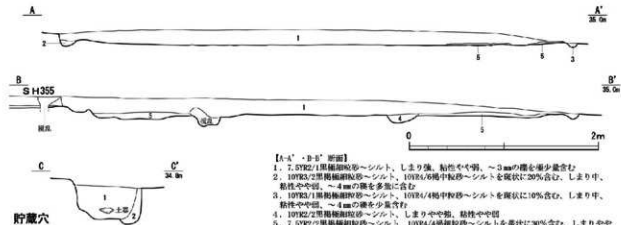
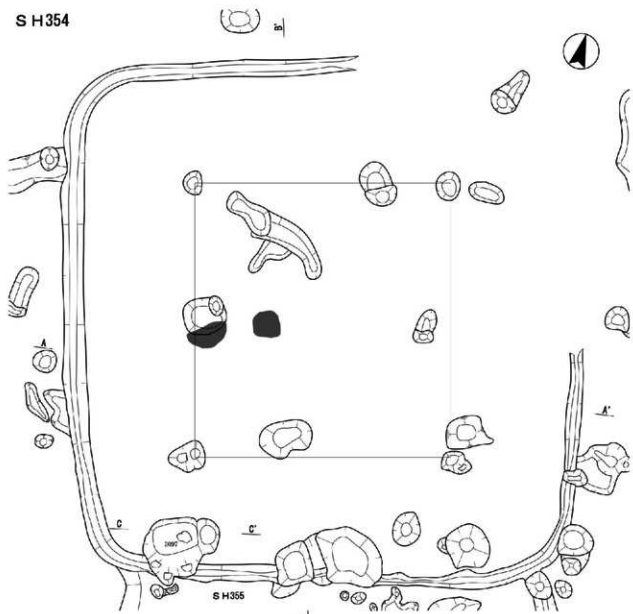
1. 10YR2/3赤褐色シルト～細粒砂
2. 10YR2/3赤褐色シルト～細粒砂と  
10YR2/4暗褐色シルト～細粒砂が混じり合う
3. 10YR3/0暗褐色シルト～細粒砂
4. 10YR3/0暗褐色シルト～細粒砂と  
10YR2/4黄褐色シルト～細粒砂が混じり合う

【A-A'・B-B' 断面】

1. 10YR2/3赤褐色シルト～細粒砂と10YR2/5黒褐色シルト～細粒砂が混じり合う
2. 10YR2/2黄褐色シルト～細粒砂
3. 10YR1.7/1黒シルト～細粒砂
4. 10YR2/2黄褐色シルト～細粒砂と10YR3/4暗褐色シルト～細粒砂が混じり合う
5. 10YR2/3暗褐色シルト～細粒砂
6. 土層に定規跡なし
7. 10YR4/4黄シルト～細粒砂

第150図 SH353 (1/50, 1/40)

S H 354



- 【A-A' - B-B' 断面】
1. 2.5YR2/1黒褐色細砂～シルト、しまり強、粘性やや弱、～3mmの礫を極少量含む
  2. 10YR3/2黒褐色細砂～シルト、10YR4/6褐中粒砂～シルトを層状に20%含む、しまり中、粘性やや弱、～4mmの礫を多量に含む
  3. 10YR2/1黒褐色細砂～シルト、10YR4/4褐中粒砂～シルトを層状に10%含む、しまり中、粘性やや弱、～4mmの礫を少量含む
  4. 10YR2/2黒褐色細砂～シルト、しまりやや弱、粘性やや弱
  5. 2.5YR2/2黒褐色細砂～シルト、10YR4/4褐中粒砂～シルトを層状に30%含む、しまりやや強、粘性やや弱（塩漬）

貯蔵穴

- 【C-C' 断面】
1. 10YR2/2黒褐色細砂～シルト、しまり強、粘性やや弱
  2. 10YR3/1黒褐色細砂～シルト、10YR4/4褐中粒砂～シルトをブロック状に10%含む

第151図 S H 354 (1/40)

ともに5.5mの正方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。南西隅及び南東隅の主柱穴は掘形が不整形で壁面が段をなしており、建物の建て替えないし、柱の抜き取りがあった可能性を示している。ただし、この2基の主柱穴以外に建て替えを示すような痕跡は確認できない。

建物中央よりやや西側の浅い土坑状の遺構の付近で焼土が検出されており、炉と考えられる。

貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅付近から検出された。平面形が不整形な円形の小型の土坑で、SH355の主柱穴と重複している（C-C'断面第2層）。一部が建物南壁の外側まで及んでいるが、この土坑の南壁は非常に不整形で、埋没前に崩落した可能性が高い。埋土下層からは土器片が出土した。

壁際溝は、削平により失われている北東隅付近を除いて全周する。

貼床は、部分的に確認された。周溝状掘形は調査時には検出されなかったが、土層断面からみると南壁付近には周溝状掘形が存在するようで、この部分に厚く貼床が施されている（A-A'・B-B'断面第5層）。また、東壁や北壁付近でも貼床が施されているが、建物中央部では確認できない。

遺物は、貯蔵穴から土師器や磁石が出土している。土師器には、ほぼ全形が復元できる小型の壺や、高坏の坏片が認められる。埋土中からも土師器や磨石が出土した。遺物の出土量は少ないが、やや特殊な器形の高坏などが認められる。また、縄文土器も少量出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH356（第152図）** 第3次調査区の北部で検出した建物である。平面形は長軸5.1m、短軸5.0mの正方形に近い方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。

焼土は検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は南西隅付近から検出された。平面形が不整形な楕円形の小型の土坑である。

壁際溝は検出されず、土層断面でも確認できない。貼床は調査時には確認されておらず、土層断面でも

明確ではないが、床面上に薄く広がる土層の存在は確認でき（A-A'・B-B'断面第2層）、これが貼床の可能性も考えられる。

南壁沿いの床面直上からは、土師器高坏の坏部（2114）が口縁部を下にして伏せた状態で出土した。

遺物は、埋土中や床面上から土師器が出土している。先述の高坏坏部以外は小片で、出土量も少ない。出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH357（第153図）** 第3次調査区の中央部で検出した建物である。平面形は長軸5.1m、短軸5.0mの正方形に近い方形を呈する。深さが0.4mほどある部分もあり、全体的に遺存状態が良好であった。

明確な主柱穴は検出できなかった。炉やそれに伴う焼土、貯蔵穴、壁際溝も検出されていない。

貼床も確認できなかった。ただ、調査時に掘乱と判断された床面の不整形な落ち込みの埋土上面に、薄く黄褐色の土層が堆積している状況が、調査時の写真で確認できる。この黄褐色土層が貼床である可能性も考えられる。

このように、遺存状態が良好であるにもかかわらず、各種施設がほとんど確認できなかった点からは、この建物が他の堅穴建物とは性格や構造を異にしていた可能性も考えられよう。

遺物は、埋土中から土師器が出土している。甕や高坏の大きな破片がわずかに認められる。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SH359（第154図）** 第3次調査区の北西部で検出された建物である。北東隅付近が削平を被っているが、北壁・東壁ともにわずかに遺存しており、平面形は長軸4.8m、短軸4.6mほどの正方形に近い方形を呈するものと思われる。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。

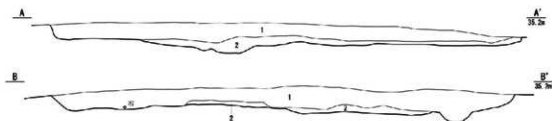
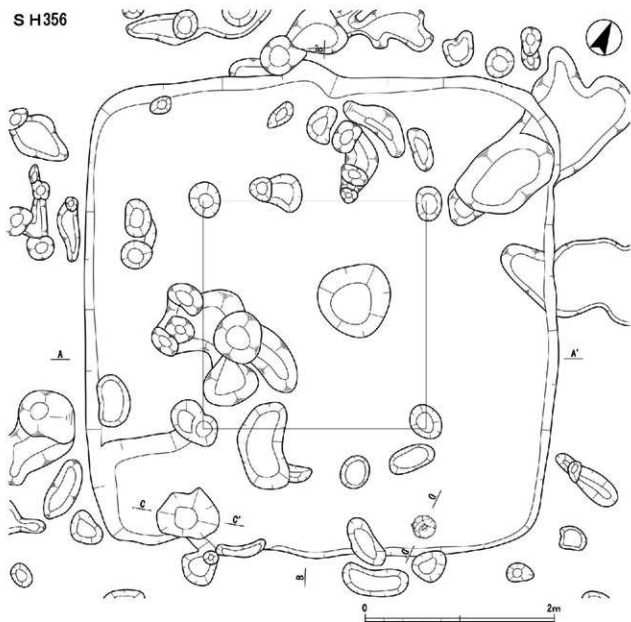
焼土は検出されず、炉の位置は不明である。

貯蔵穴とみられる土坑は、南西隅付近から検出された。平面形が不整形な楕円形の小型の土坑である。埋土上層からは土師器が出土した。

壁際溝は、削平や掘乱によって失われた部分を除き、全周する。



S H356



【C-C' 断面】

1. 10YR1.7/1黒シルト～粘層砂
2. 10YR1.6/1黒シルト～粘層砂
3. 10YR1.7/1黒シルト～粘層砂



遺物出土状況

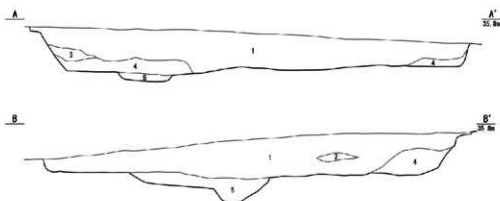
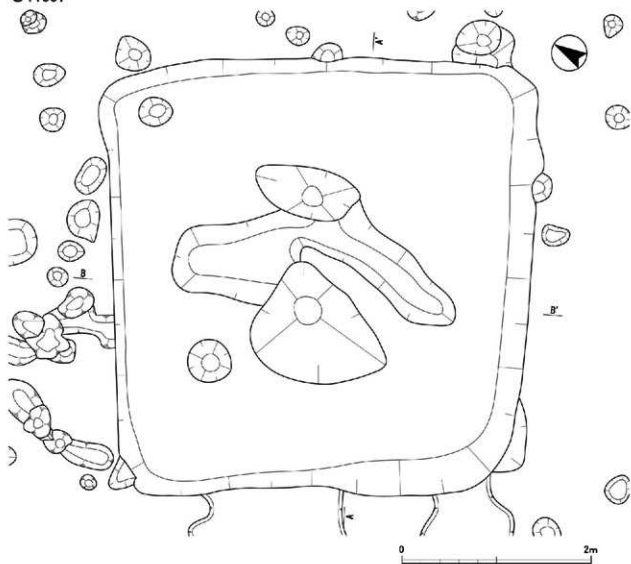


【A-A'・B-B' 断面】

1. 10YR1.7/1黒シルト～粘層砂
2. 10YR2/2黒粘シルト～粘層砂

第152図 S H356 (1/40, 1/20)

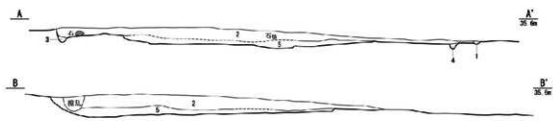
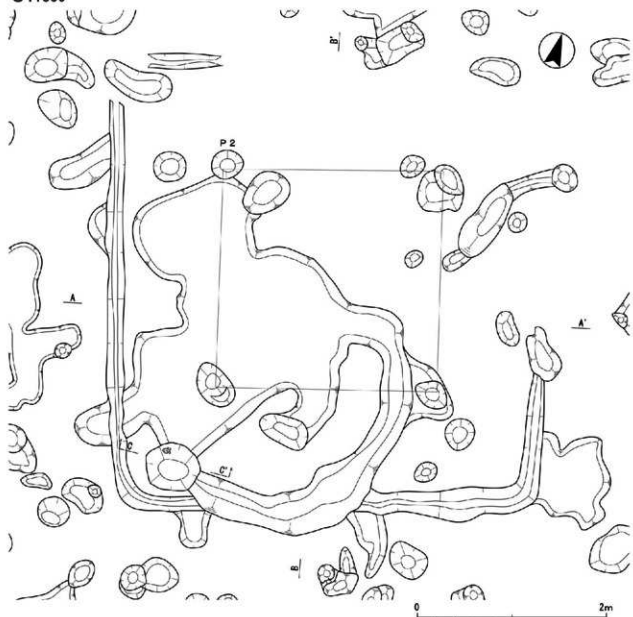
S H357



1. 10YR2/2品地シルト～粘層砂
2. 10YR2/3品地シルト～粘層砂
3. 10YR2/2品地シルト～粘層砂と10YR2/2黒褐色シルト～粘層砂が混じり合う
4. 10YR3/4暗地シルト～粘層砂と10YR4/3(2.5)黄地シルト～粘層砂が混じり合う
5. 10YR1, 7/1黒シルト～粘層砂

第153図 S H357 (1/40)

SH359



貯蔵穴

[c-c' 断面]  
1. 10YR2/2黒褐色シルト～埋藏粒砂

- 【A-A'・B-B' 断面】
1. 10YR2/4暗褐色シルト～埋藏粒砂 (埋藏溝埋土)
  2. 10YR1.7/1黒シルト～埋藏粒砂
  3. 10YR2/2黒褐色シルト～埋藏粒砂 (埋藏溝埋土)
  4. 土層注記記録なし
  5. 土層注記記録なし (覆土層?)

第154図 SH359 (1/40)

貼床は確認できなかった。周溝状掘形も検出されていない。ただ、床面から不整形な落ち込みが検出され、攪乱と判断されているが、一部は建物の掘形とも考えられ、その部分には貼床が施されていた可能性もある。

遺物は、主柱穴P2から土師器高坏の坏部片が出土している。貯蔵穴の埋土中からは、土師器台付甕やS字状口縁甕の脚台部片が出土した。埋土中からも土師器が出土しているが、出土量は少なく、いずれも小片である。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

## (2) 掘立柱建物・柱列

**SB141 (第155図)** 第2次調査区の東端で検出した側柱建物である。

桁行が3間で3.6m、梁行は2間で3.2mであり、平面形は長方形を呈する。柱間は梁側で1.6mあるのに対して、桁側は1.2m前後とやや狭い。いずれの柱穴も小型である。P2では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。

遺物は、P1・2から土師器甕の小片が出土している。

出土遺物が僅少のため、遺物から時期を判断することは困難であるが、出土遺物や柱配置、周辺の遺構の状況などからみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭～前葉である可能性が高い。

**SB152 (第155図)** 第2次調査区の北東部で検出した側柱建物である。SB160と一部重複している。

桁行が2間で3.3m、梁行は2間で3.1mであり、平面形は正方形に近い方形を呈する。ただし、南東側の梁行では梁間の柱穴が検出できなかった。柱間は桁側・梁側ともに1.6m前後である。いずれの柱穴も比較的小型である。

遺物は、P1から土師器甕の破片が少量出土しているが、小片のため図化できなかった。S字状口縁甕の破片と思われる。

出土遺物が僅少のため、遺物から時期を判断することは困難であるが、出土遺物や柱配置、周辺の遺構の状況などからみて、遺構の時期は古墳時代前期である可能性が高い。

**SB155 (第156図)** 第2次調査区及び第3次調査区の東部で検出した側柱建物と考えられるものである。第2次調査で東半部が調査され、第3次調査で西半部が調査された。

第2次調査で検出された梁行部分では1.7mほどの間隔で3基の柱穴が確認されたため、梁行2間の建物と考えて調査を行ったが、第3次調査では隅柱の柱穴とも思われる浅いビットが検出されたのみで、梁行・桁行ともに間柱にあたる柱穴は確認できなかった。また、北西隅の柱穴については攪乱の可能性もある。そのため、確実に掘立柱建物とは断定できない。掘立柱建物とすれば、桁行3.8m、梁行3.4mの平面形が正方形に近い方形を呈する建物である。

遺物は、柱穴にあたるF-Y7Pit5とF-Y7Pit7から土師器甕の破片が出土しているが、いずれも小片ため図化できなかった。

出土遺物が僅少のため、遺物から時期を判断することは困難であるが、出土遺物や柱配置、周辺の遺構の状況などからみて、遺構の時期は古墳時代前期である可能性が高い。

**SB156 (第157図)** 第2次調査区の東部で検出した側柱建物である。SH190及びSB157と一部重複している。

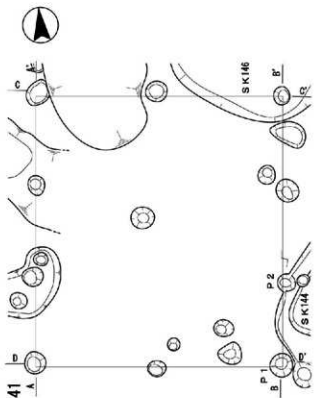
桁行が3間で4.9m、梁行は1間で3.4mであり、平面形は長方形を呈する。北西隅の柱穴は攪乱とも考えられる溝状遺構によって削平を被っているが、溝状遺構底面で柱穴の痕跡と思われる浅い小型のビットを検出した。桁側の柱間は1.4～1.8mと不統一で、特に西側では不均等である。

また、南側の梁間の中央外側でビット(P1)が検出されており、土層断面では柱が立てられていたものと思われる。そのため、これが棟持柱となる可能性もある。建物北側ではこれに対応するような柱穴は確認できなかったが、調査時には攪乱と判断したビット状のものが該当箇所存在しており、これが北側の棟持柱の痕跡である可能性も考えられる。

遺物は、P1から土師器が出土している。台付甕の脚台部片であるが、細片で図化できなかった。

出土遺物が僅少のため、遺物から時期を判断することは困難であるが、柱配置や周辺の遺構の状況な

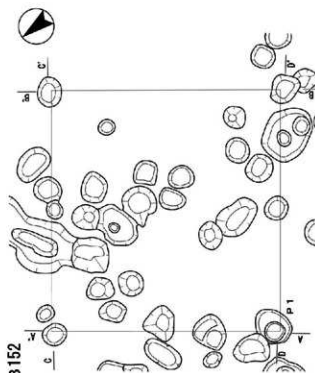
SB141



1. 1972.2-0.2m深部掘削-シルト、L.S.P.が少量、磁鉄石
2. 1972.2-0.2m深部-砂質泥炭砂-シルト、L.S.P.が少量、磁鉄石

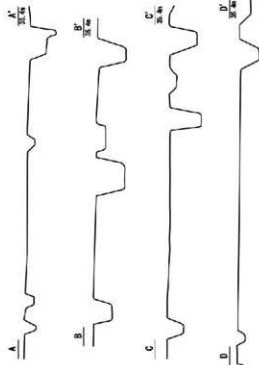
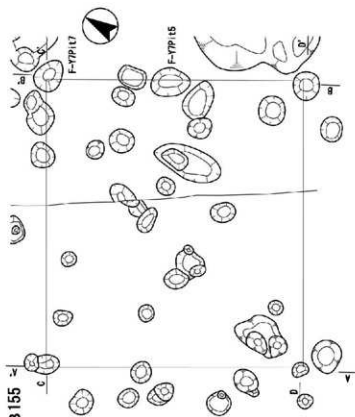
堆中

SB152

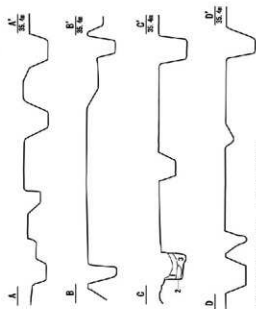
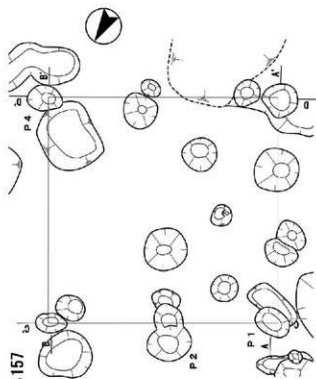


第155圖 SB141・152 (1/50)

SB 155

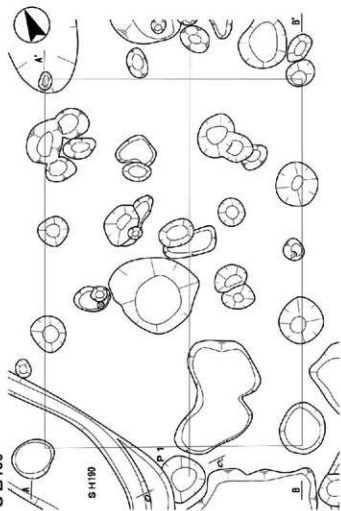


SB 157



1. 1972年の調査結果に基づくシルト、土盛り中、陥没中
2. 1972年の調査結果に基づく陥没シルト、1978年台～80年～期  
陥没シルトを20%含む、土盛り中～陥没、陥没中
3. 1978年の調査結果、1972年の陥没シルトを20%含む、  
土盛り中、陥没中

SB156



A

A'

5m

B

B'

5m

C

C'

5m

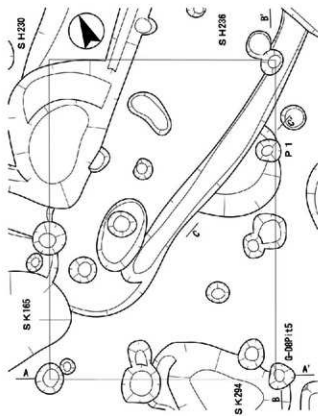
【A'-A' 断面】  
 1. 10192/1の遺構跡部→シルト、しまりや中、粘りや中強、粘り中  
 2. 10192/2～2/2の遺構跡部→シルト、しまりや中強、粘り中  
 3. 10192/3の遺構跡部→シルト、しまりや中、粘り中  
 4. 10192/4の遺構跡部→シルト、しまりや中強、粘り中  
 5. 10192/5の遺構跡部→シルト、しまりや中強、粘り中



0

2m

SB158



A

A'

5m

B

B'

5m



C

C'

5m

1. 10192/1～2/2遺構跡部→シルト、しまり中、粘り中  
 2. 10192/3の遺構跡部→シルト、10198/4～5/5の遺構跡部→シルト、しまりや中強、粘りや中強  
 3. 10192/4の遺構跡部→シルト、しまりや中強、粘り中  
 4. 10192/5の遺構跡部→シルト、しまりや中強、粘り中  
 5. 10192/6の遺構跡部→シルトと10198/4～5/5の遺構跡部→シルトが混じり合う、しまりや中強、粘りや中強

第157図 SB156・158 (1/50)

どからみて、遺構の時期は古墳時代前期である可能性が高い。

**SB157 (第156図)** 第2次調査区の東部で検出した側柱建物である。SH222及びSB156と一部重複している。

桁行が2間で3.0m、梁行は1間で3.0mであり、平面形はほぼ正方形を呈する。梁行の南西側では間柱の可能性が考えられる柱穴が柱筋上で2基検出されているものの、片方はSB156の柱穴とみられ、これらに対応する間柱の柱穴は北東側の梁行では検出されていないため、梁行1間の建物と考えた。桁側の柱間は1.3~1.7mと不統一で、特に南東側では不均等である。

桁行の柱間が不均等である一方、四隅の柱穴はかなり深くしっかりしたものであることや、平面形が正方形を呈することを鑑みれば、桁行・梁行ともに1間の側柱建物ないし、全体に削平を被り主柱穴のみ遺存する竪穴建物である可能性も考えられる。

遺物は、P1・4から土師器製の破片が出土している。P1から出土したS字状口縁製の破片は、ほぼ1個体分に相当すると思われる。その他、P2から土師器製や高坏の破片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

出土遺物及びSH222との重複関係からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭~前葉と考えられる。

**SB158 (第157図)** 第2次調査区の東部で検出した側柱建物である。SH230・236及びSK294と一部重複している。

桁行が3間で4.2m、梁行は1間ないし2間で3.0mであり、平面形は長方形を呈する。SH230と重複する部分は深く掘り込まれた貯蔵穴の箇所に該当しており、北西隅の柱穴と桁柱の柱穴1基は確認できなかった。梁行においても、南側では間柱と考えられる柱穴が検出されたが、SH236と重複する北側では対応する柱穴が確認できなかった。柱間は桁側で1.2~1.9m、梁側で1.3~1.8mと不統一である。

柱間がかなり不統一であることや、一部の柱穴が検出できなかったことから、掘立柱建物ではない可能性も残るが、桁柱の柱穴と考えられるP1では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。このP1と南東隅の柱穴(G-D8Pi15)までが3.0m

であることを鑑みれば、P1を北東隅の柱穴とする、桁行が1間ないし2間、梁行が1間ないし2間の正方形の側柱建物か、あるいは全体に削平を被り主柱穴のみが遺存する竪穴建物の可能性も考えられる。

遺物は、柱穴にあたるG-D8Pi15から土師器壺と思われる小片が出土している。

出土遺物が僅少のため、遺物から時期を判断することは困難であるが、出土遺物や柱配置、周辺の遺構の状況などからみて、遺構の時期は古墳時代前期である可能性が高い。

**SB159 (第158図)** 第2次調査区の南端で検出した側柱建物と考えられるものである。柱穴は4基のみしか検出されていないが、等間隔に並ぶことや、他の古墳時代の掘立柱建物と主軸方位が近いことから、掘立柱建物と判断した。南側は調査区外へ続いており、調査区内で検出できたのは北側の半分程度である。

桁行は2間ないし3間で3.7m以上、梁行は2間で3.1m以上と推定され、平面形は長方形を呈するものと思われる。柱間は桁側・梁側ともに1.8m前後である。いずれの柱穴も小型である。

遺物は出土しなかった。そのため、時期を判断することは困難であるが、柱配置や周辺の遺構の状況などからみて、遺構の時期は古墳時代前期である可能性が高い。

**SB160 (第159図)** 第2次調査区の北東部で検出した側柱建物である。SB152と一部重複している。

桁行が3間で4.0m、梁行は2間で3.3mであり、平面形は長方形を呈する。柱間は梁側で1.7m前後あるのに対して、桁側は1.3m前後とやや狭い。いずれの柱穴も小型である。P1では土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。

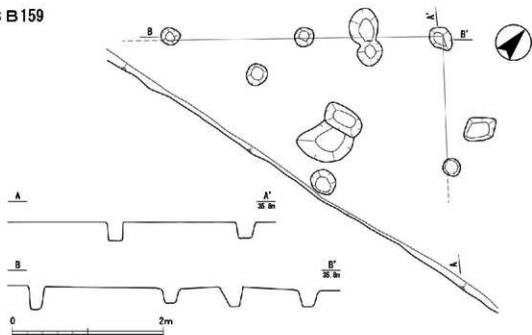
遺物は出土しなかった。そのため、時期を判断することは困難であるが、柱配置や周辺の遺構の状況などからみて、遺構の時期は古墳時代前期である可能性が高い。

**SB161 (第160図)** 第2次調査区の東部で検出した側柱建物である。SH212・232と一部重複している。

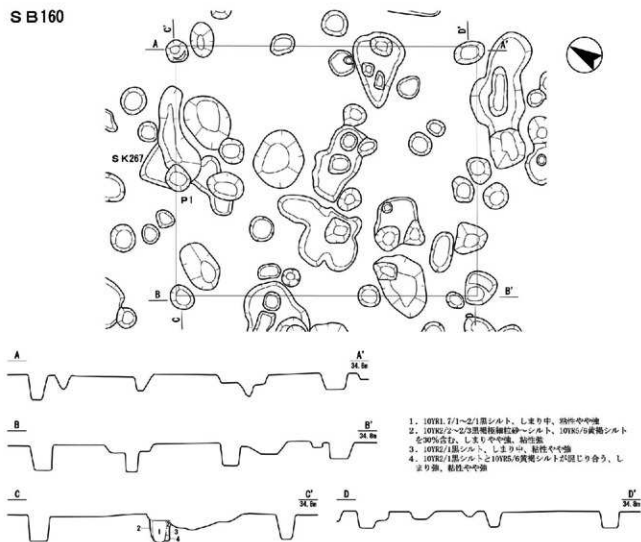
桁行が3間で5.7m、梁行は2間で3.0mであり、平面形は長方形を呈する。北側の桁柱の柱穴はSH



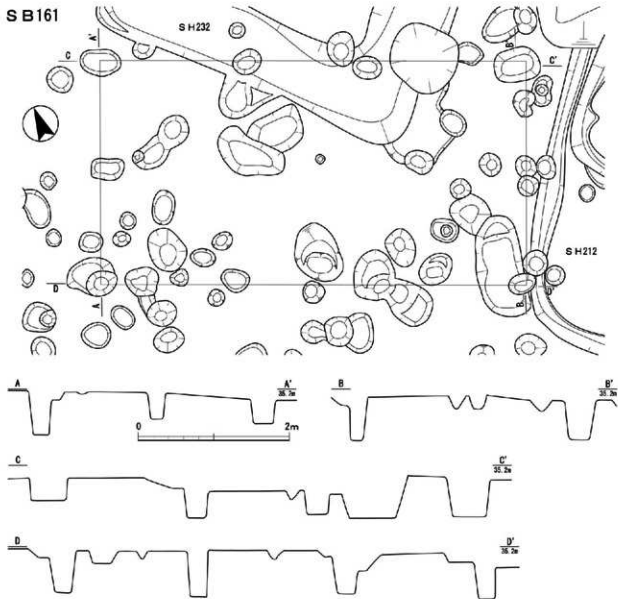
SB159



SB160



第158図 SB159・160 (1/50)



第159図 SB161 (1/50)

232の床面で検出されている。柱間は桁側で1.6~1.8 mあるのに対して、梁側は1.5m前後とやや狭い。桁側の柱間はやや不統一で、特に北側の桁行で不均等である。

遺物は出土しなかった。そのため、時期を判断することは困難であるが、柱配置や周辺の遺構の状況などからみて、遺構の時期は古墳時代前期である可能性が高い。

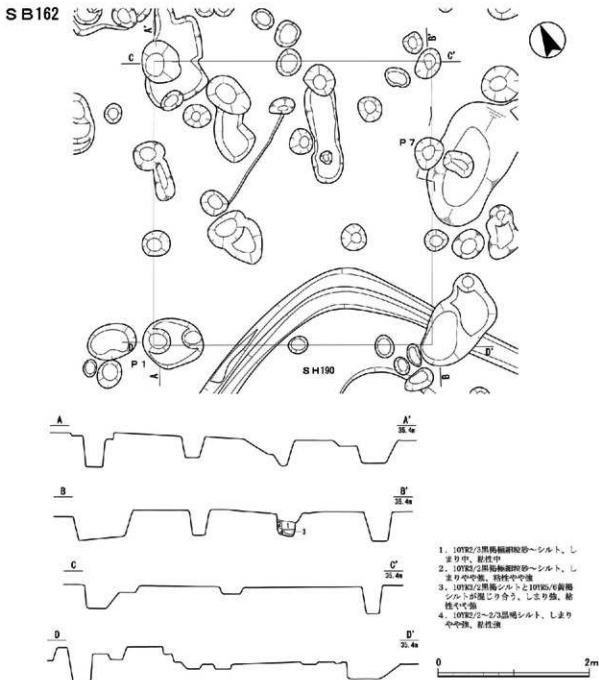
**SB162 (第160図)** 第2次調査区の東部で検出した側柱建物である。SH190と一部重複している。

桁行が3間で3.8m、梁行は2間で3.7mであり、平面形はほぼ正方形を呈する。北東隅の柱穴及び、

西側の桁柱の柱穴1基と北側の梁柱の柱穴1基は調査時には確認されていないが、該当箇所にビット状の攪乱が検出されており、これが柱穴ないし柱穴が破壊された痕跡と考えられる。柱間は梁側で1.8m前後あるのに対して、桁側は1.3m前後とやや狭い。P7では土層断面で柱の抜き取り痕と思われるものが確認できる。

遺物は、P1から土師器台付甕の破片が多数出土している。完形には復元できなかったが、ほぼ1個体分に相当するものと思われる。

出土遺物及びSH190との重複関係からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭~前葉と考えられる。



第160図 SB162 (1/50)

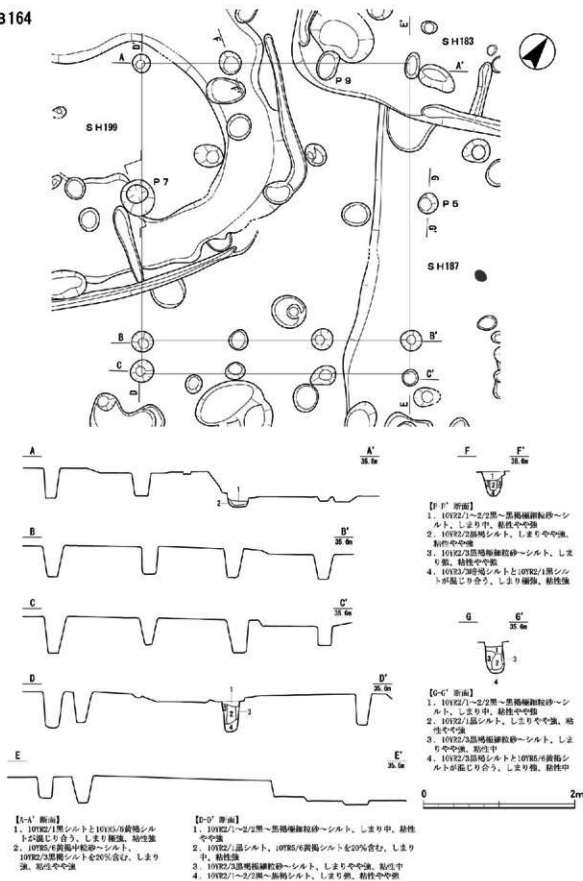
SB164 (第161図) 第2次調査区の中央部の第3次調査区との境付近で検出した側柱建物である。SH198・183・187・323など、多数の堅穴建物が重複する中に位置しており、当該建物もSH183・187・199と一部重複する。

桁行が1間ないし2間で3.7m、梁行は3間で3.5mであり、平面形は正方形に近い方形を呈する。また、南西側の梁行の外側にもう一列、同じく3間の

柱列が検出されている。底状の張り出しとも考えられるが、梁行の柱列との間は0.4mと狭く、柱穴の大きさもほぼ同じであるため、建物の建て替えや拡張に伴うものである可能性が高い。

また、南西側の桁行には間柱と考えられる柱穴が存在するが、北東側の桁行では対応する位置で柱穴が検出されなかった。ただし、桁行の柱筋よりも外側で柱穴(P5)<sup>1)</sup>が検出されており、土層断面で

SB164



第161図 SB164 (1/50)

は柱痕ないし柱の抜き取り痕と考えられる土層が確認されている（G-G'断面第2層）。先の底状の張り出しも含め、建物の建て替えや拡張などによるものとも考えられ、本来の建物は調査によって想定したものと異なる平面形であった可能性もある。

梁側の柱間は1.2m前後であり、比較的間隔が揃っている。

遺物は、P9から土師器の破片が出土している。また、P7の柱痕ないし柱の抜き取り痕と考えられる土層中から土師器のS字状口縁部の破片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

出土遺物及びSH183・187・199との重複関係からみて、遺構の時期は古墳時代前期と考えられる。

**S B260 (第162図)** 第2次調査区の北東部で検出した側柱建物である。

桁行が2間で2.9m、梁行は2間で2.8mであり、平面形はほぼ正方形を呈する。柱間は桁側・梁側ともに1.5m前後であるが、梁側では若干狭い。いずれの柱穴も比較的小型である。P3・6などでは土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が認められる。

遺物は出土しなかった。そのため、時期を判断することは困難であるが、柱配置や周辺の遺構の状況などからみて、遺構の時期は古墳時代前期である可能性が高い。

**S B283 (第162図)** 第2次調査区の北東部で検出した側柱建物である。

桁行が3間で3.6m、梁行は1間ないし2間で3.2mであり、平面形は長方形を呈する。北東側の梁行には間柱の柱穴の可能性が認められるが、南西側の梁行では対応する柱穴は検出されなかった。桁側の柱間は1.2m前後である。梁側の柱間は、北東側が2間とするならば1.6m前後で、桁側より広い。

遺物は、P1から土師器壺の口縁部片が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭～前葉と考えられる。

**S A134 (第163図)** 第2次調査区の東端部で検出した柱列と考えられるものである。一列に並ぶ4基の柱穴で構成され、柱間は1.2m前後である。

柱穴には規模の差があり、深さも一定していない

が、柱間はほぼ一定である。さらに、主軸方向は付近に存在するSH124・206・207など古墳時代前期初頭の竪穴建物の主軸方向と一致している。こうしたことから、柵や掘立柱建物の一部である可能性が考えられる。

遺物は、P2から土師器の瓢形壺の口縁部片が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**S A150 (第163図)** 第2次調査区の北東部で検出した柱列と考えられるものである。一列に並ぶ3基の柱穴で構成され、柱間は1.8m前後である。

3基の柱穴しか確認できていないため、柵などの構造物であったかは不明である。すぐ東側が覆土により大きく削平されており、掘立柱建物の中に1.8m前後の柱間のもので存在することを考慮すれば、掘立柱建物の一部の可能性もある。

遺物は、柱穴にあたるG-FIPit1から土師器の破片が数点出土しているが、いずれも細片で図化できなかった。

出土遺物が僅少のため、遺物から時期を判断することは困難であるが、出土遺物や柱穴の形態、周辺の遺構の状況などからみて、遺構の時期は古墳時代前期である可能性が高い。

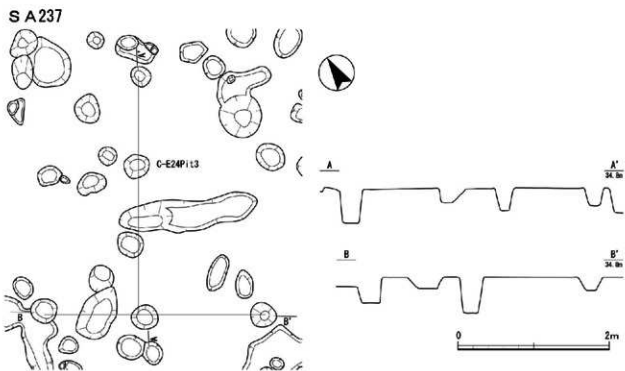
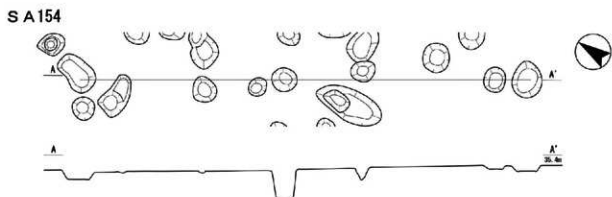
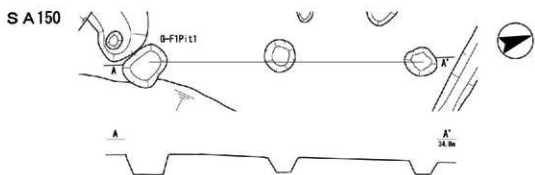
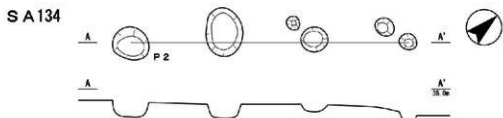
**S A154 (第163図)** 第2次調査区の東部の第3次調査区との境付近で検出した柱列と考えられるものである。S B155と一部重複している。一列に並ぶ3基の柱穴で構成され、柱間は2.7～3.2mである。

3基の柱穴しか確認できず、柱間も不統一である上に、両端の柱穴は浅いことから、柵などの遺構ではない可能性もある。

遺物は出土しなかった。そのため、時期を判断することは困難であるが、柱穴の形態や周辺の遺構の状況などからみて、遺構の時期は古墳時代前期である可能性が高い。

**S A237 (第163図)** 第2次調査区の北東部で検出した柱列と考えられるものである。4基の柱穴がほぼ一列に並び、それに直交するように2基の柱穴が存在し、全体としてT字形をなす。ただし、4基並ぶ柱穴のうち、北から3番目の柱穴は若干西にずれており、柱列を構成するものではない可能性がある。





第163圖 SA 134 · 150 · 154 · 237 (1/50)

柱間は1.0～1.6mである。

主軸方位はSB152などと近いが、掘立柱建物の一部の可能性もあるが、柱間が不統一であることや、柱穴の中にはかなり浅いものもあることから、掘立柱建物や櫓などの遺構ではない可能性もある。

遺物は、柱穴にあたるC-E24Pi3から土師器の破片が数点出土しているが、いずれも細片で図化できなかった。

出土遺物が僅少のため、遺物から時期を判断することは困難であるが、出土遺物や柱穴の形態、主軸方位、周辺の遺構の状況などからみて、遺構の時期は古墳時代前期である可能性が高い。

### (3) 土坑

**SK144 (第164図)** 第2次調査区の東端で検出した土坑である。東側は調査区外へと続いており、全体の形状は不明である。

検出した時点では方形の竪穴建物の一部と想定したが、深さ0.2mほどの浅い落ち込み状のもので、最終的に竪穴建物ではないと判断した。

遺物は、埋土中から土師器が出土しているが、細片で図化できるものはなかった。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期と考えられる。

**SK146 (第164図)** 第2次調査区の東端で検出した土坑である。SH145及びSB141と一部重複しており、両建物より後出する。平面形は長径2.2mのやや不整形な円形を呈し、深さは0.15mほどである。

底面は比較的平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。

遺物は、埋土中から土師器が出土している。

出土遺物及びSB141との重複関係からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SK151 (第164図)** 第2次調査区の東端で検出した土坑である。SH206・207と一部重複しており、SH206に先行するが、SH207よりは後出する。平面形は長径3.2m、短径2.3mの不整形な楕円形を呈し、深さは0.5mほどである。

壁面は緩やかに立ち上がり、全体的に浅い皿状を呈するが、西側の壁面は一部段状をなす。土層断面からみると、一度埋没した後、再掘削が行われ(第1～6層)、その際に段状の部分が形成された可能

性が考えられる。

遺物は、埋土中から土師器や台石が出土している。特に、第6層からの出土が目立った。

出土遺物及びSH206・207との重複関係からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭～前葉と考えられる。

**SK163 (第164図)** 第2次調査区の東部で検出した土坑である。多数の竪穴建物が密集した中に位置する。SH211の床面で検出されており、SH211に先行するか、この建物に伴う遺構と考えられる。平面形は長径1.4m、短径0.8mの隅丸方形を呈する。深さは0.8mほどと、かなり深い。

底面は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。竪穴建物が複雑に重複した中で検出されたこともあり、削平等によって確認できなかった竪穴建物の貯蔵穴の可能性もあるが、規模や形状からみると違和感がある。

遺物は、埋土中から土師器が出土しているが、細片で図化できるものはなかった。

出土遺物及びSH211との重複関係からみて、遺構の時期は古墳時代前期と考えられる。

**SK165 (第165図)** 第2次調査区の東部で検出した土坑である。多数の竪穴建物が密集した箇所西端に位置する。SH212と一部重複し、この建物に先行する。平面形は長径1.6m、短径1.2mの楕円形を呈し、東端は浅い溝状に突出する。深さは0.8mほどと、かなり深い。

壁面はかなり急に立ち上がり、一部オーバーハングする。また、東側は中位で段をなす。竪穴建物が複雑に重複した箇所に隣接するため、削平等によって確認できなかった竪穴建物の貯蔵穴の可能性もある。

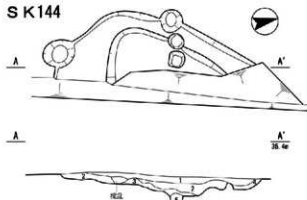
遺物は、埋土中から土師器が出土している。小片が多いが、甕の口縁破片が目立つ。また、縄文時代の切目石鎌も1点出土した。

出土遺物及びSH212との重複関係からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SK167 (第165図)** 第2次調査区の東部で検出した土坑である。多数の竪穴建物が密集した中に位置する。SH213の床面で検出されており、主柱穴との重複関係からみて、この建物に先行する可能性が

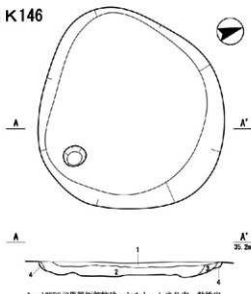


## SK 144



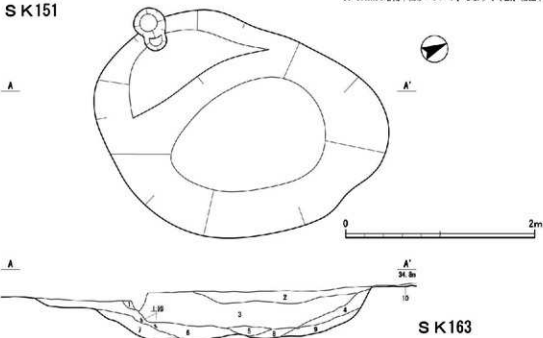
1. 10YR2/2~3/2黒粘層細粒砂〜シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/3黒粘層細粒砂〜シルト、10YR5/6黄褐色シルトを5%含む、しまりやや強、粘性中
3. 10YR2/3~3/3黒粘層細粒砂〜シルト、10YR5/6黄褐色シルトを30%含む、しまりやや強、粘性中
4. 10YR4/6~5/6黄〜黄褐色細粒砂〜シルト、しまり強、粘性強
5. 10YR2/2黒粘シルト、しまり強、粘性やや強

## SK 146



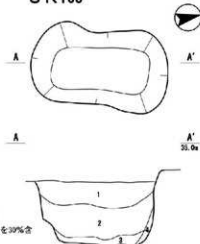
1. 10YR2/2黒粘層細粒砂〜シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/1黒粘層細粒砂〜シルト、しまり中、粘性中
3. 10YR2/3黒粘層細粒砂〜シルト、しまりやや強、粘性中
4. 10YR3/3暗褐色細粒砂〜シルト、しまりやや強、粘性中

## SK 151



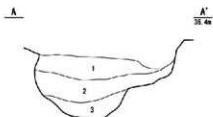
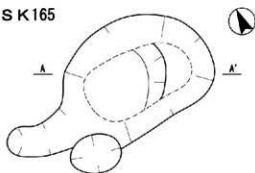
1. 10YR2/1黒粘層細粒砂〜シルト、しまりやや強、粘性中
2. 10YR2/2黒粘層細粒砂〜シルト、7.5YR4/6暗シルトと地山をわずかに含む、しまりやや強、粘性中 (S H10YR2546)
3. 10YR2/1~2/2黒〜黒褐色細粒砂〜シルト、しまりやや強、粘性中、土層片を含む
4. 10YR2/1~2/2黒〜黒褐色細粒砂〜シルトと地山が混じり合う、しまりやや強、粘性やや強
5. 10YR2/1~3/1黒〜黒褐色シルト、しまり強、粘性やや強
6. 10YR2/1黒粘層細粒砂〜シルト、地山をわずかに含む、しまり強、粘性中、土層片を含む
7. 10YR2/3黒粘層細粒砂〜シルトと10YR4/1暗シルトと地山が混じり合う、7.5YR6/6暗粘層細粒砂〜シルトをブロック状に含む、礫を多く含む
8. 10YR1/7/1黒シルト、地山をブロック状に含む、しまりやや強、粘性やや強
9. 10YR2/1~3/1黒〜黒褐色シルト、しまり強、粘性やや強
10. 10YR5/6黄褐色細粒砂〜シルト、10YR2/2黒粘層細粒砂〜シルトをブロック状に含む、しまり強、粘性中 (S H10YR546)

## SK 163



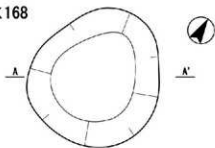
1. 10YR2/2黒粘層細粒砂〜シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR3/1暗褐色細粒砂〜シルト、しまりやや強、粘性やや強
3. 10YR2/1黒粘層細粒砂〜シルト、しまりやや強、粘性やや強
4. 10YR5/6黄褐色細粒砂〜シルト、10YR2/1黒粘層細粒砂〜シルトを30%含む、しまりやや強、粘性やや強

### SK165



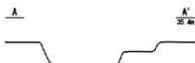
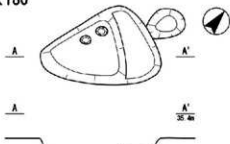
1. 10YR2/2黒褐細砂～シルト、しまり中、粘性中、酸化粒子を10%含む
2. 10YR2/2～2/3黒褐細砂～シルト、しまりやや弱、粘性中、酸化粒子を20%含む
3. 10YR2/1～2/2黒～黒褐細砂～シルト、しまり弱、粘性やや強、酸化粒子を20%含む

### SK168

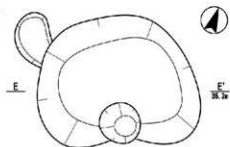


1. 10YR3/3暗褐細砂～シルト、10YR5/6黄褐シルトを30%含む、しまりやや強、粘性やや強、5cmの戦土ブロックを含む
2. 10YR2/2黒褐細砂～シルト、10YR5/6黄褐シルトを30%含む、しまりやや強、粘性やや強
3. 10YR4/3に灰～黒褐細砂～シルト、10YR5/6黄褐シルトを20%含む、しまり強、粘性強

### SK180

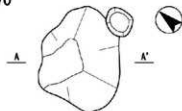


### SK167

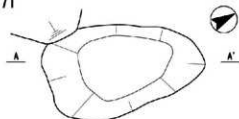


1. 10YR5/6黄褐シルト、10YR2/3黒褐細砂～シルトを20%含む、しまり強、粘性強（ブラック）
2. 10YR2/3黒褐細砂～シルト、10YR5/6黄褐シルトを10%含む、しまりやや強、粘性やや強
3. 10YR2/3黒褐細砂～シルト、10YR5/6黄褐シルトを40%含む、しまりやや強、粘性やや強
4. 10YR2/3黒褐シルト、10YR3/3暗褐シルトを30%含む、しまり強、粘性強

### SK170



### SK171



高い。平面形は長径1.7m、短径1.3mの不整形な楕円形を呈する。

深さは0.2mと浅く、全体的に浅い皿状を呈するが、SH213によって削平を被っているSH236の東隅付近と推定される箇所位置することから、SH236に伴う貯蔵穴の可能性はある。ただし、規模的にかなり大きいなど疑問が残る点もあり、確定的ではない。

遺物は、埋土中から土師器が出土しているが、細片のみで図化できるものはなかった。

出土遺物及びSH213との重複関係からみて、遺構の時期は古墳時代前期と考えられる。

**SK168 (第165図)** 第2次調査区の東部で検出した土坑である。多数の竅穴建物が密集した中に位置する。SH213の床面で検出されており、SH213に先行するか、この建物に伴う遺構と考えられる。平面形は長径1.5m、短径1.3mの不整形な円形を呈し、深さは0.3mほどである。

壁面は比較的緩やかに立ち上がり、全体的に浅い皿状を呈する。埋土最上層には焼土がブロック状に含まれている。

遺物は、埋土中から土師器が出土しているが、細片のみで図化できるものはなかった。

出土遺物及びSH213との重複関係からみて、遺構の時期は古墳時代前期の可能性が考えられる。

**SK170 (第165図)** 第2次調査区の東端で検出した土坑である。近世以降の大溝状の擾乱によってかなり削平を被っており、西側はほとんど失われている。遺存している範囲では、長径1.1m、短径0.8mほどの不整形な楕円形を呈する。深さは0.4mほどあったものと推定される。

遺物は、埋土中から土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭～前葉と考えられる。

**SK171 (第165図)** 第2次調査区の東端で検出した土坑である。SK170のすぐ南側に位置する。平面形は長径1.7m、短径1.0mの不整形な楕円形を呈し、深さは0.4mほどである。

底は比較的平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる。

遺物は、埋土中から土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初

頭～前葉と考えられる。

**SK180 (第165図)** 第2次調査区の東部の第3次調査区との境付近で検出した土坑である。平面形は長径1.3m、短径0.8mの三角形に近い不整形な楕円形を呈し、深さは0.2mほどである。

底は比較的平坦で、東側は段をなす。

遺物は、埋土中から土師器が出土している。甕の破片が多い。また、検出面のやや上層から土師器片がまとまって検出された。ただし、SK180に伴う遺物かどうか不明である。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SK290 (第166図)** 第2次調査区の北東部で検出した土坑である。この土坑より北側では古墳時代の建物はほとんど検出されておらず、居住域の北縁部に位置すると思われる。平面形は長径2.3m、短径1.8mの不整形な円形を呈し、深さは0.7mほどである。

底面には緩やかな凹凸があり、壁面は基本的にほぼ垂直に立ち上がり、下位では顕著にオーバーハンクしている。東側の壁面のみは緩やかに立ち上がり、一部不明瞭な段状を呈する。形状からみると粘土採掘坑の可能性も考えられるが、良好なシルト層に達するには浅く、別の性格を有する土坑であろう。

遺物は、埋土中から土師器が出土している。特に、第4～7層に遺物や礫が集中しており、壺や高杯のかなり大きな破片も認められた。

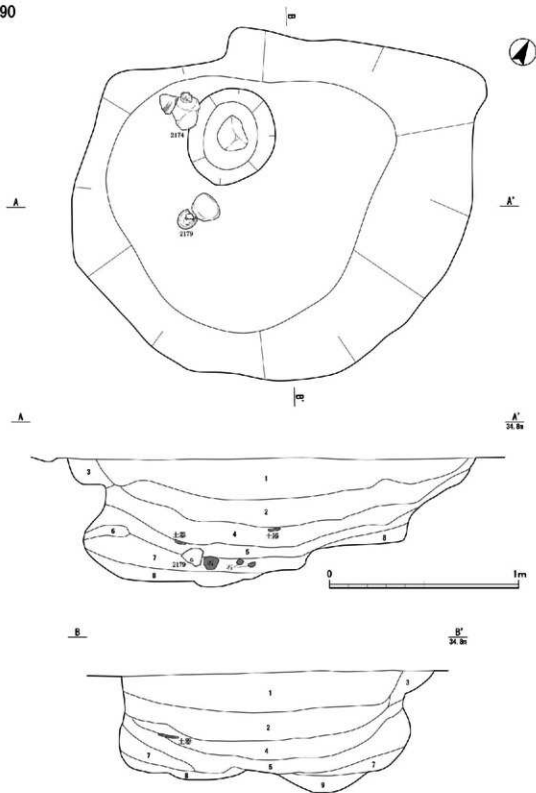
出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SK294 (第167図)** 第2次調査区の東部で検出した土坑である。多数の竅穴建物が密集した箇所の西端に位置し、SK165と近接する。SB158と一部重複し、この建物より後出する。平面形は長径1.9m、短径1.2mの楕円形を呈する。深さは0.8mほどと、かなり深い。

壁面は北側は緩やかに立ち上がり、南側はかなり急に立ち上がる。一部の壁面は不明瞭な段状をなす。竅穴建物が複雑に重複した箇所隣接するため、削平等によって確認できなかった竅穴建物の貯蔵穴の可能性もある。

遺物は、埋土中から土師器が出土している。また、縄文時代の石畿も出土した。

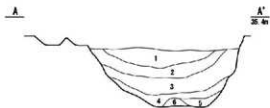
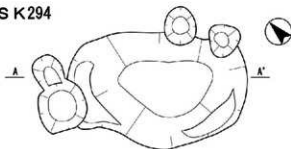
S K 290



1. 10YR2/1黒編細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR1.7/1黒海綿和砂～シルト、10YR6/4暗シルト2.5Y6/4に多い炭相～中粒砂を20%含む、しまり強、粘性やや強
3. 10YR2/2黒編細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
4. 10YR1.7/1黒海綿和砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
5. 10YR2/1～2/2黒～黒編細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、土器片を含む
6. 10YR2/2黒編細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
7. 10YR1.7/1～2/1黒編細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中、礫を含む
8. 10YR1.7/1～2/1黒編細粒砂～シルト、10YR5/6黄褐色～暗黒粒砂を60%含む、しまり強、粘性やや弱
9. 10YR5/6黄褐色中粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや弱

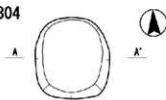
第166図 S K 290 (1/20)

S K 294



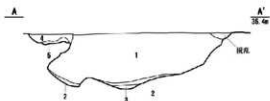
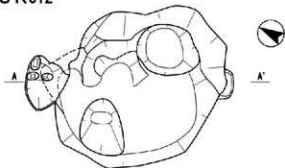
1. 10YR2/1黒粘細砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/1～2.2黒～黒粘細砂～シルト、しまり中、粘性中
3. 10YR2/2黒粘細砂～シルト、しまりやや強、粘性中
4. 10YR2/2～2.3黒粘細砂～シルト、10YR4/4黄シルトを20%含む、しまり強、粘性やや強
5. 10YR2/4暗褐色～シルト、しまりやや弱、粘性やや弱
6. 10YR4/4～4.6暗赤板砂～シルト、しまりやや強、粘性やや弱

S K 304



1. 10YR4/6～2/3暗～暗粘シルト～細粒砂

S K 312



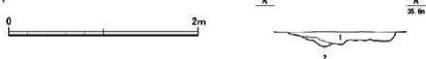
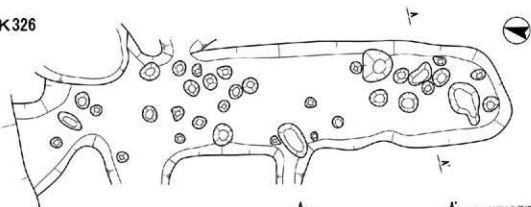
1. 10YR2/1黒シルト～細粒砂、しまりやや強、粘性中
2. 10YR2/2黒粘シルト～中粒砂と10YR4/4.3黄～黄褐色シルトへの形状が層状に現れり空ろ、しまり中、粘性中
3. 10YR2/2黒粘シルト～細粒砂、しまり中、粘性中
4. 10YR2/3暗粘シルト～細粒砂、しまりやや強、粘性中
5. 10YR3/4暗粘シルト～細粒砂、10YR5/4黄粘シルト～細粒砂をブロック状に25%含む、しまりやや強、粘性中

S K 318



1. 10YR2/1黒シルト～細粒砂、しまりやや強、粘性中
2. 10YR2/2黒粘シルト～細粒砂、しまりやや強、粘性中
3. 10YR2/3黒粘シルト～細粒砂、しまりやや弱、粘性中

S K 326



1. 10YR2/2品褐色シルト～細粒砂、しまり強、粘性中
2. 10YR2/2品褐色シルト～細粒砂、10YR4/4暗シルト～中粒砂をブロック状に50%含む、しまりやや強、粘性中

出土遺物及びSB158との重複関係からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SK304 (第167図)** 第3次調査区の北東部で検出した土坑である。平面形は径0.8mの円形を呈する。深さは0.1mと浅く、底は平坦で、全体的に浅い皿状を呈する。

遺物は、埋土中から土師器が出土しているが、細片のみで図化できるものはなかった。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期と考えられる。

**SK312 (第167図)** 第3次調査区の東部で検出した土坑である。平面形は長径2.0m、短径1.6mの不整形な楕円形を呈し、深さは0.6mほどである。

底面にはかなり凹凸があり、北側の壁面は大きくオーバーハングしている。それに対して、南側の壁面は緩やかに立ち上がる。埋土はほぼ1層である。底や壁面に粘土層の露出は認められず、粘土探掘坑とは考えがたい。規模や形状、埋土の様相からみると、風倒木痕の可能性も考えられる。

遺物は、埋土中から土師器が出土している。小片のみであるが、甕が目立つ。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SK318 (第167図)** 第3次調査区の東部で検出した土坑である。平面形は長径1.2m、短径1.0mの不整形な円形を呈する。

深さは0.2mほどと浅く、全体的に浅い皿状を呈するが、底面には凹凸が目立つ。土坑というよりも、浅い落ち込みに近い。

遺物は、埋土中から土師器が出土しているが、細片のみで図化できるものはなかった。また、埋土には握り拳大の礫が複数含まれていた。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期と考えられる。

**SK320 (第169図)** 第3次調査区の東部で検出した土坑である。平面形は長径0.8m、短径0.7の不整形な円形を呈し、深さは0.3mほどである。

他の溝や土坑状の遺構と重複しており、元の形状をとどめていない部分もあるが、壁面は比較的急に立ち上がる。

遺物は、埋土中から土師器が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭～前葉と考えられる。

**SK326 (第167図)** 第3次調査区の東部で検出した土坑である。多くの擾乱と重複しており、北半分の形状は判然としない部分がある。北端部はSH319と一部重複するが、この部分については別の遺構の可能性もある。SH319まで続くとなれば、平面形は長径5.8m以上、短径1.1mの長楕円形を呈する。

深さは0.2mほどと浅く、底面には小さなピット状の凹みが多数認められる。土坑というよりも、浅い落ち込みに近い。

遺物は、埋土中から土師器が出土している。出土量はごく少ない。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭～前葉と考えられる。

**SK328 (第168図)** 第3次調査区の東部で検出した土坑である。SD329と一部重複し、この溝に先行する。平面形は長径1.8m、短径1.5mの不整形な円形を呈し、深さは0.4mほどである。

底面には緩やかな凹凸があり、東側の壁面は大きくオーバーハングしている。それに対して、西側の壁面は緩やかに立ち上がる。埋土はほぼ1層である。底や壁面に粘土層の露出は認められず、粘土探掘坑とは考えがたい。規模や形状、埋土の様相からみると、風倒木痕の可能性も考えられる。

遺物は、埋土中から土師器が出土している。遺物の出土量は比較的多く、特に中央部では第1層の中心において大きな土器片が面的に検出されている。ほぼ全形が復元できた高坪や鉢の他、東海地方東部との関係が窺われる壺などが認められる。

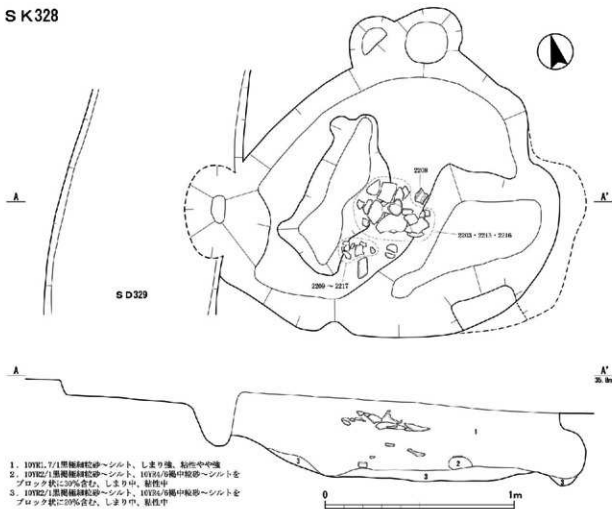
出土遺物及びSD329との重複関係からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**SK334 (第169図)** 第3次調査区の中央部で検出した土坑である。平面形は長径1.5m、短径1.1mの不整形な円形を呈する。深さは0.8mほどと、かなり深い。

底は一部が浅く落ち込む以外は平坦で、壁面は全体的にオーバーハングしている。底や壁面に粘土層の露出は認められず、粘土探掘坑とは考えがたい。

中央部からは、多量の土師器片が出土している。ほとんどは上層（第1層）に集積されたような状況

S K328



第168図 S K328 (1/20)

で検出されており、比較的細片化したものが上面に堆積し、その下位から高坏や甕などのかなり大型の破片がまとまって検出されている。こうした土器の出土状況からみて、埋没の最終段階では廃棄土坑として利用されたものと推測される。

遺物は、埋土中から土師器が出土している。先述のように遺物の出土量は非常に多く、ほぼ全形が復元できる壺や甕、高坏が複数認められる。

出土遺物からみて、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭と考えられる。

**S K348 (第170図)** 第3次調査区の南東部で検出した土坑である。平面形は長径3.6m、短径3.1mの不整形な円形を呈し、深さは0.5mほどある。大型の土坑である。

底面はかなり凹凸が激しく、壁面も不整形である。埋土はほぼ1層である。やや規模は大きいのが、形状

や埋土の様相からみると、風倒木痕の可能性も考えられる。

遺物は、埋土中から土師器が出土している。赤彩された壺などがみられる。

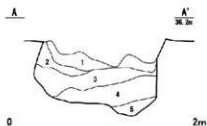
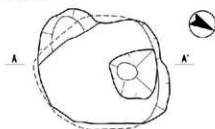
出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

**S K352 (第169図)** 第3次調査区の南東部で検出した土坑である。平面形は長径0.3m、短径0.2mの円形を呈し、深さは0.3mほどある。

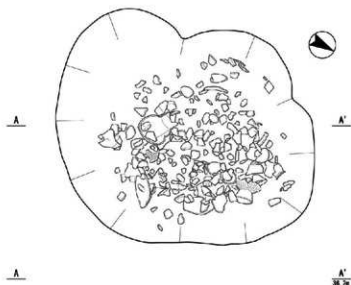
底面は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。規模や形態からみるとピットとした方が適当であろうが、土層断面では柱痕や柱の抜き取り痕は確認できなかったことや、土師器高坏(2277)の脚部の大きな破片が意図的に入れられたような状況で出土したことから、土坑とした。

遺物は、先述のように埋土中から土師器高坏が1

S K334

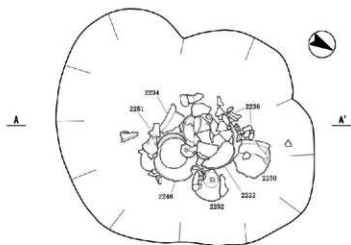
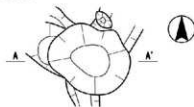


1. 10YR2/2黒褐色シルト～極細粒砂
2. 10YR1.7/1黒シルト～極細粒砂
3. 10YR2/2黒褐色シルト～極細粒砂と10YR1.7/1黒シルト～極細粒砂が混じり合う
4. 10YR2/2黒褐色シルト～極細粒砂
5. 10YR2/2黒褐色シルト～極細粒砂と10YR3/3暗褐色シルト～極細粒砂がブロック状に混じり合う



遺物出土状況（上層）

S K320

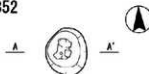


遺物出土状況（下層）

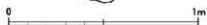


※ 遺物番号は一部のみ示している

S K352



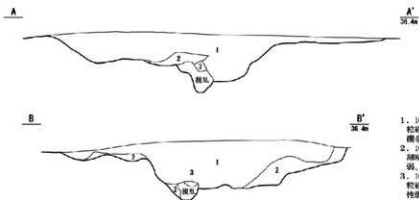
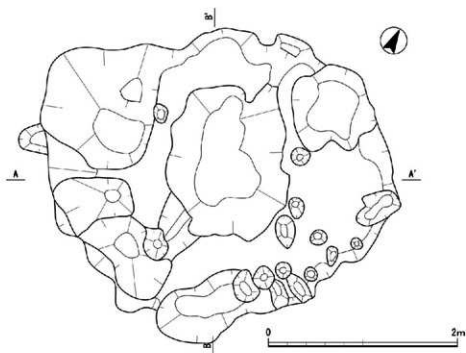
1. 10YR2/1黒シルト～極細粒砂



第169図 S K320・334・352 (S K334出土状況・S K352は1/20、その他1/40)

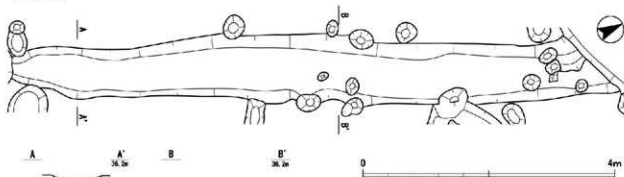


S K348



1. 10YR2/1黒褐色細砂〜シルト、5YR4/4に多い赤褐色細砂を少量含む。しまり強、粘性やや弱、～5mmの礫を含む
2. 10YR2/1黒褐色細砂〜シルト、5YR4/4に多い赤褐色細砂を部分的に層状に含む。しまり強、粘性やや弱、～3mmの礫を少量含む
3. 10YR4/0白〜黄褐色砂、10YR4/3に多い黄褐色細砂〜シルトを層状に20%含む。しまり中やや弱、粘性弱、～4mmの礫を多量に含む

S D329



第170図 SK348, SD329 (1/40, 1/60)

点出土しているが、その他に出土遺物はなかった。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

#### (4) 溝

**S D329 (第170図)** 第3次調査区の東部で検出した溝である。一端がS H322によって削平を被っており、この建物に先行する。また、S K328とも一部重複しているが、この土坑よりは後出する。

残存長9.7m、幅0.9m、深さ0.1mと幅方で浅く、直線的にのびている。底面に凹凸はあまり認められない。

遺物は、埋土中から土師器が出土しているが、出土量は少なく、いずれも小片である。

出土遺物及びS H322、S K328との重複関係からみて、遺構の時期は古墳時代前期初頭と考えられる。

#### 註

- 1) 注記には出土したグリッドがG-G14と記載されているが、遺構カードの記録等を参照すればG-F13の誤記の可能性が高い。
- 2) 竪穴建物の構築に際して、幅方で浅い瀝り込みを壁に沿って施した後貼床等で埋める事例が、弥生時代後期後葉以降に伊勢湾沿岸地域の各地で認められる。これらは周溝状掘形、床下周溝、周溝状床下施設などと呼ばれているが、

いずれも定着した用語ではない。本報告では竪穴建物の掘形と捉え、周溝状掘形という用語を採用する。(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター1999『門間沼遺跡』(公財)愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター2018『宮下遺跡・下野遺跡Ⅱ・五反田遺跡・惣作遺跡Ⅲ』、東海市教育委員会2016『平成26年度畑間・東畑遺跡発掘調査報告』

- 3) 地床がの端部に礎を置くが指す。地床石添がなどと呼ばれることもある。及川良彦2015『道具と生活』『新八王子市史』通史編1 原始・古代 八王子市、及川良彦2017『伊を巡る諸問題1 石床の研究(1 前編)』『西相模考古』第26号 西相模考古学会
- 4) 台石等に使用された可能性もあるが、明瞭な使用痕は認められなかった。
- 5) 貯蔵穴の埋土中から出土した遺物の一部はS K309出土遺物として第208図に掲載している。
- 6) 断面が丸い棒状品で、円形を呈する釘頭状の部分もあることから、洋釘の可能性が高いと思われる。そのため、図は掲載しなかった。ただし、古墳時代の何らかの鉄製品の一部である可能性も否定できない。
- 7) 建物中央より西側の床面で検出された掘込みとされる落ち込みは、貼床とみられる土層で充填されていることから、建物掘形の可能性も考えられる。
- 8) 調査時にはS B164を構成する柱と判断していた。

## 第2節 遺物

### (1) 竪穴建物出土遺物

**S H142 (第171図684~686)** 684は土師器高坏である。脚部片で、八字状に大きく開く。透孔が遺存する。

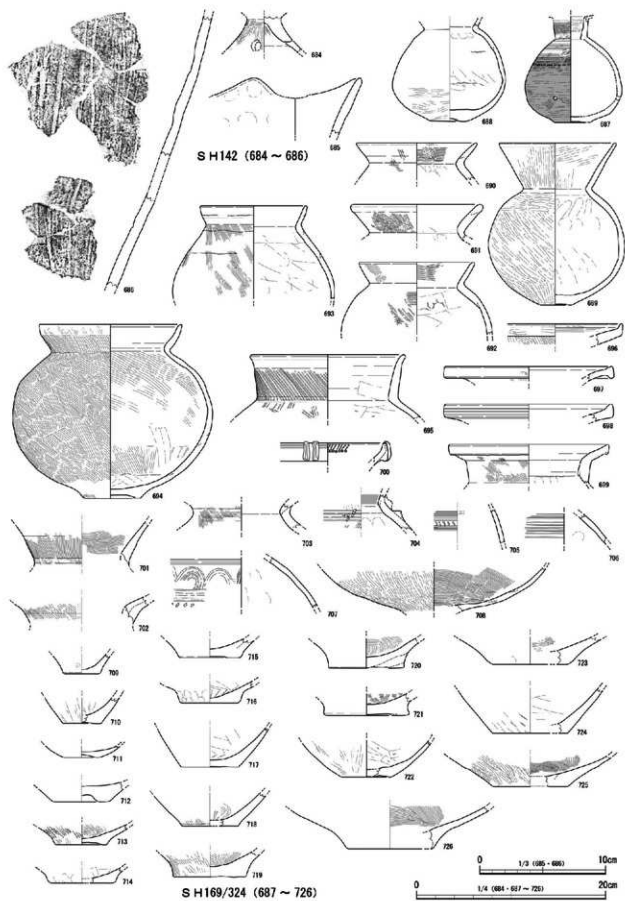
685・686は縄文土器深鉢である。685は波状口縁で、文様は認められない。686は建物内のビッドから出土した。先行して存在した縄文時代のビッドの可能性が高い。体部片で、縦位の太い沈線と条線が認められる。

**S H169/324 (第171~174図687~845)** 687~841は土師器である。

687~694は小・中型の壺である。687は体部が完全に遺存する小型の壺である。やや下ぶくれの体部から頸部が直立して立ち上がり、口縁部は強く外方

に屈曲して開くものと思われる。肩部には直線文と列点文が施されており、体部下半と頸部の外面にはベンガラによる赤彩が施されている。また、体部下半には小さな焼成後穿孔が1箇所認められる。688も小型の壺で、外面はミガキで調整される。689は中型の壺で、口縁部は直線的に開く。外面はミガキによって丁寧に調整される。690~692は口縁部が単純に外方に開く壺と思われる。いずれも外面はハケによって調整されている。693・694はやや口縁部が直立気味に立ち上がる。694は全体が復元できたもので、口縁部は不明瞭ながら受口状を呈する。内外面ともハケで調整される。

695~701は広口壺を中心とする、中・大型の壺の口縁部である。695は口縁部が直立し、口縁端部はわずかに外反する。外面は粗いハケで調整されてい



第171圖 SH142出土遺物、SH169/324出土遺物① (1/4、1/3)

る。体部内面にはケズリが施されている。696～698は広口壺の口縁部の小片である。697の口縁端部にはわずかに赤彩の痕跡が残る。699は頸部が体部から直立気味に立ち上がり、口縁部が屈曲して外方に開くものである。700は口縁端部を上下に拡張し、口縁部外面に棒状浮文を貼り付ける。口縁部内面にへら状工具による列点文と、竹管文が施されている。

701～708は中・大型の壺の頸部から体部にかけての破片である。701は口縁部が直線的に開くものと思われる。704はいわゆるパレススタイル壺の肩部片と思われる。突帯が1条認められるが、剥離痕が残ることから頸部にも突帯が貼り付けられていたものと思われる。突帯付近には列点文が認められる。現状で外面には赤彩は遺存していないが、内面にはわずかに赤彩の痕跡が認められる。705・706は広口壺の肩部片である。直線文や列点文が認められる。708は大型の壺の底部付近の破片である。外面はミガキで丁寧に調整されている。

709～726は壺ないし鉢の底部と思われるものである<sup>1)</sup>。709・710は小型の底部で、710は外面を工具ナデで調整しており、鉢の可能性もある。711は底部外面中央を凹ませており、内湾口縁壺の底部の可能性もある。712は底部が輪台状のものである。713は粗いハケを施した後に、部分的にミガキを施している。716は底部がやや突出する。722は内面をケズリによって調整する。725・726は大型の壺の底部で、内面はハケによって調整されている。

727～734はく字状口縁甕である。728・729は口縁部内面にも薄くハケが認められる。730は口縁部が長くのび、体部はなで肩である。内外面ともナデで調整されており、外面にはススが付着している。731は口縁部が直立気味に立ち上がる。口縁部内面には段状の凹みが認められ、受口状を指向した可能性がある。732は口縁端部付近で外反する。口縁部内面にはハケが施される。733・734は口縁部がやや受口状を呈する。

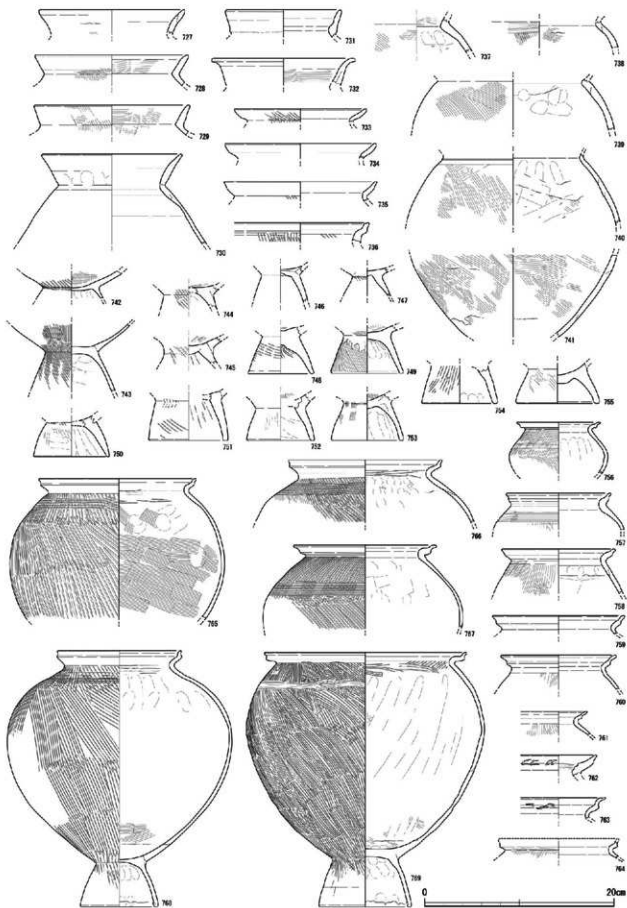
735・736は受口状口縁甕である。735は口縁部の屈曲が弱く不明瞭な受口状を呈するが、736は明瞭な受口状を呈し、口縁端部は面をなす。頸部外面には粗いハケが施され、頸部内面にもハケが一部遺存する。

737～741は甕の頸部から体部にかけての破片である。737・740は体部内面にケズリが施されている。ケズリは頸部まで及ばない。741は内外面ともハケで調整される。外面に粘土接合痕が顕著に残り、破片の上部も粘土接合箇所で剥離しているものと思われる。脚台が付く可能性が高い。

742～755は台付甕の脚台部である。く字状口縁や受口状口縁の甕のものと思われる。742・743はS字状口縁甕の脚台部と似るもので、743は脚台部外面にS字状口縁甕と同様の断続的なハケが認められる。ただし、底部内面や脚頂部<sup>2)</sup>に粗い砂粒を含む粘土の貼り付けが認められず、脚台部内面の調整や胎土等にもS字状口縁甕と異なる特徴が認められる。在地産のS字状口縁甕の可能性もある。745は脚台の側面から体部を成形するが、底部中央には円板充填状の痕跡も認められる。747は小型の台付甕と思われる。748は外面にタダキと思われる痕跡が認められるが、不明瞭であり、粗いハケの可能性もある。ただし、脚台部内面にもシボリ痕が認められるなど、他の台付甕とはやや製作技法が異なる。749の外面には全面にハケが明瞭に残る。751・754は外面に粗いハケが部分的に残る。755はやや低い脚台部である。

756～794はS字状口縁甕である。

756～778は口縁部の破片や、ほぼ全形が復元できたものなどである。756は小型のものである。757・758なども比較的小型のものであるが、766・769・778など、かなり大型のものもあり、法量にはかなりのバリエーションがある。口縁部形態にもいくつかのバリエーションがあり、多くは口縁部上半<sup>3)</sup>が短く直立し口縁端部が上面のナデによってやや面をもちながら外反するが、760・767のように口縁部上半がやや長くのびながら外反し口縁部内面の屈曲が緩いもの、761・774・775のように口縁端部のナデが強くやや凹む幅広の面を作り出しているもの、776・777のように口縁部上半が矮小で口縁端部のナデも不明瞭なものなどが認められる。また、口縁部外面をみると、762・763・770～772のように押し列点文を施すものが複数含まれている。ただし、多くの個体には押し列点文は認められない。756・758のみ、頸部外面に沈線状の調整痕が認められるが、不明瞭



第172圖 SH169/324出土物② (1/4)

である。頸部内面は、小型品ではすべてナデで調整されているが、中・大型品については767など少数を除いてハケが施されている。肩部のヨコハケは、765・768・771・772などではほぼ頸部直下に施されているが、756・767・769・777などでは頸部から少し下がった位置に施される。なお、769については他の個体と胎土が異なる。ハケはやや乱雑で、肩部のヨコハケも工具ナデ状でシャープさに欠けており、底部内面や脚頂部に粗い砂粒を含む粘土の貼り付けが認められない点や、頸部の締まりが弱く器形に違和感がある点なども踏まえれば、在地産のS字状口縁甕の可能性が高い。

779は体部片で、肩部のヨコハケが残る。器壁は厚く、S字状口縁甕としては若干の違和感が残る。

780~794は脚台部である。780は小型のものである。783・785は底部内面や脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。784は底部内面に粘土を貼り付けているが、粗い砂粒があまり含まれない。791は底部内面には粗い砂粒を含む粘土を貼り付けるものの、脚頂部には粗い砂粒があまり含まれない粘土を貼り付けている。脚端部は788・792・793のようにわずかに内面に折り返すものや、787・790のように比較的大きく折り返すものがある。791は脚裾部付近に粘土接合痕が認められるものの、折り返しは不明瞭である。S字状口縁甕としては違和感が残る。

795~822は高坏である。

795~804は有稜高坏の坏部片や、ほぼ全形が復元できたものなどである。795はやや小型である。796・798・799などは坏部がかなり浅く、801・802も比較的浅い。797はかなり深い坏部の破片と思われ、口縁端部には内傾する面が認められる。また、798・799・800・804などは坏部の底部と口縁部の境の屈曲が緩く、外面にはほとんど稜が形成されていない。801・802・803は比較的強く屈曲し、外面に明瞭な稜をもつ。坏部内外面には、基本的にハケを施した後にはミガキが施されているが、798・799はヨコミガキが主体となる。800はヨコミガキの後にタテミガキが施されている。また、799の内面のミガキは全体的に波状になるように施されている可能性がある。脚部が遺存する801・802では脚部は比較的低く、あまり内湾せず直線的に八字状に開く。

805は碗形高坏である。全形が復元できるもので、緩やかに外反する脚をもつ。透孔はないと思われる。坏部内外面と脚部外面はハケを施した後にはヨコミガキで調整する。坏部内面のミガキは全体的に波状になるように施されている。

806~822は脚部である<sup>4)</sup>。816・818・820などは緩やかに内湾する。811・817・822は外反するものと思われる。809・812の脚柱部には直線文が施されているが、809に施されているものはかなり粗雑で不明瞭である。透孔は3方向に開けられているものがほとんどであるが、820のみは4方向である。また、外面がヨコミガキによって調整されている点にも特徴がある。なお、ほとんどの高坏は坏部を脚部上端側面から成形している。

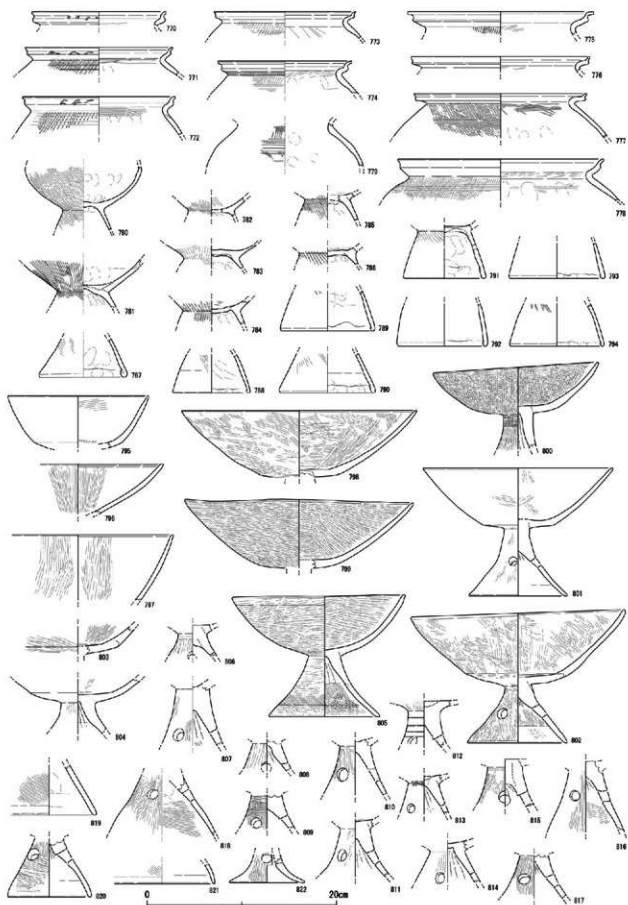
823~831は器台である。

823~828は受部の破片や、ほぼ全形が復元できたものである。受部には、823・827のように小型の皿状を呈し、口縁端部が外面のナデによってはね上げられるものがある。823はかなり小型のもので、内外面を細かいミガキによって丁寧に調整する。827は緩やかに外反する脚部をもち、脚柱部には直線文が施されている。828も小型の皿状の受部をもつが、口縁端部がナデによって面をなし、口縁部外面に直線文を施す。824は受部が直線的に開くものである。825・826は受部が浅い碗形を呈する。826はやや大型のもので、脚部は緩やかに外反しながら開く。823・826・827・828などは受部から脚部内面にかけて貫通する孔がなく、小型高坏状の器台となる。

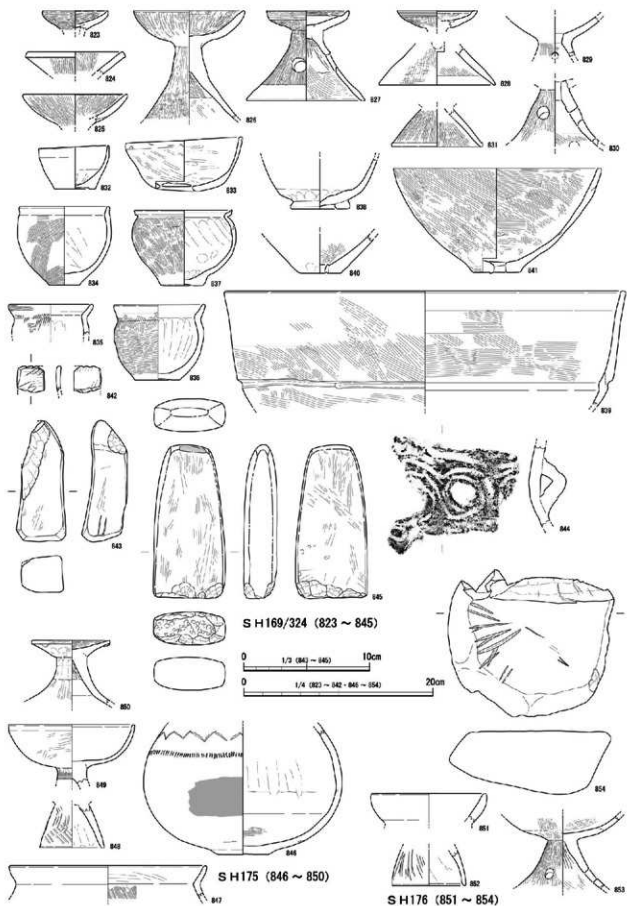
829~831は脚部の破片である。829は脚柱部付近の破片で、浅い碗形の受部をもち、受部から脚部内面に貫通する孔が開けられている。830も孔を開けるものである。831は小型のもので、直線的に八字状に開く。内面もハケを施した後にはミガキで丁寧に調整されており、受部の可能性もある。脚部とすれば、824のような受部をもつものと考えられる。

832~839は鉢である。

832は小型の鉢で、底部は輪台状を呈する。833は深い碗形の鉢で、底部も緩やかに湾曲する。内外面ともミガキによって調整するが、全体として粗雑な感がある。底部には大きな孔があり、意図的に開けられたものと思われる。834は小さな平底をもつ碗



第173圖 SH169/324出土遺物③ (1/4)



第174図 SH 169/324出土遺物④、SH 175・176出土遺物 (1/4、1/3)



弾形のものである。口縁部は屈曲して短く外反する。837は口縁部がS字状口縁甕に近い形態である。ハケはS字状口縁甕に比べてやや細かく、ヨコハケも施されていない。また、ススの附着は認められない。838は深い碗形のもので、底部には高台状に粘土が貼り付けられている。壺の可能性もあるが、全体的に調整が粗雑なことなどから鉢とした。839は口径が40cmを超える大型の鉢である。器壁をわずかに屈曲させて頸部としており、頸部外面は太い沈線状のナデによって調整している。この頸部で体部と口縁部とを接合している状況が、接合部の剥離によって確認できる。口縁部は長く直線的に上方にのびる。体部は浅い碗形を呈するものと思われる。内外面ともハケによって調整されている。ススの附着は認められない。古墳時代前期初頭頃の同様の形態の大型鉢は、近隣地域でも少数ながら認められる<sup>51</sup>。

840・841は有孔鉢である。840は底部付近の破片で、内面にハケが施されている。841はほぼ全形が復元できたもので、体部は緩やかに内湾する。内外面ともハケで調整されている。

842は何らかの土製品の破片である。薄い板状を呈し、角が1箇所残る。表面はハケによって調整されており、一边の側縁には刻目が施されている。

843は石製品で、砥石である。砂岩製で、一部が欠損するが、断面形が方形の整った形状を呈する。側面の4面すべてを砥面として使用している。風化が進んでいるが、一部に擦痕や線条痕が残る。

844は縄文土器の有文深鉢の破片である。頸部付近の破片と思われ、外面に幅広の把手状の装飾を貼り付け、沈線や押圧による文様を施している。

845は下層のピットから出土した石器で、磨製石斧である。先行する縄文時代の遺構が存在したものと考えられる。安山岩製で、全体を研磨によって丁寧に整形しており、側面には明瞭な面が作り出されている。刃部を欠損しているが、欠損後に砥石として転用されており、刃部の欠損面には砥打痕が顕著に認められる。

**SH175 (第174図846~850)** 846~850は土師器である。

846は壺である。体部片がかなり遺存する。肩部に二枚貝の貝殻腹縁を用いたと思われる山形文が施

され、その下位にも二枚貝貝殻腹縁による列点文が施されている。体部外面は風化により調整は不明瞭だが、一部にベンガラによる赤彩が認められる。

847・848は甕である。847はく字状口縁甕の口縁部で、やや内湾しており、受口口縁に近い。848は台付甕の脚台部で、外面には粗いハケが施されている。脚端部は折り返さない。

850は器台である。受部は直線的に開き、口縁端部は面をなす。口縁部外面に小さな粘土塊が貼り付けられているが、意図的なものかは不明である。脚部は大きく外反しながら開く。受部から脚部へ貫通する孔は開けられていない。透孔の有無は不明である。また、外面にススが附着する。

**SH176 (第174図851~854)** 851~853は土師器である。

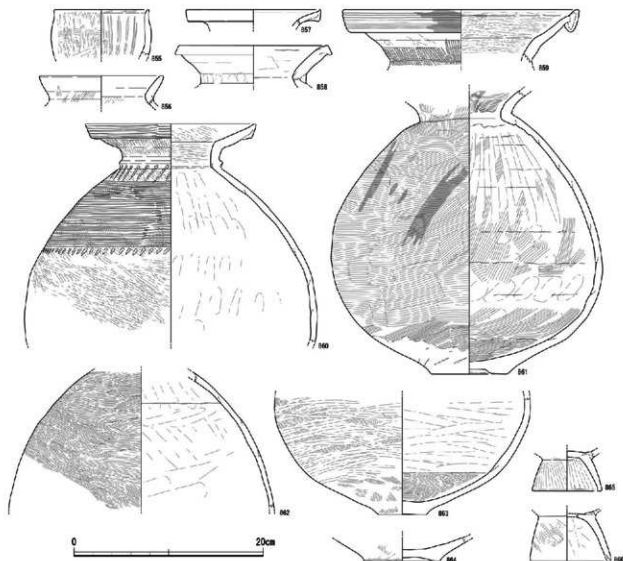
851は壺である。口縁部の小片で、緩やかに内湾する。852は台付甕の脚台部で、外面には粗いハケが施されている。853は有稜高坏である。坏部の屈曲は緩く、稜は不明瞭である。脚部は外反しながら開く。

854は石製品で、砥石または台石である。砂岩製で、大型の礫を利用している。上面は明瞭な平直面となっており、平滑である。その平直面の縁辺部に太く浅い線条痕が複数認められる。石材の質や使用痕、形態などからみて、元は台石であったものを、破損した後に砥石に転用した可能性がある。

**SH177 (第175図855~866)** 855~866は土師器である。

855~858は小・中型の壺の口縁部である。855は短頸の瓢形壺で、口縁部は内湾し、口縁端部はわずかに外反し内傾する面をもつ。口縁部に文様は認められず、外面はハケを施した後にタテミガキで調整される。856は頸部がく字状に屈曲し、口縁部は直線的に開く。口縁端部は丸く収める。857・858は広口壺で、口縁端部は拡張して面を作る。858は頸部外面に粘土を貼り付けて補強している様子が明瞭である。

859~864は大型の壺である。859は広口壺で、口縁端部に粘土を貼り付けて上下に拡張し、外面に擬凹線文を施す。擬凹線文付近には赤彩が一部残る。また、頸部には細い沈線と思われるものが1条認め



第175図 SH177出土遺物 (1/4)

られるが、文様の一部かどうか不明である。860は頸部が直立気味に立ち上がり、口縁部が外方に屈曲して開くものである。口縁端部は下面に粘土を貼り付けて拡張し、擬凹線文を施す。頸部には突帯を貼り付け、突帯に一部かかる形でハケ状工具による列点文を施す。体部外面上半には、口縁端部と同じ工具で直線文を広い範囲に施す。その下位には列点文を施している。赤彩されている可能性があるが、不明瞭である。861は広口壺の体部で、内外面ともハケによって調整されている。文様は認められないが、赤彩が体部外面上半や頸部内面の一部に残る。全体を赤彩していたかは不明である。862も文様は認められず、体部外面全体をハケで調整している。863は体部下半で、外面はハケを施した後にヨコミガキ

で調整されている。

865・866は台付甕の脚台部である。865は脚台部上端の側面から体部を成形しているが、底部内面に粘土を貼り付けて接合部を補強しているものと思われる。866は内面をケズリ状の工具ナデで調整する。外面にはススが附着する。

SH178 (第176図867~891) 867~891は土師器である。

867~873は壺である。867は頸部片で、外面はハケで調整される。868は大型の壺の体部下半で、底部は突出する。外面はハケで調整される。869~872は小・中型の壺ないし鉢の底部で、869・870などは鉢の底部の可能性が高い。873は中・大型の壺の底部で、外面にはハケが施されている。

874~884は甕である。

874~876はく字状口縁甕で、875は口縁部がやや内湾して口縁端部に面をもち、受口状口縁に近い形状を呈する。875・876は体部外面を粗いハケで調整しており、肩部にはヨコナデが施される。

877は受口状口縁甕である。明瞭な受口状を呈する小片である。口縁部外面の屈曲部に列点文が施されている。

878・879は体部片である。878は頸部の破片と思われるが、破断面の風化が著しく、上下逆で口縁部になる可能性もある。879は脚台部が剝離した痕跡が認められる。

880~883は台付甕の脚台部である。881は八字状にやや大きく開く。882は脚端部の折り返しは認められないが、形態などからS字状口縁甕の脚台部の可能性もある。883は脚台部上端の側面から体部を成形している。

884はS字状口縁甕と思われる。ただし、口縁部の断面形はS字状を呈するものの受口状に近く、口縁部内面には連続するユビオサエが残るなど、典型的なS字状口縁甕とは異なっている。

885~890は高坏である。

885は有稜高坏で、ほぼ全形が復元できたものである。坏部は浅く、口縁端部は丸く収められている。脚部は低く、わずかに内湾する。

886・887は碗形高坏の坏部である。886の坏部は浅く、口縁端部には不明瞭な内傾面が認められる。887は小型のもので、内外面ともミガキによって丁寧に調整される。

888~890は脚部である。888は中空の脚部の内部に坏部側から粘土を詰めて塞いでいる。889は八字状に直線的に開く。890はわずかに内湾する。内面はハケやヨコナデで調整されている。坏部は脚部上端の側面から成形されている。また、坏部内面中央の凹みに薄く粘土を貼り付けたものが剝離した痕跡が残る。

891は手培形土器の覆部の破片である。口縁端部に粘土を貼り付けて拡張し、拡張した面に2条の細い突帯を貼り付けている。内側の突帯は剝離している。外面はハケで調整されている。

**SH183 (第176図892~903)** 892は貯蔵穴から出

土した。土師器高坏で、八字状に直線的に開く。外面はミガキで調整される。

893~903は埋土中などから出土した。いずれも土師器である。

893・894は壺である。893は短頸の瓢形壺で、口縁部は内湾する。口縁端部内面に明瞭な内傾面は認められないが、ヨコナデが施されている。口縁部外面には、二枚貝の貝殻腹縁による逆位の連弧文が2段に施文されている。また、頸部直上には浅く不明瞭な直線文が施されている。894は広口壺の口縁部の小片で、口縁端部にヨコナデによる面を作り出しており、一部に列点文が遺存する。

895~898は甕である。895は受口状口縁甕で、器壁は薄く、明瞭な受口状を呈する。屈曲部外面には櫛状工具による列点文が施されている。また、頸部内面にはハケが施されている。896は体部片で、脚台が付くと思われる。内面にはケズリが施されている。897は台付甕の脚台部片である。898はS字状口縁甕の脚台部片で、底部内面にはユビオサエの凹みを埋めるように粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられている。

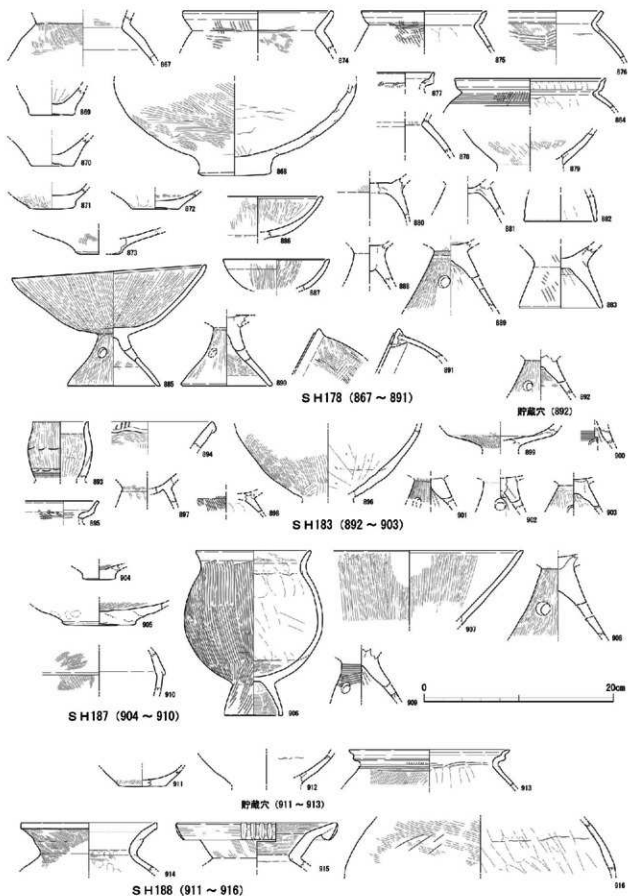
899~903は高坏である。899は有稜高坏の坏部片で、外面はミガキで調整される。900~903は脚部で、900は小片であるが外面に直線文が施され、透孔がわずかに残る。903は中空の脚部の頂部を粘土を詰めて閉塞し、さらに坏部内面中央にも凹みを埋めるように粘土を貼り付けている。

**SH187 (第176図904~910)** 904~910は土師器である。

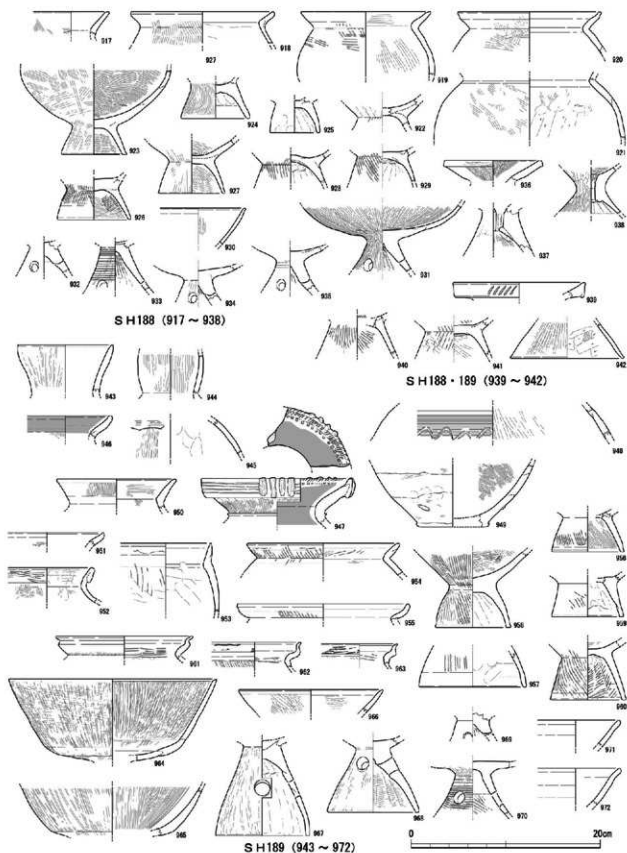
904・905は壺の底部である。904は小型のもので、底部が突出する。905は底部を成形した際の粘土接合痕が比較的に明瞭に観察できる。

906はく字状口縁台付甕で、ほぼ全形が復元できたものである。頸部は緩やかに屈曲し、口縁部はく字状に単純に外反する。口縁端部は丸く収められる。体部外面は粗いハケで調整される。体部下半には製作時の乾燥単位を示す接合痕と調整の変化が明瞭に認められる。脚台部の内面はハケで調整されており、脚端部は明瞭な面をもつ。外面にはススが付着する。

907~909は高坏である。907は有稜高坏の口縁部片と思われる。口縁端部には不明瞭ながらも内傾す



第176図 SH178・183・187出土遺物、SH188出土遺物① (1/4)



第177図 SH188出土遺物②、SH189出土遺物 (1/4)

る面が認められる。外面はハケを施した後にタデミガキで調整されている。908は脚部で、頂部に凹みをもつ。坏部を脚部上端の側面から成形した後に、この凹みを埋める形で坏部内面中央に粘土を貼り付けていたが、それが剥離したものと考えられる。909はやや内湾する脚部で、外面上半に直線文を施す。

910は手培形土器の体部片と考えられる。小片で、全体の形状は不明である。屈曲部で粘土を接合した際に一部をはみ出させ、突帯状にしている。外面はハケによって調整されている。

**SH188 (第176・177図911~938)** 911~913は貯蔵穴から出土した。いずれも土師器である。

911は壺の底部片と思われる。912は甕の体部片で、脚台が付く可能性が高い。913はS字状口縁甕である。口縁部の屈曲は明瞭で、口縁部上半は直立気味に立ち上がり、口縁端部に強いナデを施して外方へ引き出し、面を作り出している。口縁部外面に押し引列点文は認められない。頸部直下にはヨコハゲがわずかに残る。最上段のヨコハゲはかなり深く沈線状になっている。頸部内面にはハゲが施されている。

914~938は埋土中などから出土した。いずれも土師器である。

914~916は壺である。914は口縁部が単純に外反して開く広口壺である。口縁端部は面をなす。外面はハケで調整されるが、粘土接合痕が残るなど、やや粗雑である。915は広口壺の口縁部で、中位でやや外方に屈曲する。口縁端部は下方に折り返して肥厚させ、面を作る。口縁端部の面には擬凹線文と棒状浮文が認められる。916は大型の壺の体部片で、外面はハケで調整される。鋭い工具痕と思われる痕跡が数箇所認められる。

917~929は甕である。

917~919はく字状口縁甕である。918は口縁部が強く外方へ屈曲し、頸部内面は明瞭な稜をなす。919は口縁部外面の上半にやや強いヨコナデを施しており、口縁端部はわずかに面をなすなど、受口状口縁に近い。体部外面のハケは粗い。

920は受口状口縁甕で、口縁部は緩やかな受口状を呈し、口縁端部は不明瞭ながら面をなす。

921は頸部から体部にかけての破片で、内面はケズリやハケによって調整されている。

922~927は台付甕の脚部片である。922は、断面の粘土接合痕からみて、脚部を成形した後に別に成形した体部を上に乗せ、接合部に粘土を貼り付けて一体化させた可能性が高い。923は体部下半まで遺存するもので、体部・脚部ともに内面はハケで調整する。925は小型の台付甕の脚部片と思われ、やや内湾する。926・927は脚部内面をハケで調整している。

928・929はS字状口縁甕の脚部片である。いずれも脚端部は欠損しており、底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。

930~935は高坏である。

930は有稜高坏の口縁部片と思われる。内面にススが附着する。931は坏部下半から脚部上半にかけて遺存している。坏部の底部付近に接合痕が残るため有稜高坏と思われるが、坏部の屈曲は不明瞭で、形態は碗形高坏に近い。

932~935は脚部である。いずれも脚部上半の破片で、頸部から八字状に開く。933は脚部外面上半に直線文が施されている。また、坏部中央は剥離面となっており、脚部上端の側面から坏部を成形した後に、脚部上面から坏部に及ぶように粘土を貼り付けていたと考えられる。

936~938は器台である。936は小型器台の受部片で、直線的に外方に開き、口縁端部は面をなす。全体に丁寧にミガキによって調整され、口縁端部の面にもミガキが施される。937は脚部上半の破片である。受部から脚部にかけて孔が貫通しているが、孔内面にはシボリ痕と思われるものが認められ、シボリによって筒状のものを成形し、その後、脚部や受部を作り出していったと推測される。また、脚頂部には部分的に粘土が粗く貼り付けられ、孔を一部塞いでいる。938は受部から脚部方向へ棒状工具を通すことによって貫通孔を成形していると思われるが、受部内面の孔付近にはシボリ痕と思われる痕跡がわずかにみられ、やはりシボリによって筒状のものを成形し、全体の成形に合わせて孔も棒状工具によって整形した可能性が考えられる。外面にはミガキが施されているものの、ミガキ前に施されたケズリが広範に残されており、調整はやや粗雑である。

**SH188・189 (第177図939~942)** 939~942は一

次調査時にSH188ないしSH189から出土したもので、どちらの遺構に属するか不明である。いずれも土師器である。

939は壺の口縁部片で、口縁端部はやや拡張して面をなし、ハケ状工具による列点文が施されている。940・941は台付甕の脚台部片である。940は脚台部内面にも粗いハケが施されている。942は高坏の脚部片である。内面にはケズリが施されている。こうした調整や、器壁がやや薄く小型であることから、器台の脚部の可能性も考えられる。

**SH189 (第177図943~972)** 943~970は土師器である。

943~949は壺である。

943~945は小・中型の壺である。943は口縁部が直立気味で、口縁端部は丸く収める。944は短頸の瓢形壺で、文様は認められない。945も瓢形壺の肩部片である。二枚貝の貝殻敷線による連弧文が施されており、連弧文より上には浅く不明瞭な直線文が施されている。

946~949は中・大型の壺である。946は若干内湾する短い口縁部で、内外面に赤彩が認められる。947は広口壺の口縁部で、かなり加飾されているものである。口縁端部は上下に拡張して擬凹線文を施し、4本を一組とする棒状浮文を貼り付ける。口縁部内面には列点文と竹管文が施されており、赤彩も認められる。頭部外面には突帯が貼り付けられている。948は大型の壺の肩部片で、直線文と波状文が認められる。949は体部から底部にかけての破片で、体部外面に粘土接合痕が残るなど、調整は全体的に粗雑である。底部付近の外面に、楕円形の粘土塊が付着しているが、意図的なものかは不明である。

950~963は甕である。

950~954はく字状口縁甕である。950は口縁部が直線的に外方に開き、口縁端部はわずかに面をなす。952は特徴的な個体で、頭部が緩やかに屈曲し、口縁部は外面に大きく折り返して肥厚させている。口縁部外面は粗いヨコハケによって調整している。953は甕としたが、口縁部が短く直立し、短頸壺や鉢に近い形状である。口縁部外面には粘土接合痕が残るなど、調整は粗い。外面にはススが付着している。954は頭部が強く屈曲し、口縁部は短い。

955は受口状口縁甕である。口縁部の屈曲は緩い。

956~960は台付甕の脚台部である。956は体部下半まで遺存しており、外面は粗いハケで調整される。脚台部は内湾し、脚端部は面をなす。957はやや大型のものである。外面には粗いハケが施されている。959は直線的にハ字状に開く。内面下半に粘土接合痕が認められるが、S字状口縁甕にみられるような脚端部の折り返しとは異なり、脚端部は明瞭な面をなす。SH169/324出土の791に近い作りのものと考えられる。960は内面に断続的なヨコハケを施している。

961~963はS字状口縁甕である。961は口縁端部に強いナデを施して面を作ると同時に大きく外方へ引き出している。962・963はいずれも口縁部外面に押し列点文が施されている。頭部内面にはハケが施されている。963の口縁端部は強いナデによって凹線状に凹む。

964~970は高坏である。

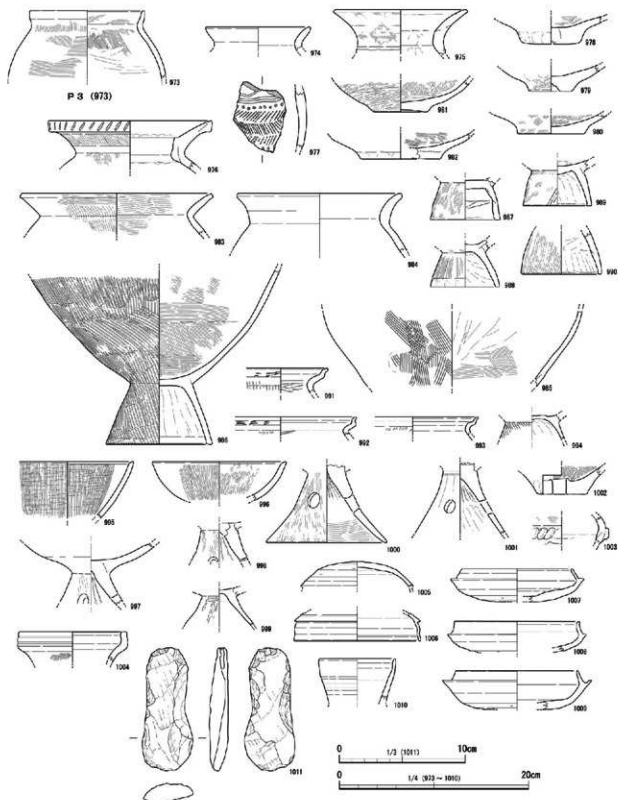
964・965は有稜高坏の坏部である。964は深い坏部で、口縁端部にはヨコナデによって内傾する面を作り出す。坏部の屈曲は緩く、外面には明瞭な稜が認められない。坏部外面は全体的にヨコミガキが施された後に、タデミガキによって調整している。965は964に比べると坏部の屈曲が明瞭で、外面に不明瞭ながらも稜が認められる。

966は有稜高坏ないし碗形高坏の坏部片と思われるが、小片で全体の形状は不明である。小型のもので、外面はハケを施した後に幅広のミガキによって調整している。内面にはヨコミガキが施される。壺や器台の破片の可能性も残る。

967~970は脚部である。967は透孔の数は不明であるが、おそらく3方向と思われる。脚はあまり開かず、内湾も弱い。968は低い脚部で、内面は断続的なヨコハケによって調整されている。970は脚部外面上半に直線文を施している。

971・972は山茶碗である。いずれも口縁部の小片で、混入したと考えられる。

**SH190 (第178図973~1011)** 973は主柱穴P3から出土した。土師器甕で、口縁部は直立気味に短く立ち上がり、やや受口状に内湾する。体部外面はハケによって調整される。



第178图 SH190出土遺物 (1/4、1/3)



974~1011は埋土中などから出土した。

974~1003は土師器である。

974~982は壺である。

974・975は小・中型の壺の口縁部である。974は口縁部が短く外反し、口縁端部は丸く収められる。975は口縁部が外反しながら大きく開く。肩部に直線文と思われる痕跡がわずかに残る。

976・977は中・大型の壺である。976は口縁部内面に屈曲部を作り出す。屈曲部は突帯状に若干突出し、成形時のユビオサエが明瞭に残る。口縁端部は面をなし、ハケ状工具による列点文が施されている。977は肩部片で、小片のため器形は不明である。直線文、竹管文、矢羽根状文が施されており、直線文より上位にも曲線的な波線が認められ、波状文が施されていた可能性もある。かなり加飾された壺と思われる。

978~982は中・大型の壺の底部である。978・979は輪台状の底部で、底部外面中央が凹む。981は体部外面が工具ナデとヨコミガキによって調整されている。

983~994は甕である。

983・984はく字状口縁甕である。983は頸部が明瞭に屈曲し、口縁端部は面をなす。内外面ともハケで調整されている。古墳時代後期に下るもの可能性もある。984は頸部の屈曲が緩く、口縁部は外反する。口縁端部は丸く収められる。内外面ともナデを主体として調整されている。古墳時代後期のものである可能性が高い。

985は体部下半の破片である。大型の甕で、外面は粗いハケで調整されており、ススが付着する。おそらく脚台が付くものと思われる。

986~990は台付甕の脚台部である。986は体部下半もかなり残る。体部から脚台部にかけて、外面は全体的に粗いハケで調整されている。脚台部は直線的にハ字状に開き、脚端部は面をなす。987は内面に粘土接合痕を残す。988はハ字状に開く。脚裾部外面にはユビオサエが残る。989は脚端部が面をなすが、若干内側にハミダシ状に突出する。調整等の特徴からみて、在地で製作されたS字状口縁甕の脚部になる可能性も考えられる。990は緩やかに内湾する。

991~994はS字状口縁甕である。991・992は口縁部外面に押し列点文を施し、頸部内面には粗いハケを施す。993は小片で押し列点文の有無は不明確である。頸部は緩やかに屈曲し、内面にハケは確認できない。994は脚台部片で、器壁は薄い。底部内面に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。

995~1001は高坏である。

995・996は有稜高坏ないし碗形高坏の坏部片である。995はやや深い坏部で、口縁端部には内傾する面をもつ。有稜高坏の坏部の可能性が高い。内外面とも、幅広のヨコミガキを施した後に、細いタテミガキによって調整している。996は小型の碗形高坏と思われる。坏部は浅く、口縁端部は面をなす。

997~1001は脚部である。997は坏部が一部遺存している。坏部は不明瞭ながらも屈曲しているように見受けられ、有稜高坏と思われる。脚部上端の側面から坏部を成形している。999は器壁が薄く、やや内湾する。1000は透孔が3方向に開けられている。外面はハケを施した後にミガキによって調整されている。一部が二次的に被熱している。1001は頸部外面にヨコ方向の幅が狭い連続的なヨコナデが認められる。坏部の成形や調整に伴う痕跡と考えられる。

1002は有孔鉢である。底部の破片で、焼成前に穿孔が施されている。おそらく、底部外面から内面に向かって太い棒状工具によって穿孔されたと推定される。

1003は手焙形土器の体部片と思われる。緩やかに屈曲する体部の外面に突帯を貼り付け、突帯上に連続的な押圧を加えて列点文状にしている。押圧にはハケ状工具などが用いられている可能性もあるが、風化のため不明確である。

1004は弥生土器である。受口状を呈する細頸甕の口縁部片で、口縁部外面には凹線文が2条施されている。頸部外面はハケで調整されている。弥生時代中期後葉のもので、混入したと考えられる。今回の調査で確認された弥生時代中期の遺物は、この土器片のみである。

1005~1010は須恵器である。まとまった量が出たため、付近に古墳時代後期の遺構があり、そこから混入したと考えられる。

1005・1006は环蓋である。いずれも口縁部と天井

部の境の稜は明瞭で、1006では比較的シャープに突出する。また、1006の口縁部内面には幅広い凹み状の段が作り出されている。

1007～1009は坏身である。1007は口縁端部を丸く収める。底部外面のヘラケズリの範囲は狭い。1008は口縁端部がわずかに外反するが、明瞭な段や内傾面は作り出していない。1009は立ち上がりが高く、口縁端部は丸く収められる。

1010は壺の口縁部である。大きさや形態からみて、提瓶の口縁部の可能性が高い。

1011は石器で、打製石斧である。流紋岩製で、長さ9.8cmの小型品である。両面に主剥離面を大きく残す。混入したと考えられる。

**SH198 (第179図1012～1028)** 1012は主柱穴P1から出土した。土師器台付甕の脚台部である。外面は粗いハケで調整されるが、脚裾部のみやや細かいハケで調整されている。断面の粘土接合痕からみると、筒状の脚台部を成形後、底部を円板充填によって成形している可能性が高い。

1013～1015は貯蔵穴から出土した。いずれも土師器である。1013は壺の底部で、輪台状である。1014は台付甕の脚台部から体部下半にかけての破片である。1015はS字状口縁甕である。口縁部から体部下半までが残る。口縁端部は強いヨコナデによって面をなし、外方へ強く引き出される。口縁部外面には押し列点文が施されている。頸部は緩やかに屈曲し、内面には粗いハケが施されている。体部は若干胴が張り、球形に近くなっている。

1016～1028は埋土中などから出土した。いずれも土師器である。

1016～1020は壺である。1016・1017は小型の壺である。1016は外面をハケで調整する。体部外面には粘土接合痕が顕著に認められるなど、全体的に粗雑である。1017は風化のため調整は不明瞭であるが、体部外面にヘラ状工具による山形文が施されている。

1018～1020は中・大型の壺である。1018は口縁部が外反しながら開き、口縁端部は面をなす。口縁部内面には、鋭利な工具で縦位の直線状の線刻が6本施されている。1019は口縁部が直立気味に立ち上がり、中位で外方へ強く屈曲する。口縁端部は下方に

拡張されている。頸部外面には突帯を貼り付けている。1020は体部下半の破片である。成形時の乾燥単位を示すと思われる接合部で緩やかに屈曲し、外面には稜が形成されている。外面はハケを施した後にヨコミガキによって調整されている。

1021～1027は甕である。

1021・1022は受口状口縁甕である。1021は口縁部の器壁が薄く、明瞭に屈曲する。1022は口縁部の屈曲が不明瞭であるが、屈曲部の外面は稜をなす。

1023・1024は台付甕の脚台部である。1023はわずかに内湾する。脚台部を成形後、脚台部上端の側面から体部を成形しており、また、底部中央の凹みを埋めるように粘土を貼り付けている。1024は八字状に開く。内面はハケで調整されている。

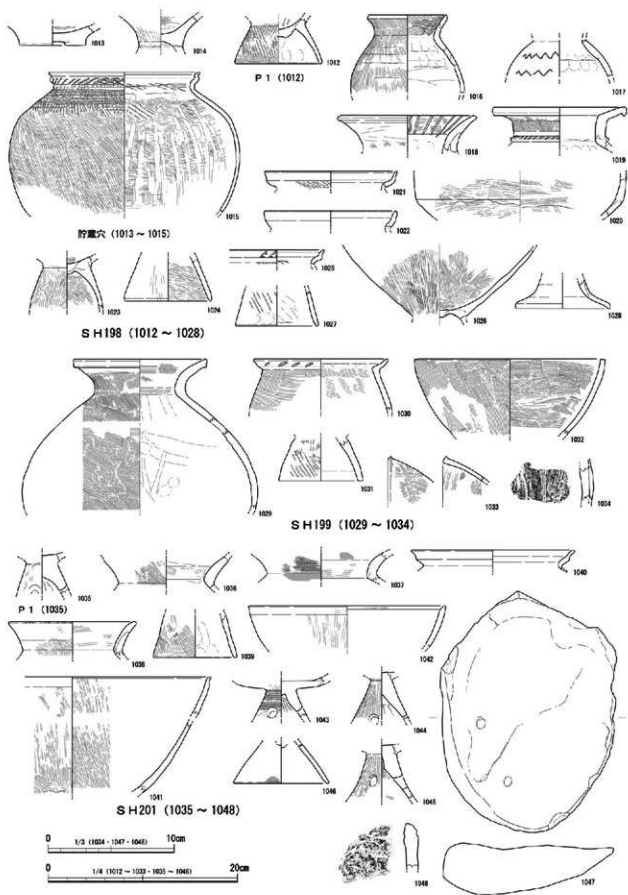
1025～1027はS字状口縁甕である。1025は口縁部の小片で、外面には押し列点文が施されている。1026は体部下半から脚台部にかけての破片で、底部内面及び脚頂部には粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。また、外面にはススが付着し、内面にもわずかにゴケが付着する。1027は脚台部片で、脚端部は内側にわずかに折り返す。

1028は高坏である。外反しながら開き、脚端部には外面に強いナデが施され、爪先立ちとなる。内外面ともヨコナデで調整されている。古墳時代後期のもので、混入したと考えられる。

**SH199 (第179図1029～1034)** 1029～1033は土師器である。

1029は広口壺で、口縁部は外反し、口縁端部は面をなす。口縁部外面には工具のアタリとも考えられる細い沈線状の痕跡が残る。体部外面はハケによって調整されている。また、体部外面には帯状にススが付着する。1030は受口状口縁甕で、頸部は強く屈曲し内面は明瞭な稜をなすが、口縁部の屈曲は緩い。口縁部外面にはハケ状工具による列点文が施される。1031は台付甕の脚台部である。1032は鉢と思われる。内外面をハケで調整しており、器壁はやや厚く、口縁端部は明瞭な面をなす。有孔鉢の可能性もある。1033は手焙形土師の覆部の小片である。内外面ともハケで調整されている。

1034は縄文土器で、有文深鉢の体部片である。縦位の隆帯が貼り付けられ、その横には条線が施され



第179圖 SH198・199・201出土遺物(1/4、1/3)

ている。混入したと考えられる。

**S H 201 (第179図1035~1048)** 1035は主柱穴P I から出土した。土師器高坏で、脚部の破片である。

1036~1048は埋土中などから出土した。

1036~1046は土師器である。

1036・1037は壺である。いずれも中・大型の広口壺である。1037は口縁部が大きく外反しながら開く。口縁部内外面に赤彩が残る。

1038~1040は甕である。1038はく字状口縁甕で、口縁端部は丸く取められ、刻目が施されている。1039は台付甕の脚部片で、外面はハケで調整される。また、爪痕状の工具痕が複数認められる。1040はS字状口縁甕である。口縁部上半は大きく外反しながら開き、口縁端部のヨコナデによる面は不明瞭である。頭部内面にはハケは認められない。

1041~1045は高坏である。1041は有稜高坏の坏部である。坏部は深い。口縁端部には不明瞭な内傾する面が認められる。1042はやや小型のもので、碗形高坏の坏部の可能性もある。口縁端部には明瞭な内傾面をもつ。1043~1045は脚部である。1043は坏部が一部遺存する。有稜高坏で、脚部外面上半に直線文を施す。1045は脚部内面頂部が孔状となっているが、軸芯痕ではない。

1046は器台の脚部片と思われるものである。小型で器壁が薄く、外面にわずかに赤彩が残る。

1047は石製品である。台石と思われる。明瞭な加工痕は認められないが、平坦な面があり、一部被熱している。平坦面にはわずかに敲打痕と思われる痕跡が残る。

1048は縄文土器である。深鉢の口縁部片と思われる。口縁端部は丸く取めており、外面には沈線と思われる痕跡がわずかに認められる。混入したと考えられる。

**S H 202 (第180図1049~1063)** 1049~1057は土師器である。

1049は小型の壺と思われる、口縁部の小片である。

1050~1055は甕である。

1050~1052はく字状口縁甕である。1050はわずかに受口状を呈し、口縁端部は面をなす。1051・1052も口縁部がやや内湾し、受口状に近い形態となる。

1053~1055はS字状口縁甕である。いずれも口縁

部の破片である。1053は小片で、口縁部上半は外反する。風化していることもあり、口縁端部の面は不明瞭である。外面には列点文が施されている。施文時に工具を引きずった様子は明瞭ではなく、押し列点文とはいいがたい。頭部内面にはわずかにハケが残る。1054は口縁端部にヨコナデによって凹む明瞭な面をもつ。1055も小片で、屈曲部はかなり明瞭な稜をなし、口縁部上半は外反するが、口縁端部の内面に不明瞭なヨコナデによる幅広い面をもつ。頭部内面にはハケが施されている。

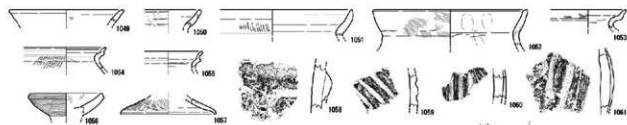
1056・1057は器台である。1056は小型器台の受部片で、器壁は厚く、内湾する。口縁端部は面をなす。受部外面はハケを施した後、下半をヨコミガキによって丁寧に調整する。1057は脚部片である。大きく開く脚部で、脚端部でわずかに内湾する。外面には工具痕とみられる痕跡が認められる。

1058~1063は縄文土器である。1058~1063は有文深鉢の体部片と思われる。1058は頭部付近の破片で、横位の隆帯と縦位の隆帯が認められる。1060・1061も縦位の隆帯を貼り付けており、1061は沈線や条線も施されている。1063は小片で、台付深鉢の破片の可能性も考えられる。剥離した隆帯状の破片で、刻目が施されている。

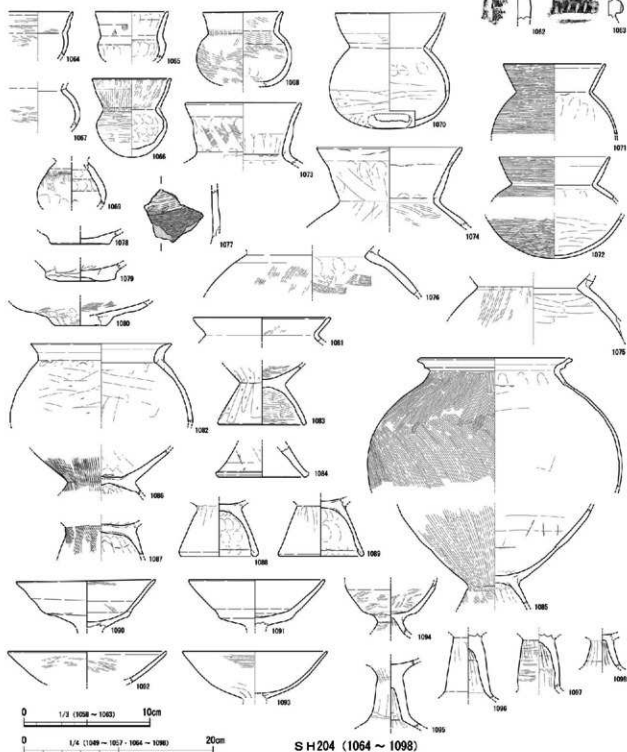
**S H 204 (第180・181図1064~1107)** 1064~1101は土師器である。

1064~1080は壺である。

1064~1072は小・中型の壺である。1064~1066は小型丸底壺で、いずれも比較的丁寧な作りであるが、形態は個体差が大きい。1064は外面をヨコミガキで調整しており、頭部内面には明瞭な稜をもつ。1065はハケやナデ、オサエによって調整されており、やや粗雑である。1066は全体が復元できたものである。体部外面はヨコミガキで調整されるが、口縁部内外面はタテミガキによって調整されている。断面から見ると、頭部で体部と口縁部とが接合されているようである。1067も小型丸底壺と思われる。体部がヨコミガキによって調整されており、外面にはススが付着する。1068は小型丸底壺に近いが、体部が扁平な球形を呈し、外面はハケで調整される。1069は小型の壺で、体部は下ぶくれの形状を呈する。肩部外面にはヨコハケと思われる痕跡が一部認められる。



SH202 (1049 ~ 1063)



SH204 (1064 ~ 1098)

第180図 SH202出土遺物、SH204出土遺物① (1/4、1/3)

1070は小型丸底壺より一回り大型の壺である。口縁部はやや内湾し、口縁端部は丸く収められる。体部は扁平な球形を呈する。体部外面下半はケズリによって調整されている。また、底部付近には焼成後に打ち欠きによって開けられた大きな孔が半分程度遺存している。1071・1072は頸部が明瞭に屈曲し、口縁部が直線的にのびるものである。外面は全体的に細かいヨコミガキによって丁寧に調整されるが、1072は底部付近にミガキの前に施されたケズリが一部に認められる。また、いずれも外面にススが附着している。

1073～1077は中・大型の壺である。1073は口縁部が直立気味に立ち上がり、直線的にのびる。口縁部外面はハケで調整されるが、コビオサエの痕跡が明瞭に残るなど、調整はやや粗い。体部内面にはケズリが施されている。1074も口縁部が直線的にのびる。口縁部や体部外面は工具ナデで調整されており、やはり調整は粗い。1075・1076は肩部の破片で、1075は外面がミガキで調整されている。1077は肩部の小片で、直線文と列点文が施されている。また、列点文より下には赤彩が施されている。

1078～1080は中・大型の壺の底部である。1079は底部外面中央が大きく凹む。

1081～1089は甕である。

1081・1082はく字状口縁甕である。1081は口縁部が直線的にのびる。1082は口縁部が短く外反する。体部外面はケズリなどによって調整されており、全体的に粗雑である。

1083・1084は台付甕の脚台部である。1083は1082と同様に外面がケズリによって調整されている。内面はハケ状の工具ナデで調整されている。1084は直線的に開く。脚端部は面をなす。外面には工具痕と思われる痕跡が一部に残る。

1085～1089はS字状口縁甕である。1085は上半部と下半部の破片があり、同一個体と考えられる。口縁部は器壁が厚く、口縁部内面の屈曲は緩い。口縁部上半は大きく外反し、口縁端部はやや肥厚して面をなす。体部には羽状にタテハケが施されているが、肩部にヨコハケは施されていない。底部内面及び脚頂部には粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられている。また、外面にはススが顕著に附着し、内面にも

コゲが認められる。1086・1097は脚台部片で、脚端部は欠損する。いずれも底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。1088・1089も脚台部で、外面は工具ナデで調整されており、ハケは認められない。脚端部は明瞭に内側に折り返されている。

1090～1098は高坏である。

1090～1094は坏部である。1090・1091は坏部下半が明瞭に屈曲し、外面は稜をなす。内外面ともヨコミガキなどによって調整されている。1092は口縁部の破片で、内外面ともヨコミガキが施されている。1093は碗形の坏部である。外面は工具ナデやヨコミガキによって調整されている。脚部との接合部には剥離面が認められ、脚部上端側面から坏部を成形し、脚部上面から坏部底部内面にかけて粘土を貼り付けていると思われる。1094は深い碗形の坏部をもつ小型のものである。坏部内外面と脚部外面は細かいヨコミガキによって調整されている。

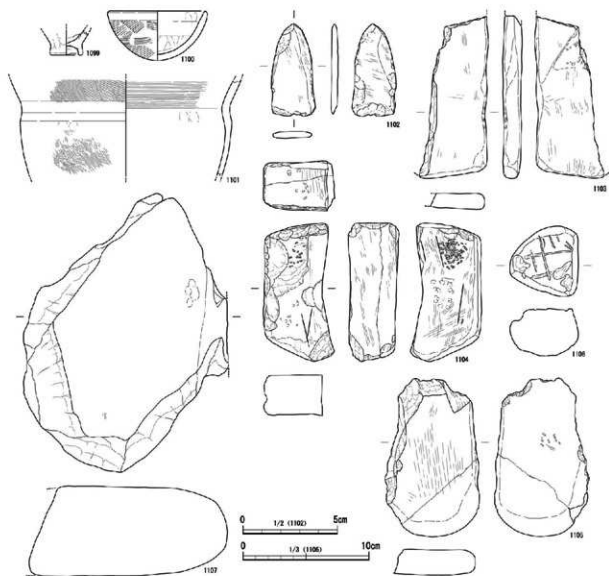
1095～1098は脚部である。1095～1097はいわゆる屈折脚で、1095・1096は脚柱部の外面をナデや工具ナデによって調整し、内面にはケズリを施している。1097は脚柱部がややエンタシス状を呈し、外面に細かいヨコミガキを施す。1098は小型のものである。

1099～1101は鉢と思われる。1099は小型のもので、底部が高台状を呈する。1101は碗形を呈し、底部は丸底である。外面はハケで調整される。1101はやや大型のもので、頸部の縮まりは弱い。口縁部は直線的に開く。

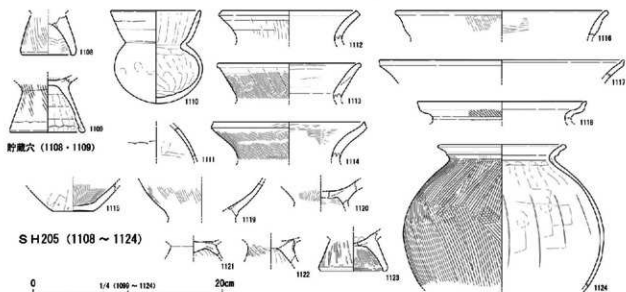
1102～1107は石製品である。

1102は剣形石製品または鎌形石製品と考えられるものである。肌理の細かい砂岩ないしホルンフェルス製で、薄い板状を呈する。剥離によって大きかな形を成形した後に、全体を研磨して整形する。側縁も研磨され、面をなす。そのため、明瞭な刃部は認められない。なお、刃部が認められないことや、比較的大型であること、弥生時代の遺物が僅少であることなどからみて、弥生時代の磨製石器ではないと判断した。

1103～1106は砥石である。1103はホルンフェルス製で、板状を呈する。半分程度を欠損する。表裏に使用による擦痕が認められ、一部には敲打痕も残る。



SH204 (1099 ~ 1107)



SH205 (1108 ~ 1124)

第181圖 SH204出土遺物②、SH205出土遺物①(1/4、1/3、1/2)

1104はやや軟質の泥岩製で、断面形は四角形を呈する。主要な面2面と、内湾する側面、そして片方の小口面の4面を使用面としている。使用面にはいずれも擦痕や線状痕が明瞭に残るが、主要な2面には先端が尖った工具による敲打痕が集中する箇所が認められる。この敲打痕は大きさの割にかなり深く形成されており、鉄製の工具による痕跡の可能性が高い。1105は火砕岩の扁平な礫を利用したもので、片面に顕著に擦痕が認められる。もう片面にもわずかに擦痕と敲打痕が残る。1106は軽石である。小型の円礫状のもので、平坦面が1箇所認められる。その面に、深い線状痕が格子状に残されている。

1107は台石である。斑れい岩の扁平な礫を利用したもので、大部分を欠損しているが、かなり大型である。上面は使用等に伴う摩滅によってかなり平滑であるが、使用痕は不明瞭で、擦痕や敲打痕と思われるものが、ごくわずかに認められる。

**S H205 (第181・182図1108～1149)** 1108・1109は貯蔵穴から出土した。いずれも土師器である。1108は小型の台付甕の脚台部である。1109はS字状口縁甕の脚台部で、脚端部は内側に折り返す。脚端部外面にも粘土接合痕が認められる。また、底部内面のみに粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられている。

1110～1149は埋土中などから出土した。

1110～1143は土師器である。

1110・1111は小・中型の壺である。1110は小型丸底壺で、全形が復元できたものである。内外面ともナデやユビオサエによって調整されている。器壁は厚く、一部に粘土接合痕が残るなど、全体的に粗雑な印象を受ける。1111は瓢形壺の肩部の小片である。二枚貝の貝殻腹縁による連弧文が施されている。

1112～1115は中・大型の壺である。1112～1114はいずれも口縁部で、やや外反しながら開く。口縁端部は面をなす。1115は底部で、外面にはケズリが施されている。鉢の底部の可能性もある。

1116～1134は甕である。

1116・1117はく字状口縁甕である。いずれも口縁部の小片である。

1118は受口状口縁甕である。口縁部は明瞭に屈曲するが、屈曲部の外面の稜は甘い。口縁端部は面をなす。また、頸部外面には幅広い沈線状のものが認

められる。

1119～1123は台付甕の体部片や脚台部である。1119は体部片で、脚台部との接合部で剥離している。内面には粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられている。1121も底部内面及び脚頂部に粘土が貼り付けられているが、粗い砂粒は含んでいない。1122は外面に非常に粗いハケが施されている。1123はハ字状に直線的に開く。低い脚台で、内外面ともハケで調整されている。

1124～1134はS字状口縁甕である。

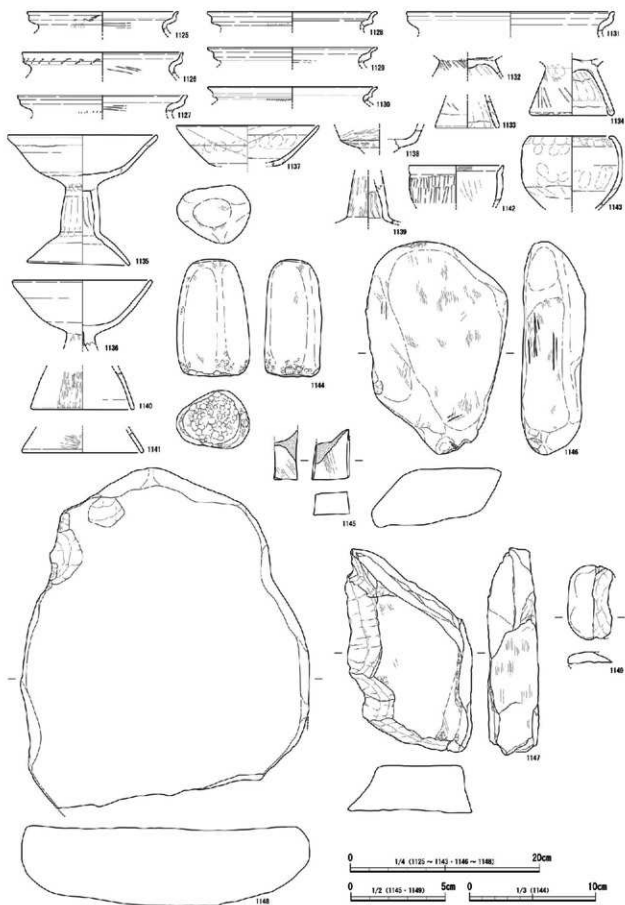
1124～1131は口縁部などの破片である。1124は体部下半まで遺存する。口縁部の屈曲は内面ではほぼ失われており、外面のみが突帯状の稜として屈曲の痕跡を残す。口縁端部はやや肥厚し面をなす。体部外面には粗いタテハケが羽状に施されるが、肩部にヨコハケは施されていない。体部内面には調整時のものと思われる鋭い沈線状の工具痕が、縦方向に複数残されている。他の口縁部片はいずれも小片であるが、1125・1126には外面に押し列点文が認められ、頸部内面には粗いハケが施されている。1127は口縁部上半が短く、口縁端部の外方への引き出しも弱い。そのため、受口状口縁に近い。1128・1129は口縁部上半が強く外反し、口縁端部は丸く取られるが、口縁端部内面にわずかにヨコナデによる面が認められる。1129は頸部内面にヨコハケを施しており、また頸部外面には頸部調整に伴う沈線と思われるものが認められる。1130は口縁部上半が若干長くのびる。口縁端部内面には不明瞭ながら面が認められる。

1132～1134は脚台部である。1132は底部内面にやや粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられている。1133は小型のものである。外面には粘土接合痕が残る。1134は脚端部を内側に折り返す。その後、折り返した部分をヨコナデによって調整している。また、底部内面及び脚頂部に粘土を貼り付けているが、粗い砂粒は含まれていない。胎土や器壁が若干厚い点などからみても、在地産のS字状口縁甕の脚台部と考えられる。

1135～1141は高坏である。

1135～1138は全形が復元できたものや、坏部の破片である。1135は脚部が途中で屈曲して外方に開く、いわゆる屈折脚の高坏である。坏部は底部と口縁部





第182図 SH205出土遺物② (1/4、1/3、1/2)

との境でやや屈曲する。全体的にナデやヨコナデによって調整されるが、粗雑な印象を受ける。1136・1137も坏部に不明瞭な屈曲が認められる。1136は脚柱部にミガキが施されている可能性がある。1137は坏部内外面をヨコナデや斜め方向のナデによって調整しているが、ユビオサエの痕跡が明瞭に残るなど、粗雑である。1138は小型のもので、底部と口縁部との境で強く屈曲する。外面にはミガキが施されている。

1139～1141は脚部である。1139は屈折脚で、脚柱部内面にはシボリ痕と爪痕状の工具痕が残る。外面はミガキによって調整されている。1140は内湾気味の脚部である。1141は外面にヨコミガキが施されている。

1142・1143は鉢である。1142は短く外方に開く口縁部をもつ。体部は碗形で、外面は粗いハケによって調整される。1143は無頸の鉢と思われるもので、全体的に内湾し、口縁端部は内側に突出する。内外面ともユビオサエの痕跡が顕著に残り、粗雑な印象を受ける。

1144～1149は石器や石製品である。

1144は石杵で、硬質砂岩の棒状礫の一端に、敲打によって作業面を作り出している。作業面には敲打痕以外に部分的に不明瞭な擦痕を伴う摩擦が認められ、敲打成形後のものと考えられる。ただし、整形時の研磨か、使用に伴う摩擦かは判断できない。作業面以外にも全体的に研磨や敲打痕が認められ、特に基部先端は研磨により平滑な面となっている。ただし、基部側の面には使用に伴う擦痕や敲打痕は認められない。作業面には赤色顔料などの付着は確認できなかった<sup>9)</sup>。

1145～1147は砥石である。1145は肌理がかなり細かいホルンフェルス製のもので、精美な直方体を呈する。かなりの部分を欠損するが、小口面を除く4面に擦痕や線状痕が認められる。1146はホルンフェルスの扁平な礫を利用したものである。かなり大型で、元は台石であったものを砥石として再利用した可能性もある。片面と、側面のうち1面に擦痕や鋭い線状痕が認められる。1147も大型のものである。泥岩の扁平な礫を利用したもので、形状や一部に敲打痕が遺存していることなどから、やはり台石を砥

石として再利用した可能性がある。大きく欠損しているが、上面と遺存している側面に擦痕が認められる。

1148は台石である。溶結凝灰岩の扁平な礫を利用しているが、上面には明瞭な面が作り出されており、使用等に伴う摩擦によってかなり平滑になっている。ただし、擦痕や敲打痕などはほとんど認められない。一部を欠損するが、遺存する長さ35.9cmと、かなり大型のものである。

1149は切目石錘である。泥岩と思われる扁平な円礫を利用したもので、半分程度を欠損するが、一端に研磨による施溝が認められる。縄文時代のもので、混入したと考えられる。

**SH206 (第183図1150～1152)** 1150は主柱穴P5から出土した。土師器の壺で、口縁端部は上下に拡張される。内外面とも風化により調整は不明瞭だが、わずかにハケと思われる痕跡が認められる。

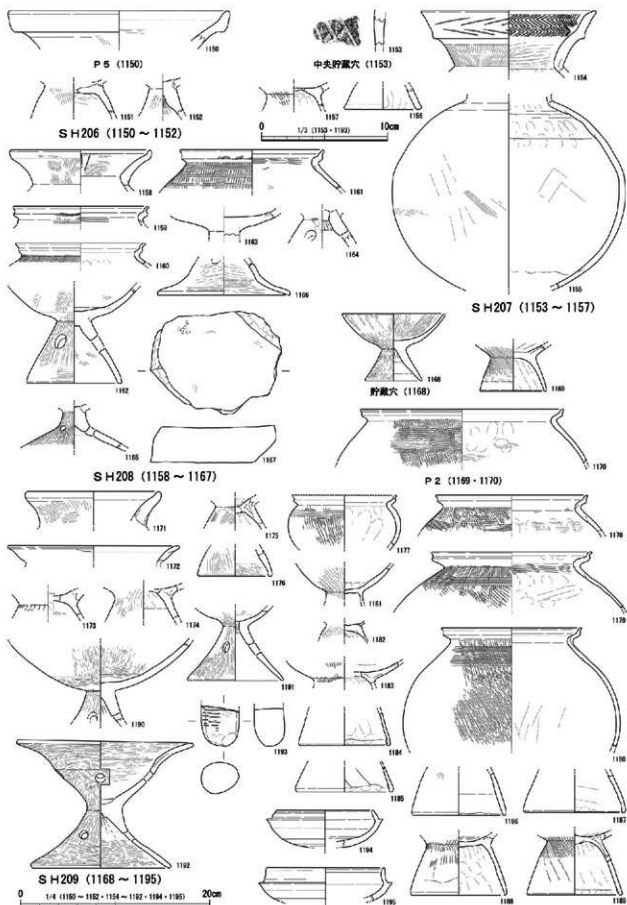
1151・1152は埋土中などから出土した。いずれも土師器である。1151は台付甕の脚台部で、底部内面は貼り付けた粘土が剥離している。1152は高坏の脚部で、透孔は遺存していない。脚部上端の側面から坏部を成形している。

**SH207 (第183図1153～1157)** 1153は貯蔵穴から出土した。縄文土器深鉢の体部片と思われる。斜行沈線ないし矢羽根状文が一部遺存している。混入したと考えられる。

1154～1157は埋土中などから出土した。いずれも土師器である。1154は二重口縁壺の口縁部である。口縁端部は不明瞭な内傾面をなす。二次口縁の内外面にはハケ状工具による矢羽根状文が施されている。一次口縁の外面はハケ、内面は幅広いミガキによって調整される。いわゆる柳ヶ坪型壺である。1155は大型の壺の体部である。球形を呈し、外面にはハケの他にミガキやケズリと思われる痕跡が認められるが、風化により不明瞭である。外面にはススが付着している。1156は台付甕の脚台部の小片である。1157はS字状口縁甕の脚台部の破片で、外面には粗いハケが施されている。

**SH208 (第183図1158～1167)** 1158～1166は土師器である。

1158は広口壺の口縁部である。口縁端部はわずかに



第183圖 SH206・207・208・209出土遺物 (1/4、1/3)

に屈曲して上方に立ち上がり、受口状を呈する。口縁部内面には、鋭い工具による線刻が一部遺存している。

1159～1161はS字状口縁甕である。1159・1161は口縁端部に強いヨコナデによる明瞭な面をもつ。口縁部外面には押し引列点文が施されており、頸部内面にはハケが施される。1160には押し引列点文や頸部内面のハケは認められない。

1162～1165は高坏である。1162は有稜高坏の坏部下半から脚部にかけてが遺存する。坏部の屈曲は緩く、外面の稜は不明瞭である。脚部はわずかに内湾し、透孔が3方向に開けられている。脚部外面はヨコミガキによって調整される。1164は八字状に開く脚部である。1165は中実の短い脚柱部をもち、脚柱部から脚部部に向かって大きく開く、低い脚部である。透孔は小さく、3方向に開けられている。おそらく、碗形高坏ないし小型有稜高坏の脚部と思われる。

1166は器台の脚部と思われる。やや内湾してエンタシス状になった部分から、外方に屈曲して直線的にのび、脚端部に至る。こうした器形や、内外面とも幅広のヨコミガキで調整されていることなどから、SH209出土の1192などに近い形態の器台の破片と推測される。

1167は石製品で、台石である。小片であるが、元はかなり大型のものであったと思われる。砂岩製で、上面は摩滅により平滑になっている。敲打痕や擦痕がわずかに残る。

**SH209 (第183図1168～1195)** 1168は貯蔵穴から出土した。土師器の高坏で、小型のものである。碗形の坏部に、八字状に開く脚部をもつ。透孔は認められない。

1169・1170は主柱穴P2から出土した。いずれも土師器甕である。1169は台付甕の脚部で、外面はハケで調整される。脚端部は折り返していない。1170はS字状口縁甕である。口縁端部のヨコナデは弱く、ほとんど面をなさない。外面のハケはやや雑である。外面にはススが附着している。

1171～1195は埋土中などから出土した。

1171～1192は土師器である。

1171は壺の口縁部である。器壁は厚く、頸部には

体部と剝離した面が残る。外面はハケで調整されている。

1172～1189は甕である。

1172はく字状口縁甕である。口縁部の小片で、口縁端部は丸く収められる。外面には一部に粘土接合痕が残る。

1173～1176は台付甕の脚部である。1174は脚部上端の側面から体部を成形している。1175も断面で脚部と体部の接合痕が観察できる。1176はわずかに内湾する。脚端部は若干内側に突出するが、明瞭に折り返されていない。

1177～1189はS字状口縁甕である。

1177～1180は口縁部から体部にかけての破片である。1177は小型のもので、口縁端部を欠損する。体部はやや扁平で、器壁は厚い。S字状口縁甕としては違和感があり、受口口縁の甕か鉢、あるいは手焙形土器の鉢部の可能性も考えられる。1778・1179は口縁上半が短く直立気味に立ち上がり、口縁端部はヨコナデによって面をなし、外方へ引き出される。1179は頸部内面にハケが施されている。1180は体部下半まで遺存する破片である。体部は肩があまり張らない形状を呈する。頸部内面はヨコナデによって調整されている。

1181～1189は脚部である。1181・1182は小型のものである。1182は底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられている。1183は底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土の貼り付けは認められない。1184・1185は脚端部を明瞭に内側に折り返している。それに対して、1186～1188はほとんど折り返していない。1188は外面に粘土接合痕が残る。1189は同一個体と考えられる破片を図上復元したため、形状は不確実である。脚端部は明瞭に折り返しており、底部内面及び脚頂部には粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。また、底部内面にはコグが附着している。

1190は高坏である。坏部は比較的深く、有稜高坏と思われる。坏部の屈曲は不明瞭であるが、坏部外面では屈曲部を境として上下でミガキの方向が異なっている。

1191・1192は器台である。1191は受部が内湾する。受部から脚部にかけて貫通する孔が認められるが、

孔内にシボリ痕と思われる痕跡が認められることから、工具による穿孔ではなく、シボリによって筒状に成形された可能性が高い。脚部は八字状にやや外反しながら開き、3方向に透孔が開けられている。1192は高坏形を呈する。受部は碗形を呈し、中位で屈曲し外反しながら開く。受部中位には円形の透孔が、おそらく4方向に開けられていると思われる。脚部にも透孔が開けられているが、脚部のものは3方向である。受部内外面と脚部外面下半はヨコミガキによって丁寧に調整されている。特に、受部外面は単位ごとに方向を変えて全体が波状になるようにミガキを施している。

1193は石製品である。砥石と思われるもので、砂岩の円礫の一部に、複数の浅い線状痕が礫の長軸に直交するように残されている。他に顕著な摩滅や擦痕は認められない。

1194・1195は須恵器で、いずれも坏身である。1194は小型のもので、立ち上がりは低く、口縁端部は丸く収められる。1195は立ち上がりが直立気味である。口縁部内面には沈線状の凹みが認められる。底部外面にはロクケズリが施されているが、風化によりケズリの方向等は不明である。これらは混入したと考えられる。

**S H209・238 (第184図1196~1200)** 1196~1200はSH209・238のどちらから出土したか、判然としないものである。いずれも土師器である。

1196は壺ないし甕の肩部である。外面はハケで調整される。1197はく字状口縁甕である。口縁部はやや外反しながら外方へ開く。外面にはススが付着する。1198・1199はS字状口縁甕である。1198は口縁端部にヨコナデによる面が認められ、口縁端部は外方へ引き出される。頸部内面はヨコナデによって調整されている。1199はS字状口縁甕としてはやや器壁が厚く、ハケも乱雑である。在地産のS字状口縁甕か、受口状口縁甕などの可能性もある。1200は高坏の脚部である。坏部内面側から脚部に向かって孔状の凹みが認められるが、脚部内面まで貫通していない。

**S H210 (第184図1201~1212)** 1201は主柱穴P5から出土した。土師器高坏の脚部で、外面はタテミガキによって調整されている。内面には全体的にハ

ケが施されている。

1202~1212は埋土中などから出土した。いずれも土師器である。

1202・1203は小・中型の甕である。1202は短頸の瓢形壺の口縁部で、口縁端部に明瞭な内傾面は認められない。内面はヨコミガキによって調整されている。外面にはわずかに二枚貝の貝殻腹縁による連弧文が遺存している。1203は底部の破片である。鉢の底部の可能性もある。

1204~1210は甕である。

1204はく字状口縁甕である。頸部は明瞭に屈曲し、口縁部は直線的に外方へ開く。口縁端部は丸く収められる。外面は粗いハケで調整されている。

1205~1207は台付甕の脚部である。1205は緩やかに内湾する。1206は外面にタタキが施されていると思われる。タタキを施した後、ハケを施している。内面は断続的なクモの巣状のハケによって調整されている。1207は直線的に開く。

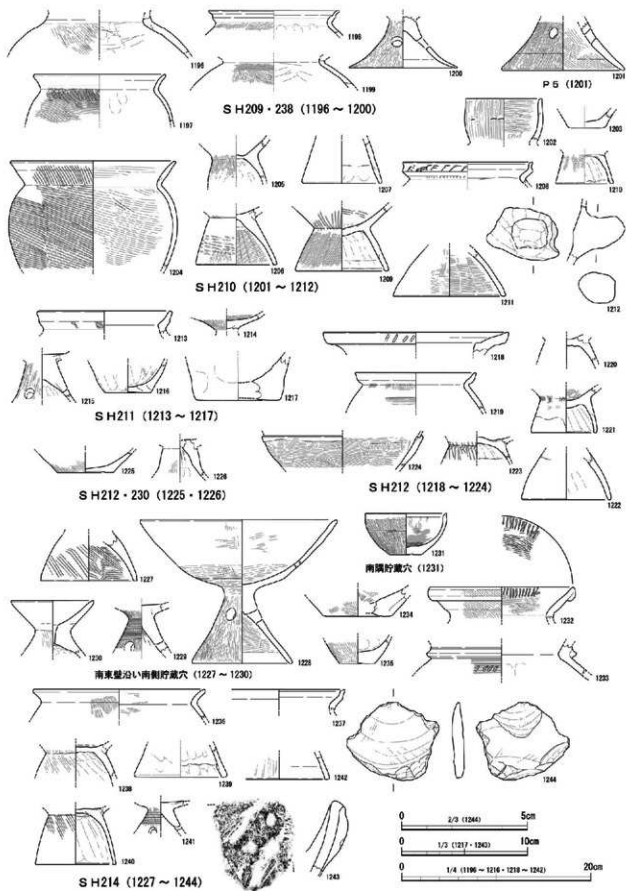
1208~1210はS字状口縁甕である。1208は口縁部片で、外面には押し列点文が施されている。頸部内面にはハケがわずかに遺存している。1209は外面全体をやや細かいハケで調整しており、S字状口縁甕としては違和感がある。脚部部もごくわずかに折り返されているのみである。ただし、底部内面及び脚頂部には粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられている。1210は脚部で、小型のものである。脚部部は内側に折り返されている。

1211は高坏ないし器台の脚部片と思われる。外面はハケとヨコミガキによって調整されている。

1212は壺ないし甕の把手である。古墳時代後期のもので、混入したと考えられる。

**S H211 (第184図1213~1217)** 1213~1216は土師器である。

1213は受口状口縁甕である。口縁部内面の屈曲は不明瞭であるが、外面の屈曲部は明瞭な稜をなす。口縁部外面には一部に粗いハケが施されている。1214は高坏の坏部である。細かいミガキで丁寧に調整されている。坏部と脚部の接合部には円板充填状の痕跡が認められるが、この円板充填状の粘土の下面にも剝離痕が認められる。坏部と脚部を一体成形したのではなく、脚部上端の側面から坏部を成形し



第184図 SH209 (238) ・ 210 ・ 211 ・ 212 (230) ・ 214出土遺物 (1/4, 1/3, 2/3)

た後に、坏部の底部中央の凹みを円板充填状に埋めたものと考えられる。1215は高坏の脚部で、1214と同様の製作技法によって作られたと思われる。1216は意ないし鉢の底部と考えられる。器壁が薄い点や、外面が縦方向のナデで調整されていることなどから、鉢の可能性が高い。

1217は縄文土器の深鉢の底部である。混入したと考えられる。

**S H212 (第184図1218~1224)** 1218~1224は土師器である。

1218は壺で、口縁部の小片である。途中で外方に強く屈曲し、内面の屈曲部は突帯状に上方にやや突出する。

1219~1223は甕である。1219は受口状口縁甕である。口縁部の屈曲は緩い。肩部外面には粗いヨコハケが施されている。1220~1222は台付甕の脚部である。1221は外面に粘土接合痕が残る。1222は緩やかに内湾しながら八字状に開く。1223はS字状口縁甕の脚部である。底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。

1224は手焙形土器の鉢部と思われる。内外面ともハケで調整されており、突帯が貼り付けられている。**S H212・230 (第184図1225・1226)** 1225・1226は一次調査時にS H212ないしS H230から出土したもので、どちらの遺構に属するか不明である。いずれも土師器である。

1225は壺の底部片である。底部の器壁は薄い。1226は高坏の脚部である。

**S H214 (第184図1227~1244)** 1227~1230は南東壁沿いの南側に位置する貯蔵穴から出土した。いずれも土師器である。

1227は台付甕の脚部である。内湾しながら八字状に開き、内外面とも粗いハケで調整されている。1228は高坏で、ほぼ全形が復元できた。有稜高坏と思われるが、坏部の屈曲は非常に不明瞭である。坏部は内外面ともハケを施した後ヨコミガキで調整されている。脚部は直線的に開き、外面はタテミガキで調整されている。1229は高坏の脚部で、脚部上半には直線文が施されている。1230は器台である。小型のもので、脚部内面にはユビオサエの痕跡が残る。坏部外面にも粘土接合痕が残るなど、やや粗雑

である。

1231は南隅の貯蔵穴から出土したもので、土師器鉢である。平底の碗形を呈するもので、口縁端部にはヨコナデにより内傾する面が作り出されている。口縁部は半分程度しか遺存しておらず、片口の有無は不明である。外面の中心には工具のアタリ状の不明瞭な沈線が認められる。内面には水銀朱が付着しており(第Ⅷ章第12節)、一部は器壁の細かいヒビに入り込むように付着している。また、外面にはスガが付着しており、いわゆる内面朱付着土器と思われる<sup>7)</sup>。

1232~1244は埋土中などから出土した。

1232~1242は土師器である。

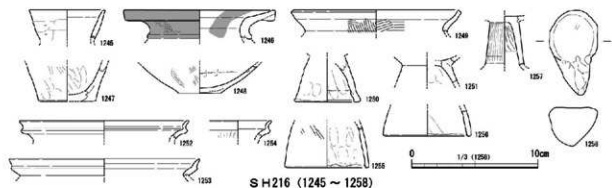
1232~1235は壺である。1232は口縁部で、口縁端部は外方に折り返して肥厚させる。口縁部内面にはハケ状工具による列点文が施されている。内外面ともハケで調整されている。特徴的な個体で、東海地方東部の土器と類似するが、胎土の特徴などからは搬入品の可能性も断定できない。1233は大型の壺の頸部片で、外面には突帯が貼り付けられている。赤彩が施されている可能性もあるが、不明瞭である。1234・1235は底部である。1235は器形などからみて鉢の可能性もある。

1236~1240は甕である。1236はく字状口縁甕で、内外面ともハケで調整している。1237は受口状口縁甕で、口縁部の小片である。口縁端部は明瞭な面をなす。1238・1239は台付甕の脚部である。1239は脚部部を内側へ大きく折り返している。S字状口縁甕と似るが、脚部部の折り返し方や外面調整などは典型的なS字状口縁甕とは異なる。1240はS字状口縁甕の脚部である。脚部部は若干内側へ突出するが、明確には折り返していない。器壁は薄い。底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。

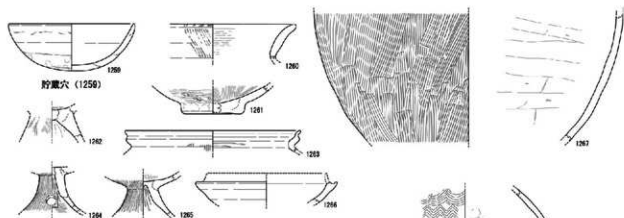
1241・1242は高坏である。1241は脚部外面上半に直線文を施す。1242は脚部部の小片である。

1243は縄文土器で、有文深鉢の大波状口縁の破片である。斜位の陸帯を貼り付け、陸帯上には押圧を列点文状に施す。

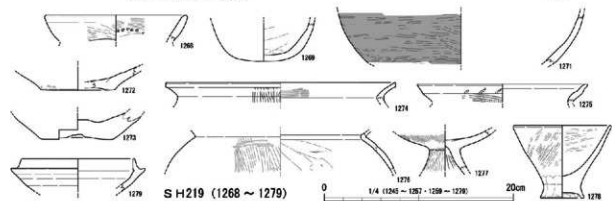
1244は剥片で、灰色のチャートである。1243・1244は縄文時代のもので、混入したと考えられる。



SH216 (1245 ~ 1258)



SH218 (1259 ~ 1267)



SH219 (1268 ~ 1279)

第185図 SH216・218・219出土遺物 (1/4, 1/3)

SH216 (第185図1245~1258) 1245~1257は土師器である。

1245~1248は壺である。1245は小型丸底壺の口縁部と思われる。調整は粗雑で、外面にはケズリが認められる。1246は広口壺の口縁部で、頸部から直立気味に立ち上がり、その後外方へ大きく屈曲する。内外面に赤彩が残る。1247・1248は底部である。1247は体部が直立気味に立ち上がり、壺ではなく鉢の可能性もある。1248は器壁が薄い。

1249~1256は甕である。

1249は受口状口縁甕である。口縁部の屈曲は緩く、不明瞭である。口縁端部は面をなす。

1250・1251は台付甕である。1250はやや小型のもので、器壁が厚く全体的に粗雑である。1251は脚台部上端の側面から体部を成形していると思われる。

1252~1256はS字状口縁甕である。1252・1254は形態が類似する。屈曲部外面は突出気味で、口縁部上半が屈曲部からやや内傾して立ち上がり、口縁端部の内面にはヨコナデが施され、口縁端部は外方へ強く引き出される。1253は口縁部外面の屈曲部が明



瞭な稜をなす。1255・1256は脚台部で、いずれも脚端部はわずかに内側へ折り返されている。

1257は高坏の脚部である。いわゆる屈折脚で、屈曲部を欠損するもの、脚裾部は大きく外方へ屈曲して開くと思われる。

1258は軽石である。砥石として利用されたと思われる、面を有する。使用痕は不明瞭だが、擦痕や線状痕とみられる痕跡がわずかに確認できる。

**S H218 (第185図1259~1267)** 1259は西側の貯蔵穴から出土した。土師器碗で、丸底である。調整は粗雑で、粘土接合痕やユビオサエの痕跡が明瞭に残る。内面にはススと思われる痕跡が認められる。古墳時代後期のものである可能性が高く、混入したと考えられる。

1260~1267は埋土中などから出土した。

1260~1265は土師器である。

1260・1261は壺である。1260は外反する口縁部で、口縁端部は丸く収め、刻目が施されている。1261は底部で、明瞭に突出する。

1262・1263は甕である。1262は台付甕の脚台片で、器壁はかなり厚い。1263はS字状口縁部の口縁部で、頸部内面にはハケが施されている。

1264・1265は高坏である。いずれも脚部上端の側面から坏部を成形していることが、断面の粘土接合痕から推測される。

1266は須恵器の坏身である。やや小型で、立ち上がりや底部を欠損する。混入したと考えられる。

1267は土師器甕である。建物内のビットから出土したもので、長胴甕の体部片と思われる、外面はタテハケで調整され、内面にはケズリが施されている。古墳時代後期のものである。

**S H219 (第185図1268~1279)** 1268~1278は土師器である。

1268~1273は壺である。1268は中型の壺の口縁部で、器壁は厚く、口縁端部は丸く収める。外面の頸部付近には沈線と思われるものがわずかに遺存する。内面には竹管文が施されている。1269は小型の壺の底部で、丸底である。古墳時代後期に下るもの可能性がある。1270は大型の壺の肩部片で、外面に波状文が施されている。1271は体部片で、外面はミガキによって丁寧に調整され、赤彩が施されている。

1272・1273は中・大型の壺の底部である。1272は上げ底状を呈する。1273は器壁がかなり厚い。

1274~1276は甕である。1274はく字状口縁甕で、口縁端部は明瞭な面をなす。外面は粗いハケで調整されている。1275は受口状口縁甕の口縁部片で、屈曲は緩い。外面には列点文が施されており、ススが附着する。1276は体部片で、内面には一部にケズリが認められる。

1277は高坏である。外面はハケとミガキによって調整されている。

1278は鉢である。体部は外方へ直線的に開き、口縁端部はわずかに面をなす。底部外面は広く凹み、縁が高台状になっている。内外面ともミガキで調整されている。

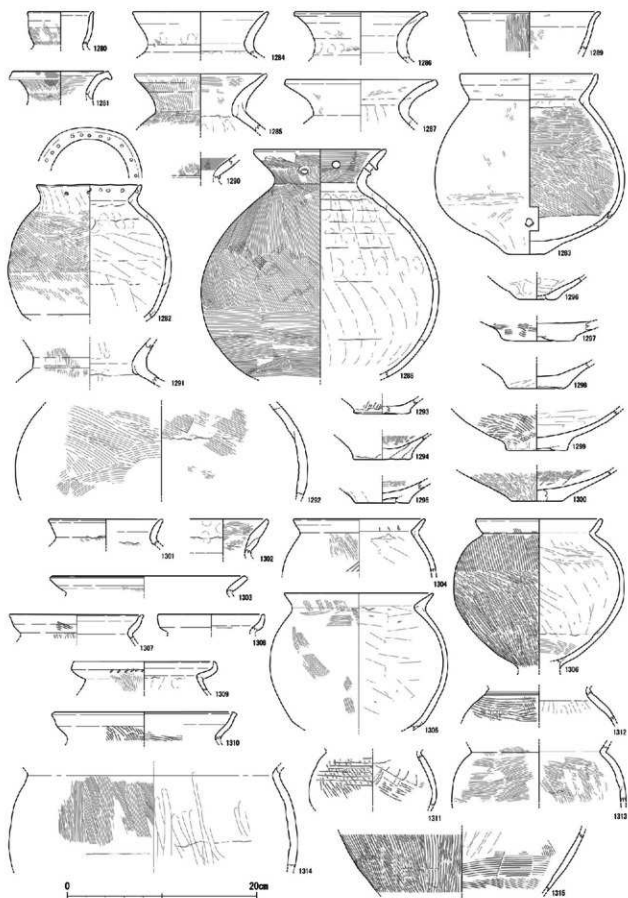
1279は須恵器の坏身である。立ち上がりは低く、口縁端部は丸く収められる。焼成が甘く、土師質である。混入したと考えられる。

**S H221 (第186・187図1280~1387)** 1280~1387は土師器である。

1280~1300は壺である。

1280・1281は小型の壺の口縁部である。1280は短頸の瓢形壺で、口縁部の内湾は弱い。口縁端部には不明瞭ながら内傾する面を作り出している。外面はハケで調整されており、文様は施されていない。1281は外反しながら開き、口縁端部は下方へ拡張されている。外面には部分的に赤彩が残る。

1282~1289は中・大型の壺やその口縁部である。1282は短頸壺で、球形の体部に短い口縁部が付く。口縁部はわずかに内湾し、内面には竹管状の工具による刺突が列状に施されている。この刺突はかなり深く、遺存しているもののうち3箇所では外面まで貫通している。貫通している孔の位置に規則性は看取できず、蓋を絞るなどの機能があったかは不明である。調整は全体に粗雑で、頸部から口縁部にかけては縦方向のナデが明瞭に残る。体部外面はハケで調整されている。1283はほぼ全形が復元できた。内湾する短い口縁部をもつ短頸壺で、体部は下ぶくれの器形を呈する。風化によって不明瞭であるが、外面はミガキによって調整されている。内面はハケによって調整されているが、製作時の乾燥単位と思われる接合箇所より上のみに施されており、調整の



第186図 SH221出土遺物① (1/4)

変化が明瞭である。また、体部下半に焼成後穿孔が1箇所施されている。1284～1287は緩やかに外反しながら開く口縁部である。1284・1285は口縁端部を丸く収める。1286・1287は外反がやや強く、口縁端部は面をなす。1288は1284・1285と同様の口縁部をもつ広口壺で、底部を除く大部分が復元できたものである。球形の体部に直線的に外方へ開く口縁部が付き、口縁端部は丸く収められる。口縁部には2孔一対となる孔が、焼成前に内面から外面に向かって穿たれている。外面は全体的にハケによって調整される。体部内面はナデやユピオサエによって調整されるが、粘土接合痕が明瞭に残る。また、体部下半の外面にはススが附着する。1289はやや薄手で、内湾する口縁部である。外面はミガキで調整されている。器壁が薄い点などから、鉢の可能性もある。

1290～1292は大型の壺の頸部から体部にかけての破片である。1290は頸部付近の小片で、内面には赤彩が残る。1291は頸部片である。1292は体部片で、外面は粗いハケで調整されている。1291と同一個体の可能性も考えられ、1292の方が若干ハケが粗く、別個体と判断した。

1293～1300は底部である。1293は外面に粗いハケが一部遺存している。1295は輪台状のもので、底部外面中央が凹んでいる。1296は小型の壺の底部と思われる、器壁が薄い。内外面とも工具ナデで調整されている。1297・1299は輪台状の底部で、底部外面中央が凹む。外面には粗いハケが施されている。1300は外面がミガキにより丁寧に調整されている。

1301～1354は壺である。

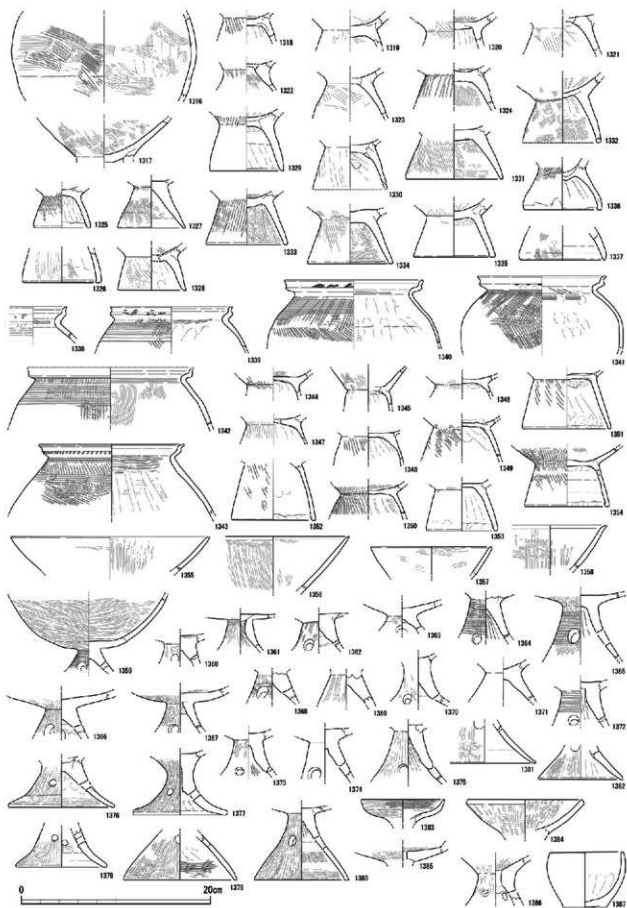
1301～1306はく字状口縁壺である。1301は口縁部が直立気味に立ち上がる。1302はやや粗雑な口縁部で、外面にはユピオサエや粘土接合痕が明瞭に残る。1304・1305は頸部の屈曲が明瞭で、口縁部が短く直線的に外方へ開く。口縁端部は丸く収める。1304は口縁部内面に爪痕状の痕跡が残る。1305は体部内面をケズリによって調整しており、外面にもケズリと思われる痕跡が部分的に認められる。1306は口縁部から体部にかけてかなり復元できたものである。脚台が付くもので、脚台部との剥離痕が認められる。外面は粗いハケによって調整される。また、頸部内面には調整と思われる沈線状の痕跡が認められる。

体部内面はナデや工具ナデ、ハケによって調整されており、一部にはケズリも施されている。外面の体部中位以下と口縁端部付近にはススが顕著に附着する。

1307～1310は受口状口縁壺の口縁部である。1307は屈曲が緩く、口縁端部にはヨコナデによる面をもつ。体部には非常に粗いハケが一部遺存している。1309は屈曲が強く、内側に向かって屈曲する。屈曲部外面には列点文が施されている。1310は比較的長くのびる口縁部で、屈曲は緩い。口縁端部に明瞭な面をもつ。頸部内面にはハケが施されている。

1311～1317は体部片である。1311は小型のもので、肩部外面にはかなり粗いヨコハケが施されている。器壁は厚い。1312も肩部に粗雑なヨコハケを施す。頸部付近のみ細かいヨコハケが施されているが、ハケではなくヨコナデの痕跡とも考えられる。1315は体部下半の破片で、外面は粗いハケで調整される。内面にも粗いヨコハケが施されている。1316は製作時の乾燥単位を示すと思われる粘土接合痕が外面に明瞭に残されており、その箇所で器形にも歪みが生じている。外面にはススが附着する。1317は台付壺の体部下半の破片で、脚台部は欠損している。筒状の脚台部に、ある程度成形した体部を載せて接合した可能性がある。

1318～1337は台付壺の脚台部である。1318はやや小型のものである。1320は脚頂部に粘土塊を貼り付けている。底部内面には粘土の貼り付けは認められない。1322はわずかに外反しながら開く。1323は緩やかに内湾するもので、脚台部上端の側面から体部を成形している。1324は外面にかなり粗いハケを施している。1325は小型のもので、脚端部を内側へ折り返している。S字状口縁壺と類似するが、器壁が厚いなど、やや違和感がある。1327はハ字状に直線的に開く。脚端部は面をなす。1328は直立気味で、脚端部がわずかに外反する。1329は断面の粘土接合痕からみて、筒状の脚台部を成形後、体部の成形に伴って底部を閉塞していると推測される。1331～1334は内外面ともハケで調整される。1333の内面には断続的なクモの巣状のハケが施されている。1334は脚台部上端の側面から体部を成形している。1335は直線的に開き、脚端部は明瞭な面をなす。1336は



第187圖 SH221出土遺物② (1/4)

下半部で強く内湾し、脚端部は面をなす。

1338～1354はS字状口縁甕である。

1338～1343は口縁部から体部にかけての破片である。1338は口縁部の小片で、口縁部外面には櫛状工具による列点文が施される。工具を引きずった痕跡は不明瞭で、押引列点文とはいいがたい。頸部内面にはハケが施されている。1339～1341は口縁部外面に押引列点文が施される。いずれも口縁端部に強いヨコナデを施し、面を作り出すとともに、口縁端部を外方に引き出している。1339・1340では外面の頸部直下の比較的広い範囲にヨコハケを施しており、1341も頸部直下にヨコハケを施すが、やや雑である。また、1341では口縁部外面の押引列点文も不明瞭なものである。1342は口縁部外面に押引列点文は確認できない。1343は口縁端部に強いヨコナデを施して面を作り出すとともに外方に引き出しており、口縁部の断面形状はS字状を呈する。ただし、口縁部外面に押引列点文ではなく刻目状の列点文を施す点や、体部がなで屑状の器形を呈する点、頸部内面のハケが広範囲に及ぶ点など、典型的なS字状口縁甕としては違和感がある。在地産のS字状口縁甕の範疇で把握できるものと考えられる。

1344～1354は脚台部である。1344は底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。1345は脚部が直立気味であるが、小片のため器形の復元に不安を残す。脚頂部には粗い砂粒を含まない粘土を貼り付けている。1346は底部内面、1347は脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。1348～1349・1351などは底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。1351は直線的に開くもので、脚端部は内側に小さく折り返す。外面には断続的な粗いハケが施されている。1352～1354も脚端部を内側に折り返しており、1352・1353では若干折り返しが大きいが、1354は破片が接合しないため図上で復元したもので、本来はもう少し高い脚台部の可能性もある。

1355～1382は高坏である。

1355～1359は坏部の破片である。1355・1356は直線的に外方へ大きく開くもので、比較的浅い坏部と思われる。1356は不明瞭ながら口縁端部に内傾する面をもつ。1357は小型のものと思われる。内外面と

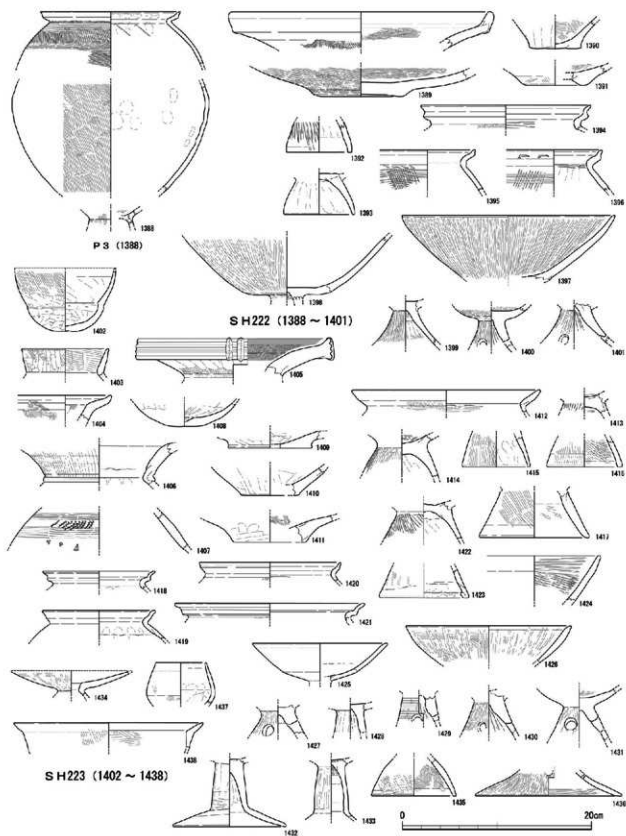
もヨコミガキによって調整されている。1358はやや内湾し、口縁端部に明瞭な面をもつ。外面はハケを施した後にタテミガキで調整している。1359は深い坏部をもつ。坏部内外面はヨコミガキで調整されているが、単位ごとに少し方向を変えて全体的に波状になるようにミガキが施されているものと思われる。脚部外面の上半部には不明瞭ながら直線文が施されている。

1360～1382は脚部である。1361は円板充填によって脚部上面を閉塞していると思われる。1364・1365・1368・1372は脚部外面上半に直線文が施文されている。ただし、こうした文様をもつものは少数派である。1370・1377などは大きく外反する。1377は透孔が小さく、脚部内面頂部に棒状工具による深い軸芯痕が認められる。1362もごく浅い軸芯痕と思われるものが確認できる。1376は頸部の縮まりが弱く、緩やかに外反する低い脚部である。外面は上半はタテミガキ、下半はヨコミガキである。透孔はやや小さい。また、二次的に被熱しており、外面にはススが付着する。こうした特徴からみると、台付壺の脚部の可能性も考えられる。1379・1380は内湾する。1379は外面をハケとヨコミガキを施した後にタテミガキによって調整している。1380は脚端部が面をなす。内面は断続的なヨコハケによって調整されている。1382はやや小型のもので、器台の脚部の可能性もある。

1383～1386は器台である。1383は小型器台の受部で、途中で緩やかに屈曲して口縁部が立ち上がる<sup>9)</sup>。内外面ともヨコミガキによって丁寧に調整されており、赤彩が認められる。1384も小型のものの受部である。やや内湾し、口縁端部は面をなす。内外面ともミガキによって丁寧に調整されている。1385も受部の破片で、受部から脚部にかけて焼成前に孔が開けられている。1386は透孔が6方向に開けられていた可能性がある。

1387は鉢である。底部は平底で、わずかに上げ底状を呈する。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。内外面ともナデで調整されている。

**SH 222 (第188圖1388～1401)** 1388は主柱穴P 3から出土した。土師器のS字状口縁甕で、接合しな



第188圖 SH222・223出土遺物(1/4)

ものの、体部上半と体部下半、脚台部付近の破片があり、同一個体と考えられる。口縁部の屈曲は緩く、屈曲部の内面にはユビオサエの痕跡が残る。口縁部上半はやや外反しながら立ち上がり、口縁端部にはヨコナデによる不明瞭な面が作り出されている。頸部内面はナデによって調整されている。底部内面及び脚頂部には顕著に砂粒を含む粘土が貼り付けられているが、砂粒自体はそれほど粗くない。口縁部の形態や肩部外面の調整など、典型的なS字状口縁甕としては違和感があり、在地産のS字状口縁甕の可能性が考えられる。

1389～1401は埋土中などから出土した。いずれも土師器である。

1389～1391は甕である。1389は同一個体と考えられる大型の甕の口縁部と底部付近の破片である。口縁部は受口状に屈曲する。体部は底部から大きく横に広がり、おそらく体部の形状は下ぶくれ状を呈するものと思われる。他に体部片もいくつか出土しており、外面にはS字状口縁甕にも近い粗いハケが施されている。1390・1391は底部である。1391は輪台状を呈する。

1392～1396は甕である。1392・1393は台付甕の脚台部で、1392は脚端部が面をなす。1393は脚頂部に精良な粘土を貼り付けている。1394～1396はS字状口縁甕である。1394は屈曲部が突出気味で、口縁部上半がやや内側に立ち上がり、口縁端部は強いヨコナデによって面を作り出すとともに外方へ引き出されている。頸部内面はハケで調整されている。1395は口縁部上半が矮小である。頸部外面には列点文状に工具痕が残る。1396は口縁部外面に押し列点文が施されている。

1397～1401は高坏である。1397・1398は有稜高坏の坏部である。1397は比較的浅い坏部で、口縁端部に明瞭な面は認められない。内外面ともタテミガキで調整されている。1398は1397よりも深い坏部と思われる。坏部の屈曲はかなり明瞭である。1399～1401は脚部である。1399・1401は緩やかに外反しながらハ字状に開く。1400は小型の有稜高坏と思われる。

**S H 223 (第188図1402～1438)** 1402～1438は土師器である。

1402～1411は甕である。

1402・1403は小型の甕である。1402は小型丸底甕で、ほぼ全形が復元できた。粗雑な印象を受けるもので、頸部の屈曲はかなり小さく不明瞭である。外面は全体的にケズリによって調整され、頸部の屈曲もケズリによって作り出されていると思われる。口縁部外面のみハケを施す。内面もケズリや工具ナデによって調整されている。頸部内面の稜は比較的シャープであるが、これも体部内面にケズリを施すことで作り出されている。1403は直立気味に立ち上がる口縁部である。外面はケズリを施した後に、部分的にハケで調整している。

1404～1407は中・大型の甕の口縁部から体部にかけての破片である。1404は口縁部の小片で、途中で屈曲して外方へ開き、口縁端部は小さく受口状に屈曲する。1405は広口甕の口縁部で、口縁端部は上下に拡張し、擬凹線文を施し、棒状浮文を貼り付けている。棒状浮文には貼り付け時のユビオサエの痕跡が明瞭に残る。内面には赤彩が施されている。1406は頸部外面に交帯を貼り付けている。1407は肩部の破片で、直線文と直線文の間に細い半截竹管を穿ねたような工具による列点文が施されている。また、下段の直線文の下方には扇状文と思われる文様がわずかに遺存している。

1408～1411は中・大型の甕の底部である。1408は丸底に近い。外面にはケズリが一部に認められる。内面は工具ナデによって調整されている。1409も外面がケズリによって調整されている。

1412～1423は甕である。

1412はく字状口縁甕である。頸部は明瞭に屈曲し、口縁部は直線的に開く。外面にはススが附着している。

1413～1417は台付甕の脚台部である。1413・1414の底部はかなり厚い。いずれも底部内面の凹みに粘土を貼り付けて整形していると思われる。1416は内面をハケで調整し、脚端部は明瞭な面をなす。1417はやや大型のものであるが、小片であるため、もう少し径が小さくなる可能性もある。

1418～1423はS字状口縁甕である。1418～1421は口縁部で、1418・1421は口縁部上半が大きく外反し、口縁端部内面にはヨコナデが施され外方へと引き出されているが、面は明瞭に作り出されていない。

1419は口縁部の屈曲が弱く、S字状口縁甕としては若干の違和感がある。体部外面の調整は風化のため不明である。1420は口縁部上半が矮小で、頸部内面にはハケが施されている。1422・1423は脚台部である。1422は底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。ただし、胎土や器壁の厚さなどの点で典型的なS字状口縁甕としては違和感があるため、在地産のS字状口縁甕と思われる。1423は脚端部を内側に折り返す。内外面に粘土接合痕がわずかに残る。

1424～1433は高坏である。

1424～1426は坏部である。1424は直線的に開くもので、器壁がやや厚い。外面はヨコナデ、内面は粗いハケで調整されており、こうした調整からみると鉢などの可能性も考えられる。ただし、内外面とも赤彩と思われる痕跡がわずかに認められることも考慮し、高坏の坏部とした。1425は屈折脚高坏の坏部と思われる。器壁は比較的薄く、坏部は中位でわずかに屈曲する。内外面ともナデで調整されている。1426は内外面ともハケを施した後にミガキによって調整されている。

1427～1433は脚部である。1429は脚部外面上半に直線文を施す。1431は坏部が一部遺存している。椀形高坏の可能性もある。1432・1433は屈折脚高坏の脚部である。1428も屈折脚高坏の可能性がある。1432は脚柱部から脚裾部に向かって外方へ強く屈曲する。脚柱部はタテナデによって調整されるが、一部に工具痕状の細いヨコミガキと思われるものが施されている。また、坏部の底部中央には、S字状口縁甕の脚台部と同様の粗い砂粒を含む粘土の貼り付けが認められる。1433は脚柱部がエンタシス状を呈しており、内面はヨコナデによって調整されている。1432と同様に坏部の底部中央に粘土の貼り付けが認められるが、粗い砂粒は含んでいない。

1434～1436は器台である。1434は直線的に大きく外方へ開く受部である。口縁端部は欠損する。脚部も大きくハ字状に開く可能性が高い。外面にはススが附着する。1435・1436は脚部である。いずれも高坏の脚部の可能性もあるが、1435は小型で器壁が厚いことから器台の脚部と考えられる。1436も大きく開く器形などから器台の可能性が高い。

1437・1438は鉢である。1437はガラス形の小型鉢である。口縁端部は丸く収められる。外面はハケやヨコナデで調整されている。1438はやや大型のもので、椀形の体部に直線的に外方へ開く短い口縁部が付く。頸部は比較的強く屈曲し、頸部内面には明瞭な稜が作り出されている。

**S H230 (第189図1439～1488)** 1439～1485は土師器である。

1439～1450は壺である。

1439～1442は中・大型の壺の口縁部や体部の破片である。1440は明瞭に屈曲する頸部から口縁部が直線的に外方へ開く。口縁端部は面をなし、列点文が施される。1441は口縁部が緩やかに外反し、口縁端部は面をなす。頸部外面には突帯が貼り付けられ、突帯にはハケ状工具による列点文が施されている。1442は頸部から口縁部が直立気味に立ち上がり、中位で外方へ屈曲する。頸部外面には突帯が貼り付けられており、突帯の下部にはヘラないし棒状工具の刺突による列点文が施されている。内面には赤彩が施されている。1443は肩部の小片で、直線文とハケ状工具による矢羽根状文が施されている。

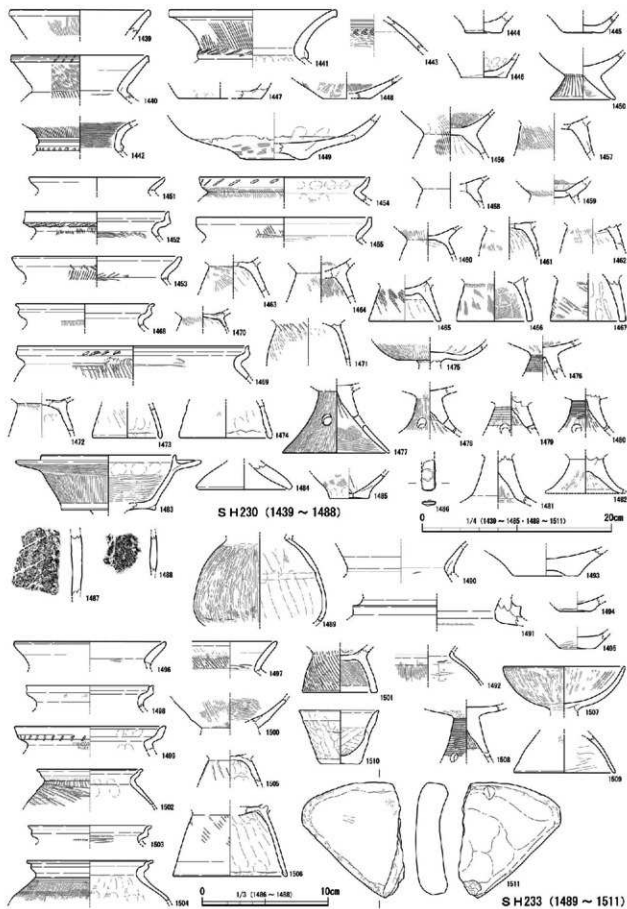
1444～1450は壺ないし鉢の底部である。1444～1446は小型の壺の底部と考えられるが、鉢の底部の可能性もある。1447は平底である。1449は大型の壺の底部から体部下半にかけての破片である。底部は輪台状を呈する。体部下半には製作時の乾燥単位と思われる粘土接合痕が内外面に明瞭に認められ、その部分で緩やかに屈曲する。1450はハ字状に開く脚が付く台付壺と思われる。脚部外面にはかなり粗いタテハケが施されている。

1451～1474は甕である。

1451はく字状口縁甕である。口縁部の小片である。1452～1455は受口状口縁甕の口縁部である。1452は強く屈曲し、屈曲部外面は明瞭な稜をなす。屈曲部にはハケ状工具による幅広の列点文が施されている。外面にはススが附着している。1453・1454の屈曲は緩い。いずれも口縁部外面に列点文が施されている。1455は口縁端部が明瞭な面をなす。頸部内面にはハケが施されている。

1456～1467は台付甕の脚台部である。1456は体部下半も一部遺存しており、体部内面はハケで調整さ





第189圖 SH 230・233出土遺物 (1/4、1/3)

れている<sup>9)</sup>。1459は脚頂部に内側から粘土塊を貼り付けて底部を閉塞している可能性がある。1461は脚台部上端の側面から体部を成形しており、剥離痕が認められる。1463・1464は直線的に八字状に開く。1464は甲板充填状の粘土接合痕が認められるが、脚台部と体部を一体成形したかは不明瞭である。1465・1466は比較的低い脚台部である。いずれも脚台部上端の側面から体部を成形しており、体部が剥離した痕跡が認められる。1467は直立気味で、脚端部は面をなす。外面にはかなり粗いハケが部分的に施されている。

1468～1474はS字状口縁甕である。1468は口縁部片で、口縁端部は外方へ大きく引き出されている。1469は口縁部外面に押し列点文が施されており、頸部内面にはハケが施されている。1472は脚台部の破片で、底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられている。器壁はやや厚い。1473・1474も脚台部で、いずれも脚端部を内側に折り返している。

1475～1482は高坏である。1475は坏部で、有稜高坏と思われるが、坏部の屈曲は緩い。1476～1482は脚部である。1476・1479・1480は脚部外面上半に直線文を施す。1477は緩やかに反しながら八字状に開く。透孔は3方向に開けられている。1481は脚部下半が外方へ屈曲して開き、屈折脚とも思われる。ただし、脚柱部は明瞭な柱状を呈していない。外面の調整は風化により不明瞭である。1482は低平な脚部である。小型の高坏と思われるが、台付甕の脚部の可能性もある。透孔は認められない。内面には一部にケズリと思われる調整も施されている。

1483・1484は器台と思われるものである。1483は有稜高坏の坏部に似た形状の受部で、体部と底部との境が強く屈曲し、口縁部外面に外方へのびる鏝状の突出部をもつ。体部と底部との境の屈曲部の外面には、やや垂下するように突帯が貼り付けられている。鏝部と内面はヨコミガキで調整され、体部外面はタテミガキで調整されている。あまり類例のない器形であるが、高坏形の器台とされるものの中に共通性が窺われるものがある。1484はかなり器壁が厚い脚部片である。小型であることなどから、器台の脚部と推定した。

1485は有孔鉢である。外面はハケで調整されており、内面には工具痕が残る。

1486は鉄製品である。小型の板状のもので、一端は元の形状を留めているとみられる。片面には円形の膨らみが認められるが、錆膨れの可能性が高い。ヤリガンナや刀子の茎片の可能性が考えられる。

1487・1488は縄文土器の深鉢の体部片である。いずれも沈線による斜行沈線あるいは矢羽根状文が認められる。混入したと考えられる。

**SH233 (第189図1489～1511)** 1489～1510は土師器である。

1489～1495は壺である。1489は口縁部を欠損するが、瓢形壺の体部と思われる。体部は下ぶくれ状の器形を呈し、外面はハケを施した後にタテミガキで調整している。1490・1491は大型の壺の頸部で、1491は頸部外面に突帯を貼り付けている。1492は調整が比較的丁寧なことから壺としたが、体部内面にケズリを施して器壁を薄く仕上げしており、甕の可能性もある。1493～1495は壺ないし鉢の底部である。1494・1495は小型のものである。

1496～1506は甕である。

1496・1497はく字状口縁甕である。いずれも口縁部片で、明瞭に屈曲する頸部から口縁部が直線的に外方へ開く。口縁端部は丸く収められる。1497は頸部内面にハケを施している。

1498・1499は受口状口縁甕である。いずれも口縁部片である。1498は明瞭に屈曲し、口縁端部は明瞭な面をなす。1499は若干屈曲が緩い。口縁端部には内傾する面が認められるが、不明瞭である。屈曲部内面にはエビオサエが認められる。口縁部外面にはハケ状工具による列点文が施されている。

1500・1501は台付甕の体部や脚台部である。1500は脚台部から剥離した痕跡が明瞭に認められる。1501は器壁が厚く、口縁端部は面をなす。内外面ともハケで調整されている。

1502～1506はS字状口縁甕である。1502は口縁部から肩部にかけての破片である。口縁端部はヨコナデを施すとともに外方に引き出されており、断面形はS字状を呈するが、肩部のヨコハケはかなり乱雑で、典型的なS字状口縁甕とはいえない。1504は口縁端部にかなり強い強いヨコナデが施されており、凹

線状に凹む面が明瞭に作り出されている。口縁端部もかなり強く外方へ引き出されている。頸部内面はナデによって調整されている。1505・1506はともに底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。1506は脚台部上端の側面から体部を成形しており、体部が剥離した部分では、脚台部の上端を連続的につまみ出して突帯状に突出させ、体部との接合部が強固になるようにしている様子が確認できる。また、脚端部は明瞭に内側に折り返している。

1507～1509は高坏である。1507は碗形高坏の坏部である。脚部が剥離した痕跡が認められる。外面はハケを施した後タテミガキが施されている。1508は脚部で、外面上半に直線文が施されている。また、二次的に被熱している。1509は内湾する脚部である。透孔は認められず、脚端部は丸く収められる。器台の脚部の可能性も考えられる。

1510は鉢である。平底の底部から、体部が直線的にやや外方へ開き、コップ形を呈する。器壁は厚く、調整も比較的粗雑で、内外面ともユビオサエヤナデの痕跡が明瞭に残る。

1511は石製品で、台石である。砂岩の扁平な円礫を利用したもので、半分程度を欠損している可能性がある。片面は凹んでいるが、その面は使用しておらず、やや凸面となる側を使用しており、使用等による摩滅が顕著に認められる。また、側面にも一部摩滅して面をなす部分がある。側縁には不明瞭な敲打痕も複数残る。

**SH236 (第190圖1512～1515)** 1512は主柱穴の可能性のあるP1から出土した。鉄製品で、鉄鏃である。やや大型で幅広の柳葉形の鎌身部をもつもので、鎌身部の断面形は薄い凸レンズ状を呈し、鏃は明瞭ではない。茎部は欠損している。

1513～1515は土師器である。1513は壺の肩部の小片で、直線文とハケ状工具による列点文が施されている。また、赤彩も認められる。1514は受口状口縁甕の口縁部片である。屈曲は明瞭で、屈曲部から口縁端部にかけて内傾し、口縁端部は面をなす。屈曲部外面には櫛状工具による列点文が施されている。外面にはススが付着している。1515は台付甕の体部下半から脚台部にかけての破片である。内面には薄くコゲが付着している。

**SH238 (第190圖1516～1520)** 1516～1520は土師器である。

1516は壺の底部片で、上げ底状を呈する。1517は台付甕の脚台部で、ハ字状に直線的に開き、脚端部は面をなす。内面はハケで調整されている。1518・1519はS字状口縁甕である。1518は口縁端部に強いヨコナデが施され、凹線状を呈する幅広の面が作り出されているが、外方への引き出しは弱い。頸部内面にはハケと思われるものがわずかに遺存している。1519は脚台部で、小型のものである。脚端部は内側へ折り返している。1520は高坏の脚部である。

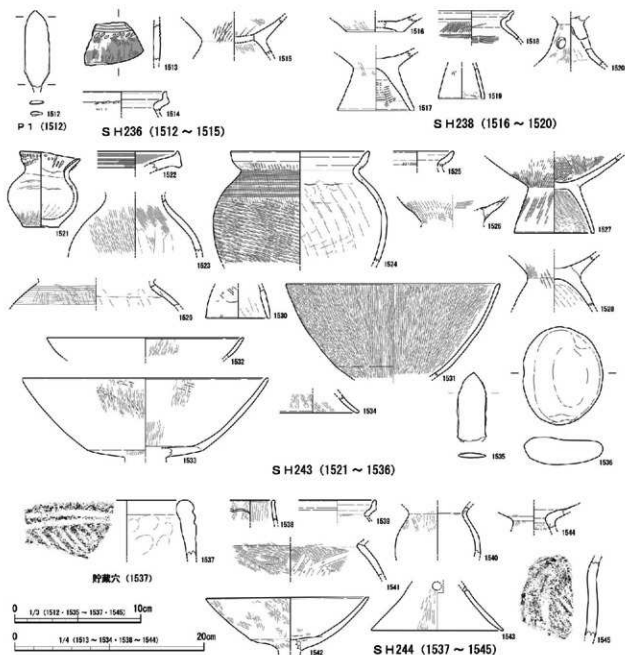
**SH243 (第190圖1521～1536)** 1521～1534は土師器である。

1521～1523は壺である。1521はかなり小型の壺で、ミニチュアに近い。大部分が遺存する。口縁部外面には帯状に粘土を貼り付け、その上に棒状工具の刺突による列点文を施しているが、粘土の貼り付けは粗雑で、この粘土の貼り付けによって口縁部の器形にかなりの歪みが生じている。また、口縁部内面にも目的に粘土を貼り付け、その部分にも3箇所を刺突と、長短3本の縦線状の太い線刻を施している。体部外面の調整は不明瞭であるが、底部付近はハケで、肩部もハケないし工具ナデによる調整と思われる。1522は広口壺の口縁部の小片で、口縁端部を上下に若干拡張し、擬凹線文を施している。内外面に赤彩の痕跡が残る。1523は頸部の屈曲が緩い中型の壺である。

1524～1530は甕である。1524・1525は受口状口縁甕である。ただし、口縁部の屈曲は緩く、特に内面の屈曲はかなり不明瞭で、く字状口縁甕に近い。一方で、口縁部外面には強いヨコナデが施されており、そのため外面は受口状を呈している。1524は体部上半まで遺存するもので、肩部外面にはヨコハケが施されている。

1526～1528は台付甕の体部下半の破片や脚台部である。1527は体部下半まで遺存するもので、体部は内外面とも粗いハケで調整されている。脚台部内面は断続的なハケによって調整され、脚端部は面をなす。1528は脚台部上端の側面から体部を成形している。

1529・1530はS字状口縁甕である。1529は肩部片



第190図 S H 236・238・243・244出土遺物 (1/4, 1/3)

で、ヨコハケが施されている。内面には粘土接合痕が認められる。器壁はやや厚い。1530は脚台部で、小型のものである。脚端部は折り返していない。

1531～1534は高坏である。1531は有稜高坏で、かなり深い坏部である。ただし、坏部の屈曲は弱く不明瞭である。口縁端部には内傾する面が作り出されており、その面にはヨコミガキが施されている。1532・1533は比較的浅い坏部である。1533は坏部の屈曲部が明瞭で、外面には明瞭な稜が認められる。内外面ともハケを施した後タテミガキによって調

整されている。

1535は鉄製品で、鉄鏝である。やや大型で幅広い柳葉形の鏝身部をもつもので、S H 236出土の1512と近い形態である。鏝身部の断面形は薄い凸レンズ状を呈し、鏝は明瞭ではない。基部は欠損している。

1536は石器で、凹石の可能性のあるものである。砂岩の扁平な円礫で、片方の面が凹んでいるが、明瞭な加工痕や使用痕は認められず、自然礫とも考えられる。石器であるとすれば縄文時代のもので、混入したと考えられる。

**SH244 (第190図1537~1545)** 1537は貯蔵穴から出土した。縄文土器深鉢の口縁部片で、口縁端部は丸く収める。口縁部直下に沈線による区画文が配され、その内部には斜行沈線が施されている。混入したと考えられる。

1538~1545は埋土中などから出土した。

1538~1544は土師器である。1538は瓢形壺の口縁部の小片である。口縁端部は丸く収める。ヘラ状工具による二重の連弧文が一部に遺存している。1539は受口状口縁甕の口縁部の小片である。1540は小型の甕の頸部から体部にかけての破片である。1541も甕の体部片で、体部内面には一部にケズリが施されている。1542は有稜高坏の坏部である。小型で、外面はハケを施した後タテミガキによって調整されている。1543は高坏の脚部片である。透孔がごく一部遺存している。1544は器台の頸部片である。

1545は縄文土器深鉢の体部片である。沈線による区画文と、斜行沈線が認められる。混入したと考えられる。

**SH245 (第191図1546~1585)** 1546・1547は貯蔵穴から出土した。いずれも土師器である。1546は高坏の脚部と思われる。外面はハケとミガキによって調整する。脚端部は丸く収められており、ヨコナデによってわずかに外反する。外面にはススが付着する。1547は有孔鉢である。外面にはユビオサエの痕跡が残り、器形にも歪みがあるなど、全体的に粗雑である。

1548~1585は埋土中などから出土した。

1548~1584は土師器である。

1548~1552は小型の壺である。1548は口縁部の小片で、外面にはタテミガキを施す。高坏や器台の脚部片の可能性もある。1549は短頸の瓢形壺の口縁部である。口縁端部には強いヨコナデが施され、短く外反する。1550はほぼ全形が復元できたものである。口縁部は不明瞭な受口状を呈する。口縁端部は丸く収める。体部の下半には内外面ともケズリが認められる。体部外面上半には部分的にミガキが施されている。1552は小型壺の体部片と思われる。体部外面下半には製作時の乾燥単位と思われる粘土接合が明瞭な段となって残されている。外面にはミガキも施されているが部分的で、全体的に粗雑である。外

面にはススが付着している。

1553・1554は中・大型の壺の体部片である。1553は櫛状工具による山形文が施されており、その文様に沿って赤彩が施されている。1554は直線文と列点文を施している。

1555・1556は底部である。1555は外面に粗いハケを施している。

1557~1564は甕である。

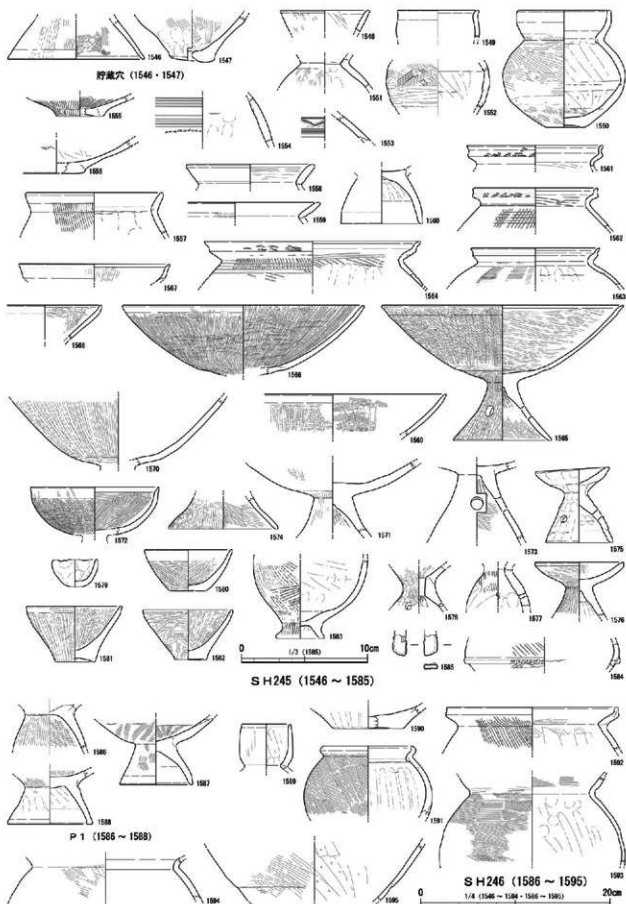
1557~1559はく字状口縁甕である。1557は頸部の締まりが弱く、口縁部は直立気味である。外面には粗いハケを施している。1558は口縁端部を丸く収めている。口縁部内面にはハケを施している。

1560は台付甕の脚台部である。脚台部上端の側面から体部を成形しており、剝離痕が残る。

1561~1564はS字状口縁甕である。いずれも口縁部から肩部にかけての破片である。1561・1562は口縁部が強く屈曲し、口縁端部には強いヨコナデによる面が作り出されている。口縁部外面には押し列点文が施され、頸部内面にはハケが施されている。1562の頸部外面には細い沈線状のものが認められる。1563は外面に押し列点文が施されておらず、頸部内面はナデによって調整されている。他の個体に比べると、若干ハケが細かい。1564は外面に押し列点文が認められるが、1561・1562に比べて、口縁部上半が外方へ開く。口縁端部には強いヨコナデによる面が作り出されている。

1565~1574は高坏である。

1565~1571は有稜高坏と思われるものである。1565はほぼ全形が復元できた。坏部は浅く、口縁端部には内傾する面が認められる。坏部内外面はヨコミガキによって調整されており、外面のみ暗文状に粗くタテミガキを施している。頸部外面はミガキが及んでおらず、ハケが残る。脚部は低く、ハ字状に緩やかに外反しながら開く。1566も浅い坏部である。口縁端部は丸く収められる。内外面とも、ハケを施した後粗くヨコミガキによって調整し、その後タテミガキを施している。坏部の屈曲は緩いが、外面には比較的に明瞭な稜が形成されている。1567は口縁部の小片で、口縁部付近が内湾する可能性が高く、椀形高坏とも考えられる。1569も口縁部の小片である。浅い坏部と思われ、口縁端部は丸く収められる。



第191圖 SH245出土遺物、SH246出土遺物① (1/4、1/3)

内外面ともハケを施した後に粗くヨコミガキによって調整し、その後にタテミガキを施している。1570は口縁端部を欠損するが、比較的深い坏部である。1571は坏部から脚部上半にかけて遺存しているが、坏部の屈曲は緩く不明瞭である。

1572は小型の椀形高坏である。口縁端部には強いナデが施され、やや凹む内傾面となっている。内外面ともハケを施した後に粗くヨコミガキによって調整し、その後にタテミガキを施している。

1573・1574は脚部である。1573は1565などと比べると高い脚部で、若干内湾する。1574は外面が赤色を呈するが、赤彩ではなく器面が赤く発色しており、スリップが施されている可能性がある。

1575～1578は器台である。いずれも小型のものである。1575はほぼ全形が復元できたものである。全体的に作りは粗く、器形には若干の歪みがあり、外面にはナデやユビオサエの痕跡が顕著に残る。受部から脚部にかけて貫通する孔をもたない。透孔は小さく、3方向に開けられている。1576は口縁端部が面をなす。坏部外面はヨコミガキによって調整されているが、坏部内面や脚部外面にはタテミガキが施されている。1577も作りが粗い。外面にはナデや粗いハケが施されている。脚部は強く内湾し、小さい透孔が開けられている。1578は坏部から脚部にかけて孔が貫通している。外面はケズリで調整した後にミガキを施している。

1579～1583は鉢である。1579は手捏ね成形のミニチュアともいえるものである。1580は体部がわずかに内湾する。内外面ともミガキで丁寧に調整されている。1581・1582は体部が直線的に外方へ開く。底部外面は凹み、やや上げ底状になる。形態的には類似しているが、1581は内外面ともにヨコミガキの後にタテミガキによって調整されているのに対して、1582は外面がハケを施した後にヨコミガキによって調整されている。1583は低い脚台が付く。外面は粗いハケで調整されている。台付鉢と考えたが、小型の台付甕の可能性もある。

1584は手焙形土器の鉢部片である。緩やかに屈曲し、屈曲部外面には細い突帯を貼り付け、刻目を施している。外面には粗いハケが一部に遺存している。

1585は鉄製品である。薄い板状の破片で、一端は

原形を留めているものと思われる。ごくわずかに木質と思われるものが付着している。ヤリガンナや刀子の茎片の可能性が考えられる。

**SH246 (第191・192図1586～1607)** 1586～1588は主柱穴P1から出土した。いずれも土師器台付甕の脚台部である。1586は内外面ともハケで調整している。1587は体部下半が一部遺存している。体部内外面はハケで調整されており、製作時の乾燥単位と思われる粘土接合痕を明瞭に残す。1588は脚端部が明瞭な面をなす。

1589～1607は埋土中などから出土した。いずれも土師器である。

1589・1590は壺である。1589は短頸の瓢形壺で、口縁部は頸部直上で強く内湾した後直立気味に立ち上がる。口縁部内面はナデによって調整されている。1590は底部で、外面にはナデが施されている。

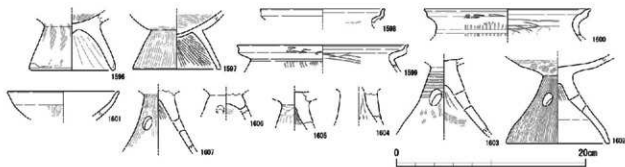
1591～1600は甕である。

1591・1592は受口状口縁甕である。1591はやや小型のもので、口縁部が強く内側に屈曲する。外面はハケで調整されており。1592は口縁部が明瞭に屈曲し、口縁端部は面をなす。

1593～1595は頸部から体部にかけての破片である。1593はおそらく字状口縁甕と思われる。頸部の屈曲は比較的緩い。外面はハケで調整されており、ススが付着する。1594は頸部から肩部にかけての破片で、頸部内面には明瞭な稜が認められる。1595は体部下半の破片である。おそらく脚台が付くものと思われる。外面には製作時の乾燥単位と思われる粘土接合痕が段となって明瞭に残る。内面はケズリによって調整されており、この接合痕は明瞭ではない。

1596・1597は台付甕の脚台部である。1596は脚端部を丸く収める。外面には断続的なハケが施されている。1597は体部に比べて底部が薄い。脚端部は面をなす。

1598～1600はS字状口縁甕である。1598は口縁部の小片で、頸部内面にわずかにハケが遺存する。1599は頸部が明瞭に屈曲する。口縁部上半は小さく立ち上がり、口縁端部は強いヨコナデによって面をなす。口縁部外面には押し列点文が施されている。頸部外面には沈線状の痕跡が残る。1600は頸部の屈曲がかなり緩い。頸部外面にはヨコナデないしヨコ



第192図 SH246出土遺物② (1/4)

ハケの工具のアタリと思われる痕跡が認められる。

1601～1607は高坏である。1601は小型のもので、口縁部の少し下でわずかに屈曲する。鉢などの可能性も考えられる。1602は有稜高坏である。坏部の屈曲は緩い。脚部は内湾する。1603は脚部外面上半に直線文を施している。1605は頸部外面にナデを施している。1606は頸部が太く、透孔がかなり高い位置にある。

**SH254 (第193図1608～1654)** 1608は西隅貯蔵穴から出土した。土師器高坏の脚部である。

1609は南隅貯蔵穴から出土した。須恵器坏蓋の口縁部片の小片である。口縁端部には凹縁状の段が作り出されている。混入したと考えられる。

1610～1654は埋土中などから出土した。

1610～1651は土師器である。

1610～1617は甕である。

1610～1613は中・大型の甕の口縁部である。1610はわずかに内湾しながら外方へ開く短い口縁部をもつ。口縁端部は丸く収められる。口縁部内面と体部外面はヨコミガキによって調整されるが、口縁部外面はハケやヨコナデによって調整されている。1611は広口甕の口縁部である。口縁端部は上下に拡張し、擬凹線文を施した後に棒状浮文と円形浮文を貼り付ける。棒状浮文は2本一組で5～6箇所貼り付けられているものと推測される。頸部には突帯が貼り付けられている。1612も口縁端部に棒状浮文を貼り付けている。

1614～1617は体部や底部片である。1614は体部下半の破片である。内外面ともハケで調整される。甕とも思われるが、器壁の厚さなどからみて甕の可能性が高い。1615は底部が突出する。1617は底部外面が凹む。内外面ともハケで調整されている。

1618～1638は甕である。

1618・1619はく字状口縁甕である。1618は口縁部が直立気味に立ち上がる。1619は口縁部の小片で、器壁が厚い。大型に復元されるが、口径の復元には不安を残す。古墳時代後期に下るものの可能性もある。

1620は受口状口縁甕である。口縁部の小片で、屈曲は明瞭である。口縁端部には強いヨコナデが施されており面をなす。

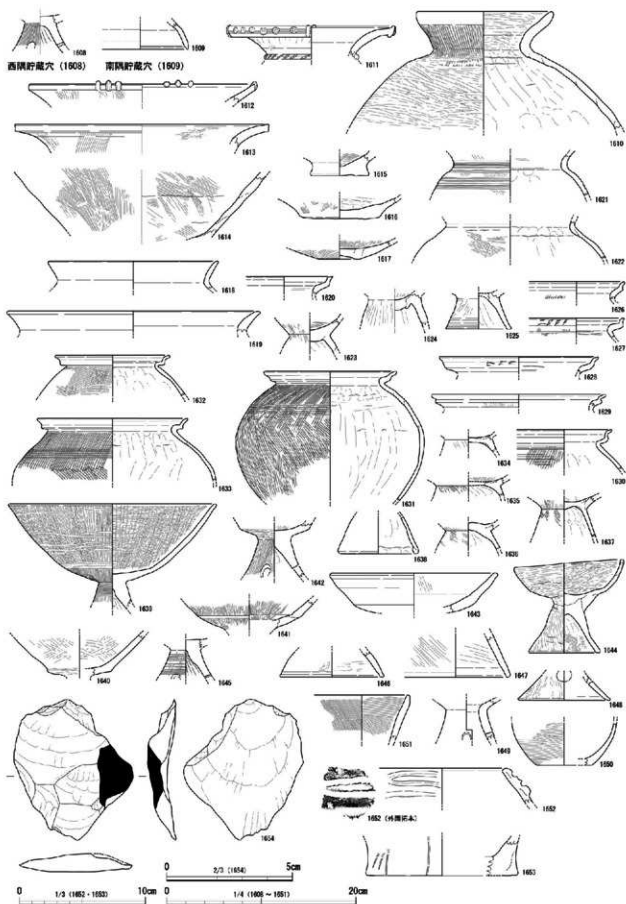
1621・1622は頸部から肩部にかけての破片である。1621は頸部と肩部に直線文状の粗いヨコハケが施されている。受口状口縁甕の可能性が高い。1622は頸部の屈曲が比較的緩い。外面はハケで調整されている。

1623～1625は台付甕の脚台部である。1623・1624は底部内面側から円板充填状に粘土を充填して、底部を閉塞している。1625は直線的にハ字状に開く。やや小型のもので、脚根部外面には不明瞭ながら直線文が施されている。台付甕の脚部とも考えられる。

1626～1638はS字状口縁甕である。

1626～1633は口縁部から体部にかけての破片である。1627・1628は口縁部外面に押し列点文を施し、頸部内面にはハケを施している。1627の頸部外面には沈線状の痕跡が認められる。1630は口縁部上半が直立し、口縁端部は強いヨコナデが施されるとともに外方へ引き出されている。頸部外面には沈線状の痕跡が認められる。1631は体部下半まで遺存する。口縁部の屈曲は緩く、特に内面の屈曲はヨコナデによる凹み状となり不明瞭である。肩部のヨコハケは頸部からかなり下がった位置に施されている。1632は口縁部の屈曲が明瞭である。頸部外面には沈線状のナデが認められる。1633は口縁端部のヨコナデが





第193圖 SH254出土遺物 (1/4、1/3、2/3)

やや不明瞭である。肩部のヨコハケは頸部から少し下がった位置に施されている。

1634～1638は脚台部である。1634は底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けるが、他のS字状口縁部に貼り付けられているものとは砂粒の様相が異なるようにも見受けられる。1635は大型の脚台部であるが、若干の歪みがあり、形状の復元には不安を残す。1637は底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けており、体部は脚台部上端の側面から成形されている。1638は脚端部を内側に明瞭に折り返している。

1639～1648は高坏である。

1639～1643は有稜高坏と思われるものである。1639は坏部が深い。坏部の屈曲は緩く、外面の稜は不明瞭である。口縁端部は丸く収められる。坏部外面はタテミガキで調整されるが、その後部分的にヨコミガキを施している。タテミガキの前にもヨコミガキが施されている可能性がある。一方、坏部内面はヨコミガキを施した後粗いタテミガキを暗文状に施している。脚部については、外面の頸部付近を細いヨコミガキで調整しており、内面にはケズリと思われる痕跡が認められる。1640は坏部片で、坏部の屈曲が比較的明瞭である。内外面とも、単位ごとに方向を変えて全体的に波状になるようにヨコミガキを施しているものと思われる。1641・1642も坏部の屈曲は比較的明瞭である。1643については外面に不明瞭な稜が認められるが、器壁が厚く、外面がヨコナデで調整されるなど、他の個体と比べて違和感がある。内面にわずかにミガキと思われる痕跡が残ることから高坏としたが、古墳時代前期後葉まで下る高坏、あるいは古墳時代後期の坏などの可能性もあろう。

1644は腕形高坏である。小型のもので、全体のかなりの部分が遺存するが、器形の歪みが大きい。坏部は腕形を呈し、口縁端部は丸く収められる。坏部内外面はヨコミガキによって調整される。透孔は認められない。鉢を逆位にしたような脚部を成形後、脚部上端の側面から坏部を成形し、坏部内面から脚部上面にかけての凹みを埋め、頸部には粘土を厚く貼り付けて補強している。

1645～1648は脚部である。1645は脚部外面上半に

直線文が施されている。1646は小型でわずかに内湾するもので、小型器台の可能性もある。1647は直線的に開く大型の脚部で、内外面ともハケで調整されている。古墳時代後期の匱の口縁部等の可能性も考えられる。1648も小型器台の脚部の可能性があろう。1649は器台である。頸部で強く屈曲し、受部が外方に大きく開く。

1650は鉢の底部と思われる。平底で、体部は内湾しながら立ち上がる。外面はハケで調整されている。

1651は匱の可能性がある。直線的に開く口縁部片で、内外面ともハケで調整される。匱とすれば古墳時代後期のもので混入したと考えられるが、鉢や甕の破片の可能性も残る。

1652・1653は縄文土器である。1652は深鉢ないし浅鉢の口縁部で、口縁部外面に粘土を貼り付けて肥厚させ、その部分に太い沈線による文様が描かれている。1653は深鉢の底部片で、沈線による文様が認められる。

1654は剥片である。溶結凝灰岩で石織等の製作には適さないが、人為的に剥離されたものの可能性が高い。打製石斧などの製作に伴う剥片とも思われる。縄文時代のものが混入したと考えられる。

**S H 299 (第194圖1655～1694)** 1655は貯蔵穴から出土した。土師器高坏の脚部である。わずかに内湾し、脚端部は丸く収められる。内面はハケで調整されている。

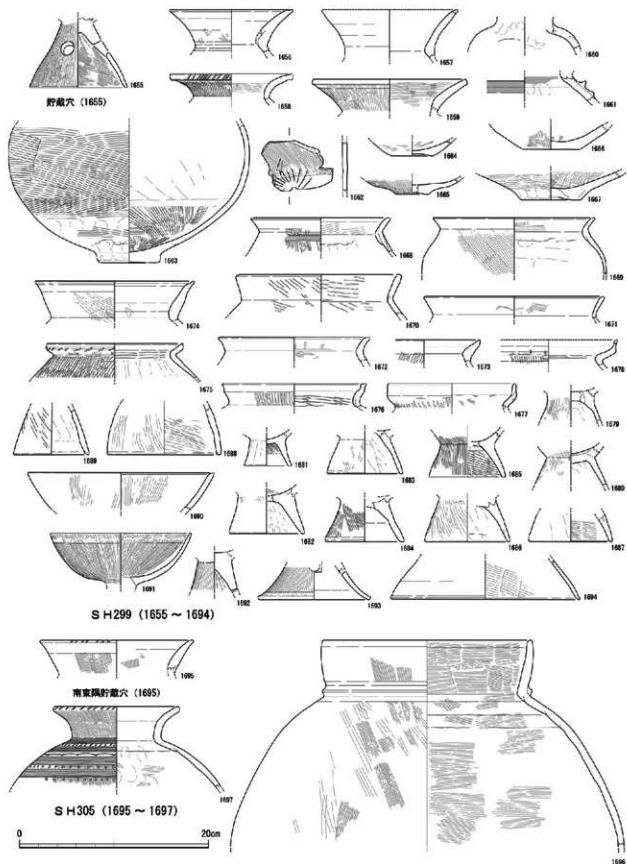
1656～1694は土師器である。

1656～1667は壺である。

1656～1659は小・中型の壺の口縁部である。1656・1657は直線的に外方に開く。1658は大きく外反し、口縁端部は面をなす。口縁端部には列点文が施されている。1659も口縁端部が面をなす。

1660～1662は体部片である。1660は小型壺の脚部付近の破片である。粘土接合痕やエビオサエの痕跡が残り、やや粗雑である。1661は大型の壺の肩部の小片である。頸部直下に2条の突帯を貼り付けている。内外面に赤彩が認められる。1662は体部の小片であるが、外面に鋭い工具による線刻が認められる。放射状に短い線が刻まれている。

1663～1667は体部から底部にかけての破片である。1663は体部上半から底部までが遺存する。体部は球



第194図 SH299出土遺物、SH305出土遺物① (1/4)

形を呈し、底部はボタン状に突出している。外面は粗いハケで調整されている。1664は底部外面が上げ底状に凹む。1666は平底で、内外面にハケが認められる。1667は外面にヨコマガキが施されている。

1668～1689は甕である。

1668～1675はく字状口縁甕である。1668・1669は頸部が明瞭に屈曲し、口縁部が短く外方へ開く。口縁端部は面をなす。1668の肩部外面にはヨコハケが施されている。1670は口縁部が直立気味に立ち上がる。内外面とも粗いハケが施されている。1672は口縁部が短く立ち上がり、口縁端部付近で外反する。1673は口縁部の小片で、体部外面には粗いハケが施されている。1674は口縁部が直線的にやや長くのびる。口縁端部内面には強いヨコナデによって凹んだ面が作り出されている。1675は口縁部に明瞭な屈曲部が認められないものの、口縁部外面に列点文を施したり、頸部内面に粗いハケを施すなど、受口状口縁甕やS字状口縁甕との共通性が高い。口縁部外面の上部には強いヨコナデによって面が作り出されており、本来は受口状口縁の甕として作られたものとも考えられる。

1676～1678は受口状口縁甕である。いずれも口縁部片である。1676は口縁部が直立気味に立ち上がる。口縁端部には強いヨコナデが施され、明瞭な面が作り出されている。頸部内面には粗いハケが施されている。1677は口縁端部が丸く収められている。外面にはススが付着している。1678は小片で、口縁端部を欠損する。屈曲部の外面には櫛状工具による列点文が施されている。

1679～1688は台付甕の脚部である。1680は底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含まない粘土を貼り付けている。1681は小型のもので、直線的にハ字状に開く。1683は脚部上端の側面から体部を成形している。1684はハ字状に大きく開く。上面には底部内面に貼り付けた粘土の剥離痕が認められる。1685は脚頂部に粗い砂粒を含まない粘土を貼り付けている。内外面とも粗いハケで調整している。1688は大型のもので、内湾している。

1689はS字状口縁甕である。脚部部の破片で、外面には断続的に粗いハケが施される。脚部部はわずかに内側に折り返されている。

1690～1694は高坏である。1690は口縁部片で、やや器壁が厚い。口縁端部は内傾する面をなす。1691は碗形高坏である。外面はハケを施した後にタテミガキによって調整されている。1692は脚部で、透孔がごくわずかに遺存するが、形状や数は不明である。1693は外反する脚部である。1694はかなり大型に復元される。内面がハケによって調整されることから脚部としたが、透孔は遺存しておらず、高坏の坏部、あるいは鉢の口縁部の可能性も考えられる。

**SH305 (第194・195図1695～1718)** 1695は南東隅貯蔵穴から出土した。土師器壺の口縁部と思われるものである。口縁端部にはハケ状工具による刻目が施されている。

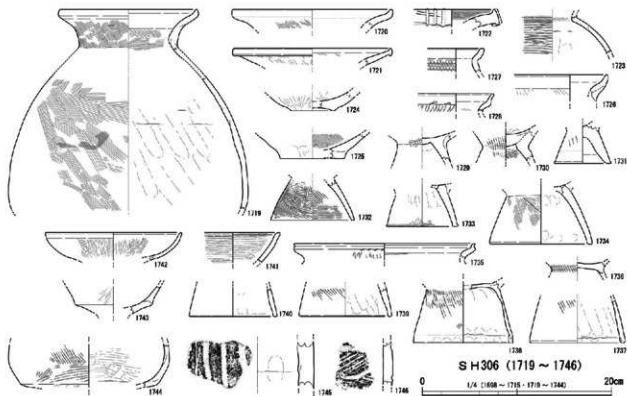
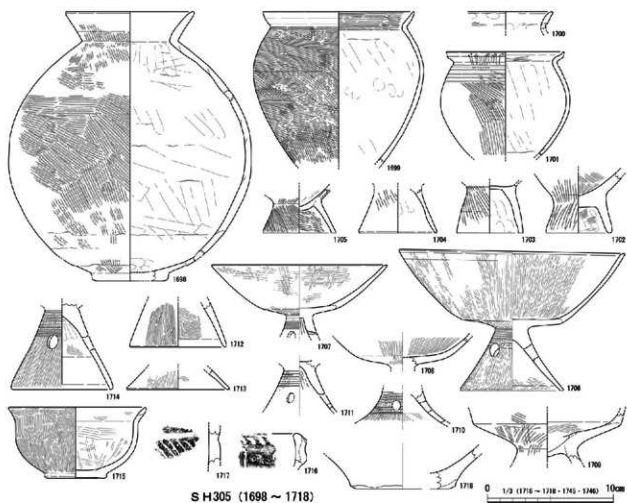
1696～1718は埋土中などから出土した。

1696～1715は土師器である。

1696～1698は壺である。1696はかなり大型のものである。口縁部は短く直立し、やや内湾する。口縁端部には不明瞭ながら内傾する面が作り出されている。頸部は明瞭に屈曲し、外面には突帯が貼り付けられている。内外面とも、全体的にハケによって調整されており、一部に工具ナデと思われるものも認められる。1697は広口壺で、装飾性が高い。口縁部は外反し、口縁端部は面をなす。口縁端部には列点文が施されている。肩部外面には直線文、列点文、連弧文が数段に渡って施されている。連弧文は二枚貝の貝殻腹縁による施文と思われる。また、列点文についても、ハケ状工具と棒状工具の2種類の工具が用いられた可能性がある。1698は大型の広口壺で、ほぼ全形が復元できた。ただし、部分的に図上復元を行っている。体部は球形に近い形を呈し、頸部は鋭く屈曲する。口縁部は直線的に外方へ開く。外面の調整は粗雑で、全体的に粗いハケが施されており、体部下半には粘土接合痕が顕著に残る。また、外面にはススが付着している。

1699～1705は甕である。

1699・1700はく字状口縁甕である。1699は体部下半まで遺存する。体部は倒卵形を呈し、肩部の張りは弱い。体部外面は粗いハケで調整し、口縁部内面にも粗いハケが施されている。1700は口縁部の小片である。外面にエビオサエの痕跡が残る、粗雑な印象を受ける。



第195図 SH305出土遺物②、SH306出土遺物(1/4、1/3)

1701は受口状口縁甕である。体部下半まで遺存する。口縁部は短く上方につまみ上げられて屈曲する。口縁端部に弱いヨコナデが施され、若干外方に引き出されているようにも見受けられる。口縁部外面には櫛状工具による列点文が施されているが、これも若干工具を引きずっているようにも思われる。こうした特徴はS字状口縁甕とも共通するが、胎土は典型的なS字状口縁甕とは異なっており、在地産のS字状口縁甕の可能性も考えられる。

1702～1705は台付甕の脚台部である。1702は底部がかなり厚い。脚台部は直立気味に開く。外面には粗いハケが施されている。1703は脚端部が面をなす。1704は器壁が薄く、ハ字状にやや大きく開き、脚端部は丸く収められる。1705は低い脚台部である。ハ字状に大きく開き、脚端部は面をなす。底部は円板充填によって閉塞されていると思われる。

1706～1714は高坏である。

1706～1709は有稜高坏の坏部と思われる。1706はほぼ全形が復元できた。坏部は比較的深く、口縁端部には不明瞭ながら内傾する面が認められる。坏部の屈曲は明瞭である。脚部はハ字状に直線的に開き、脚端部は面をなす。脚部外面上半には直線文が施されている。坏部の外面にはわずかにススが附着しているほか、外面は全体的に二次的に被熱している。1707は坏部から脚部にかけての破片で、坏部は浅い。坏部内外面はヨコミガキを施した後、粗いタテミガキが施されている。脚部外面上半には直線文が施されている。また、口縁部内外面にススが附着しており、蓋等として転用された可能性もある。1708は坏部の屈曲が緩い。1709は特異な形態のものである。頸部が太く、脚部はハ字状に大きく開くようである。坏部は内外面ともハケで調整されている。脚部と坏部との接合方法は判然としないが、断面の粘土接合痕や剝離の状況からみると、筒状の脚部を成形後、脚部内面側と坏部内面側の両方から粘土を充填していると思われる。また、外面にはススが附着し、二次的な被熱も認められる。台付鉢や台付壺の可能性も考えられる。

1710～1714は脚部である。1710は大きく外反する。外面には直線文が施されている。内面の形態からみると、それほど高くない脚部と思われ、台付壺の脚

部の可能性も考えられる。1711は脚部外面上半に直線文を施す。1712は直線的に開く。外面には工具痕と思われる鋭い線状の痕跡が数箇所認められる。1714は直線的にハ字状に開くが、1706よりは高い脚部である。脚部外面上半には直線文が施されている。

1715は鉢である。椀形の体部に、短く外方へ開く口縁部が付く。頸部の屈曲は緩く、口縁端部は丸く収められる。外面は全体的にハケで調整されているが、内面にはミガキも施されている。

1716～1718は縄文土器である。1716は深鉢の口縁部片と思われる。口縁部外面に隆帯状に粘土を貼り付けて肥厚させ、口縁端部に刻目を施している。1717は深鉢の体部片と思われる。区画文と思われる太い沈線と、細い沈線による斜行沈線あるいは矢羽根状文が認められる。1718は底部である。体部が大きく外方へ開くことから、浅鉢の底部の可能性であろう。これらは混入したと考えられる。

**SH306 (第195図1719～1746)** 1719～1744は土師器である。

1719～1725は壺である。

1719～1723は中・大型の壺の口縁部から体部にかけての破片である。1719は口縁部と体部が遺存している。口縁部は外反するが、口縁端部は上方につまみ上げられて屈曲し、わずかに受口状を呈する。体部は下ぶくれで、なで肩の器形を呈する。外面は全体的にハケで調整されている。文様は認められないが、体部外面に一部赤彩が施されている。1720も1719と似た口縁部の破片である。1721は直線的に開く口縁部で、口縁端部は上下に小さく拡張される。内外面ともハケで調整される。器台の可能性も考えられる。1722は口縁部の小片である。口縁端部は上下に拡張され、粗いハケ状の痕跡が認められるが、複雑な擬凹線文とも考えられる。また、棒状浮文が貼り付けられているが、ほとんど剝離しており、ごく一部しか遺存していない。口縁部内面には赤彩が施されている。1723は頸部から肩部にかけての破片である。外面には粗いハケが施されている。

1724・1725は底部である。1724は底部外面が凹み、上げ底状を呈する。外面にはミガキが施されている。1725は外面にススが附着している。

1726～1740は甕である。

1726~1728は受口状口縁甕である。いずれも口縁部の小片である。1726は屈曲が緩く、口縁端部は丸く収められる。1727も屈曲が緩い。口縁端部には強いヨコナデが施され、面をなす。1728は口縁部がやや外反する。口縁部外面には櫛状工具による列点文が施されている。

1729~1734は台付甕の脚台部である。1730はおそらく脚台部と体部を一連で成形し、円板充填によって底部を閉塞している。そして、さらにその上に粘土を貼り付けて整形している。1731は小型のもので、器壁が厚い。1732は内外面を粗いハケで調整している。1733は脚台部上端の側面から体部を成形している。脚端部は面をなす。1734は大型のものである。

1735~1740はS字状口縁甕である。1735は口縁部上半が短く立ち上がり、口縁端部には強いヨコナデが施され内傾する面をなす。口縁部外面には押し列点文が施されており、頭部内面には非常に粗いハケがわずかに遺存する。1736~1740は脚台部である。1736は脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。1737・1738は脚端部を明瞭に内側へ折り返している。1738は底部内面のみ粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。1739・1740は脚端部が面をなし、内側へ折り返されていない。1739については台付甕や在地産のS字状口縁甕の可能性も考えられる。

1741~1743は高坏である。1741は口縁部の小片で、口縁端部には不明瞭な面が認められる。内外面ともヨコミガキによって調整されている。1742は椀形高坏で、坏部は浅い。1743は小型のもので、坏部の屈曲が明瞭であり、外面は明瞭な稜をなす。器台の可能性もある。

1744は手焙形土器の鉢部と思われる。体部下半で明瞭に屈曲している。外面は粗いハケによって調整されている。また、外面にススが付着している。

1745・1746は縄文土器深鉢の体部片と思われる。1745には縦位の太い並行沈線が認められる。1746には沈線と条線が施されている。これらは混入したと考えられる。

**S H307 (第196図1747~1750)** 1747~1749は土師器である。1747は壺と思われるが、頭部の縮まりが弱い。口縁端部に刻目が施されている。外面はハケで調整されている。1748はく字状口縁甕である。口

縁部には内外面に粘土接合痕が明瞭に残り、粗雑な印象を受ける。外面は粗いハケによって調整されている。1749は有稜高坏の坏部である。比較的深い坏部で、口縁端部には内傾する面が認められる。内外面ともタテミガキによって調整されている。

1750は縄文土器深鉢の底部である。混入したと考えられる。

**S H319 (第196図1751~1780)** 1751~1780は土師器である。

1751~1758は壺である。

1751~1754は壺の口縁部である。1751は短頸の瓢形壺で、口縁部はほとんど内湾せず、ほぼ直立する。口縁端部に面は認められない。1752は広口壺で、口縁端部は面をなし、擬凹線文が施される。頭部には突帯が貼り付けられているが、かなり粗雑でナデ付けた痕跡が明瞭に残る。1753も広口壺で、口縁部内面に粗雑な波状文が施されている。1754は頭部の縮まりが弱く、器形や調整からは壺とも思われるが、胎土が精良で丁寧に成形されているため、壺とした。高坏の口縁部の可能性もある。

1755・1756は大型の壺の体部片である。1755は球形を呈する体部で、体部外面下半にはケズリが認められる。また、肩部には粗いハケが一部に遺存している。1756は体部下半である。外面は全体的にハケで調整され、赤彩が施されている。内面はケズリによって調整されている。

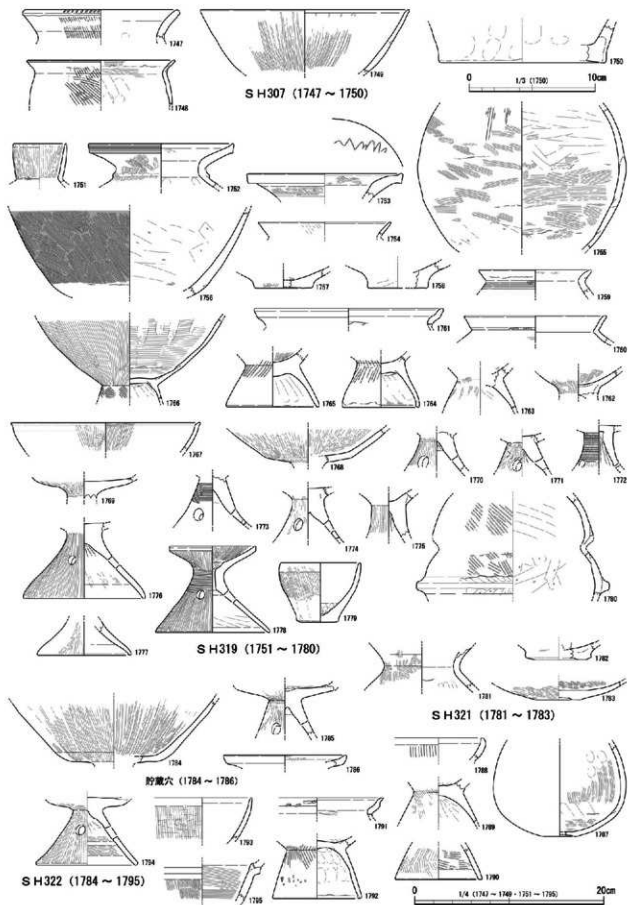
1757・1758は底部の小片である。1758は底部がポタン状に突出する。

1759~1766は甕である。

1759・1760はく字状口縁甕である。1759は器壁が厚く、口縁部は頭部から短く外方へ開く。肩部外面にはヨコハケが施されている。1760は器壁が薄い。頭部は鋭く屈曲し、口縁端部は丸く収められる。外面にはわずかにハケが認められる。

1761は受口状口縁甕である。口縁部の小片で、屈曲は緩いが、屈曲部外面の稜は明瞭である。頭部内面には粗いハケが施されている。

1762~1765は台付甕の脚台部である。1763はわずかに内湾する。1764も下半部が内湾しており、脚端部は内傾する面をなす。脚頂部には粗い砂粒を含まない粘土を貼り付けている。1765はハ字状に大きく



第196圖 SH307・319・321・322出土遺物 (1/4、1/3)



開く。

1766はS字状口縁甕である。体部下半から脚台部にかけての破片で、体部内面はハケとナデで調整されている。底部内面及び脚頂部には粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。また、体部内面には製作時の乾燥単位と思われる粘土接合痕が、段となって明瞭に残されている。

1767～1777は高坏である。

1767～1769は坏部の破片である。1767は口縁部片で、口縁端部に内傾する面が認められる。外面はヨコミガキを施した後にはタテミガキを施していると思われる。1768は有稜高坏で、坏部の屈曲は比較的明瞭である。1769も有稜高坏で、屈曲部の接合部で剥離している。

1770～1777は脚部である。1771は脚部上半外面に列点文と思われるものが認められ、一部では矢羽根状を呈する箇所もあるが、工具のアタリ等の可能性もあり、文様とは断定できなかった。1772・1773は脚部外面上半に直線文を施している。1775は坏部の底部中央が深く凹む。凹みを埋めた粘土が剥離している可能性もある。1776はわずかに内湾しながら八字状に大きく開く。脚端部は丸く収められる。透孔は小さい。1777は小型のもので、器台の可能性も考えられる。

1778は器台である。全形が復元できたものである。受部は直線的に外方に開き、口縁端部は面をなす。受部から脚部にかけて孔が貫通している。頸部外面には直線文が施されている。透孔は比較的小さく、3方向に開けられている。

1779は鉢である。平底の底部から、体部が内湾しながら立ち上がる。口縁端部は丸く収められる。

1780は手焙形土器である。覆部と鉢部は接合しないが、同一個体と考えられる。受口状口縁を呈する鉢部の口縁部からドーム状に覆部が成形されているものと思われる。鉢部の屈曲部外面には太い突帯が貼り付けられている。突帯の下面にはケズリが及んでおり、鉢部の底部外面はケズリによって調整されていたものと考えられる。内面もケズリによって調整されている。全体的に調整は粗雑である。

**SH321 (第196図1781～1783)** 1781～1783は土器器である。いずれも壺である。1781は頸部片で、外

面はハケで調整されている。頸部の屈曲は緩い。1782は底部の小片である。1783も底部片で、底部外面中央が凹む。内外面ともハケで調整されている。**SH322 (第196図1784～1795)** 1784～1786は貯蔵穴から出土した。いずれも土師器である。

1784・1785は高坏で、いずれも有稜高坏である。1784は坏部片で、坏部の屈曲は明瞭である。内外面ともタテミガキで調整されており、外面にはススが付着している。1785は坏部から脚部にかけての破片である。坏部の屈曲部には接合部で剥離した痕跡が残る。二次的に被熱している。

1786は小片であるが、おそらく器台の口縁部と思われる。口縁端部をやや上方にはね上げている。内面はミガキで調整されており、赤彩がごくわずかに遺存している。

1787～1795は埋土中などから出土した。いずれも土師器である。

1787は壺の体部で、瓢形壺と思われる。外面の調整は風化により不明瞭だが、ミガキが施されている可能性が高い。底部外面は凹んでいる。

1788～1792は甕である。

1788は受口状口縁甕の口縁部片である。屈曲は緩く、全体的に内湾する。外面には粗いハケが施されている。1789・1790は台付甕の脚台部である。1789の外面にはススが付着している。1790は内外面ともハケやヨコナデによって調整され、脚端部が面をなす。1791・1792はS字状口縁甕である。1791は口縁部片で、外面には押し列点文が施されている。頸部内面には粗いハケが施されている。1792は脚台部で、脚端部は内側に折り返されている。外面下半には、櫛状の工具を連続で押し当てたような工具痕が認められる。部分的なもので、規則性もないことから、文様とは考えがたい。また、底部内面及び脚頂部には粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられている。

1793・1794は高坏である。1793は椀形高坏の口縁部と思われる。口縁端部内面に強いヨコナデが施されている。外面には幅広のヨコミガキを施した後にはタテミガキを施している。1794は脚部で、坏部が一部遺存する。おそらく有稜高坏と思われる、坏部は屈曲部で剥離している。脚部は低く、わずかに外反しながら八字状に開く。

1795は手焙形土器の鉢部の小片と思われる。く字状に強く短く外反する鉢部の口縁部の内側に、覆部がごく一部遺存している。手焙形土器とすると、鉢部と覆部の接合部が括れるS H319出土の1780とは異なり、全体的に球形を呈する器形のものである可能性が高い。

**S H323 (第197図1796~1812)** 1796~1810は土師器である。

1796・1797は壺である。1796は口縁部片で、口縁端部は若干肥厚する。内外面ともハケで調整されるが、内面にはわずかに赤彩の痕跡が認められる。1797は頸部片で、頸部外面には粗雑な突帯が貼り付けられている。

1798~1805は甕である。

1798・1799はく字状口縁甕である。1798は体部下半まで遺存している。口縁部は上方に立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。体部内面はケズリによって調整されている。1799は口縁部の小片で、わずかに内湾する。調整などからみると、受口状口縁甕とも考えられる。

1800~1802は台付甕の脚台部である。1800は上面に剝離した痕跡が認められる。1801はやや内湾し、脚端部は面をなす。内外面ともハケで調整されている。1803は小片で、外面に粗いハケが施されている。

1804・1805はS字状口縁甕である。1804は口縁部の小片で、口縁端部には強いヨコナデが施されており、わずかに凹んだ面を作り出している。外面には押引列点文が施されている。1805は肩部の破片である。外面には頸部直下にヨコハケが施されている。内面にもハケが施されている。

1806~1809は高坏である。1806は碗形高坏と思われる。口縁端部内面にはわずかに内傾する面が認められる。1807・1808は有稜高坏の口縁部片と思われる。いずれも坏部は浅いと推定される。1807の外面や1808の内面は、ヨコミガキを施した後にタテミガキによって調整されている。1809は脚部である。頸部外面付近には爪痕状の痕跡が複数認められる。

1810は器台である。小型のもので、受部はわずかに内湾し、口縁端部は面をなす。内面はハケで調整した後に細いミガキを暗文状に疎らに施す。外面にも細いミガキが波状に粗く施されている。

1811・1812は縄文土器である。1811は深鉢の破片と思われる。沈線と捻糸文状の文様が認められる。沈線が横位になるよう図化したのが、小片のため確定的ではなく、沈線が縦位になる可能性もある。1812は深鉢の体部片で、縦位の多条並行沈線3条と縄文が施されている。これらは混入したと考えられる。

**S H331 (第197図1813~1838)** 1813は貯蔵穴から出土した。土師器高坏の坏部片である。小型の碗形高坏と思われ、口縁端部は丸く収められる。内外面ともタテミガキで調整されている。

1814~1838は埋土中などから出土した。

1814~1837は土師器である。

1814~1818は壺である。1814は頸部付近の破片で、粗雑な突帯が貼り付けられている。突帯には貼り付け時のユビオサエが深い凹みとなって残り、その凹みを中心に赤彩が認められる。1815は台付壺と思われる。1816~1818は底部である。1816は大型のもので、底部の周囲が高台状に突出している。内面はハケとミガキによって調整されているが、外面にも一部にミガキが施されており、外面にはスガが付着している。こうした点を鑑みると、大型の鉢の底部の可能性も残る。1818は底部外面中央が凹む。

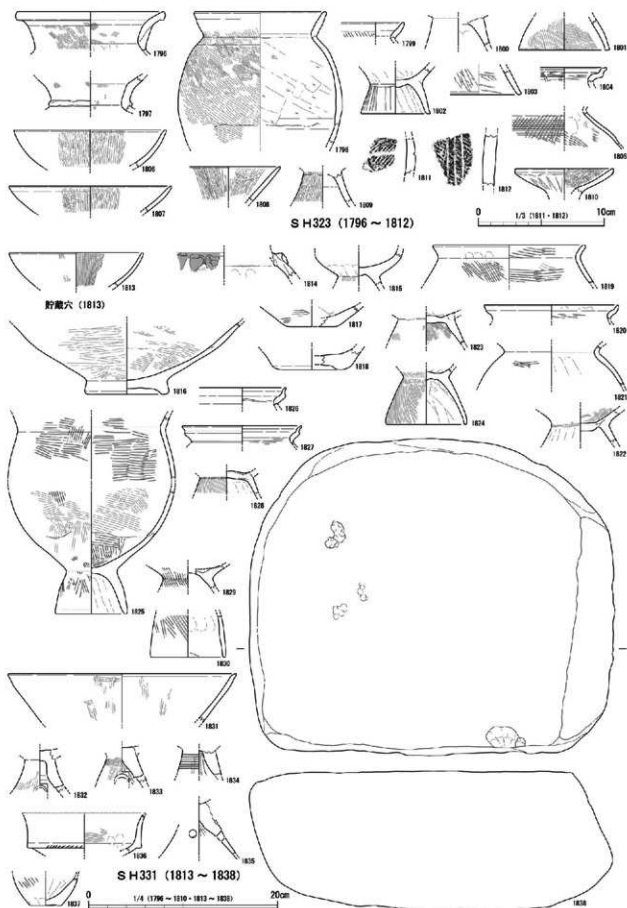
1819~1830は甕である。

1819はく字状口縁甕である。頸部の屈曲は比較的緩く、口縁部は短く外反する。内外面とも粗いハケで調整されている。調整などからみて、1825と同一個体の可能性も考えられる。

1820は受口状口縁甕である。口縁部内面にはユビオサエが認められる。頸部内面にはハケが施されている。

1821は頸部から体部にかけての破片である。外面にはわずかに粗いハケが遺存している。

1822~1825は台付甕の脚台部等である。1822は脚頂部に円板充填状の痕跡が認められるが、さらに底部内面に粘土を貼り付けて体部を成形しており、脚部と体部を一体的に成形したとは判断できない。1824は下半部がわずかに内湾する。内面は工具ナデで調整されている。1825はほぼ全形が復元できたものである。ただし、上半部については歪みもあり、器形の復元には不安を残す。1819が同一個体とすれば、もう少し頸部が縮まる器形を呈する可能性もあ



第197図 SH323・331出土遺物 (1/4, 1/3)

る。体部下半には製作時の乾燥単位と思われる粘土接合痕が明瞭に残る。脚台部はかなり器壁が厚い。外面にはスガが付着しており、脚台部は二次的に被熱している。

1826～1830はS字状口縁甕である。1826・1827は口縁部片で、いずれも口縁部外面には押し列点文が施されており、頸部内面には粗いハケが施されている。1828～1830は脚台部である。1828は底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられている。1829は底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられていたと思われるが、剥離している。底部内面の剥離部では、脚部との接合部に沿って連続的なユビオサニが施されている様子が観察できる。1830は脚端部に折り返しが認められない。

1831～1835は高坏である。

1831は有稜高坏の坏部片である。口縁端部には強いヨコナデが施されており、内傾する面をなす。外面にはハケを施した後タメガキによって調整されている。

1832～1835は脚部である。1833は頸部付近にハケが残る。1834は脚部外面上半に直線文が施されている。1835は透孔が遺存しているが、やや小さい透孔である。器台の脚部の可能性も考えられる。

1836は器台と思われる。小型の壺などの可能性も考えられるが、器形等からみて器台の可能性が高いと判断した。受部は二重口縁状を呈しており、屈曲部はわずかに下方に垂下し、刻目が施されている。

1837は鉢の底部と思われる。小型で、外面にはハケが施されている。

1838は石製品で、台石である。溶結凝灰岩製で、長さ38.5cm、重さ34.7kgと非常に大型のものである。床面に安置された状態で出土した。上面は全体的にかなり平滑で、意図的に加工されているものと思われる。使用痕は不明瞭だが、わずかに敲打痕が認められる。

**S H332 (第198図1839～1869)** 1839～1841は貯蔵穴から出土した。

1839・1840は土師器である。1839は高坏の脚部と思われる。ハ字状に開く。1840は鉢である。小型の碗形のもので、体部は内湾する。内外面ともミガキで丁寧に調整されている。

1841は石製品で、磨石である。砂岩の円礫を利用したもので、側面の一部が不明瞭な面をなす。使用による摩滅は顕著ではない。

1842～1869は埴土中などから出土した。いずれも土師器である。

1842～1846は壺である。1842は短頸壺で、ごく短い口縁部が付く。今回の調査では他にみられない器形である。鉢とした方がよいかもしれない。体部外面には粗いハケが施されている。1843は広口壺の口縁部である。口縁端部は上下に拡張されて面をなし、列点文が施されている。1844は大型の壺の肩部片である。外面には直線文と列点文が認められる。1845・1846は底部である。1845の底部外面には種子丘痕と思われるものが認められる。

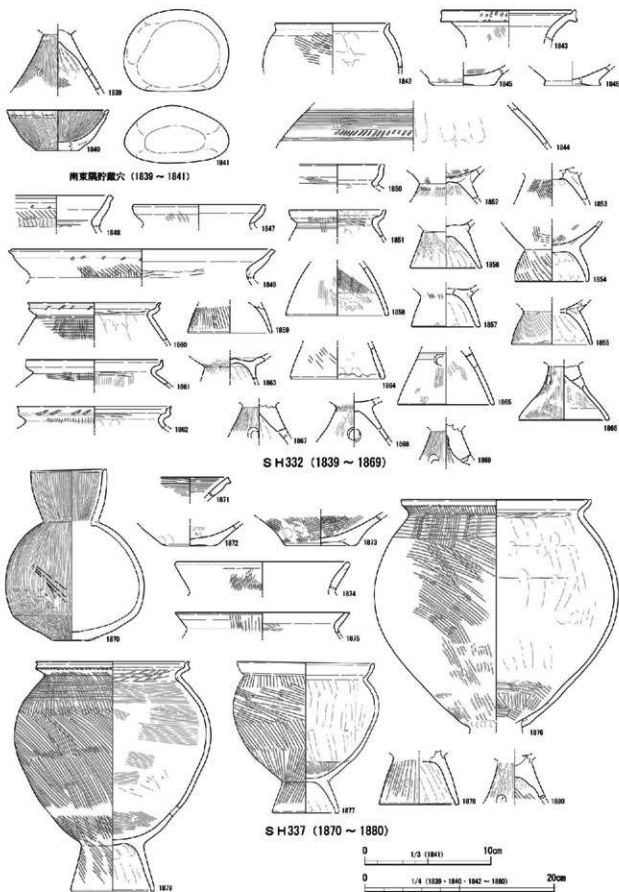
1847～1864は甕である。

1847～1849はく字状口縁甕である。1847は口縁部の小片で、若干内湾する。調整などからみて、受口状口縁甕とも考えられる。1848・1849はかなり似た口縁部片である。いずれもわずかに内湾し、口縁端部が面をなす。また、外面上半に強いヨコナデを施し、その下端に櫛状工具による列点文を施す。同一個体の可能性もあるが、頸部の屈曲や口縁部の立ち上がりの角度などから、別個体と判断した。屈曲が弱いためく字状口縁甕としたが、調整や文様からみて受口状口縁甕を意識したものと考えられる。

1850・1851は受口状口縁甕である。1850は口縁部の小片で、外面の頸部付近に粗いヨコハケがわずかに遺存する。1851は小型のもので、肩部外面にはヨコハケが施されている。頸部内面には粗いハケが施されている。

1852～1859は台付甕の脚台部である。1852は筒状に成形した脚台部の上面を円板充填体に粘土を貼り付けて閉塞し、脚台部上端の側面から体部を成形した後に、底部内面に粘土を貼り付けて補強している。1854は低い脚台部で、全体的に内湾する。1855～1857は脚台部上端の側面から体部を成形していることが、断面の粘土接合痕から推測できる。1858はやや大型のもので、内外面ともハケで調整されている。器壁が若干薄く、高坏の脚部の可能性も残る。

1860～1864はS字状口縁甕である。1860～1862は口縁部片である。1860は口縁端部に強いヨコナデが



第198図 S H332・337出土遺物 (1/4、1/3)

施されており、わずかに凹んだ面が作り出されている。口縁部外面には押し列点文が施されている。また、頸部外面には沈線状の痕跡が認められるが、頸部直下までヨコハゲが施されており、その工具のアタリの可能性もある。1861は胎土や調整などからS字状口縁甕と判断されるが、口縁端部のヨコナデが不明瞭で、口縁部の断面形が明瞭なS字状を呈していない。ただし、風化等によるもの可能性もある。1862は口縁部が明瞭に屈曲し、口縁端部には強いヨコナデが施されており、わずかに凹んだ面が作り出されている。ただし、口縁端部の外方への引き出しは弱い。口縁部外面には列点文が施されている。ハケ状工具によるものと思われ、一般的なS字状口縁甕の押し列点文とは異なる。胎土や調整は典型的なS字状口縁甕と比べて大きな違和感はないが、模倣等によって製作されたS字状口縁甕の可能性も考えられる。1863・1864は脚台部である。1864は脚端部を内側に折り返している。

1865～1869は高坏である。いずれも脚部片である。1865は脚部外面上半に直線文を施している。直線的にハ字状に開く。1866は緩やかに内湾しながらハ字状に開く。脚端部は面をなす。透孔は、かなり頸部に近い位置に開けられている。1867は脚部内面頂部に浅い軸芯痕が認められる。1868は4方向に透孔が開けられている可能性がある。頸部の縮まりが若干弱い。

**S H337 (第198圖1870～1880)** 1870～1880は土師器である。

1870～1873は壺である。1870は瓢形壺で、ほぼ完形である。口縁部の内湾は弱く、口縁端部には内傾する面をもつ。体部は下ぶくれの器形を呈するが、下位にやや明瞭な稜をなす屈曲部が認められ、製作時の乾燥単位を反映したものと思われる。外面は全体的にタテミガキによって調整されているが、体部中位にはタテミガキの前にヨコミガキが施されている。また、不明瞭であるが、底部外面はケズリによって調整されている可能性がある。なお、体部外面に線刻状の鋭い沈線が複数認められるが、これらはタテミガキを施す前に付けられており、意図的な線刻ではない可能性が高い。1871は口縁部の小片で、口縁端部は面をなす。1872は底部で、内面に爪痕が認

められる。1873は輪台状の底部である。内外面とも粗いハケで調整されている。

1874～1879は甕である。

1874・1875はく字状口縁甕である。1874は口縁端部を丸く収める。1875は口縁端部の上面に強いヨコナデを施しており、明瞭な面をなす。また、頸部内面には粗いヨコハゲが施されているなど、全体的に受口状口縁甕に似た点が見受けられる。

1876～1878は受口状口縁の台付甕及び台付甕の脚台部である。1876は受口状口縁台付甕で、口縁部は緩やかに屈曲する。肩部外面には粗いヨコハゲが施されている。また、頸部内面や体部内面下半にも粗いハゲが施されている。脚台部は欠損しているが、剝離面からみて脚台部上端の側面から体部を成形していると思われる。1877は小型の受口状口縁台付甕である。ほぼ全形が復元できた。口縁部は緩やかに内湾し、屈曲はあまり明瞭ではない。口縁端部には強いヨコナデが施されており、面をなす。体部外面は全体的に粗いハケで調整されているが、肩部に明瞭なヨコハゲは認められない。脚台部はやや低い。1878は台付甕の脚台部で、脚端部は面をなす。外面にはハゲが施されている。

1879はS字状口縁甕である。ほぼ全形が復元できたが、一部は破片同士が接合せず、図上で復元している。口縁部の屈曲は明瞭で、屈曲部の外面は明瞭な稜をなす。この稜付近にハケ状工具による列点文が施されている。口縁端部には強いヨコナデが施されており、明瞭な面を作り出すとともに、外方へ引き出されている。頸部内面には粗いハゲが施されているが、体部内面は比較的細かいハケやケズリで調整されている。器形や体部外面の調整からみてS字状口縁甕として製作されていることは間違いないが、口縁部外面に押し列点文ではなく列点文が施されている点や、体部内面がハケやケズリによって調整されている点、器壁がやや厚い点、底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられていない点、脚端部の折り返しが不明瞭な点、そして胎土などが典型的なS字状口縁甕とは異なっており、在地産のS字状口縁甕と考えられる。

1880は高坏である。脚部片で、上面には丸く凹んだ剝離面が認められる。

S H338 (第199・200図1881~1928) 1881~1926

は土師器である。

1881~1891は壺である。

1881~1884は小・中型の壺である。1881は小型の壺で、ほぼ全形が復元できた。口縁部は直立気味に立ち上がり、わずかに内湾する。外面は粗いハケで調整されている。1882は小型の壺の口縁部で、内外面ともヨコミガキが施されている。1883は小型の壺の底部から体部下半にかけての破片で、体部下半に明瞭な屈曲が認められる。1884は瓢形壺の体部と思われる。典型的な瓢形壺と比べると、やや縦長の器形を呈する。外面はヨコミガキを施した後にタテミガキを施しているが、下半部はタテミガキが粗くヨコミガキが明瞭に残る。

1885~1888は大型の壺の口縁部等である。1885は広口壺で、口縁部が直線的に開くが、上半部で緩やかに外方に屈曲している。口縁端部には刻目が施されている。体部外面は全体的に粗いハケで調整されているが、体部の肩部以下にはハケの後にヨコミガキが施されている。1886は広口壺である。口縁端部に粘土を貼り付けて下方へ拡張して面を作り、粗いハケ状の擬回線文を施している。棒状浮文の痕跡も残るが、ほとんど剥離している。頸部外面には粗雑な粘土の貼り付けが認められるが、突帯ではなく、頸部の補強として貼り付けられた可能性が高い。1887は広口壺であるが、口縁部が途中で屈曲し、有段口縁状を呈する。屈曲部外面は若干垂下させている。口縁部外面にはハケ状工具による矢羽根状文ないし列点文が施されている。頸部外面には低い突帯が貼り付けられている。肩部外面には直線文と列点文が施されており、文様より下位にはわずかに赤彩の痕跡が認められる。1888は広口壺で、いわゆるパレススタイル壺である。口縁部から底部にかけての破片が多数出土しているが、全形を復元することはできなかった。口縁部は大きく外方へ開き、口縁端部は上下に拡張して擬回線文を施し、4本一組の棒状浮文を貼り付けている。口縁部は赤彩されているが、棒状浮文の部分のみは赤彩されていない。ただし、両端の棒状浮文の側面には赤彩が及ぶ。口縁部内面には低い突帯状の突出部があり、その突出部から口縁端部にかけての範囲に櫛状工具による矢羽根

状文が施されている。体部には直線文や矢羽根状文が施されており、円形浮文も貼り付けられている。体部の赤彩は、文様が施された範囲以外に施されているようである。なお、体部の破片には若干文様構成が異なっていると思われるものが認められ、同様の壺がもう1個体存在した可能性もある。

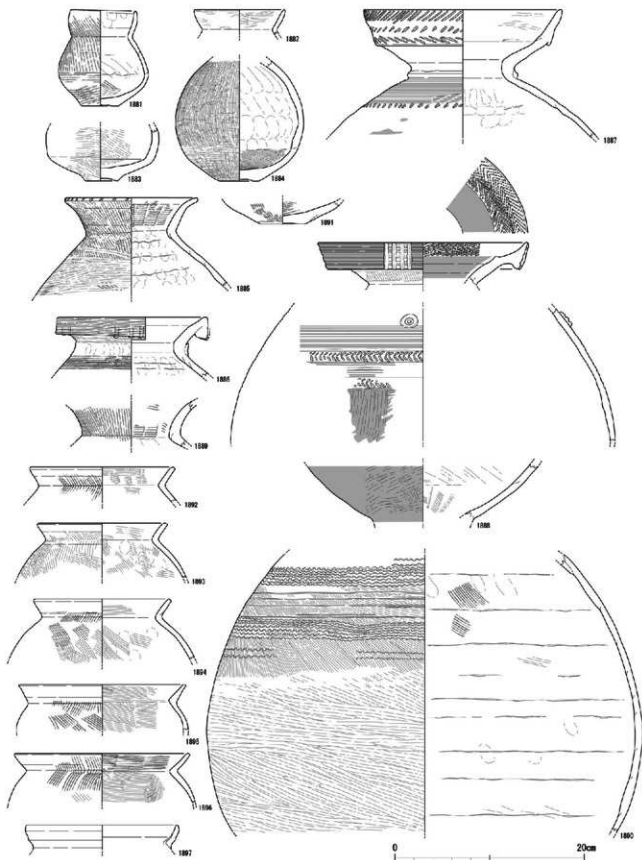
1889~1891は中・大型の壺の頸部や体部・底部の破片である。1889は広口壺の頸部片で、内外面とも粗いハケで調整されている。1890は大型の壺の体部である。体部外面は上半部がハケで調整され、やや雑な波状文や直線文が施されている。下半部は幅広いヨコミガキで丁寧に調整されている。1891は底部で、内外面とも粗いハケが施されている。

1892~1909は甕である。

1892~1898はく字状口縁甕である。1892は口縁端部が丸く収められる。1894~1896は同一個体の可能性がある。1894は口縁部がわずかに外反し、1895は直線的のび、1896は若干内湾するが、胎土や調整はかなり類似しており、形態の差異も同一個体の部位による微妙な差異の範囲に収まるものと思われる。ただし、破片同士が接合せず、別個体の可能性も否定できないため、個別に図化した。1898は体部下半まで遺存している。く字状口縁甕としたが、口縁部は内面が若干屈曲しており、外面には屈曲は明瞭でないものの内面の屈曲に対応するような強いヨコナデが施されていることから、受口状口縁甕とも考えられる。体部外面は粗いヨコハケで調整され、頸部内面にも粗いヨコハケが施されているなど、調整も受口状口縁甕と共通する。

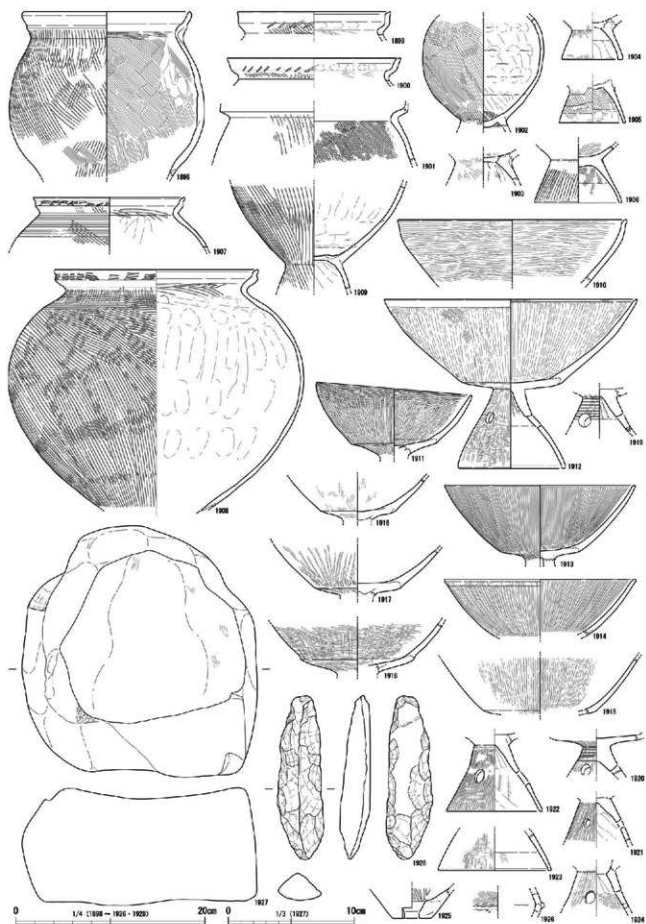
1899~1901は受口状口縁甕である。1899は口縁部が明瞭に屈曲して受口状を呈する。口縁端部には強いヨコナデが施されており、わずかに凹んだ面をなす。口縁部外面の屈曲部にはハケ状工具による列点文が施されている。口縁部内面には連続するユビオサエが残る。1900は1899より口径が大きく復元されるが、基本的な特徴は共通しており、同一個体の可能性がある。1901は口縁端部を欠損する。体部内面は粗いハケによって調整されている。

1902~1906は台付甕である。1902は体部がかなり遺存している。小型のもので、体部外面はハケで調整されている。体部内面には粘土接合痕が顕著に残



第199圖 SH338出土遺物① (1/4)





第200圖 SH338出土遺物② (1/4、1/3)

されている。1903～1904は脚台部である。1904は脚端部に明瞭な面をもつ。1905は脚台部上端の側面から体部を成形していることが、剥離した痕跡から推定される。1906は外面を粗いハケで調整している。

1907～1909はS字状口縁甕である。1907は口縁部から肩部にかけての破片で、口縁部の屈曲は比較的緩い。口縁端部には強いヨコナデが施されており面をなす。口縁部外面には押し列点文が施されている。1908は口縁部から体部下半まで遺存する。口縁部の屈曲は比較的明瞭で、特に外面には明瞭な稜を有する。口縁端部には強いヨコナデを施して内傾する面を作り出すとともに、外方へわずかに引き出す。口縁部外面には押し列点文を施す。体部は肩が張る無花果形の器形を呈している。肩部外面にはヨコハケが施されているが範囲は狭い。体部内面にはコグが付着している。1909は体部下半から脚台部にかけての破片である。体部内面には一部にケズリが認められる。

1910～1923は高坏である。

1910～1918は有稜高坏の坏部である。1910は口縁部付近で明瞭に内湾する。口縁端部には内傾する面が認められる。内外面ともヨコミガキで調整されている。器形や調整に有稜高坏としては違和感があり、鉢などの可能性も残る。1911は小型のものである。内外面とも粗いハケを施した後にタテミガキで調整しているが、口縁部付近にはタテミガキが及んでいないなど、粗雑な印象を受ける。1912は全形が復元できた。坏部はそれほど深くない。口縁端部には内傾する面が認められる。坏部外面はハケを施した後にタテミガキによって調整されている。脚部は内湾するが、部分的に形状に歪みがある。脚部外面はハケを施した後にヨコミガキを施し、さらにその後にはタテミガキによって調整されている。1913はやや小型の坏部である。内外面ともタテミガキで調整されており、ごく一部にタテミガキ以前に施されたハケが遺存する。1914は口縁端部が丸く収められる。坏部の屈曲部は遺存していないが、外面の下部にはヨコミガキが認められ、緩やかに屈曲する有稜高坏の坏部と思われる。外面にはススが附着しており、二次的に被熱している。また、破片の一部はSH337から出土した可能性がある<sup>10)</sup>。1915は屈曲部付近の

破片で、内外面ともタテミガキが施されている。1916はやや小型のもので、風化により調整は不明瞭だが、外面にはヨコミガキとタテミガキが施されているようである。また、脚部との接合部が円板充填状に剥離しているが、円板充填ではなく、別作りの脚部上面の凹みを埋めるように粘土を充填したものと考えられる。1917にも同様の痕跡が認められる。1918は屈曲部が若干突出気味となる。内外面ともハケを施した後にヨコミガキで調整し、その後には疎らにタテミガキを施している。

1919～1923は脚部である。1919・1920は脚部外面上半に直線文が施されている。1921は透孔が小さい。1922は形状に歪みがあるが、ハ字状に開く脚部である。外面はタテミガキで調整され、頸部付近にはヨコミガキないし細いナデが1条めぐらされている。1923は外面にヨコミガキを施した後にタテミガキを施している。

1924は器台である。坏部が剥離した高坏の脚部の可能性もあるが、頸部の径が比較的大きいこと、脚部内面の調整が高坏とは多少異なることから、器台と考えた。受部は遺存しておらず、形状は不明であるが、遺存している部分から判断すると若干内湾するものと思われる。

1925は有孔鉢である。底部の破片で、内面には粗いハケが施されている。

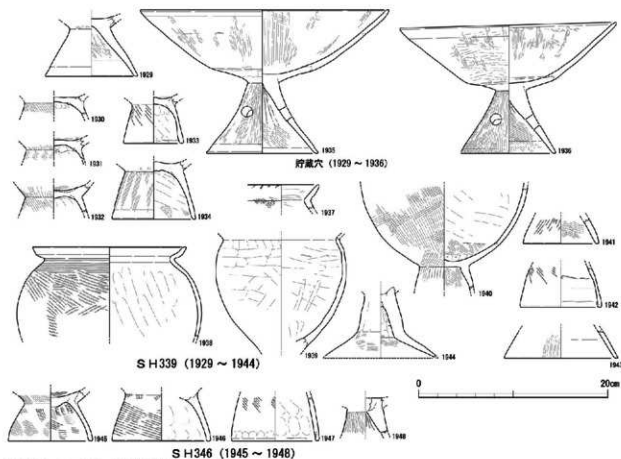
1926は手焙形土器の鉢部の破片と思われる。屈曲部の破片で、外面には突帯が貼り付けられている。突帯には刻目が施されている。

1927は石製品で、台石である。上面が凹んでおり、縄文時代のものの可能性もあるが、出土位置などからSH338に伴う古墳時代の遺物と考えられる。砂岩の大型の礫を使用しており、上面の凹んでいる部分はかなり摩滅している。部分的に使用痕と考えられる擦痕や敲打痕が認められる。

1928は石器である。打製石斧と思われる。流紋岩製で、全体的に剥離を加えて成形している。細身で、断面形は三角形を呈する。縄文時代のもので、混入したと考えられる。

**SH339 (第201圖1929～1944)** 1929～1936は貯蔵穴から出土した。いずれも土器である。

1929～1934は甕である。



第201図 S H 339・346出土遺物 (1/4)

1929は台付甕の脚台部である。頸部がかなり縮まり、ハ字状に大きく開く。

1930～1934はS字状口縁甕である。1930～1933はいずれも底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。1933は脚端部をわずかに内側に折り返す。1934は脚端部を折り返していない。やや器壁が厚く、脚頂部に粗い砂粒を含まない粘土を貼り付けている。形態はS字状口縁甕に近いが、脚部内面にハケを施している点や、胎土などにも典型的なS字状口縁甕とは異なる点がある。在地産のS字状口縁甕の可能性が高い。

1935・1936は有稜高坏である。両個体ともほぼ全形が復元できた。1935は大型のもので、坏部は浅く、口縁端部にはヨコナデが施されており、不明瞭ながら面をなす。坏部の屈曲は不明瞭である。脚部はわずかに外反しながらハ字状に開く。坏部の内外面にはススが付着し、脚部も二次的に被熱している。なお、破片の一部は貯蔵穴外の床面からも出土している。1936は1935よりも小型のものである。坏部は浅

く、口縁端部にはヨコナデが施されており、不明瞭ながら内傾する面をなす。坏部外面はハケを施した後にはヨコミガキを施し、その後にタテミガキで調整している。タテミガキは疎らでヨコミガキがよく遺存する。坏部内面はハケとタテミガキで調整されている。脚部は直線的にハ字状に開く。この個体も、破片の一部が貯蔵穴外の床面から出土している。

1937～1944は埋土中などから出土した。いずれも土師器である。

1937～1942は甕である。1937は口縁部の小片で、く字状口縁甕である。ただし、口縁端部に列点文が施されるなど、受口状口縁甕に近い特徴が認められる。1938は受口状口縁甕である。口縁部の屈曲は緩い。体部外面は粗いハケで調整されており、肩部にはヨコハケが施されている。外面にはススが付着している。1939は体部である。小型のもので、脚台が付くかどうかは不明である。内外面ともナデや工具ナデで調整されており、全体的に粗雑である。1940は台付甕で、体部中位から脚台部にかけての破片で

ある。外面はハケで調整されており、内面の底部付近にはケズリと思われる痕跡も認められる。1941は台付甕の脚台部である。1942はS字状口縁甕の脚台部である。脚端部は内側に折り返されている。また、内面には横方向に連続的な工具痕が残されている。

1943・1944は高坏である。1943は脚榫部の破片で、外面にはミガキが施されている。1944は屈折脚高坏の脚部である。脚頂部上面には坏部が剥離した痕跡が残る。脚柱部内面はケズリによって調整されている。SH339出土の他の遺物よりも時期的に下る可能性がある。

**SH346 (第201図1945~1948)** 1945~1948は土師器である。

1945~1947は甕である。1945・1946は台付甕の脚台部である。1945は器壁が薄く、若干内湾する。内外面ともハケで調整されている。1946もわずかに内湾する。外面には粗いハケが施されている。脚端部はやや面をなす。1947はS字状口縁甕の脚台部である。脚端部の折り返しは明瞭ではない。また、脚榫部の外面には連続的なユビオサエが認められる。

1948は高坏である。脚頂部上面の大きな凹みに坏部側から粘土を充填している様子が看取される。透孔がごくわずかに遺存しているが、形状や数は不明である。

**SH347 (第202図1949~1995)** 1949は主柱穴P1から出土した。土師器器台である。ほぼ全形が復元できた。受部は内湾し、口縁端部にはヨコナデが施され、わずかに上方にはね上げられる。脚部は八字状に直線的に開き、下半部はごくわずかに内湾する。脚部外面上半に直線文が施されている。透孔は3方向に開けられている。受部と脚部との接合部では、断面で粘土接合痕が観察できるが、それを基に推測すると、おそらく最初に受部から脚部への貫通孔がない高坏状のものを製作し、その後、受部から脚部に向けて棒状の工具によって穿孔した可能性が高いと思われる。

1950~1995は埋土中などから出土した。

1950~1994は土師器である。

1950~1958は甕である。

1950~1953は中・大型の壺の口縁部である。いずれも広口壺である。1950は口縁部が直線的に開く。

口縁部内面には線刻状の縦方向の直線が3本施されている。1951は口縁部が大きく外方へ開く。1952は体部上半まで遺存する。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は丸く収められる。頸部外面には低い突帯が貼り付けられている。1953は口縁部の小片である。口縁端部は上下にわずかに拡張され、擬凹線文と矢羽根状文が施されている。口縁部内面にも矢羽根状文や列点文が施されている。

1954~1958は中・大型の壺の体部や底部の破片である。1954は底部から体部にかけての破片で、内外面ともに粘土接合痕が顕著に残り、やや粗雑である。1955は輪台状の底部で、体部は直立気味に立ち上がるため、鉢の底部の可能性もある。1956は突出する底部で、かなり厚い。1958は輪台状の底部で、内面にはハケが施されている。

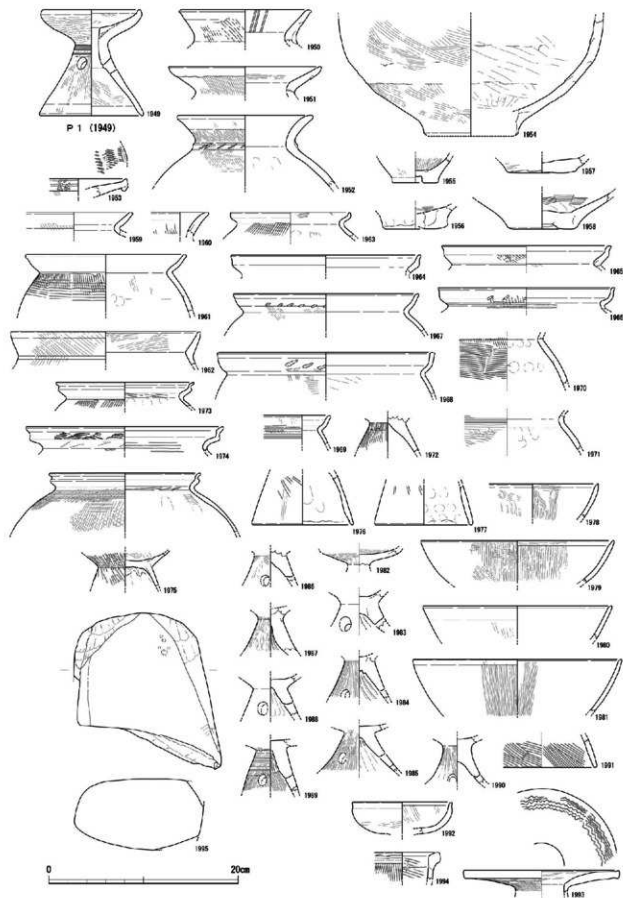
1959~1977は甕である。

1959~1962はく字状口縁甕である。1960は口縁部が外反し、口縁端部は丸く収められる。1961は体部上半が遺存する。口縁部はわずかに屈曲しており、肩部外面にヨコハゲが施されていることなどから、受口状口縁甕とも考えられる。1962は口縁部が直立気味に立ち上がり、わずかに内湾する。

1963~1969は受口状口縁甕である。1963はやや小型のもので、口縁端部に強いヨコナデが施されて上方へはね上げられ、受口状口縁となっている。体部外面は粗いハケで調整されている。1964・1965は口縁端部に強いヨコナデが施されて面をなす。1965の頸部外面には沈線状のものが認められるが、工具のアタリの可能性もある。1966は口縁部が強く内湾する。口縁端部にはヨコナデが施され、わずかに外方に引き出されている。屈曲部外面には列点文が施されている。また、頸部外面にはヨコハゲが認められる。1967は口縁部の屈曲が緩いが、屈曲部外面には列点文が施されている。1968も屈曲部外面にハケ状工具による列点文が施されている。1969は肩部外面にヨコハゲが施されている。

1970・1971は肩部の小片である。1970は外面にヨコハゲが施されているが、整然としたものではない。1971も外面にヨコハゲが施されている。

1972は台付甕の脚台部である。外面には爪痕状の連続する工具痕が認められる。



第202図 SH347出土遺物 (1/4)

1973～1977はS字状口縁である。1973は口縁部に強いヨコナデを施して面を作り出すとともに、強く外方へ引き出している。口縁部外面に押し引点文は施されていない。また、体部外面の遺存している範囲にはヨコハケが認められず、頸部からやや下がった位置に施されていた可能性が高い。1974は口縁部片で、口縁部上半はほぼ直立し、口縁部には強いヨコナデによる面が認められる。口縁部外面には押し引点文が施されているが、3本一単位のもの二段に施されている可能性がある。1975は口縁部から体部上半にかけての破片と、脚台部付近の破片からなる。接合しないが、同一個体と考えられる。口縁部の屈曲は明瞭で、口縁部上半は強く外反し、口縁部端面は不明瞭である。体部はやや肩が張る形状を呈すると思われる。頸部内面には粗いハケが施されている。底部内面及び脚頂部には粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられている。1976・1977は脚台部で、いずれも脚端部を内側にわずかに折り返している。

1978～1991は高坏である。

1978～1982は坏部である。1978は口縁部に内傾する面をもつ。1979は椀形高坏の可能性ある。口縁部に内傾する面をもつ。1981はやや深い坏部である。有稜高坏の坏部と思われる。1982は小型の有稜高坏と思われる。坏部の屈曲部がわずかに遺存している。内外面ともミガキによって調整されている。

1983～1991は脚部である。1983は透孔がかなり頸部に近い箇所を開けられている。1985は八字状に大きく外方へ開く。1987は脚頂部上面が大きく凹み、その部分で剥離した痕跡が認められる。また、脚部上端側面から坏部を成形しているものと思われる。1989は脚部外面上半に直線文が施されている。内面にはハケが施されている。1990は外反しながら開く。1991は脚部破片の破片と思われるが、内外面とも粗いハケで調整されており、高坏ではない可能性もある。

1992・1993は器台と思われる。1992は小型の椀形の受部で、内外面ともミガキで調整されている。二次的に被熱している。小型の椀形高坏の可能性もある。1993はほぼ水平に開く受部の上面に波状文を施している。口縁部は面をなす。外面はハケで調整されており、壺の口縁部の可能性もある。

1994は鉢の口縁部と思われるが、小片のため不明である。口縁部は厚く、短く外方へ屈曲する。内外面とも粗いハケで調整されている。手焙形土器の可能性も考えられる。

1995は石製品で、台石である。砂岩の礫を利用したもので、上面は長軸に沿って湾曲し、摩擦により平滑である。わずかに敲打痕や擦痕と思われるものも認められる。また、側面や裏面の一部にも摩擦が認められ、磨面として使用されていた可能性がある。半分程度を欠損しており、周縁部にも大きな剥離欠損が認められるが、一部に被熱した痕跡が認められ、熱が加わったことによって破損した可能性がある。

**S H349 (第203圖1996～2034)** 1996・1997は貯蔵穴から出土した。いずれも土師器である。

1996は広口壺の口縁部である。口縁部はわずかに上下に拡張し、矢羽根状文を施し、棒状浮文を貼り付けている。棒状浮文は2本一組と思われる。口縁部内面には櫛状工具による矢羽根状文と列点文が施されているが、粗雑で雑然としている。1997は有稜高坏の坏部である。やや深い坏部で、口縁部には強いヨコナデによって内傾する面が作り出されている。

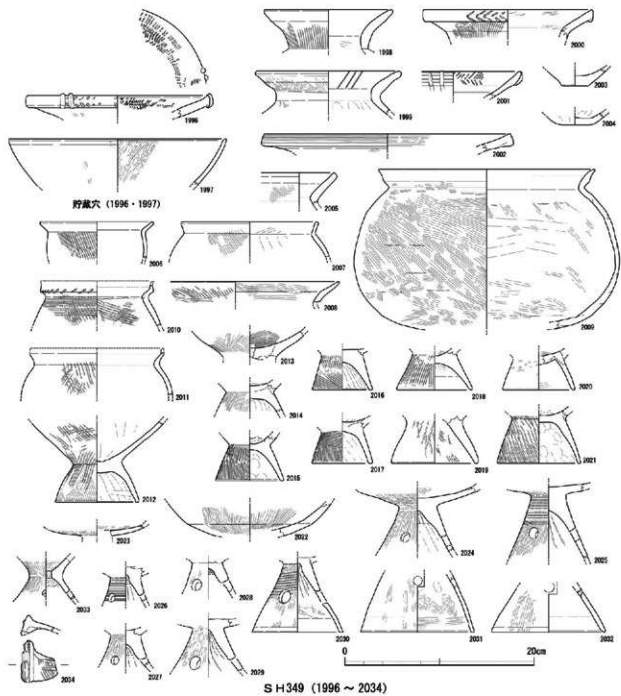
1998～2034は埋土中などから出土した。いずれも土師器である。

1998～2004は壺である。

1998～2002は中・大型の壺の口縁部である。いずれも広口壺である。1998は外反し、口縁部は丸く収められる。外面は粗いハケで調整されている。1999は直線の外方へ開く。口縁部内面には縦位の短い直線状の線刻が3本施されている。2000は中位で外方へ屈曲しながら開く。口縁部はわずかに下方に拡張し、矢羽根状文が施されている。2001は口縁部外面に擬凹線文を施す。棒状浮文も貼り付けており、棒状浮文の両側面を工具によって整形した痕跡が棒状浮文の下方に残されている。口縁部内面には矢羽根状文が施されている。2002は口縁部の小片で、口縁部に擬凹線文が施されている。

2003・2004は小・中型の壺ないし鉢の底部である。2003は一次調査で出土した。平底の底部である。2004も平底で、内外面にニビオサエが認められる。

2005～2021は甕である。



第203図 S H 349・350出土遺物 (1/4)

2005～2009はく字状口縁甕である。2005は口縁部の小片で、口縁端部は面をなす。2006は小型のもので、鉢に近い。外面はハケで調整されている。2007は明瞭に屈曲する頸部から短い口縁部が直立気味に立ち上がる。2008は口縁部の小片で、口縁端部は丸く取られる。内外面ともハケで調整されている。頸部外面にはやや太い沈線と思われるものが認められる。頸部調整に関わる痕跡の可能性が考えられる。2009は底部以外ほぼ復元できた。頸部は強く屈曲し、口縁部は短く外反する。体部は扁平な球形を呈するが、体部下半は歪みが大きい。外面はハケで調整されるが、内面には一部にミガキも施されている。こうした内面調整や器形などを鑑みると、甕というよりも大型の鉢とする方が妥当かもしれない。

2010・2011は受口状口縁甕である。2010は口縁端部を欠損するが、口縁部の屈曲は明瞭である。屈曲部外面は明瞭な稜をなし、列点文が施されている。肩部外面にはヨコハケが施されている。外面にはスガが付着している。2011も口縁端部を欠損する。体部外面は粗いハケで調整されている。

2012～2021は台付甕の脚台部等である。2012は体部下半から脚台部にかけての破片である。底部はかなり厚い。2013は底部の破片である。円板充填状に底部を閉塞した痕跡が認められる。2014は脚台部上端の側面から体部を成形している。また、底部内面にも粘土を貼り付けている。2015は外面に粗いハケを施している。2016・2017は小型のもので、直立気味に立ち上がる。2018・2019はハ字状に開き、脚端部は丸く取られる。2020は器壁がやや薄い。脚台部上端の側面から体部を成形している。2021も脚台部上端の側面から体部を成形しているものと思われる。

2022～2032は高坏である。

2022・2023は有稜高坏の坏部の破片である。2022は器壁が厚い。内外面ともタテミガキによって調整されている。2023は器壁が薄く、脚部が剥離した痕跡が残る。

2024～2032は脚部である。2024は坏部も一部遺存しており、有稜高坏と思われる。坏部の屈曲部で剥離した痕跡が残る。外面は基本的にタテミガキで調整されているが、頸部付近に一部ヨコミガキが施さ

れている。2025・2026は脚部外面上半に直線文が施されている。2028は脚部内面頂部に工具痕が残る。2029は若干外反しながらハ字状に開く。外面はタテミガキによって調整されているが、頸部付近にヨコミガキがわずかに認められる。また、二次的に被熱している。2030は緩やかに内湾し、脚端部は面をなす。脚部外面上半に直線文が施されている。2031もやや内湾する。2032はハ字状に開く。

2033は器台である。受部はY字状に開き、内外面ともミガキによって調整されている。脚部内面には小さな単位のケズリが施されている。受部から脚部にかけて貫通孔が認められるが、孔の内面にはシボリ痕と思われるものが認められる。

2034は手焙形土器の覆部の小片である。口縁端部は拡張され、細い突帯が貼り付けられている。上端には刻目が施されている。外面は粗いハケで調整されている。

**SH350 (第203図2035～2037)** 2035～2037は土師器である。いずれも甕である。

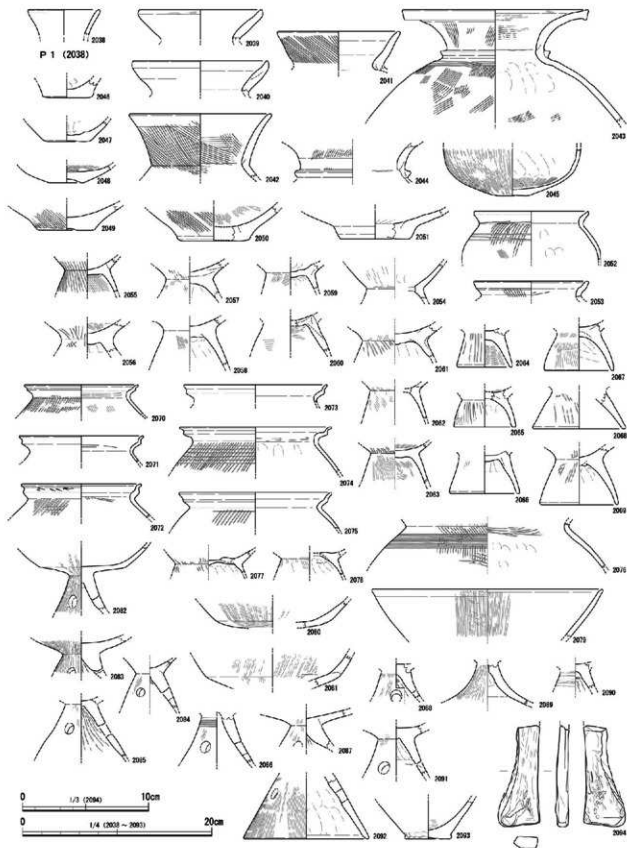
2035は受口状口縁甕である。口縁部の屈曲は緩い。口縁部外面には列点文が施されている。口縁部内面には連続的なコピオサエが認められる。体部はあまり肩が張らない形状を呈する。肩部外面にはヨコハケが施されているが、やや粗雑である。

2036・2037はS字状口縁甕である。2036は口縁部上半が矮小で、口縁部の断面形が明瞭なS字状を呈さない。ただし、風化が著しく、本来の形状ではない可能性もある。肩部外面にはヨコハケが施されており、頸部内面にも粗いハケが施されている。外面にはスガが付着している。2037は口縁部の屈曲が明瞭である。口縁端部には強いヨコナデが施されているが、あまり明瞭な面は作り出されておらず、全体的に外反するように外方へ引き出されている。頸部外面には口縁部下半に強いヨコナデを施した際に生じたと思われる粘土のハマダシが認められる。頸部内面には粗いハケが施されている。また、外面にはスガが付着している。

**SH353 (第204図2038～2094)** 2038は主柱穴P1から出土した。土師器の小型の壺と思われる。口縁部の小片で、口縁端部は丸く取られる。

2039～2094は埋土中などから出土した。





第204図 SH353出土遺物 (1/4、1/3)

2039～2093は土師器である。

2039～2051は壺である。

2039～2044は中・大型の壺の口縁部や頸部等の破片である。2039・2040は広口壺の口縁部で、直線的に外方へ開き、口縁端部は不明瞭な面をなす。2041・2042は広口壺と思われるが、口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収められる。外面は粗いハケで調整されている。2043は大型の広口壺の口縁部である。口縁部は外反しながら外方へ大きく開き、口縁端部はわずかに下方に拡張され面をなす。頸部外面には突帯が貼り付けられている。肩部外面には粗雑な直線文が施されている。外面は粗いハケで調整されておりやや粗雑であるが、口縁部内面にはミガキが施されている。2044は広口壺の頸部片で、頸部外面に突帯が貼り付けられている。

2045～2051は壺の底部である。2045は体部下半まで遺存している。底部外面はわずかに凹む。瓢形壺の可能性が考えられる。2046は体部が直立気味に立ち上がり、鉢の底部の可能性もある。2048は底部外面が皿状に凹む。瓢形壺と思われる。2049・2050は外面が粗いハケによって調整されている。2051は底部がボタン状に突出する。

2052～2078は甕である。

2052はく字状口縁甕である。口縁部から体部上半にかけてが遺存する。頸部の屈曲は比較的緩く、口縁部は短く外方へ開き、口縁端部は面をなす。体部外面は粗いハケで調整されており、一部に粗雑なヨコハケが施されている。また、頸部外面には沈線状のものが認められる。

2053は受口状口縁甕である。口縁部の屈曲は緩い。頸部内面には粗いハケが一部遺存している。

2054～2069は台付甕の脚台部である。2054は体部下半が遺存する。外面の調整は不明瞭であるが、ナデによって調整されているものと思われる。2055は若干内湾する。内外面ともハケで調整されている。2056は器壁が厚い。2057も器壁が厚い。底部内面に厚く粘土を貼り付けている状況が、断面の粘土接合痕から窺われる。2058は脚頂部に粘土を貼り付けているものと思われる。2060は断面で脚部成形時の粘土接合痕が観察できる。体部は脚台部上端の側面から成形している。2061は底部内面及び脚頂部に粗い

砂粒を含まない粘土を貼り付けている。2063は内外面ともハケで調整しており、底部内面には断続的なクモの巣状のハケが施されている。2064・2065はやや小型のものである。2066は直線的に八字状に開く。内面は工具ナデによって調整されている。2067は底部内面及び脚頂部に粘土を貼り付けた痕跡が認められるが、かなり厚く貼り付けられており、S字状口縁甕にみられるようなものではなく、脚部や体部の成形に伴うものと思われる。2068は八字状に大きく開くが、小片のため形状の復元に不安を残す。2069は、底部内面側から円板充填状に底部を閉塞しており、脚頂部にはその粘土が臍状にはみ出している。ただし、脚部と体部が一体的に成形されているかは不明である。

2070～2078はS字状口縁甕である。

2070～2076は口縁部等の破片である。2070は口縁部から肩部にかけての破片で、頸部の屈曲は緩い。肩部外面の遺存している範囲にはヨコハケは認められず、頸部から少し下がった位置に施されていると思われる。2071は風化のため外面調整は不明瞭である。2074と同一個体の可能性が高い。2072は口縁端部に強いヨコナデによる面が作り出されている。口縁部外面には押し引列点文が施されている。2074は口縁部上半が大きく外反し、口縁端部は強く外方へ引き出されている。ただし、口縁端部のヨコナデによる面は不明瞭である。頸部内面には粗いハケが部分的に残る。2075は口縁部上半が緩やかに外反するが、風化のため本来の形状を留めているか不明である。肩部外面にはヨコハケが施されていると思われるが、これも風化により不明瞭である。2076は肩部の破片で、肩部外面にはヨコハケが施されている。また、頸部内面にも粗いハケが施されている。こうした調整からみるとS字状口縁甕として製作されたものと思われるが、器壁がやや厚く、胎土も典型的なS字状口縁甕としては多少違和感がある。在地産のS字状口縁甕か、S字状口縁甕に似た受口状口縁甕の可能性が考えられる

2077・2078は脚台部である。2077は底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられている。一方、2078は脚頂部にのみ粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられている。

2079～2092は高坏である。

2079～2082は有稜高坏の坏部片である。2079は口縁部片で、口縁端部には不明瞭ながら内傾する面を有する。体部外面はハケを施した後にヨコミガキを施し、その後細いたテミガキで調整している。外面には薄くススが付着している。2080は屈曲部の破片である。外面はケズリを施した後にミガキによって調整されている。2081は器壁が厚い。2082は脚部上半まで遺存している。坏部の屈曲は比較的明瞭である。

2083～2092は脚部である。2083は坏部・脚部ともに器壁が厚い。2084は坏部の立ち上がりがやや急であり、碗形高坏ないし器台の可能性も考えられる。2085は内面にシボリ痕が明瞭に残る。2086は外面の頸部直下に直線文が施されている。2087は脚部上端側面から坏部を成形しているものと思われる。2089は大きく外反しながら開く。透孔は開けられていない可能性が高い。また、脚部内面頂部には孔が認められる。坏部まで貫通していたかは不明であるが、軸芯痕とも考えられる。2090は脚部上端側面から坏部を成形しているものと思われる。外面にはハケの後に幅広のヨコミガキが施されている。2091は全体的に風化が著しいが、外面にはミガキが一部遺存している。2092はハ字状に直線的に開く。透孔がごくわずかに遺存している。外面はハケで調整されており、ミガキは認められない。

2093は鉢と思われる。体部外面の底部付近には連続的なユビオサエが施されている。内面にはミガキが認められる。

2094は石製品で、砥石である。頁岩製で、一部欠損している。扁平な板石状で、上下面及び両側面の4面が平滑となっており、砥面と考えられる。片面には先の尖ったものによる敲打痕が顕著に認められるが、砥石としての使用痕と思われる線状痕より先行するものである。

**SH354 (第205図2095～2106)** 2095～2098は貯蔵穴から出土した。

2095～2097は土師器である。

2095は小型の壺である。全形が復元できた。頸部は強く屈曲し、口縁部は外方に直線的に大きく開く。口縁端部は丸く収められる。底部は平底で、比較的

大きい。体部外面は粗いハケを施した後に、粗雑なミガキによって調整している。体部下半には製作時の乾燥単位を示すと思われる粘土接合痕が明瞭に残る。2096・2097は有稜高坏である。2096は小型のもので、口縁端部は丸く納められている。内面は風化のため調整が不明瞭であるが、外面はタテミガキによって調整されている。脚部との接合部には円板充填状の剝離痕が認められるが、円板充填によって脚部上面を閉塞したのではなく、脚部上面の凹みを埋めるように粘土を充填したものと思われる。2097は坏部から脚部上半にかけて遺存する。坏部はやや器壁が厚く、外面はハケを施した後に粗いヨコミガキによって調整している。内面はタテミガキによって調整されている。また、脚部上端側面から坏部を成形しているものと思われる。

2098は石製品で、砥石である。目の細かい砂岩製で、ほぼ完形である。砥面は5面あり、断面形が五角形を呈する。鋭い筋状の線状痕など、使用に伴う痕跡が多数残されている。

2099～2106は埋土中などから出土した。

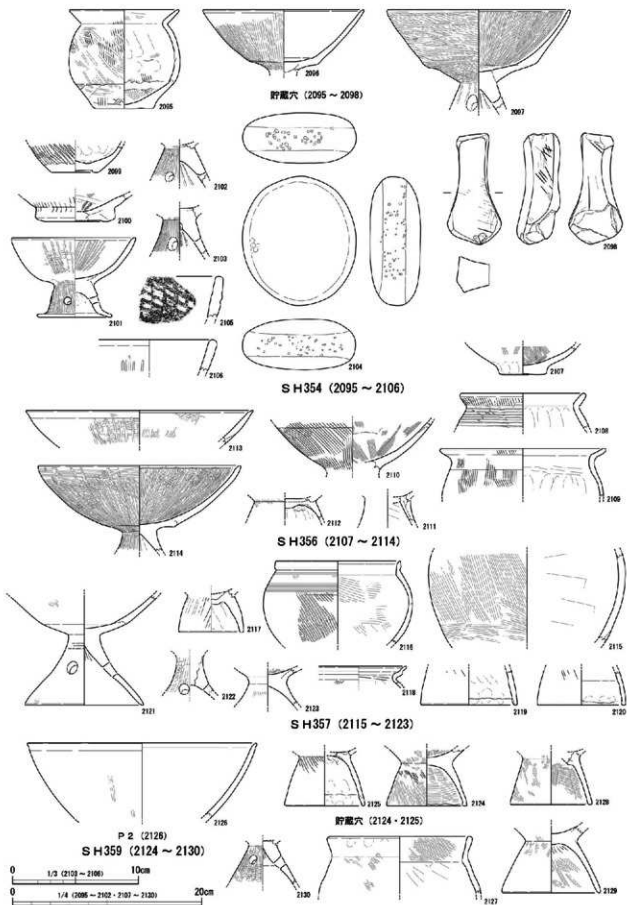
2099～2103は土師器である。

2099・2100は壺ないし鉢の底部である。2099は細い輪台状の底部で、体部の立ち上がりは比較的急である。体部外面は粗いハケで調整されている。鉢の可能性もある。2100は底部がボタン状に突出する。外面には粗いハケが認められる。

2101～2103は高坏である。2101は全形が復元できた。小型の碗形高坏である。坏部外面はヨコミガキを施した後に粗いたテミガキによって調整している。脚部は低く、脚裾部付近で強く外方に屈曲している。透孔は小さく、5方向に開けられている。2102・2103は脚部である。2102は外面の頸部付近にユビオサエの痕跡が認められる。2103は脚部内面頂部が孔状に凹むが、内面にはシボリ痕が残ることから軸芯痕とは異なる。

2104は石製品で、磨石である。安山岩の円礫を利用したもので、側縁が不明瞭な面をなし、細かな敲打痕が多数認められる。縄文時代の石器の可能性もある。

2105・2106は縄文土器深鉢の口縁部片である。2105は連続刺突による沈線が認められる。近接する



第205図 SH354・356・357・359出土遺物 (1/4、1/3)

S H355出土の338と同一個体の可能性があり、混入したと考えられる。2106は口縁端部を丸く収める。外面には条線と思われるものが認められる。

**S H356 (第205図2107~2114)** 2107~2114は土師器である。

2107は壺の底部片である。内外面ともハケで調整されている。

2108~2112は甕である。2108・2109はく字状口縁甕である。2108は頸部が明瞭に屈曲し、口縁部は短く外反する。口縁端部は丸く収められる。頸部外面には断続的なヨコナデが施されている。また、肩部外面にはやや粗雑なヨコハゲが施されている。2109は頸部の屈曲がやや緩い。2110は体部下半の破片である。おそらく台付甕と考えられる。2111は台付甕の脚台部である。2112はS字状口縁甕の脚台部である。脚頂部には粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられているが、底部内面には粗い砂粒を含まない粘土が貼り付けられている。なお、脚頂部に貼り付けられた粘土は、中央部を除く屈曲部のみにドーナツ状に貼り付けられている。

2113・2114は有稜高坏である。2113は口縁部片で、坏部は浅いと思われる。口縁端部には強いヨコナデによる面が作り出されている。外面はハケを施した後ヨコミガキを施し、その後タテミガキを確らに施している。外面にはススが附着している。2114は脚部上半までが遺存する。坏部は浅く、全体的に内湾し、口縁端部には内傾する面が認められる。内外面ともハケを施した後タテミガキで調整されているが、外面のタテミガキはやや粗く、ハケが顕著に残されている。

**S H357 (第205図2115~2123)** 2115~2123は土師器である。

2115は壺である。体部の破片で、外面はハケで調整される。器壁は厚い。

2116~2120は甕である。2116はく字状口縁甕と思われる。小型で体部がやや扁平な器形を呈するため、鉢の可能性もある。口縁部に明瞭な屈曲は認められないが、頸部には強いヨコナデが施され、口縁部外面は受口状に近い形状となっている。肩部外面にはヨコハゲが施されており、こうした点からみても受口状口縁甕を意識して製作されたとも考えられる。

2117は台付甕の脚台部である。低い脚台部で、上面には大きく凹む剥離面が認められる。2118~2120はS字状口縁甕である。2118は頸部内面に粗いハゲが施されている。2119・2120は脚台部の破片で、脚端部は内側に折り返されている。

2121~2123は高坏である。2121は有稜高坏で、脚部は若干内湾する。全体的に風化が著しいが、脚部外面上半には直線文がわずかに遺存している。2122は中実に近い脚部である。2123は坏部内面にミガキが施されている。頸部の径がやや大きく、脚部も八字状に大きく開くことから、台付壺の可能性も考えられる。

**S H359 (第205図2124~2130)** 2124・2125は貯蔵穴から出土した。いずれも土師器である。

2124は台付甕の脚台部である。脚端部は明瞭な面をなす。内外面ともハケで調整されている。2125はS字状口縁甕の脚台部である。脚部内面には粘土接合痕が認められるが、脚端部の折り返しの痕跡ではなく、成形時のものと思われる。脚端部の折り返しは明瞭ではない。底部内面及び脚頂部には粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられている。

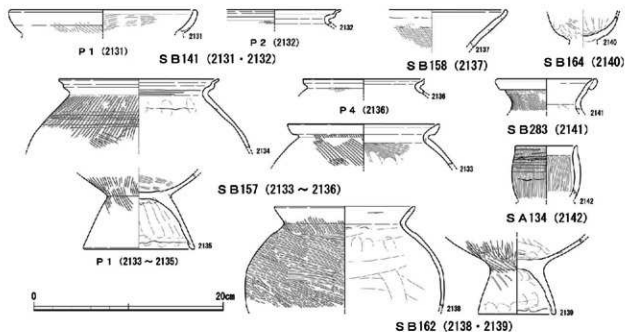
2126は主柱穴P2から出土した。土師器の有稜高坏の坏部片である。坏部は深く、口縁端部には明瞭な内傾する面が認められる。

2127~2130は埋土中などから出土した。いずれも土師器である。

2127はく字状口縁甕である。口縁部は直立気味に立ち上がり、口縁端部は不明瞭な面をなす。口縁部外面にはユビオサエが顕著に残り、粗雑な印象を受ける。2128・2129は台付甕の脚台部である。2128は内外面をハケで調整している。脚端部は面をなす。2129は八字状に大きく開く。脚頂部には爪痕状の工具痕が認められる。2130は高坏の脚部である。外面にはヨコミガキを施した後タテミガキが施されている。

## (2) 掘立柱建物・柱列出土遺物

**S B141 (第206図2131・2132)** 2131はP1から出土した。土師器で、口縁部の小片である。明瞭な屈曲部は認められないが、かなり内湾しており、受口状口縁甕と思われる。



第206図 SB 141・157・158・162・164・283、SA 134出土遺物 (1/4)

2132はP 2から出土した。土師器甕で、S字状口縁甕の口縁部の小片である。口縁端部には強いヨコナデによる面が作り出されるとともに、外方へ強く引き出されている。

**SB 157 (第206図2133～2136)** 2133～2135はP 1から出土した。いずれも土師器甕である。

2133は受口状口縁甕と思われる。口縁部外面には明瞭な屈曲部が認められるが、内面の屈曲は不明瞭である。体部外面は粗いハケで調整されている。

2134・2135はS字状口縁甕である。同一個体の可能性があるが、確定できなかった。2134は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁端部には強いヨコナデによる面が作り出されるとともに、外方へ強く引き出されている。肩部外面には、頸部から少し下がった位置にヨコハケが施されている。頸部内面にも粗いハケが施されている。2135は脚台部内面には直線的に開く。底部内面及び脚台部内面にはやや粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられている。脚台部は大きく内側へ折り返されている。

2136はP 4から出土した<sup>10)</sup>。土師器のく字状口縁甕ないし受口状口縁甕と思われる。口縁端部には強いヨコナデが施されており、わずかに上方につまみ上げられている。

**SB 158 (第206図2137)** 2137はSB 158の柱穴と

考えられるG-D8Pit5から出土した。土師器甕の口縁部片と思われるが、口縁端部の形状などから高坏の脚部片の可能性もある。外面にはハケが施されており、成形時の粘土接合痕が明瞭に残る。

**SB 162 (第206図2138・2139)** 2138・2139はP 1から出土した。いずれも土師器甕である。同一個体の可能性があるが、確定できなかった。2138は口縁部から体部上半にかけての破片で、明瞭に屈曲する頸部から口縁部が直線的に開く。口縁端部は丸く収められる。体部は球形を呈するものと思われる。体部外面には粗いハケが施されている。内面は工具ナデで調整されている。2139は体部下半から脚台部にかけての破片である。体部外面には2138同様に粗いハケで調整されている。脚台部はS字状口縁甕のように内側に折り返されている。脚台部外面には連続するユビオサエが残り、脚台部の折り返しに伴うものと考えられる。

**SB 164 (第206図2140)** 2140はP 9から出土した。土師器の小型台付甕と思われる。かなり小型でミニチュアに近く、体部外面にはユビオサエが顕著に残るなど全体的に粗雑である。底部外面には脚台部が剥離した痕跡が認められる。脚付の鉢や壺の可能性も考えられる。

**SB 283 (第206図2141)** 2141はP 1から出土した。

土師器壺の口縁部である。中型の広口壺で、口縁部は外側に折り返しているか、あるいは粘土を貼り付けて肥厚させている。外面はハケで調整されている。頸部の屈曲は緩い。

**SA134 (第206図2142)** 2142はP2から出土した。土師器壺である。瓢形壺の口縁部片で、直立気味に立ち上がり内湾する。口縁部には内傾する面が認められる。内外面とも細いタテミガキによって調整されており、外面にはやや粗雑な直線文と二枚貝の貝殻腹縁による逆位の連弧文が施されている。

### (3) 土坑出土遺物

**SK146 (第207図2143~2145)** 2143~2145は土師器である。いずれも高坏である。2143は口縁部の小片で、口縁部は丸く収められるが、ヨコナデによる沈線状の凹みが認められる。2144は脚部で、わずかに内湾する。2145も脚部である。低い脚部と思われる、やはりわずかに内湾する。脚部は丸く収められる。

**SK151 (第207図2146~2154)** 2146~2153は土師器である。

2146・2147は壺である。2146は小型壺の口縁部で、小型丸底壺の可能性が高い。器壁は薄く、やや内湾し、口縁部は丸く収められる。図化できなかったが、同一個体の体部片と思われる破片もあり、外面がハケで調整され、ススが付着している。2147は大型の広口壺の口縁部片で、口縁部は外側に折り返して肥厚させ、面を作り出している。外面はハケで調整されている。

2148~2151は甕である。2148は受口状口縁甕である。口縁部の屈曲は緩く、特に外面にはほとんど屈曲部が認められない。口縁部には強いヨコナデによる面が認められる。口縁部内面には連続するユビオサエが残る。2149は体部片である。器壁は厚く、壺の可能性もある。外面にはタタキと思われる痕跡が認められる。タタキとしてはやや細く粗いハケとも思われるが、数本が一単位をなし、細かいハケがその上から施されている点などから、タタキの可能性があると判断した。2150は台付甕の脚台部である。2151はS字状口縁甕の口縁部片である。口縁部上半はやや矮小で、口縁部には明瞭な面は認められず、

全体的に短く外反する。

2152・2153は高坏である。いずれも脚部である。2152は脚部外面上半に直線文が施されている。2153は八字状に開く脚部で、わずかに内湾する。脚部は丸く収められる。

2154は石製品で、台石と思われる。砂岩製で扁平な板石状を呈する。欠損していると思われるが、側面の破断面はかなり風化し、またススが付着しているため、最終的な使用時の形状を留めている可能性もある。上面は摩滅によってかなり平滑になっている。ただし、明瞭な擦痕や敲打痕は認められない。

**SK165 (第207図2155~2161)** 2155~2160は土師器である。

2155~2159は甕である。2155はく字状口縁甕である。口縁部はわずかに内湾しており、受口状口縁甕に近い。2156~2159は受口状口縁甕である。2156は口縁部に強いヨコナデによる面が作り出されている。口縁部外面には列点文が施されている。2157も口縁部外面に列点文がわずかに遺存している。2158は口縁部の屈曲が緩い。頸部内面にはハケが認められる。2159は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は強く屈曲し、外面には明瞭な稜が認められる。この稜の部分にハケ状工具による幅広い列点文が密に施されている。体部には内外面ともハケで調整されている。外面にはススが付着している。

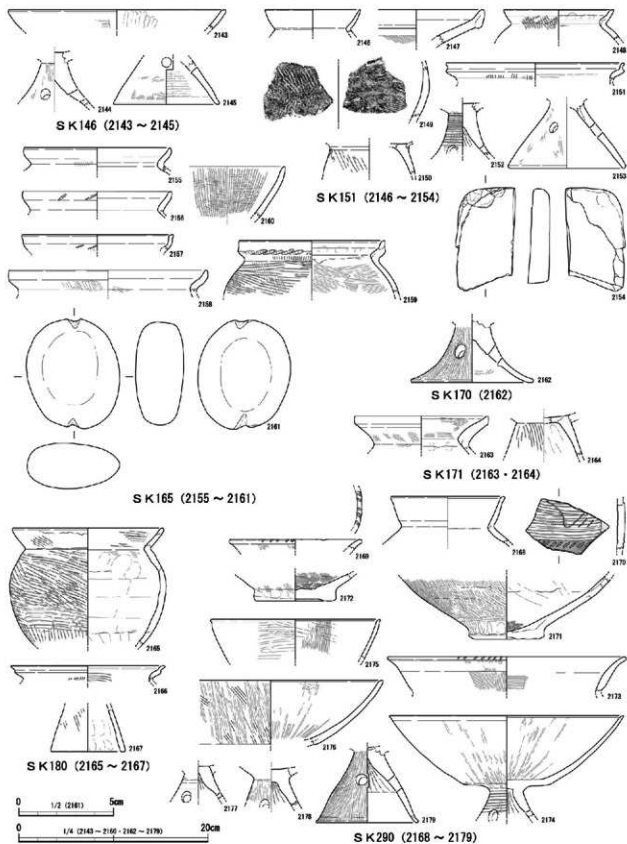
2160は高坏である。有稜高坏の口縁部片と思われる。口縁部は丸く収められる。内外面とも、ヨコミガキを施した後細いタテミガキによって調整している。

2161は石器で、切目石錘である。砂岩製で、やや厚みのある扁平な円錐の両端を研削によって施溝している。

**SK170 (第207図2162)** 2162は土師器高坏の脚部である。外反しながら八字状に開く。外面はミガキによって調整されている。

**SK171 (第207図2163・2164)** 2163・2164は土師器である。2163は広口壺で、明瞭に屈曲する頸部から直線的に口縁部が開く。口縁部は面をなす。内外面ともハケで調整されている。2164は台付甕の脚台部である。外面には粗いハケが施されている。

**SK180 (第207図2165~2167)** 2165~2167は土師



第207圖 SK 146・151・165・170・171・180・290出土遺物 (1/4, 1/2)



器である。いずれも甕である。2165はく字状口縁甕で、口縁部から体部下半にかけてが遺存する。口縁部はわずかに内湾し、口縁端部は丸く収められる。体部は球形に近く、外面は粗いハケで調整される。口縁部内面にも一部に粗いハケが認められる。外面にはススが付着している。2166はS字状口縁甕の口縁部片である。口縁端部には強いヨコナデが施され、強く外方へ引き出されているが、それほど明瞭な面を作り出していない。頸部外面にはタテハケとともにわずかにヨコハケが遺存している。頸部内面には粗いハケが施されている。2167はS字状口縁甕の脚台部と思われる。ただし、色調などからみて、2165の脚部の可能性も残る。直線的にハ字状に開き、器壁はやや厚い。脚端部は内側へ折り返されている可能性もあるが、明確には確認できない。

**S K 290 (第207図2168～2179)** 2168～2179は土師器である。

2168～2172は壺である。2168は明瞭に屈曲する頸部から口縁部が上方へ直線的に立ち上がり、直口壺に近い。口縁端部には不明瞭ながら内傾する面が認められる。内外面ともヨコナデで調整されている。2169は口縁部の小片である。口縁端部に刻目が施されている。2170は体部の小片である。外面に直線文と列点文が施されており、直線文より下位には赤彩が施されている。また、直線文と重なるように曲線や短い直線が細い沈線で描かれている。何らかの線刻の一部の可能性もある。2171・2172は大型の壺の底部である。いずれも底部がボタン状に若干突出する。2171は外面を丁寧にミガキで調整している。

2173は甕である。大型のく字状口縁甕と思われる。口縁部は外反しながらやや長くのびる。口縁端部には刻目が施されている。内外面ともハケで調整されている。

2174～2179は高坏である。

2174～2176は坏部である。2174は有稜高坏で、口縁部から脚部上半までが遺存する。坏部は比較的浅い。口縁端部には強いヨコナデによって内傾する面が作り出されている。脚部外面上半には直線文が施されている。2175は有稜高坏と思われる。深さのある坏部と思われるが、小片のため不確実である。外面はハケを施した後に幅広のヨコミガキで調整され

ている。内面はハケを施した後に細いタテミガキによって調整している。2176は有稜高坏である。浅い坏部で、内外面ともハケを施した後にタテミガキが施されている。やや器壁が厚い。

2177～2179は脚部である。2177は全体的に風化が著しいが、脚部外面上半に直線文がわずかに遺存している。2179は緩やかに内湾する脚部である。ただし、脚端部付近でわずかに外反し、脚端部は丸く収められる。脚部外面には粘土接合痕が残る。脚頂部上面には浅い皿状の剝離痕が認められる。

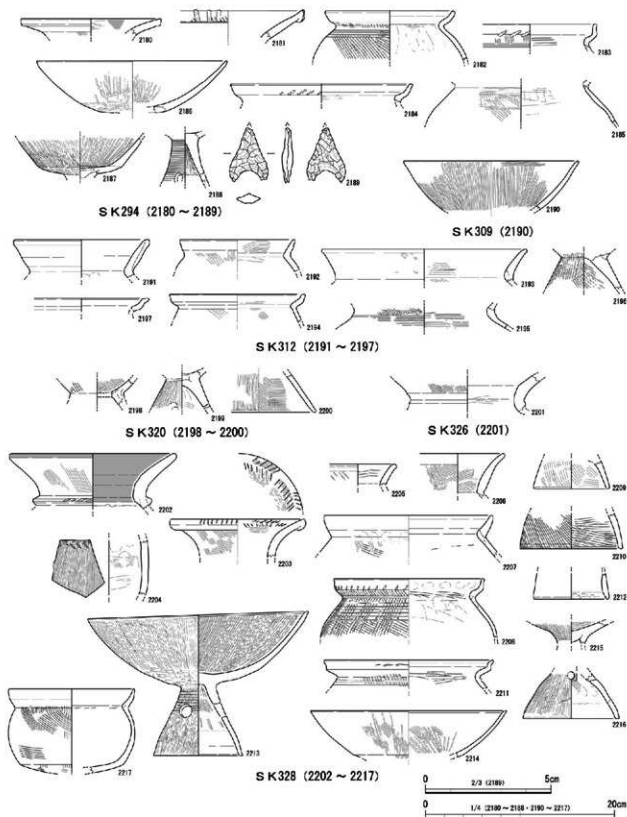
**S K 294 (第208図2180～2189)** 2180～2188は土師器である。

2180・2181は壺である。2180は中型の広口壺の口縁部と思われる。口縁端部は面をなす。口縁部内面には一部に赤彩が遺存している。2181は広口壺の口縁部の小片である。口縁端部は外側に折り返して肥厚させて面を作り出し、列点文を施すとともに棒状浮文を貼り付けている。

2182～2185は甕である。2182～2184は受口状口縁甕である。2182は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部の屈曲は緩い。肩部外面にはヨコハケが施されている。外面にはススが付着している。2183は口縁部の小片で、明瞭に屈曲する。屈曲部外面には列点文が施されている。また、頸部外面にはヨコハケが認められる。2184は口縁部外面に櫛状工具による列点文が施されている。2185はS字状口縁甕の肩部片と思われる。外面にはヨコハケが認められる。

2186～2188は高坏である。2186は有稜高坏の坏部である。屈曲は明瞭ではないが、屈曲部にあたる部位で粘土接合痕が確認できる。外面にはヨコミガキを施した後にタテミガキを施している。2187も有稜高坏の坏部である。屈曲部は明瞭である。脚部との接合部には円板充填状の剝離痕が認められるが、脚部と坏部とが一体的に成形された可能性は低く、脚頂部上面の凹みを埋めるように粘土を充填した痕跡と思われる。2188は脚部で、外面上半に直線文が施されている。

2189は石器で、石鏃である。赤色のチャート製で、先端部をわずかに欠損する。縄文時代のもので、混入したと考えられる。



第208図 SK 294・309・312・320・326・328出土遺物 (1/4、2/3)

**SK309 (第208図2190)** 2190は土師器高坏の坏部である。全体的に内湾するが、口縁部付近でわずかに外反する。内外面とも細いタデミガキによって調整されているが、口縁部内面のみヨコミガキが施されている。外面には全体的にススが付着している。

**SK312 (第208図2191~2197)** 2191~2197は土師器である。

2191は壺である。明瞭に屈曲する頸部から口縁部が直線的に外方に開く。口縁端部は丸く収められるが、外面にはヨコナデが施され、わずかに面をなす。内外面ともヨコナデによって調整されている。外面にはススが付着している。

2192~2197は甕である。2192・2193はく字状口縁甕である。2192は小型のもので、頸部外面に強いヨコナデが施されている。体部外面及び口縁部外面はハケで調整されている。2193は大型のもので、口縁部が若干外反する。口縁端部は丸く収められる。2194は受口状口縁甕である。口縁部の屈曲は明瞭である。2195は頸部片である。外面にはヨコハケが施されている。頸部内面にも粗いハケが施されている。2196は台付甕の脚台部である。内外面とも粗いハケで調整されている。2197はS字状口縁甕の口縁部の小片である。口縁端部にヨコナデによって凹む明瞭な面をもつ。

**SK320 (第208図2198~2200)** 2198~2200は土師器である。2198は台付甕の体部下半から脚台部にかけての破片である。体部内面はハケで調整されている。2199・2200は高坏の脚部である。2199は筒状の脚部を製作した後に、脚頂部内面から粘土を充填して閉塞し、さらにそれによってできた脚頂部上面の大きな孔状の凹みに粘土を充填し、さらにその上から粘土を薄く貼り付けている様子が、断面の粘土接合痕から窺われる。2200は脚裾部の小片である。外面にはハケを施した後にミガキを施している。

**SK326 (第208図2201)** 2201は土師器広口壺の頸部片である。大型のものと思われ、器壁は厚い。外面にはハケで調整されている。頸部外面には低い突帯を貼り付けていると思われる。

**SK328 (第208図2202~2217)** 2202~2217は土師器である。

2202~2204は壺である。2202は広口壺の口縁部で

ある。緩やかに屈曲する頸部から、口縁部が外反しながら大きく開く。口縁端部は丸く収められる。頸部外面には突帯が貼り付けられており、突帯には刻目が施されている。口縁部内面には全体的に赤彩が施されている。2203は中型の広口壺の口縁部である。外反しながら開き、口縁端部は外側に折り返して肥厚させている。口縁端部にはハケ状工具による列点文が施されており、口縁部内面にもハケ状工具と思われるもので矢羽根状文が施されている。内外面ともハケで調整されている。胎土には堆積岩系の岩石に由来すると思われる黒色や茶色の砂粒が特徴的に含まれていたり、石英の砂粒も角が取れて丸くなっているなどの特徴があり、口縁部の形態なども鑑みると他地域からの搬入品と考えられる。東海地方東部との関係が想定されよう。2204は体部片である。矢羽根状文がわずかに遺存している。

2205~2212は甕である。

2205~2207はく字状口縁甕である。2205は直線的に口縁部が開き、口縁端部は面をなす。内外面とも粗いハケで調整されている。2206は外反しながら長くのびる口縁部である。内外面ともハケで調整されている。2207は明瞭に屈曲する頸部から口縁部が短くのびる。口縁部はやや内湾し、口縁端部は丸く収められる。頸部外面にはユビオサエが認められる。

2208は受口状口縁甕である。口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部は明瞭に屈曲する。口縁部外面には列点文が施されており、内面には連続するユビオサエが認められる。体部外面は粗いハケで調整されているが、羽状にタデハケを施した後に肩部にヨコハケを施しており、また、頸部外面には沈線状のものが認められる。頸部内面にも粗いハケが施されるなど、口縁部を除けばS字状口縁甕に近い。S字状口縁甕を模倣した可能性も考えられる。

2209・2210は台付甕の脚台部である。2209はやや小型のもので、内外面ともハケで調整されている。2210は脚端部が内傾する面をなす。内外面とも粗いハケで調整されている。

2211・2212はS字状口縁甕である。2211は口縁部片で、明瞭に屈曲し外面には明瞭な稜が認められる。口縁端部には強いヨコナデによる面が作り出されるとともに、若干外方へ引き出されている。口縁部外

面には押し引点文が施されている。頸部内面には粗いハケが施されている。2212は脚台部で、脚端部はわずかに内側に折り返されている。

2213～2216は高坏である。2213は有稜高坏で、全体が復元できた。坏部は浅く、屈曲は不明瞭である。ただし、外面は屈曲部より上位がタテミガキ、下位がヨコミガキと、調整が異なっている。脚部はわずかに内湾する。脚部外面上半に直線文が施されている。脚端部は面をなす。透孔は3方向に開けられている。2214は有稜高坏の坏部である。浅い坏部で、口縁端部には内傾する面が認められる。内外面ともハケを施した後には粗いタテミガキを施している。2215は坏部の底部付近の破片である。円板充填によって脚頂部を閉塞した痕跡が認められる。ただし、脚部と坏部とが一体的に成形されているかどうか不明である。2216は脚部である。低い脚部で、内湾する。透孔は小さい。器台の可能性も考えられる。

2217は鉢である。口縁部はかなりの部分が遺存しているが、覆部が剥離したような痕跡は確認できず、手焙形土器ではない。口縁部は受口状を呈するが、屈曲は緩い。体部は扁平で、下位で強く屈曲し、外面には比較的明瞭な稜が認められる。外面は粗いハケで調整されている。外面にはススが付着しており、底部付近には二次的な被熱も認められる。

**S K334 (第209・210図2218～2268)** 2218～2268は土師器である。

2218～2226は壺である。

2218～2220は中型の壺の口縁部等である。2218・2219は短頸の瓢形壺である。2218は体部下半までが遺存する。頸部が強く締まるため口縁部下半は強く内湾するが、上半は内湾が弱く直立気味に立ち上がる。口縁部内面には内傾する面が認められるが、その面を越えてヨコミガキが施されているため、面の範囲は不明瞭となっている。外面の口縁部から体部上半にかけてはハケを施した後にはタテミガキによって丁寧に調整されているが、頸部外面には細いヨコミガキが施されている。また、肩部外面にも1条のヨコミガキが認められる。体部下半の外面はヨコミガキによって調整されている。2219は口縁部片で、全体的に内湾する。口縁部内面には明瞭な面が認められる。文様は認められない。2220は広口壺と思わ

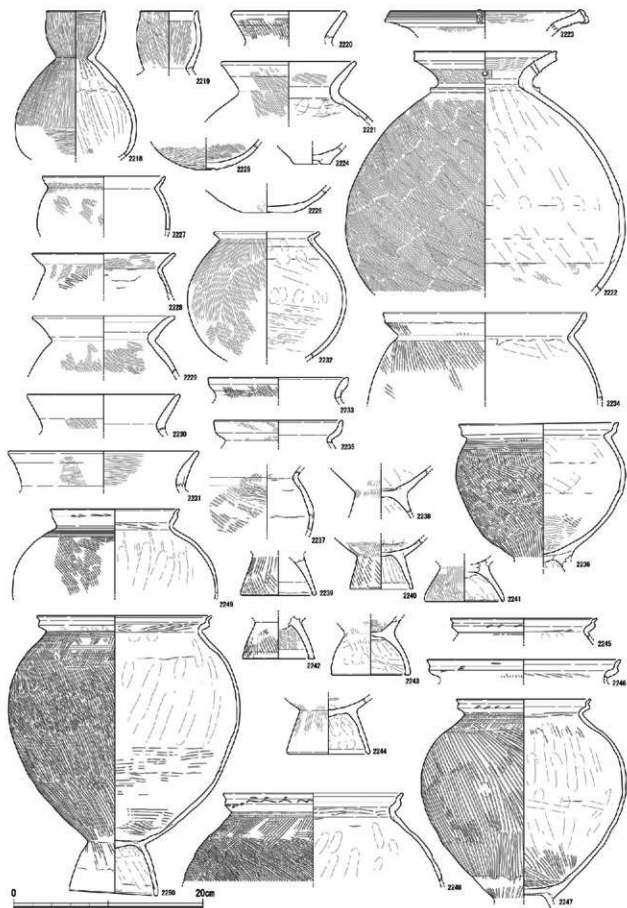
れる。口縁部は直線的に外方へ開き、口縁端部は面をなす。外面は粗いハケで調整されている。

2221～2223は大型の広口壺の口縁部等である。2221は緩やかに屈曲する頸部から直線的に口縁部が外方へ開く。口縁端部は丸く収められる。2222は口縁部から体部下半までが遺存する。口縁部は外反しながら短く外方に開く。口縁端部は面をなす。口縁部には焼成前に開けられた小孔が1箇所認められる。頸部外面には低い突帯が貼り付けられている。外面は全体的にハケで調整されており、文様等は認められない。2223は口縁部の小片である。おそらく口縁部の中位で外方に屈曲しているものと思われる。口縁端部は面をなし、縦回線文が施され、棒状浮文が貼り付けられている。棒状浮文にはハケ状工具と思われるもので刻目が施されている。

2224～2226は壺ないし鉢の底部である。2224は輪台状の底部である。鉢の可能性も考えられる。2225は球形の体部で、底部外面は浅く凹む。体部外面はヨコミガキによって丁寧に調整されている。瓢形壺と思われる。

2227～2250は甕である。

2227～2234はく字状口縁甕である。2227は明瞭に屈曲する頸部から口縁部が短く外方へ開く。口縁部の途中で粘土を接合しており、粘土接合痕が明瞭に残る。2228は外面にはススが付着している。2229は頸部が縮まり、口縁部はやや長くのびるなど、広口壺に近い形態である。器壁も厚い。体部は内外面ともハケで調整されている。2230・2231は口縁部の立ち上がりが比較的急で、口縁端部が丸く収められる。2232は強く屈曲する頸部からごく短く口縁部が開く。口縁部はわずかに内湾し、口縁端部は不明瞭な面をなす。体部は球形を呈し、外面はハケで調整されている。内面には工具ナデが施されている。2233は頸部の屈曲が緩く、口縁部は肥厚する。口縁部は外面上半に強いヨコナデが施されており、外面のみが受口状口縁に近い形態を呈する。外面は粗いハケで調整されており、受口状口縁甕に近いものと思われる。2234は口縁部から体部上半にかけての破片である。2233と同じく口縁部外面上半に強いヨコナデが施されて一部が受口状を呈するが、部位による形態差が大きく、口縁部内面には明瞭な屈曲が認められない



第209圖 SK334出土遺物①(1/4)

ため、く字状口縁甕とした。体部は肩が張らない器形を呈し、外面は粗いハケで調整されている。

2235・2236は受口状口縁甕である。2235は口縁部の屈曲が明瞭である。2236は脚台が付く。口縁部の屈曲はかなり明瞭で、屈曲部外面は明瞭な稜をなす。口縁端部にも面が認められる。体部はやや扁平で、肩が張らない。外面は粗いハケで調整されており、肩部外面にはヨコハケが施されている。脚台部はほぼ欠損するが、断面の粘土接合痕からみると、脚台部の上面に体部が接合されている可能性がある。

2237は体部片である。外面は粗いハケで調整されており、ススが付着している。

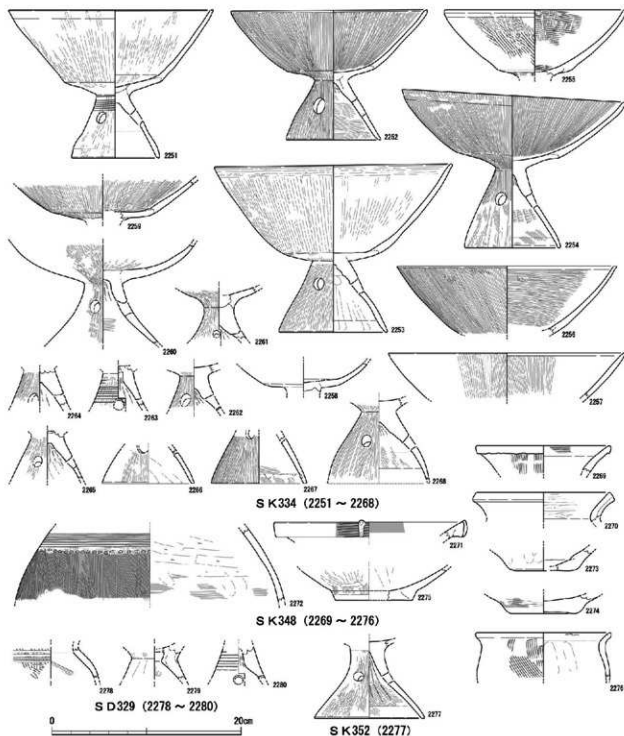
2238～2244は台付甕の脚台部である。2238は体部下半まで遺存している。2239は脚端部をわずかに内側に折り返している。2240は脚台部上端の側面から体部を成形している。2241は低い脚台部である。八字状に大きく開く。脚端部はわずかに内側に折り返されている。2242は器壁が厚く、脚端部は明瞭な面をなす。2243は内湾し、脚端部は面をなす。2244は直線的に八字状に開く。内面にはエビオサエが顕著に残る。脚端部は丸く収められる。

2245～2250はS字状口縁甕である。2245は口縁部片で、口縁端部にヨコナデによって凹む明瞭な面をもつ。口縁部外面には押し引点文が施されている。また、頸部外面には細い沈線が認められるが、ヨコハケのアタリの可能性もある。2246も口縁部片で、口縁端部には強いヨコナデによって内傾する面が作り出されているが、外方への引き出しはそれほど強くない。口縁部外面には押し引点文がわずかに遺存している。頸部内面には粗いハケが施されている。2247は脚台部以外ほぼ全形が復元できた。口縁端部には強いヨコナデによる面が作り出されているとともに、外方へ引き出されている。口縁部外面には押し引点文が施されている。体部は肩が張る無花果形を呈する。体部下半には成形時の乾燥単位を反映したと考えられる粘土接合痕が明瞭に残り、特に外面では明瞭な段をなす。底部内面には粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられているが、脚頂部については脚台部ごと剥離しており不明である。体部内面にはコゲが付着している。2248は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁部外面には押し引点文が施

されている。頸部内面には粗いハケが施されている。2249も口縁部から体部上半にかけての破片である。直立気味に立ち上がるため口縁部の屈曲は緩く、特に内面は不明瞭である。口縁部外面上半に強いヨコナデを施して、外面の屈曲を明瞭にしている。口縁部外面には押し引点文が施されているが、櫛状工具による複数一組のものではなく、棒状工具で施された可能性が高い。体部は球形に近い形状を呈すると思われ、外面にはタテハケとヨコハケが施されているが、タテハケはやや乱雑である。S字状口縁甕としては多少違和感がある個体である。2250は全形が復元できた。口縁端部には強いヨコナデによる面が作り出されるとともに、外方へ強く引き出されている。口縁部外面に押し引点文は認められない。体部は肩が張らない倒卵形を呈する。体部内面下半は粗いハケによって調整されている。脚台部は緩やかに内湾し、脚端部はわずかに内側に折り返されている。底部内面及び脚頂部には粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられているが、底部内面のものはかなり剥離している。剥離した部分には、脚台部との接合部の周囲に沿って連続するエビオサエがドーナツ状にめぐらされており、粗い砂粒を含む粘土はその凹みを埋めるように貼り付けられている。このエビオサエについては細く深いため、指ではなく何らかの工具が用いられている可能性も考えられる。

2251～2268は高坏である。

2251～2259は有稜高坏である。2251～2254は全形が復元できた。2251は坏部が深く、坏部の屈曲が明瞭である。脚部はわずかに内湾し、脚端部は内傾する面をなす。脚部外面上半に直線文が施されている。坏部は脚部上端側面から成形されているものと思われる。また、坏部内面の底部中央には脚頂部上面の凹みを埋めるように粘土が充填された痕跡が確認できる。2252はやや坏部が浅い。口縁端部には不明瞭ながら内傾する面が認められる。坏部は内外面ともタテミガキで丁寧に調整されている。脚部は低く、わずかに内湾する。2251と同様に、坏部内面の底部中央には脚頂部上面の凹みを埋めるように粘土が充填された痕跡が確認できる。なお、坏部には内外面にススが付着している。2253は大型のもので、坏部は深い。口縁端部は丸く収められる。坏部は基本的



第210図 SK334出土遺物②、SK348・352、SD329出土遺物 (1/4)

にタテミガキで調整されているが、口縁端部付近のみ、内外面ともヨコミガキが施されている。脚部は低く、ほぼ直線的に八字状に開く。脚端部は丸く取られる。坏部外面にはススが附着しており、また、脚部外面の一部が二次的に被熱している。2254は坏部が浅い。口縁端部は丸く取られる。脚部はや

や高く、わずかに内湾する。脚部外面はハケを施した後にタテミガキで調整されている。2255は坏部の破片である。口縁端部は丸く取られる。内外面とも粗いハケで調整されており、その後にタテミガキを練りに施している。全体的に粗雑な印象を受ける。2256は坏部片で、口縁端部は若干外傾する面をなす。

屈曲部は遺存していないが、屈曲部で剝離した痕跡が認められる。外面はハケを施した後にタテミガキによって調整されているが、内面はヨコミガキによって調整されている。2257は口縁部片である。おそらく浅い坏部になると思われる。口縁部には不明瞭ながら内傾する面が認められる。2258は下面に脚部が剝離した痕跡が認められる。2259は坏部の破片で、屈曲は明瞭である。屈曲部内面にユビオサエが残る。

2260は碗形高坏と思われる。大型のもので、坏部は内外面ともミガキで調整される。脚部は外反しながら大きく開く。坏部は脚部上端側面から成形されているものと思われる。

2261～2268は脚部である。2261は中実に近い。断面の粘土接合痕などから、脚部成形後にその上面に坏部を接合している可能性が考えられる。透孔はやや小さい。なお、破片の一部がS H338の床面付近から出土している。2263は脚部外面上半に直線文が施されている。2265は脚頂部上面に浅い皿状の剝離痕が認められる。外面はタテミガキで調整されている。2266はわずかに内湾する。2267は脚部内面に粘土接合痕が認められる。脚端部を内側に折り返している可能性もある。2268は明瞭に内湾する。脚端部は欠損しているが、器壁の厚さなどから欠損はわずかとみられ、それほど高くない脚部と考えられる。

**S K348 (第210図2269～2276)** 2269～2276は土師器である。

2269～2275は壺である。

2269～2271は広口壺の口縁部である。2269は中型のもので、口縁端部は面をなす。外面にはハケが施されている。2270は短く直線的に外方へ開く。口縁端部は面をなす。口縁部内面は幅広のヨコミガキによって調整されている。2271は口縁端部を外側に折り返して肥厚させて面を作り出し、擬凹線文を施すとともに棒状浮文を貼り付けている。内外面とも赤彩が施されている。

2272は大型の壺の体部である。直線文と列点文が施されており、列点文より下位には赤彩が施されている。外面はハケとミガキによって調整されており、内面にはケズリが認められる。

2273～2275は底部である。2273は内面に粘土接合

痕が段となって明瞭に残る。2274は外面に赤彩がわずかに遺存している。一次調査で出土したものである。2275は平底で、底部がボタン状にわずかに突出する。体部外面には幅広のヨコミガキが施されている。

2276は甕と思われる。小型のもので、鉢の可能性もある。く字状口縁甕で、頸部の屈曲は緩く、口縁部は短く外方へ開く。外面には粗いハケが施されている。

**S K352 (第210図2277)** 2277は土師器高坏の脚部である。下半部は緩やかに内湾する。外面はタテミガキで調整されている。内面にはシボリ痕が明瞭に残り、内面下半はハケによって調整されている。透孔は3方向に開けられている。

#### (4) 溝出土遺物

**S D329 (第210図2278～2280)** 2278～2280は土師器である。2278は甕の頸部片である。外面にはヨコハケが施されている。2279は台付甕の脚台部である。中空の脚部を成形後、脚台部上端側面から体部を成形していると思われる。底部内面側に円板状の粘土を貼り付けて底部を閉塞しているとみられるが、貼り付けられた粘土はかなり薄く、その下の空間にも粘土が充填されていたが剝離した可能性が考えられる。2280は高坏の脚部である。脚部外面上半に直線文が施されている。

#### (5) ピット出土遺物

**B-W23Pit2 (第211図2281)** 2281は土師器高坏で、有稜高坏の坏部片と思われる。口縁端部には内傾する面が認められる。内外面ともタテミガキで調整される。

**C-A25Pit5 (第211図2282)** 2282は土師器壺の頸部片である。中型の広口壺と思われる。外面にはハケが遺存する。

**C-B23Pit4 (第211図2283)** 2283は土師器広口壺の口縁部である。明瞭に屈曲する頸部から口縁部がやや外反しながら外方へ開く。頸部外面には太い沈線状の工具のアタリが認められる。

**C-B25Pit3 (第211図2284)** 2284は土師器甕で、受口状口縁甕の口縁部の小片である。頸部の屈曲は緩



い。外面にはススが付着する。

F-P9Pit1 (第211図2285) 2285は土師器高坏で、有稜高坏の口縁部片と思われる。口縁端部には内傾する面が認められる。

F-P14Pit1 (第211図2286) 2286は土師器高坏で、碗形高坏の口縁部片と思われる。縁やかに内湾し、口縁端部は丸く収められている。

F-U6Pit1 (第211図2287) 2287は土師器甕ないし壺である。直線的にのびる口縁部で、口縁端部は面をなす。内外面ともハケで調整されている。

F-U11Pit2 (第211図2288) 2288は石製品で、小型の砥石である。肌理の細かい砂岩製である。ほぼ完形で、直方体を呈し、側面の4面を砥面としている。砥面には使用に伴う擦痕が部分的に認められる。また、一部にはスス状の黒色物が付着している。古墳時代前期のものとしたが、時期を示すような土器を伴っておらず、古墳時代後期に下る可能性もある。

F-X3Pit1 (第211図2289) 2289は土師器高坏で、有稜高坏の坏部片である。外面には明瞭な稜が認められる。内外面ともミガキで調整されている。

F-X4Pit4 (第211図2290) 2290は土師器甕で、S字状口縁甕の頸部から体部下半にかけての破片である。体部は肩が張る無花果形を呈する。肩部外面には頸部から少し下がった位置にヨコハケが施されている。頸部内面はナデで調整されていると思われるが、遺存している部分が少なく、ハケが施されていた可能性も残る。なお、体部中位に小さな焼成後穿孔が1箇所認められる。

F-X4Pit6 (第211図2291) 2291は土師器甕である。口縁部の小片で、わずかに内湾し、口縁端部は丸く収められる。

F-Y1Pit1 (第211図2292) 2292は土師器壺である。全形が復元できた。ほぼ球形の体部にやや急に立ち上がり直線的にのびる口縁部が付く。口縁端部は丸く収められ、わずかに外反する。頸部の屈曲は明瞭である。口縁部の内外面及び体部外面上半はヨコナデによって調整され、体部外面下半はハケによって調整されている。底部は完全な丸底となっているが、外面をケズリによって調整している。体部内面は主にナデや工具ナデによって調整されているが、底部付近には製作時の乾燥単位を反映したと思われる粘

土接合痕が段となって明瞭に残る。また、外面にはススが付着しており、煮沸に用いられたものと考えられる。大きさや頸部の縮まり等から壺としたが、全体の形状や調整には布留式の甕と類似する点があり、ススが付着する点からも甕とする方が妥当かもしれない。

F-Y1Pit3 (第211図2293) 2293は土師器広口壺の口縁部片で、口縁端部は面をなす。内面には波状文が2段に施されている。

F-Y7Pit2 (第211図2294・2295) 2294は土師器台付甕の脚台部で、器壁は若干厚い。脚端部は丸く収められる。脚頂部には粘土を貼り付けている。2295は縄文土器深鉢の体部片である。外面には横位に隆帯が貼り付けられている。

G-A4Pit3 (第211図2296) 2296は土師器のS字状口縁甕である。口縁部の小片で、口縁端部には強いヨコナデによって内傾する面が作り出されるとともに、外方へ引き出されている。頸部内面には粗いハケが施されている。

G-A4Pit6 (第211図2297) 2297は土師器のS字状口縁甕である。脚台部の破片で、底部内面及び脚頂部に粗い砂粒を含む粘土が貼り付けられている。

G-B1Pit3 (第211図2298) 2298は土師器壺の底部である。外面にはハケが施されている。

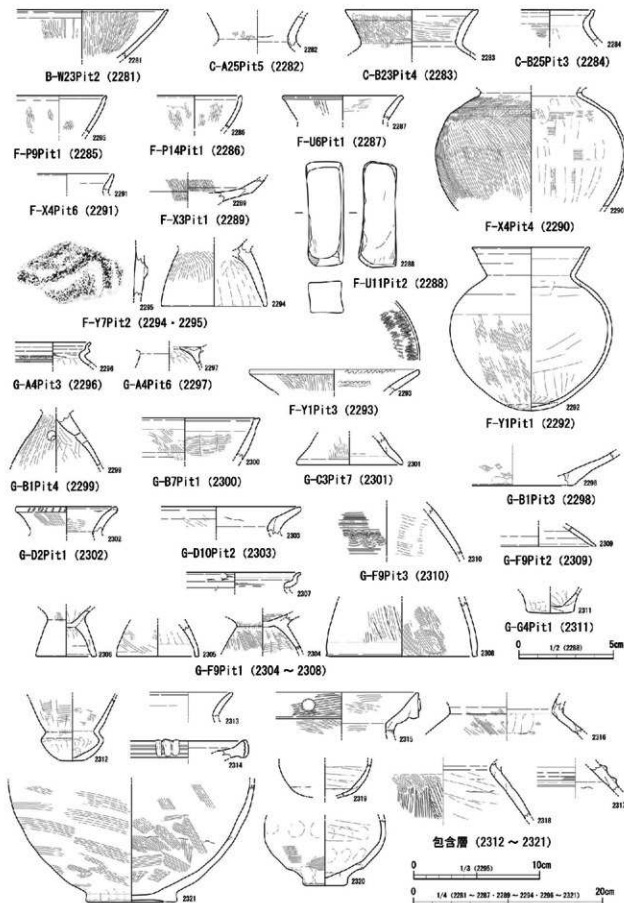
G-B1Pit4 (第211図2299) 2299は土師器高坏の脚部である。脚端部は欠損するが、全体的に内湾する。

G-B7Pit1 (第211図2300) 2300は土師器鉢の口縁部片と思われる。器壁は厚く、口縁端部は強いヨコナデによってわずかに凹む面をなす。内外面ともハケで調整されている。高坏の脚部ないし、古墳時代後期の甕の可能性も考えられる。

G-C3Pit7 (第211図2301) 2301は土師器高坏の脚部片と思われる。脚端部は丸く収められており、外面にはハケが施されている。

G-D2Pit1 (第211図2302) 2302は土師器壺で、小型の広口壺の口縁部である。口縁端部には列点文が施されている。

G-D10Pit2 (第211図2303) 2303は土師器甕ないし甕の口縁部片である。強く外方へ開くが、小片のため形状の復元には不安を残す。口縁端部は不明瞭な面をなす。



第211図 ビット出土遺物、包含層出土遺物① (1/4、1/3、1/2)

G-F9Pit1 (第211図2304~2308) 2304~2308は土師器である。

2304~2307は甕である。2304・2305は台付甕の脚台部で、2304は内外面ともハケで調整している。2305は脚端部が面をなす。2306は小型のもので、筒状の脚台部の上面を円板充填状に閉塞して底部を成形しているが、体部は脚台部の上端側面から成形されているようである。2307はS字状口縁甕の口縁部片で、口縁端部は強く外方へ引き出され、外面にはわずかに押し列点文が遺存している。

2308は高杯の脚部と思われる。器壁は若干厚く、脚端部は面をなす。内外面ともハケで調整し、脚端部外面には強いヨコナデが施されている。こうした特徴はG-B7Pit1出土の2300と比較的似ており、鉢の口縁部の可能性も考えられる。

G-F9Pit2 (第211図2309) 2309は土師器高杯の脚部と思われる。小片で、脚端部は丸く収められる。

G-F9Pit3 (第211図2310) 2310は土師器壺である。大型の壺の肩部片で、外面には直線文と波状文が施されている。

G-64Pit1 (第211図2311) 2311は土師器壺ないし鉢の底部である。平底の底部から体部が直立気味に立ち上がる。外面にはミガキが施されている可能性があるが、不明瞭である。

## (6) 包含層出土遺物

包含層 (第211・212図2312~2366) 2312~2365は土師器である。

2312~2327は壺である。

2312~2315は口縁部である。2312は小型丸底壺で、口縁端部を除いてほぼ全形が復元できた。体部は小さく肩が強く張る。底部は平底である。頸部は強くくびれ、口縁部はやや急に立ち上がり長くのびる。口縁部外面はヨコハケを施した後に縦方向に粗くナデを施している。体部は内外面ともユビオサエやナデによって調整されており、ミガキは認められない。2313は小片で、口縁端部は丸く収められる。甕の口縁部の可能性もある。2314は広口壺の口縁部の小片で、口縁端部は面をなし、擬凹線文を施し、棒状浮文を貼り付けている。内面に赤彩が施されている可能性もあるが、不確実である。2315も広口壺の口縁

部である。口縁部は頸部から直立気味に立ち上がり、中で外方へ強く屈曲する。口縁端部は外方へ折り返して面を作り、粗いハケを施した後に円形浮文を貼り付けている。口縁端部の面に施されたハケは他の部位のハケよりも粗く、擬凹線文として施された可能性もあるが、かなり乱雑である。

2316~2319は頸部から体部にかけての破片である。2316は頸部付近の破片で、外面にはハケが施されている。2317は肩部の破片で、外面には突帯が2条貼り付けられている。下段の突帯に接して直線文と思われるものがわずかに遺存している。また、赤彩も認められる。2318も肩部の破片である。器壁は厚く、外面はハケで調整されている。2319は小型の壺の体部である。体部下半には製作時の乾燥単位を示すと思われる粘土接合痕が明瞭に残る。内外面ともナデで調整されている。

2320~2327は底部等である。2320は小型の壺の底部から体部下半にかけての破片である。体部下半の製作時の乾燥単位と思われる箇所で器形に歪みが生じている。内外面ともユビオサエが各所に明瞭に残り、粗雑な印象を受ける。また、外面にはススが附着している。2321は大型の壺の底部から体部中位にかけての破片である。内外面ともハケで調整されている。2322・2323は鉢の可能性もある。2323は外面が工具ナデで調整されているが、一部にケズリと思われるものも認められる。2325は内面にハケが施されている。2326は底部外面が浅く皿状に凹む。体部外面にはわずかに赤彩が遺存している。また、外面にはススが附着している。2327は大型の壺の底部片と思われる。ただし、内面はミガキによって調整されており、大型の鉢の可能性も残る。

2328~2347は甕である。

2328~2331はく字状口縁甕である。2328は口縁部が若干内湾し、受口状口縁甕に近い。2329は口縁部が外反しながら直立気味に立ち上がる。口縁部外面上半にはハケ状のヨコナデが施されている。また、口縁端部には刻目が施されている。2330は口縁部から体部下半までが遺存する。緩やかに屈曲する頸部から口縁部が短く外方へ開く。口縁端部は不明瞭な面をなす。体部はやや扁平な球形を呈する。外面にはススが附着している。2331は口縁部の小片で、口

縁端部は面をなす。

2332・2333は受口状口縁甕である。2332は口縁部が明瞭に屈曲する。屈曲部の外面は若干突出する明瞭な稜をなす。口縁端部は内傾する面をなす。口縁部外面には列点文が施されている。肩部外面にはヨコハケが施されており、頸部内面には粗いハケが施されている。2333は口縁部内面の屈曲は緩いが、外面には明瞭な稜が認められる。口縁部外面にはハケ状工具による幅広の列点文が施されている。

2334・2335は頸部から体部にかけての破片である。2334は外面にタキが施されている。また、鋭い工具による線刻が認められる。4本の線が縦・横に刻まれているが、一部しか遺存しておらず、何を表現したかは不明である。調整や色調などからみて、搬入品の可能性が高い。2335は明瞭に屈曲する頸部から口縁部が外反しながら外方に開く。体部外面には粗いハケが施されている。

2336～2342は台付甕の脚台部等の破片である。2336は体部下半の破片で、脚台部が剥離した痕跡が認められる。内外面には成形時の乾燥単位を示すと思われる粘土接合痕が明瞭に残る。2337は小型のもので、体部外面にはケズリが施されている。脚端部は内側に折り返されている。2338は脚台部が直立気味となる。脚端部は面をなす。体部内面にはケズリが認められる。2339はハ字状に大きく開く。2340は内湾気味で、脚端部は不明瞭な面をなす。2341は外面が粗いハケで調整されており、内面には筋状の工具痕が認められる。

2343～2347はS字状口縁甕である。2343は口縁部から肩部にかけての小片で、口縁部外面には押引列点文が施されている。2344は口縁端部に強いヨコナデによって沈線状に凹む面が作り出されている。頸部内面にはハケが施されている可能性もあるが、遺存状況が悪く不明瞭である。2345は頸部の屈曲が緩い。2346も頸部の屈曲が緩い。口縁部の屈曲も外面では多少緩く、明瞭な稜を呈しない。頸部外面は沈線状に凹むが、口縁部外面下半を強くヨコナデした際のアタリと考えられる。体部の器壁はやや厚く、全体的にシャープさに欠ける。胎土は典型的なS字状口縁甕とは異なっており、在地産のS字状口縁甕の可能性もある。2347は大型のものである。口縁部

の屈曲は明瞭で、口縁部外面には押引列点文が施されている。肩部外面には頸部から少し下がった位置にヨコハケが施されている。口縁部や体部の器壁はやや厚い。胎土は典型的なS字状口縁甕とは異なっており、この個体についても在地産のS字状口縁甕の可能性もある。

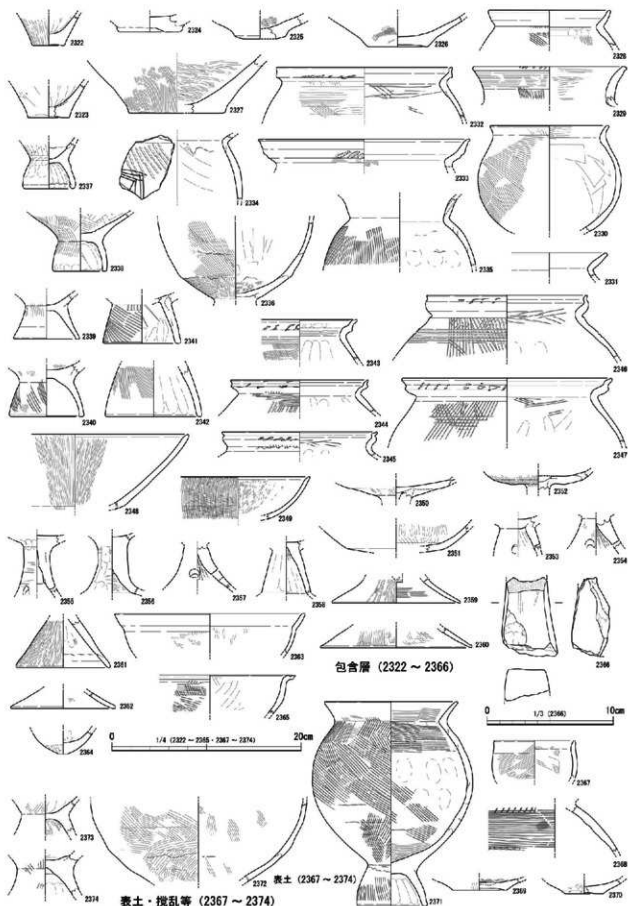
2348～2360は高坏である。

2348～2352は坏部の破片である。2348は有稜高坏の坏部片で、比較的深い坏部である。口縁端部には内傾する面が認められる。内外面ともハケを施した後にタテミガキによって調整されている。2349は碗形高坏の坏部片である。口縁端部には内傾する面が認められる。外面はヨコミガキを施した後に細かいタテミガキによって丁寧に調整している。2350は坏部と脚部の接合部付近の破片である。有稜高坏と思われる。断面で観察される粘土接合痕を基に考えると、中空の脚部の上面に坏部を接合し、接合部の側面に粘土を貼り付けて補強していると推測される。2351も有稜高坏の坏部片である。口縁端部には有稜高坏の坏部であるが、脚部上端側面から坏部を成形し、その後、脚頂部上面の凹みから周辺の坏部内面に付けて粘土を貼り付けて補強していると思われる。

2353～2360は脚部である。2353は脚部内面頂部に円板充填状の痕跡が認められるが、脚部と坏部とが一体的に成形されたとは考えにくい。2355はやや細身の脚部である。外面上半にはわずかにヨコミガキないし直線文の痕跡が認められる。2356は中実に近い。下位で外方に強く外反する。外面にはケズリが認められる。古墳時代後期まで下る可能性もあろう。2357は緩やかに外反しながらハ字状に大きく開く。2358はいわゆる屈折脚高坏である。内外面ともナデで調整されているが、脚部内面頂部付近にはシボリ痕が認められる。坏部は脚部上端側面から成形されている。2359・2360は大きく開く脚裾部の破片である。

2361・2362は器台と思われる。2361は小型のもので、直線的にハ字状に開く。透孔は認められない。2362も小型の器台と思われるが、脚裾部の小片で、小型の高坏の可能性も残る。

2363・2364は鉢である。2363は碗形の体部に短く外方へ屈曲する口縁部が付く。口縁端部は不明瞭な



第212図 包含層出土遺物②、表土・攪乱等出土遺物① (1/4、1/3)

面をなす。内面にはミガキが施されている可能性がある。2364は丸底に近いが、ごく小さい平底となっている。体部外面の底部付近にはケズリが施されている。

2365は手焙形土器の鉢部の破片と思われる。口縁部は受口状を呈する。外面は粗いハケで調整されており、頸部直下にはヨコハケも施されている。

2366は石製品で、砥石である。肌理の細かい流紋岩製で、半分以上を欠損する。元は直方体に近い形態を呈していたと思われ、側面の遺存する3面はすべて砥面として使用されている。一部に使用に伴う線状痕が認められる。

## (7) 表土・攪乱等出土遺物

**表土 (第212・213図2367～2391)** 2367～2391は土器である。

2367～2370は壺である。2367は短頸の瓠形壺の口縁部である。口縁端部には内傾する面が認められる。内外面ともハケで調整されている。調整からみると、鉢の可能性も残る。2368は大型の壺の肩部片である。外面には直線文と列点文が施されており、赤彩もごくわずかに遺存している。2369は底部である。底部外面は皿状に浅く凹む。2370も底部である。体部外面の底部付近には横方向のケズリが施されている。

2371～2381は甕である。

2371はく字状口縁台付甕である。全形が復元できた。頸部の屈曲は明瞭で、口縁部は直線的に外方へ開く。口縁端部は丸く収められる。体部は肩が張らず倒卵形を呈する。内外面とも粗いハケで調整されており、外面には粘土接合痕が顕著に残る。脚台部は若干内湾し、器壁は厚い。脚端部は面をなす。体部は脚台部上端側面から成形されていると思われる。外面には口縁部から肩部にかけて薄くススが附着し、脚台部には二次的な被熱が認められる。

2372は体部片である。器壁はやや厚く、体部は球形に近い形を呈すると思われる。内外面ともハケで調整され、外面にはススが附着している。

2373～2376は台付甕の脚台部である。2374は外反しながら開く。2375は脚台部上端側面から体部を成形している。脚台部内面にはススが附着している。2376はわずかに内湾し、脚端部は面をなす。脚頂部

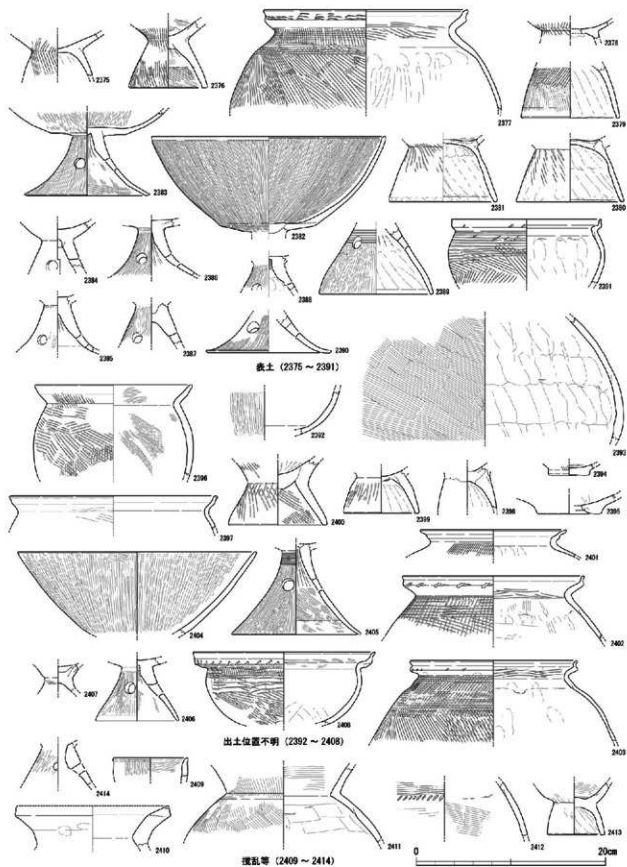
を埋めるように粘土を貼り付けている。

2377～2381はS字状口縁甕である。2377は口縁部から体部上半にかけての破片である。口縁端部には強いヨコナデによる回んだ面が認められる。ただし、あまり外方へは引き出されていない。口縁部外面には押引列点文が施されている。肩部外面にはヨコハケが施されており、頸部内面にも粗いハケが施される。体部内面には縦方向にナデが施されている。かなり細いナデで、工具などによるナデの可能性もある。2378～2381は脚台部片である。2378は底部内面及び脚頂部とも粘土の貼り付けは認められない。S字状口縁甕以外の台付甕の可能性も考えられる。2379は外面にハケが2段に施されている。脚端部は内側に折り返されておらず、不明瞭な面をなす。2380は底部内面のみ粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。脚端部はわずかに内側に折り返している。断面の粘土接合痕からみると、筒状の脚台部を成形後、脚頂部を閉塞し、脚台部上端側面から体部を成形した後に、底部内面に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けるという工程で製作されたと推測される。2381は底部内面に粗い砂粒を含む粘土を貼り付けているが、脚頂部については明瞭ではない。脚端部は内側に折り返していないが、脚裾部の内外面には連続するユビオサエが認められる。全体的に2380と類似するが、同一個体ではない。

2382～2390は高坏である。

2382・2383は有稜高坏である。2382は坏部で、かなり深い。口縁端部には内傾する面が認められる。全体的に内湾し、屈曲部の外面は明瞭な稜をなす。脚部との接合部には円板充填状の剥離が認められるが、脚部と坏部を一体的に成形したのではなく、脚部上端側面から坏部を成形後、脚頂部上面の凹みを埋めるように粘土を貼り付けた痕跡と考えられる。2383は坏部下半から脚部にかけてが遺存している。脚部は外反しながら開き、脚端部は面をなす。

2384～2390は脚部である。2384は坏部がわずかに遺存するが、かなり内湾している。2385・2386は外反しながら大きく開く。2387は脚頂部上面に深い凹みとなった剥離面が認められる。坏部成形後に粘土を充填して埋めていたものが剥離したと考えられる。2388は脚部上端側面から坏部を成形している。2390



第213図 表土・攪乱等出土遺物② (1/4)

は外反しながら大きく開く。透孔が3箇所遺存しているが、1箇所のみ高い位置に開けられており、2段に透孔が開けられていた可能性も考えられる。外面はタテミガキで調整されているが、脚裾部付近のみやや疎らに施されている。

2391は鉢である。手培形土器の鉢部の可能性もある。口縁部は受口状を呈し、口縁部の屈曲は明瞭である。口縁部外面には櫛状工具による列点文がわずかに遺存している。肩部外面にはヨコハケが施されている。また、外面にはススが附着している。

**出土位置不明 (第213図2392～2408)** 2392～2408は遺構内等から出土したものの、その後の取り扱いの中で出土遺構・位置が不明となった遺物である<sup>10)</sup>。いずれも土師器である。

2392～2395は甕である。2392は体部下半の破片で、外面にはタテミガキが施されている。2393は大型のもので、体部上半の破片である。外面はハケで調整されている。2395は輪台状の底部である。

2396～2403は甕である。

2396はく字状口縁甕である。口縁部から体部上半にかけてが遺存する。明瞭に屈曲する頸部から口縁部が外方へ開くが、口縁部外面上半には強いヨコナデが施されており、わずかに受口状に屈曲する。体部外面は粗いハケで調整されている。

2397は受口状口縁甕の口縁部片である。口縁部の屈曲は緩い。外面にはススが附着している。

2398～2400は台付甕の脚台部である。2398は筒状の脚台部を成形した後に、脚台部上端側面から体部を成形し、底部内面側から円板充填状に粘土を貼り付けて底部を閉塞している<sup>11)</sup>と推定される。2399はやや低い脚台部で、2398同様に底部を円板充填状に閉塞している。その際に充填された粘土が、脚頂部内面にわずかに鱗状に突出している。2400も円板充填状に底部を閉塞した痕跡が明瞭に残る。ただし、脚台部と体部が一体的に成形されているか不明である。

2401～2403はS字状口縁甕である。2401は口縁部に強いヨコナデによってわずかに凹む面が作り出されるとともに、かなり強く外方へ引き出されている。口縁部の屈曲部は内面では不明瞭であるが、外面では明瞭な稜をなす。肩部外面のヨコハケは、頸

部から少し下がった位置に施されていた可能性が高い。2402は口縁部に強いヨコナデによる内傾する面が認められるが、外方への引き出しは弱い。口縁部外面には押し列点文が施されている。肩部外面には頸部直下からヨコハケが施されているが、頸部外面にはそのヨコハケとは多少異なる沈線が1条めぐらされている。全体的に器壁はやや厚い。2403は口縁部から体部上半にかけてが遺存する。口縁部には強いヨコナデによって内傾する面が作り出されている。口縁部の屈曲は明瞭で、屈曲部の外面には列点文が施されている。押し列点文とも思われるが、工具を引きずった痕跡は明確ではない。口縁部外面にはススが附着している。

2404～2407は高坏である。2404は有稜高坏の坏部である。深い坏部で、口縁部には丸く収められる。胎土や色調、調整等からみて、表土掘削中に出土した高坏脚部2389の坏部の可能性がある。2405は脚部である。比較的高い脚部で、外反しながらハ字状に開く。脚頂部には丸く収められる。脚部外面上半には直線文が施されているが、施文範囲は狭い。2406は低い脚部で、わずかに内湾する。脚部内面頂部は孔状を呈するが、軸芯痕ではなく、脚部成形時に細く絞られたためと考えられる。2407は脚部片で、頸部外面に爪痕状の工具痕が認められる。脚頂部上面は皿状に凹む刺離面となっている。

2408は鉢である。手培形土器の鉢部の可能性もある。口縁部は受口状を呈し、口縁部にはヨコナデが施され、不明瞭な面をなす。口縁部外面には櫛状工具による列点文が施されている。体部はやや深い碗形を呈しており、外面上半には粗雑なヨコハケが施されている。内面の底部付近にはケズリが施されている。外面にはススが附着している。

**攪乱等 (第213図2409～2414)** 2409～2414は、風倒木痕や攪乱から出土した遺物である。いずれも土師器である。

2409～2412は甕である。2409は短頸の甕形の口縁部片と思われる。口縁部にはわずかに外反する。外面はタテミガキで調整されているが、内面にはヨコミガキが施されている。2410は広口甕の口縁部である。かなり器壁が厚く、内外面ともナデやユビオサエによって調整されており、粗雑な印象を受ける。



古墳時代後期まで下る可能性もあろう。2411は広口壺の頸部付近の破片である。明瞭に屈曲する頸部から、口縁部がわずかに外反しながら外方へ開く。外面はハケによって調整されている。体内内面はケズリによって調整されている。2412は大型の壺の肩部片である。外面には直線文と列点文が施されている。

2413は台付甕の脚台部である。体部も一部遺存しており、器壁が厚い。脚端部は面をなす。

2414は器台である。筒状の脚部の上端側面から受部を成形していたものと思われる。外面にはミガキが施されている。透孔は3方向に開けられていたと思われるが、確定的ではない。

## 注

- 1) 小牧南遺跡で出土した古墳時代前期の甕で、ある程度の形状が判明しているものはほぼ脚台が付くことや、小型の壺と鉢の底部は正確な判別が困難であることなどから、平底の底部は基本的に壺ないし鉢の底部として報告した。
- 2) 脚台部上面の、内容物を入れる部分(体部)の底にあたる部位を底部として、その内面を底部内面と呼称する。ただし、底部の外面にあたる部分については脚台部の内面とした方が直感的に分かりやすいと思われることから、脚台部と表現しておきたい。なお、一覧表・写真図版編第8表の備考欄においては、底部内面と脚台部の両面を指して

「底部上下」と表現している。

- 3) 一般的ではないが、記述の便宜上、S字状を呈する口縁部の、頸部からその上の屈曲部までを口縁部下半、屈曲部から口縁端部までを口縁部上半と表現する。
- 4) 脚部片には、高坏だけでなく器台も含まれる可能性があるが、どちらか判別できないものは高坏として報告した。
- 5) 第IX章第6節参照。
- 6) 20倍のルーペで観察を行った。
- 7) 本田光子1994「内面未付着土器」『庄内式土器研究』Ⅷ 庄内式土器研究会
- 8) この個体については出土後の取り扱いの中で一時出土遺構が不明になっており、整理段階でSH221から出土したと判断されたものである。したがって、別遺構からの出土品である可能性も残る。
- 9) この個体についても、注8のような出土遺構の混乱がある。
- 10) 遺物への注記等からみるとSH337から出土した破片があるようだが、誤記の可能性もあり、確定できない。
- 11) G-C8グリッドのP4から出土したとの記録があるが、P4はG-C8グリッドに存在しておらず、グリッドか柱次番号のどちらかが誤記と思われる。
- 12) 遺物が出土した際には出土遺構やグリッド等を記したラベルを添付したものの、その後、遺物に注記を行う前にラベルを添付しない状態で移動させたことにより、出土遺構・位置が特定できない状態にしてしまった。

## 第VI章 古墳時代後期の遺構・遺物

### 第1節 遺構

#### (1) 竪穴建物

**SH148 (第214図)** 第2次調査区の南東端で検出した建物で、東側は調査区外の道路下へと続くが、道路建設時に削平を被っている可能性が高い。平面形は長軸4.2m、短軸3.0m以上の方形を呈すると考えられる。調査区壁面の土層断面からみると、深さは0.5mほどあったと思われる。

今回調査を行った範囲では、明確な主柱穴は検出できなかった。建物内からはピット自体もほとんど検出されていない。

カマドは検出されなかったが、建物中央より西側の床面から焼土の広がりや2箇所検出されている。貯蔵穴も検出されていない。

壁際溝は断続的に検出されているが、検出された部分でも全体的に浅く不明瞭である。土層断面でもあまり明瞭に確認できない。

貼床は、建物全体に施されている(第14~18層)。壁に沿って浅い周溝状掘形が検出されており、その部分を埋め、さらに建物の床面全体にわたって貼床が施されている。ただし、周溝状掘形は北西壁沿いでは途切れている。

遺物は、須恵器や土師器が出土している。出土量は少ないが、土師器には遺存状況が良好な粗製の鉢が2点みられる。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代後期中葉~後葉と考えられる。

**SH203 (第215・216図)** 第2次調査区の北東部で検出した建物である。古墳時代前期の竪穴建物SH195と完全に重複しており、また全体に削平が著しいため、遺存状況はかなり悪い。カマドの痕跡と思われるものを検出したことや、須恵器製の破片がまとまって出土したことから、SH195と重複して古墳時代後期の竪穴建物が存在していると判断したが、ごく浅い落ち込みしか検出できなかったため、全体の形状は不明瞭である。当該建物の埋土と推定

される土層(A-A'・B-B'断面第3層)の分布を参考にすれば、平面形が一边7mほどの方形を呈する建物と推定される。

建物内からはピットが多数検出されているが、主柱穴は明確ではない。

カマドの痕跡は、北壁沿いで検出した。袖などカマドと明瞭に認識できるような遺構は遺存していなかったが、不明瞭な浅い落ち込みに焼土を含む土が堆積しており、そのすぐ北側で壁際溝とみられる痕跡をわずかに確認したため、これをカマドの痕跡と考えた。建物の想定範囲を考慮すると、カマドは、北壁沿いの中央よりやや東側に位置していたものと思われる。

壁際溝は、カマド痕跡付近で不明瞭なものが検出されたのみである。平面では形状を明瞭にできなかったが、カマドの土層断面で存在が確認できる(C-C'断面第6層)。検出できた範囲では、東西方向に延びていると推測された。

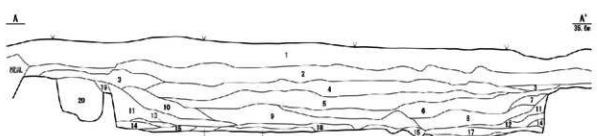
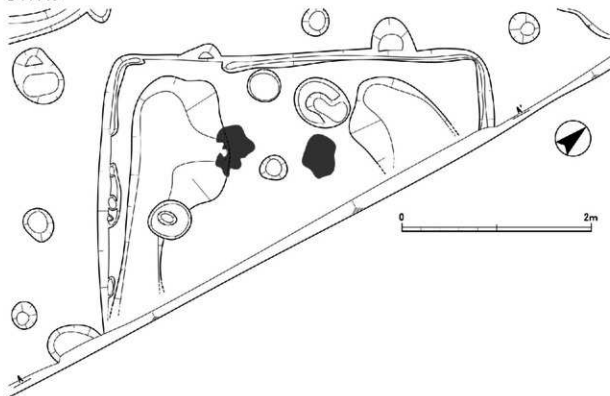
貯蔵穴は検出されておらず、貼床や周溝状掘形も確認できなかった。

建物中央では、大型の須恵器甕(242)の破片がまとまって出土した。口縁部付近の破片がなく完形には復元できないものの、かなりの量の破片が遺存しており、埋没時ないし建物廃絶時には完形に近い状態であったと推定される。

遺物は、須恵器や土師器が出土している。遺構の遺存状況が悪いこともあって遺物の出土量は少なく、先述の須恵器甕以外はいずれも小片である。重複するSH195に関係すると思われる古墳時代前期の土師器片も複数出土した。また、埋土中などから縄文土器の破片がかなりの数検出されており、縄文時代のもと思われる石皿(台石)も1点出土している。付近に縄文時代中期の遺構が存在した可能性が高い。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代後期中葉と考えられる。

# SH148



- 1. 10YR4/3に多い黄褐色細粒砂～シルト、10YR5/6黄褐色粗～細粒砂を30%含む。しまり強、粘性やや強（表土）
- 2. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性中、下面層状に酸化
- 3. 10YR2/2～2/3黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
- 4. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
- 5. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強
- 6. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや強、炭化物を多く含む
- 7. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト、10YR3/2黒褐色中粒砂～シルトを30%含む。しまり中、粘性やや強
- 8. 10YR2/3～3/3黒褐色粗粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
- 9. 10YR2/3～2/3黒褐色細粒砂～シルト、10YR3/4暗褐色シルトを10%含む、しまりやや強、粘性やや強
- 10. 10YR3/2暗褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中
- 11. 10YR2/3～2/3黒褐色細粒砂～シルト、10YR2/3～3/3黒褐色粗粒中粒砂～シルトを20%含む、しまりやや強、粘性中
- 12. 10YR2/2～2/3黒褐色細粒砂～シルト、10YR2/3～3/3黒褐色粗粒中粒砂～シルトを10%含む、しまりやや強、粘性中
- 13. 10YR3/3暗褐色細粒砂～シルト、10YR2/3～3/3黒褐色粗粒中粒砂～シルトを10%含む、しまりやや強、粘性やや弱
- 14. 10YR3/3～3/4暗褐色細粒砂～シルト、10YR2/3～3/3黒褐色粗粒中粒砂～シルトを10%含む、しまりやや強、粘性やや弱
- 15. 10YR4/4～4/6暗褐色細粒砂～シルト、10YR3/2黒褐色中粒砂～シルトを30%含む、しまり強、粘性弱
- 16. 10YR3/2黒褐色中粒砂～シルト、しまり強、粘性弱
- 17. 10YR4/5暗褐色中粒砂～シルト、10YR3/2黒褐色中粒砂～シルトを10%含む、しまり強、粘性中
- 18. 10YR3/3暗褐色中粒砂～シルト、10YR4/6暗褐色シルトを10%含む、しまりやや強、粘性中
- 19. 10YR3/2黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
- 20. 10YR2/1黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中

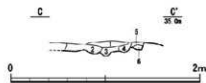
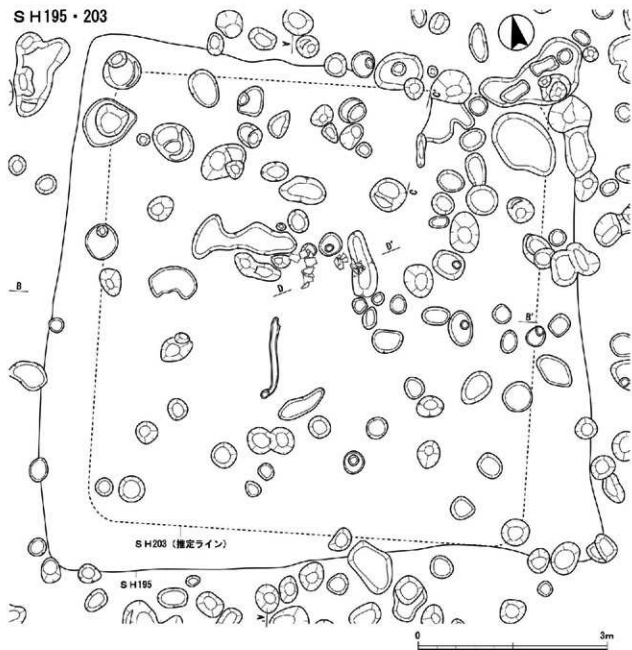
第214図 SH148 (1/40)

SH213 (第217・218図) 第2次調査区の東部で検出した建物である。SH209・211・213・214など、多数の堅穴建物が重複する中に位置する。古墳時代前期の建物SH209・238・211・214より後出し、これらの建物を一部削平している。平面形は長軸6.5m、短軸6.2mの正方形に近い方形を呈する。古墳時代後期の堅穴建物の中では大型のものである。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。うち2基では、土層断面で柱痕ない柱の抜き取り痕とみられるものが確認できる。

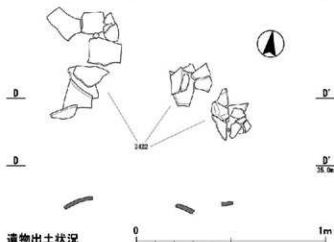
カマドは北壁沿いの中央付近で検出された。原形を留めておらず、浅い落ち込みと焼土塊が検出されたのみである。カマド内からは、土師器片と華大の

SH195・203



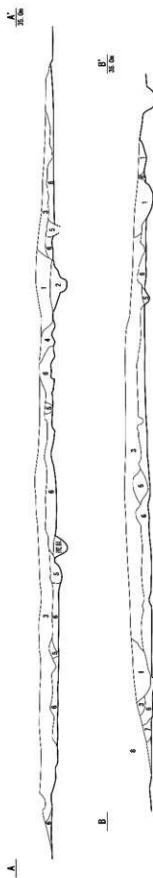
カマド

- 【C-C' 断面】
1. 10172/21にぶい、黄褐色細粒砂、しまりやや強、粘性やや弱、礫土を含む（カマド遺土上）
  2. 10173/25部局層細粒砂〜シルト、しまり中、粘性中
  3. 10174/21にぶい、黄褐色細粒砂、しまりやや強、粘性中
  4. 10173/25部局層細粒砂〜シルト、しまりやや強、粘性中
  5. 10172/25部局層細粒砂、しまりやや強、粘性中
  6. 10173/25部局層細粒砂〜シルト、しまりやや強、粘性中（硬質遺土上）



遺物出土状況

第215図 SH195・203① (1/60、1/40、1/20)



A-A'・B-B' 断面

1. 1078L/713(土層)埋設部～シルト、しまりやや草、若石中、褐色灰土を5%含む  
 2. 1018L/713(土層)埋設部～シルト、しまりやや草、若石中、褐色灰土を10%含む  
 3. 1018L/713(土層)埋設部～シルト、しまりやや草、若石中、褐色灰土を10%含む  
 4. 1018L/713(土層)埋設部～シルト、しまりやや草、若石中、褐色灰土を10%含む  
 5. 1018L/713(土層)埋設部～シルト、しまりやや草、若石中、褐色灰土を10%含む  
 6. 1018L/713(土層)埋設部～シルト、しまりやや草、若石中、褐色灰土を10%含む  
 7. 1018L/713(土層)埋設部～シルト、しまりやや草、若石中、褐色灰土を10%含む  
 8. 1018L/713(土層)埋設部～シルト、しまりやや草、若石中、褐色灰土を10%含む

礎が出土した。礎は支脚として使用されていたものと考えられる<sup>31)</sup>。

貯蔵穴とみられる土坑は、北東隅付近から検出された。小型の平面形が円形の土坑で、深さは0.3mほどある。底は平坦で、壁面は急に立ち上がる。埋土中からは須恵器の坏身・坏蓋が破片化して出土している<sup>31)</sup>。

壁際溝は検出されず、土層断面でも確認できない。貼床は、北部から西部にかけてかなり厚く施されているようである(A-A'・B-B'断面第3層)。

遺物は、カマドから土師器、貯蔵穴から須恵器が出土している。埋土中からも須恵器や土師器、土製品、軽石、鉄製品が出土した。土製品としては紡錘車が1点認められる。鉄製品は、鉄鏝と棒状鉄製品の2点が出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代後期後葉と考えられる。

**S H 215 (第219図)** 第2次調査区の東部で検出した建物である。S H 209・211・213・214など、多数の堅穴建物が重複する箇所を南側に位置する。古墳時代前期の建物S H 216より後出する<sup>31)</sup>。平面形は長軸4.2m、短軸3.4mの長方形を呈する。

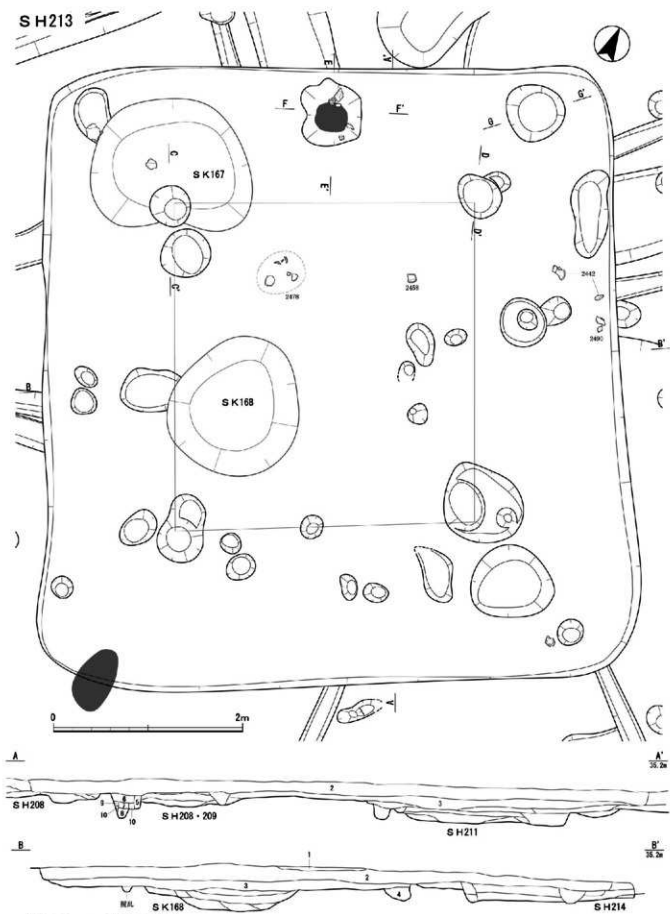
主柱穴は3基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されていたと考えられるが、西隅の柱に該当する柱穴は検出されなかった。北隅の主柱穴と思われる柱穴もかなり浅く、主柱穴ではない可能性もある。

カマドは北西壁沿いの中央よりやや北側で検出された。壁より外側に突出する形で構築されている。浅い掘り込みの中に構築されており、袖が一部遺存している。カマド内からは、土師器製の破片が少量出土した。

貯蔵穴とみられる土坑は、北隅から検出された。平面形が円形の小型の土坑で、深さは0.3mほどある。

壁際溝は平面では検出できなかったが、土層断面からみると、西半の壁沿いには壁際溝が存在していたと考えられる。

貼床は、建物全体に施されている(A-A'・B-B'断面第4・5層)。また、幅が広い周溝状掘形が建物の壁に沿って検出されており、この周溝状掘形を埋

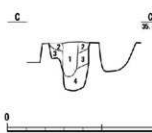


第217圖 SH213① (1/40)

# SH213

## 【A-A'・B-B' 断面】

1. 10YR2/2黒帯粘板砂～シルト、しまり中、粘性中、腐化粒子を30%含む
2. 10YR2/2黒帯粘板砂～シルト、しまり中、粘性中
3. 10YR2/2～2/3黒帯粘板砂～シルト、10YR3/4砂質シルトを10%含む、しまりやや強、粘性中（粘灰?）
4. 10YR2/2～2/3黒帯粘板砂～シルト、しまり中、粘性中
5. 10YR2/2黒帯粘板砂～シルト、しまり中、粘性中（ピット埋土?）
6. 10YR2/2黒帯粘板砂～シルト、10YR4/6腐シルトを10%含む、しまりやや強、粘性やや強（ピット埋土?）



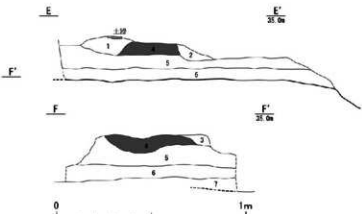
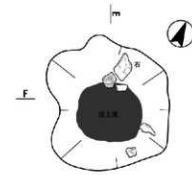
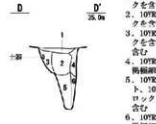
## 【C-C' 断面】

1. 10YR2/2黒帯粘板砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
2. 10YR2/2～2/3黒帯粘板砂～シルト、しまり強、粘性強
3. 10YR2/2～3/3黒帯～粘帯粘板砂～シルト、10YR3/6黄帯粘板砂を10%含む、しまり強、粘性強
4. 10YR2/2～3/3黒帯～粘帯粘板砂～シルト、10YR3/6黄帯粘板砂を30%含む、しまり強、粘性強

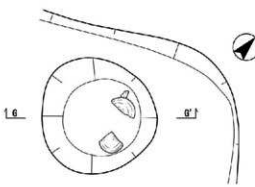
7. 10YR2/2黒帯粘板砂～シルト、しまり中、粘性中（ピット埋土?）
8. 10YR2/2黒帯粘板砂～シルト、10YR4/6腐シルトを5%含む、しまり中、粘性中（ピット埋土?）
9. 10YR2/2黒帯粘板砂～シルト、10YR4/6腐シルトを20%含む、しまりやや強、粘性やや強（ピット埋土?）
10. 10YR2/2～3/3粘帯粘板砂～シルト、10YR4/6腐粘板砂～シルトを30%含む、しまりやや強、粘性やや強（ピット埋土?）

## 【D-D' 断面】

1. 10YR2/2黒帯粘板砂～シルト、地山ブロックを含む、しまり中、粘性中
2. 10YR2/2黒帯粘板砂～シルト、地山ブロックを含む、しまり中、粘性中
3. 10YR2/2黒帯粘板砂～シルト、地山ブロックを含む、しまり中、粘性中、土層片～礫を含む
4. 10YR2/2黒帯粘板砂～シルト、10YR3/2黒帯粘板砂～シルトを70%含む、礫を含む
5. 10YR2/2黒帯～10YR3/2黒帯粘板砂～シルト、10YR1/1腐シルトをわずかに含む、地山ブロックを含む、しまり中、粘性やや強、礫を含む
6. 10YR2/2黒帯粘板砂～シルトと10YR3/6黄帯粘板砂～シルトが混じり合う、しまり中、粘性中、礫を含む

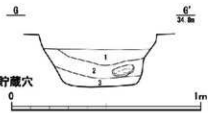


## カマド



## 【E-E'・F-F' 断面】

1. 10YR2/3～2/3黒帯～粘帯粘板砂～シルト、しまりやや強、粘性中、礫土をブロック状に20%含む
2. 10YR4/5～4/4に赤い炭層～腐シルト、しまり中、粘性強（炭層?）
3. 5YR2/4粘帯赤粘帯粘板砂～シルト、しまりやや強、粘性強、礫土をブロック状に10%含む（カマド構築?）
4. 10YR3/6黄帯粘板砂～シルト、しまり強、粘性強（腐土）
5. 10YR2/2黒帯粘板砂～シルト、しまりやや強、粘性中、礫土をブロック状に5%含む（カマド躯体理土か地土）
6. 10YR2/2黒帯シルトと10YR4/6腐シルトが混じり合う、しまり強、粘性強（S11211250）
7. 10YR4/6腐シルト、10YR2/3黒帯シルトを5%含む、しまり強、粘性強（S1211135末）

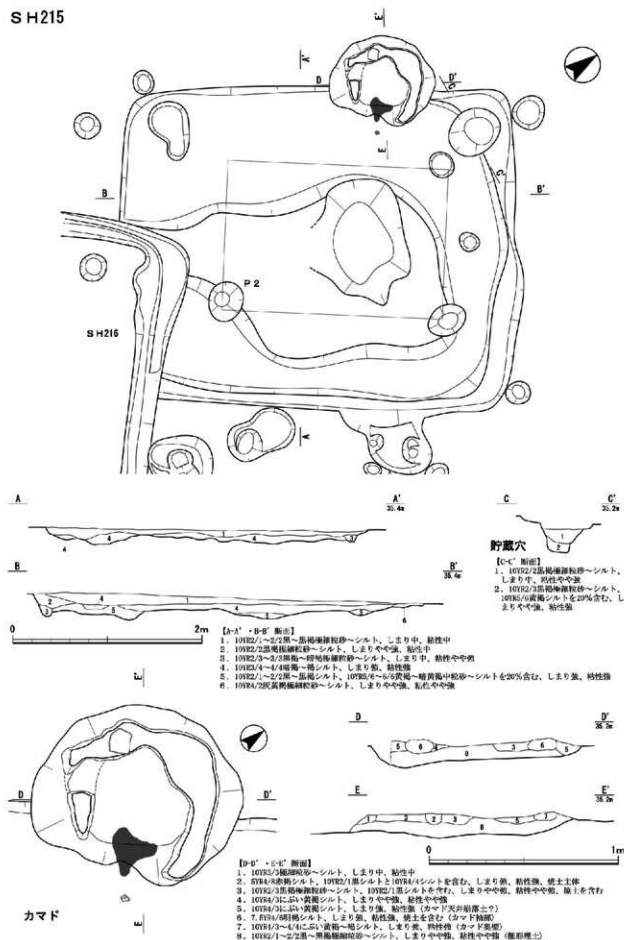


## 【G-G' 断面】

1. 10YR2/2黒帯粘板砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YR2/2～2/3黒帯粘板砂～シルト、しまり中、粘性中
3. 10YR3/3粘帯粘板砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強

第218図 SH213② (1/40, 1/20)

SH215



第219図 SH215 (1/40, 1/20)



める形で貼床が厚く施されている。

遺物は、主柱穴P2とカマドから土師器が出土した。カマドから出土した土師器は甕で、ほぼ1個体分に相当すると思われる。埋土中からも土師器が出土しているが、出土量は少なく、いずれも小片である。また、古墳時代前期の土師器も少量出土した。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代後期後葉と考えられる。

**S H217 (第220図)** 第2次調査区の東部で検出した建物である。古墳時代前期の建物S H216・218より後出する<sup>1)</sup>。平面形は長軸4.1m、短軸3.7mの長方形を呈する。

主柱穴は明確に確認できなかった。ただし、北隅付近で検出されたピットでは、土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる(C-C'断面)。他にも床面からピットがいくつか検出されているが、これに対応するような主柱穴は確認できなかった。ただ、建物中央より若干北西側に1.4mほどの間隔で並ぶ2基のピットは、深さが0.3mほどあるしつかりとしたもので、これらが主柱穴となる可能性も考えられる。

カマドは北西壁沿いの中央よりやや南側で検出された。壁より外側に突出する形で構築されている。ごく浅い掘り込みの中に構築されており、袖が一部遺存している。カマド内からは焼土塊が検出された。

貯蔵穴は検出されなかった。壁際溝も調査時には検出されていないが、土層断面からは北東壁沿いに壁際溝が存在していた可能性が考えられる。

貼床は、南部から東部にかけて部分的に施されているものとみられる(A-A'・B-B'断面第7層)。調査では確認されていないものの、周溝状掘形が存在した可能性も考えられる。

遺物は、カマドから土師器甕の大きな破片が多数出土している。埋土中からも須恵器や土師器が出土しているが、出土量はごくわずかである。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代後期後葉と考えられる。

**S H232 (第221・222図)** 第2次調査区の東部で検出した建物である。S H209・211・213・214など、多数の竪穴建物が重複する箇所北側に位置する。古墳時代前期の建物S B161より後出する。平面形

は長軸4.3m、短軸4.1mの正方形に近い方形を呈する。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。主柱穴のうち3基では、土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。

カマドは南東壁沿いの中央よりやや南側で検出された。壁より外側に突出する形で構築されている。浅い掘り込みの中に構築されており、袖が一部遺存している。ただし、カマド内部や周辺ではそれほど強い被熱痕が確認できなかった。カマド内からは、土師器甕が据えられたような状況で検出された。カマド周辺からも、土師器壺などの比較的大きな破片が複数出土している。

貯蔵穴や壁際溝は検出されなかった。ただし、土層断面からみると不明瞭ながらも各壁際に浅い落ち込みが認められることから、本来は壁際溝が存在していた可能性が高い。

貼床は、建物全体に施されている。また、周溝状掘形が建物の壁に沿って検出されており、この周溝状掘形を埋める形で貼床が厚く施されている。

また、床面からは西隅付近を中心に建物の構築材と考えられる多数の炭化材が検出されており、焼失建物の可能性がある。

遺物は、カマドから土師器甕が出土している。ほぼ1個体分に相当すると思われる。埋土中からも須恵器や土師器、葎石が出土した。ほぼ全形が復元できる小型の土師器甕などがみられる。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代後期後葉と考えられる。

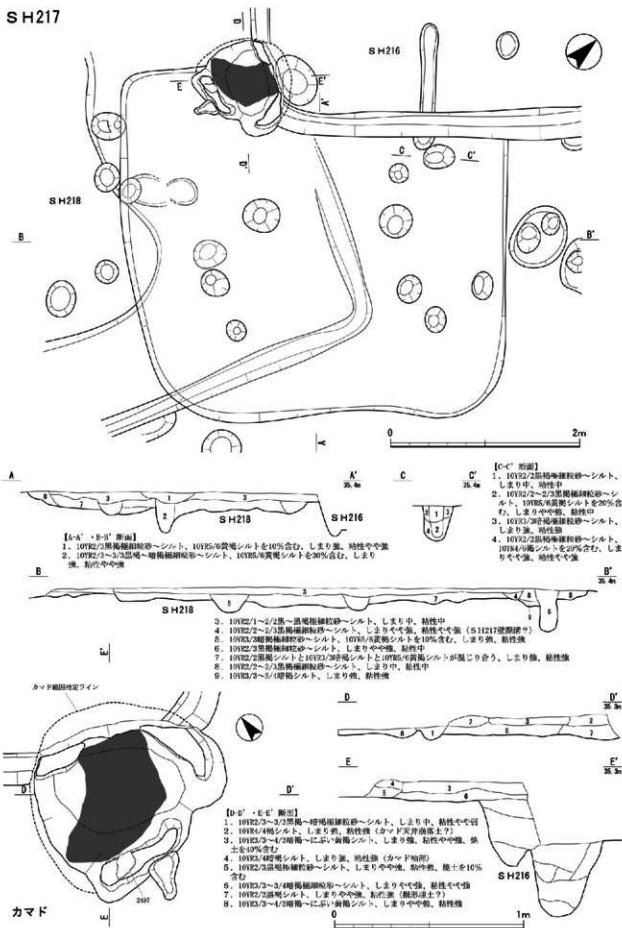
**S H253 (第223図)** 第2次調査区の北東部で検出した建物である。木の根などにより大きく擾乱を受けており遺存状況が悪く、全体の形状は不明確であるが、平面形は長軸4.4m、短軸3.8mのやや長方形を呈すると思われる。

主柱穴は2基検出された。建物の壁と平行するように配置されており、本来は4基の主柱穴が方形に配置されていたものと考えられる。

遺存している範囲ではカマドやそれに伴う焼土などは確認できなかった。貯蔵穴も検出されていない。

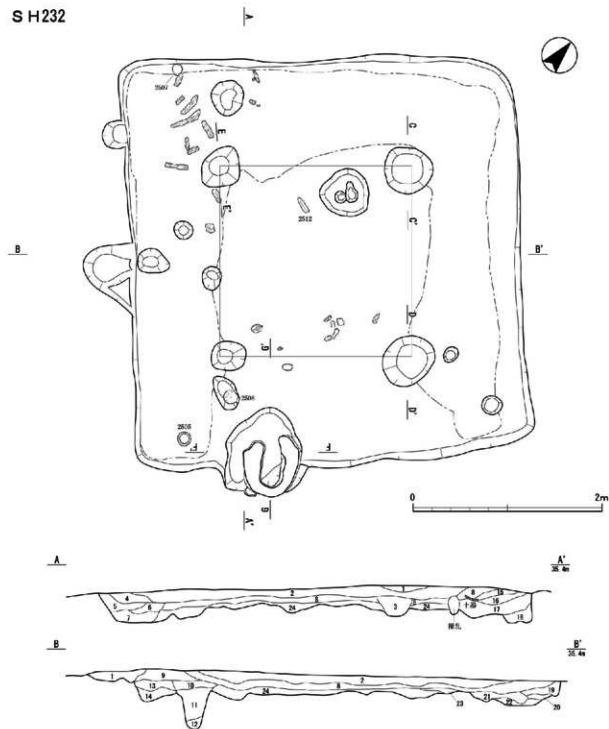
壁際溝は平面では検出することができなかったが、

SH217



第220図 SH217 (1/40, 1/20)

SH232



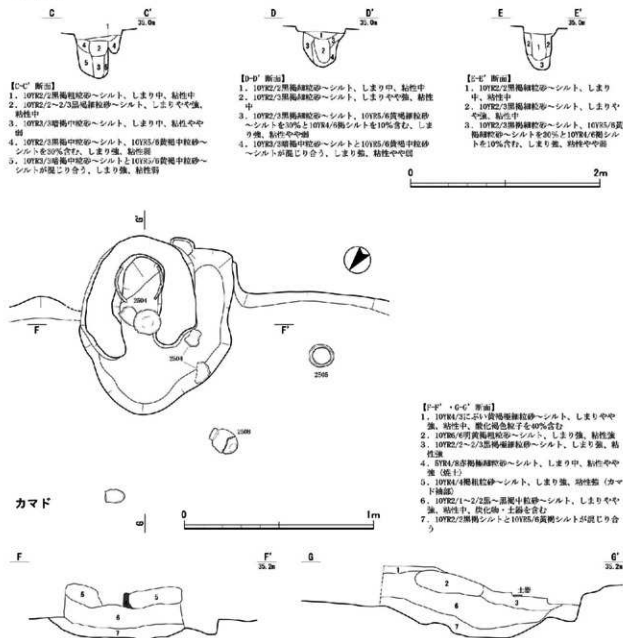
## 【A-A'・B-B' 断面】

1. 10181/7/1～2/1黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10182/1～2/2黒～黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
3. 10182/3黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性中
4. 10182/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
5. 10182/2～2/3黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
6. 10182/1～2/2黒～黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性やや弱
7. 10182/1黒褐色細粒砂～シルト、10185/6黄褐色シルトを40%含む、しまりやや弱、粘性中、粘生面を含む
8. 10182/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
9. 10182/2～2/3黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性中
10. 10182/3黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性中
11. 10182/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
12. 10182/2黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
13. 10182/1～2/2黒～黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性やや弱
14. 10182/1黒褐色細粒砂～シルト、10185/6黄褐色シルトを10%含む、しまりやや弱、粘性やや弱

15. 10184/3に多い黄褐色～褐色細粒砂、しまり弱、粘性中
16. 10184/4黄中～褐色細粒砂、しまり弱、粘性中
17. 10182/1～2/2黒～黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性中
18. 10182/2黒褐色細粒砂～シルト、10185/6黄褐色シルトを40%含む、しまりやや弱、粘性中
19. 10182/3黒褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
20. 10182/3黒褐色細粒砂～シルト、しまりやや弱、粘性やや弱
21. 10182/1～2/2黒～黒褐色細粒砂～シルト、10185/6黄褐色シルトを10%含む、しまりやや弱、粘性やや弱
22. 10182/3黒褐色細粒砂～シルト、10185/6黄褐色シルトを50%含む、しまりやや弱、粘性中
23. 10183/3褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中
24. 10184/4シルト、10182/2黒褐色シルトを30%含む、10184/4黄褐色～中褐色を上部に含む、しまり極度、粘性中 (表層)

第221図 SH232① (1/40)

S H232



第222図 S H232② (1/40, 1/20)

土層断面からは北西壁沿いや南西壁沿いには壁際溝が存在したものと考えられる。

貼床は、南西壁沿いで検出されており、建物内に部分的に施されていた可能性が高い。

遺物は、埋土中から土師器が出土している。遺物の出土量はごくわずかで、いずれも小片である。

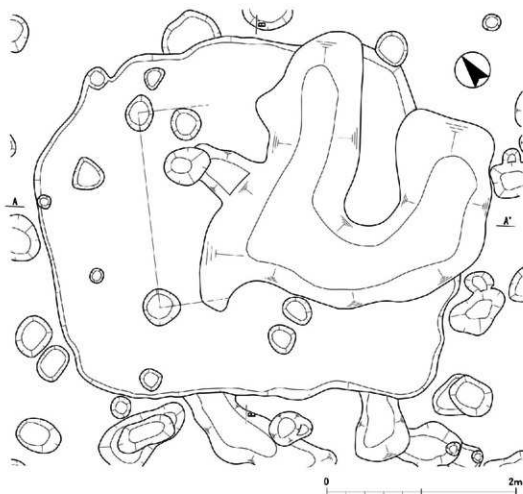
出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代後期後葉と考えられる。

S H256 (第224・225図) 第2次調査区の東部で

検出した建物である。遺存状況が悪く、北西隅付近は検出できなかった。そのため、平面形については不明な部分もあるが、長軸6.9m、短軸6.6mの正方形に近い方形を呈すると思われる。古墳時代後期の竪穴建物の中では最も大型である。

主柱穴は4基検出された。建物の平面形に沿ってほぼ正方形に配置されている。主柱穴のうち北側の2基では、土層断面で柱痕ない柱の抜き取り痕が確認できる。

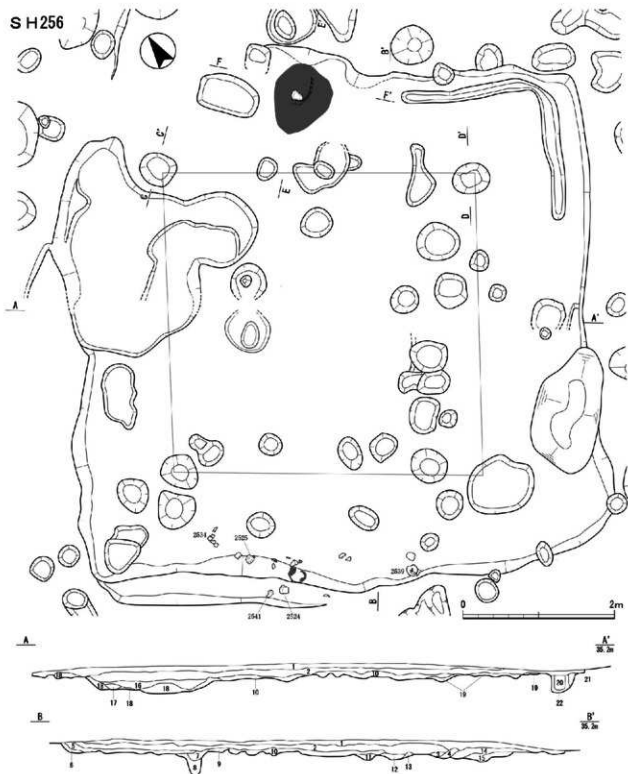
S H 253



1. 10TK2/2黒粘土層の断面、しまりやや壁、粘性やや固 (壁際埋土?)
2. 10TK2/3黒粘土層の断面、しまりや、粘性やや固
3. 10TK2/2黒粘土層の断面、しまりやや壁、粘性やや固 (壁際埋土)
4. 10TK2/3黒粘土層の断面、しまりや、土佐やや固
5. 10TK2/3黒粘土層の断面、しまりやや壁、粘性やや固 (粘土?)
6. 10TK2/4黒粘土層の断面、しまりやや壁、粘性やや固 (粘土?)

第223図 S H 253 (1/40)

S H256



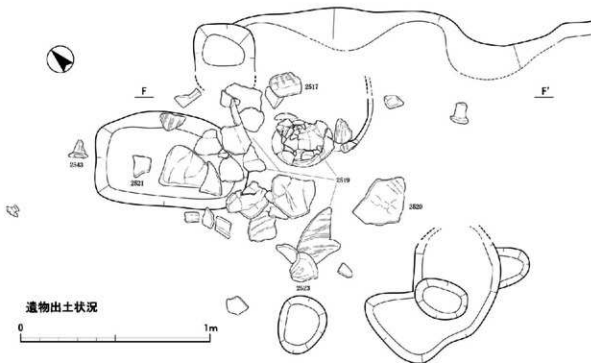
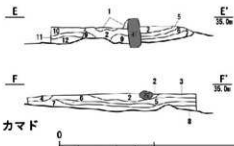
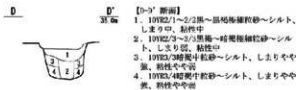
【A-A'・B-B'断面】

1. 10YK2/1～2/2層～黒褐色粘砂～シルト、しまり中、粘性中
2. 10YK2/1黒褐色粘砂～シルト、しまり中、粘性中
3. 10YK2/4黒褐色粘砂～シルト、しまり中、粘性中
4. 10YK2/4層の粘砂～シルト、しまり中、粘性やや弱
5. 10YK2/1～2/2層～黒褐色粘砂～シルト、10YK5/6貫通シルトブロックを含む、しまり中、粘性中
6. 10YK2/2黒褐色粘砂～シルト、10YK5/6貫通シルトブロックを含む、しまり中、粘性中
7. 10YK2/2黒褐色粘砂～シルト、しまりやや弱、粘性やや強
8. 10YK2/2黒褐色粘砂～シルト、しまり中、粘性中
9. 10YK2/2～3/2層～黒褐色粘砂～シルト、10YK5/6貫通シルトブロックを含む、しまりやや強、粘性中
10. 10YK2/1～2/2層～黒褐色粘砂～シルト、10YK5/6貫通シルトブロックを含む、しまりやや強、粘性やや弱

11. 10YK2/2黒褐色粘砂～シルト、しまりやや強、粘性やや弱
12. 10YK2/2～3/2層～黒褐色粘砂～シルト、しまり中、粘性中
13. 10YK2/2粘褐色粘砂～シルト、しまり中、粘性中
14. 10YK2/1～2/2層～黒褐色粘砂～シルト、しまり中、粘性中
15. 10YK3/3粘褐色粘砂～シルト、しまり中、粘性中
16. 10YK2/1黒褐色粘砂～シルト、しまりやや強、粘性やや強
17. 10YK2/1黒褐色粘砂～シルト、10YK3/2～4/2層間～灰黄褐色～粘褐色粘砂を含む、しまり中、粘性中
18. 10YK2/2～4/2層間～灰黄褐色～粘褐色粘砂、しまり弱、粘性やや弱
19. 10YK3/2黒褐色粘砂～シルト、しまり中、粘性やや弱
20. 10YK2/1黒褐色粘砂～シルト、しまり中、粘性中
21. 土層日記取層なし
22. 10YK2/2～3/2層粘褐色粘砂～シルト、しまり中、粘性やや弱

第224図 SH256① (1/50)

# S H256



第225図 S H256② (1/40, 1/20)

カマドは北壁沿いの中央付近で検出された。遺存状況は悪いが、焼土の広がりや浅い落ち込みなどが確認され、袖と思われるものもわずかに認められた。焼土の広がりなどからみて、壁より外側に突出する形で構築されているものと思われる。カマド内からは棒状の礫が直立状態で検出されており、支脚として使用されたものと考えられる。また、カマド周辺からは土師器製の破片が多数検出されており、ほぼ

完形に復元できた。

貯蔵穴とみられる土坑は、カマドの西側で検出された。平面形が隅丸方形の小型の土坑である。内部からは土師器製の破片や礫が出土した。

壁際溝は北東隅付近で部分的に検出されたのみである。

貼床は、建物全体に施されている。西壁付近には不整形な落ち込みが存在するが、貼床はこれを埋め

るように施されており、周溝状掘形の一部の可能性も考えられる。土層断面から見ると、北壁沿いにも周溝状掘形が存在した可能性がある。

遺物は、カマドから須恵器や土師器が出土している。土師器には甕や鍋、甕の他に高坏もみられる。埋土中からも須恵器や土師器、土製品、鉄製品が出土した。遺物の出土量は比較的多く、須恵器坏蓋は数個体が認められる。土製品は土玉が1点出土し

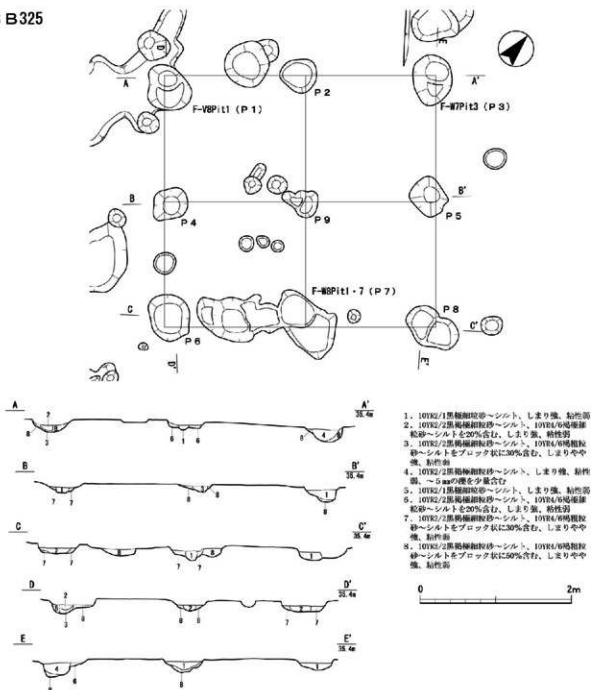
た。この他、古墳時代前期の土師器や縄文土器なども出土している。

出土遺物からみて、遺構の時期は古墳時代後期後葉と考えられる。

## (2) 掘立柱建物

**S B 325 (第226図)** 第3次調査区の東部で検出した総柱建物である。今回の調査で検出された掘立柱

### S B 325



1. 10YR2/1黒褐色細粒砂ヘシルト、しまり強、粘付面
2. 10YR2/2黒褐色細粒砂ヘシルト、10YR4/6地産黒砂ヘシルトを20%含む、しまり強、粘性弱
3. 10YR2/2黒褐色細粒砂ヘシルト、10YR4/6地産黒砂ヘシルトをブロック状に30%含む、しまりやや強、粘付面
4. 10YR2/2黒褐色細粒砂ヘシルト、しまり強、粘性弱、～5mmの塊を少量含む
5. 10YR2/1黒褐色細粒砂ヘシルト、しまり強、粘付面
6. 10YR2/2黒褐色細粒砂ヘシルト、10YR4/6地産黒砂ヘシルトを20%含む、しまり強、粘性弱
7. 10YR2/2黒褐色細粒砂ヘシルト、10YR4/6地産黒砂ヘシルトをブロック状に30%含む、しまりやや強、粘付面
8. 10YR2/2黒褐色細粒砂ヘシルト、10YR4/6地産黒砂ヘシルトをブロック状に50%含む、しまりやや強、粘付面

第226図 S B 325 (1/50)



建物の中で、総柱建物は当該建物のみである。

桁行が2間で3.6m、梁行は2間で3.4mであり、平面形はほぼ正方形を呈する。柱間は桁側・梁側ともに1.7m前後である。古墳時代前期の掘立柱建物に比べると柱穴はやや大きい。東柱と考えられる中央のP9の柱穴は小さい。

側柱のP1・4・6、そして東柱のP9でも、土層断面で柱痕ないし柱の抜き取り痕が確認できる。柱穴に不整形なものが認められることを鑑みれば、一部の柱は抜き取られた可能性が高いと思われる。

遺物は、P1・3から土師器が出土している。いずれも小片である。P1から出土したものは古墳時代前期の土師器と思われる。

出土遺物が僅少のため、遺物から時期を判断することは困難であるが、出土遺物や柱配置、周辺の遺構の状況などからみて、古墳時代後期の遺構である可能性が考えられる。

### (3) 井戸

SE140 (第227図) 第2次調査区の中央部の第3次調査区との境付近で検出した井戸と考えられる土坑である。平面形は径1.7mほどの円形を呈し、深

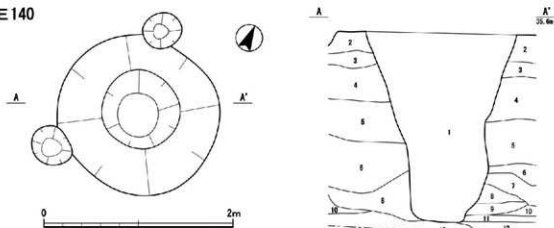
さは2.0mほどと非常に深い。壁面は下位ではほぼ垂直に立ち上がり、中位で角度を変えて外方へ立ち上がっており、断面形は漏斗状を呈する。

内部には本来複数の土層が堆積していたものと思われるが、調査時に記録することができなかった。ただし、全体的に地山に含まれるような拳大の礫が多く含まれていた。

段丘上に位置することもあって、底は湧水層まで達するには至っていない。しかしながら、シルト質の地山層(第13層)の上位に堆積した砂質の地山層(第8～12層)を掘り抜いているため、雨天時にはこれらの砂質層に滲水した水が壁面から湧出する<sup>9)</sup>。こうした点からは、当該遺構が井戸として使用された可能性が高いといえる。

埋土中から遺物は全く出土しなかった。時期不明のビット以外に他の遺構との重複関係もなく、そのため遺構の時期は不明である。ただし、付近の遺構の状況を踏まえれば、鎌倉時代以降の遺構であれば埋土中に少なからず古墳時代の土器片が混入すると思われるため、古墳時代前期ないし後期の遺構である可能性の方が高いと考えられる。

SE140



1. 1978/4に深い黄褐色細粒砂～シルト、しまりやや強、粘性中、～10caの礫を多く含む(馬土、本案は数層の層に分類可能)
2. 1978/6黄褐色シルト、しまりやや強、粘性強(地山)
3. 1978/2に深い黄褐色細粒砂～シルト、しまり中、粘性中、～3caの礫をわずかに含む(地山)
4. 1978/4-6に深い黄褐色～明黄褐色細粒～細粒砂、しまり強、粘性強弱、～10caの礫を多く含む(地山)
5. 1978/6明黄褐色～細粒砂、1978/4明黄褐色～細粒砂を層状に含む、しまり強、粘性弱、～10caの礫を含む(地山)
6. 1978/6-7/6明黄褐色～細粒砂、1978/2-6/2明白～淡黄褐色細粒～細粒砂を層状に含む、しまり強、粘性強弱、～10caの礫を含む(地山)
7. 1978/6-6/8明黄褐色～細粒砂、1978/8赤褐色～細粒砂を30%含む、しまり強、粘性弱(地山)
8. 2.577/3淡黄褐色～細粒砂、1978/6明黄褐色～細粒砂を30%含む、しまり強、粘性強弱(地山)
9. 1978/6-6/8明黄褐色～細粒砂、しまり強、粘性弱(地山)
10. 2.577/3淡黄褐色～細粒砂、1978/6明黄褐色～細粒砂を10%含む、しまり強、粘性強弱(地山)
11. 1978/4-6/6に深い黄褐色～黄褐色細粒～細粒砂、しまり強、粘性強弱(地山)
12. 1978/4-6/6に深い黄褐色～黄褐色細粒～細粒砂、しまり強、粘性強弱(地山)
13. 2.578/3-7/3に深い黄褐色～黄褐色シルト、しまり強、粘性強弱(地山)

第227図 SE140 (1/40)

## 注

- 1) この礎は砥石(2483)と同じものの可能性がある。
- 2) 整理段階で貯蔵穴内から出土した遺物が正確に分別できなくなったが、破片の形状や出土グリッド等から2441・2444と推定される。
- 3) 検出段階でS H216が後から掘り込まれていると認識し、

S H216を優先して掘削したため、重複するS H215の南隣付近を損壊する結果となってしまった。

- 4) S H215同様、S H216の調査に伴って北隣付近が失われている。
- 5) 調査中に降雨があった際に確認された。

## 第2節 遺物

### (1) 堅穴建物出土遺物

**S H148 (第228図2415~2420)** 2415・2416は須恵器である。いずれも坏蓋である。2415は口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁部と天井部との境が比較的明瞭に屈曲する。屈曲部外面の稜はそれほどシャープではない。口縁部内面には幅広の段が認められる。2416は口縁部の破片である。口縁部内面には不明瞭な段が認められる。

2417~2420は土師器である。

2417は高坏の脚部である。下半部で外方へ強く屈曲する。脚部外面は縦方向のナデによって調整されている。脚部内面頂部には円板充填状の痕跡が認められるが、脚部と坏部が一体的に成形されているか不明である。

2418・2419は鉢である。2418は小型の浅いもので、平底の底部から体部が直線的に外方へ大きく開く。口縁部は丸く収められる。内外面ともユビオサエが顕著に残り、やや粗雑である。2419は深いコップ形を呈する鉢である。器壁は厚く、内外面ともナデや工具ナデで調整されている。口縁部は丸く収められているが、かなり歪みがある。全体的に粗雑な印象を受ける。

2420は古墳時代前期の土師器で、S字状口縁甕である。口縁部の小片で、上半は小さく外反する。外面には押し列点文がわずかに遺存している。混入したと考えられる。

**S H195・203 (第228図2421~2438)** 2421・2422は須恵器である。

2421は坏蓋である。口縁部と天井部との境は不明瞭である。口縁部は凹線状に若干凹む面をなす。天井部外面にはわずかにクロコズリが残る。

2422は大型の甕である。体部の破片がかなり遺存

している。外面には全体的に平行タキが施されているが、内面はロクロナデによって当て具痕が消されている。ロクロナデが弱い部分には、粘土接合痕が認められる。また、内面には一部に黄土の塗布がみられる。胎土は異なる色調のものがマーブル状に混じりあっている。

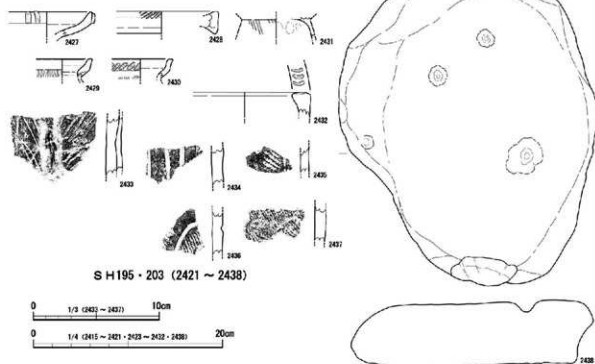
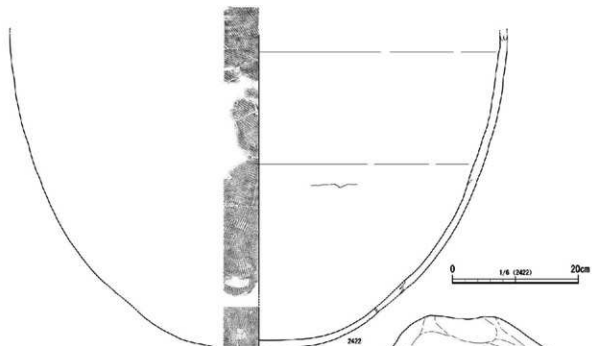
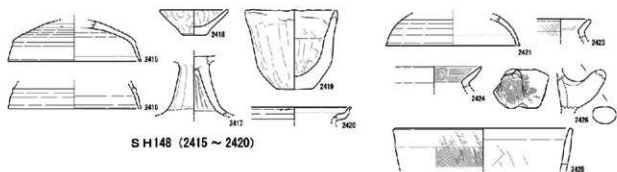
2423~2431は土師器である。

2423・2424は甕である。いずれも口縁部の小片である。2423は明瞭に屈曲する頸部から口縁部が短く外反する。古墳時代前期のものの可能性もあろう。2424は口縁部が丸く収められる。口縁部内面はハケによって調整されている。

2425・2426は甕と思われる。2425は口縁部片で、口縁部は不明瞭な面をなす。外面はハケで調整されているが、口縁部外面には強いヨコナデが施されている。2426は把手である。体部外面に貼り付けられている。甕の把手の可能性もある。

2427~2431は古墳時代前期の土師器である。2427・2428は広口蓋の口縁部の小片である。2427はやや内湾し、口縁部には棒状浮文が貼り付けられている。2428は口縁部が拡張され、面をなす。口縁部には列点文が施されている。2429・2430は受口状口縁甕の口縁部の小片である。2429は口縁部が強いヨコナデによって面をなす。2430は口縁部が面をなし、外面にはハケ状工具による幅広の列点文が施されている。2431はS字状口縁甕の脚部である。これらはいずれも混入したと考えられる。

2432~2437は縄文土器である。2432は深鉢の口縁部片と思われる。口縁部は肥厚して幅広の面をなし、C字形の列点文が施されている。2433~2437は深鉢の体部片と思われる。2433は縦位の隆帯が貼り付けられており、細い沈線による矢羽根状文が施されている。2435は縄文が施されている。2436はやや



第228図 SH148・195・203出土遺物 (1/6、1/4、1/3)

太い沈線と縄文が認められる。区画文内に縄文を充填したものと考えられる。2437は縄文のみが認められる。いずれも混入したと考えられる。

2438は石器で、石皿（台石）である。長さ34.4cmとかなり大型のもので、溶結凝灰岩の扁平な礫を利用している。上面は平坦だが、摩滅はそれほど顕著ではない。古墳時代のものの可能性もあるが、4箇所ほど敲打による凹みがみられ、凹石的な使用が推測されることや、縄文時代の石器が混入したと考えられる。**S H 213（第229・230図2439～2490）** 2439・2440はカマドから出土した。いずれも土師器の甕である。

2439は口縁部片で、緩やかに屈曲する頸部から口縁部が外反しながら外方へ開く。口縁部は丸く取られる。外面はヨコナデによって調整されている。2440も口縁部片である。口縁部はやや直立気味に立ち上がり、口縁部付近で外方に短く外反する。口縁部は丸く取られる。

2441～2490は埋土中などから出土した。

2441～2468は須恵器である。

2441・2442は杯蓋である。2441は口縁部が直立気味に立ち上がり、天井部は丸みを帯びる。口縁部と天井部との境には明瞭な稜が認められる。口縁部は丸く取られる。天井部外面のロクロケズリの範囲は狭い。2442は口縁部と天井部との境の稜が不明瞭で、凹線化している。口縁部は丸く取られる。

2443～2452は坏身である。2443・2444はやや小型である。2443は立ち上がりはかなり高い。口縁部は丸く取られる。2445は受部の突出が小さい。2447は立ち上がりやや低く、口縁部は丸く取られる。2448は立ち上がりの器壁が薄く、やや高い。口縁部には不明瞭ながら内傾する面が認められる。受部の突出は小さい。2449はやや浅い。2450・2451は口径が大きい割に立ち上がり低く矮小なものである。口縁部は丸く取られる。2452は器壁が厚く、坏身の底部と思われるが、壺の底部の可能性も残る。

2453は平底の底部である。器壁は薄く、坏の底部の可能性が考えられる。

2454～2466は壺類である。

2454～2458は口縁部から頸部にかけての破片である。2454は頸部から直立気味に立ち上がり、口縁部

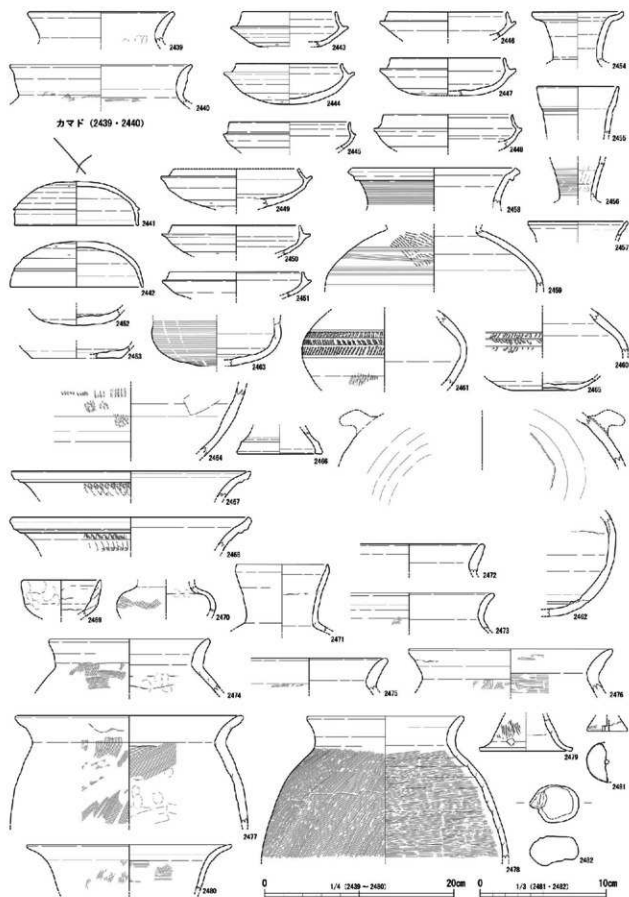
付近で大きく外方に屈曲する。口縁部はやや上方にはね上げられる。2455は直立気味にまっすぐ立ち上がる口縁部である。口縁部は丸く取られる。外面には中に凹線が施されている。長頸壺と思われる。2456は頸部付近の破片である。外面にはカキメが施されており、内面にはシボリ痕が残る。小型のもので、提瓶などの可能性がある。2458は広口壺である。口縁部は帯状に肥厚し、口縁部は面をなす。外面にはカキメが施されている。

2459～2466は体部等の破片である。2459はやや大型の広口壺と思われる、外面には平行タタキとカキメが施されている。破片の一部はS H 232から出土した。2460・2461は長頸壺と思われる。肩部付近でやや強く屈曲し、屈曲部外面には矢羽根状の列点文が施されている。2461は体部下外面に擬格子状タタキの一部遺存している。2462は提瓶である。肩部付近の小片であるが、大型のものと思われる。外面には把手が付けられているが、ほぼ欠損する。体部内面には円板状の粘土による閉塞痕が認められる。2463は壺の底部と思われるが、若干器形に違和感がある。内面の底部付近にはシボリ痕状の痕跡がわずかに認められることや、底部外面に降灰が認められ、この面を上にして焼成されていたと推測されることなどからは、横瓶の体部の可能性も考えられる。2464は大型の壺または甕の体部下半の破片である。外面には平行タタキの後にロクロケズリが施されており、こうした調整からみると大型の広口壺の可能性が高い。2465は底部片である。器壁が薄く坏身等の可能性もあるが、外面にロクロケズリが施されておらずロクロナデで調整されているなどの点から、壺の底部と推定した。2466は脚部の破片である。脚部は肥厚しながらわずかに内湾し、脚部は面をなす。透孔は遺存していない。大きさなどからみて、高坏ではなく脚付壺の脚部と思われる。

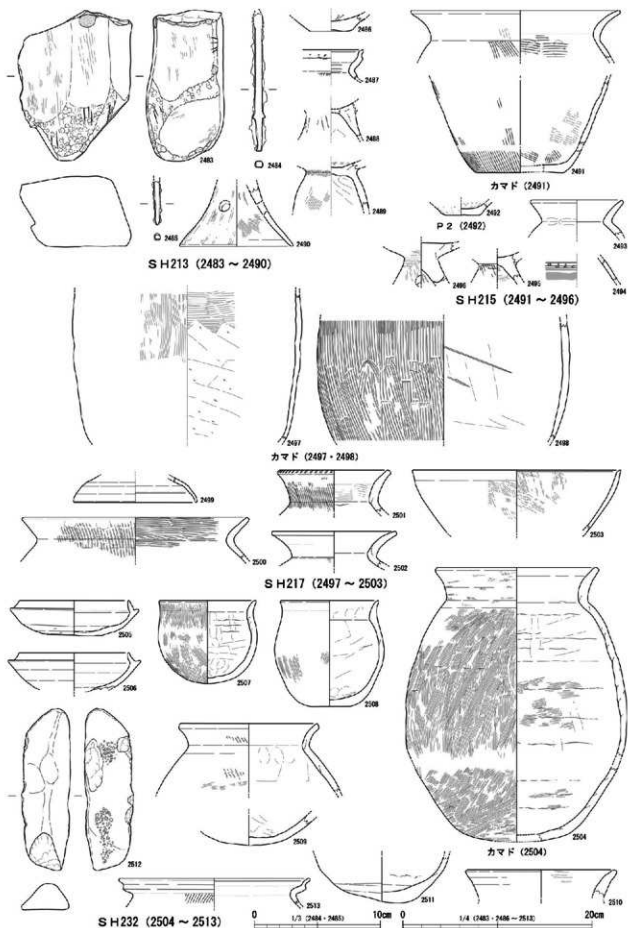
2467・2468は甕である。いずれも口縁部で、口縁部は帯状に肥厚し、外面には不鮮明な波状文が施されている。

2469～2480は土師器である。

2469は碗である。小型のもので、やや深い。外面にはユビオサエが顕著に残り、内面にも粘土接合痕が残されているなど、全体に粗雑である。



第229図 SH213出土遺物① (1/4、1/3)



第230図 SH213出土遺物②、SH215・217・232出土遺物 (1/4、1/3)

2470・2471は壺である。2470は小型のものである。体部の破片で、肩部が張る。外面にはハケが施されている。2471は直口壺である。口縁部の破片で、緩やかに外反しながら直立気味に立ち上がり、口縁部外面には強いヨコナデが施され、不明瞭な面をなす。内外面ともヨコナデで調整されている。

2472～2478は甕である。2473は頸部から口縁部にかけて外反し、口縁部には丸く収められる。2474は頸部が比較的明瞭に屈曲する。口縁部は緩やかに外反し、器壁は厚い。2476は頸部の屈曲が緩く、口縁部はわずかに外反する。体部内外面はハケで調整されている。2477は口縁部から体部上半にかけてが遺存する。口縁部は緩やかに外反する。体部は長胴を呈すると思われる。外面はハケで調整されており、内面はナデや工具ナデで調整されているが、頸部直下のみハケが施されている。2478も口縁部から体部上半にかけてが遺存する。頸部の屈曲は緩く、口縁部は外反しながら直立気味に立ち上がる。体部は長胴を呈すると思われる。内外面とも全体的にハケで調整されている。内面には粘土接合痕が顕著に残る。また、外面にはスガが付着している。

2479は高坏の脚部である。ハ字状に開き、脚裾部で大きく外反する。脚端部は面をなす。透孔は認められない。外面にはハケが施されている。また、小さな粘土塊が付着しているが、意図的なものとは考えにくい。

2480は鉢と思われる。深い椀形の体部に緩やかに外反する口縁部が付くが、頸部の屈曲は不明瞭である。内外面ともハケで調整される。

2481は土製品で、紡錘車である。半分以上を欠損するが、円錐台形を呈するものと思われ、中心の孔も一部遺存している。外面にはわずかにハケ状の痕跡が認められる。

2482・2483は石製品である。2482は軽石で、砥石として使用されたものと思われる。明瞭な線状痕などの使用痕はみられないが、一部に平坦な面が認められる。2483は砥石である。大型のもので、置き砥と考えられる。硬質で目の細かいホルンフェルス製で、上面と片側の側面の2面が砥面として使用されており、使用に伴う線状痕や擦痕が明瞭に残る。また、稜線や端部などに敲打痕が顕著に残る。なお、

カマドの支脚に転用されていたものと推定され、被熱が認められる<sup>1)</sup>。

2484・2485は鉄製品である。2484は鉄釜である。長頸釜で、頸部はかなり長い。釜身部は一部欠損しており、また錆が著しいため、形状は不明瞭である。胴は台形で、釜はやや太い。矢柄の痕跡は認められない。2485は棒状のものである。欠損しており、全体の形状は不明である。断面形は方形を呈し、一端はやや尖ると思われる。

2486～2490は古墳時代前期の土師器である。2486は壺の底部である。2487はS字状口縁部の口縁部の小片である。口縁部には強いヨコナデによって面が作り出されるとともに、やや外方へ引き出されている。外面に不明瞭ながら押引点文が認められる。2488・2489は台付甕の脚部である。2489はやや内湾し、外面にハケが施されている。2490は高坏の脚部である。ハ字状に外反しながら開く。これらはいずれも混入したと考えられる。

**S H 215 (第230図2491～2496)** 2491はカマドから出土した。土師器甕で、多数の破片が出土したが、口縁部と体部下半のみ図化できた。頸部は明瞭に屈曲し、口縁部はやや外反しながら外方へ開く。口縁部には不明瞭な面が認められる。体部は長胴を呈すると思われ、内外面とも粗いハケで調整されている。底部は平底で、甕の可能性も残るが、遺存している範囲に蒸気孔の痕跡は認められない。

2492は主柱穴P2から出土した。土師器壺の底部である。内外面ともニビオサエが認められる。古墳時代前期のもの可能性もある。

2493～2496は埋土中などから出土した。

2493は土師器壺と思われる。小型のもので、頸部は明瞭に屈曲し、口縁部はわずかに外反しながら外方へ開く。器壁は厚い。古墳時代前期のもの可能性もある。

2494～2496は古墳時代前期の土師器である。2494は壺の体部片で、外面に直線文と竹管文が施されている。竹管文は一部でずれて二重に施文されている。また、赤彩も施されている。2495は台付甕の脚部である。器壁は厚い。2496は高坏の脚部である。脚部上端側面から坏部を成形している。

**S H 217 (第230図2497～2503)** 2497・2498はカマ

下から出土した。いずれも土師器甕の体部片である。2497は長胴を呈し、内面下半はケズリによって調整されている。2498は外面が粗いハケで調整されている。内面には筋状の工具痕が認められる。

2499~2503は埋土中などから出土した。

2499は須恵器坏蓋である。器高は低く、口縁部と天井部の境は不明瞭である。

2500は土師器甕である。大型のもので、明瞭に屈曲する頸部から口縁部が直線的に外方へ開く。口縁端部は面をなす。口縁部内面も粗いハケで調整されている。

2501~2503は古墳時代前期の土師器である。2501・2502は中型の広口蓋の口縁部である。2501は口縁端部に刻目が施されている。2503は有蓋高坏である。深い坏部で、口縁端部には内傾する面が認められる。内外面ともハケを施した後ミガキによって調整されている。これらはいずれも混入したと考えられる。**SH232 (第230図2504~2513)** 2504はカマドから出土した。土師器甕で、ほぼ全形が復元できた。頸部の屈曲は緩く、口縁部は緩やかに外反する。体部はやや長胴を呈し、底部は丸底である。外面は全体的にハケで調整されている。内面はナデやハケで調整されているが、粘土接合痕が顕著に残る。また、外面にはススが付着している。

2505~2513は埋土中などから出土した。

2505・2506は須恵器坏身である。2505はやや小型で、立ち上がりも低く矮小である。口縁端部は丸く収められる。2506はやや深い、やはり立ち上がりは低く矮小である。焼成は不良で土師質である。また、二次的に被熱している。

2507~2511は土師器で、いずれも甕と思われる。2507は小型のもので、頸部の縮まりは弱く、屈曲も緩い。底部は丸底である。鉢とした方が良いかもしれない。2508も小型のものである。2507よりは若干深く、底部は不明瞭な平底を呈するが、頸部の縮まりは弱く、屈曲も緩い。二次的に被熱している。2509は建物内のピットから出土したもので、口縁部から体部上半にかけての破片と、底部の破片があり、同一個体と考えられる。外面には粗いハケが一部に遺存している。2511は底部片である。丸底で、器形の歪みが大きい。外面にススが付着している。

2512は石製品で、蔽石と思われる。断面三角形で長細い砂岩の歪角礫を利用しており、尖ったもので蔽打したような小さな蔽打痕の集中が、一つの面の2箇所認められる。また、側縁にも蔽打痕が認められる。側縁にみられる剥離も、側縁で蔽打したことによって生じたものと推測される。

2513は古墳時代前期の土師器で、S字状口縁甕の口縁部である。口縁端部には強いヨコナデによる面が作り出されるとともに、強く外方へ引き出されている。混入したと考えられる。

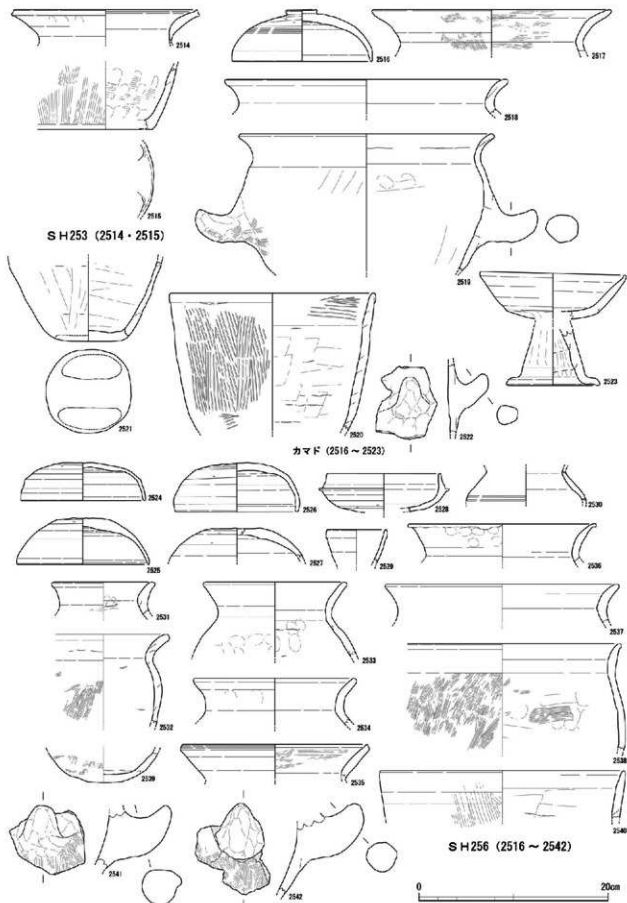
**SH253 (第231図2514・2515)** 2514・2515は土師器である。2514は甕の口縁部で、緩やかに外反しながら外方へ開き、口縁端部は面をなす。2515は甕である。底部付近の破片で、外面はハケで調整されている。底部には蒸気孔が2孔開けられていると思われる。

**SH256 (第231・232図2516~2555)** 2516~2523はカマドから出土した。

2516は須恵器で、有蓋高坏の蓋と思われる。器高はやや高く、口縁部と天井部との境は明瞭ではないが、外面の中位に数本の凹線状のものが認められ、それより上位にはロクロケズリが施されている。天井部にはボタン状の縮みが貼り付けられている。焼成は不良で、土師質である。

2517~2523は土師器である。2517・2518は甕である。いずれも口縁部片で、緩やかに屈曲する頸部から口縁部が外反しながら外方へ開く。2519はやや浅く、鍋と思われる。頸部の縮まりは弱く、屈曲も緩い。体部外面には把手が付く。把手は体部に差し込むようにして付けられている。2520・2521は甕である。2520は口縁部から体部下半にかけての破片である。体部外面は粗いハケで調整されており、内面は工具ナデで調整されているが、口縁部付近のみハケが施されている。2521は底部付近の破片である。内外面ともナデで調整されており、底部には大きな蒸気孔が2孔穿たれている。2522は把手である。甕ないし甕の把手と思われる。2523は高坏である。ほぼ全形が復元できたが、坏部と脚部とが接合せず、頸部付近の形状は不明瞭である。坏部は底部と口縁部との境で屈曲し、口縁端部は丸く収められる。脚部は八字状に直線的に開くが、脚根部で強く外方へ屈





第231図 SH253出土遺物、SH256出土遺物① (1/4)

曲し、脚端部は爪先立ち状になる。外面は全体的にヨコナデやナデで調整されている。

2524～2555は埋土中などから出土した。

2524～2530は須恵器である。

2524～2527は坏蓋である。2524は口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁部と天井部との境の稜は明瞭である。口縁部内面には不明瞭な内傾する面が認められる。天井部外面にはロクロケズリが施されているが、範囲は狭い。2525は口縁部と天井部との境が明瞭ではない。口縁部内面には不明瞭な段が認められる。2526も口縁部と天井部との境が不明瞭で、全体的に丸みを帯びる。口縁部内面にはやや幅広い段が認められる。

2528は坏身である。立ち上がりは直立気味に立ち上がり、口縁部は丸く収められる。

2529・2530は壺類である。2529はわずかに内湾しながら直線的にのびる口縁部で、口縁部はわずかに肥厚する。提瓶の口縁部の可能性が考えられる。2530は小型の広口壺ないし短頸壺の体部片と思われる。肩部外面には凹線がめぐらされている。

2531～2545は土師器である。

2531～2539は甕である。2531は小型のもので、頸部の縮まりが強く、壺の可能性もある。2532は頸部の縮まりが弱く、屈曲も緩い。口縁部は丸く収められる。2533は頸部の縮まりがやや強く、壺の可能性もある。内外面ともナデやユビオサエによって調整されている。2535は口縁部片で、直線的に外方へ開き、口縁部は面をなす。2536も口縁部片で、外反しながら外方へ開き、口縁部付近で強く短く外反する。口縁部外面にはユビオサエが顕著に残る。2538は口縁部から体部上半にかけての破片である。頸部の縮まりがかなり弱く、屈曲も緩い。鍋の可能性もある。体部外面はハケで調整されている。把手が付くと思われるが、遺存していない。2539は底部である。丸底で、器壁は厚い。

2540は甕である。口縁部片で、口縁部は丸く収められる。口縁部付近には内外面とも強いヨコナデが施されている。

2541・2542は把手である。甕や甗、鍋の把手と思われる。2542はわずかに遺存している体部が内湾することから、甕ないし鍋の把手の可能性が高い。

2543～2545は高坏の脚部と思われる。2543は八字状に開き、脚裾部で強く外方へ屈曲する。脚端部は爪先立ち状になる。カマドから出土した2523と似た形状を呈する。また、脚部上端側面から坏部を成形している。2544は低い脚部である。八字状に外反しながら開く。器壁は薄い。台付腕などの可能性も考えられる。2545は脚端部が面をなし、爪先立ち状になる。

2546は土製品で、土玉である。扁平な球形を呈する。古墳時代前期のもの可能性もある。

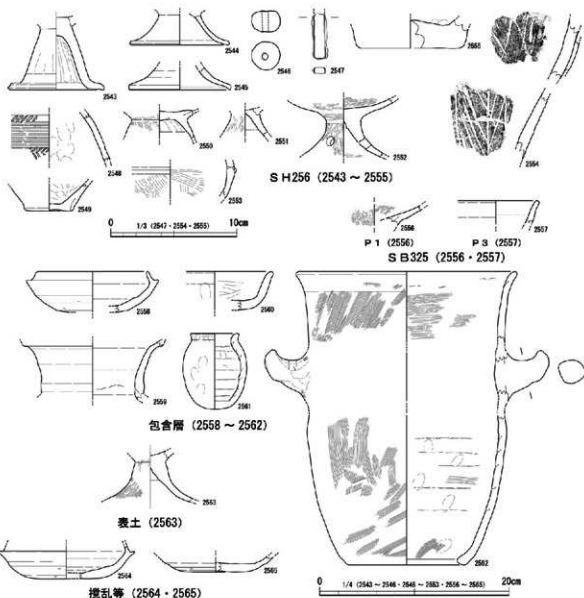
2547は鉄製品である。断面形が長方形を呈する棒状のもので、大部分を欠損するが、一端は元の形状を留めていると思われる。木質の付着などは認められない。ヤリガンナや刀子などの茎の可能性が考えられる。

2548～2553は古墳時代前期の土師器である。2548は壺の体部で、外面に直線文や列点文、矢羽根状文が施されている。2549は壺ないし鉢の底部である。2550はS字状口縁壺の脚台部である。底部内面には粗い砂粒を含む粘土を貼り付けている。脚頂部にも中央付近に粗い砂粒を含む粘土がみられるが、貼り付けられたものではなく、底部内面から貼り付けられたものが脚台部内面に露出しているものと考えられる。2551・2552は高坏である。2551は脚部の破片で、透孔は遺存していない。2552は碗形高坏と思われる。脚部は大きく外反しながら開く。坏部内外面はハケを施した後粗いヨコミガキによって調整されている。2553は手焙形土師の鉢部と思われる。屈曲部外面には低い突帯が貼り付けられている。これらはいずれも混入したと考えられる。

2554・2555は縄文土器である。2554は深鉢の体部片である。2片を図化した。他に同一個体と考えられる破片が複数出土している。外面には縦位に隆帯が貼り付けられており、また、沈線による矢羽根状文が施されている。2555は底部片である。器壁がかなり厚い。これらは混入したと考えられる。

## (2) 掘立柱建物出土遺物

S B 325 (第232圖2556・2557) 2556はP1から出土した。高坏の坏部片と思われる。内外面ともハケを施した後ミガキによって調整されている。古墳



第232図 S H256出土遺物②、S B325、包含層、表土・攪乱等出土遺物 (1/4、1/3)

時代前期のものの可能性が高い。

2557はP3から出土した。甕の口縁部の小片と思われ。口縁端部は丸く収められる。内外面ともヨコナデによって調整されている。

### (3) 包含層出土遺物

**包含層 (第232図2558～2562)** 2558・2559は須恵器である。2558は坏身で、立ち上がりは低く矮小である。口縁端部は丸く収められる。底部外面のロク

ケズリの範囲は広い。2559は広口壺の口縁部である。口縁端部を欠損する。頸部から直立気味に立ち上がり、外反しながら外方へ大きく開く。

2560～2562は土師器である。2560は坏と思われる。底部と口縁部の境は明瞭に屈曲し、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は丸く収められる。器壁は厚い。内外面ともナデやヨコナデによって調整されている。2561は小型の壺である。長胴の体部に短く外反する口縁部が付く。外面にはユビオサエが各所に

認められ、内面には粘土接合痕が顕著に残るなど、全体的に粗雑である。甕のミニチュアの可能性も考えられる。2562は甕である。ほぼ全形が復元できた。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は丸く収められる。体部中位に把手が貼り付けられている。底部は一部しか遺存していないが、おそらく2孔の蒸気孔が開けられていたものと推測される。

#### (4) 表土・攪乱等出土遺物

**表土 (第232図2563)** 2563は土師器高坏の脚部である。ハ字状に大きく外反しながら開く。外面はハケで調整されている。透孔は認められない。

**攪乱等 (第232図2564・2565)** 2564・2565は、排土や攪乱から出土した遺物である。いずれも須恵器坏身と思われる。2564は立ち上がりを欠損する。底部外面のロクロケズリの範囲は広い。2565は底部の破片である。外面にはロクロケズリが施されている。坏蓋の可能性もある。

#### 註

- 1) 厳密な出土位置は特定できないが、注記にカマド支脚に転用されていたとの記載がある。カマドの遺構実測図に示されている縄が、この砥石に該当する可能性が高い。

## 第VII章 鎌倉・室町時代の遺構・遺物

### 第1節 遺構

#### (1) 墓

**S X 174 (第233図)** 第2次調査区西部で検出した火葬土坑である。平面形は長径0.6m、短径0.5mの不整形な円形を呈し、深さは0.04mほどである。底は平坦である。遺物は埋土中から骨片・焼土・炭化物が出土した。骨片は細片のため人骨かどうか確定できなかった。炭化物の放射性炭素年代測定の結果等から(第VIII章第3節)、鎌倉～室町時代の遺構であると考えられる。

**S X 333 (第233図)** 第3次調査区中央部で検出した火葬土坑と考えられる遺構である。S H 331・332と完全に重複している。S H 331・332の埋土と誤認し、S H 331・332と一連で掘削したため、詳細な形状が不明であるが、平面形はおおよそ長径1.9m、短径1.8mの不整形な円形を呈し、深さは0.2mほどである。土層断面で確認する限り、壁面は緩やかに立ち上がる。

遺物は底面付近から山茶碗の破片が出土したが、焼土や炭化物は確認されていない。山茶碗から、鎌倉時代の遺構であると考えられる。

**S X 345 (第233図)** 第3次調査区中央部で検出した火葬土坑である。平面形は長径1.0m、短径0.6mのやや不整形な楕円形を呈し、深さは0.1mほどである。底は比較的平坦で、緩やかに傾斜している。底面に被熱痕は確認されていないが、遺構掘削時に除去してしまった可能性もある。

遺物は埋土中から骨片・炭化材が出土した。また、焼土も確認している。炭化材の放射性炭素年代測定の結果から(第VIII章第4節)、鎌倉時代の遺構であ

ると考えられる。

**S X 351 (第233図)** 第3次調査区中央部で検出した火葬土坑である。S H 346と重複している。平面形は長径1.0m、短径0.7mのやや不整形な楕円形を呈し、深さは0.1mほどである。遺構の南隅にはS H 346の主柱穴がある。底には凹凸があるものの、南北の壁面は緩やかに立ち上がる。埋土には焼土が含まれており、底面の埋土には灰が混じる。底面に被熱痕は確認されなかった。

遺物は埋土中から山皿・人骨・炭化材が出土した。人骨は被熱している頭蓋骨で、この土坑で火葬されたと考えられる。また、頭蓋骨以外の骨は確認できず、焼かれた後に別の場所に持ち去られた可能性がある。年齢や性別が判断できる部位は遺存しなかった。炭化材はマツ属のもので、大きな破片が多数出土している。山皿や炭化材の放射性炭素年代測定の結果から(第VIII章第4節)、鎌倉時代の遺構であると考えられる。

#### (2) 土坑

**S K 179 (第233図)** 第3次調査区東部で検出した土坑である。平面形は長径2.1m以上、短径1.6mのやや不整形な楕円形を呈し、深さは0.1mほどで底は比較的平坦である。

遺物は埋土中から山茶碗や土師器鍋が出土したほか、粘土塊が多量に出土しており、底面付近にも粘土が敷き詰められたような状況で検出された。遺構の性格は不明である。出土遺物から、鎌倉時代の遺構であると考えられる。

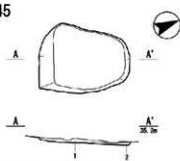
### 第2節 遺物

#### (1) 墓出土遺物

**S X 333 (第234図2566～2572)** 2566・2567は山茶碗である。2566は口縁部片である。口縁端部はわず

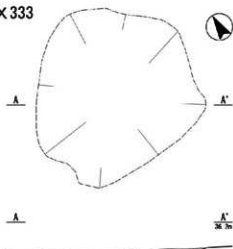
かに外反し、面をなす。内外面ともにクロコナデが施されている。2567は底部片で、底部は厚く、高台は矮小である。内外面ともにクロコナデが施されているが、見込みには不定方向のナデが施されている。

S X 345



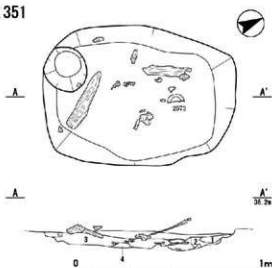
1. 10YR2/3暗褐色シルト～細粒砂
2. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト～細粒砂

S X 333



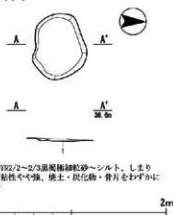
1. 10YR2/1黒褐色細粒砂～シルト, 10YR4/6暗赤砂～シルトを  
フロア材に20%含む, しまり強, 粘性やや強
2. 10YR2/3暗褐色細粒砂～シルト, しまり中, 粘性中
3. 10YR2/2黒褐色細粒砂～シルト, しまり中, 粘性中

S X 351



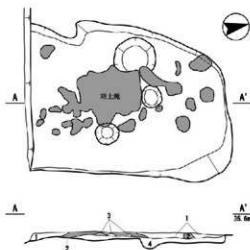
1. 10YR2/2黒褐色シルト～細粒砂, 10YR5/6黄褐色シルト～細粒砂を含む, 黄土・炭化  
物を含む
2. 10YR2/2黒褐色シルト～細粒砂, 炭化物を含む
3. 10YR2/1黒褐色シルト～細粒砂, 炭化物を含む
4. 10YR4/3にぶい黄褐色シルト～細粒砂, 黄土を含む, 炭化物を含む

S X 174



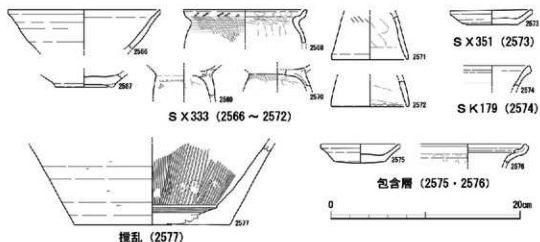
1. 10YR2/2～2/3黒褐色細粒砂～シルト, しまり  
中, 粘性やや強, 黄土・炭化物・骨片をわずかに  
含む

S K 179



1. 10YR2/1黒シルト, しまり中, 粘性強
2. 5YR/3にぶい黄シルト, しまり強,  
粘性強 (粘土質)
3. 10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂, しまり  
中, 粘性やや弱
4. 10YR4/6暗赤砂～シルト, しまりや  
や弱, 粘性やや弱

第233図 S X 174・333・345・351, S K 179 (S X 351は1/20, その他1/40)



第234図 S X 333・351、S K 179、包含層、攪乱等出土遺物 (1/4)

また、底部外面には糸切痕が残る。

2568～2572は古墳時代の土師器で、いずれも甕である。

2568は受口状口縁甕で、体部外面と頸部内面にハケを施している。また口縁部内面にはオサエがみられ、口縁部外面にはハケ状工具による列点文が施されている。二次被熱痕が残る。2569～2571は台付甕の脚台部である。2569の外面にはハケが施されており、脚台部内面にはナデ、体部内面にはハケと思われるものが施されている。2570の外面にはハケとナデが施されており、内面にはナデが施されている。二次被熱痕が残る。2571の内外面にはナデが施されており、外面にはハケと思われるものも施されている。2572はS字状口縁甕の脚台部で、内外面ともにナデが施されており、脚端部を内側に小さく折り返す。二次被熱痕が残る。

**S X 351 (第234図2573)** 2573は山皿である。器壁は厚く、体部は内湾せずまっすぐ立ち上がる。内外面ともにロクロナデが施されており、底部外面には糸切痕が残る。内面には一部、自然釉が付着して

いる。

## (2) 土坑出土遺物

**S K 179 (第234図2574)** 2574は山茶碗の口縁部の小片である。口縁端部はわずかに外反し、面をなす。内外面ともにロクロナデが施されている。

## (3) その他出土遺物

**包含層 (第234図2575・2576)** 2575は山皿である。器壁は厚く、体部は内湾せずまっすぐ立ち上がる。内外面ともにロクロナデが施されており、底部外面には糸切痕が残る。

2576は土師器鍋である。口縁部を内側に大きく折り返し、ナデつけて肥厚させている。また、ススが付着している。

**表土・攪乱等 (第234図2577)** 2577は陶器挿鉢である。第2次調査区北東部の大溝状の攪乱 (S D 296) から出土した。内面には播り目が密につけられている。外面にはロクロケズリが施されている。近世の遺物である。

## 第八章 自然科学分析

### 第1節 分析方法と目的及び試料

#### (1) 分析の方法と目的

小牧南遺跡の第2・3次調査において実施した自然科学分析及び対象試料は、第2表の通りである<sup>1)</sup>。

実施した分析は、大きく分けて放射性炭素年代測定、石器石材分析、樹種・種実同定、骨同定、蛍光X線分析である。

**放射性炭素年代測定** 各遺構の時期を推定するとともに、暦年代の推定値を得るために、複数の遺構から採取された炭化物及び、土器附着物について放射性炭素年代測定を行った。

特に、掘立柱建物については、柱穴内からの出土遺物のほとんどが建物が存在した前後の時期のものであり、遺物から建物の築造時期を推定することが困難な場合が多いため、柱の一部と考えられる植物遺存体の放射性炭素年代測定は重要と思われる。さらに、小牧南遺跡で確認された縄文時代の掘立柱建物は貴重な検出例であり、築造時期について出土遺物と放射性炭素年代測定の結果を併せて検討することは、学術上大きな意義を有する。

**石器石材分析** 石器石材分析は、出土した石器・石製品を対象として、主に蛍光X線分析によって非破壊で行った。

黒曜石及び、ガラス質安山岩に分類されるサヌカイトや下呂石と呼ばれる石材に関しては、産地の同定を試みた。黒曜石については、伊勢地域では長野県の霧ヶ峰周辺で産出したもののほか、東京都の神津島産のものも出土することが知られており<sup>2)</sup>、複数の産地からの流通を想定する必要がある。小牧南遺跡では堅穴建物土中などから黒曜石の微細な剥片が多数出土したことから原料となる石材を入手し加工していた可能性が高く、産地を同定することで、遠隔地からの石器原料の流通に関する情報が得られると考えられる。

ガラス質安山岩については、サヌカイトと下呂石は肉眼である程度の判別が可能であるが、分析によ

てより確実に区別できる。また、サヌカイトは伊勢地域の縄文時代のものほぼ大阪府・奈良県の二上山産のものとみられるが、弥生時代には香川県産のものも存在することが判明しており<sup>3)</sup>、分析によって確実に産地を同定し、二上山産以外のものがないか確認するとともに、石器原料や製品の流通についての情報の収集と蓄積を図る。

SX250出土の垂飾については石材の種類が肉眼では同定が困難であったため、分析によって得られる成分組成等を基に、石材を同定した。

**樹種・種実同定** 縄文時代・古墳時代の堅穴建物や掘立柱建物、炉などから検出された炭化材・種実や、鎌倉時代の火葬土坑から検出された炭化材を対象に、樹種同定を行った。

建物から検出された炭化材の樹種を同定することによって、建物部材としてどのような樹種が選択されていたのかについての検討が可能となる。また、周辺の植生についての手掛かりを得ることもできるものと考えられる。

炉や火葬土坑から検出された炭化材の樹種の同定からは、建物から検出されたものと同様、燃料材としての樹種の選択性や周辺の植生についての情報を得ることが可能である。

また、種実については、植物種を同定することで食用になるものかどうかを判断することができる。それによって、当時の食生活や採集活動についての基礎的な情報が得られると思われる。

**骨同定** 鎌倉時代の火葬土坑と考えられた遺構から出土した人骨と思われる骨片について、動物種と部位の同定を行った。これによって、人骨であることが確認されれば、火葬土坑との判断が妥当性を有することになる。

また、人骨であった場合、残存部位や年齢・性別に関する情報を得ることによって、当時の葬送に関する情報の蓄積につながるものと期待される。

**炭素・窒素安定同位体分析** 出土した縄文土器の中



第2表 自然科学分析試料一覧

遺構	層位等	時代	試料 №	報告 №	種別	分析種類						備考
						C14	石材	樹種	種実	骨	炭素 窒素	
S11191	歩廊	縄文	7	—	種実	1			○			種実100点以上、うち1点を年代測定
		縄文	8	—	種実	1			○			種実3点、うち1点を年代測定
		縄文	3・7~9	194	石器		4					
S11248	下層	縄文	9	—	種実	1			○			種実100点以上、うち1点を年代測定
		縄文	1・2・6・10~17	—	石器		10					
	P1	縄文	21	227	土器付着物	1						
S11301	底面	縄文	40	—	石器		1					
S11335	Ⅱ	縄文	PLD-33719	—	炭化材	1						
S11355	底面	縄文	41	344	石器		1					
	石圍Ⅱ	縄文	PLD-33720	—	炭化材	1						
		縄文	42	—	石器		1					
S11360	Ⅱ	縄文	PLD-33721・33722	—	炭化材	2						
	P1	縄文	PLD-33717・33718	—	炭化材	2						
S B276	P5 Ⅱ形	縄文	14	—	炭化材	1						
	P5 柱瓶	縄文	15	—	炭化材	1						
	P7 柱瓶	縄文	18	365	石器		1					
		縄文		390	土器付着物						1	
S B285	P4 上層	縄文	5	385	石器		1					
S B287	P3	縄文	16	—	炭化材	1						
S B292	P1	縄文	17	—	炭化材	1						
	P2	縄文	18	—	炭化材	1						
S X149	縄文	11	—	炭化材	1		(3)					
S X174	縄文	20	—	炭化材	1							
S X250	縄文	12	—	炭化材・種実	1		(3)				炭化材3点、種実1点含まれるが同定せず、炭化材のうち1点を年代測定	
	縄文	19	442	石製品		1					垂飾	
S X251	縄文	13	—	炭化材	1						2点、うち1点を年代測定	
S X279	縄文	PLD-21562	444	土器付着物	1				1		内面付着炭化物	
S F259	下層	縄文	1	—	炭化材	1		5(3)				
S F139	縄文	10	—	炭化材	1		(1)				S1147Ⅱ	
S K286	縄文	22	408	土器付着物	1						S B287柱穴	
S K358	縄文	PLD-33723~33726	—	炭化材	4							
検出中	縄文	6	654	石器		1						
S11143	古墳	古墳	3	—	土器付着物						1	
S11175	古墳	古墳	846	—	土器付着物						1	
S11177	古墳	古墳	859	—	土器付着物						1	
S11189	古墳	古墳	947	—	土器付着物						1	
S11201	炭土層	古墳	2	—	炭化材		4					
S11204	古墳	古墳	3	—	炭化材		9					
S11205	古墳	古墳	4	—	炭化材		13					
S11214	古墳	古墳	5	—	炭化材		6					
	古墳	古墳	1231	—	土器付着物						1	
S11216	古墳	古墳	6	—	炭化材		15					
S11223	古墳	古墳	1405	—	土器付着物						1	
S11169/324	古墳	古墳	687	—	土器付着物						1	
S11338	古墳	古墳	1888	—	土器付着物						1	
S11348	古墳	古墳	2272	—	土器付着物						1	
S11349	古墳	PLD-33728~33743	—	炭化材・炭化草本		16	16				うち炭化草本1点	
F-38P12	古墳	古墳	19	—	炭化材	1						
S X345	中世	PLD-33727	—	炭化材	1							
S X351	中世	PLD-33744~33748	—	炭化材	5							
	中世	—	—	炭化材		5						
	中世	1~7	—	骨				7				

※種実同定は、複数個体をまとめて一式として分析委託を行っているため、1試料に複数個体が含まれている。  
 ※樹種欄の () 内は、樹種同定に供した試料とは別に放射性炭素年代測定に伴って樹種を同定したものの数を示す。

には、少数ながら内面に調理に伴うコゲとみられる炭化物が付着するものが認められた。特に埋設土器 S X 279 に使用されていた深鉢には炭化物の付着が著しく認められ、その分析によって当該期の食生活などに関する情報を得られる可能性が高いと考えられた。

そこで、分析によって炭化物の由来となった動植物に関する情報を得ることができる、炭素・窒素安定同位体分析を実施することとした。伊勢地域においてはこうした分析事例は少なく、また、貝塚が形成されない当該地域では縄文時代の食生活を推定しうる有機質の遺物の検出例も乏しいため、得られる情報は貴重である。

**蛍光 X 線分析** 出土した土器の中に、赤色顔料が塗布されたものや、赤色顔料を入れたと考えられるものが多数認められた。赤色顔料には水銀朱やベンガラなど複数の種類があるため、蛍光 X 線分析により、付着ないし塗布された赤色顔料の種類を同定した。これによって、土器の装飾技法や赤色顔料の流通・消費に関する情報が得られると考えられる。

## (2) 試料の採取と取り扱い

炭化物や骨等の試料は、基本的に現場において調査担当者が採取したが、赤色顔料以外の土器付着物については現場から持ち帰り水洗した土器片を分析に供し、分析者が試料を採取している。

現場での試料採取にあたっては発掘調査で使

っていたスcoop等を用いた。現場で採取した試料は、アルミホイルに包んだ上でビニール袋に入れて持ち帰り、カビ防止のため一部は冷蔵庫に入れて保管した。保管の間、確認等のため数回開封しているが、洗浄などは行っていない。

種実については、微細な剥片を回収するために持ち帰った遺構埋土の水洗選別に際して検出されたものを試料とした。水洗選別後は乾燥させ、アルミホイルに包んだ上でビニール袋やタッパーに入れ、冷蔵庫内で保管した。

また、蛍光 X 線分析に供した赤色顔料が付着あるいは塗布された土器片は、他の遺物とともに水洗して保管していたものの中から実測・報告のためにピックアップしたものである。なお、水洗にあたっては赤色顔料を洗い落とさないよう留意したため、器面の土壌が十分に除去できていない部分もある。

## 註

- 1) 分析は遺構や遺物の整理前に行っているため、分析時の遺構名は仮である。本報告に分析報告を掲載するにあたり、できる限り遺構名は報告時のものに修正したが、各試料の出土遺構や報告Noとの対応については第2表を参照されたい。
- 2) 三重石器石材研究会2010「三重県出土の黒曜石とその原産地推定」『立命館大学考古学論集V』立命館大学考古学論集刊行会
- 3) 鈴鹿市考古博物館2010『八重垣神社遺跡(第6次)』

## 第2節 放射性炭素年代測定 (S X 279)

### (1) 対象試料と分析方法

埋設土器 S X 279 に使用されていた縄文土器深鉢の内面に付着した炭化物について、加速器質量分析法 (AMS法) による放射性炭素年代測定を行った。分析の実施者はパレオ・ラボの AMS 年代測定グループ<sup>1)</sup> である。

分析対象とした遺物は内面に炭化物が付着した縄文土器片で、一次調査トレンチ2において出土したものである。胴部下部の破片と底部の破片とがあるが、分析試料とした炭化物は胴部下部の破片の内面から採取された (PLD-21562)。

試料は調製後、加速器質量分析計 (パレオ・ラボ、コンパクト AMS : NEC 製 I.5SDH) を用いて測定している。調製データは第3表に示した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出している。

### (2) 分析結果

S X 279の内面に付着した炭化物の測定結果は、<sup>14</sup>C年代が3985±20 BP、2σ暦年代範囲 (確率95.4%) が2570-2514 cal BC (57.8%) および2501-2468 cal BC (37.6%) であった。

分析結果については第4表にまとめている。表中

### 第3表 測定試料及び処理

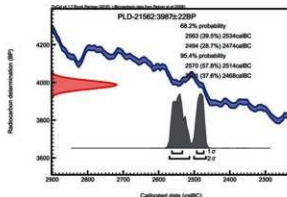
測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-21562	試料No.:資料2 遺跡名:小牧南遺跡 調査区:一次調査 位置:T2(中央)	種類:土器付着炭化物 部位:胴下部内面 状態:dry	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.1N, 塩酸:1.2N)

### 第4表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-21562 試料No. 資料2	-24.15 $\pm$ 0.17	3987 $\pm$ 22	3985 $\pm$ 20	2563BC (39.5%) 2534BC 2494BC (28.7%) 2474BC	2570BC (57.8%) 2514BC 2501BC (37.6%) 2468BC

では、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比 ( $\delta^{13}\text{C}$ )、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した $^{14}\text{C}$ 年代を示している。 $^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP) の算出には、 $^{14}\text{C}$ の半減期としてLibbyの半減期5568年が使用されている。また、 $^{14}\text{C}$ 年代の暦年較正はOxCal4.1 (較正曲線データ: IntCal09) を用いて行っている。

第235図は暦年較正結果である。暦年較正に用いられた年代値は下一桁が丸められていないので、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うことが可能である。1 $\sigma$  暦年代範囲は、OxCal1の確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 $\sigma$  暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。() 内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味している。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。



第235図 暦年較正結果

なお、同じ試料について炭素・窒素安定同位体比と炭素窒素比に基づく、起源物質の推定にかかる分析も行っている (本章第11節参照)。

#### 注

- 1) 分析者は伊藤茂・安昭彦・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林絰一・Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎の各氏。本報告への掲載に際し文章を再構成した。

## 第3節 放射性炭素年代測定及び樹種・種実同定 (第2次調査)

小牧南遺跡の自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

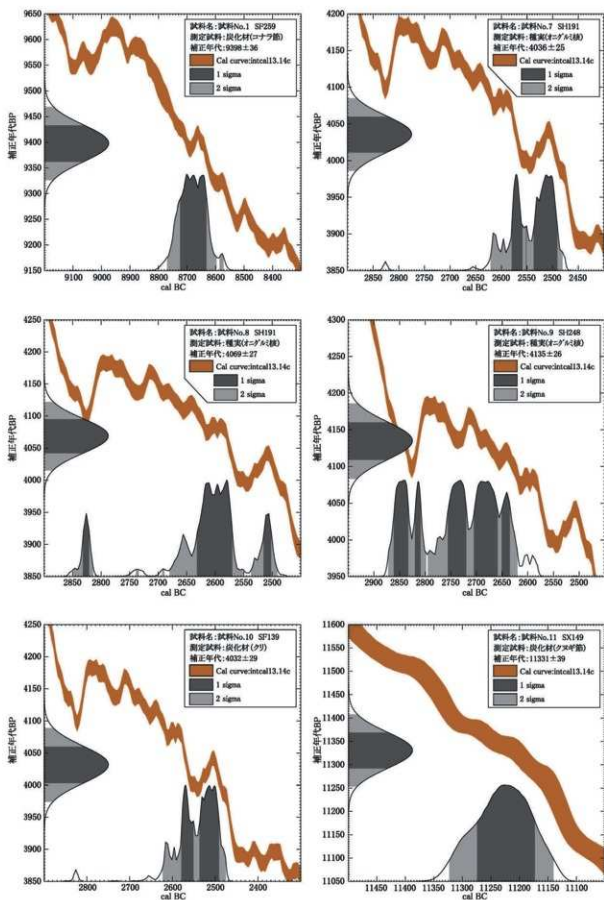
### (1) はじめに

小牧南遺跡は、朝明川右岸の河岸段丘上に位置し、発掘調査により縄文時代、古墳時代、飛鳥時代、鎌倉時代の遺構が検出されている。今回の分析調査では、遺構の年代に関する情報を得ることを目的とし

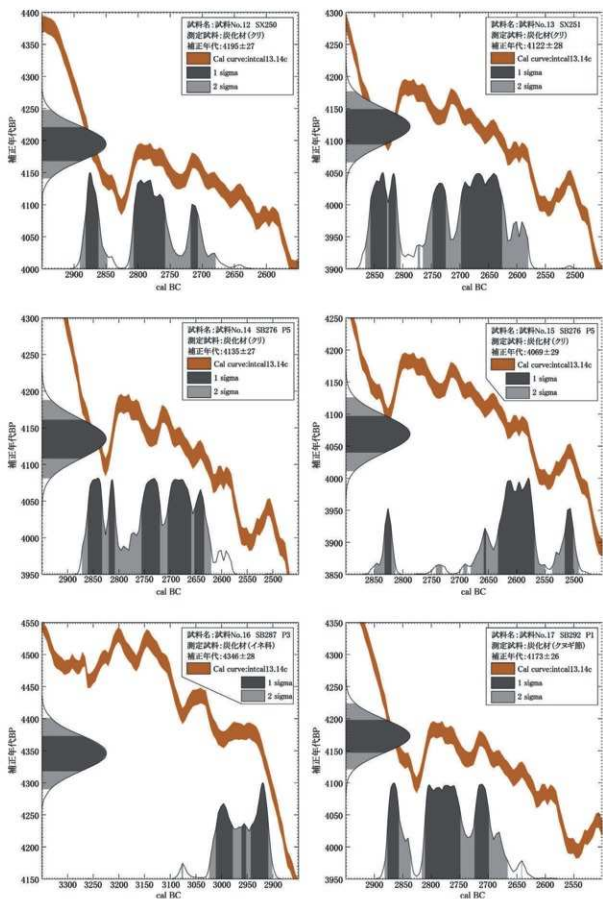
て、埋土中の炭化植物遺体 (材・種実) および土器付着物について放射性炭素年代測定を実施する。また、当時の植物利用に関する情報を得ることを目的に炭化材の樹種同定、および炭化種実の種実同定を実施する。

### (2) 放射性炭素年代測定

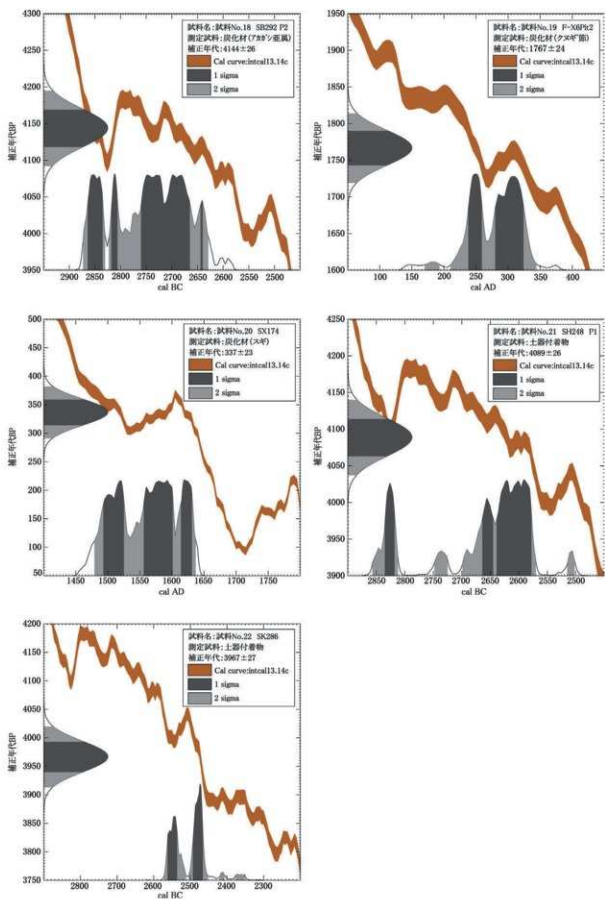
#### ①試料



第236図 暦年較正結果①



第237圖 曆年較正結果②



第238圖 暦年較正結果③

第5表 年代測定試料一覧

試料No.	時代	遺構	層位	取上No.等	状態	状態	樹種	年代測定実施状況	備考
1	縄文	SF259	下層	炭1	炭化材	土壌塊のみ	—	—	—
				炭2		破片(樹皮有)	コナラ節	年代測定実施	8年分
7	縄文	SH191		遺物取上	種実	破片(樹皮無)	コナラ節orクリ	—	—
				遺物取上	不明	—	—	—	—
8	縄文	SH191 8号跡		3粒	種実	破片(樹皮無)	オニグルミ(核)	年代測定実施	1片
9	縄文	SH248	下層	88粒	種実	破片(樹皮無)	オニグルミ(核)	年代測定実施	1片
				61粒	種実?	—	—	—	—
10	縄文	SF139			炭化材	破片(樹皮無)	クリ	年代測定実施	3~4年分
11	縄文	SX149			炭化材	柾目状(樹皮無)	クスギ節	年代測定実施	5~6年分
						破片(樹皮無)	クリ	—	—
						破片	タケ垂料	—	—
12	縄文	SX250			炭化材	破片(樹皮無)	クリ	年代測定実施	4~5年分
						破片(樹皮無)	クスギ節	—	—
						破片(樹皮無)	エノキ風	—	—
						種実	核の破片	オニグルミ?	—
13	縄文	SX251			炭化材	破片(樹皮無)	クリ	年代測定実施	4~5年分
						破片(樹皮無)	コナラ風	—	—
14	縄文	SR276 P5	掘形埋土		炭化材	破片(樹皮無)	クリ	年代測定実施	4~5年分
15	縄文	SR276 P5	柱礎跡		炭化材	破片(樹皮無)	クリ	年代測定実施	4~5年分
16	縄文	SR287 P3			炭化材	丸木状	イネ科	年代測定実施	—
17	縄文	SR292 P1	柱風の掘形 下層		炭化材	破片(樹皮無)	クリ	—	3~4年分
						破片(樹皮無)	クスギ節	年代測定実施	5年分
18	縄文	SR292 P2	上層		炭化材	破片(樹皮無)	アカガシ逆風	年代測定実施	3~4年分
19	不明	F-36P12			炭化材	破片(樹皮無)	クスギ節	年代測定実施	6年分
20	不明	SX174			炭化材	板目板状(樹皮有)	スギ	年代測定実施	最外1年分
						破片(樹皮無)	マツ風塊種管束逆風	—	—
						破片(樹皮無)	クマシデ風イヌシダ節	—	—
						破片(樹皮無)	クスギ節	—	—
						破片(樹皮無)	コナラ節	—	—
						破片(樹皮無)	クリ	—	—
21	縄文	SH248 P1		227	土器	土器外面に付着	炭質物	年代測定実施	付着炭質物
22	縄文	SK286			土器	土器外面に付着	炭質物	年代測定実施	付着炭質物

試料は、各遺構より出土した炭化材12点、炭化種実3点、土器付着物2点の合計17点(試料No.1・7~22)である(第5表)。

試料No.1は、SF259下層から出土した炭化材で、炭1と炭2があるが、炭1は土壌塊のみで炭化材は認められない。炭2には多数の破片がある。この中から、樹皮の残る破片1片を選択した。最外年輪を含む外側8年分が残っており、全量を測定試料とした。

試料No.7は、炉跡から出土した炭化物で、種実(106粒)と不明(37粒)の2種類がある。年代測定は、種実を選択する。いずれも小破片であり、観察をした上で、1片で測定可能な大きさの破片を測定試料として選択した。

試料No.8は、炉跡から出土した種実の破片3片である。観察をした上で、1片で測定可能な大きさの破片を測定試料として選択した。

試料No.9は、SH248から出土した種実および種

実?の破片である。観察をした上で、種実の中から1片で測定可能な大きさの破片を測定試料として選択した。

試料No.10は、SF139から出土した炭化材である。樹皮のない破片(3~4年分)であり、全量を測定試料とした。

試料No.11は、SX149から出土した炭化材である。柾目板状の破片と不定形の破片がある。いずれも樹皮は認められない。柾目板状の破片を測定試料として選択した。5~6年分の年輪があり、全量を測定試料とした。

試料No.12は、SX250から出土した炭化物で、炭化材を主体として、種実の破片が混じる。炭化材はいずれも樹皮は認められない。この中から、4~5年分の年輪が残る炭化材片を測定試料として選択した。

試料No.13は、SX251から出土した炭化材で樹種の異なる2片が認められ、大きい方の炭化材片を測

定試料として選択した。樹皮の無い4～5年分の年輪が残る破片であり、全量を測定試料とした。

試料№14は、SB276P5掘形理土から出土した炭化材である。4～5年分の年輪が残る1片があり、全量を測定試料とした。

試料№15は、SB276P5柱根跡から出土した炭化材である。樹皮のない不定形の破片(4～5年分)であり、全量を測定試料とした。

試料№16は、SB287P3から出土した炭化材である。直径8mmの中空の丸木状を呈しており、全量を測定試料とした。

試料№17は、SB292P1から出土した炭化材である。いずれも樹皮のない2片があるが、予備調査では樹種が異なることから、より大きい破片(5年分)を測定試料として選択した。

試料№18は、SB292P2から出土した炭化材である。樹皮の無い3～4年分の破片で、全量を測定試料とした。

試料№19は、F-X6Pit2から出土した炭化材である。多数の破片がある中から、最も大きい破片1片を選択した。樹皮の無い6年分の破片であり、全量を測定試料とした。

試料№20は、SX174から出土した炭化材である。多数の破片があり、予備調査で少なくとも6種類が混在する。この中から、樹皮の残る破片を選択した。最外年輪1年分の破片であり、樹皮を外した全量を測定試料とした。

試料№21はSH248P1から出土した土器、試料№22はSK286から出土した土器である。いずれも土器の外面に炭質物(スス)が付着しており、炭質物を削りとして測定試料とした。

## ②分析方法

土壌や根等の目的物と異なる年代を持つものが試料に付着している場合、これらをビンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。その後HClによる炭酸塩等酸可溶成分の除去、NaOHによる腐植酸等アルカリ可溶成分の除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。アルカリ濃度が1N未満の場合にはAmAと表記している。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)

と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500°C(30分)850°C(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用して、真空ラインにてCO<sub>2</sub>を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO<sub>2</sub>と鉄・木素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650°Cで10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。

測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした<sup>13</sup>C-AMS専用装置(NEC Pelletron 95DH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}\text{C}$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1,950年を基点とした年代(y.B.P.)であり、誤差は標準偏差(One Sigma: 68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0.1(Copyright 1986-2014 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の<sup>13</sup>C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>13</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い(<sup>13</sup>Cの半減期5,730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算や再検討に対応するため、1年単位で表している。

暦年較正結果は、測定誤差 $\sigma$ 、 $2\sigma$ ( $\sigma$ は統計的に真の値が68%、 $2\sigma$ は真の値が95%の確率で存在する範囲)双方の値を示す。また、表中の相対比とは、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

## ③結果



放射性炭素年代測定結果および暦年校正結果を第6表、第236～238図に示す。以下に各試料別に年代測定結果について記載する。記載する年代値は同位体効果の補正を行った補正年代値と暦年校正年代(測定誤差2σの確率1位の値)である。また、考古相対年代と<sup>14</sup>C年代の比較は谷口(2001)、工藤(2012)、西本編(2006・2007)などを参考に行っている。

試料№1: 縄文時代と推定されるSF259下層より出土した樹皮があるコナラ節の炭化材片。最外年輪より8年分の材の年代値は9400±40y. B.P.、暦年校正年代はcal BC 8769-8596を示し、縄文時代早期を示している。

試料№7: 縄文時代中期のSH191より出土したオニグルミの核の破片。年代値は、4040±30y. B.P.、cal BC 2620-2480を示し、縄文時代中期後半を示している。出土遺物の時代性とも同調的な結果といえる。

試料№8: 縄文時代中期のSH191の伊跡より出土したオニグルミの核の破片。年代値は4070±30y. B.P.、暦年校正年代はcal BC 2679-2551を示し、縄文時代中期後半を示している。また、本試料は上記の試料№. 7と同一遺構からの出土で、得られた年代値も誤差範囲内で一致している。

試料№9: 縄文時代中期のSH248下層より出土したオニグルミの核の破片。年代値は4140±30y. B.P.、暦年校正年代はcal BC 2795-2620を示し、縄文時代中期後半を示している。出土遺物とも同調的な結果といえる。

試料№10: 縄文時代中期のSF139の埋壺炉より出土したクリの炭化材片。年代値は4030±30y. B.P.、暦年校正年代はcal BC 2622-2474を示し、縄文時代中期後半を示している。出土遺物とも同調的な結果といえる。

試料№11: 縄文時代中期のSX149の横位の深鉢内より出土したクヌギ節の炭化材片。年代値は11330±40y. B.P.、暦年校正年代はcal BC 11322-11139を示し、縄文時代草創期を示している。遺物の時代とは異なる年代を示しており、埋没後に何らかの過程を経て古い炭化材が壺内に混入した可能性がある。

試料№12: 縄文時代中期のSX250の勾玉が出土

した埋壺内のクリの炭化材片。年代値は4200±30y. B.P.、暦年校正年代はcal BC 2813-2679を示し、縄文時代中期後半を示している。出土遺物とも同調的な結果といえる。

試料№13: 縄文時代中期のSX251の埋設土器から出土したクリの炭化材片。年代値は4120±30y. B.P.、暦年校正年代はcal BC 2764-2580を示し、縄文時代中期後半を示している。出土遺物とも同調的な結果といえる。また、本遺構は上記の試料№12が採取されたSX250に切られている遺構である。年代値は、層位的に逆転しているが、ほぼ近似する値を示しており、炭化材の古木効果を考慮すると、同調的な結果といえる。

試料№14: 縄文時代中期のSB276のP5掘形埋土から出土したクリの炭化材片。年代値は4140±30y. B.P.、暦年校正年代はcal BC 2872-2620を示し、縄文時代中期後半を示している。出土遺物とも同調的な結果といえる。

試料№15: 縄文時代中期のSB276のP5柱根跡から出土したクリの炭化材片。年代値は4070±30y. B.P.、暦年校正年代はcal BC 2680-2550を示した。縄文時代中期後半を示している。上記の試料№14のP5掘形埋土の年代値とも誤差範囲内で一致しており、出土遺物とも同調的な結果といえる。

試料№16: 縄文時代中期のSB287のP3から出土したイネ科の炭化材片。年代値は4350±30y. B.P.、暦年校正年代はcal BC 3024-2900を示し、縄文時代中期中葉～後半を示している。

試料№17: 縄文時代中期のSB292のP1掘形埋土下層から出土したクヌギ節の炭化材片。年代値は4170±30y. B.P.、暦年校正年代はcal BC 2817-2666を示し、縄文時代中期後半を示している。

試料№18: 縄文時代中期のSB292のP2上層から出土したクヌギ節の炭化材片。年代値は4140±30y. B.P.、暦年校正年代はcal BC 2823-2625を示した。縄文時代中期後半を示しており、上記の同じ遺構のP1掘形埋土下層とも誤差範囲内で一致する値を示している。

試料№19: 時期不明のF-X6Pit2より出土したクヌギ節の炭化材片。年代値は1770±20y. B.P.、暦年校正年代はcal AD 211-345を示しており、古墳時代前

第 6 表 放射性炭素年代測定結果

試料 No. 遺構名	種類	処理 方法	測定年代 y. B. P.	$\delta^{13}C$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) y. B. P.	暦年較正結果				Code No.
						誤差	cal BC/AD	cal BP	相対比	
No.1 SF259	炭化材	AsA	9,360±30	-22.61 ± 0.30	9,400±40 (9,398±36)	0	cal BC 8,723 - cal BC 8,631	cal BP 10,672 - 10,580	1.000	IAAA- 140763
						2σ	cal BC 8,769 - cal BC 8,596 cal BC 8,866 - cal BC 8,572	cal BP 10,718 - 10,545 cal BP 10,535 - 10,521	0.981 0.919	
No.7 SH191	種実	AAA	4,060±20	-26.60 ± 0.48	4,040±30 (4,036±25)	0	cal BC 2,580 - cal BC 2,558 cal BC 2,552 - cal BC 2,551	cal BP 4,529 - 4,507 cal BP 4,501 - 4,500	0.295 0.009	IAAA- 140764
						2σ	cal BC 2,536 - cal BC 2,491 cal BC 2,620 - cal BC 2,480	cal BP 4,485 - 4,440 cal BP 4,569 - 4,429	0.697 1.000	
No.8 SH191	種実	AAA	4,120±20	-27.90 ± 0.52	4,070±30 (4,069±27)	0	cal BC 2,832 - cal BC 2,820 cal BC 2,632 - cal BC 2,569 cal BC 2,515 - cal BC 2,501	cal BP 4,781 - 4,769 cal BP 4,581 - 4,518 cal BP 4,464 - 4,450	0.092 <b>0.786</b> 0.122	IAAA- 140765
						2σ	cal BC 2,849 - cal BC 2,813 cal BC 2,739 - cal BC 2,734 cal BC 2,693 - cal BC 2,688 cal BC 2,679 - cal BC 2,551 cal BC 2,536 - cal BC 2,491	cal BP 4,798 - 4,762 cal BP 4,688 - 4,683 cal BP 4,642 - 4,637 cal BP 4,628 - 4,500 cal BP 4,485 - 4,440	0.108 0.004 0.003 0.723 0.161	
No.9 SH248	種実	AAA	4,200±30	-28.83 ± 0.56	4,140±30 (4,135±26)	0	cal BC 2,860 - cal BC 2,832 cal BC 2,819 - cal BC 2,808 cal BC 2,755 - cal BC 2,720 cal BC 2,704 - cal BC 2,659 cal BC 2,651 - cal BC 2,634	cal BP 4,809 - 4,781 cal BP 4,768 - 4,757 cal BP 4,704 - 4,669 cal BP 4,653 - 4,608 cal BP 4,600 - 4,583	0.210 0.077 0.265 0.338 <b>0.109</b>	IAAA- 140766
						2σ	cal BC 2,872 - cal BC 2,797 cal BC 2,785 - cal BC 2,620	cal BP 4,821 - 4,746 cal BP 4,744 - 4,569	0.703	
No.10 SF139	炭化材	AAA	4,060±30	-26.47 ± 0.52	4,030±30 (4,032±29)	0	cal BC 2,578 - cal BC 2,550 cal BC 2,537 - cal BC 2,490	cal BP 4,527 - 4,499 cal BP 4,486 - 4,439	0.351 0.649	IAAA- 140767
						2σ	cal BC 2,622 - cal BC 2,474	cal BP 4,571 - 4,423	1.000	
No.11 SX149	炭化材	AAA	11,370±40	-27.33 ± 0.54	11,330±40 (11,331±39)	0	cal BC 11,274 - cal BC 11,172	cal BP 13,223 - 13,121	1.000	IAAA- 140768
						2σ	cal BC 11,322 - cal BC 11,139 cal BC 2,882 - cal BC 2,862 cal BC 2,807 - cal BC 2,757 cal BC 2,718 - cal BC 2,707	cal BP 13,274 - 13,088 cal BP 4,831 - 4,811 cal BP 4,756 - 4,706 cal BP 4,667 - 4,656	1.000 0.257 0.634 0.109	
No.12 SX250	炭化材	AAA	4,220±30	-26.47 ± 0.50	4,200±30 (4,195±27)	0	cal BC 2,890 - cal BC 2,848 cal BC 2,813 - cal BC 2,679	cal BP 4,839 - 4,797 cal BP 4,762 - 4,628	0.259 0.741	IAAA- 140769
						2σ	cal BC 2,856 - cal BC 2,827 cal BC 2,825 - cal BC 2,811 cal BC 2,748 - cal BC 2,724 cal BC 2,698 - cal BC 2,625	cal BP 4,805 - 4,776 cal BP 4,774 - 4,760 cal BP 4,697 - 4,673 cal BP 4,647 - 4,574	0.298 0.094 0.158 0.541	
No.13 SX251	炭化材	AAA	4,180±30	-28.39 ± 0.40	4,120±30 (4,122±28)	0	cal BC 2,866 - cal BC 2,804 cal BC 2,774 - cal BC 2,769 cal BC 2,764 - cal BC 2,580	cal BP 4,815 - 4,753 cal BP 4,723 - 4,718 cal BP 4,713 - 4,529	0.272 0.007 0.721	IAAA- 140770
						2σ	cal BC 2,960 - cal BC 2,832 cal BC 2,820 - cal BC 2,808 cal BC 2,756 - cal BC 2,719 cal BC 2,705 - cal BC 2,658 cal BC 2,652 - cal BC 2,633	cal BP 4,809 - 4,781 cal BP 4,769 - 4,757 cal BP 4,705 - 4,668 cal BP 4,654 - 4,607 cal BP 4,601 - 4,582	0.206 0.082 0.260 0.332 0.119	
No.14 SH276 P5	炭化材	AsA	4,200±30	-28.87 ± 0.36	4,140±30 (4,135±27)	0	cal BC 2,872 - cal BC 2,620 cal BC 2,832 - cal BC 2,820 cal BC 2,658 - cal BC 2,653 cal BC 2,633 - cal BC 2,569 cal BC 2,516 - cal BC 2,500	cal BP 4,821 - 4,569 cal BP 4,781 - 4,769 cal BP 4,607 - 4,602 cal BP 4,582 - 4,518 cal BP 4,465 - 4,449	1.000 0.102 0.025 0.747 0.125	IAAA- 140771
						2σ	cal BC 2,872 - cal BC 2,620 cal BC 2,832 - cal BC 2,820 cal BC 2,658 - cal BC 2,653 cal BC 2,633 - cal BC 2,569 cal BC 2,516 - cal BC 2,500	cal BP 4,821 - 4,569 cal BP 4,781 - 4,769 cal BP 4,607 - 4,602 cal BP 4,582 - 4,518 cal BP 4,465 - 4,449	1.000 0.102 0.025 0.747 0.125	
No.15 SH276 P5	炭化材	AsA	4,130±30	-28.41 ± 0.41	4,070±30 (4,069±29)	0	cal BC 2,850 - cal BC 2,813 cal BC 2,742 - cal BC 2,731 cal BC 2,694 - cal BC 2,686 cal BC 2,680 - cal BC 2,550 cal BC 2,537 - cal BC 2,490	cal BP 4,799 - 4,762 cal BP 4,691 - 4,680 cal BP 4,643 - 4,635 cal BP 4,629 - 4,499 cal BP 4,486 - 4,439	0.115 0.010 0.007 0.166	IAAA- 140772
						2σ	cal BC 3,010 - cal BC 2,978 cal BC 2,960 - cal BC 2,951 cal BC 2,942 - cal BC 2,908	cal BP 4,959 - 4,927 cal BP 4,909 - 4,900 cal BP 4,891 - 4,857	0.421 0.094 0.085	
No.16 SH292 P3	炭化材	AAA	4,110±30	-10.77 ± 0.32	4,350±30 (4,346±28)	0	cal BC 3,077 - cal BC 3,074 cal BC 3,024 - cal BC 2,900	cal BP 5,026 - 5,023 cal BP 4,973 - 4,849	0.486 0.184	IAAA- 140773
						2σ	cal BC 2,876 - cal BC 2,856 cal BC 2,811 - cal BC 2,748 cal BC 2,724 - cal BC 2,698 cal BC 2,882 - cal BC 2,835 cal BC 2,817 - cal BC 2,666 cal BC 2,642 - cal BC 2,641	cal BP 4,825 - 4,805 cal BP 4,760 - 4,697 cal BP 4,673 - 4,647 cal BP 4,834 - 4,784 cal BP 4,766 - 4,615 cal BP 4,591 - 4,590	0.990 0.593 0.223 0.211 0.788 0.001	

第6表 放射性炭素年代測定結果

試料No. 遺構名	種類	処理方法	測定年代 y. B. P.	$\delta^{13}C$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) y. B. P.	暦年較正結果				Code No.	
						誤差	cal BC/AD		cal BP		相対比
No.18 SH292 P2	炭化材	AAA	4,200±30	-28.08 ± 0.30	4,140±30 (4,144±26)	0	cal BC 2,864 - cal BC 2,834	cal BP 4,813 - 4,783	0.213	IAAA- 140775	
							cal BC 2,817 - cal BC 2,806	cal BP 4,766 - 4,755	0.182		
							cal BC 2,760 - cal BC 2,665	cal BP 4,709 - 4,614	0.683		
							cal BC 2,643 - cal BC 2,639	cal BP 4,592 - 4,588	0.022		
							2σ	cal BC 2,873 - cal BC 2,829	cal BP 4,822 - 4,778		0.192
							cal BC 2,823 - cal BC 2,625	cal BP 4,772 - 4,574	0.807		
No.19 F-36 P1x2	炭化材	AAA	1,810±20	-27.41 ± 0.37	1,770±20 (1,767±24)	0	cal AD 238 - cal AD 259	cal BP 1,712 - 1,691	0.336	IAAA- 140776	
							cal AD 280 - cal AD 324	cal BP 1,670 - 1,626	0.664		
							cal AD 170 - cal AD 194	cal BP 1,780 - 1,756	0.022		
							cal AD 211 - cal AD 345	cal BP 1,739 - 1,605	0.978		
							2σ	cal AD 1,494 - cal AD 1,525	cal BP 456 - 425		0.324
							cal AD 1,566 - cal AD 1,602	cal BP 394 - 348	0.489		
No.20 SX174	炭化材	AAA	380±20	-27.56 ± 0.52	340±20 (337±23)	0	cal AD 1,614 - cal AD 1,632	cal BP 336 - 318	0.187	IAAA- 140777	
							cal AD 1,479 - cal AD 1,637	cal BP 471 - 313	1.000		
							cal BC 2,834 - cal BC 2,817	cal BP 4,783 - 4,766	0.171		
							cal BC 2,664 - cal BC 2,645	cal BP 4,613 - 4,594	0.163		
							cal BC 2,639 - cal BC 2,578	cal BP 4,588 - 4,527	0.666		
							2σ	cal BC 2,856 - cal BC 2,811	cal BP 4,805 - 4,760		0.194
No.21 SH248 P1	土器付着 炭質物	AaA	4,150±30	-28.67 ± 0.36	4,090±30 (4,089±26)	0	cal BC 2,748 - cal BC 2,724	cal BP 4,697 - 4,673	0.045	IAAA- 140778	
							cal BC 2,698 - cal BC 2,570	cal BP 4,647 - 4,519	0.738		
							cal BC 2,514 - cal BC 2,501	cal BP 4,463 - 4,450	0.024		
							2σ	cal BC 2,562 - cal BC 2,535	cal BP 4,511 - 4,484		0.410
							cal BC 2,492 - cal BC 2,465	cal BP 4,441 - 4,414	0.590		
							cal BC 2,572 - cal BC 2,542	cal BP 4,521 - 4,461	0.439		
No.22 SK286	土器付着 炭質物	AaA	4,010±30	-27.50 ± 0.48	3,970±30 (3,967±27)	0	cal BC 2,505 - cal BC 2,452	cal BP 4,454 - 4,401	0.514	IAAA- 140779	
							cal BC 2,419 - cal BC 2,406	cal BP 4,368 - 4,355	0.017		
							cal BC 2,377 - cal BC 2,350	cal BP 4,326 - 4,299	0.030		
							2σ	cal BC 2,572 - cal BC 2,542	cal BP 4,521 - 4,461		0.439
							cal BC 2,505 - cal BC 2,452	cal BP 4,454 - 4,401	0.514		
							cal BC 2,419 - cal BC 2,406	cal BP 4,368 - 4,355	0.017		

- 1) 処理方法のAAAは、酸処理-アルカリ処理-酸処理を示す。アルカリ濃度が不足の場合にはAaAと表記している。
- 2) 年代値の算出には、Libbyの半減期5668年を使用した。
- 3) y. B. P. 年代値は、1960年を基点として何年前であるかを示す。
- 4) 付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$  (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。
- 5) 暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM 2.0 (Copyright 1996-2010 M Stuiver and P.J. Reimer) を使用した。
- 6) 暦年の計算には、補正年代に $\sigma$ で暦年較正用年代と示した、一桁目を丸める前の値を使用している。
- 7) 年代値は、一桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は一桁目を丸めていない。
- 8) 統計的に真の値が入る確率は $\sigma$ は68.3%、 $2\sigma$ は95.4%である。
- 9) 相対比は、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

期～中期前半の年代を示している。調査区では古墳時代前期の遺構が確認されていることから、本遺構は当該期の遺構の可能性が高い。

試料No.20：時期不明のSX174のスキ炭化材の樹皮直下の最外年輪。年代値は340±20y. B. P.、暦年較正年代はcal AD 1479-1637を示した。15世紀後半～17世紀前半の年代を示している。

試料No.21：縄文時代中期のSH248のP1より出土した土器の付着炭質物。年代値は4090±30y. B. P.、暦年較正年代はcal BC 2698-2570を示し、縄文時代中期後半を示している。

試料No.22：縄文時代中期のSK286より出土した土器の付着炭質物。年代値は3970±30y. B. P.、暦年較正年代はcal BC 2505-2452を示し、縄文時代中期後半～後期初頭を示している。

#### ④考察

今回の年代測定を実施した遺構のうち、SF259、SH191、SH248、SF139、SX149、SX250、SX251、SB276、SB287、SB292、SH248、SK286は、いずれも縄文時代中期の遺構と考えられている。各遺構の年代測定結果をみると、SX149 (試料No.11) とSF259 (試料No.1) の炭化材は各々、縄文時代草創期、縄文時代早期の年代を示し、出土遺物から推定される時代と異なっていた。このような年代差については、各遺構内に古い炭化材が何らかの過程を経て取り込まれていることを示している可能性が高く、炭化材が取り込まれている堆積物の成因 (人為的営力により投入されたなど) を踏まえた評価が必要である。その他の遺構から出土した炭化材は、縄文時代中期後半～後期初頭に相当する年代を示し、出土遺物の時代性とも同調的である。た

だし、SB287のP3柱根跡は、やや古い年代を示している。これら各遺構間の多少の年代差については、発掘調査成果を踏まえた評価が望まれる。

一方、時期不明のF-X6Pit2(試料№19)の炭化材は3~4世紀、SX174(試料№20)は15世紀後半~17世紀前半を示している。これらの遺構の年代観についても発掘調査成果と合わせた評価が必要である。

### (3) 樹種同定

#### ①試料

試料は、SF259、SH201、SH204、SH205、SH214、SH216から出土した炭化材6点(試料№1~6)である。各試料には、4点~15点の炭化材があり、合計52点がある。

#### ②分析方法

自然乾燥させた後、木口(横断面)・板目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面について断面図を作成して実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

#### ③結果

樹種同定結果を第7表に示す。炭化材は、針葉樹1分類群(スギ)と広葉樹7分類群(ハンノキ属ハンノキ亜属・コナラ属コナラ亜属クスギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・クリ・スダジイ・ツバキ属)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・スギ(*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don)  
スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2~4個。放射組織は単

列、1~15細胞高。

・ハンノキ属ハンノキ亜属(*Alnus* subgen. *Alnus*)  
カバノキ科

散孔材で、道管は単独または2~4個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと集合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属クスギ節(*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1~3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節(*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1~3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸~厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3~4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

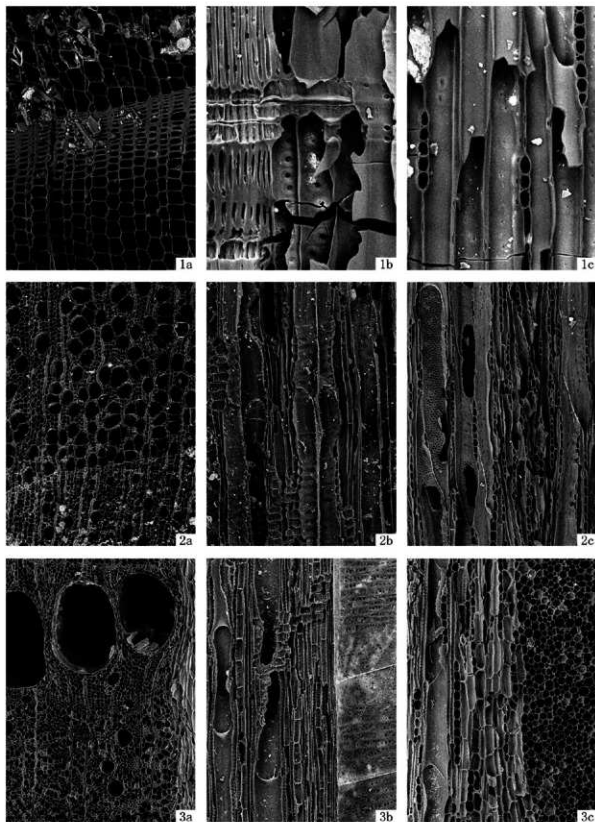
・スダジイ(*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1~2個幅で放射方向に配列する。孔圏部は3~4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高。

・ツバキ属(*Cameilia*) ツバキ科

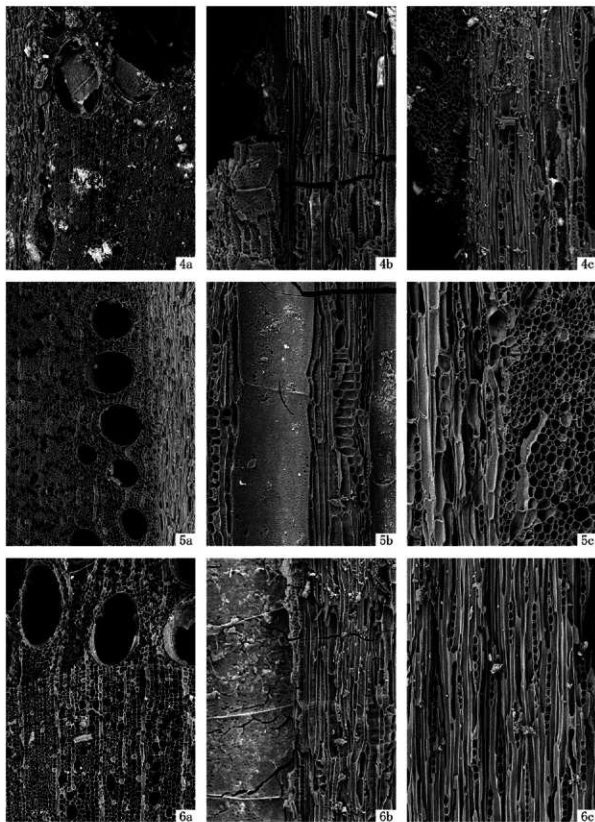
第7表 樹種同定結果

試料No.	地区	遺構	層位	取上No.	状態	種類
No.1		SF259		①	破片	クリ
				②a	破片	クリ
				②b	破片	クリ
				③	破片	クリ
				④	破片	クリ
No.2		SH201	炭上層	P2①	破片	クリ
				P2②	破片	クリ
				P2③	破片	クリ
				P2(C-G23)	破片	クリ
No.3		SH204		C1①	破片	クリ
				C1②	破片	クリ
				C1③	破片	クリ
				C2	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節
				C3	破片	コナラ属コナラ亜属クスギ節
				C4	破片	コナラ属コナラ亜属クスギ節
				C5	破片	ハンノキ属ハンノキ亜属
				C6	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節
				C7	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節
No.4	G-D1	SH205		C1	破片	コナラ属アカガシ亜属
				C2	破片	クリ
				C3	破片	クリ
				C4	破片	クリ
				C5	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節
				C6	破片	コナラ属コナラ亜属クスギ節
				C7	破片	コナラ属コナラ亜属クスギ節
				C8	破片	クリ
				C11	破片	クリ
				C12	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節
				C14	破片	コナラ属コナラ亜属コナラ節
				C18	破片	クリ
				P1	破片	スギ
				No.5	G-F6	SH214
C2	破片	スギ				
C3	破片	コナラ属アカガシ亜属				
C4	芯持丸木	コナラ属アカガシ亜属				
C5	破片	コナラ属アカガシ亜属				
C6	破片	スダジイ				
No.6	G-E11	SH216		C1	削出丸木	コナラ属アカガシ亜属
				C2	芯持材	ツバキ属
				C3	芯持材	ツバキ属
				C4	破片	コナラ属アカガシ亜属
				C5	破片	コナラ属コナラ亜属クスギ節
				C6	破片	コナラ属コナラ亜属クスギ節
				C7	破片	コナラ属コナラ亜属クスギ節
				C8	破片	コナラ属コナラ亜属クスギ節
				C9	破片	コナラ属コナラ亜属クスギ節
				C10	破片	コナラ属コナラ亜属クスギ節
				C11	破片	コナラ属コナラ亜属クスギ節
				C12	破片	コナラ属コナラ亜属クスギ節
				C13	破片	コナラ属コナラ亜属クスギ節
				C14	破片	コナラ属コナラ亜属クスギ節
				C15	破片	コナラ属コナラ亜属クスギ節



1. スギ (SH214; C2)  
 2. ハンノキ属ハンノキ亜属 (SH204; C5)  
 3. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (SH216; C7)  
 a: 木口, b: 柱目, c: 板目

100  $\mu$ m: 2-3a  
 100  $\mu$ m: 1a, 2-3b, c  
 100  $\mu$ m: 1b, c



4. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (SH205;C5)

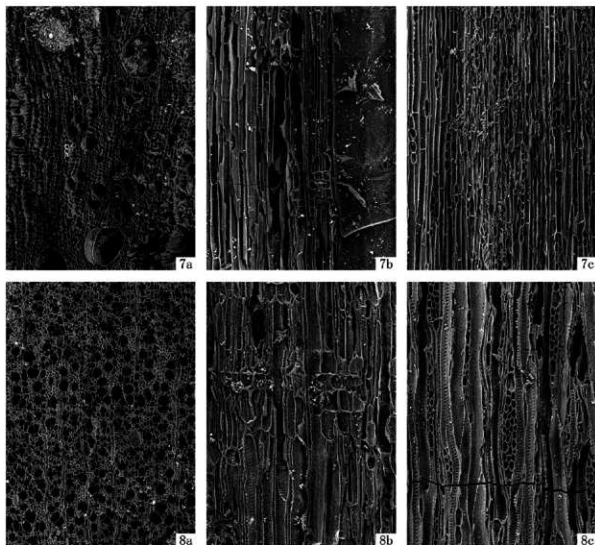
5. コナラ属アカガシ亜属 (SH216;C1)

6. クリ (SH205;C2)

a:木口, b:縦目, c:板目

100  $\mu$ m: a  
100  $\mu$ m: b, c

第240図 炭化材②



7. スダジイ (SH214;C6)  
 8. ツバキ属 (SH216;C2)  
 a: 木口, b: 柀目, c: 板目

100 μm: a  
 100 μm: b, c

#### 第241図 炭化材③

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～20細胞高。放射組織には結晶が認められる。

#### ④考察

樹種同定を実施した炭化材は、土坑および住居跡から出土しており、合計8分類群が確認された。各種類の材質などについてみると、針葉樹のスギは木理が通直で割裂性・耐水性が比較的高い。広葉樹のクスギ節、コナラ節、アカガシ亜属、クリは、重硬

で強度が高く、クリでは耐朽性も高い。ハンノキ亜属とスダジイはやや重硬な部類に入り、強度も比較的高い。ツバキ属は重硬・緻密で強度が高い。

遺構別にみると、S F 259の炭化材は、いずれも破片で5点全てがクリに同定されたが、年代測定試料にはコナラ節が認められ、少なくとも2種類が混在している可能性がある。なお、コナラ節を用いた年代測定では、9,400±40BPの補正年代が得られている。三重県内では、鴻ノ木遺跡で縄文時代早期の炬から出土した炭化材の樹種同定が実施されており、クリを中心にクマシデ属、ケヤキ、コナラ節、ムクノキ、ヤマグワ、タケ亜科が混在する結果が報告さ



れている（伊東・山田，2012）。SF259の種類構成は、クリを中心にコナラ節が混じる点で、鴻ノ木遺跡の結果とも類似する。

試料№2～5は、いずれも堅穴住居跡から出土した炭化材である。SH201は、全てP2から出土した炭化材で、いずれもクリに同定された。SH204は、主に住居の中央付近から炭化材が出土しており、クスギ節やコナラ節を中心にクリやハンノキ亜属が混じる種類構成であり、強度の高い樹種を中心に少なくとも4種類が利用されたことが推定される。SH205は、住居のほぼ全面から炭化材が出土しており、クリを中心にクスギ節、コナラ節、アカガシ亜属が認められる他、P1からは針葉樹のスギも出土している。確認された種類構成は、SH204に似ており、同じく強度の高い木材を利用したことが推定される。なお、スギについては、出土位置や材質から、クリ等の広葉樹とは異なる用途・部位が推定される。SH214は、住居の壁付近から炭化材が出土しており、壁に対して軸方向が直交するものが多く、垂木などの部位が推定される。アカガシ亜属、クスギ節、スタジイ、スギが認められ、少なくとも4種類が利用されている。強度の高い樹種が多い点は、他の住居と同様である。スギについては、垂木状の試料に確認されており、SH205とは出土位置が異なる。SH216は、住居の南北床面を中心に炭化材が出土している。クスギ節を中心にアカガシ亜属とツバキ属が混じる組成であり、少なくとも3種類が利用されたことが推定される。強度が高い炭化材で構成される点は、他の住居跡と同様である。出土状況を見ると、住居南側から出土した炭化材（C7～15）は、狭い範囲に集中し、軸方向が比較的揃っていること、樹種が単一（クスギ節）になることから、同一部材に由来する可能性がある。ツバキ属2点（C2、3）も近接して出土しており、形状が似ていることから、同一個体の可能性がある。アカガシ亜属の2点（C1、4）も比較的近い位置から出土しており、同一個体の可能性がある。これらの炭化材のうち、ツバキ属の2点は芯持材で、形状から小径木の可能性がある。また、アカガシ亜属のうち、C1は破片を接合すると直径約5cmの削出丸木になることから、何らかの木製品の部材・部品に由来す

る可能性がある。

三重県内では、北堀池遺跡や六六A遺跡で弥生時代後期～古墳時代前期の堅穴住居跡から出土した建築部材の樹種同定が行われており、クリやヒノキが確認されている。クリの利用は今回の調査でも確認できる。また、ヒノキの利用は、樹種は異なるが、スギの利用と似ている。一方、1軒の住居において、少なくとも3～4種類が確認される点は、これまでとは異なる点であり、木材利用の地域性等を示している可能性がある。

#### （4）種実同定

##### ①試料

試料は、SH191の遺物取り上げ（試料№7）より出土した種実106個、不明37個と、炉跡（試料№8）より出土した種実3個、SH248の下層（試料№9）より出土した種実88個、種実？その他（不明）61個の、計5点295個とされる。試料は、全て乾燥した状態でポリ袋に入っている。各試料の詳細は、結果とともに第8表に示す。

##### ②分析方法

炭化種実の同定は、現生標本および伊藤（2001）、徳永（2004）等を参考に実施し、部位・状態別の個数を求めて結果を一覧表で示す。分析後は、年代測定対象とした一部のオニグルミを除く炭化種実を分類群別に容器に入れて返却する。

##### ③結果

###### 1. 炭化種実の出土状況

結果を第8表に示す。全3遺構5試料を通じて、被子植物8分類群（木本のオニグルミ、クスギ、コナラ属（クスギ？）、コナラ属、クリ、ツブラジイ？、トチノキ、ムクロジ）231個の炭化した種実の破片に同定された。SH248下層の2個は、最大8mmを測り、炭化した堅果類の子葉の破片と判断されるが、同定ができなかった。炭化種実以外では、炭化材が50個、菌核が1個、昆虫が1個、岩片（火山岩等）が13個の、計65個が確認された。

以下に、炭化種実の出土状況を述べる。

###### ・SH191

遺物取り上げ（試料№7）の種実および不明の2試料からは、高木になる落葉広葉樹のオニグルミの

第8表 種実同定結果

分類群	部位	状態	遺構/試料No./種別/個数					備考
			SH191		SH248			
			遺物取り上げ		9跡		下層	
			試料No. 7		試料No. 8		試料No. 9	
種実	不明	種実	種実	種実? その他 (不明)				
			106	37	3	88	61	
炭化種実								
オニグルミ	核	破片	93	13	2	43	14	各1個を年代測定(No. 7: 0.14g, No. 8: 0.01g, No. 9: 0.02g) 着点: 残存径5.7mm, 復元径1.1cm 1/4片未満 No. 7: 長さ11.28mm, 残存幅6.76mm, 半分厚4.03mm/ No. 9: 残存径9.18mm, 半分厚4.07mm 長さ5.97mm, 径1.98mm, 半分厚2.85mm/ 長さ4.53mm, 幅3.61mm, 残存厚1.88mm 残存径6mm
クヌギ	果皮	破片	-	-	-	-	1	
コナラ属(クヌギ?)	子葉	破片	-	-	-	-	1	
コナラ属	子葉	破片	2	-	-	-	2	
クリ	子葉	破片	-	-	-	3	6	
ツブラジイ?	子葉	破片	-	2	-	-	-	
トチノキ	種皮	破片	9	-	1	33	2	
ムクロジ	種皮	破片	-	1	-	3	-	
不明堅果類	子葉	破片	-	-	-	2	-	
炭化種実以外								
炭化材			1	16	-	4	29	
菌核			-	-	-	-	1	
昆虫			-	-	-	-	1	
岩片			2	7	-	1	3	
合計			107	39	3	89	60	

核が106個、トチノキの種皮が9個、ムクロジの種皮が1個、高木になる落葉または常緑広葉樹のコナラ属の子葉が2個、高木になる常緑広葉樹のツブラジイ?の子葉が2個の、計120個が確認され、オニグルミ1個0.14gを年代測定対象としている。

9跡(試料No.8)からは、オニグルミの核が2個、トチノキの種皮が1個の、計3個が確認され、オニグルミ1個0.01gを年代測定対象としている。

・SH248下層(試料No.9)

種実および種実?その他(不明)の2試料からは、高木になる落葉広葉樹のオニグルミの核が57個、トチノキの種皮が35個、クリの子葉が9個、ムクロジの種皮が3個、クヌギの果皮が1個、コナラ属(クヌギ?)の子葉が1個、高木になる落葉または常緑広葉樹のコナラ属の子葉が2個、不明堅果類の子葉が2個の、計110個が確認され、オニグルミ1個0.02gを年代測定対象としている。

2. 主要分類群の記載

炭化種実の保存状態は、全て炭化した破片で黒色を呈し、泥の付着などにより極めて不良である。

各分類群の写真を第242図に示し、以下に形態的特徴等を述べる。

・オニグルミ(*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura)

クルミ科クルミ属

核は、径2.5~3.5cmの広卵形で頂部が尖り、1本の明瞭な縦の縫合線がある。核は硬く緻密で、表面には維管束の痕跡である縦網状の彫紋があり、ごつごつしている。縫合線に沿って半割した内部に子葉が入る2つの大きな窪みと隔壁がある。出土核は全て破片で、最大1.7cmを測る(SH191)。

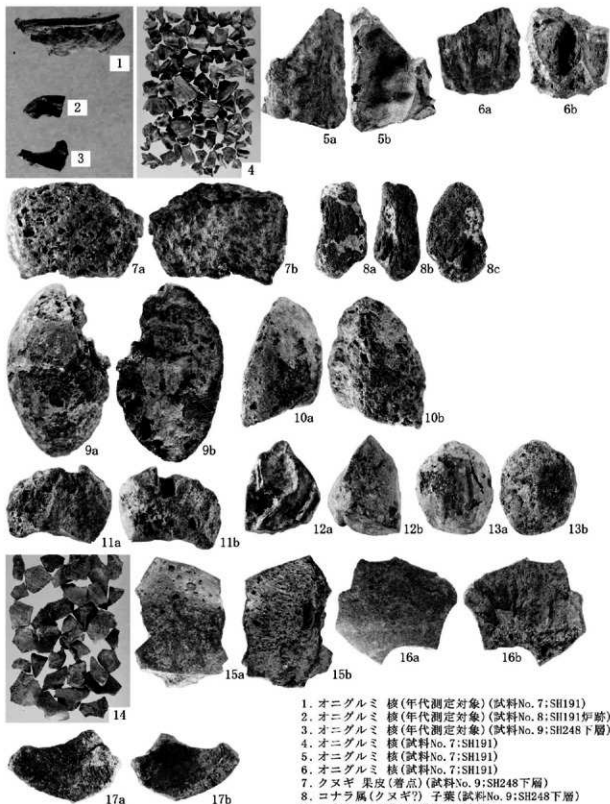
・クヌギ(*Quercus acutissima* Carruthers) ブナ科コナラ属

果実は長さ1.5~2.5cm、径1.0~1.5cmの偏球体で頂部がわずかに尖り、基部は切形でやや膨らんで突出する個体が多い。基部全面を灰褐色で粗く不規則な粒状紋様がある着点(鱗)が占める。果皮外面は平滑で、浅く微細な縦條が密に並ぶ。出土果皮は着点の破片で、残存径5.7mmを測り、復元径は1.1cm程度である。

・コナラ属(*Quercus*) ブナ科

子葉は卵体または楕円体、偏球体を呈し、硬く緻密で、表面には縦方向に走る維管束の圧痕がある。2枚からなる子葉合わせ目の表面は平滑で、正中線上頂部に径0.5~1mm程度の小さな孔(主根)がある。

SH248下層の出土子葉1個は、2枚からなる合わせ目に沿って割れた1/4片未満の破片で、残存長



1. オニグルミ 核 (年代測定対象) (試料No. 7; SH191)
2. オニグルミ 核 (年代測定対象) (試料No. 8; SH191<sup>伊</sup>跡)
3. オニグルミ 核 (年代測定対象) (試料No. 9; SH248下層)
4. オニグルミ 核 (試料No. 7; SH191)
5. オニグルミ 核 (試料No. 7; SH191)
6. オニグルミ 核 (試料No. 7; SH191)
7. クヌギ 果皮 (着点) (試料No. 9; SH248下層)
8. コナラ属 (クヌギ?) 子葉 (試料No. 9; SH248下層)
9. コナラ属 子葉 (試料No. 7; SH191)
10. コナラ属 子葉 (試料No. 9; SH248下層)
11. クリ 子葉 (試料No. 9; SH248下層)
12. クリ 子葉 (試料No. 9; SH248下層)
13. ツブラジイ? 子葉 (試料No. 7; SH191)
14. トチノキ 種皮 (試料No. 9; SH248下層)
15. トチノキ 種皮 (試料No. 9; SH248下層)
16. トチノキ 種皮 (試料No. 9; SH248下層)
17. ムクロジ 種皮 (試料No. 9; SH248下層)

第242図 炭化種実

1.2cm、残存幅0.7cmを測る。復元される形状は約1.5cmの偏球体であることから、クスギの可能性はある。

一方、SH191出土子葉は、長さ11.28mm、残存幅6.76mm、半分厚4.03mm、SH248下層の出土子葉は、残存長9.15mm、半分厚4.07mmを測り、楕円体が復元される。クスギ以外のコナラ属（コナラやアカガシ亜属など）と考えられる。

・ツブラジイ (*Castanopsis cuspidata* (Thunb. ex Murray) Schottky) ? ブナ科シイ属

子葉は卵体を呈す。出土子葉は、2枚からなる子葉の合わせ目に沿って半割した1片で、長さ5.97mm、幅4.98mm、半分厚2.85mmと、長さ4.53mm、幅3.61mm、残存厚1.88mmを測る。子葉は硬く緻密で、頂部はやや尖り、表面は縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。合わせ目の表面は平滑で、正中線は僅かに窪み、頂部に径0.7mmの小さな孔（主根）がある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

子葉は、径1.5~3cm、厚さ1~1.5cmの三角状広卵形で、腹面は平らで背面は丸みがある個体が多い。頂部は尖り、基部は切形。子葉は、硬く緻密で、表面には種皮（渋皮）の圧痕の縦筋が粗く波打つ。2枚からなる子葉の合わせ目の線に沿って割れた半分未満の破片もみられる。子葉合わせ目の表面は平滑で、正中線はやや窪み、頂部には小さな孔（主根）がある。出土子葉は全て破片で、最大6.5mmを測る（SH248下層）。

・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

種子は、径2.5~3.5cmの偏球体で、表面にはほぼ赤道面を蛇行して一周する曲線を境に、不規則な流理状模様がある光沢の強い黒色の上部と、粗面で光沢のない灰褐色の下部の着点に別れる。種皮は薄く硬く、不規則に割れており、最大1.1cmを測る（SH248下層）。

・ムクロジ (*Sapindus mukorossi* Gaertn.) ムクロジ科ムクロジ属

種子は、径1.5~1.7cmの広楕円状球体で、基部は切形で線状の臍があり、臍周辺は肥厚する。種皮は厚く（約1mm）、表面粗面で断面は櫛状。出土種皮は全て破片で、最大7.5mmを測る（SH248下層）。

#### ④考察

SH191の遺物取り上げおよび跡跡、SH248の下層から出土した炭化種実、広葉樹で落葉高木のオニグルミ、クスギ、コナラ属（クスギ?）、クリ、トチノキ、ムクロジ、落葉または常緑高木のコナラ属、常緑高木のツブラジイ?に同定され、オニグルミやトチノキなどの堅果類を主体とする組成が確認された。

オニグルミやトチノキは、川沿いなどの湿潤な肥沃地に生育する河畔林要素で、クスギやコナラ属の一部、クリは、丘陵や山地に生育する二次林要素である。ツブラジイやムクロジは暖地に広く分布する高木である。これらの樹種は、現在の本地域にも分布しており、当時の遺跡周辺域の森林にも生育していたと考えられる。

このうち、オニグルミやクリ、ツブラジイは、あく抜きせずに子葉が食用可能である。トチノキやクスギ、コナラ属の多くは、あく抜きすることで子葉が食用可能となる。これらの堅果類は、長期保存可能で取量も多いことから、古くから利用され、遺跡出土例も多い（渡辺, 1975など）。当時の遺跡周辺の森林より持ち込まれ、利用された植物質食料と示唆され、火を受け残存したとみなされる。ただし、炭化種実が遺構内で火を受けたのか、別の場所で火を受け炭化した食料残滓が遺構内に廃棄されたのかについては、分析段階で判断することはできないため、発掘調査所見と併せて検討することが望まれる。

その他に、ムクロジは、子葉が油脂を多く含むため食用とされる。出土種子に人による明瞭な利用痕跡は確認されないが、当時利用された可能性は考えられる。

#### 引用文献

- 林三三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集 京都大学木質科学研究所  
伊藤ふくお, 2001, どんぐりの図鑑, 北川尚史監修, トンボ出版, 79p.  
伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 I. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.  
伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載 II. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.

伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.

伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.

伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.

伊東隆夫・山田昌久(編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース, 海青社, 449p.

工藤雄一郎, 2012, 旧石器・縄文時代の環境文化史. 新泉社, 376p.

西本豊弘 編, 2006, 新弥生時代のはじまり 第1巻 弥生時代の新年代. 雄山閣, 143p.

西本豊弘 編, 2007, 新弥生時代のはじまり 第2巻 縄文時代から弥生時代へ. 雄山閣, 185p.

Richter H.G., Gasser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編),

2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Gasser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

島地謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.

谷口康浩, 2001, 縄文時代遺跡の年代『季刊考古学』, 77, 17-21

徳永桂子, 2004, 日本どんぐり大図鑑. 借成社, 156p.

渡辺誠, 1975, 縄文時代の植物食. 雄山閣出版, 187p.

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

## 第4節 放射性炭素年代測定(第3次調査)

### 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林絃一・Zaur Lomtadze・小林克也・中村賢太郎

#### (1) はじめに

三重県四日市市に所在する小牧南遺跡(第3次)より検出された縄文時代中期、古墳時代、鎌倉時代の遺構から出土した炭化材について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

#### (2) 試料と方法

縄文時代中期末の試料は、掘立建物S B276柱穴の柱根(炭化材)と掘形から出土した炭化材の2点(PLD-33717, 33718)、竪穴住居S H335炉穴から出土した炭化材1点(PLD-33719)、竪穴住居S H355石圍炉から出土した炭化材1点(PLD-33720)、竪穴住居S H360炉から出土した炭化材2点(PLD-33721, 33722)、落とし穴S K358から出土した炭化材4点(PLD-33723~33726)である。

古墳時代初頭の焼失住居S H349では、16点の炭化材および炭化草本(PLD-33728~33743)が採取された。

鎌倉時代の火葬墓S X351では、5点の炭化材

(PLD-33744~33748)が採取された。

その他に、鎌倉時代の可能性がある土坑S X345で炭化材1点(PLD-33727)が採取された。

測定試料の情報、調整データは第9表のとおりである。

試料は調整後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、暦年代を算出した。

#### (3) 結果

第10表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比( $\delta^{13}C$ )、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代、暦年較正結果を、第243~246図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代(yrBP)の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がそ

第9表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-33717	試料No. 1 遺構: P1 (SR276柱穴) 柱根 グリッド: B-X20 炭化物No. 1	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-33718	試料No. 2 遺構: P1 (SR276柱穴) 掘形 グリッド: B-X20 炭化物No. 2	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-33719	試料No. 3 遺構: SH3355戸穴 炭化物No. 1	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-33720	試料No. 4 遺構: SH355石囲戸 層位: 第2層 炭化物No. 1	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-33721	試料No. 5 遺構: SH3605戸 炭化物No. 1	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-33722	試料No. 6 遺構: SH3605戸 炭化物No. 2	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-33723	試料No. 7 遺構: SK358 層位: 底面から20cm上 炭化物No. 1	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-33724	試料No. 8 遺構: SK358 層位: 底面直上 炭化物No. 2	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-33725	試料No. 9 遺構: SK358 炭化物サンプルNo. 3	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-33726	試料No. 10 遺構: SK358 炭化物サンプルNo. 4	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪以外部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-33727	試料No. 11 遺構: SX345 炭	種類: 炭化材 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-33728	試料No. 12 遺構: SH349 遺物No. 1	種類: 炭化草本 (イネ科) 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-33729	試料No. 13 遺構: SH349 遺物No. 2	種類: 炭化材 (スダジイ) 試料の性状: 最終形成年輪以外部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-33730	試料No. 14 遺構: SH349 遺物No. 3	種類: 炭化材 (スダジイ) 試料の性状: 最終形成年輪以外部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-33731	試料No. 15 遺構: SH349 遺物No. 4	種類: 炭化草本 (イネ科) 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-33732	試料No. 16 遺構: SH349 遺物No. 5	種類: 炭化材 (スダジイ) 試料の性状: 最終形成年輪以外部位不明 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

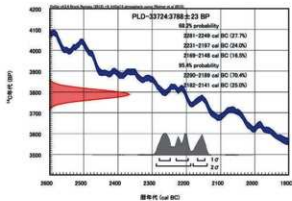
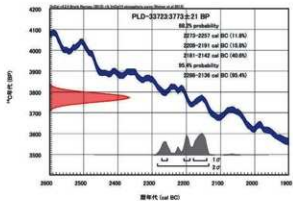
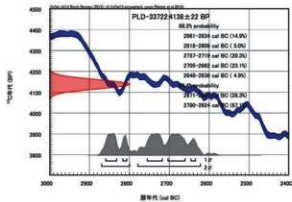
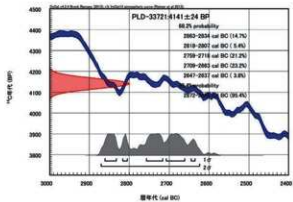
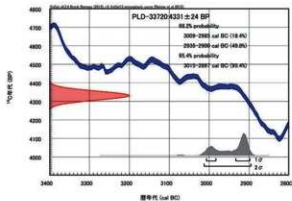
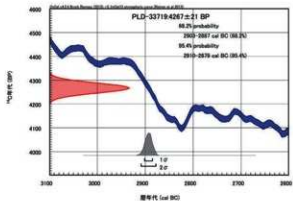
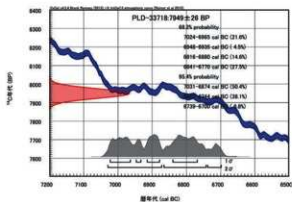
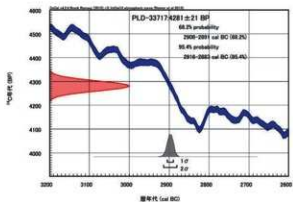
第9表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-33733	試料No. 17 遺構：SH349 遺物No. 6	種類：炭化材（スダジイ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33734	試料No. 18 遺構：SH349 遺物No. 7	種類：炭化材（スダジイ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33735	試料No. 19 遺構：SH349 遺物No. 8	種類：炭化材（スダジイ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33736	試料No. 20 遺構：SH349 遺物No. 9	種類：炭化材（スダジイ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33737	試料No. 21 遺構：SH349 遺物No. 10	種類：炭化材（スダジイ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33738	試料No. 22 遺構：SH349 遺物No. 11	種類：炭化材（ツブラジイ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33739	試料No. 23 遺構：SH349 遺物No. 12	種類：炭化材（スダジイ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.1N, 塩酸：1.2N）
PLD-33740	試料No. 24 遺構：SH349 遺物No. 13	種類：炭化材（広葉樹） 試料の性状：樹皮 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33741	試料No. 25 遺構：SH349 遺物No. 14	種類：炭化材（スダジイ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33742	試料No. 26 遺構：SH349 遺物No. 15	種類：炭化材（スダジイ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33743	試料No. 27 遺構：SH349 遺物No. 16	種類：炭化材（スダジイ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33744	試料No. 28 遺構：SX351 木炭1	種類：炭化材（マツ属複雑管束亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33745	試料No. 29 遺構：SX351 木炭2	種類：炭化材（マツ属複雑管束亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：0.1N, 塩酸：1.2N）
PLD-33746	試料No. 30 遺構：SX351 木炭3	種類：炭化材（マツ属複雑管束亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33747	試料No. 31 遺構：SX351 木炭4	種類：炭化材（マツ属複雑管束亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）
PLD-33748	試料No. 32 遺構：SX351 木炭5	種類：炭化材（マツ属複雑管束亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

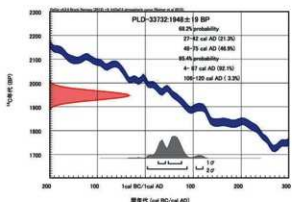
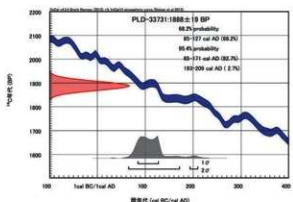
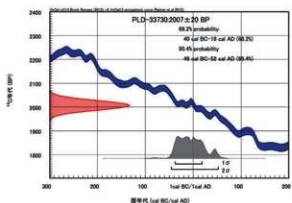
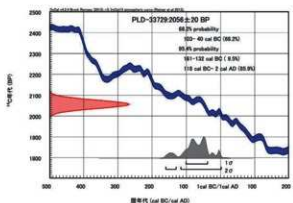
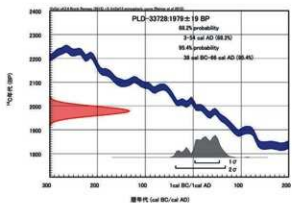
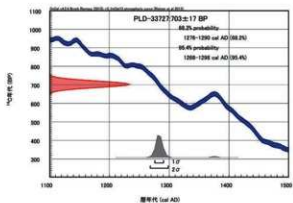
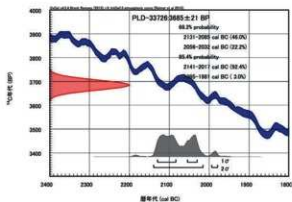
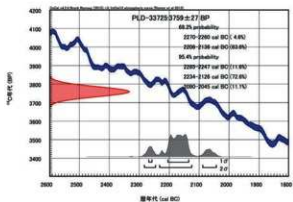
第10表 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	°C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	°C年代を暦年年代に校正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-33717 P1(SR276柱穴) 柱根	-28.47 $\pm$ 0.20	4281 $\pm$ 21	4280 $\pm$ 20	2906-2891 cal BC (68.2%)	2916-2883 cal BC (95.4%)
PLD-33718 P1(SR276柱穴) 掘形	-26.82 $\pm$ 0.20	7949 $\pm$ 26	7950 $\pm$ 25	7024-6965 cal BC (21.6%) 6948-6935 cal BC (4.5%) 6916-6880 cal BC (14.6%) 6841-6776 cal BC (27.3%)	7031-6874 cal BC (50.4%) 6867-6744 cal BC (38.1%) 6739-6700 cal BC (6.8%)
PLD-33719 SH356穴	-27.11 $\pm$ 0.21	4267 $\pm$ 21	4265 $\pm$ 20	2903-2887 cal BC (68.2%)	2910-2879 cal BC (95.4%)
PLD-33720 SH355石洞6 $\phi$	-28.05 $\pm$ 0.30	4331 $\pm$ 24	4330 $\pm$ 25	2009-2985 cal BC (18.4%) 2935-2900 cal BC (49.8%)	3015-2897 cal BC (95.4%)
PLD-33721 SH609 $\phi$	-29.54 $\pm$ 0.25	4141 $\pm$ 24	4140 $\pm$ 25	2863-2834 cal BC (14.7%) 2818-2807 cal BC (5.4%) 2759-2718 cal BC (21.2%) 2709-2663 cal BC (23.2%) 2647-2637 cal BC (3.8%)	2872-2626 cal BC (95.4%)
PLD-33722 SH606 $\phi$	-28.89 $\pm$ 0.27	4138 $\pm$ 22	4140 $\pm$ 20	2861-2834 cal BC (14.9%) 2818-2808 cal BC (5.0%) 2757-2718 cal BC (20.3%) 2705-2662 cal BC (23.1%) 2648-2636 cal BC (4.9%)	2871-2801 cal BC (28.3%) 2780-2624 cal BC (67.1%)
PLD-33723 SK358	-27.34 $\pm$ 0.22	<b>3773<math>\pm</math>21</b>	3775 $\pm$ 20	2273-2257 cal BC (11.8%) 2208-2191 cal BC (15.8%) 2181-2142 cal BC (40.6%)	2286-2136 cal BC (95.4%)
PLD-33724 SK358	-27.78 $\pm$ 0.32	3788 $\pm$ 23	3790 $\pm$ 25	2281-2249 cal BC (27.7%) 2231-2197 cal BC (24.0%) 2169-2148 cal BC (16.5%)	2290-2189 cal BC (70.4%) 2182-2141 cal BC (25.0%)
PLD-33725 SK358	-24.27 $\pm$ 0.41	3759 $\pm$ 27	3760 $\pm$ 25	2270-2260 cal BC (4.6%) 2206-2136 cal BC (63.6%)	2285-2247 cal BC (11.6%) 2234-2126 cal BC (72.6%) 2090-2045 cal BC (11.1%)
PLD-33726 SK358	-26.32 $\pm$ 0.20	3685 $\pm$ 21	3685 $\pm$ 20	2131-2085 cal BC (46.0%) 2056-2032 cal BC (22.2%)	2141-2077 cal BC (92.4%) 1995-1981 cal BC (3.0%)
PLD-33727 SX345	-23.98 $\pm$ 0.22	703 $\pm$ 17	705 $\pm$ 15	1270-1290 cal AD (68.2%)	1268-1298 cal AD (95.4%)
PLD-33728 SH49	-12.01 $\pm$ 0.30	1979 $\pm$ 19	1980 $\pm$ 20	3-54 cal AD (68.2%)	38 cal BC-66 cal AD (95.4%)
PLD-33729 SH49	-33.63 $\pm$ 0.18	2056 $\pm$ 20	2055 $\pm$ 20	103-40 cal BC (68.2%)	161-132 cal BC (9.5%) 118 cal BC-2 cal AD (85.9%)
PLD-33730 SH49	-32.82 $\pm$ 0.19	2007 $\pm$ 20	2005 $\pm$ 20	40 cal BC-18 cal AD (68.2%)	48 cal BC-52 cal AD (95.4%)
PLD-33731 SH49	-11.26 $\pm$ 0.20	1888 $\pm$ 19	1890 $\pm$ 20	85-127 cal AD (68.2%)	65-171 cal AD (92.7%) 193-209 cal AD (2.7%)
PLD-33732 SH49	-31.73 $\pm$ 0.21	1948 $\pm$ 19	1950 $\pm$ 20	27-42 cal AD (21.3%) 48-75 cal AD (46.9%)	4-87 cal AD (92.1%) 106-120 cal AD (3.3%)
PLD-33733 SH49	-28.05 $\pm$ 0.21	2014 $\pm$ 19	2015 $\pm$ 20	43 cal BC-5 cal AD (68.2%)	52 cal BC-30 cal AD (91.9%) 37-50 cal AD (3.9%)
PLD-33734 SH49	-33.13 $\pm$ 0.25	2030 $\pm$ 22	2030 $\pm$ 20	53 cal BC-4 cal AD (68.2%)	102 cal BC-28 cal AD (94.5%) 41-47 cal AD (0.9%)
PLD-33735 SH49	-30.27 $\pm$ 0.22	1957 $\pm$ 20	1955 $\pm$ 20	24-69 cal AD (68.2%)	21-12 cal BC (1.4%) 6-85 cal AD (93.4%) 110-115 cal AD (0.6%)
PLD-33736 SH49	-32.16 $\pm$ 0.24	2018 $\pm$ 20	2020 $\pm$ 20	45 cal BC-5 cal AD (68.2%)	86-79 cal BC (1.2%) 55 cal BC-30 cal AD (90.8%) 37-51 cal AD (3.3%)
PLD-33737 SH49	-35.17 $\pm$ 0.20	2000 $\pm$ 20	2000 $\pm$ 20	39 cal BC-24 cal AD (68.2%)	45 cal BC-53 cal AD (95.4%)
PLD-33738 SH49	-33.23 $\pm$ 0.20	1859 $\pm$ 20	1860 $\pm$ 20	94-97 cal AD (2.1%) 125-178 cal AD (46.2%) 189-213 cal AD (19.9%)	85-223 cal AD (95.4%)
PLD-33739 SH49	-28.66 $\pm$ 0.20	1943 $\pm$ 19	1945 $\pm$ 20	28-80 cal AD (16.0%) 49-79 cal AD (52.2%)	9-90 cal AD (88.0%) 100-123 cal AD (7.4%)
PLD-33740 SH49	-32.66 $\pm$ 0.20	1941 $\pm$ 22	1940 $\pm$ 20	27-42 cal AD (16.6%) 47-82 cal AD (51.9%)	7-125 cal AD (95.4%)
PLD-33741 SH49	-29.12 $\pm$ 0.22	1942 $\pm$ 20	1940 $\pm$ 20	27-41 cal AD (16.1%) 48-80 cal AD (52.1%)	10-90 cal AD (86.2%) 98-124 cal AD (9.2%)
PLD-33742 SH49	-32.09 $\pm$ 0.22	1915 $\pm$ 23	1915 $\pm$ 25	65-91 cal AD (36.2%) 99-124 cal AD (32.0%)	28-39 cal AD (3.1%) 50-133 cal AD (92.3%)
PLD-33743 SH49	-30.18 $\pm$ 0.22	1963 $\pm$ 20	1965 $\pm$ 20	24-66 cal AD (68.2%)	22-11 cal BC (2.6%) 2 cal BC-80 cal AD (92.8%)
PLD-33744 SX351	-25.02 $\pm$ 0.23	736 $\pm$ 18	735 $\pm$ 20	1267-1281 cal AD (68.2%)	1260-1286 cal AD (95.4%)
PLD-33745 SX351	-25.13 $\pm$ 0.27	693 $\pm$ 18	695 $\pm$ 20	1278-1293 cal AD (68.2%)	1272-1300 cal AD (86.6%) 1369-1381 cal AD (8.8%)
PLD-33746 SX351	-26.22 $\pm$ 0.27	737 $\pm$ 20	735 $\pm$ 20	1266-1281 cal AD (68.2%)	1255-1290 cal AD (95.4%)
PLD-33747 SX351	-28.10 $\pm$ 0.27	682 $\pm$ 22	680 $\pm$ 20	1279-1299 cal AD (55.7%) 1371-1379 cal AD (12.5%)	1274-1307 cal AD (68.4%) 1362-1385 cal AD (27.0%)
PLD-33748 SX351	-24.32 $\pm$ 0.28	745 $\pm$ 19	745 $\pm$ 20	1263-1279 cal AD (68.2%)	1249-1287 cal AD (95.4%)

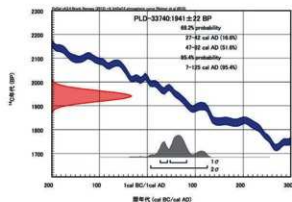
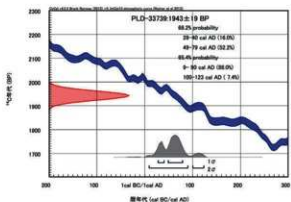
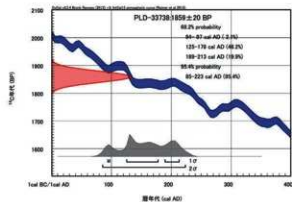
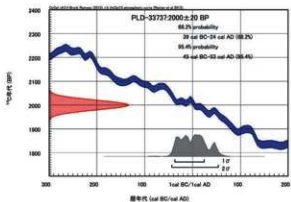
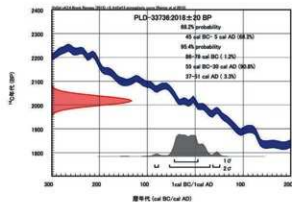
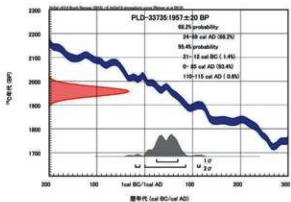
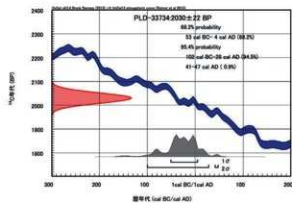
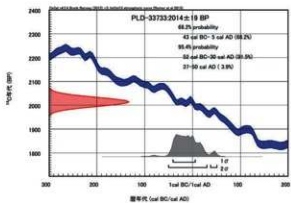




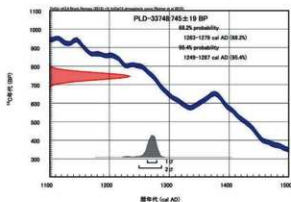
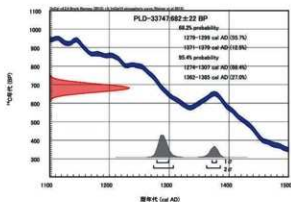
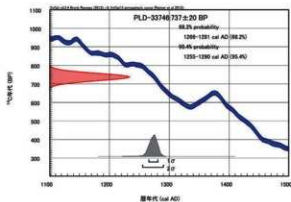
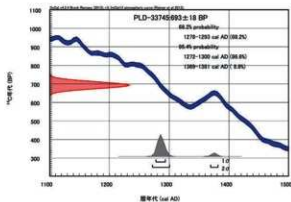
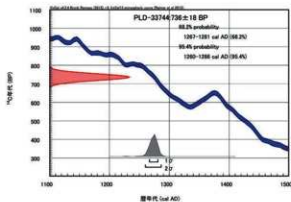
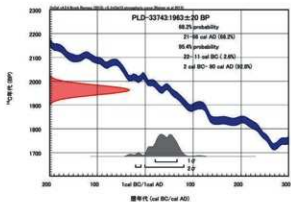
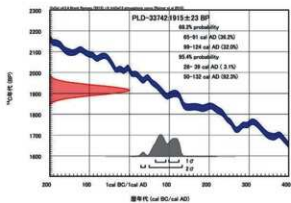
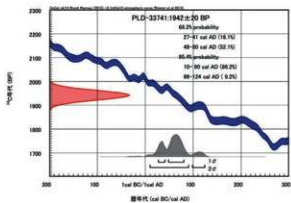
第243圖 曆年較正結果①



第244圖 曆年較正結果②



第245圖 曆年較正結果③



第246圖 曆年較正結果④

の $^{14}\text{C}$ 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年校正の詳細は以下のとおりである。

暦年校正とは、大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度が一定で半減期が5568年として算出された $^{14}\text{C}$ 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の $^{14}\text{C}$ 濃度の変動、および半減期の違い( $^{14}\text{C}$ の半減期 $5730 \pm 40$ 年)を校正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

$^{14}\text{C}$ 年代の暦年校正にはOxCal4.2(校正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された $^{14}\text{C}$ 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は $^{14}\text{C}$ 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年校正曲線を示す。

#### (4) 考察

以下、 $2\sigma$ 暦年代範囲(確率95.4%)に着目して、結果を整理する。考古学の編年と $^{14}\text{C}$ 年代・暦年代範

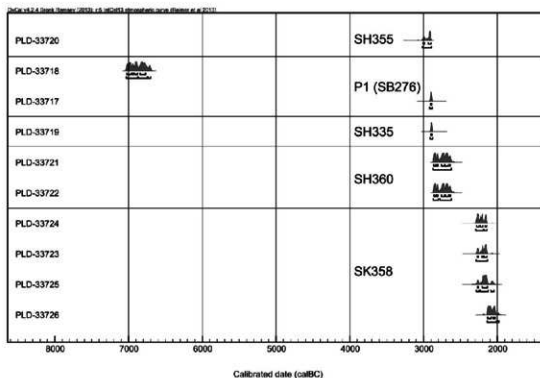
囲との対応関係については、縄文時代が小林(2008)と工藤(2012)、弥生時代～古墳時代が小林(2009)と赤塚(2009)を参照した。

縄文時代中期末とされる試料のうち、掘立柱建物S B276柱穴の掘形から出土した炭化材(PLD-33718)は極端に古く縄文時代早期中葉に相当する年代であった。縄文時代中期に柱穴が掘られる際に縄文時代早期の土層に含まれる炭化材が供給された可能性が考えられる。

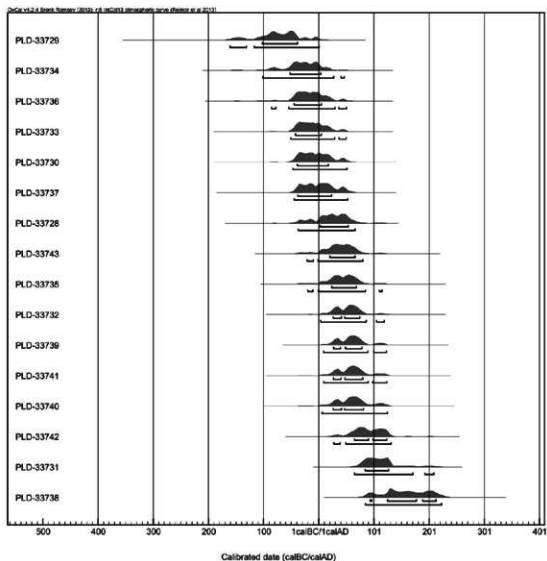
竪穴住居S H355石囲炉のPLD-33720、掘立柱建物S B276柱穴の柱根(PLD-33717)、竪穴住居S H335炉穴のPLD-33719、竪穴住居S H360炉のPLD-33721と33722は、 $^{14}\text{C}$ 年代が $4330 \pm 25 \sim 4140 \pm 20$   $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$ 暦年代範囲が3015～2624 cal BCの範囲で、縄文時代中期後半に相当する。

一方、落とし穴S K358の4点(PLD-33723～33726)は、 $^{14}\text{C}$ 年代が $3790 \pm 25 \sim 3685 \pm 20$   $^{14}\text{C}$  BP、 $2\sigma$ 暦年代範囲が2290～1981 cal BCの範囲で、縄文時代後期前葉に相当する。S K358は、発掘調査所見よりもやや新しい時期である可能性を考慮する必要がある。

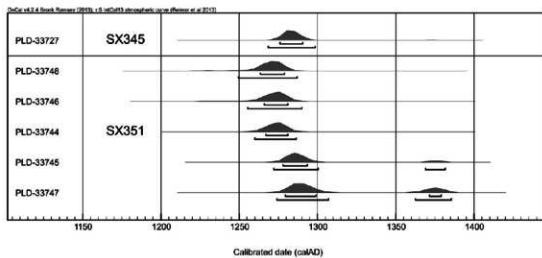
古墳時代初頭の焼失住居S H349の16点の炭化材



第247図 縄文時代中期末遺構出土炭化材の暦年校正結果の比較



第248図 古墳時代初頭S H346出土炭化材の暦年較正結果の比較



第249図 鎌倉時代遺構出土炭化材の暦年較正結果の比較

および炭化草本 (PLD-33728~33743) は、 $^{14}\text{C}$ 年代が  $2055 \pm 20 \sim 1860 \pm 20$   $^{\circ}\text{C}$  BP、 $2\sigma$  暦年代範囲が 161 cal BC ~ 223 cal AD の範囲を示し、これらの年代は紀元前 2 世紀 ~ 紀元後 3 世紀で、弥生時代中期後葉 ~ 古墳時代初頭に相当する。古墳時代初頭よりも古い年代の解釈にあたっては、紀元後 1 ~ 3 世紀では日本産樹木が吹米産樹木に比べて数十年 ~ 100 年程度古い  $^{14}\text{C}$ 年代が得られる現象 (尾寄, 2009)、あるいは古材の転用や年輪の内側であるための古木効果の表れを考慮する必要がある。ただし、木材と違って転用が考えにくく、年輪内外の  $^{14}\text{C}$ 年代差とも関係ないイネ科の草本 (PLD-33728) が、紀元前 1 世紀に掛かる紀元前後の暦年代範囲を示している点から、竪穴住居の建築が紀元前後 (弥生時代中期後葉 ~ 後期前葉) まで遡る可能性が考えられる。

鎌倉時代の可能性のある土坑 S X 345 の PLD-33727 は、 $^{14}\text{C}$ 年代が  $705 \pm 15$   $^{\circ}\text{C}$  BP、 $2\sigma$  暦年代範囲が 1268 ~ 1298 cal AD (95.4%) で、13 世紀、鎌倉時代に相当する年代であった。

鎌倉時代の火葬墓 S X 351 の 5 点 (PLD-33744 ~ 33748) は  $^{14}\text{C}$ 年代が  $745 \pm 20 \sim 680 \pm 20$   $^{\circ}\text{C}$  BP、 $2\sigma$  暦年代範囲が 1249 ~ 1385 cal AD で、13 ~ 14 世紀、鎌倉時代 ~ 室町時代に相当する年代であった。ただし、S X 351 の炭化材はいずれも最終形成年輪が確認できない試料であり、年輪の内側であるために古い年代が得られている可能性がある。その点を考慮すると、5 点のうち最も新しい暦年代範囲である 1274 ~ 1307 cal AD (68.4%) および 1362 ~ 1385 cal AD (27.0%) が、S X 351 で火葬が行われた時期に近いと考えられる。

## 第 5 節 黒曜石産地同定分析 (第 2 次調査)

小牧南遺跡出土黒曜石製石器の産地推定

竹原弘展 (パレオ・ラボ)

### (1) はじめに

朝明川右岸の河岸段丘上に立地する小牧南遺跡より出土した縄文時代中期後葉 ~ 末葉の黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

### 参考文献

- 赤塚次郎 (2009) 弥生後期から古墳中期 (八王子古宮式から宇田式期) の暦年代. 日本文化財科学会第 26 回大会研究発表要旨集, 14-20.
- Bronk Ramsey, C. (2003) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代. 縄文時代の考古学 2 - 歴史のものさし -, 257-269, 同成社.
- 小林謙一 (2009) 近畿地方以東の地域への拡散. 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第 4 巻 弥生農耕のはじまりとその年代」: 55-82, 雄山閣.
- 工藤雄一郎 (2012) 第 10 章後末期の考古編年と  $^{14}\text{C}$  年代. 旧石器・縄文時代の環境文化史, 212-229, 新泉社.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の  $^{14}\text{C}$  年代編集委員会編「日本先史時代の  $^{14}\text{C}$  年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- 尾寄大真 (2009) 日本版校正曲線の作成と新たな課題. 西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第 4 巻 弥生農耕のはじまりとその年代」: 4-5, 雄山閣.
- Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Buck, C. E., Cheng, H., Edwards, R. L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hafliðason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J. (2013) *IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP*. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

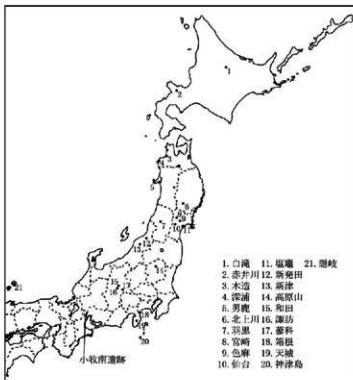
### (2) 試料と方法

分析対象は、黒曜石製石器 13 点である (分析 No. 6 ~ No. 18, 第 11 表)。試料は、測定前にメラミンフォーム製のスポンジと精製水を用いて、表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光 X 線分析計 SEA

第11表 分析対象

分析No.	器種	出土地点
6	縦型石匙?	検出中
7	剥片	SH191
8	石鏝	
9	剥片	
10	剥片	
11	剥片	
12	剥片	
13	剥片	
14	剥片	
15	剥片	
16	剥片	
17	剥片	
18	石鏝	



第250図 黒曜石産地分布図(東日本)

1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム (Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた(望月, 2004など)。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム (K)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の合計7元素のX線強度 (cps; count per second) について、以下に示す指標値を計算する。

- 1)  $Rb \text{ 分率} = Rb \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 2)  $Sr \text{ 分率} = Sr \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 3)  $Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$
- 4)  $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$

そしてこれらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸

Sr分率-縦軸 $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$ の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する方法である。この判別図法は、原石同士の判別図が重複した場合には分離は不可能となるが、現在のところ、同一エリア内に多少の重複はあっても、エリア同士の重複はほとんどないため、産地エリアの推定に問題はない。また、指標値に蛍光X線のエネルギー差ができる限り小さい元素同士を組み合わせて算出しているため、形状や厚みなどの影響を比較的受けにくいという利点があり、非破壊分析を原則とし、形状が不規則で薄い試料も多く存在する考古遺物の測定に対して非常に有効な方法である。なお、厚みについては、かなり薄くても測定可能であるが、それでも0.5mm以下では影響をまぬかれないといわれる(望月, 1999)。極端に薄い試料の場合、K強度が相対的に強くなるため、 $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$ の値が減少する。また、風化試料の場合でも、 $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$ の値が減少する(望月, 1999)。そのため、試料の測定面にはなるべく奇麗で平坦な面を選んだ。原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。第12表に各



原石の産地とそれぞれの試料点数、ならびにこれらのエリアと判別群名を示す。また、第250図に各原石採取地の分布図を示す。

### (3) 分析結果

第13表に測定値より算出された指標値を、第251・

第12表 黒曜石産地（東日本）の判別群名称（望月，2004参照）

都道府県	エリア	判別群	記号	原石採取地	
北海道	白糠	八号沢群	STBC	赤石山山前・八号沢露頭・八号沢	
		黒曜の沢群	STKY	黒曜の沢・幌加路道(36)	
	赤井川	曲川群	AIMK	曲川・土木川(5)	
青森	木造	出来島群	K20K	出来島南岸(10)	
		深浦	HRHM	岡崎浜(7)、八森山公園(8)	
秋田	男鹿	金ヶ崎群	OGKS	金ヶ崎温泉(10)	
		脇本群	OGHM	脇本海岸(4)	
男手	北上川	北上折居2群	KR02	水沢市新居(9)	
山形	羽黒	月山群	HGGS	月山荘前(10)	
		宮崎	MIYU	宮ノ倉(40)	
宮城	色麻	根岸群	SMNG	根岸(40)	
		秋保1群	SDA1	上蔵(18)	
	仙台	秋保2群	SDA2	上蔵(18)	
	塩釜	塩釜群	SCSG	塩釜(10)	
新潟	新発田	板山群	SBHY	板山牧場(10)	
		新津	NTKJ	金津(7)	
栃木	高梁山	甘藷沢群	THAY	甘藷沢(22)	
		七尋沢群	THNH	七尋沢(3)、宮川(3)、枝持沢(3)	
		鷹山群	WDTY	鷹山(14)、東勝屋(16)	
		和田(00)	小沢沢群	W0KB	小沢沢(8)
長野	和田(00)	土屋嶺西群	W0TN	土屋嶺西(11)	
		ブドウ沢群	W0RD	ブドウ沢(20)	
		牧ヶ沢群	W0MS	牧ヶ沢下(20)	
		高松沢群	W0TM	高松沢(19)	
		諏訪	星ヶ台群	SWHD	星ヶ台(35)、星ヶ塚(20)
		蓼科	冷山群	TSTY	冷山(20)、美奈路(20)、美奈路東(20)
神奈川県	箱根	芦ノ湖群	HNAY	芦ノ湖(20)	
		鎌倉群	HNKJ	鎌倉(51)	
		鎌治原群	HNKJ	鎌治原(20)	
静岡県	天城	相崎群	HNKT	上多賀(20)	
		相崎群	AGKT	相崎(20)	
東京	神津島	真輪島群	K20K	真輪島(27)	
		お轉崎群	K25N	お轉崎(20)	
島根	隠岐	久見群	OKHM	久見パーライト中(6)、久見採掘現場(5)	
		見浦群	OKMC	見浦海岸(3)、加茂(1)、岸田(3)	

第13表 測定値および産地推定結果

分析No.	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn100/Fe	Sr分率	log Fe/K	判別群	エリア	分析No.
6	271.9	105.7	1014.9	671.0	249.6	330.9	639.1	35.49	10.42	13.20	0.57	SWHD	諏訪	6
7	12.7	36.4	667.9	29.0	110.1	37.9	90.7	10.84	5.45	41.13	1.72	?	不明	7
8	229.4	88.3	877.4	563.4	207.6	270.4	519.8	36.09	10.06	13.29	0.58	SWHD	諏訪	8
9	11.0	36.8	606.2	21.4	106.2	30.9	69.8	9.38	6.07	46.50	1.74	?	不明	9
10	262.6	100.5	1016.6	635.8	238.3	312.3	617.4	35.25	9.88	13.21	0.59	SWHD	諏訪	10
11	230.8	89.5	878.9	582.2	217.5	289.1	564.5	35.21	10.18	13.16	0.58	SWHD	諏訪	11
12	134.9	50.1	484.5	308.1	115.1	150.4	291.0	35.63	10.34	13.32	0.56	SWHD	諏訪	12
13	143.7	58.3	563.2	357.0	133.1	174.6	327.5	35.98	10.36	13.41	0.59	SWHD	諏訪	13
14	134.5	52.3	535.9	301.1	113.1	147.9	278.6	35.82	9.77	13.45	0.60	SWHD	諏訪	14
15	71.6	28.8	284.0	191.3	73.9	98.7	190.2	34.53	10.14	13.34	0.60	SWHD	諏訪	15
16	159.2	60.7	614.3	376.5	138.1	183.1	347.3	36.03	9.88	13.22	0.59	SWHD	諏訪	16
17	109.4	43.6	439.9	267.8	99.3	126.6	242.6	36.37	9.90	13.48	0.60	SWHD	諏訪	17
18	361.1	118.6	1145.0	751.7	280.6	367.8	712.6	35.58	10.36	13.28	0.50	SWHD	諏訪	18

252図に黒曜石原石の判別図に今回の石器6点の結果をプロットした図を示す。なお、図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

分析の結果、分析No.7とNo.9を除く11点が諏訪エリア星ヶ台群SWHDの範囲にプロットされた。分析No.7とNo.9は合致する判別群がなく、産地不明であった。なお、この2点については、未整理のため第12表に載せていない当社所有の北海道や東北地方、九州地方の黒曜石原石の判別図とも一致していない。第13表に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

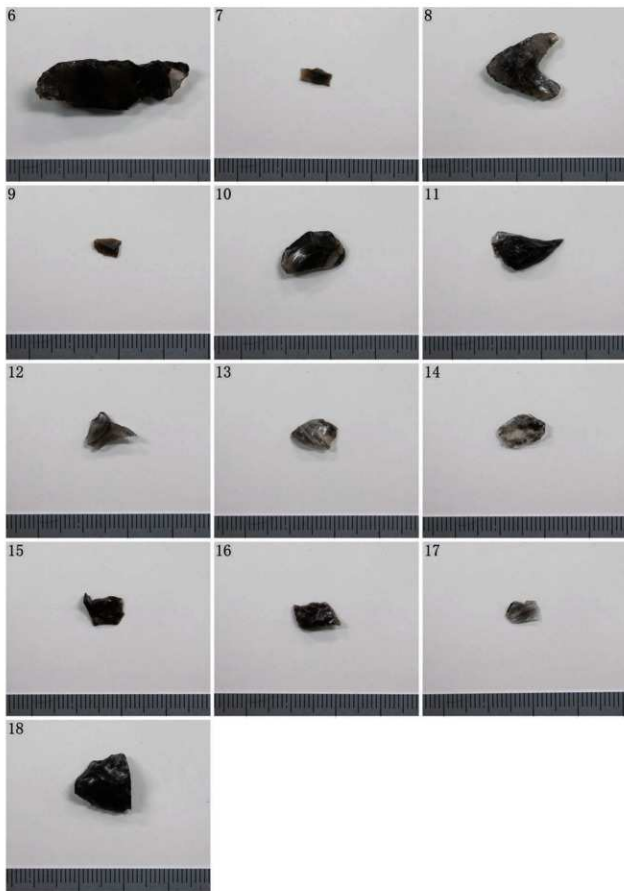
### (4) おわりに

小牧南遺跡より出土した縄文時代中期後葉～末葉の黒曜石製石器13点について蛍光X線分析による産地推定を行った結果、2点は産地不明であったが、残り11点が諏訪エリア産と推定された。

### 引用・参考文献

- 望月明彦 (1999) 上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定。大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2 一上和田城山遺跡篇一」：172-179、大和市教育委員会。
- 望月明彦 (2004) 殿山遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定。上尾市教育委員会編「殿山遺跡 先土器時代石器群の保管・活用のための整理報告書」：272-282、上尾市教育委員会。





第253圖 分析対象試料

## 第6節 黒曜石産地同定分析（第3次調査）

小牧南遺跡出土黒曜石製石器の産地推定

竹原弘展（パレオ・ラボ）

### （1）はじめに

四日市市小牧町に所在する小牧南遺跡の第3次調査で出土した縄文時代中期末の黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

### （2）試料と方法

分析対象は、黒曜石製石器3点である（第14表）。試料№40は、竪穴住居跡SH301底面の埋土篩がけで出土した。試料№41は、竪穴住居跡SH355底面より出土した。試料№42は、竪穴住居跡SH355の石囲炉内の埋土篩がけで出土した。時期は、いずれも縄文時代中期末とみられている。試料№40、41は、表面に風化が認められたため、サンドブラストを使用して風化面を一部除去した。試料№42は、メラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の表面の洗

浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200 VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム（Rh）、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた（望月、1999など）。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム（K）、マンガン（Mn）、鉄（Fe）、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の合計7元素のX線強度（cps；count per second）について、以下に示す指標値を計算する。

1)  $Rb \text{ 分率} = Rb \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$

第14表 分析対象

試料 No.	出土 遺構	出土 位置	備考	時期
40	SH301	底面	埋土篩がけ	縄文 時代 中期末
41	SH355	底面		
42		石囲炉内	埋土篩がけ	



第254図 黒曜石産地分布図

第15表 黒曜石産地の判別群

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地
北海道	白滝	白滝1	赤石山山頂(43), 八号沢露頭(15)
		白滝2	7の沢川支流(2), 18露頭(10), 十勝石沢露頭下河床(11), アジサイの滝露頭(10)
	赤井川	赤井川	赤石山山頂, 八号沢露頭, 八号沢, 黒曜の沢, 横加林道(36)
	上士幌	上士幌	十勝三枝(4), タウシュベツ川右岸(42), タウシュベツ川左岸(10), 十三ノ沢(32)
	釧路	釧路山	釧路山(5)
		岸山	岸山(5)
	豊浦	豊浦	豊泉(10)
	旭川	旭川	沢文台(8), 雨台(2)
	名寄	名寄	忍野帯川(19)
		秋文別	秋文別1 秋文別2 秋文別3
	遠軽	遠軽	社名帯川河床(2)
	生田原	生田原	仁田川河床(10)
	留辺蘂	留辺蘂1	ケショマツ川河床(9)
		留辺蘂2	
	網走	網走	網走市営スキー場(9), 阿寒川右岸(2), 阿寒川左岸(6)
	青森	木造	出来島海岸(15), 鶴ヶ坂(10)
		深淵	八森山 岡崎底(7), 八森山公園(8)
青森		青森 天田内川(6)	
秋田	男鹿	金ヶ崎 金ヶ崎温泉(10) 船本 船本海岸(4)	
	北上新田	北上新田1 北上新田2 北上新田3	北上新田(9), 長城(33)
宮城	宮崎	宮ノ倉	宮ノ倉(10)
	色麻	根岸 根岸(40)	
	仙台	秋保1	土蔵(10)
		秋保2	
塩竈	塩竈	塩竈(10)	
山形	羽黒	月山 月山荘前(20), 大綱沢(10)	
	柳川	柳川 たらのき代(19)	
新潟	新発田	板山 板山牧場(10)	
	新津	金津 金津(7)	
栃木	高原山	甘藷沢 甘藷沢(22)	
	七尋沢	七尋沢(3), 宮川(3), 枝持沢(3)	
長野	和田	西藤原	芙蓉パーライト土砂集積場(30)
		鷹山	鷹山(14), 東藤原(54)
		小深沢	小深沢(42)
		土屋橋1	土屋橋西(10)
		土屋橋2	新和田トンネル北(20), 土屋橋北西(58), 土屋橋西(1)
		古峠	和山トンネル上(28), 古峠(38), 和田峠スキー場(28)
		ブドウ沢	ブドウ沢(20)
		牧ヶ沢	牧ヶ沢下(20)
		高松沢	高松沢(19)
		諏訪	星ヶ台(38), 星ヶ台(20)
長野	豊科	冷山(20), 支草峠(20), 支草峠東(20)	
	戸ノ湯	戸ノ湯(20)	
神奈川県	箱根	鎌倉(51) 鎌倉(20)	
	藤川	藤川(20)	
静岡県	天城	上多賀(20) 上多賀(20)	
	松崎	松崎(20)	
東京	神津島	岩島島(27) 砂礫場(20)	
	久見	久見パーライト中(6), 久見辰堀現場(5)	
鳥取	足浦	足浦海岸(3), 加茂(0), 岸原(3)	

$$2) \text{ Sr分率} = \text{Sr強度} \times 100 / (\text{Rb強度} + \text{Sr強度} + \text{Y強度} + \text{Zr強度})$$

$$3) \text{ Mn強度} \times 100 / \text{Fe強度}$$

$$4) \log (\text{Fe強度} / \text{K強度})$$

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率-縦軸log(Fe強度/K強度)の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせる指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、log(Fe強度/K強度)の値が減少する(望月, 1999)。試料の測定面にはなるべく平滑な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。第15表に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、第254図に各原石の採取地の分布図を示す。

### (3) 分析結果

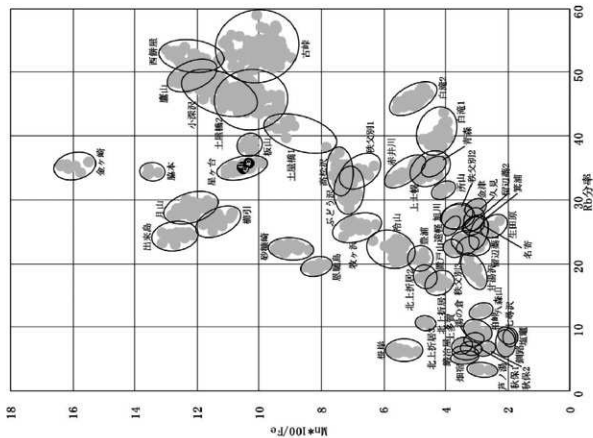
第16表に石器の測定値および算出した指標値を、第255図と第256図に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んである。

分析の結果、3点いずれも星ヶ台群(長野県、諏訪エリア)の範囲にプロットされた。第16表に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

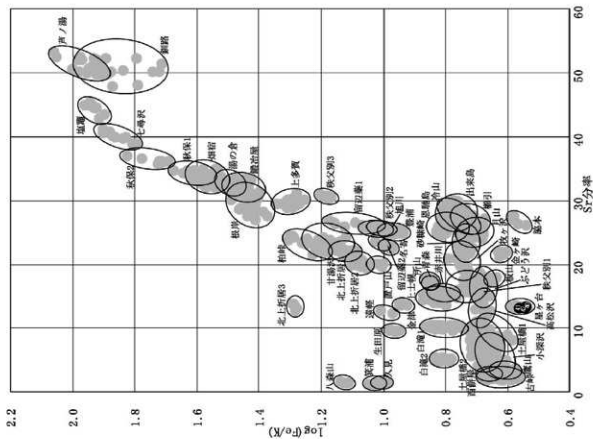
3点いずれも諏訪エリア産と、信州産の黒曜石であった。以前行った当遺跡の第2次調査で出土した黒曜石製石器13点の産地推定でも、11点が諏訪エリ

第16表 測定値および産地推定結果

試料No	K強度(cps)	Mn強度(cps)	Fe強度(cps)	Rb強度(cps)	Sr強度(cps)	Y強度(cps)	Zr強度(cps)	Rb分率	$\text{Mn} \times 100 / \text{Fe}$	Sr分率	$\log \frac{\text{Fe}}{\text{K}}$	判別群	エリア	試料No
40	303.8	109.1	1055.6	695.7	258.0	339.3	649.9	35.81	10.33	13.28	0.54	星ヶ台	諏訪	40
41	327.5	126.1	1192.5	805.1	302.7	395.7	784.5	35.19	10.58	13.23	0.56	星ヶ台	諏訪	41
42	290.3	106.6	1015.5	716.3	270.1	359.9	704.8	34.92	10.50	13.17	0.54	星ヶ台	諏訪	42



第255図 黒曜石産地推定判別図①



第256図 黒曜石産地推定判別図②



第257図 分析対象となる黒曜石製石器

ア産と確認している（残り2点は産地不明）（竹原，2014年度提出）。また、長田（2011）では、縄文時代を中心とした愛知県、岐阜県、三重県内18遺跡442点の黒曜石産地推定結果が集成されている。これによると、信州産が400点と圧倒的多数であるが、神津島産が15点、箱根産、柏峠産が各1点と、少量ながら信州産以外の黒曜石も確認されている（残りは不明・不可）。なお、このうち、岐阜県揖斐川町（旧揖斐郡藤橋村）の山手宮前遺跡出土の黒曜石製石器2点が、縄文時代中期の遺物とみられており、いずれも信州産であった。また、岐阜県恵那市の大平遺跡出土の黒曜石製石器4点が、縄文時代早期～晩期（中期末～後期初頭中心）の遺物とみられており、いずれも信州産であった。ほかに、縄文時代中期を候補を含む遺物の測定例としては8遺跡あり、信州産が306点、神津島産が7点、柏峠産が1点であった。

#### （4）おわりに

小牧南遺跡より出土した縄文時代中期末の黒曜石

1. 試料No.40 2. 試料No.41 3. 試料No.42

製石器3点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、3点いずれも諏訪エリア産と推定された。

#### 引用文献

- 望月明彦（1999）上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定。大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2—上和田城山遺跡篇—」：172-179、大和市教育委員会。
- 長田友也（2011）水汲遺跡の位置づけ。長田友也編「水汲遺跡」：249-252、豊田市教育委員会。
- 竹原弘展（2014年度提出）小牧南遺跡出土黒曜石製石器の産地推定。平成26年度近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山JCT）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（小牧南遺跡）にかかわる出土石器および剥片における自然科学分析業務委託。

## 第7節 ガラス質安山岩産地同定分析

小牧南遺跡出土ガラス質安山岩製石器の産地推定  
竹原弘展 (パレオ・ラボ)

### (1) はじめに

朝明川右岸の河岸段丘上に立地する小牧南遺跡より出土した縄文時代中期後葉～末葉のガラス質安山岩製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

### (2) 試料と方法

分析対象はガラス質安山岩製石器5点(分析No.1～No.5)である(第17表)。石器は風化層に覆われていたため、サンドブラストを用いて一部新鮮面を露出させ、測定箇所とした。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200 VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム (Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

分析方法としては、黒曜石産地推定法において用いられている蛍光X線分析によるX線強度を用いた判別図法(望月, 2004など)を用い、分析対象をガラス質安山岩に置き換えて適用した。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム (K)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe) とルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の合計7元素のX線強度 (cps; count per second) について、以下に示す指標値を計算する。

$$1) \text{Rb分率} = \text{Rb強度} \times 100 / (\text{Rb強度} + \text{Sr強度} + \text{Y強度} + \text{Zr強度})$$

強度)

$$2) \text{Sr分率} = \text{Sr強度} \times 100 / (\text{Rb強度} + \text{Sr強度} + \text{Y強度} + \text{Zr強度})$$

$$3) \text{Mn強度} \times 100 / \text{Fe強度}$$

$$4) \log (\text{Fe強度} / \text{K強度})$$

そしてこれらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率-縦軸log (Fe強度/K強度)の判別図)を作成し、各地の原石データと石器のデータを照合して、産地を推定する方法である。原石試料も、採取原石を割って新鮮面を露出させた上で、分析対象の石器と同様の条件で測定した。第18表に各原石の採取地とそれぞれの試料点数を示す。

第17表 分析対象

分析No.	器種	出土地点
1	剥片	SH248下層
2	剥片	
3	剥片	SH191遺物取り上げ
4	剥片	SH248下層
5	剥片	SB285 P4上層

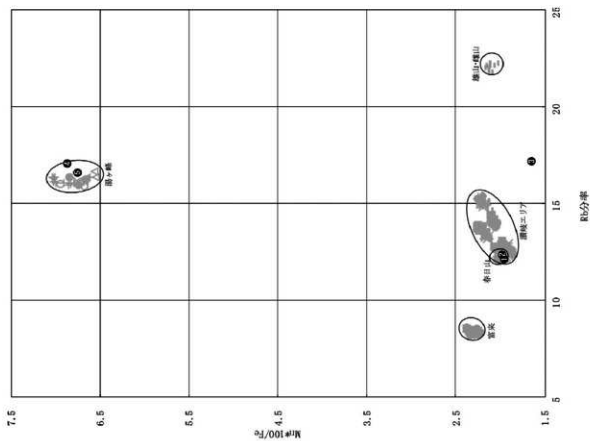
第18表 原石採取地と判別群名称

都道府県	エリア	判別群	原石採取地(試料点数)
岐阜	下呂	湯ヶ峰	大株(10)、山の西口(3)、火口そばくずれ(3)、山の東本(3)、火口そば北寄り尾根へ(3)
			大福寺A地点(1)、大福寺B地点中央鞍部(4)、大福寺B地点南(15)、西大福寺A地点(2)、笹渡(15)
石川	能登	富実	春日山みみかん畑内(10)
奈良	二上山	春日山	白旗降霊場村付近(5)、神谷神社前(13)、高産霊神社谷(12)、国分台下みかん畑(5)
		国分台1	蓮光寺(15)
		国分台2	赤子谷第1地点(5)、赤子谷第2地点(5)、法印谷(10)
		国分台3	金山1
		蓮光寺	金山2
		赤子谷・法印谷	北峰道路脇(10)、金山南麓(10)
		金山1	城山南側(5)、城山北側(5)
		金山2	樺山(5)、磯山(5)
		城山	樺山(5)、磯山(5)
		樺山・磯山	双子山

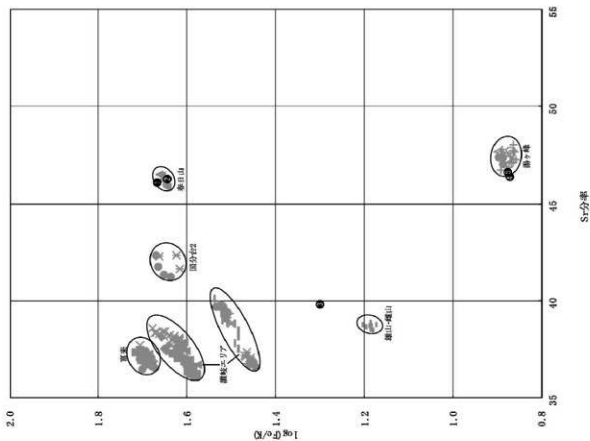
第19表 分析値および産地推定結果

No.	K強度(cps)	Mn強度(cps)	Fe強度(cps)	Rb強度(cps)	Sr強度(cps)	Y強度(cps)	Zr強度(cps)	Rb分率	Mn×100/Fe	Sr分率	log $\frac{Fe}{K}$	判別群	エリア	No.
1	164.6	149.0	7638.8	331.0	1256.5	205.2	931.4	12.15	1.95	46.13	1.67	春日山	二上山	1
2	197.5	172.4	8716.5	382.7	1433.1	226.2	1053.2	12.36	1.98	46.30	1.64	春日山	二上山	2
3	191.4	63.2	3824.1	445.0	1030.5	199.0	913.0	17.20	1.65	39.83	1.30	?	不明	3
4	228.3	116.1	1691.1	561.3	1525.4	219.5	983.7	17.06	6.86	46.37	0.87	湯ヶ峰	下呂	4
5	213.7	108.1	1601.7	539.1	1515.8	232.0	962.2	16.59	6.75	46.65	0.87	湯ヶ峰	下呂	5





第258図 ガラス質安山岩産地推定判別図①



第259図 ガラス質安山岩産地推定判別図②



第260図 分析対象試料

### (3) 分析結果

第19表に石器の測定値および算出された指標値を、第258図と第259図に、ガラス質安山岩原石の判別図に石器の分析結果をプロットした図を示す。なお、両図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

分析の結果、分析No.1とNo.2が二上山エリア春日山群、分析No.4とNo.5が下呂エリア湯ヶ峰群の範囲にプロットされた。分析No.3は合致する判別群がなく、産地不明であった。

第19表に産地推定結果を示す。比較対象となる原石産地が少ないが、試料は少なくとも判別図の一致しなかった産地のガラス質安山岩ではないといえる。

### (4) おわりに

小牧南遺跡より出土した縄文時代中期後葉～末葉のガラス質安山岩製石器5点について蛍光X線分析による産地推定を行った結果、2点が二上山産のい

わゆるサスカイト、2点が下呂産のいわゆる下呂石と推定された。残り1点は産地不明であった。

### 引用・参考文献

- 望月明彦 (2004) 殿山遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定。  
上尾市教育委員会編「殿山遺跡 先土器時代石器群の保管・活用のための整理報告書」: 272-282, 上尾市教育委員会。

## 第8節 垂飾石材分析

小牧南遺跡出土勾玉の蛍光X線分析

竹原弘展・藤根久（パレオ・ラボ）

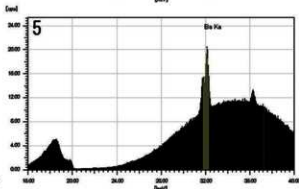
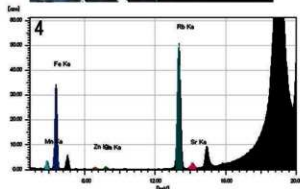
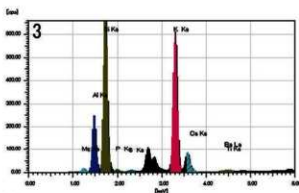
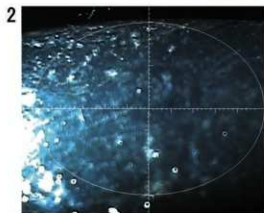
### (1) はじめに

朝明川右岸の河岸段丘上に立地する小牧南遺跡より出土した縄文時代中期後葉～末葉の勾玉について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、石材を検討した。

### (2) 試料と方法

分析対象は、勾玉1点（分析Na19）である（第20表、第261図）。

分析は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV、1000 $\mu$ Aのロジウム（Rh）ターゲット、X線照射径が8



1. 分析対象 2. 測定位置 3～5. 蛍光X線スペクトル (3. 15kV, 4. 50kV Pb用フィルタ, 5. 50kV Cd用フィルタ)

第261図 勾玉の蛍光X線分析結果

第20表 分析対象

分析 No.	器種	出土地点
19	縄文勾玉	SK250

第21表 比重測定結果

分析 No.	重量 (g)		比重
	空气中	水中	
19	5.41	3.46	2.8

第22表 半定量分析結果 (mass%)

分析No.	MgO	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	SO <sub>3</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	TiO <sub>2</sub>	MnO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	ZnO	Ga <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Rb <sub>2</sub> O	SrO	BaO
19	6.27	34.01	49.73	0.31	0.16	8.68	0.04	0.07	0.07	0.54	tr	tr	0.04	tr	0.08

※tr:痕跡量

mmまたは1mm、X線検出器はSDD検出器である。

この装置は、複数の一次フィルタが内蔵されており、適宜選択、挿入することでS/N比の改善が図れる。検出可能元素はナトリウム (Na) ～ウラン (U) であるが、軽元素の感度は蛍光X線分析装置の性質上若干低く、特に定量分析におけるナトリウムの精度は低い。測定条件は、管電圧・一次フィルタの組み合わせが15kV (一次フィルタ無し) ・50kV (一次フィルタPb測定用・Cd測定用) の計3条件で、測定時間は各条件500～1000s、管電流自動設定、照射径8mm、試料室内雰囲気真空に設定した。定量分析は、酸化物の形で算出し、ノンスタンダードFP法による半定量分析を行った。

また、最少表示0.01gの電子天秤で空气中重量と水中重量を測定し、簡易的に比重を算出した。

### (3) 分析結果および考察

## 第9節 樹種同定 (第3次調査)

小牧南遺跡 (第3次) 出土炭化材の樹種同定

小林克也 (パレオ・ラボ)

### (1) はじめに

朝明川中流南岸の河岸段丘上に立地する小牧南遺跡の第3次調査で出土した炭化材について、樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行なわれている (本章第4節参照)。

### (2) 試料と方法

試料は、古墳時代初頭の焼失住居跡であるSH349から16点、中世の火葬穴であるSX351から5点の、計21点の出土炭化材である。

第21表に空气中重量、水中重量と比重を示す。また、第261図に蛍光X線スペクトル、第22表に半定量分析結果を示す。

比重測定では、2.8の値を示した。

蛍光X線分析の結果、マグネシウム (MgO)、アルミニウム (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、ケイ素 (SiO<sub>2</sub>)、リン (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)、硫黄 (SO<sub>3</sub>)、カリウム (K<sub>2</sub>O)、カルシウム (CaO)、チタン (TiO<sub>2</sub>)、マンガン (MnO)、鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、亜鉛 (ZnO)、ガリウム (Ga<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)、ルビジウム (Rb<sub>2</sub>O)、ストロンチウム (SrO)、バリウム (BaO) が検出された。

ケイ素が約50%と少ないため、少なくとも玉髄や碧玉などではない。また、感触より滑石ほどは硬度が低くないとみられ、比重やマグネシウムが比較的多いといった特徴から、蛇紋岩と推定される。

### 参考文献

中井泉編 (2005) 蛍光X線分析の実践。242p。朝倉書店。

炭化材の樹種同定は、まず試料を乾燥させ、材の横断面 (木口)、接線断面 (板目)、放射断面 (柎目) について、カミソリと手で断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスバットにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡 (日本電子 (株) JSM-5900LV) にて鏡像および写真撮影を行なった。

### (3) 結果

同定の結果、針葉樹ではマツ属複雑管束亜属1分類群、広葉樹ではスダジイとツブラジイ、広葉樹樹皮の3分類群、単子葉ではイネ科1分類群の、計5分類群がみられた。スダジイが最も多く12点で、マ

ツ属複維管束亜属が5点、イネ科が2点、ツブラジイと広葉樹樹皮が各1点であった。同定結果を第23表に、一覧を第24表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

①マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylo*  
マツ科 第262図 1a-1c (No.28)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で、切削等の加工は容易である。

②スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino)

第23表 出土炭化材の樹種同定結果

樹種/遺構	SH349	SX351	合計
マツ属複維管束亜属		5	5
スダジイ	12		12
ツブラジイ	1		1
広葉樹樹皮	1		1
イネ科	2		2
合計	16	5	21

第24表 小牧南遺跡（第3次）出土炭化材の樹種同定結果一覧

試料No.	遺構名	遺物No.	器種	樹種	時期	年代測定番号
12	SH349	1	建築材	イネ科	古墳時代初期	PLD-33728
13	SH349	2	建築材	スダジイ	古墳時代初期	PLD-33729
14	SH349	3	建築材	スダジイ	古墳時代初期	PLD-33730
15	SH349	4	建築材	イネ科	古墳時代初期	PLD-33731
16	SH349	5	建築材	スダジイ	古墳時代初期	PLD-33732
17	SH349	6	建築材	スダジイ	古墳時代初期	PLD-33733
18	SH349	7	建築材	スダジイ	古墳時代初期	PLD-33734
19	SH349	8	建築材	スダジイ	古墳時代初期	PLD-33735
20	SH349	9	建築材	スダジイ	古墳時代初期	PLD-33736
21	SH349	10	建築材	スダジイ	古墳時代初期	PLD-33737
22	SH349	11	建築材	ツブラジイ	古墳時代初期	PLD-33738
23	SH349	12	建築材	スダジイ	古墳時代初期	PLD-33739
24	SH349	13	建築材	広葉樹樹皮	古墳時代初期	PLD-33740
25	SH349	14	建築材	スダジイ	古墳時代初期	PLD-33741
26	SH349	15	建築材	スダジイ	古墳時代初期	PLD-33742
27	SH349	16	建築材	スダジイ	古墳時代初期	PLD-33743
28	SX351	木炭1	燃料材	マツ属複維管束亜属	中世	PLD-33744
29	SX351	木炭2	燃料材	マツ属複維管束亜属	中世	PLD-33745
30	SX351	木炭3	燃料材	マツ属複維管束亜属	中世	PLD-33746
31	SX351	木炭4	燃料材	マツ属複維管束亜属	中世	PLD-33747
32	SX351	木炭5	燃料材	マツ属複維管束亜属	中世	PLD-33748

Hatus, ex T.Yamaz. et Mashiba プナ科 第262図  
2a-2c (No.14)、3a-3c (No.16)

年輪のはじめに大型の道管が断続的に並び、晩材部では径を減じた道管が火災状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列となる。スダジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難ではない。

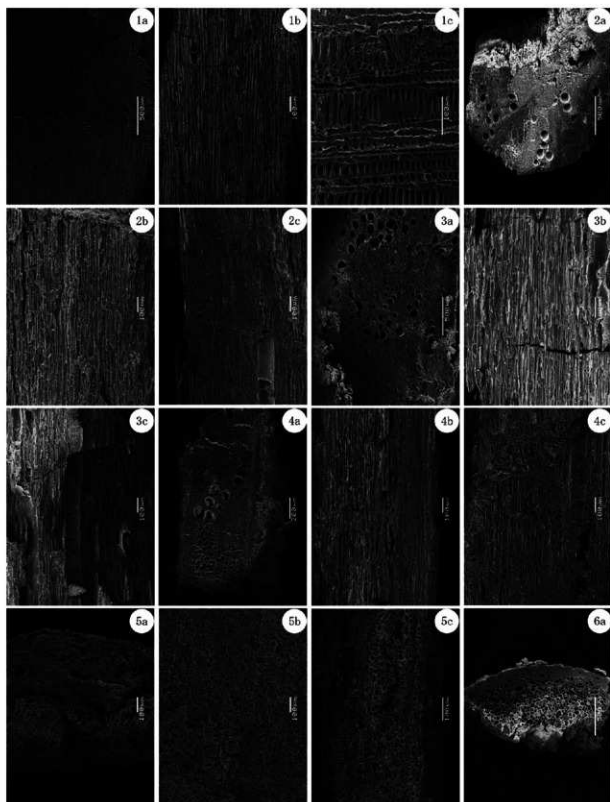
③ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* (Thunb.)  
Schottky プナ科 第262図 4a-4c (No.22)

年輪のはじめに大型の道管が不連続に1~3列並び、晩材部では急に径を減じた薄壁で角張った道管が火災状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものとして集合放射組織がみられる。

ツブラジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難ではない。

④広葉樹樹皮 Broadleaf-wood Bark 第262図 5a-5c (No.24)

師管要素と放射組織で構成される広葉樹の樹皮である。放射組織は単列である。対象標本が少なく、同定には至っていない。



1a-1c. マツ属複雑管束亜属 (No. 28)、2a-2c. スダジイ (No. 14)、3a-3c. (No. 16)、4a-4c. ツブラジイ (No. 22)、5a-5c. 広葉樹樹皮 (No. 24)、6a. イネ科 (No. 12)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

第262図 小牧南遺跡 (第3次) 出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

⑤イネ科 Subfam. *Bambusoideae* 第262図 6a (No.12)

向軸側の原生木部、その左右の3個の後生木部、背軸側の篩部の三つで構成される維管束が散在する単子葉植物の桿である。維管束の配列は不整中心柱となる。維管束鞘の細胞は比較的薄い。

イネ科はタケ亜科やキビ亜科など7亜科がみられる単子葉植物であるが、対照標本が少なく、同定には至っていない。

#### (4) 考察

古墳時代初頭の焼失住居跡であるS H349から出土した炭化材は、スダジイが12点、イネ科が2点、ツブラジイと広葉樹樹皮が各1点であった。試料はいずれも焼けた建築材と考えられている。スダジイとツブラジイは、比較的堅硬だが比較的加工しやす

いという材質を持ち(伊東ほか, 2011)、建築材に選択的に利用されていたと考えられる。広葉樹樹皮とイネ科については、屋根の被覆材として利用されていたと考えられる。

中世の火葬穴であるS X351から出土した炭化材は、いずれもマツ属複雑維管束亜属であった。S X351からは炭化材と共にヒトの骨も出土しており(本章第10節参照)、試料は遺体を茶毘に付した際の燃料材の残渣と考えられる。マツ属複雑維管束亜属は油分が多く、高温で燃焼する、という材質で(伊東ほか, 2011)、燃料材に適しており、選択的に利用されたと考えられる。

#### 引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部久・内海泰弘・山口和穂(2011) 日本有用樹木誌, 238p, 海青社。

## 第10節 骨同定

小牧南遺跡(第3次)の火葬墓S X351出土人骨  
中村賢太郎(パレオ・ラボ)

### (1) はじめに

朝明川中流南岸の河岸段丘上に立地する小牧南遺跡の第3次調査では、鎌倉時代の火葬墓S X351から人骨が出土した。ここでは人骨の部位同定結果と観察所見を報告する。

### (2) 試料と方法

試料は、鎌倉時代の火葬墓であるS X351から出土した人骨である。発掘調査現場で、骨1~7の番号を振って取り上げられたものである。なお、骨1~7のうち、骨3は骨ではないと見られる。

観察は肉眼で行い、標本との比較により部位を同定した。

### (3) 結果

人骨は全て破片化しており、最も大きい骨片でも5cm程度であった。色調は白色であった。表面に亀裂が走る骨片が多く見られた。

焼骨の色調は、焼成温度により変化し、500度前後で黒色、600度から900度は灰色から白色、900度

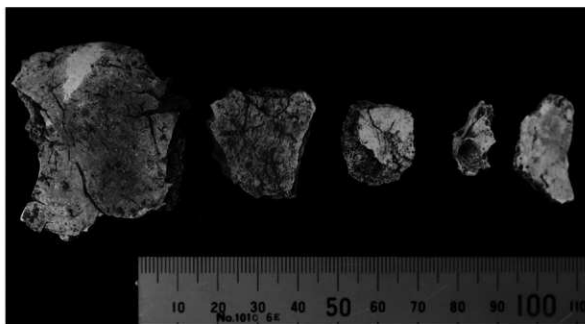
以上では白色や淡黄色となるとされる(Brothwell, 1981; Buikstra and Ubelaker, 1994; Krogman and Iscan, 1986)。したがって、S X351の人骨は900度以上の熱を受けたと考えられる。また、白骨化した骨では生じにくい、焼かれた際の収縮に伴う亀裂が見られる点から、焼かれた時点では、肉などの軟質部が付着したままであったと考えられる。

確認できた部位は、頭蓋骨のみである。骨片の重量は合計19.5gである。頭蓋骨以外の部位が確認できず、量も少ないため、S X351で火葬された人骨の大部分はS X351外へ持ち出され、埋葬された可能性が考えられる。

年齢と性別が判断できる部位は確認できなかった。

#### 参考文献

Brothwell, D. R. (1981) Digging up Bones. 206p. British Museum (Natural History).  
Buikstra, J. E. and Ubelaker, D. H. (1994) Standards for Data Collection from Human Skeletal Remains. 206p. Arkansas Archeological Survey.  
Krogman, W. M. and Iscan, M. Y. (1986) The Human Skeleton in Forensic Medicine. 551p. C. C. Thomas.



第263図 小牧南遺跡（第3次）の火葬墓SK351出土人骨

## 第11節 炭素・窒素安定同位体分析

### (1) 試料

埋設土器S X279に使用されていた縄文土器深鉢の内面に付着した炭化物について、起源物質を推定するために、炭素と窒素の安定同位体比を測定した。また、炭素含有量と窒素含有量を測定して試料のC/N比を求めた。分析はバレオ・ラボが実施した<sup>1)</sup>。

分析対象とした遺物は内面に炭化物が付着した縄文土器片で、一次調査トレンチ2において出土したものである。胴部下部の破片と底部の破片とがあるが、分析試料とした炭化物は胴部下部の破片の内面から採取されている(PLD-21562)<sup>2)</sup>。

### (2) 分析

試料は、測定前に酸・アルカリ・酸洗浄(HCl: 1.2N, NaOH: 0.1N)を施して試料以外の不純物を除

去している。

炭素含有量および窒素含有量の測定は、EA(ガス化前処理装置)であるFlash EA1112(Thermo Fisher Scientific社製)を用いて行い、スタンダードにはアセトニトリル(キシダ化学製)を使用している。

また、炭素安定同位体比( $\delta^{13}\text{C}_{\text{org}}$ )および窒素安定同位体比( $\delta^{15}\text{N}_{\text{org}}$ )の測定は、質量分析計DELTA V(Thermo Fisher Scientific社製)を用いて行い、スタンダードには炭素安定同位体比にIAEA Sucrose (AMU)、窒素安定同位体比にIAEA N1を使用している。

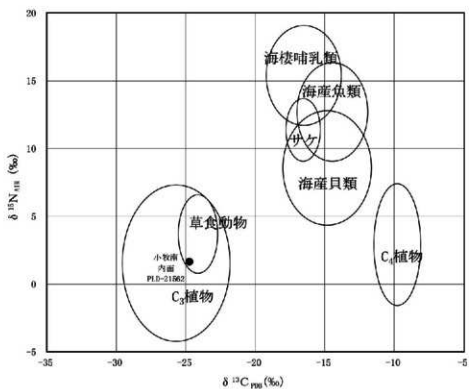
測定は、以下の手順で行っている。

①スズコンテナに封入した試料を超高純度酸素と共にEA内の燃焼炉(温度1000°C)に落とし、スズの酸化熱を利用して高温で試料を燃焼、ガス化させ、酸化触媒で完全酸化させる。

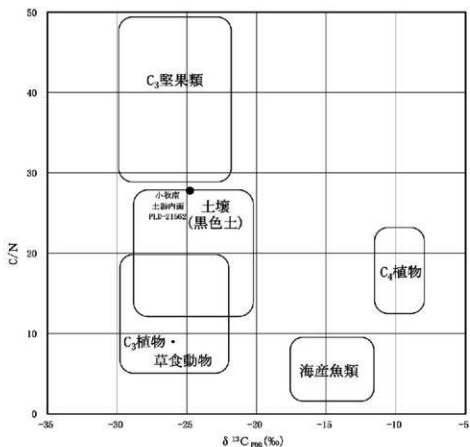
第25表 測定結果

試料番号	試料名	$\delta^{13}\text{C}_{\text{org}}$ (‰)	$\delta^{15}\text{N}_{\text{org}}$ (‰)	炭素含有量 (%)	窒素含有量 (%)	C/N比
PLD-21562	小牧南遺跡 一次 T2 (中央) 資料2 土器片(胴下部内面) 土器付着炭化物	-24.7	1.62	43.4	1.83	27.7





第264図 炭素・窒素安定同位体比



第265図 炭素安定同位体比とC/N比の関係



第266図 小牧南遺跡の試料

②還元カラムで窒素酸化物を還元し（還元炉温度680℃）、水を過塩素酸マグネシウムでトラップ後、分離カラムでCO<sub>2</sub>とN<sub>2</sub>を分離し（分離カラム温度45℃）、TCDでそれぞれ検出・定量を行う。

③分離したCO<sub>2</sub>およびN<sub>2</sub>を、そのままHeキャリアガスと共にインターフェースを通して質量分析計に導入し、安定同位体比を測定する。

以上によって得られた炭素含有量と窒素含有量に基づいてC/N比を算出した。

### （3）分析結果

炭素安定同位体比、窒素安定同位体比、炭素含有量、窒素含有量、C/N比を第25表に示した。また、炭素安定同位体比と窒素安定同位体比の関係を第264図、炭素安定同位体比とC/N比の関係を第265図に示

している。

S X 279の試料は、第264図によるとC植物・草食動物のゾーンに含まれている。また、第265図においては土壌（黒色土）のゾーンに含まれる。第264図の状況からみると、S X 279の土器内面に付着した炭化物はC植物・草食動物に由来する可能性が考えられるが、炭素窒素比が高いことから、主にC植物に由来するものと推定される。

### 註

- 1) 分析者は山形秀樹・中村賢太郎の両氏。なお、分析報告は他の遺跡と併せて作成されていたため、本節は小牧南遺跡に関する部分を抜粋し、再構成したものである。
- 2) 試料は放射性炭素年代測定に用いたものと同じであるため、試料番号も同一である（本章第2節）。

## 第12節 蛍光X線分析

### （1）分析試料

小牧南遺跡から出土した縄文土器や土師器の中には、器面を赤色顔料で赤く塗彩したものや、中に赤色顔料を入れていたと考えられるものなどがみられた。そこで、これら土器類に付着する赤色顔料の種類を検討するため、蛍光X線分析を行った。

分析対象としたのは、第2表に示した10点の土器である。このうち、1231は内部に赤色顔料を入れていたと考えられるもので、390はルーペによる観察でごく微量の赤色顔料が付着しているように見受けられたものである。そして、それ以外は赤色顔料が

器面に塗布されているものである。こうした赤色の土器は他にも複数出土しているが、遺構内から出土し赤色顔料が明瞭に遺存しているものを分析対象と

第26表 測定条件

	測定条件1	測定条件2	測定条件3	測定条件4
測定時間（秒）	60	60	60	60
有効時間（秒）	60	60	59	60
コリメータ	φ1.0mm	φ1.0mm	φ1.0mm	φ1.0mm
励起電圧（kV）	50	50	15	15
管電流（μA）	1000	1000	1000	1000
フィルター	Pb用	Cd用	Cl用	OFF
マイラー	カバー	カバー	カバー	カバー
雰囲気	大気	大気	大気	大気
ビーキングタイム	1.0usec	1.0usec	1.0usec	1.0usec

して測定した。

これらの土器について、赤色顔料が付着・塗布されている箇所（赤色部）を対象として分析を行ったが、比較試料として、同じ遺物の赤色顔料が付着していないと思われる部分（非赤色部）についても同時分析を行った。

## (2) 分析方法

分析は、三重県総合博物館に依頼して行った。分析機器はエスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型の卓上型蛍光X線分析装置SEA1200VXである。装置の仕様は、X線管が最大電圧50kV、電流1mAのロジウム（Rh）ターゲット、分析領域が径1mmまたは8mm、検出器がSi半導体検出器で、検出可能元素はナトリウム（Na：元素番号11）～

ラン（U：元素番号92）である。

対象とした遺物は試料室に収まるサイズであったため、遺物から試料の採取を行わず、直接遺物の赤色部及び非赤色部の分析を行った。

測定は、赤色部をピンポイントで測定するために分析領域を径1mmとし、測定時間を60秒、試料室内の雰囲気は大気雰囲気とした上で、測定時間、電圧、フィルター等の条件を変えて4回行っている（第26表）。

## (3) 分析結果

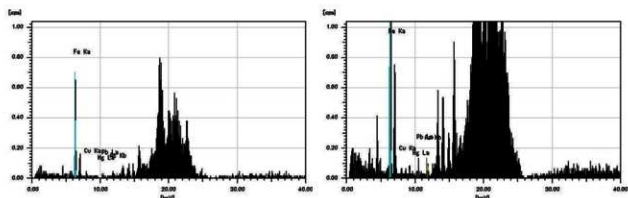
測定条件1による定性分析の結果を第267～269図に示した。いずれの試料でも赤色部では鉄（Fe）のスペクトルが高いピークとして検出されている。IF法による半定量分析によっても、鉄（Fe）の濃度が

第27表 蛍光X線分析結果一覧

報告No.	種別	器種	出土通稱	測定箇所（赤色部）	測定箇所（非赤色部）	結果
3	土師器	小型器台	S11143	口縁部内面（赤色強い箇所）	坯部外面（頸部付近の胎土露出部）	ベンガラ
390	縄文土器	浅鉢?	S11285	口縁部外面（赤色顔料微量に遺存する箇所）	口縁部内面	水銀朱?
687	土師器	壺	S11169/324	体部中位外面（赤色強い箇所）	体部中位外面（孔付近の胎土露出部）	ベンガラ
846	土師器	広口壺	S11175	体部外面（上半部の赤色物遺存箇所）	体部内面	ベンガラ
859	土師器	広口壺	S11177	口縁端部外面（腹口縁内の赤色強い箇所）	口縁端部剥離面	ベンガラ
947	土師器	広口壺	S11189	口縁部内面	口縁部外面	ベンガラ
1231	土師器	鉢	S11214	内面（赤色物が塊状に残る箇所）	体部外面	水銀朱
1405	土師器	広口壺	S11223	口縁部内面	口縁部破断面	ベンガラ
1888	土師器	広口壺	S11338	体部中位外面（文様帯直下の赤色強い箇所）	体部中位内面	ベンガラ
2272	土師器	広口壺	S11348	体部中位外面（赤色強い箇所）	体部中位内面	ベンガラ

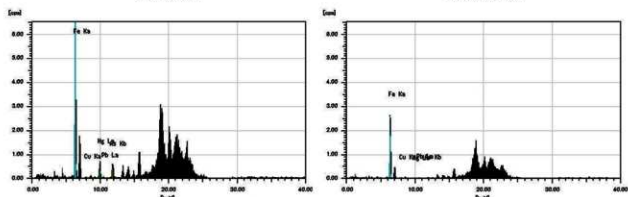
第28表 半定量分析結果

報告No.	測定箇所	Fe	Cu	As	Sn	Hg	Pb
3	赤色部	78.13 (wt%)	4.00 (wt%)	12.02 (wt%)	5.85 (wt%)	0.00 (wt%)	0.00 (wt%)
	非赤色部	92.45 (wt%)	1.24 (wt%)	3.97 (wt%)	1.67 (wt%)	0.66 (wt%)	0.00 (wt%)
390	赤色部	88.49 (wt%)	0.33 (wt%)	0.00 (wt%)	0.73 (wt%)	9.97 (wt%)	0.47 (wt%)
	非赤色部	92.62 (wt%)	1.67 (wt%)	3.87 (wt%)	1.22 (wt%)	0.62 (wt%)	0.00 (wt%)
687	赤色部	98.82 (wt%)	0.18 (wt%)	0.22 (wt%)	0.59 (wt%)	0.14 (wt%)	0.05 (wt%)
	非赤色部	94.37 (wt%)	1.81 (wt%)	2.43 (wt%)	0.91 (wt%)	0.48 (wt%)	0.00 (wt%)
846	赤色部	38.80 (wt%)	35.77 (wt%)	0.00 (wt%)	14.37 (wt%)	11.06 (wt%)	0.00 (wt%)
	非赤色部	55.45 (wt%)	21.08 (wt%)	0.00 (wt%)	5.55 (wt%)	10.24 (wt%)	7.68 (wt%)
859	赤色部	88.89 (wt%)	2.87 (wt%)	3.18 (wt%)	3.88 (wt%)	1.18 (wt%)	0.00 (wt%)
	非赤色部	90.61 (wt%)	1.89 (wt%)	3.45 (wt%)	2.46 (wt%)	1.59 (wt%)	0.00 (wt%)
947	赤色部	98.13 (wt%)	0.51 (wt%)	0.76 (wt%)	0.53 (wt%)	0.07 (wt%)	0.00 (wt%)
	非赤色部	90.35 (wt%)	3.46 (wt%)	0.00 (wt%)	1.95 (wt%)	1.44 (wt%)	2.80 (wt%)
1231	赤色部	59.08 (wt%)	4.22 (wt%)	1.02 (wt%)	4.76 (wt%)	30.92 (wt%)	0.00 (wt%)
	非赤色部	93.26 (wt%)	0.93 (wt%)	3.83 (wt%)	1.63 (wt%)	0.35 (wt%)	0.00 (wt%)
1405	赤色部	90.96 (wt%)	1.49 (wt%)	2.83 (wt%)	2.63 (wt%)	2.08 (wt%)	0.00 (wt%)
	非赤色部	88.37 (wt%)	2.15 (wt%)	0.00 (wt%)	4.88 (wt%)	2.30 (wt%)	2.30 (wt%)
1888	赤色部	97.51 (wt%)	0.37 (wt%)	0.66 (wt%)	1.13 (wt%)	0.32 (wt%)	0.00 (wt%)
	非赤色部	89.46 (wt%)	1.86 (wt%)	2.91 (wt%)	4.69 (wt%)	1.08 (wt%)	0.00 (wt%)
2272	赤色部	94.72 (wt%)	1.37 (wt%)	2.02 (wt%)	1.06 (wt%)	0.83 (wt%)	0.00 (wt%)
	非赤色部	95.01 (wt%)	0.86 (wt%)	2.09 (wt%)	1.44 (wt%)	0.60 (wt%)	0.00 (wt%)



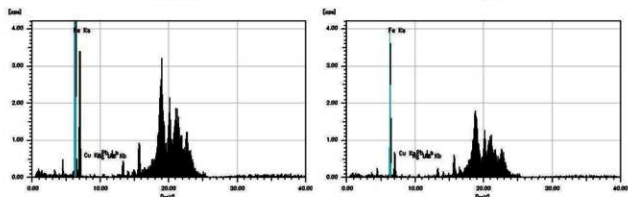
3 内面赤色部

3 外面非赤色部



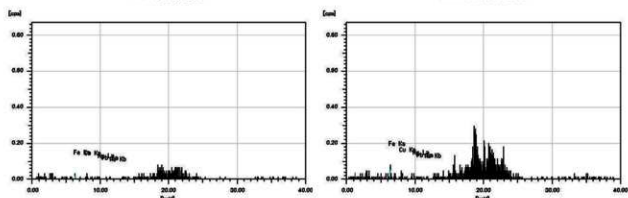
390 外面赤色部

390 内面



687 外面赤色部

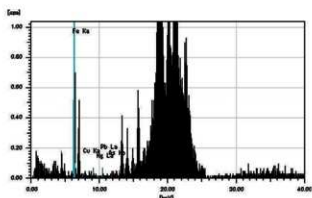
687 外面非赤色部



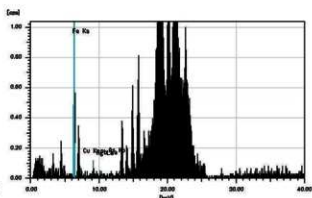
846 外面赤色部

846 内面

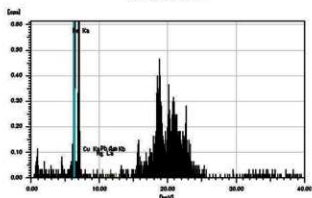
第267図 蛍光X線分析結果①



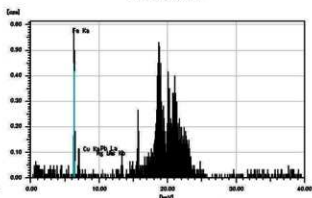
859 外面赤色部



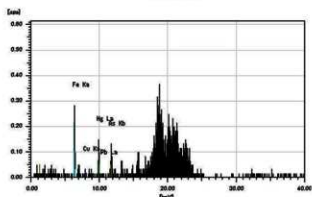
859 口縁緑断面



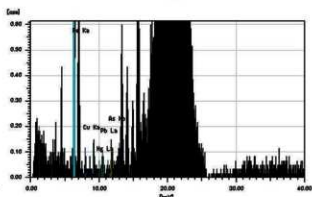
947 内面赤色部



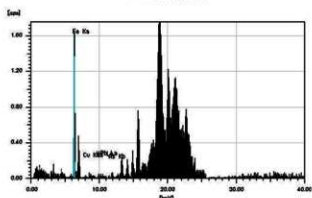
947 外面



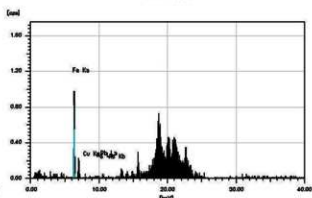
1231 内面赤色部



1231 外面

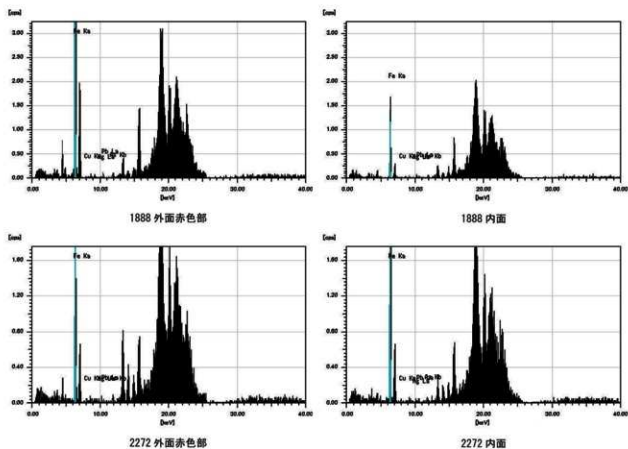


1405 内面赤色部



1405 破断面

第268図 蛍光X線分析結果②



第269図 蛍光X線分析結果③

高い(第28表)。このことは、塗布された赤色顔料に鉄(Fe)が多く含まれていることを示すと考えられる。しかしながら、赤色部だけでなく比較として分析を行った非赤色部でも同様の結果であるため、赤色顔料が薄くしか遺存していない3・846などについては、土器の胎土に含まれる鉄(Fe)も影響している可能性がある。

一方、ほぼすべての試料から水銀(Hg)も検出された。ただし、非赤色部においても検出されているため、土器に付着あるいは塗布されている赤色顔料とは無関係である可能性が高い<sup>1)</sup>。半定量分析の結果では、非赤色部においては水銀(Hg)の質量パーセント濃度は846を除き2.30wt%以下にとどまるため、赤色部の半定量分析結果においても2.30wt%以下の場合には赤色顔料に由来するものではないと考えられよう。したがって、3・687・859・947・1405・1888・2272の7点については、塗布されている赤色顔料は硫化水銀を主成分とする水銀朱(HgS)ではなく、酸化鉄を原料とするベンガラ(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)であると判断

される。

また、846については赤色部の水銀(Hg)及び銅(Cu)の質量パーセント濃度がかなり高いが、非赤色部も同様の数値を示しており、試料ないし分析時の何らかの条件が影響した可能性が高い。そのため、846についても塗布された赤色顔料はベンガラ(Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>)と考えられる。

残る390・1231については、赤色部の定性分析結果において水銀(Hg)の明瞭なピークが認められる。さらに、半定量分析の結果をみると、赤色部と非赤色部とで水銀(Hg)の質量パーセント濃度に大きな差がある。したがって、390・1231の2点については硫化水銀を主成分とする水銀朱(HgS)が付着していると判断される。

#### 註

- 1) 原因は不明であるが、土器の洗浄が不十分で土壌が器面に遺存していたか、分析時の何らかの条件などが影響した可能性が考えられる。

## 第IX章 調査のまとめと考察

### 第1節 縄文時代の集落について

#### (1) 集落の時期と変遷

小牧南遺跡で検出された縄文時代の遺構には、わずかに早期の集石遺構や後期前葉の可能性のある陥穴があるものの、集落を形成する竪穴建物・平地式建物11棟や掘立柱建物8棟をはじめとするほとんどの遺構は、縄文時代中期末葉のものと考えられる。今回の調査において出土した土器の中には明確に中期後葉に遡るものは認められ、また、後期前葉に下る土器もごく少量が遺構埋土層などから出土したに留まるため、縄文時代の集落が営まれた時期は中期末葉に限られると考えてよからう。

各遺構の並存関係については、出土土器が少ないものもあるため、不明な部分も多い。しかしながら、土器がまとまって出土したSH191とSH248の土器の様相を比較すると、SH191出土土器がやや古く位置付けられよう。一方で、SH248の土器埋設がに使用されていた土器はSH191出土土器よりも古い様相を示しており、SH248機能時期→SH191埋没時期→SH248埋没時期という変遷がたどれそうである。

遺構の重複関係からみても、SH248とSB292のように重複する遺構があることから、すべての遺構が同時並存していないことは確実である。さらに、SB287とSB292もほぼ接しており、SB292では土層断面から柱を抜き取ったり切断した可能性が考えられることなどを鑑みると、これら2棟の掘立柱建物にも先後関係があることが推測できよう。したがって、SH248も含めて少なくとも3段階の遺構の変遷を想定してよからう。

以上からは、複数の時期における集落の重複によって、現状の遺構分布状況が形成されているものと考えられる。出土遺物による個々の遺構の詳細な機能時期の特定は困難で、具体的な集落の変遷状況は示せない。ただ、建物の種類を問わず3段階の変遷を想定するならば、竪穴建物・平地式建物は3・4棟、

掘立柱建物は2・3棟が同時に並存していたと推測される。集落の規模としては、小規模であった可能性が高い。

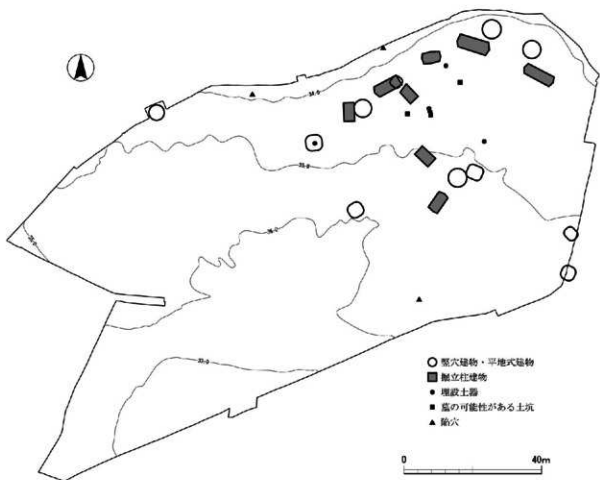
伊勢地域では、縄文時代中期末葉の集落はそれまでの時期に比べて小規模化・拡散化するとされており、竪穴建物1・2棟程度で構成されるような集落が多いと考えられている<sup>1)</sup>。それに比べると、小牧南遺跡の集落は大規模であったとも考えうる。ただし、想定したよりもさらに複数段階の集落変遷があった可能性も高いため、一般的な集落とそれほど変わらないか、やや大きい程度の規模とみておくのが妥当だろう。

#### (2) 集落の構造

**建物の構成** 小牧南遺跡には、竪穴建物と掘立柱建物の他に、平地式建物の可能性が考えられるものが4棟ほど存在する。これらはいずれも炬を有しており、ピットが円形に並ぶことなどから、建物とみて問題ないと考えられる。ただし、SH301・360などは壁際溝とみられるものが一部検出されていることなどから、削平等により浅くなった竪穴建物の可能性もある。実際に、竪穴建物と考えられるSH147やSH355なども、検出された掘り込みは浅い。

しかしながら、明確に掘り込みを有する竪穴建物と、平地式建物の可能性が考えられる建物とは、掘り込みの有無以外にも相違点が認められる。まず、平地式建物と考えられるものは、いずれも小型のピットが建物の外周に沿ってほぼ等間隔に円形にめぐることが<sup>2)</sup>、竪穴建物には認められない。そして、竪穴建物では4箇所の主柱穴が明確に検出されているのに対して、平地式建物と考えられるものでは、明瞭な主柱穴が検出できないか、主柱穴と推定されるピットが存在しても整然と並ばない。

したがって、これらが平地式の建物かどうかは措くとしても<sup>3)</sup>、小牧南遺跡の集落では、竪穴建物と掘立柱建物以外に、構造が異なる建物がもう1種類



第270図 縄文時代遺構分布図

存在したと考えるのが妥当だろう<sup>41</sup>。

一方で、竪穴建物と平地式建物、そして掘立柱建物の共存は厳密には確認できないため、時期を異にする可能性も否定できない。これら3種類の建物が並存して集落を構成していたのかは不明である。

ただ、伊勢湾沿岸地域の中期の掘立柱建物が検出された他の遺跡では、掘立柱建物単独で構成される集落の存在は想定しにくく、いずれも竪穴建物と掘立柱建物によって構成される集落の存在が想定される。これを鑑みれば、少なくとも竪穴建物ないし平地式建物と掘立柱建物は並存し、ともに集落を構成していたと考えられる。

掘立柱建物同士にも先後関係があると推測されることを加味すれば、小牧南遺跡では、竪穴建物・平地式建物と掘立柱建物で構成される集落が、3時期程度にわたって営まれたと想定できよう。

なお、竪穴建物と平地式建物が並存したかどうか

については、不明といわざるを得ない。竪穴建物SH191と平地式建物SH184が接しており同時並存が考えにくいことを踏まえれば、時期によって建物の形態が変化した可能性も考えられよう。

**環状構造** 通時的な建物の分布をみていくと、まず、調査区北東部に建物が集中する(第270図)。これらは標高34mの等高線沿いに、弧を描くように帯状に分布する。そして、その南側の標高35~36m付近にもSH184・191・335、SB327などの遺構がみられる。両者の間には建物が検出されていない空間が存在するため、全体として楕円形の環状に建物が分布するように見受けられる。SH143・147は若干東に外れるが、一連の建物分布の一端として捉えることも可能だろう<sup>41</sup>。

そして、この環状の建物配置を基準としてみていくと、SK135・137・138のように土壌墓の可能性のある土坑や、建物に伴わない埋没土器は、いずれ



も内部の空間に存在する。逆に、陥穴はいずれも外側にやや離れて位置する。これは、環状の建物配置に沿って他の施設も配されていたことを示す。したがって、小牧南遺跡の集落は、地形にある程度制約を受けつつも、全体として環状の構造を指向していた可能性が高いと考えられる。

先に推定したように、縄文時代中期後葉の間に複数回の集落の変遷があったとすれば、それにも関わらず、空間利用には常に一定の傾向があったことになる。

**掘立柱建物の並存** 小牧南遺跡の集落の最大の特徴は、掘立柱建物が集落に伴う点である。

掘立柱建物は、先に見いだした環状の建物の並びの中では、竪穴建物・平地式建物よりやや内側に位置する傾向があるように思われる。

こうした集落内における掘立柱建物の配置傾向は、広くみられるようである。東日本で掘立柱建物が見出された遺跡では、一般的に建物による環状構造が認められ、掘立柱建物は竪穴建物よりも内側に配置される傾向が強いことが指摘されている<sup>9)</sup>。

環状の建物配置、そしてその中における掘立柱建物の位置などにおいて、小牧南遺跡の状況が他地域の掘立柱建物が検出された遺跡の諸事例との共通性を有すると考えられることは、小牧南遺跡では掘立柱建物のみではなく、集落形成に関わる慣習・観念ないし集落デザインも他集団と共有していることを示す。掘立柱建物が他地域からもたらされたと考えれば、単純に掘立柱建物の構築技術だけを受容したのではなく、掘立柱建物を構築する社会からの影響を、社会構造や生活様式、観念等も含めて受容した結果であると推測できるだろう。

一方、伊勢地域で小牧南遺跡の他に縄文時代中期の掘立柱建物を伴う集落は、今のところ鈴山遺跡しか確認されていない。伊勢地域でも特定の集落にのみ掘立柱建物が存在したとすれば、前述のような社会構造・生活様式等の受容について、地域内で集団間に差異があった可能性、もしくは、集落間に性格の差異があった可能性も考えられよう。

しかしながら、縄文時代中期後葉～末葉の集落を広く調査した事例が少ない現在、伊勢地域における当該期の集落において、掘立柱建物がごく限られた

特定の集落にのみ存在したと断定することは尚早かもしれない。柱穴の可能性を踏まえた土坑の土層の検討など、今後の調査研究において、掘立柱建物の存在にも留意することが必要と思われる。

### (3) 建物・炉の廃絶について

小牧南遺跡では、建物や炉の廃絶に際しての何らかの行為を示唆する痕跡が、いくつか見いだされた。それらは建物を放棄する際の儀礼等とも関係する可能性があり、集落の動態とも関わってこよう。

**建物の廃絶** SH191では、多量の土器が竪穴建物内に埋積している状況が確認できた。

竪穴建物内から完形ないし完形に近い土器が多量に出土する事例は、関東地方を中心に吹上パターンなどとして注目され、集団移動、建物の廃絶・ライフサイクル、廃棄行為、土器製作、儀礼、埋葬など、様々な観点から検討対象とされてきた<sup>7)</sup>。SH191の事例は、完形に近い土器はそれほど多くないものの、こうした土器の出土状況が伊勢地域でも存在する可能性を示すと同時に、上述のような様々な観点からの縄文時代社会の分析に有効な資料となり得るものである。

SH191は遺構上部がかなり削平されており、埋土は20cm程度しか遺存していなかったため、埋土の分層や層位ごとの遺物の取り上げはできなかった。したがって、建物廃絶後の一次堆積土の存在等は明確にできていないが、出土状況から土器の廃棄ないし放棄にかかる行為について、いくつかの情報を得ることができた。

まず、出土した土器には大部分が復元できたものが数個体あったが、最大でも全体の50～60%ほどの遺存に留まり、いずれも完形には復元できなかった。そして、それ以外にもかなり多くの個体の破片が存在している。つまり、基本的に破損した土器が建物跡内に入れられたと考えられる。

また、大部分が復元できた土器も、破片の出土位置にかなり広がりが見られる。埋没過程で分散した可能性もあるが、大きな破片が離れて出土したものもあり(30・31など)、同じ個体の破片をまとめて置くという意識は低い。破片の出土状況をもみても、丁寧に置かれた様相は見いだせない。

そして、これら埋土中から出土した土器には、大きな時期差は見いだせない。また、建物内の炉の内部からもかなり復元できる土器が出土しているが、その土器と埋土中出土の土器にも大きな時期差は考えにくい。多数の土器が、建物廃絶後、短期間の内に入れられていると思われる。

さらに、土器とともに石器も一定量出土しており、土器だけに限った行為ではない。石器には破損品と完成品が認められる。

上記のような様相は、小牧南遺跡において堅穴建物の廃絶後に何らかの意識に基づいた多量の土器・石器の廃棄・放棄行為が存在したことを示唆するだろう。関東地方などで確認されている事例とも多くの特徴が類似するが<sup>21)</sup>、行為の共通性を示すものかどうかは検討を要する。

一方、SH248でもまとまった量の土器が埋土中から出土しており、SH191との比較において注意される点がある。

SH248では、土層断面等からみると、床面直上ではなく、建物内がやや埋没した後には堆積した土層を中心に土器が多く出土しているようである（第21図A-A'・B-B'断面第2層）。埋土中出土の土器には、大きな破片も含まれているが、完形近くまで復元できるものはない。これら埋土中出土の土器には、太い沈線のみで施文した深鉢がみられるが（243・252）、土器埋設炉に用いられていた土器は比較的しっかりしたキャリパー形の器形を呈し、隆帯によって渦巻文や区画文を描くなど、小牧南遺跡出土の縄文土器の中でも古い様相を示しており、両者の間には時期差があると考えられる。

以上で挙げた点については、SH191の様相とは異なるように思われる。SH248の埋土中出土の土器は、自然堆積による流入など人為的なものではなかった、あるいは、何らかの観念を伴うような行為ではなく、単なる廃棄によるものであったなどの可能性があろう。

いずれにしても、伊勢地域においても堅穴建物内からの土器出土状況に複数の形態が存在することには、建物の廃絶や、それに伴う土器の廃棄・放棄等の行為や儀礼について明らかにする上で、注意しておかねばならない。

**炉の廃絶** 炉の廃絶についてまず取り上げておきたいのは、SH355に伴う石囲炉の状況である。

この石囲炉では、石囲炉の中央の埋土上面に拳大のチャートの円礫が置かれていた。礫に被熱は認められず、また周辺に他の礫は認められないことなどから、意図的に置かれた可能性が高い。問題は、炉底の被熱部とそのチャート円礫の間に黒色土が厚さ15cmほど堆積していることである（第26図第1層）。このことから、炉の廃絶後しばらく時間が経過し、埋没が進んだ過程で円礫が置かれたようにも思われる。ただし、炉と同時に建物自体も放棄されたとするならば、建物の上屋の崩壊や埋没も伴うはずで、その過程でタイミング良く炉の石組みと同一のレベルに円礫を置くことは想定しがたい。一方、堆積した黒色土は均質で、炉で燃焼された木材の炭等の堆積によるものとも考えられる。この推定が首肯されるならば、やはり炉の使用を停止した段階で、内部に堆積した炭等の上に円礫を置いた可能性が高いだろう。

SH355の石囲炉と類似すると思われるのは、SH147に伴う土器埋設炉SF139である。この炉では、炉体となった深鉢内に堆積した堆積土の上面に、径15cmほどの垂角礫が置かれていた。焼土が多く含まれていたのはこの礫を含む土層より若干下位に堆積していた土層で（第12図第2層）、堆積状況もSH355石囲炉と共通する。

この2例からは、炉の廃絶に伴って炉内に意図的に礫を置くという行為が存在したと推定される。

もう一つ炉の廃絶で注目されるのは、SH184に伴う石囲炉SF185と、SH360に伴う石囲炉である。この2つの炉は、石囲炉と推測したものの、検出された礫が少ない上にきれいに並ばず、不整形である。特に、SH360の炉は掘形も不整形である。これらは、石囲炉であったものが、廃絶に伴って炉石が抜き取られ、敷されたものである可能性が考えられる。SF185では炉石とみられる礫に混じって石皿（台石）の破片が出土していることも、炉の廃絶に伴って何らかの行為が行われていた可能性を示唆するだろう。

これに関連するものとして、SH344に伴う炉SF343が挙げられる。この炉では内部から礫が少量

検出されたのみで地床炉とも考えられるが、炉の側壁に被熱がほとんど認められなかった。本来は石囲炉であったものが、廃絶に伴って石がすべて抜き取られたとも考えられる。

こうした事例からは、石囲炉の廃絶にあたって、炉石を抜き取った、石囲いを破壊するような行為があったと推測される。

そしてもう一つ、SH191の炉の状況にも注意しておきたい。この炉は地床炉であるが、底面付近に多数の土器片が敷かれていた。最も下層に敷かれていたのは1個体の深鉢の破片であるが、底面全体ではなく、部分的に敷かれていたようである。防湿等の目的であれば、全体に敷く方が効果的であると思われるため、そうした目的で敷かれたとするには疑問が残る。また、付近の埋土には焼土が顕著に含まれているが(第16図第3層)、土器そのものには顕著な被熱は認められない。こうした点を踏まえると、この土器片は炉の廃絶に伴って入れられた可能性も考えられるだろう。

また、SH248の炉も底面に土器片が敷き詰められている。この炉では底面全体に土器片が敷かれているが、土器片に顕著な被熱は認められず、また、炉内の埋土にも焼土があまり含まれていない。したがって、これについても土器敷炉ではなく、炉の廃絶に伴って土器片が入れられた可能性を考えうる。

SH191・248の事例は、炉の廃絶に伴って、炉内に土器片を敷くような行為があった可能性を示す。

以上のように、小牧南遺跡では3種類の炉の廃絶に伴う行為の存在が推定される。これまでにも、炉の廃絶に伴って、これらと同様の行為が認められることが関東地方などで指摘されている<sup>1)</sup>。炉の構造と行為内容との対応関係や、時期的変遷、地域性などにはまだ不明な点も多いが、広域にわたって炉の廃絶に伴う行為に共通性が看取されることは重要で、伊勢地域においても注視しておく必要がある。

そして、炉の廃絶に伴う行為には、炉に対する特別な観念の出現や、その多様化・複雑化が関係しているとも考えられている<sup>2)</sup>。SH355の炉に置かれていたような円籬は、甲信地方などで竪穴建物内から出土する事例が知られており、「丸石」などとして儀礼に関わる遺物として注意されている<sup>3)</sup>。また、

石囲炉に使用されている石材が遺跡の周囲で簡単に入手できることを踏まえれば、石囲炉の石材の抜き取りは、単に石材の再利用を目的とするとは考えにくく、別の目的があったとみるのが妥当である。こうしたことから、小牧南遺跡で認められた炉の廃絶に伴う行為には、何らかの儀礼的な側面があったと考えることも可能であろう。

## 註

- 1) 田村陽一2003『縄文集落の立地と規模—伊勢湾西岸地域の場合—』『関西縄文時代の集落・墓地と生業』関西縄文論集1 六一書房
- 2) 調査時に覆土したものも含む。掘削の結果、掘形が明確ではなかった等の理由で覆土と判断されたものが多く、ピットの可能性も十分考えられる。
- 3) 伊勢湾沿岸地域では平地式建物は後期以降に顕在化するとみられ、時期早にやや早いように思われる。ただし、岐阜県関ヶ原町中野遺跡では中期後葉の竪穴建物とともに、それとは柱穴の配置等が異なる平地式建物と思われるものも検出されており、小牧南遺跡の状況に近い。春日井市・長谷川幸志2003『岐阜県美濃地方における縄文時代建物遺構の変遷』『関西縄文時代の集落・墓地と生業』関西縄文論集1 六一書房
- 4) 実際は平地式の建物であったかについてはさらに検討が必要だが、以下では、とりあえず平地式建物としておく。
- 5) SH360のみはかなり西に外れており、別の解釈が必要と思われる。
- 6) 石井寛1995『縄文時代掘立建物址に関する諸議論』『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第6集 帝京大学山梨文化財研究所、堀沢祐一1997『縄文時代中期掘立建物の一考察—北代加茂下田遺跡掘立建物の検討—』『富山市考古資料館紀要』第16号 富山市考古資料館
- 7) 末木健1985『土器廃棄と集落研究』『論集日本原史』吉川弘文館、関間俊明2008『土器の廃棄』『総覧縄文土器』株式会社アム・プロモーション
- 8) 山本暉久1978『縄文中期における住居跡内一括遺存土器群の性格』『神奈川考古』第3号 神奈川考古同人会、黒尾和久1988『竪穴住居出土遺物の一般的あり方について—「吹上パターン」の資料論的検討を中心に—』『古代集落の諸問題』玉口時雄先生古稀記念事業会
- 9) 金井安子1997『縄文人と住まい—炉の処理をめぐる—』『青山考古』第14号 青山考古学会、関間俊明2008『屋内炉

## 第2節 縄文時代掘立柱建物の特徴と系譜

### (1) 掘立柱建物の特徴

**平面形・柱配置** 小牧南遺跡で検出された縄文時代中期末葉の掘立柱建物は8棟である。これらはいずれも長方形を基調とした平面形を呈するが、詳細にみると、大きく2種類に分けられる(第271図)。

まず、独立棟持柱をもたず、ベーシックな長方形の平面形を呈するものである。これをⅠ類としておく。S B 361が典型例であるが(ⅠA類)、S B 287のように平面形が台形を呈するもの(ⅠB類)もこれに含まれよう。

そして、やはり長方形であるが、梁行ラインから妻側に突出する独立棟持柱<sup>1)</sup>をもつものがある。これをⅡ類としておく。これにはS B 276やS B 285のように独立棟持柱を両側にもつもの(ⅡA類)と、S B 292のように片側にもつもの(ⅡB類)がある。

この他に、やや特異なものとして、S B 173/362のように梁行ラインに棟持柱をもつものと、S B 280のように桁行の間柱がやや外方へずれ、全体として八角形の平面形を呈するものがある。

S B 173/362は平面形からするとⅠ類の範疇であ

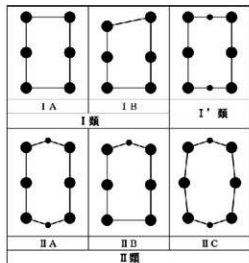
るが、棟持柱の柱穴が側柱の柱穴より小さいことから、構造としてはⅡ類とも共通性があり、Ⅰ類とⅡ類の中間的な形態といえるかもしれない(Ⅰ'類)。また、S B 280もやはり棟持柱の柱穴は側柱のものより小さく、また桁行の柱通りのずれも小さいため、Ⅱ類の中で把握するのが妥当だろう(ⅡC類)。

以上のように、小牧南遺跡の掘立柱建物は、平面形や柱配置から大きく2種類、細分すると6種類に分けることができる。8棟が6種類にも分けられるとすると、平面形態におけるばらつきは大きく、一定の規準に則って造られるものではなかったことが窺われる。

一方で、大きな方向性も認められる。まず、平面形が基本的に長方形となる点である。梁行は1間で、棟持柱以外の間柱は認められない。それに対して、桁行は2・3間が基本となっている。

そしてもう一つは、棟持柱に関わる点である。Ⅰ類に属する建物は3棟あるが、うち1棟は棟持柱をもつ。したがって、棟持柱をもつものが6棟で、主体を占めるといえる。これら6棟については、いずれも棟持柱の柱穴が側柱の柱穴より小さい点から、棟持柱の機能に差異はなかったと推測される。そして、棟持柱をもつ6棟のうち、両側に棟持柱を有するものが5棟を占めている。片側にしか棟持柱が検出されていないⅡB類のS B 292についても、S H 248との重複によって検出できなかった可能性も残されていることを鑑みると、棟持柱は基本的に両側に設置されるものであったと思われる。

以上から、梁行1間、桁行2・3間の長方形の平面形をベースとして、その両側の妻側に独立棟持柱を配するのが、小牧南遺跡における縄文時代中期の掘立柱建物における基本的な方向性であったと考えられる。これまでに、中期の掘立柱建物には棟持柱をもつものが少ないという指摘もあったが<sup>2)</sup>、小牧南遺跡の掘立柱建物の様相は、それとは異なる傾向



第271図 掘立柱建物の分類

を示すものといえる。

**柱穴** 柱穴は、古墳時代の建物に比べて大きく、柱痕もかなりの径がある。柱穴内から検出された炭化物の樹種同定ではクリが同定されており、クリの中径木が使用されていた可能性が高い。

注目されるのは、柱穴埋土である。柱を据えた際の裏込めにあたる土層が複数の柱穴において確認できるが、大型の柱穴では細かい単位で水平に土を入れており、版築状になっているものが見受けられる(SB276P2、SB285P7、SB292P1など)。そして、柱痕なしの柱の抜き取り痕跡が確認できる柱穴では、ほぼすべてにおいて、最下層に整地土と思われる薄い土層が認められる。

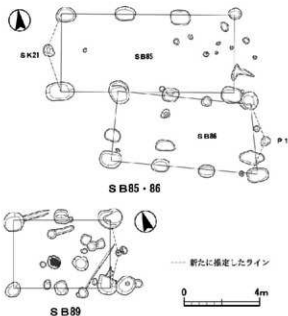
掘立柱建物を建てるにあたって柱を強固に据えようとした意識が窺われるとともに、複数の掘立柱建物でこうした土層の状況が確認できることから、柱の据え方には一定の方法が存在し共有されていたことが推測される<sup>31)</sup>。

## (2) 近隣の掘立柱建物との比較

**鈴山遺跡** 伊勢地域で縄文時代中期後葉～末葉の掘立柱建物が検出されている遺跡は、今のところ小牧南遺跡の西方約7kmに位置する菟野町鈴山遺跡のみである<sup>31)</sup>。この遺跡については、地理的に近接しているだけではなく、掘立柱建物の時期も小牧南遺跡とほぼ同時期かやや先行するとみられる。したがって、小牧南遺跡の掘立柱建物の位置づけを考える上で、比較検討は欠かせないだろう。

鈴山遺跡で検出された掘立柱建物は6棟である。いずれも棟持柱を持たないものとして報告されているが、詳細に検討すると、SB85・86・89については、梁行ラインの中央やや外側に出土遺物などから縄文時代の遺構と思われるピットが存在する(第272図)。建物の本体を構成する柱穴に比べて小規模であるために建物とは別のピットとされたが<sup>32)</sup>、小牧南遺跡の事例を踏まえれば、これらも棟持柱の柱穴と考えうるだろう。

そうみると、鈴山遺跡の掘立柱建物には小牧南遺跡における分類のⅠ類だけでなくⅡ類も存在していたと考えることが可能であり、小牧南遺跡と同様に、形態にはバリエーションがあったと推定できる。そ



第272図 鈴山遺跡掘立柱建物復元案(1/200)

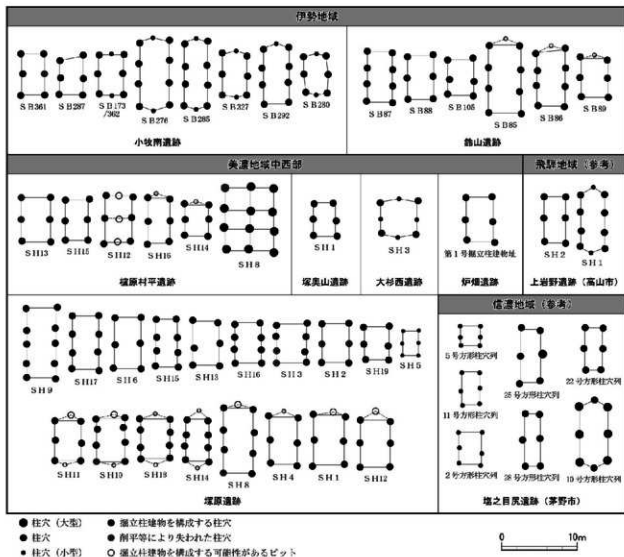
して、棟持柱は側柱よりも柱穴が小さく、梁行ラインからあまり外側へ突出しない点には、小牧南遺跡のⅡ類と構造上の共通性を窺うこともできる。

ただし、鈴山遺跡の棟持柱をもつ掘立柱建物がいずれもⅡB類とみられる点は、ⅡA類が多い小牧南遺跡とはやや異なるかもしれない。

**美濃地域** 伊勢地域に近接する地域では、尾張地域や近江地域においては縄文時代中期後葉～末葉の掘立柱建物は確認されていないようであるが<sup>33)</sup>、美濃地域中西部には当該期の掘立柱建物が検出された遺跡が複数存在している。岐阜県掛妻川町榎原村平遺跡<sup>34)</sup>、塚奥山遺跡<sup>35)</sup>、各務原市が畑遺跡<sup>36)</sup>、関市塚原遺跡<sup>37)</sup>、大杉西遺跡<sup>38)</sup>などが挙げられる。

これらの遺跡で検出された掘立柱建物には、大杉西遺跡で検出された棟持柱を両側にもつⅡA類に近い建物もあるが、ほとんどは平面形が長方形のⅠ類である。最も多数の掘立柱建物が検出されている塚原遺跡でも、いずれも棟持柱をもたないものとして報告されている。

しかしながら、詳細にみると、塚原遺跡の掘立柱建物には、側柱より小さな柱穴と思われるピットが棟持柱が想定される位置で確認できるものが多くみられる。また、榎原村平遺跡でも、棟持柱とも考えられるピットが付近に存在するものが認められる(第273図)。



第273図 掘立柱建物の平面形比較

検証は困難であるものの、美濃地域においても、側柱よりも小型の柱穴を伴う棟持柱を有する、小牧南遺跡のⅡ類に類する掘立柱建物がかなり存在していた可能性も考えられるのではなかろうか。

美濃地域中西部では、この他に特殊なものとして、黒原村平遺跡 S H 8 のような大型の総柱式の掘立柱建物が確認されている。

**近隣地域との類似性** 以上のように、小牧南遺跡の掘立柱建物の形態や様相は、近隣の鈴山遺跡と共通する点が認められる。また、美濃地域中西部の事例とも共通性を認める可能性が高い。

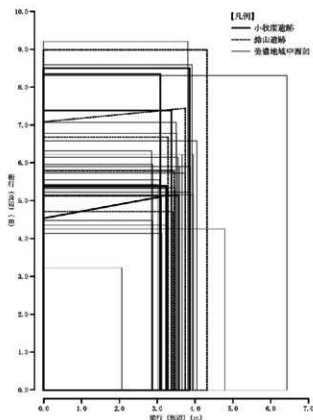
これらの遺跡・地域の縄文時代中期後葉～末葉の掘立柱建物の平面形をより詳細に比較してみても(第274図)<sup>2)</sup>、梁行(短辺)の長さは3～4mの間

に集中し、かなり共通性が高い。桁行(長辺)の長さにはややばらつきはあるものの、5～6m、7m前後、8～9mといった大きなまとまりがあり、やはり類似した規模のものがあることが窺われる。

こうした共通性からみると、小牧南遺跡や鈴山遺跡の掘立柱建物は、美濃地域中西部の掘立柱建物と何らかの関係があったと考えてよいだろう。

### (3) 掘立柱建物の系譜

伊勢地域を含む伊勢湾沿岸地域では、縄文時代中期の掘立柱建物は普遍的なものとはいえない。美濃地域中西部においても前節でみた程度で確認例は少ない。また、伊勢地域では縄文時代中期中葉以前に遡る掘立柱建物の検出例も認められない。こうした



第274図 掘立柱建物の規模の比較

ことから、伊勢地域や美濃地域中西部の掘立柱建物は、中期後葉～末葉における地域間交流の影響下で構築されたと考えられよう。

**波及経路の候補** 当該期には、北陸地方や甲信地方、関東地方、東北地方など、東日本各地で掘立柱建物が多数確認されている。

尾張地域や近江地域では当該期の掘立柱建物が未確認であることや、土器・黒曜石等の様相を踏まえれば、美濃地域中西部・伊勢地域への波及経路としては、越中・加賀地域あるいは信濃地域北部から飛騨地域を経る経路や、信濃地域南部から木曾川流域を経る経路、あるいは越前地域から越美山地を越えて美濃地域中西部に至る経路などが考えうる。

ただ、現状における美濃地域中西部での縄文時代中期後葉～末葉の掘立柱建物検出遺跡の位置をみると、木曾川流域に位置するのは加賀遺跡のみで、他の遺跡は長良川・掛斐川流域に位置する。信濃地域に接した美濃地域東部の木曾川流域では、中期の掘立柱建物は管見の限り確認されていない<sup>10)</sup>。

また、北陸地方でも加賀・越前地域では縄文時代

中期後葉～末葉の掘立柱建物の検出例はあまりないようである<sup>10)</sup>。

こうしたことを踏まえると、越中地域あるいは信濃地域北部から飛騨地域を介した経路の可能性が高くなるように思われる。実際、飛騨地域においては上岩野遺跡において時期不詳ながら中期後葉～末葉の可能性のある掘立柱建物が検出されており<sup>10)</sup>、うち1棟はⅡA類に該当する(第273図)。この建物は、棟持柱の柱穴が側柱に比べて小さい。

**信濃地域との相違点** これ以上の詳細な波及経路の推定は困難であるが、やはり中期後葉～末葉の掘立柱建物の検出数が非常に多い信濃地域からの影響は考慮しておくべきだろう。

信濃地域では、北部から南部まで、かなり広い範囲で当該期の掘立柱建物が多数検出されている。その中には、美濃地域中西部・伊勢地域と同じく平面形が長方形のⅠ類と棟持柱をもつⅡ類が併存している。Ⅱ類には、棟持柱の柱穴が側柱のものより小さいものが認められる。

ただ、全体としてみれば、相違点もあるように思われる(第273図)<sup>10)</sup>。まず、Ⅰ類については、梁行が狭く平面形が非常に長細い長方形を呈するものや、正方形に近い平面形を呈するものが多く存在する。美濃地域中西部や伊勢地域では大杉西遺跡SH3など例外はあるものの梁行の幅は3～4mほどの比較的幅がある長方形が基調で(第274図)、信濃地域の状況と明らかに異なる。

また、Ⅱ類についてはⅠ類に比べると数が少なく、ほぼⅡA類で占められている。そして、棟持柱がかなり外側に離れて位置するものや<sup>10)</sup>、棟持柱の柱穴が側柱と遜色ない大きさのしっかりした柱穴を掘っているものも認められる。棟持柱の位置や柱穴規模については、柱の機能ひいては屋根構造とも関わる可能性があり<sup>10)</sup>、留意しておくべき差異と思われる。

そして、柱穴の規模や埋土についても差異を認めうる。信濃地域の掘立柱建物の柱穴は、小牧南遺跡や鈴山遺跡と比べると小型のものが目立つ。柱穴埋土については、版築状に細かく施されている事例は、大型の柱穴であってもあまり目に付かない。埋土の状況が判明している事例が少ないことも関係しているかもしれないが、柱の据え方に関する差異があっ

た可能性もあろう。

以上からは、信濃地域から掘立柱建物が波及したと仮定した場合でも、伊勢地域へ直接的に掘立柱建物に関する情報をもたらされたのではなく、飛騨地域あるいは美濃地域中西部における何らかの変容等を経て、伊勢地域へと波及したと考えておくのが妥当だろうか。掘立柱建物に関する情報は、地域間交流の連鎖によって波及したものと考えておきたい。

## 註

- 1) 上層構造は不明であるが、位置や柱穴が小さいなどの理由により、独立棟持柱としておく。ただし、平面形は多角形として示す。第IV章第1節註8参照。
- 2) 石井寛1995「縄文時代掘立柱建物に関する諸議論」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第6集 帝京大学山梨文化財研究所
- 3) 北陸地方の縄文時代中・後期の掘立柱建物などもこうした版築状の柱穴埋土が確認されており、柱を立てる方法が広く共通していた可能性もあろう。駒形敏朗2006「新潟県長岡市若野原遺跡の掘立柱建物跡—縄文時代の掘立柱建物跡の検討に向けて—」『考古学の諸相II』 坂詰秀一先生古稀記念会、堀沢祐一1996「北代加茂下田遺跡の縄文時代の掘立柱建物について」『富山市考古資料館報』No.30 富山市考古資料館
- 4) 三重県埋蔵文化財センター2018『鈴山遺跡（第2・3次）発掘調査報告』
- 5) 調査担当者のご教示による。
- 6) 伊藤正人2003「愛知県における縄文集落研究の現段階」『関西縄文時代の集落・墓地と生業』関西縄文論集1 六一書房
- 7) (財) 岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『榑原村平遺跡』
- 8) (財) 岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007『塚奥山遺跡』
- 9) 各務原市教育委員会2018『伊豆田遺跡C地区（三ツ池遺跡）発掘調査報告書』
- 10) 関市教育委員会1989『塚原遺跡・塚原古墳群』
- 11) (財) 岐阜県教育文化財団文化財保護センター2006『大杉西遺跡』
- 12) 第274図では、棟持柱部分を除き、側柱を結ぶ方形のラインを比較した。図示した方形ラインは、各遺跡の報告書の平面図に示されたラインを基本として、なるべく多くの柱穴の中心近くを通るような方形を描いたものである。なお、多角形を呈する小牧南遺跡S B280はこの図に入れていない。
- 13) 春日井恒・長谷川幸志2003「岐阜県美濃地方における縄文時代建物遺構の変遷」『関西縄文時代の集落・墓地と生業』関西縄文論集1 六一書房
- 14) 新出直典2010「石川県における縄文時代建物遺構の変遷」『立命館大学考古学論集V』立命館大学考古学論集刊行会
- 15) (財) 岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005『上岩野遺跡』
- 16) 例として、長野県茅野市塩之日日遺跡の例を示した。信濃地域においても掘立柱建物には多様性が認められるようで、これが代表例とはできないかもしれないが、大凡の特徴は示していると思われる。茅野市教育委員会2006『塩之日日遺跡』
- 17) こうした特徴をもつ掘立柱建物は、信濃地域では後期に入ってから顕在化するようであり、後期に下るものが含まれている可能性もある。
- 18) 梁行ラインから外方に突出して立てられた柱が側柱と遜色ない柱穴を有する場合、側柱と同様の荷重を受けるものであったとも考えられ、棟持柱ではなく多角形建物の一隅である可能性が出てくる。また、柱穴が小さい場合は棟持柱と考えられようが、梁行ラインからの突出が大きい場合は独立棟持柱、小さい場合は近接棟持柱の可能性が考えられ、屋根構造の差異とも関わるだろう。宮本長二郎1998「掘立柱建物の出現と展開」『先史日本の住居とその周辺』同成社

## 第3節 縄文土器の様相

小牧南遺跡では伊勢地域北部において基準資料となりうるような充実した縄文土器の資料群が出土したが、本報告では体系的な整理と、それを踏まえた報告を十分に行うことができていない。

そこで、それに代えて、出土量が多い有文深鉢について、遺存状態が良好なものを中心とした大まかな分類を提示し<sup>1)</sup>、少しでも出土縄文土器全体の様

相が把握できるようにしたい。そして、特徴的な点についても簡単に触れておきたい。

### (1) 有文深鉢の分類

I類 器形としては、口縁部が緩やかに内湾するものが主体で、頸部の括れが比較的明瞭であるなど、キャリバー形に近い器形を呈する。波状口縁のもの



が多いが、平口縁のものもある。13・30・31・36～39・49・227・282・440などが該当する。

文様は、大きく口縁部と体部に分かれる。頸部に横位の陸帯や沈線による連弧文等を施して口縁部と体部とを明瞭に区分するものと(13・30・36・37など)、そうした区分が認められないものがある(31・39・282など)。

口縁部には、基本的に太い沈線で主文となる渦巻文を描く。主文が円形の区画文となったものもある(38・285など)。主文間には楕円形や隅丸方形の区画文を配し、明瞭な口縁部文様帯を形成する。区画文内は斜行沈線や条線で充填されるものが多い。わずかに縄文や刺突文で充填されるものもある。

主文となる渦巻文と区画文は、連続する沈線によって一体的に描かれるものが目立つ。中には、渦巻文が崩れ、区画文との一体化が進んだとみられるものもみられる(39・49など)。また、陸帯によって渦巻文や区画文を描いたものもあるが(227など)、ごく少数である。

体部は縦方向の文様構成となり、太い多条並行沈線や、陸帯や沈線による矢羽根状文が施されることが多い。わずかに蛇行沈線も認められる。

地文は無文もしくは条線のものも多く、縄文を施しているものは少ない。

なお、文様構成はⅠ類とほぼ同じで、大きく口縁部と体部に分けて太い沈線による文様が施されているが、口縁部の文様構成がかなり崩れ、主文や区画文が不明瞭となっているものが少数存在する。50・51などが該当する。

これらは、口縁部が直線的に外方へ開くか直立気味に立ち上がり、頸部の括れが弱いなど、Ⅰ類と若干器形も異なる可能性があり、Ⅰ'類として区分しておきたい<sup>2)</sup>。

**Ⅱ類** Ⅰ類と同様の器形であるが、基本的に平口縁で口縁部文様帯は単純化されており、加飾傾向が弱い。483・485などが該当する。252も加えられるかもしれない。

体部は基本的に無文となるものと思われる。縄文や条線なども認められない。文様の点においてⅠ類とは全体的な雰囲気はかなり異なっているため、Ⅱ類として区分しておく。

**Ⅲ類** 頸部の括れが弱いか、ほとんど括れないバケツ状の器形を呈する。口縁部が大波状口縁となる点が最大の特徴である。75～88・294などが該当する。

大波状部には、波頂部の側面を肥厚させて面を作り、文様帯とするものや(74・82など)、波頂部の側面に顕著な面を作らず文様も施さないもの(75・77・87など)、波頂部が筒状となるもの(84)など、いくつかのバリエーションがある。ただし、大波状部の文様は、中央に縦位の蛇行沈線やS字状文を描き、その両側にU字状あるいは三日月形の区画を描くものが基本となっている。

体部は遺存するものが少ないが、縦方向の文様構成となり、太い沈線によるH字形・逆U字形の文様を描くものや(87)、条線で充填した方形の区画文を配するものがみられる(88)。

地文には縄文を施すものが多い。条線も用いられている。

**Ⅳ類** 器形としては、頸部が明瞭に括れ、口縁部は直線的に外方へ開く。基本的に平口縁で、体部は比較的強く張る。4・14・15・89・91などが該当する。

頸部に横位の陸帯を貼り付けて口縁部と体部を区別し、口縁部は無文となるものが多いと思われるが、口縁端部に列点文を施すものがある(89)。また、頸部に縦位の橋状把手が付くものがみられる(89)。

体部は縦方向の文様構成となり、陸帯や沈線による矢羽根状文が施されるか、あるいは沈線によって区画文状に画し、その内部を条線で充填する。橋状把手には、沈線でS字状の双頭渦文などを描くものが認められる。

**Ⅴ類** 頸部の括れが比較的弱く、また、口縁部が内湾せずバケツ状に近い器形を呈するものが多いが、ややバリエーションがある。94・95・242・243などが該当する。

文様構成は口縁部と体部に分かれておらず、全体的に縦位の文様構成となる。口縁端部に刺突を加えているものもみられる(95・243)。文様は太い沈線によるものが主体で、多条並行沈線や蛇行沈線が施されるものがある(94・243)。また、全体に縄文や条線のみを施すものもあるが(95・242)、これらについては無文深鉢系のもので、沈線による文様とは分けて考えるべきかもしれない。ただし、いず

れにしても文様が簡素化されているような印象である。

**VI類** 全形が明らかなものがないが、キャリパー形に近い器形を呈すると思われる。器壁が薄く焼成が堅緻な点が特徴的である。408・631・632などが該当する。

口縁部文様帯は明瞭ではない。沈線と縄文を用いた充填縄文によって文様を描く点で、I～V類と大きく異なる。文様帯は基本的に横位に流れ、一部で沈線の端部が入り組んでいる。

## (2) 有文深鉢各級の位置づけ

**I類** 有文深鉢のうちI類は、器形や文様などからみて、東海地方西部の取組式や島崎Ⅲ式、山の神式等との関係で捉えられる要素がかなりみられる。

口縁部文様帯が明確に形成され、主文・区画文が比較的はっきりしている点や、主文が満巻文ではなく円形区画文となっているものが少数認められる点、口縁部・体部ともに文様が沈線主体となっている点などからは、島崎Ⅲ式や山の神I式に併行する時期のものが中心と考えられる<sup>31</sup>。ただし、陸帯で文様を描くなど、取組式期に遡るとみられるものも少数存在する。

I'類については、I類よりも口縁部文様帯の文様構成に崩れがあるとみれば、新しい傾向をもつといえよう。ただし、I類と時期的懸隔があるものではなく、山の神I式期の中で把握できる。

**II類** II類は出土点数が少なく、また全形が復元できる資料もほぼないため、位置づけが困難である。

最も遺存状況が良好なS K341出土の483を取り上げてみると、地文の有無などに違いはあるものの、滋賀県竜ヶ崎A遺跡に器形や口縁部直下の太い一条の沈線、そしてその下の波状文状の多条連弧文など、いくつかの特徴が共通する有文深鉢が存在する<sup>32</sup>。これについては、北白川C式古段階として把握されている<sup>33</sup>。

また、文様構成は異なるが、松阪市堀ノ内遺跡C地区出土の有文深鉢にも、器形や口縁部直下の太い一条の直線、無文の体部など、やや類似する個体が認められる<sup>34</sup>。報告では主文が円形文となることから山の神I式期としているが、伊勢地域では特異な

もので近畿地方の星田式と関係するとして、中期末葉でも古い段階に位置づける意見もある<sup>35</sup>。この他、連弧文土器との関係で捉えるならば、やはり中期末葉でも古い段階に相当する可能性があらうか<sup>36</sup>。

こうした事例を参照すると、II類は小牧南遺跡出土縄文土器の中では古く位置づけられるものとも考えられる。

**III類** III類は、近畿地方を中心とする北白川C式の深鉢C類<sup>37</sup>に該当する。北白川C式でも、新段階に相当する段階のものが主体と思われる<sup>38</sup>。

器形などに北白川C式の特徴を示し、文様の点においてもI・II・IV類に比べて縄文の施文傾向がかなり強い点は特徴的である。伊勢地域北部では伊勢地域の中でも特に縄文の施文率が低いことが指摘されており<sup>39</sup>、小牧南遺跡でもその傾向が認められるが、III類に関しては例外的といえる<sup>40</sup>。搬入品の存在については確認できず、器形や文様構成にも当該地域の地域色とされる要素を認めうるが<sup>41</sup>、縄文施文の様相からは、地域外からの強い影響下にある可能性も考えられよう。大波状部の文様構成の共通性が高い点や、SH191のように特定の遺構から多数出土する傾向があるように見受けられる点とも、何らかの関係があるかもしれない。

**IV類** IV類は、東海地方西部の土器型式に認められるものである<sup>42</sup>。伊勢地域では多くの遺跡で出土例があり、普遍的なものといえるだろう。器形にはやや多様性が窺われるが、頸部に縦位の幅広の把手を貼り付け、把手上にS字状の双頭満文を描くものなどは(89)、他の遺跡出土のものとも共通する特徴を明確に有している。

時期的には、島崎Ⅲ式から山の神I式にかけてを中心とすると思われる。

**V類** V類は、I～IV類とは異なる施文傾向を有するといえる。多条並行沈線のみ、あるいは縄文や条線のみのもなど、やや雑多なものを含むため、全体としての位置づけは困難である。

沈線によって文様を描くものに限れば、口縁部文様帯が消失しているとみられることなどから、山の神I式期頃のものと考えておきたい。

**VI類** VI類は、I～V類とは異質なもので、時期が異なる可能性が高い。文様からは近畿地方の中津式

との関係が窺われ、後期初頭のものと考えられる。

ただし、量的には非常に少なく、可能性はあるものを含めても数個体程度と思われる。

### (3) 特徴

**伊勢地域北部における共通性** 前節でみたように、小牧南遺跡の縄文土器は、東海地方西部の島崎Ⅲ式から山の神Ⅰ式と併行する時期を主体とし、その前後の土器を若干含むと考えられる。

その内容は、大きくみれば東海地方西部の土器型式の範疇にあり、そこに有文深鉢Ⅲ類としたものを中心に、近畿地方の北白川C式との関係が窺われるものが一定量含まれる<sup>20)</sup>。

こうした様相は、全体的には同時期の伊勢地域北部の遺跡と類似しており、特に、地理的にも時期的にも近い、いなべ市川向遺跡<sup>21)</sup>や東員町村前遺跡<sup>22)</sup>などとは、かなりの共通性が認められよう。

川向遺跡のⅡD5集石出土土器をみると、小牧南遺跡の有文深鉢Ⅰ・Ⅲ～Ⅴ類を含み、また、Ⅲ類には大波状部の文様構成や、頸部の多条連弧文など、共通する要素がみられる。

また、小牧南遺跡のSH147では、全体に器形が縦長で体部の張りが比較的弱く、頸部に大きく蛇行する横位の隆帯を貼り付ける、Ⅳ類の中でも特徴的な個体が出土しているが(4)、これとほぼ同じものが川向遺跡ⅡA3集石や村前遺跡SK69で出土していることも注目される。

小牧南遺跡の様相が明らかになったことによって、伊勢地域北部における共通性及び地域色が、全体的に明瞭化してきたといえよう。

**伊勢地域における地域差** こうした伊勢地域北部の様相と比べると、伊勢地域中・南部の同時期の有文深鉢には、北白川C式といった近畿地方の土器様式との視線性がより濃くみられる。この点については、島崎Ⅲ式から山の神式にかけての時期において以前から指摘されてきたが<sup>23)</sup>、小牧南遺跡をはじめ菰野町鈴山遺跡<sup>24)</sup>や川向遺跡、村前遺跡など伊勢地域北部で良好な資料が増加した中で、改めて確認できる。

伊勢地域北部と中・南部の土器様相の差異は、北白川C式との関係以外にもいくつか挙げられよう。例えば、東海地方西部的な有文深鉢Ⅳ類は伊勢地域

中・南部でも一定数認められ、この点では伊勢地域北部との間に共通性が看取されるものの、やはり伊勢地域北部の方が数が多く、典型的な個体も目立つように思われる。

また、詳細にみれば、先にも述べたように伊勢地域北部では伊勢地域中・南部より縄文の施文率が低く、それは小牧南遺跡でも有文深鉢Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ類において顕著に認められ、Ⅲ類と対照をなす。

そして、小牧南遺跡の有文深鉢Ⅰ類には区画文内を充填する文様として刺突文はほとんど用いられていないが、伊勢地域中・南部ではやや多く用いられているようにも思われる。

**有文深鉢以外の特徴** 有文深鉢以外にも、小牧南遺跡の縄文土器にはいくつかの特徴が認められる。

まず、台付深鉢が多数存在する点に注意される。この時期、台付深鉢が組成に含まれることは東海地方西部では一般的であるが、小牧南遺跡ではかなり個体数が多いように思われる。一つの特徴として注意しておきたい。

また、台形土器が確実に存在しているが、この器種は東日本を中心に分布するもので、遺跡によって偏在性があり、土器製作に関わるものとする説もある<sup>25)</sup>。こうしたものが含まれる点は、伊勢地域北部の土器型式の影響関係等を考える上で重要だろう。

そして、壺といえるような器形ものが存在する点も注目される(582)。こうした器形ものは他地域からの影響の下に出現するものと考えられる<sup>26)</sup>。

これら以外にも、小牧南遺跡の縄文土器には特徴的な点がいくつか存在する。伊勢地域では縄文時代中期末葉の土器がまとまって出土した事例が増加しつつあるが、今後、そうした資料との対比を通じて、伊勢地域の土器型式の特徴や、地域差、他地域との影響関係等について、詳細に検討していくことが必要だろう。

### 註

- 1) 小片も含めれば、さらに多様な器形・文様のものが存在する可能性が高いが、断片的な情報によって分類を煩雑化し、土器群の全体像を不明瞭にすることを避けるため、ここでは割愛した。
- 2) Ⅰ類とした49も、渦巻文の区画文が横位の多条並行状

線となっている点で、I'類に近いものである。

- 3) 田村篤一2008「三重県の中期末土器出土遺跡集の概要」『関西の縄文中期末土器』第9回関西縄文文化研究会資料集 関西縄文文化研究会、増子康真1969「木曾川下流域の縄文中期後半期土器について」『古代学研究』第54号 古代学研究会、増子康真1992「名古屋市瑞穂遺跡S B 1の縄文中期末土器—山の神式土器の検討—」『縄文時代』第3号 縄文時代文化研究会
- 4) 藤岡茂・高橋健太郎による編年では、4期(新)・5期(古)に相当する。藤岡茂・高橋健太郎2008「中富式・神明式土器」『総覧縄文土器』株式会社アム・プロモーション
- 5) 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会2006『竜ヶ崎A遺跡』
- 6) 富井眞2008「北白川C式土器」『総覧縄文土器』株式会社アム・プロモーション
- 7) 報告書の第8図24の個体。なお、他に小片ながら口縁部直下に多条の連弧文を描いたと思われる個体もあり(報告書の第9図32~33)、これらについては山の神Ⅱ式期としつつも、中富式・咲畑式など取組式以前の型式からの系譜として捉えられる可能性が示されている。三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター1991『近畿自動車道(久居~勢和)埋蔵文化財発掘調査報告』第3分冊8
- 8) 石田由紀子2017「三重県内の中期末土器について」『三重県における縄文時代中期末』東海縄文研究会第13回研究会 東海縄文研究会
- 9) 永瀬史人2008「連弧土器」『総覧縄文土器』株式会社アム・プロモーション

- 10) 泉拓良・家根祥多・玉田芳英1985「土器」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 11) 富井2008
- 12) 石田2017
- 13) III類の中でも大波状部に楕円形区画を配し、体部には沈線による矢羽根状文を施すなど、I類との親和性が高いとみられるものには(75)、縄文は施文されていない。
- 14) S字状渦巻文を中心に弧状線文を左右に展開する文様構成や、口縁部の屈曲があまり顕著でない点は、伊勢地域北部の地域色の可能性が指摘されている。春日井恒1993「中期土器の編年の位置付け」『川向遺跡発掘調査報告』北勢町教育委員会
- 15) 石田由紀子による分類の3類に相当する。石田2017
- 16) 小牧南遺跡における土器の様相としたが、土器の出土量が突出して多いSH191の様相が大きく反映されるものとなっている。
- 17) 北勢町教育委員会1993『川向遺跡発掘調査報告』
- 18) 東員町教育委員会1993『村前遺跡発掘調査報告』
- 19) 泉拓良1982「西日本縄文土器再考—近畿地方縄文中期後半を中心に—」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会
- 20) 三重県埋蔵文化財センター2018『鈴山遺跡(第2・3次)発掘調査報告』
- 21) 室伏龍雄2008「台形土器」『総覧縄文土器』株式会社アム・プロモーション
- 22) 藤岡・高橋2008

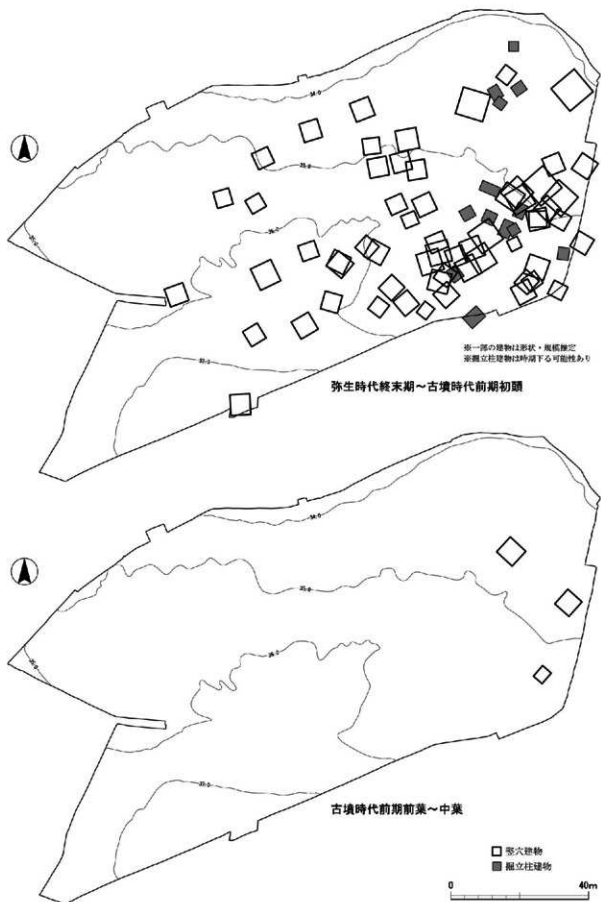
## 第4節 古墳時代の集落の変遷と構造

### (1) 消長

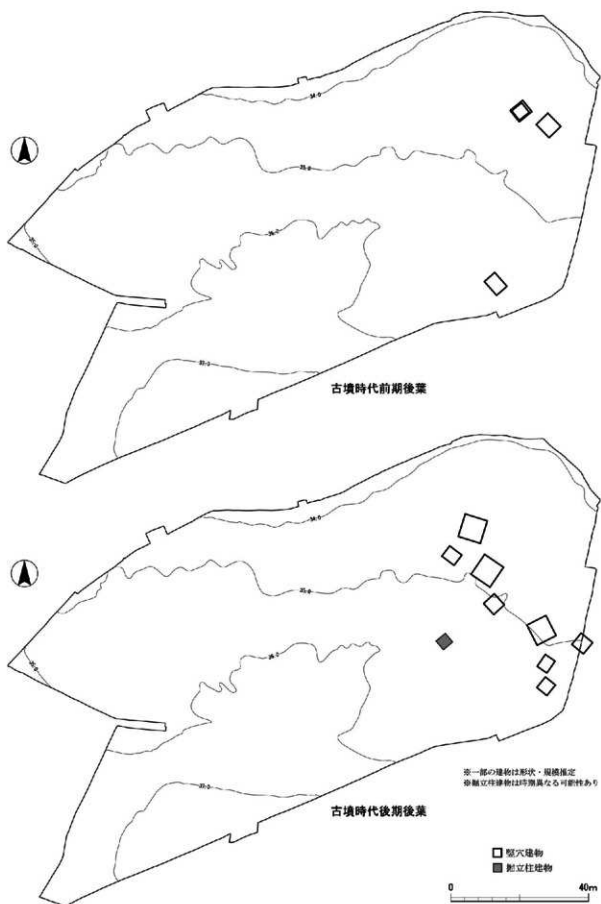
**形成時期** 古墳時代の遺構は、堅穴建物を中心に多く検出されている。それらの遺構から出土した土器の中には、一部に弥生時代終末期に遡りうるものが存在するが、遺構単位でみていくと、確実に弥生時代終末期に位置づけられる土器群は認め難い。SH 338出土土器などは、S字状口縁巻が赤塚次郎による分類のA類<sup>1)</sup>で占められる点や、有稜高坏の坏部が深く、また脚部がやや高く明瞭に内湾するなどの点が弥生時代終末期的な様相を示しており、若干古く位置づけられようが、1888のような口縁部の加飾

が著しいバレススタイル壺が存在する点や、壺や高坏の中にヨコミギキを施すものが認められる点などから、土器群全体としては古墳時代前期初頭の早い段階に位置づけられることが適当だろう。同様の時期に位置づけられる遺構は他にも複数認められる。小牧南遺跡の古墳時代集落は、弥生時代終末期でも終わり頃から古墳時代前期初頭の早い段階にかけて形成されたと考えられる<sup>2)</sup>。

伊勢地域では、弥生時代後期後葉~終末期に雲出川下流域で複数の集落が近接して存在する集落群が形成されたり<sup>3)</sup>、四日市市山奥遺跡<sup>4)</sup>や鈴鹿市警城山遺跡<sup>5)</sup>、松阪市草山遺跡<sup>6)</sup>のような比較的規模の



第275図 古墳時代遺構変遷図①



第276図 古墳時代遺構変遷図②

大きな集落が複数形成されることが知られているが、いずれも古墳時代前期初頭には縮小し、集落の存在が希薄になっていく<sup>7)</sup>。こうした現象については、大きな社会変化との関係が窺われながらも、当該期の集落の様相が明らかにならなかったため、土器編年や年代幅の問題などが大きく関与している可能性も否定できず、評価が困難な部分があった。

しかしながら、小牧南遺跡において古墳時代前期初頭に形成された集落の存在が明確となり、この時期に集落の移動や分散化を伴うような動向があったことが裏付けられたといえよう。

**清長** 集落の形成開始後、古墳時代前期初頭を通じて集落は盛行しており、検出された竪穴建物のほとんどが前期初頭に位置づけられる(第275図)。50棟以上の竪穴建物が確認されており、前期初頭が小牧南遺跡の古墳時代集落の中心的な時期といえる。

そして古墳時代前期前葉になると、一気に集落の規模が縮小する(第275図)。前期前葉～中葉に位置づけられる竪穴建物は、確実なものは3棟に過ぎない。その他に8棟程度、古墳時代前期初頭～前葉に位置づけられる竪穴建物が存在するが、これらは出土土器から詳細な時期の判断が困難なもので、実際に前期前葉に下るものはごく少数だろう。また、出土土器には前期中葉に位置づけられる可能性があるものが散見されるが、遺構としては前期中葉に確実に位置づけられるものは認め難い。集落は前期中葉まで存続した可能性があるが、当該期にはほぼ解体していたと考えられる。

その後、古墳時代前期後葉には再び集落の形成が認められる(第276図)。建て替えられたものを含めて4棟の竪穴建物が検出されている。再び集落が形成されたものの、規格的には前期前葉とそれほど変わらないう。

古墳時代中期の遺構は、今回の調査においては確認されなかった。中期前葉に位置づけられる可能性がある土器もわずかにみられるが、基本的に小牧南遺跡では古墳時代中期は集落の空白期になっていると考えられる。

古墳時代後期になると、再び集落の形成が確認できる(第276図)。8棟の竪穴建物が検出されており、いずれも古墳時代後期後葉に位置づけられる。SH

148がやや時期的に遡る可能性があるものの、後期後葉の限られた時期に小規模な集落が営まれたものと考えられる。そして、その後は現代に至るまで、今回の調査地において集落が形成されることはなかった。

以上のように、小牧南遺跡の古墳時代の集落は、古墳時代前期初頭、前期前葉～中葉、前期後葉、後期後葉の大きく4時期に分けて把握できる。

## (2) 古墳時代前期初頭の集落構造

最も規模が大きい古墳時代前期初頭の集落の構造について、詳細にみていきたい。先にも触れたが、これまで伊勢地域の当該期の集落については良好な調査事例が僅少で、様相が不明な部分が多かった。したがって、小牧南遺跡の集落は注目すべき事例と思われる。

**集落の規模と展開** さて、小牧南遺跡の当該期の集落の構造を考えるにあたってまず問題となるのは、その共時的な景観であろう。

多くの建物が検出されているが、これらは前期初頭を通じて累積したもので、一時期に並存した建物を明確にする手がかりは乏しい。

ただし、古墳時代前期初頭の集落盛行期の時間幅は長く見積もっても50年を超えることはないと考えられ<sup>8)</sup>、竪穴建物の耐用年数を短くみて10年と見積もれば<sup>9)</sup>、少なくとも当該期に同時に存在した竪穴建物は、平均して10棟以上となる。竪穴建物の重複からみても、かなり建物同士が重なる箇所でも4棟程度の重複が確認できるため、集落に4段階程度の変遷があったと仮定すれば、やはり平均して10棟以上の竪穴建物が並存したとみることができよう。

このように、古墳時代前期初頭の集落は、平均すれば十数棟の竪穴建物で構成されるような規模のもので、数十年にわたって存続したと考えられるが、時期によって建物が建てられる場所は少しずつ変化していたようである。

出土土器にやや古い様相が認められる竪穴建物には、SH187・189・198・243・246・338・349などがある。SH299・347なども該当しようか。これらの竪穴建物は、いずれも集落の西半に位置している。また、SK328・334などの土坑出土の土器にも古い

様相が認められるが、これらの土坑もやはり西半に位置する。これを踏まえれば、小牧南遺跡の集落は当初西半部で形成が始まり、その後、東側などへ展開したと推定される。

**掘立柱建物の位置** 掘立柱建物については、帰属時期が明確ではないため、出土土器等を参考にその多くを前期初頭のものとして報告した。ただ、中には前期前葉以降に下るものが含まれている可能性もあり、また、削平された竪穴建物の柱穴の可能性もあるものも含まれる。

したがって、掘立柱建物について詳細に評価することは困難であるが、集落規模や建て替え等を考慮すると、少なくとも前期初頭には集落内に1～3棟程度の掘立柱建物が存在したと思われる。

そして、それらは竪穴建物群の周囲に近接して配されていた可能性が高い。

**建物の規模と位置** 古墳時代前期初頭の竪穴建物の規模をみてみると（第277図）、長軸7～7.5mあたりに明確な規模の断絶がみられる。したがって、長軸7.5m以上の大きさの建物を、大型の建物として抽出することができる。

それ以外の建物の規模の区分は明確ではないが、多くの建物は長軸5～6.5mの間に位置しており、これらが一般的な規模の竪穴建物といえる。そして、長軸6.5～7mのものが少数存在し、これらが大型建物に準じる規模のものとみられる。一方、長軸5m以下のものは少なく、長軸4m以下のものは認められない。

このようにみると、小牧南遺跡の古墳時代前期初頭の集落を構成する竪穴建物は、長軸7.5m以上の大型建物、長軸6.5～7mの準大型建物、長軸5～6.5mの中型建物、長軸5m以下の小型建物に区分が可能であろう。

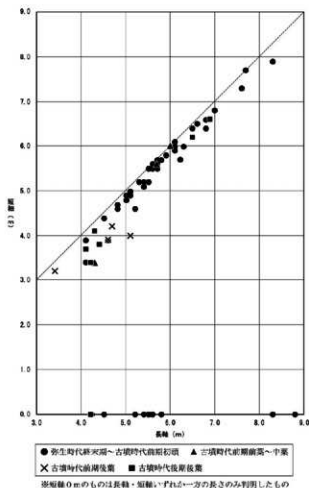
この中で、最も明瞭に区別できるのは大型建物であるが、それらはいずれも調査区東部に位置する。特に、SH195・201の2棟は他の竪穴建物群からやや離れており、周囲には小型建物1棟と、掘立柱建物4棟が存在するのみである<sup>10</sup>。SH195については遺構の検出状況等に問題が残るものの、少なくともSH201については他の建物とは空間的に区分されていた可能性が高い。そして、付近の小型建物は

大型建物に付属するような性格のものとも考えられよう。

他の大型建物SH190・211・214は、中小規模の竪穴建物と位置的に区分されている様子は認められず、逆に竪穴建物が特に集中する箇所に位置している点が特徴的である。このことは、大型建物を中心に建物が集まっていたことを示し、大型建物の存在が中小規模の建物の配置に影響している可能性を窺わせる。そして、周囲にはSH195・201と同様に、掘立柱建物が複数存在している点も注意される。

以上から、小牧南遺跡の集落では、他の建物とは規模や位置において明確に区別される大型建物が存在し、また、位置的な区別を受けない大型建物も、集落の中で主たる位置を占めていたものと考えられる。そして、掘立柱建物の位置には大型建物と何らかの関係があったことも推測できよう。

大型建物は、規模や構造、出土遺物などからみれば



第277図 竪穴建物の規模



ば共同作業場や祭祀場などの特殊な用途は想定しにくく、住居として使用されていた可能性が高い。これが妥当だとすれば、大型建物に居住する人物は、集落内において階層的に高く位置づけられるなど、何らかの形で一般成員と区別されていたものと考えられる。

また、調査区東部に大型建物が偏在することは、先にみた集落中心域の位置の変化を考慮すると、集落の形成期ではなく、その後の変遷の中で大型建物が出現したことを示すかもしれない。

### (3) 集落構造の変化

古墳時代前期前葉～中葉、そして前期後葉には前期初頭と比べて集落規模が縮小した可能性が高い。各時期の実際の時間幅の差異が影響している可能性もあるが、前節で推測したように、前期初頭段階での同時並存建物数が少なくとも10棟以上とすれば、前期前葉～中葉と前期後葉の集落の規模は縮小していることは間違いない。

また、注意されるのは、前期前葉以降には大型に区分される堅穴建物が認められないことである。逆に、他の建物に比べて顕著に小規模な堅穴建物が、前期前葉～中葉、前期後葉の両時期に1棟ずつ存在する。そして、その他の一般的な規模の堅穴建物にはそれほど規模の差がない。前期初頭と、それ以降の間では、集落の規模だけではなく構造にも差異があったと考えられる。

**他の遺跡との比較** こうした小牧南遺跡の古墳時代前期の集落規模・構造の変化について、特徴を明確化するため、他の遺跡の事例と比較してみた。

伊勢地域の古墳時代前期前葉～中葉の集落については、良好な発掘調査事例が少ないこともあって実態の解明が進んでいない。ただ、弥生時代終末期前後には大規模な集落や複数集落によって構成される集落群が認められるのに対して、古墳時代前期初頭にはそうした大規模集落・集落群が解体し、それ以降、集落が小規模化する傾向があるとみられる<sup>10)</sup>。

例えば、同じ朝明川流域に位置する四日市市伊坂遺跡では前期中葉を中心とする集落の大部分が調査されているが、7棟の堅穴建物が検出され、また、当該期の可能性がある掘立柱建物も4棟検出されて

いる<sup>11)</sup>。同時に存在した堅穴建物は3～6棟程度と考えられ、規模的には小牧南遺跡の集落との共通性が認められる。また、この遺跡では、比較的大型の堅穴建物1棟と、小型の堅穴建物1・2棟によるまとまりが、30～40mほど離れて3箇所分散するよう状況が認められる。

鈴鹿川流域の鈴鹿市保子里遺跡では、小牧南遺跡と同様に古墳時代前期を通じて営まれた集落が調査されている<sup>12)</sup>。かなり広い範囲が調査され、集落の様相が比較的良好に判明している。集落は前期前葉～中葉の複数時期にわたって営まれており、各時期の集落は5棟前後の堅穴建物によって構成されていたとみられる。やはり集落は小規模なものであったと考えられよう。さらに、堅穴建物は1～3棟ほどの単位のまとまりを形成し、谷や50mほどの空間地を挟むなど、散在的に展開している。

他に近隣地域では、隣接する尾張地域の愛知県清須市廻間遺跡で、弥生時代終末期～古墳時代前期中葉の集落の検討事例がある<sup>13)</sup>。

この遺跡では、弥生時代終末期の後半には中型の堅穴建物数棟からなるまとまりの周辺に小型の堅穴建物が位置し、そうした中に大型の堅穴建物がごくわずかに存在するという集落構成が認められるが、古墳時代前期初頭段階では大型の堅穴建物の存在が希薄化するとともに規模が等質化し、建物配置に計画性が強く看取されるようになると考えられている。そして、前期前葉～中葉には、2棟前後の小規模単位の堅穴建物のまとまりが分散するような状況が認められるようである。

廻間遺跡の前期初頭段階の等質的な集落構造は、明確に大型の堅穴建物が存在し、中小の建物と位置的に区別されるものも認められる小牧南遺跡とは異なっている。どちらかといえば、弥生時代終末期後半の様相の方が小牧南遺跡に近いように思われる。こうした差異が生じた背景については不明であるが、集落構造の変化における時期差、集落規模や立地による違い、あるいは社会構造における地域差・集団差などの存在も考慮しておく必要がある。集落構造の多様性がこの時期に顕在化した可能性も、視野に入れておくべきかもしれない。

一方、前期前葉～中葉の集落の小規模化や建物の

散在化といった現象については、小牧南遺跡や伊坂遺跡、保子里遺跡との共通性が看取される。伊勢地域に限らず伊勢湾沿岸地域では、当該期にこうした小規模集落が普遍的に存在していた可能性がある。

## 註

- 1) 赤塚次郎1990『廻間式土器』『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 2) 弥生時代終末期で廃絶した建物はないと思われるため、以下では小牧南遺跡の集落を古墳時代前期初頭のものとして扱う。
- 3) 川崎志乃2008「古墳時代初頭の雲出川下流域の遺跡群」『研究紀要』第17-1号 三重県埋蔵文化財センター、石井智大2013「弥生時代終末期から古墳時代前期の遺跡群の特質—相互比較の視点から—」『変貌する弥生社会』考古学フォーラム
- 4) 四日市市教育委員会2003『山奥遺跡Ⅰ』、四日市市教育委員会2004『山奥遺跡Ⅱ』
- 5) 鈴鹿市考古博物館2014『磐城山遺跡(第4・5次)発掘調査報告書』、鈴鹿市考古博物館2015『磐城山遺跡(第6・7次)発掘調査報告書』、鈴鹿市文化スポーツ部文化財課発掘調査グループ2018『磐城山遺跡(第7・2・8・8-2次)発掘調査報告書』、三重県埋蔵文化財センター1994『磐城山遺跡発掘調査報告』
- 6) 松阪市教育委員会1986『草山遺跡発掘調査報告書』
- 7) 石井智大2011「伊勢湾西岸地域における弥生時代後期集落の様相」『伊勢湾弥生社会シンポジウム・後期篇 伊勢湾

湾岸地域の後期弥生社会』伊勢湾弥生社会シンポジウムプロジェクト

- 8) 赤塚次郎2010「東海地域における土器編年に基づく弥生・古墳時代の洪水堆積層(朝日T-SA層・大毛池田層)と暦年代」『考古学と自然科学』vol. 61 日本文化財科学会
- 9) 堅穴建物の耐用年数は不明確であるが、こうした研究が進んでいる縄文時代の堅穴建物の場合、10年程度から長く20年程度と想定されることが多い。泉拓良2006「縄文時代集落研究の課題」『史林』第89巻第1号 史学研究会、黒尾和久2016「横切りの集落研究」から「横切りの遺跡群研究」へ—平均住居数という考え方がもたらすもの—『考古学の地平Ⅰ』六一書房
- 10) SH201の南側に大きな掘溝があるため、他の建物との間に空間があったか不明確となっているが、この掘溝の西・東側の節部に堅穴建物の痕跡が認められないことから、SH201と掘溝の南東に位置するSH206・240の間にはある程度の空間地があったと考えてよいだろう。
- 11) 石井智大2016「集落動態からみた弥生時代から古墳時代へ—伊勢湾沿岸地域—」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房
- 12) 三重県埋蔵文化財センター2011『伊坂遺跡・伊坂遺跡(第5次)発掘調査報告』
- 13) 鈴鹿市考古博物館2013『保子里遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 14) 赤塚次郎1990『遺構の変遷』『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター

## 第5節 古墳時代前期堅穴建物の構造の特徴

### (1) 平面形とその変化

伊勢地域では、弥生時代中期後葉に堅穴建物の平面形態がほぼ方形に統一され、その後も基本的に方形となっている<sup>1)</sup>。ただし、弥生時代中期後葉～後期前葉にかけては長方形のものが目立つのに対して、弥生時代後期中葉以降は正方形に近い方形のものがほとんどを占めるなど、変化が認められる。

古墳時代においても堅穴建物の平面形に微妙な変化が認められる可能性があるが、これまで古墳時代の伊勢地域の堅穴建物には、規模の縮小傾向を除いて大きな変化は見いだされていなかった<sup>2)</sup>。

しかしながら、小牧南遺跡の堅穴建物には、明確

に長方形を呈するものもある。小牧南遺跡では、古墳時代前期でも複数時期にわたって集落が形成されているため、こうした形態差が時期差として捉えられる可能性もあるだろう。そこで、堅穴建物の平面形について時期ごとに整理を行い、古墳時代前期における変化について一定の情報を示しておきたい。

**前期初頭** 小牧南遺跡の古墳時代前期初頭の堅穴建物のうち、平面形が判明するものほとんどは、正方形に近い方形を呈する(第277図)。隅部分は丸みを帯びており隅丸方形ともいえるが、縄文時代の隅丸方形の堅穴建物に比べれば角が取れた程度のものであり、方形として差し支えなからう<sup>3)</sup>。

中には小型のSH243のように平面形が長方形を

呈するものも認められ、また、中型の堅穴建物にも長方形傾向が強いものが存在している。しかしながら、こうした長方形のものはかなり少なく、例外的な存在である。

**前期前葉～中葉** 前期前葉～中葉の堅穴建物の平面形も、ほぼ正方形に近い方形を基調とする。

ただし、長軸が4.5m以下となる小型のSH216については、かなり長方形を呈している。規模によって、建物の平面形が異なっていた可能性がある。

**前期後葉** 前期後葉には、全体的に平面形が長方形を呈する傾向が認められる。非常に小型でSH205と完全に重複するSH166を除けば、他の3棟は近い規模の建物で、平面形はいずれも明確な長方形を呈する。

**前期後葉の変化** このように、古墳時代前期初頭～中葉の堅穴建物の平面形は基本的に正方形に近い方形が基調となっていたが、前期後葉には平面形が長方形のものが主体化するという、大きな変化が認められた。この時期に、堅穴建物の構築に関わる大きな画期が存在した可能性がある。

注目されるのは、前期後葉には堅穴建物の規模にも変化が認められる点である。前期初頭～前期中葉の一般的な堅穴建物に比べて規模が小さくなっており、長軸5m前後のものが主体となっている。こうした規模の変化も踏まえれば、前期後葉における堅穴建物の平面形態の変化については、建物の構造だけでなく、生活様式の何らかの変化も伴っている可能性がある。

**地域性について** 小牧南遺跡でみられた前期における堅穴建物の平面形の変化について、他の遺跡の様相と若干比較しておきたい。

前節でも取り上げた鈴鹿市保子里遺跡では、古墳時代前期を通じて集落が営まれているが、いずれの時期においても堅穴建物の平面形は正方形に近い方形である<sup>3)</sup>。前期後葉に平面形が長方形のものが顕在化する様子は認められない。ただし、前期後葉の堅穴建物は、前期初頭～中葉に比べると全体的に小型化するという傾向は認められる。

愛知県清須市廻間遺跡では、弥生時代終末期～古墳時代前期中葉の堅穴建物の平面形態の時代的变化が捉えられている<sup>3)</sup>。それによると、弥生時代終末

期段階では正方形に近い平面形態のものが多く、長方形のものも混在するなど多様性が認められるが、古墳時代前期初頭には平面形が著しく長方形を呈するものが出現し、正方形に近いものは小型の堅穴建物を中心となる。そして、古墳時代前期前葉～中葉には、再び平面形が正方形に近いものが主体となるようである。こうした廻間遺跡の様相は、地理的には比較的近いにも関わらず、小牧南遺跡の様相とは異なるように思われる。

わずかな事例ではあるが、これらを参照すれば、古墳時代前期には伊勢湾沿岸地域全体で堅穴建物の形態に共通性があったのではなく、地域性が存在したとの見方もできよう。一方で、前期後葉における堅穴建物の小型化傾向などには、ある程度普遍性があった可能性も考えられる。

## (2) 特徴的な構造・構造物

堅穴建物の平面形態からは、伊勢地域北部における地域性や地域間交流に関する側面が窺われたが、小牧南遺跡で検出された古墳時代前期の堅穴建物には、それにも関係する注目すべき特徴的な構造・構造物が認められる。そのいくつかについて、簡単にまとめておく。

**周溝状掘形** 小牧南遺跡の古墳時代前期の堅穴建物の多くでは、建物の壁に沿って広く浅く掘り窪めたような掘形の存在が確認できた。本報告では周溝状掘形と呼んだが<sup>3)</sup>、これについては、貼床を施した後には視認できなくなり見かけ上での模倣は困難であるため、堅穴建物の構築にかかる技術の共有を示す可能性が高い。

周溝状掘形は、堅穴建物の諸属性の中では従来あまり注目されることがなかったものだが、先述のようにより集団が保有する堅穴建物構築技術との関係が認められることから、集団の移動、地域間交流、集落構造などの面において注視されつつある<sup>3)</sup>。

伊勢地域においては、これまで存在自体があまり注意されていなかったこともあり、まだ実態は明らかではない<sup>3)</sup>。ただ、松阪市西肥田遺跡で小牧南遺跡と近い時期の事例が複数確認でき<sup>3)</sup>、弥生時代終末期～古墳時代前期には伊勢地域内にある程度広がっていたものと推測される。

出現時期についても確定できないが、弥生時代中期以前の事例は今のところ確認できないため、伊勢地域では弥生時代後期もしくは弥生時代終末期以降に出現する可能性が考えられる。

一方で、小牧南遺跡ではSH215・232など古墳時代後期の例もみられる。松阪市西野田遺跡SH48のように飛鳥時代に下りうる類例も認められ<sup>10)</sup>、古墳時代前期以降の展開についても課題となるだろう。

なお、周溝状掘形の機能として、堅穴建物内の湿度調節との関係も考えられるところではあるが、沖積地内に立地する遺跡だけでなく、段丘上に立地する小牧南遺跡でも普遍的に認められたことは、一概に湿度調節との関係だけでは理解できないことを示すかもしれない。

**間仕切り溝** 古墳時代前期初頭の複数の堅穴建物の床面では、間仕切り溝と思われるものが検出された。小牧南遺跡でみられる間仕切り溝は細く浅い溝で、ほとんどの事例が堅穴建物の一辺の中央付近から壁に直交するように掘られており、そして主柱穴間を結ぶラインより建物中央部へ延びることはない。

堅穴建物の床面にみられる間仕切り溝には、一般に堅穴建物内の空間を区画するための機能が想定されている。仕切り状の構造物が立てられていたかなど、具体的な構造には不明な点が多いが、建物内を区画するという点が注目されて全国的な様相を概観するような研究がなされており、数種類に分類できることや、出現や展開の時期、地域性などが、大まかには明らかになっている<sup>11)</sup>。しかしながら、伊勢湾沿岸地域では具体的な検討が進んでおらず、詳細は明らかではない。

伊勢地域においては、弥生時代中期後葉には間仕切り溝と思われるものが津市長遺跡などで検出されているが<sup>12)</sup>、弥生時代後期に入ると確実な事例はほとんど確認できなくなる。小牧南遺跡が位置する伊勢地域北部では、山奥遺跡や金塚遺跡、西ヶ広遺跡など、弥生時代後期～終末期の堅穴建物が多数検出された遺跡が複数あるが、いずれにおいても明瞭な間仕切り溝の存在は確認できない。今のところ、伊勢地域では小牧南遺跡のような間仕切り溝が、古墳時代前期初頭頃に新たに出現したと考えるべきだろう。

一方、亀山市地蔵僧遺跡SB10や<sup>13)</sup>、津市高茶屋大垣内遺跡SH213・249など<sup>14)</sup>、古墳時代前期前葉～後葉の堅穴建物でも小牧南遺跡で確認されたものと同様の間仕切り溝が検出されており、古墳時代前期前葉以降には伊勢地域の広い範囲で定着している可能性が窺われる。

なお、名古屋台地では、古墳時代中期に主柱穴と壁際溝をつなぐように掘られたり、貯蔵穴を画するように掘られた間仕切り溝が出現することが指摘されている<sup>15)</sup>。これについては、時期や形態などの点で小牧南遺跡の事例とは一致しない。伊勢湾沿岸地域において、間仕切り溝の出現や展開については時期や地域、あるいは機能等を異にする複数の動きがあったと考えられ、小牧南遺跡の事例は古墳時代中期のものとは別の脈絡で捉えるのが妥当だろう。

したがって、伊勢地域の古墳時代前期における小牧南遺跡タイプの間仕切り溝の出現と展開については、当該期における個別の動きとして、堅穴建物の構造の変化等との関係を踏まえながら考えていく必要がある。

そして、どのような経緯でこうした間仕切り溝が導入されたのか、という点も大きな問題の一つである。古墳時代中期以前には伊勢湾沿岸地域全体でも間仕切り溝の類例は少ないとされ注目度も低かったが、愛知県名古屋見晴台遺跡では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものと思われる、小牧南遺跡と同様の形態の間仕切り溝を有する堅穴建物が見出されている<sup>16)</sup>。弥生時代から古墳時代への過渡期にかけて、こうした間仕切り溝が伊勢湾沿岸地域で局所的に出現した可能性もあろう。他地域からの影響も視野に入れた検討が望まれる。

ただ、間仕切り溝は細く浅いため、堅穴建物の床面調査時に十分に精査しないと、その存在を見落とす可能性もある。今後、小牧南遺跡のような事例の存在を念頭に調査を行うことで、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての事例が増加することも考えられる。

**添石炉** 弥生時代から古墳時代にかけての炉の形態の地域性や変化については近年注目が集まっており、多様な炉の形態が存在することが指摘されている。小牧南遺跡の堅穴建物内の炉については、地床炉と

添石炉の2種類が確認された。

本報告で添石炉と呼ぶものは基本的に地床炉の一端に石を置いたものであり、地床石添炉なども呼ばれている<sup>17)</sup>。小牧南遺跡の事例は、堅穴建物の床面を浅く掘り窪めただけで、粘土や扁平な礫を火床に貼らない単純な地床炉の一端に、長細い大型の礫を1点据えるのが基本的な構造とみられる<sup>18)</sup>。

この添石炉は、伊勢地域では弥生時代中期後葉以前には認められない。弥生時代中期後葉にも、津市長遺跡などでごくわずかな事例が認められるのみである。その後、弥生時代後期～終末期にも少数みられるが、小牧南遺跡では添石炉が可能性が高いものを含めて7例と、かなり多く認められる。そして、そのうち6例は弥生時代終末期～古墳時代前期初頭の事例で、残り1例は古墳時代前期前葉に位置づけられる。

添石炉は、東京都八王子市神谷原遺跡では弥生時代終末期～古墳時代前期初頭に増加し、地床炉とともに炉の主体を占めることが指摘されており<sup>19)</sup>、関東地方南部ではこの時期に主流となる炉の形態の一つである。一方で、近畿地方などでは一般的な形態の炉とはいえない。时期的な共通性などを鑑みれば、小牧南遺跡における添石炉の多さは、東日本方面からの影響を受けている可能性も考えられるだろう。

またまった検討はなされていないものの、東海地方東部でも弥生時代終末期～古墳時代前期にかけて地床炉とともに添石炉が認められることが明らかになっている。また、三河地域東部の愛知県豊川市石座神社遺跡でも弥生時代終末期～古墳時代前期前葉の添石炉が多数検出されている<sup>20)</sup>。こうしたことも踏まえれば、弥生時代終末期～古墳時代前期初頭に関東地方から東海地方にかけて炉の形態の変化を伴うような地域間交流の動きがあり、その影響が伊勢地域、そして小牧南遺跡の集落へも波及したとの推測も成り立つのではなかろうか。

ただし、添石炉をはじめ伊勢湾沿岸地域の当該期の炉に関する検討は深化されておらず、まだ不明な点も多い。炉の構造や、壘の形態との対応関係、地域差、変遷なども含め、今後さらなる検討が必要である。

## 注

- 1) 山口格2005「堅穴住居・掘立柱建物」『三重県史』資料編 考古1 三重県
- 2) 池端清行2000「遺構について」『長遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター
- 3) 方形と隅丸方形の区別は恣意的なものにならざるを得ない。ただし、堅穴の機能を踏まえても隅部分を直角に整形してきれいな方形とする必然性はなく、実際に隅部分を直角に整形している建物は希で、ある程度丸みを帯びるのが基本と思われる。したがって、隅丸方形とするならば、意図的に隅部分に丸みを持たせたものであることが望ましいだろう。例えば、丸みを帯びた部分が一边の1/2近くを占める場合などは、隅丸方形として差し支えないのではなかろうか。
- 4) 鈴鹿市考古博物館2010「保子里遺跡発掘調査報告書」、鈴鹿市考古博物館2013「保子里遺跡発掘調査報告書II」
- 5) 赤塚次郎1990「遺構の変遷」『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 6) 第V章第1節註2参照。
- 7) 永井邦仁2017「安城市寄島遺跡における古墳時代前期の集落」『研究紀要』第18号(財)愛知県埋蔵文化財センター、石黒立人2018「2、3世紀における地域社会と交流拠点を考えるために」『2、3世紀の伊勢湾岸世界を探る』考古学フォーラム
- 8) 堅穴建物内の土層断面や完備状況の固体化など、周溝状掘形が存在を意図した調査の蓄積が必要だろう。
- 9) 三重県埋蔵文化財センター2008『西野田遺跡発掘調査報告(第1・2・3・5次)』
- 10) 三重県埋蔵文化財センター2009『西野田遺跡発掘調査報告(第1・2・3次調査)』
- 11) 石野博信1990『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館
- 12) 主柱穴間を繋ぐように掘られたものなどが認められるが、建て替えに伴う壁跡溝や、屋内の排水溝とも考えられるものも多い。三重県埋蔵文化財センター2000『長遺跡発掘調査報告』
- 13) 亀山市教育委員会1978『地蔵遺跡発掘調査報告』
- 14) 三重県埋蔵文化財センター2000『高茶屋大垣内遺跡(第3・4次)発掘調査報告』
- 15) 木村有作2004「古墳時代の「間仕切り溝」住居跡小考」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』第6号-名古屋市見晴台考古資料館
- 16) 名古屋市見晴台考古資料館1993『見晴台遺跡発掘調査報告』

17) 第V章第1節註3参照。

18) SH176では2点据えられている可能性がある。ただし、L字形に印を囲むような配置ではなく、一列に並べられていたとみられる。

19) 及川良彦2015『道具と生活』『新八王子市史』通史編1 原始・古代 八王子市

20) (公財) 愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター2015『石座神社遺跡』

## 第6節 古墳時代前期初頭の土器の様相

小牧南遺跡では、古墳時代前期初頭の土器が多量に出土した。この時期の土器がこれほどまとまって出土した事例は、伊勢地域北部においては貴重であり、当該期の土器様式の内容や地域色を把握できる良好な資料である。また、今後、当該地域における弥生・古墳時代の土器編年を行うにあたって、基準資料として活用できよう。

そこで、小牧南遺跡出土の古墳時代前期初頭の土器について器種組成を中心として整理を行い、全体の様相を概観するとともに、いくつかの特徴について述べておきたい。

### (1) 分類

器種組成を把握するために、出土した土器について、器形を基に大まかな分類を行った(第278図)。こうした分類の提示は、伊勢地域北部における古墳時代前期初頭の土器様式の構造を把握するために有効と考えられる。

分類に際しては、小牧南遺跡において比較的個体数が多くみられる器形を中心に取上げたが、周辺遺跡における出土例などを参考に、出土個体数が僅少であっても土器様式の全体像や特徴を把握する上で必要と思われるものについては分類に含めた。

分類は、壺、甕、高坏、器台、鉢、手焙形土器という大分類を行った後に、それぞれについて、器形として一定のまとまりがあると思われる群を中分類(≒形式、例：長頸壺)として設定した。そして、場合によっては、中分類の下位に口縁部等の形態差に基づく小分類(≒型式、例：く字状口縁)を設けた。

以上の分類は、一応、階層的な分類ではあるが、分類手法よりも当該期の土器群を構成する器種・器形を網羅的に提示して整理し、全体像を把握することを優先した。そのため、詳細には大分類の間で中

分類・小分類のレベルや基準とする属性に差異があり<sup>1)</sup>、必ずしも整然とした型式学的方法に即した分類ではない。

以下、中分類にあたるものについて、それぞれの概要を述べておく。

#### ①壺

**長頸壺** 小・中型の壺で、球形の体部から、口縁部が直線的に外方へ比較的長くのびる。

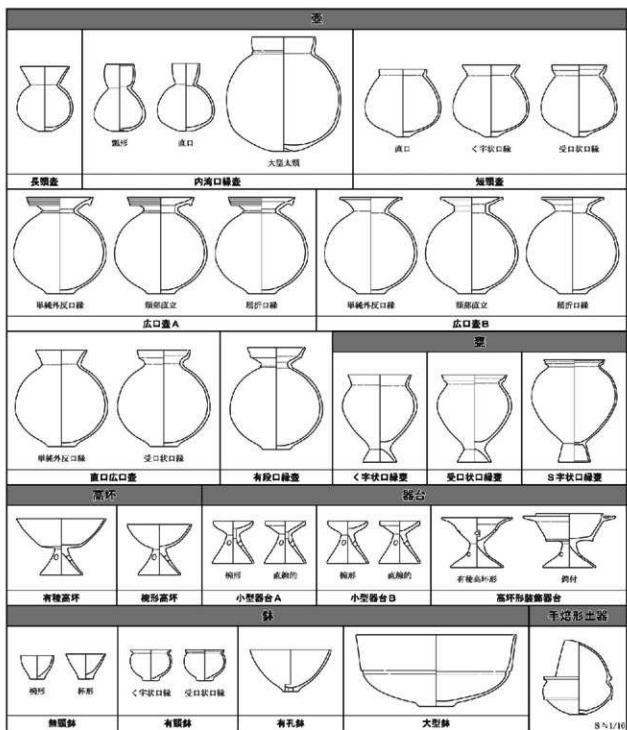
**内湾口縁壺** 口縁部が内湾する壺を一括して内湾口縁壺とした。いわゆる瓢形壺が中心であるが、瓢形壺の影響下にありつつも、口縁部の内湾が緩く直立気味となり、直口壺状となるものが認められる。また、非常に大型で頸部が太く、口縁部が短い太頸のものが存在している。

**短頸壺** 球形に近い体部から、口縁部が短くのびる。頸部の縮まりは弱い。口縁部が非常に短く直立気味となる直口のもの、く字状口縁を呈するもの、受口状口縁を呈するものに分けられる。直口のものには頸部や口縁部に小孔をもつものが多い。

**広口壺A** 中・大型の壺で、球形の体部から口縁部が大きく外反する。口縁端部は明瞭に拡張され、擬凹線文を施す。棒状浮文を貼り付けるものも多い。いわゆるバレススタイル壺に相当し、体部外面には直線文や波状文、赤彩などによる文様を施すものが多い。また、口縁部内面にも矢羽根状文や赤彩からなる文様帯をもつ。

口縁部の形態からは、頸部から単純に外反するもの、頸部から直立した後大きく屈折して開くもの、そして頸部から外反し中位で緩やかに外方に屈折するものに分けられる。口縁部が緩やかに屈折するのは、内面の屈曲部に突帯状の隆起が設けられているものが多く、この屈曲や突帯状隆起によって口縁部内面の文様帯が画されている。

**広口壺B** 基本的には広口壺Aと類似するもので、



第278図 古墳時代前期初頭土器分類図

口縁部形態による細分についてもほぼ同じである。ただし、口縁端部をあまり拡張しないなど全体に加飾傾向が弱く、体部外面や口縁部内面に文様をもたないものも多い<sup>7)</sup>。調整が粗雑なものも目立つ。また、広口壺Aに比べて中型のものが多く、小型のものもみられる。

**直口広口壺** 球形に近い体部から、口縁部がやや直立気味にまっすぐのびる。口縁部がく字状を呈するものと受口状を呈するものに分けられる。ただし、受口状のものには屈曲が弱く不明瞭な受口状を呈するものが多い。

**有段口縁壺** 主に大型の壺で、口縁部が中位で上方

へ屈曲し、二重口縁に近い有段口縁状を呈する<sup>3)</sup>。口縁部外面には矢羽根状文や列点文を施す。

#### ②甕

**く字状口縁甕** 口縁部が単純に外方へ屈曲し、く字状を呈する。頸部の縮まりは弱い。基本的に脚台が付く台付甕と思われる。口縁部形態には、口縁端部を丸く取めるもの、口縁端部に面をもつもの、口縁部外面に強いヨコナデを施し外面の形状が受口状に近くになっているものなど、多くのバリエーションが認められる。

**受口状口縁甕** 口縁部が受口状を呈する。基本的に脚台が付く台付甕と思われる。口縁部形態には、強く屈曲し明瞭な受口状を呈するもの、屈曲が緩やかなもの、口縁端部に内傾する面をもつものなど、多くのバリエーションが認められる。口縁部の屈曲が不明瞭で、く字状口縁甕と完全に区別できないものもある。

**S字状口縁甕** 口縁部が受口状を呈し、さらに口縁端部が外方へ引き出されることによって、口縁部の断面形状がS字状を呈する。脚台が付く台付甕である。脚台部の端部は内側に折り返す。く字状口縁甕や受口状口縁甕よりも器壁が薄く、また大型のものが目立つ。

#### ③高坏

**有稜高坏** 坏部に明瞭な底部があり、口縁部は底部から屈曲して立ち上がる。そのため、屈曲部外面には稜が認められる。脚部はハ字状に直線的に開くものや、緩やかに内湾するものが認められる。

**碗形高坏** 坏部が丸底の碗形を呈する。脚部形態は有稜高坏とほぼ同じである。有稜高坏よりも小型のものが多く。

#### ④器台

**小型器台A** 小型の器台で、受部から脚部にかけて貫通する孔を有する。受部が緩やかに内湾し浅い碗形を呈するものと、直線的に開くものがある。いずれも口縁端部に強いヨコナデによる面をもつものが多い。

**小型器台B** 小型器台Aとほぼ同じであるが、受部から脚部にかけて貫通する孔をもたず、小型の高坏状となる。

**高坏形裝飾器台** 全体的に高坏に似た形態の器台で、

大きな受部に透孔等の装飾をもつものである。口縁部が外反し受部に透孔を有するものと、口縁部付近に鈎状の張り出しを有するものがある。前者は受部から脚部にかけて貫通する孔をもたない。後者については類例も僅少で、脚部形態などは不明である<sup>4)</sup>。

#### ⑤鉢

**無頸鉢** 小型の鉢で、頸部をもたない。底部は平底か、やや上げ底となる。全体に内湾するものと、直線的に開くものがある。ミガキで調整されるなど、全体的に作りが精良なものが目立つ。

**有頸鉢** 小・中型の鉢で、明瞭に屈曲する頸部を有する。口縁部がく字状口縁を呈するものと、受口状口縁を呈するものがある。

**有孔鉢** 底部に焼成前穿孔による孔を一孔もつ。基本的に無頸の鉢で、砲弾形ないし碗形を呈する。底部は小さな平底となる。無頸鉢よりもやや大きい中型程度のものが多い。

**大型鉢** かなり大型の鉢である。不明瞭ながらも屈曲する頸部によって体部と口縁部とが区別されており、体部は比較的浅いと推測される。口縁部は大きいくのびる。

#### ⑥手培形土器

鉢部と覆部からなる。小片が多く細分は困難であるが、多様な形態のものがあると思われる。ただし、鉢部は基本的に受口状口縁の鉢で、頸部が明瞭に括れるものが多い。覆部には口縁端部を拡張して加飾するものとしなものがある。

## (2) 器種組成の特徴

前節の分類を基に、器種組成の特徴について、主だったところを述べておきたい。

**主要構成器種** 壺の中で主体となるのは、広口壺Bや直口広口壺で、それに広口壺Aや内湾口縁壺、短頸壺が次ぐ。広口壺・Bはいずれの型式も複数存在しているが、内湾口縁壺では瓢形のものが多い。それに直口のもの少数加わる。

甕はく字状口縁甕と受口状口縁甕、S字状口縁甕のいずれも多く認められ、特定の形式が卓越するような状況ではない。

高坏は有稜高坏が主体を占めるが、碗形高坏もか



なり認められ、一般的なものと思われる。

器台は小型器台A・Bがともに中心となる。Aがやや多い可能性もあるが、口縁部や脚部下半しか遺存していないものも多いため、確実ではない。

鉢は無頭鉢が多いと思われるが、有頭鉢は細片化している場合、小型の甕や壺、手焙形土器などと判別できていない可能性がある。有孔鉢も一定数が存在し、安定して組成されていると考えられる。

手焙形土器も複数個体が認められ、一般的な存在であったと思われる。

**少数器種** 長頸壺、内湾口縁壺のうち大型太頭のもの、有段口縁壺、高坏形裝飾器台、大型鉢については、今回の調査においては出土数が僅少である。

ただし、これらは近隣に存在する四日市市久留倍遺跡などでも確認されるものであり<sup>3)</sup>、決してイレギュラーな存在ではない。また、より広域に目を転じて、これらは古墳時代前期初頭に伊勢地域や周辺地域でかなり広く認められる器種でもある。

用途が限られていた等の要因で、元々多く製作される器種ではなく、器種組成の中心とはならないが、当該期の器種組成の中には確実に組み込まれていると考えられる。

**消長** 弥生時代終末期までは当該地域において基本的に認められず、古墳時代前期初頭になって出現するものとしては、内湾口縁壺のうち直口のもの、小型器台A・B、高坏形裝飾器台が挙げられるだろう。

中でも注目されるのは、小型器台である。伊勢地域では弥生時代終末期には器台自体がそれほど多くなく、特に頸部が明瞭に屈曲する器台は少ない。したがって、小型器台は外部からの影響によって新たに組成に加わった可能性が高い。小型器台が明確に器種組成に含まれている点は、古墳時代前期初頭の土器様式のメルクマルとして捉えることが可能である。この小型器台については、A・Bの2形式に分類したが、その中でも坏部形態の異なるものが含まれるなど、バリエーションがある。こうした形態の多様性は、小型器台の系譜や、当該期の土器様式の形成過程を考える上で注意しておくべきだろう。

また、高坏形裝飾器台については、古墳時代前期初頭から前期中葉にかけて、東日本を中心に広く分布することが明らかになってきている。これまで、

弥生時代終末期の北陸地方で認められる裝飾器台からの系譜が想定されることもあったが、スムーズな形態の変化を追うことが困難で、別の系譜を想定した方がよいと考えられる<sup>4)</sup>。伊勢湾沿岸地域におけるこうした器種の参入についても、別の視点から検討する必要がある。

一方、古墳時代前期前葉への連続性が低いものとしては、直口のもの以外の内湾口縁壺、有段口縁壺、大型鉢、手焙形土器などが挙げられる。その他にも、受口状口縁壺や碗形高坏、有孔鉢などは数を減らしていく傾向にある。多くの形式・型式が消長し、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭への変化よりも、大きな変化のように思われる。

**外面調整の特徴** この他に注目される点として、器種組成ではないが、いくつかの形式に認められる外面調整におけるヨコミガキの顕在化がある<sup>7)</sup>。

古墳時代前期初頭に新たに加わった小型器台A・Bでは坏部がヨコミガキによって調整されているものが目立つ。同じく新たに加わった高坏形裝飾器台もヨコミガキを多用する。

さらに、既存の器種であった有段高坏や碗形高坏にもヨコミガキが施される率が高い。坏部が完全にヨコミガキのみで調整されているものが一定数認められ、また、最終的にタテミガキで仕上げられている場合でも、多くの個体がタテミガキの前にヨコミガキが施されている。この他に、既存の器種の中では、短頸壺や無頭鉢にもヨコミガキが認められる。

以上のようなヨコミガキの顕在化は、弥生時代終末期の様相と比較すると、大きな変化といえる。器種組成においては弥生時代終末期の様相をかなり残しているにも関わらず、調整技法に変化が生じている点が重要である。

ヨコミガキという点に注目すれば、近畿地方の布留式におけるヨコミガキの盛行との関係も考えられる。高坏や小型器台といった器種にヨコミガキが目立つことや、小型器台に幅の細いヨコミガキが施されているものがあることなどを鑑みれば、その可能性は否定できないだろう。

ただし、小牧南遺跡におけるヨコミガキの様相は画一的ではなく、布留式の精製器種にみられるような整然としたヨコミガキも認めたい。また、小牧

南遺跡の古墳時代前期初頭の土器の中には、小型器台を除けば布留式との関係を窺える器種は見いだしたい。伊勢湾沿岸地域全体でも、布留式の影響を受けた器種の出現、あるいは布留式系土器の搬入が顕在化するの、古墳時代前期中葉以降である<sup>9)</sup>。

こうした状況を踏まえて、古墳時代前期初頭にヨコミガキが顕在化する背景については、もう少し考えていく必要がある。それと同時に、地域差などについても注意すべきと思われる。

### (3) 甕について

**甕の組成** 甕についてはく字状口縁甕と受口状口縁甕、S字状口縁甕がいずれも多く認められるとしたが、数量的にみても、かなり拮抗した状況であることが看取される(第279図)<sup>9)</sup>。

弥生時代終末期以降、伊勢湾沿岸地域ではS字状口縁甕が急激に増加し、古墳時代前期初頭の段階では甕のほとんどをS字状口縁甕が占める遺跡が多いとされる一方で、S字状口縁甕の比率が低い遺跡も存在し、地域差があることが示唆されている<sup>10)</sup>。

小牧南遺跡では、古墳時代前期初頭にしてはS字状口縁甕の比率が低いといえる。古墳時代前期初頭における甕の組成の地域差を、具体的に示すものである。

こうしたS字状口縁甕の比率における地域差が生じる背景についてはさらなる検討を要する。ただ、一つ注意しておきたいのは、小牧南園においてはS字状口縁甕にやや大型のものが多い点と、かなりの数がより南の地域からの搬入品の可能性が高い点である。く字状口縁甕と受口状口縁甕は形態的に中間形

態を呈するようなものもあり、法量や調整にも共通性がある。甕の組成全体の構造としては、く字状口縁甕と受口状口縁甕があまり区別されなくなるとして存在し、そこに主に搬入品として、若干機能・用途の異なるS字状口縁甕が加わっているとも考えられるかもしれない。

**S字状口縁甕の在地生産** 弥生時代終末期～古墳時代前期初頭に位置づけられるS字状口縁甕の多くは、胎土中に比較的粒径の大きい黒雲母が目立ち、また白っぽい色調を呈する。こうしたものには、伊勢地域でも小牧南遺跡より南側の鈴鹿川流域から雲出川流域にかけての地域から搬入されたものが多く含まれると推測される。

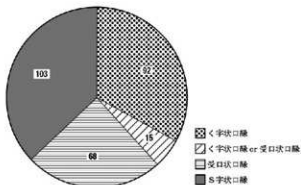
しかしながら、一部には胎土中に黒雲母が目立たず、他の在産地と考えられる土器と胎土に含まれる砂粒の特徴がほぼ同じで、色調も明褐色等を呈するものが認められる。これらは、小牧南遺跡あるいはその周辺で生産された可能性もある。

その中には、口縁部外面に列点文を施す赤塚次郎による分類<sup>11)</sup>のA類も複数認められる(1343・1701・1879・2249・2346・2347など)。これらに在産の可能性のあるS字状口縁甕A類は、全体のプロポーションに違和感があったり、列点文が押し引列点文になっていない、器壁がかなり厚く作りがシャープさに欠ける、体部外面のハケが乱雑、など器形や文様、調整といった点においても典型的なS字状口縁甕と比べて差異が目立つ。

従来、S字状口縁甕A類については、胎土中の混和材や形態的特徴における共通性が強く、ある程度限定された集団によって製作されており、それがB類の段階で変化するという見解が示されていた<sup>12)</sup>。

小牧南遺跡の様相をみる限り、朝明川流域はS字状口縁甕が主体的に使用される地域ではなかったと思われるが、その中でも、古墳時代前期初頭にはB類とともにA類も製作されていた可能性が高い。近隣の久留信遺跡において行われた土器の胎土分析において、S字状口縁甕A類に在産の可能性が考えられるものが確認されていることや<sup>13)</sup>、他地域で変容したS字状口縁甕A類が確認されていることも<sup>14)</sup>、これを支持しよう。

S字状口縁甕A類の製作や流通については、A類



第279図 甕の口縁部形態の比率

で占められる弥生時代終末期段階とB類が出現し共存する古墳時代前期初頭段階の差異や、A類の中での細部属性における地域性の存在など、さらに詳細な検討が必要と考えられる。

## 註

- 1) 例えば、甕ではく字状・受口状といった細かな口縁形態は小分類となっているが、甕では中分類となっている。これは、甕の方がより複雑な組成をなしており、レベルを揃えた階層的分類が困難なことに由来する。
- 2) 広口壺Aと広口壺Bは同じ器形における加飾/非加飾の関係として整理できるかもしれないが、広口壺Aにおける調整や装飾の共通性は口縁部形態の細分を越えて強く認められることから、A・Bをそれぞれ別系統と捉える方が妥当と判断し、区分した。
- 3) 二重口縁とはやや異なって屈曲部の上下が一連となって口縁部を形成しており、どちらかという受口状に近いため、有段口縁と表現した。
- 4) 第278図では貫通孔がないものとして復元したが、遺存している部分からみると、孔があった可能性も否定できない。なお、岐阜県可児市宮之脇遺跡で類似するものが出土しているが、この個体も脚部を欠損し、貫通孔の有無は不明である。可児市教育委員会1976『宮之脇遺跡発掘調査報告書』
- 5) 四日市市教育委員会2013『久留信遺跡5』
- 6) 堀正人2001『考察・まとめ』『針田遺跡・東坪之内遺跡・

田中浦遺跡』(財)岐阜県文化財保護センター、野村高広2013「古墳前期東日本における高杯状装飾器台」『東京大学考古学研究室研究紀要』第27号 東京大学大学院人文社会科学系研究科・文学部考古学研究室

- 7) 尾張地域では古墳時代前期初頭に斜め方向のミガキが顕在化するが、小牧南遺跡の場合はやや様相が異なり、斜め方向というよりはヨコミガキといえるだろう。
- 8) 早野浩二1996『濃尾平野における布留式甕について―門間沼遺跡94C b区S D15出土土器を中心として―』『年報平成7年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 9) 古墳時代前期初頭を中心とする時期の遺構出土の個体数をカウントした。カウントにあたっては、遺物図録に掲載したものうち、口縁部を含む破片を対象とした。掲載遺物の抽出にあたっては図化可能な破片を極力抽出しているため(第Ⅲ章第2節参照)、実際の傾向が反映されていると思われる。
- 10) S字甕胎土研究会1997「S字甕の混和材を考える」『考古学フォーラム』9 考古学フォーラム
- 11) 赤塚次郎1990『廻間式土器』『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター
- 12) S字甕胎土研究会1997
- 13) バリノ・サーヴェイ株式会社2013「久留信遺跡ほか出土土器胎土分析」『久留信遺跡5』四日市市教育委員会
- 14) 平松良雄1992「紀伊半島沿岸部におけるS字甕の動向―最果てのS字甕―」『紀伊半島の文化史的研究』考古学編 関西大学文学部考古学研究室

## 第7節 結語

近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT~亀山西JCT)の建設に伴う今回の小牧南遺跡の調査では、周知の埋蔵文化財包蔵地として把握されている小牧南遺跡の範囲の大半を発掘調査することとなった。事業の性格上やむを得ない記録保存のための調査であったが、今後活かされるべき多くの成果があったといえる。

まず、縄文時代中期末葉の集落のほぼ全体像を捉えることができたことは、非常に大きな成果である。伊勢湾沿岸地域では希な掘立柱建物が複数検出されたことはもちろん注目すべき点であるが、それだけでなく、竪穴建物など他の遺構と合わせて集落の建物構成や空間構造などについての検討が可能となったことは、伊勢地域だけでなく、伊勢湾沿岸地域に

おける縄文時代集落の研究に大きく寄与するものである。小牧南遺跡は、同じ事業に伴って発掘調査が行われた菰野町の鈴山遺跡とともに、伊勢地域における縄文時代中期末葉の集落の代表例となり得るものだろう。

縄文時代に関しては、豊富に出土した縄文土器も注目に値する。埋設土器に用いられていたものなど遺存状況が良好な個体も多く、またSH191などの遺構内からまとまって出土したものもあり、縄文時代中期末葉の土器の編年や地域色に関して検討するための重要な資料となることは間違いない。

そして、古墳時代前期についても、大きな成果があったといえる。

第4節でも述べたように、古墳時代前期初頭を中

心とする集落は、これまで伊勢地域ではあまり確認されていなかった。そうした中で、小牧南遺跡の集落は貴重な調査事例となった。さらに、集落の大部分を調査できたことで、この時期の集落の立地や規模、構造に関する情報を多く収集することができた。

遺物についても、出土した多量の土器は、伊勢地域北部の当該期における土器様式の内容を把握する上で、欠かせない資料といえよう。

以上は本章の各節で示した調査成果の一端であるが、この他にも、本報告では個別に取り上げることができなかった成果が、数多く存在している。例えば、縄文時代の石器に他地域産の石材が用いられたものがあり、微細な剥片の出土によってそれらが小牧南遺跡で製作されたことが判明したことや、古墳時代前期初頭～中葉の鉄製品が複数出土し、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落における鉄製品の普及や流通を考えるための重要な資料となったことなどである。こうした点については、今後の

検討が俟たれる。

高速道路の建設という大規模事業は、多くの埋蔵文化財の消失と、それらの記録保存による考古学的・歴史学的資料の飛躍的な蓄積という相反する二つの結果をもたらす。以上で挙げたような小牧南遺跡の多くの調査成果をみれば、こうしたことが明確に感じられるだろう。

ただし、蓄積された調査成果が、単なる記録保存として等閑に付されるようなことがあってはならない。今回の小牧南遺跡の発掘調査の資料や成果も、それを用いて地域史・郷土史をより豊かで色鮮やかなものとして地域社会にフィードバックしていくことが必要であるし、また、学術的な研究にも積極的に供されていくべきである。こうしたことによって、記録保存の意義が全うされよう。今後、様々な面において小牧南遺跡の調査成果が活用されることを願いたい。

## 報告書抄録

ふりがな	こまきみなみいせき(だいに・さんじ)はっくつちょうさほうこく							
書名	小牧南遺跡(第2・3次)発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	323-9							
編著者名	石井智大・服部芳人・勝山孝文・村上央・宮原佑治							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596 (52) 1732							
発行年月日	2021年3月1日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こまきみなみいせき 小牧南遺跡 (第2・3次)	みまきみなみいせき 三重県四日市市 小牧町	24202	568	35° 02' 31"	136° 33' 58"	第2次 2013/5/28～ 2014/2/6 第3次 2015/6/5～ 2016/1/18	第2次 7,371 第3次 5,935 計 13,306	近畿自動車道 名古屋神戸線 (四日市JCT～ 亀山西JCT) 建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
小牧南遺跡 (第2・3次)	集落跡	旧石器時代	なし	石器		縄文時代中期末葉の掘立柱建物を複数検出。 古墳時代前期初頭の集落の大部分を調査。		
		縄文時代	竪穴建物 掘立柱建物 集石遺構 埋設土器 陥穴 土坑	縄文土器・石器・垂飾				
		古墳時代	竪穴建物 掘立柱建物 土坑	土師器・須恵器・石製品・土製品・金属製品				
		鎌倉・室町時代	火葬土坑 土坑	土師器・陶器				
要 旨	<p>縄文時代中期末葉の竪穴建物や掘立柱建物で構成される集落が検出された。東海地方西部では、近年当該期の掘立柱建物の検出例が増加しつつあり、集落構造や地域間交流を考える上で注目される。遺物としては、縄文土器が多量に出土したが、その他に、建物外で検出された埋設土器の内部から石製垂飾が出土した。こうした事例は希であり、埋設土器の性格を考える上でも重要な資料と考えられる。</p> <p>また、古墳時代前期初頭の竪穴建物も多数検出され、集落の大部分を調査したものと思われる。伊勢地域では、弥生時代後期後葉～終末期にかけて継続した集落が縮小し、集落の存在が不明瞭になる時期に相当しており、こうした時期の集落の立地や構造の変化を考えるための貴重な調査事例といえる。</p>							



---

三重県埋蔵文化財調査報告323-9

小牧南遺跡（第2・3次）発掘調査報告  
—本文編—

2021（令和3）年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター  
印刷 共立印刷株式会社

---







